# 曾 畑

---熊本県宇土市花園町 曽畑貝塚・低湿地の調査---

1988

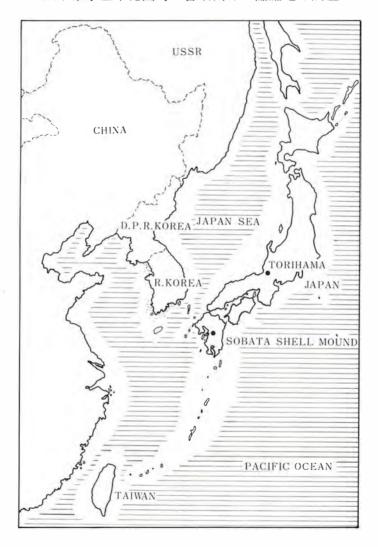
熊本県教育委員会

曾

ばた

--熊本県宇土市花園町

曽畑貝塚・低湿地の調査ー



1988

熊本県教育委員会



口絵1 曽畑貝塚空中写真



貯蔵穴群検出状況



第7号貯蔵穴



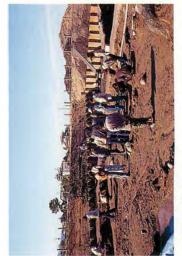
調査地全景



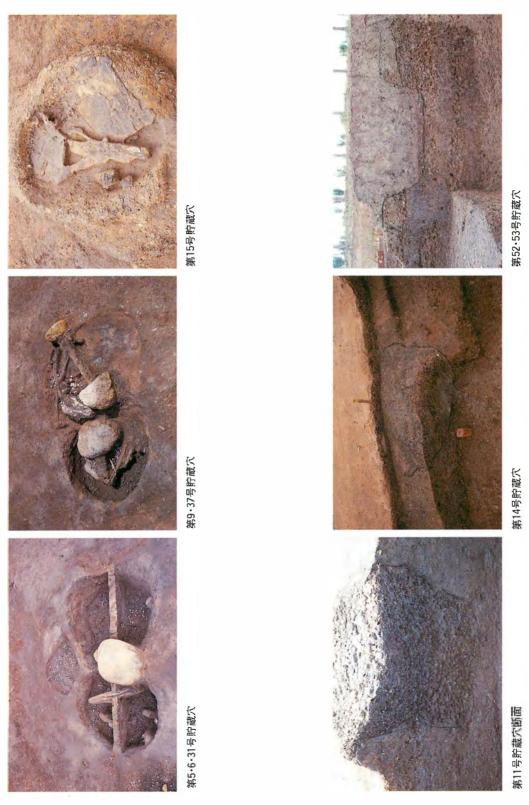
第13号貯蔵穴



曽畑貝塚と低湿地調査地

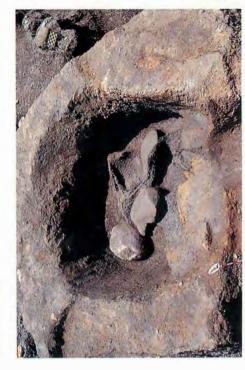


調査見学会



口絵3





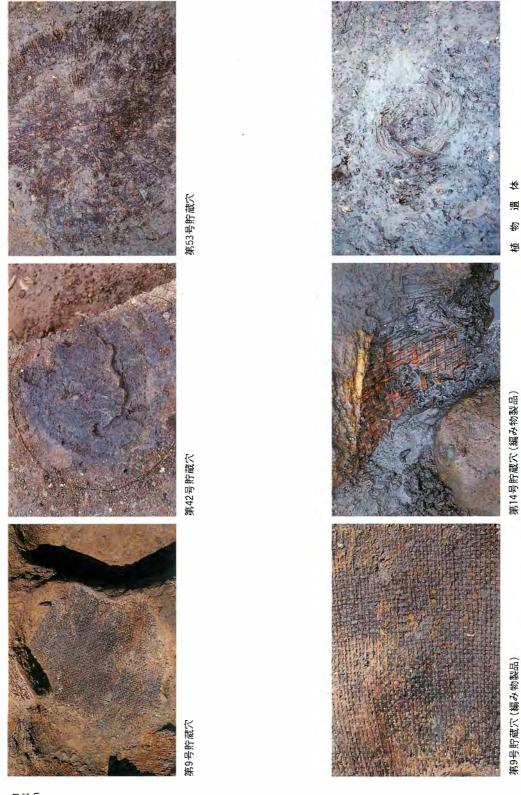
第14号貯蔵穴(2)



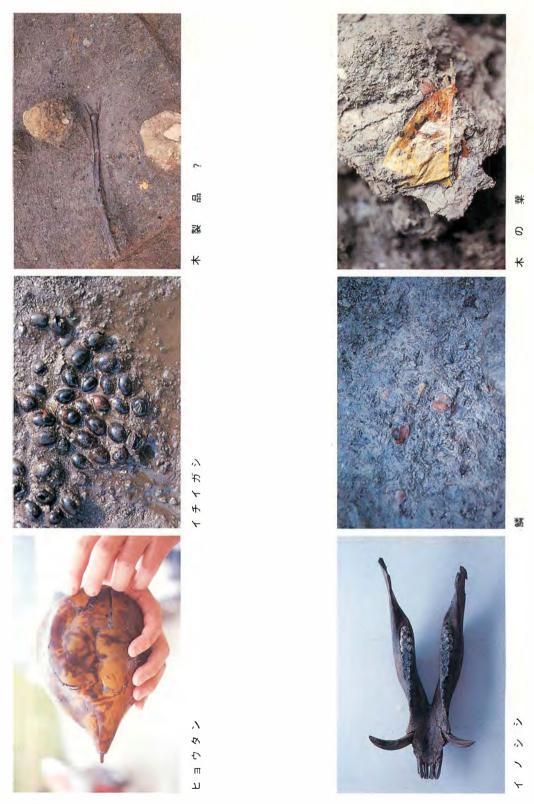
第36号貯蔵穴



第43号貯蔵穴



口絵5



口絵6

## 序文

宇土市岩古曽町に所在する曽畑貝塚は早く明治20年代に人類学会誌に登場して以来、やがては100年目を迎えるという大変長い学史を持つ著名な遺跡であります。貝塚から出土する豊富な遺物は海や山の幸に恵まれた当時の自然環境や生活状況を良くしらせてくれますし、見事な文様を施した「曽畑式土器」は九州の縄文時代前期の最も代表的な土器とされるものでもあります。また、曽畑式土器の器形や文様は朝鮮半島新石器時代の櫛文土器と大変類似していることが指摘され、両国の文化交易を理解するための重要な貝塚とも評価されております。

建設省九州地方建設局熊本工事事務所では一般国道3号の交通緩和を計るため、松橋バイパスの建設が計画されたのですが、その予定路線が曽畑貝塚の近くを通るということで慎重な事前協議を重ねてまいりました。当局には、文化財保護の趣旨を良く御理解いただき予定路線の再検討や、試掘調査を行い、極力、遺跡へ影響が及ばないよう配慮いただきました。今回の調査地は止むなく予定路線に決定されたところでありますが、事前の発掘調査を実施して記録保存の措置がとられたものであります。

当局からの委託を受けて昭和61年9月から62年6月までの10カ月に亘る発掘調査を実施しました。今回の調査地は貝塚地点から西南方向へ約100mも離れたところでありますが、低湿地であるため良好な遺構や遺物が残されていました。縄文時代前期の貯蔵穴群は全国的にもきわめて珍しいもので、食料にしていたドングリやそれを入れた編み物製品、南アフリカが原産地といわれる瓢箪など貴重な資料がたくさん出土しています。

ここにその報告書を刊行するはこびとなりましたが、当教育委員会では広く文化財に対する認識や御理解をいただくため、昭和35年3月に「熊本県文化財調査報告第1集」を手がけて以来、数多くの報告書を刊行してきました。くしくも、今回は、記念すべき「熊本県文化財調査報告第100集」となりました。その長い間に、はかりきれない程の多くの方々の御指導や御協力をいただいております。この場をかりまして厚く御礼申し上げます。

最後になりましたが、今回の調査は私どもも初めての低湿地の発掘調査であり、遮水工事を行うなど慣れない作業であるところを、終始、建設省当局や本県土木部からの技術参加をいただきました。発掘調査や整理では多くの専門分野の先生方の御指導があり、また、当地の宇土市教育委員会をはじめ多くの方々に多大の御協力をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

昭和63年3月31日

熊本県教育長 田 嶋 喜 一

- 1. 本書は建設省九州地方建設局熊本工事事務所の一般国道3号松橋バイパス建設に伴い熊本県 教育委員会が、委託を受けて昭和61年9月~62年6月まで調査を実施した宇土市曽畑貝塚低湿 地遺跡の発掘調査報告書である。
- 2. 調査地の行政区は熊本県宇土市花園町210~212番地であり、標式遺跡としての曽畑貝塚は同市岩古曽町大字曽畑に所在するが、両者は一連の遺跡と捉えられ学史名を尊重して報告書の題名は『曽畑』とした。
- 3. 本県では初めての低湿地発掘調査であったが、終始、多くの先生や、研究者の方々の御指導 を受け、種々の理化学分析や考察など高い専門調査の実施と玉稿をいただいた。
- 4. 本書の執筆者は下記のとおりである。

| 第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ章-2.3.4節・Ⅳ章-2億                         | 節8.9.10 | · V章······江本                                 | 直  |
|--|---------|--|----|
| 第Ⅲ章-1.3.4節・Ⅳ章-2節・7                           |         |  | 信智 |
| 第Ⅳ章-1節1 ······畑中                             | 健一      | 第Ⅳ章-1節 2 ··································· | 浅  |
| 第Ⅳ章-1節3 ··················渡辺                 | 誠       | 第Ⅳ章-1節4 ······大迫                             | 靖雄 |
| 第Ⅳ章-1節5 ···································· | 誠       | 第Ⅳ章-1節6松下                                    | 孝幸 |
| 第Ⅳ章-1節7 ······山田                             | 治       | 分部   | 哲秋 |
| 第Ⅳ章-2節1 ······海津                             | 正倫      | 第Ⅳ章-2節2                                      | 典之 |
| 第Ⅳ章-2節3 ···································· | 誠       | 第Ⅳ章-2節 4 ······江坂                            | 輝彌 |
| 第Ⅳ章-2節5賀川                                    | 光夫      | 第Ⅳ章-2節6任                                     | 孝宰 |
| 第Ⅳ章-2節10·······丸山                            | 伸治      |  |    |

- 5. 本書に使用した地形図及び空中写真は建設省九州地方建設局熊本工事事務所から、また、地質柱状図は宇土市・松橋町教育委員会からそれぞれ提供を受けた。
- 6. 出土遺物は熊本県文化財収蔵庫に保管している。自然遺物や木製品は昭和63年度から国庫補助事業を受けて保存処理を続け、恒久的な保存がはかられる予定である。
- 7. 発掘調査及び報告書作成における作業は下記により行っている。
- <測量・実測>江本. 丸山. 浦田. 平井浩一. 水ノ江和同. 藤崎周太郎. 藤崎伸子.
- <製図> 江本.浦田.丸山.住田幸恵.小佐井恵利子.六田育子.瀬丸延子.
- <写真撮影・現像> 江本.浦田.丸山.白石巌.
- 8. 本書の編集は熊本県教育委員会文化課で行い江本が担当した。

### 凡 例

- 1. 発掘調査面積は建設省九州地方建設局熊本工事事務所と熊本県教育庁文化課との事前協議により 20 m ×  $40m = 800m^3$ とされた。試掘調査結果をもとに調査区を設定して発掘調査を実施した。
- 2. 高度は建設省国道3号松橋バイパス建設No75~76工 点高度は国土地理院水準点から引かれたものである。
- 3. 貯蔵穴の実測は5分の1で実施しているが、編み物製品や自然遺物については模式化したり、木の実類は省略したものもあり、文章説明での状況把握に委ねている。編み物製品は保存のため最小の露出に止め 瓢箪など速やかな取り上げを必要とする遺物については写真記録と出土点記録で終えている。
- 4. 編み物製品は実測作業終了の後、周囲を固定し可能な限り取り上げ、23点を保存している。
- 5. 第7号貯蔵穴は検出面での調査で終え、そのまま取り上げ熊本県文化財収蔵庫で保管している。 将来の調査や適当な施設での展示公開がもくろまれよう。
- 6. 編み物製品の実測は可能な限り実施している。保存処理作業に長期間を要しようが終了次第再度の実測 と報告が求められる。
- 7. 報告書の遺物縮尺は、土器 3 分の 1、石器・骨製品・編み物製品・獣骨 2 分の 1 を原則としたが遺物の 大小により適宜原則を外したものがあり、スケールを付し補助している。
- 8. 地質分析結果は口頭報告に基づいている。
- 9. 土器実測における粘土接合線(点線)は確認できるものだけの表記で、石質表記は調査員の肉眼観察によった。

## 目 次

| 序文   |      |
|--|------|
| 例言・凡例  |      |
| 第 I 章 序説······                                     | 1    |
| 第1節 調査の経緯と経過                                       | 1    |
| 第2節 遺跡の位置と歴史的・地理的環境                                | 7    |
| 第 3 節 調査区の設定                                       | 12   |
| 第Ⅱ章 発掘調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・       | 13   |
| 第1節 調査の方法  | 13   |
| 第 2 節 基本的層位  | 15   |
| 第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・  | 19   |
| 第1節 第12~21層の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | 19   |
| 1. 出土状況  | 19   |
| 2. 出土土器第Ⅰ・Ⅱ群土器                                     | 38   |
| 3. 石 器   | 60   |
| 4. 骨角器   | 61   |
| 5. 流木類   | 63   |
| 第2節 第11層の遺物  | 64   |
| 1. 出土状況  | 64   |
| 2. 第Ⅱ群土器·······                                    | 68   |
| 3. 第Ⅲ群土器······                                     | 70   |
| 4. 第Ⅳ群土器······                                     | 71   |
| 5. 石 器   | 82   |
| 第 3 節 貯蔵穴遺構······                                  | 83   |
| 1. 貯蔵穴遺構の分布状況                                      | 83   |
| 2. 第1~62号貯蔵穴遺構                                     | 83   |
| 3. 貯蔵穴遺構の時期判断                                      | 132  |
| 4. 貯蔵穴群の構造と貯蔵物                                     |      |
| 5. 貯蔵穴内出土土器・石器                                     |      |
| 6. 貯蔵穴に伴う遺物  | 139  |
| (1)編み物 (2)円 座 (3)木製品                               |      |
| (4)瓢 箪  (5)その他                                     |      |
| 第 4 節 第 9 ~ 10層の凄 <i>枷</i>                         | 1/19 |

|     | . 出土状況······ 142 2. 第Ⅰ·Ⅱ群土器·····   | 14    |
|-----|--|-------|
|     | . 第Ⅲ群土器  | • 145 |
| 5   | . 第 V 群土器······· 155 6. 第 VI 群土器······   | 156   |
| 7   | . 第Ⅵ群土器······· 159 8. 第Ⅷ群土器······  | • 159 |
| 9   | . 第Ⅳ群土器  | • 161 |
| 11  | . 石器・抉状耳飾 163  |       |
| 第Ⅳ章 | 分析・考察  | • 175 |
| 第1  | 節 理化学分析······  |       |
| 1   | . 曽畑貝塚低湿地遺跡の花粉学的研究   | 175   |
|     | . 曽畑貝塚低湿地遺跡出土の植物種子の同定(小型)  |       |
| 3   | M. Indiana and A. Ind |       |
| 4 . | . 曽畑貝塚低湿地遺跡から出土した木質遺物に関する一考察   |       |
|     | 曽畑貝塚低湿地遺跡出土の動物遺体   |       |
|     | 曽畑貝塚低湿地遺跡出土の縄文時代人骨   |       |
|     | 曽畑貝塚低湿地遺跡の C ' ' 測定結果  |       |
|     | 節 考  察   |       |
| 1.  | 曽畑貝塚付近における地形環境の変遷  |       |
|     | 曽畑貝塚低湿地遺跡(縄文前期)から出土したヒョウタン   |       |
|     | ー<br>仲間 Lagenaria siceraria Standl の果実と種子についで  | 262   |
| 3.  | 縄文時代食用植物研究上の意義   |       |
| 4   |  | 210   |
| 5.  | 中国長江流域にみる編物(網代)について-曽畑出土資料と関連して-   | 274   |
|     | 九州曾畑貝塚低湿地遺跡発掘調査参加報告  |       |
|     | 縄文時代前期「轟式土器」について   |       |
|     | - 縄文時代前期「曽畑式土器」について  | 207   |
|     | 縄文時代前期の生活域 - 曽畑貝塚低湿地遺跡調査から見た - · · · · · · · · · · · · · · · · · ·   | 310   |
|     | 縄文時代前期の技術(編み物製品)   |       |
| 第Ⅴ章 |  |       |
|     |  | 331   |
| 付 記 | 貯蔵穴・編み物制品の取り上げ作業に関して   | 005   |

# 挿 図 目 次

| 弗↓凶  | 胃畑貝啄と周辺の王要道跡 8             | 第33凶 | 第14僧出土土畚実測凶(2)                | 52 |
|------|----------------------------|------|-------------------------------|----|
| 第2図  | 曾畑貝塚位置図9                   | 第34図 | 第14層出土土器実測図(3)                | 53 |
| 第3図  | 調査地地形図10                   | 第35図 | 第14層出土土器実測図(4)······          | 54 |
| 第4図  | 遺跡位置概略図11                  | 第36図 | 第15層出土土器実測図(1)                |    |
| 第5図  | 断面概略図12                    | 第37図 | 第15層出土土器実測図(2)<br>第16層出土土器実測図 | 58 |
| 第6図  | 試掘調査層位図15                  | 第38図 | 第17~12層出土石器実測図                | 60 |
| 第7図  | 層位概略図16                    | 第39図 | 第13層出土骨角器実測図(1)               | 62 |
| 第8図  | A-1区中央壁・南壁土層断面図 21         | 第40図 | 第13層出土骨角器実測図(2)               | 63 |
| 第9図  | B-1区東壁・南壁土層断面図 22          | 第41図 | 第11層出土土器実測図(1)                | 68 |
| 第10図 | B-2·3区東壁土層断面図···········23 | 第42図 | 第11層出土土器実測図(2)                | 69 |
| 第11図 | B-4区東壁・北壁土層断面図24           | 第43図 | 第11層出土土器実測図(第Ⅲ群土器)・・          | 70 |
| 第12図 | A-4区北壁土層断面図·······25       | 第44図 | 第11層出土土器実測図(第Ⅳ群土器)・・          | 72 |
| 第13図 | 第11層出土土器平面・垂直分布図・26        | 第45図 | 第11層出土土器実測図(第Ⅳ群土器)・・          | 73 |
| 第14図 | 第12層出土土器平面・垂直分布図・・27       | 第46図 | 第11層出土土器実測図(第Ⅳ群土器)・・          | 74 |
| 第15図 | 第13層出土土器平面・垂直分布図・・28       | 第47図 | 第11層出土土器実測図(第Ⅳ群土器)・・          | 75 |
| 第16図 | 第14層出土土器平面・垂直分布図・29        | 第48図 | 第11層出土土器実測図(第Ⅳ群土器)・・          | 76 |
| 第17図 | 第15層出土土器平面・垂直分布図・・30       | 第49図 | 第11層出土石器実測図                   | 82 |
| 第18図 | 第16層出土土器平面・垂直分布図・31        | 第50図 | 貯蔵穴群分布状況図                     | 84 |
| 第19図 | 第11層出土石器平面・垂直分布図・・32       | 第51図 | 第2号貯蔵穴実測図                     | 85 |
| 第20図 | 第12層出土石器平面・垂直分布図・・33       | 第52図 | 第3号·4号·32号·35号貯蔵穴実測図··        | 87 |
| 第21図 | 第13層出土石器平面・垂直分布図・34        | 第53図 | 第5号・6号・31号貯蔵穴実測図・・            | 88 |
| 第22図 | 第14層出土石器平面・垂直分布図・・35       | 第54図 | 第8号貯蔵穴実測図                     | 89 |
| 第23図 | 第15層出土石器平面・垂直分布図・・36       | 第55図 | 第9号·37号貯蔵穴実測図·········        | 90 |
| 第24図 | 第16層出土石器平面・垂直分布図・37        | 第56図 | 第10号貯蔵穴実測図(1)                 | 91 |
| 第25図 | 第12層出土土器実測図(1)41           | 第57図 | 第10号貯蔵穴実測図(2)                 | 92 |
| 第26図 | 第12層出土土器実測図(2)42           | 第58図 | 第11号貯蔵穴実測図                    | 93 |
| 第27図 | 第13層出土土器実測図(1)44           | 第59図 | 第12号貯蔵穴実測図                    | 94 |
| 第28図 | 第13層出土土器実測図(2)45           | 第60図 | 第13号貯蔵穴実測図(1)                 | 95 |
| 第29図 | 第13層出土土器実測図(3)46           | 第61図 | 第13号貯蔵穴実測図(2)                 | 96 |
| 第30図 | 第13層出土土器実測図(4)47           | 第62図 | 第14号貯蔵穴実測図                    | 97 |
| 第31図 | 第13層出土土器実測図(5)48           | 第63図 | 第15号・16号貯蔵穴実測図・・・・・・・・        | 99 |
| 第32図 | 第14層出土土器実測図(1)51           | 第64図 | 第17号・18号貯蔵穴実測図10              | 00 |

| 第65図 | 第19号貯蔵穴実測図 101     | 第98図  | 第10層出土土器実測図(1) 143                    |
|------|--------------------|-------|---------------------------------------|
| 第66図 | 第20号貯蔵穴実測図 102     | 第99図  | 第10層出土土器実測図(2)144                     |
| 第67図 | 第21号・22号貯蔵穴実測図 103 | 第100図 | 第10層出土土器実測図(3)145                     |
| 第68図 | 第23号・47号貯蔵穴実測図 104 | 第101図 | 第10層出土土器実測図(4)146                     |
| 第69図 | 第24号貯蔵穴実測図105      | 第102図 | 第10層出土土器実測図(5)148                     |
| 第70図 | 第25号貯蔵穴実測図106      | 第103図 | 第10層出土土器実測図(6)149                     |
| 第71図 | 第26号・27号貯蔵穴実測図 107 | 第104図 | 第10層出土土器実測図(7)150                     |
| 第72図 | 第28号貯蔵穴実測図108      | 第105図 | 第10層出土土器実測図(8)151                     |
| 第73図 | 第29号・30号貯蔵穴実測図 109 | 第106図 | 第10層出土土器実測図(9)152                     |
| 第74図 | 第33号・34号貯蔵穴実測図 111 | 第107図 | 第10層出土土器実測図(10)154                    |
| 第75図 | 第36号貯蔵穴実測図 112     | 第108図 | 第10層出土土器実測図(11)                       |
| 第76図 | 第38号・39号貯蔵穴実測図 113 | 第109図 | 第10層出土土器実測図(第 ₹ 群) 中期・・ 156           |
| 第77図 | 第40号貯蔵穴実測図 114     | 第110図 | 第10層出土土器実測図(第IV群)後期(1)·· 157          |
| 第78図 | 第41号貯蔵穴実測図115      | 第111図 | 第10層出土土器実測図                           |
| 第79図 | 第42号貯蔵穴実測図116      |       | (第Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅷ群) 後期(2)・・158                |
| 第80図 | 第43号貯蔵穴実測図117      | 第112図 | 第10層出土土器実測図(第Ⅲ群)晩期・・160               |
| 第81図 | 第44・46号貯蔵穴実測図 118  | 第113図 | 第10層出土土器実測図(底部)162                    |
| 第82図 | 第45号貯蔵穴実測図119      | 第114図 | 第10層出土石器実測図(1)164                     |
| 第83図 | 第48号・49号貯蔵穴実測図 120 | 第115図 | 第10層出土石器実測図(2)165                     |
| 第84図 | 第50号貯蔵穴実測図121      | 第116図 | 曽畑貝塚低湿地遺跡出土の                          |
| 第85図 | 第51号貯蔵穴実測図122      |       | Ⅱ 類土器分類図・・・・・・・ 288                   |
| 第86図 | 第52号・53号貯蔵穴実測図123  | 第117図 | 轟式系土器県内出土遺跡分布図 292                    |
| 第87図 | 第54号・55号貯蔵穴実測図 125 | 第118図 | 熊本県地域縄文前期曽畑式土器                        |
| 第88図 | 第56号貯蔵穴実測図126      |       | 分布状況図 302                             |
| 第89図 | 第57号・58号貯蔵穴実測図127  | 第119図 | 熊本県地域曽畑式土器編年案 306                     |
| 第90図 | 第59号・60号貯蔵穴実測図 128 | 第120図 | 貝塚・貯蔵穴分布想定図 311                       |
| 第91図 | 第61号貯蔵穴実測図129      | 第121図 | 編み物製品実測図(1)・・・・・・・ 319                |
| 第92図 | 第62号貯蔵穴実測図(1)130   | 第122図 | 編み物製品実測図(2)・・・・・・・・ 320               |
| 第93図 | 第62号貯蔵穴実測図(2)131   | 第123図 | 編み物製品実測図(3)・・・・・・・・ 321               |
| 第94図 | 貯蔵穴内出土遺物実測図(1)136  | 第124図 | 編み物製品実測図(4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 322 |
| 第95図 | 貯蔵穴内出土遺物実測図(2)137  | 第125図 | 編み物製品実測図(5)・・・・・・・ 323                |
| 第96図 | 貯蔵穴内出土遺物実測図(3)138  | 第126図 | 縄文時代編み物製品出土地図 324                     |
| 第97図 | 瓢箪実測図140           |       |                                       |

# 表 目 次

| 第1表  | 昭和61年度発掘調査経過図表  | 2   |
|------|---|-----|
| 第2表  | 昭和62年度発掘調査経過図表  | 4   |
| 第3表  | 第11層『暗灰褐色砂質シルト』層遺物出土状況一覧表                                   | 65  |
| 第4表  | 層位識別事項一覧表   | 66  |
| 第5表  | 貯蔵穴一覧表  | 141 |
| 第6表  | 出土土器観察一覧表・第Ⅰ・Ⅱ群土器   | 166 |
| 第7表  | 第11層出土土器観察一覧表   | 170 |
| 第8表  | 貯蔵穴内出土土器観察一覧表   | 171 |
| 第9表  | 第10層出土・採集土器(第Ⅲ・Ⅳ群)観察一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | 172 |
| 第10表 | 曽畑貝塚低湿地遺跡に於ける轟式土器編年   | 289 |
| 第11表 | 熊本県内出土の轟式系土器編年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・          | 293 |
| 第12表 | 轟関係引用・参考文献一覧表   | 294 |
| 第13表 | 曾畑式土器関係主要文献一覧表  | 300 |
| 第14表 | 熊本県内曽畑式土器出土遺跡一覧表  | 301 |
| 第15表 | 曽畑貝塚低湿地遺跡出土編み物製品一覧表   | 328 |
|      |   |     |
|      |   |     |

# 図 版 目 次

| 図版 1 | 発掘調査地状況・発掘調査状況   | 図版14 | 第22・23号貯蔵穴遺構       |
|------|------------------|------|--------------------|
| 図版 2 | 発掘調査状況           | 図版15 | 第24・26号貯蔵穴遺構       |
| 図版 3 | 発掘調査状況・土層・       | 図版16 | 第26~29号貯蔵穴遺構       |
|      | 貯蔵穴切り合い状況        | 図版17 | 第29・30・33号貯蔵穴遺構    |
| 図版 4 | 第1・2号貯蔵穴遺構       | 図版18 | 第34・36号貯蔵穴遺構       |
| 図版 5 | 第3・4・32・33号貯蔵穴遺構 | 図版19 | 第36~38号貯蔵穴遺構       |
| 図版 6 | 第5~7・31号貯蔵穴遺構    | 図版20 | 第39~41号貯蔵穴遺構       |
| 図版 7 | 第8・9・37号貯蔵穴遺構    | 図版21 | 第41~43号貯蔵穴遺構       |
| 図版 8 | 第9~11号貯蔵穴遺構      | 図版22 | 第43・45・46・48号貯蔵穴遺構 |
| 図版 9 | 第11・12号貯蔵穴遺構     | 図版23 | 第50~53号貯蔵穴遺構       |
| 図版10 | 第12・13号貯蔵穴遺構     | 図版24 | 第53・54号貯蔵穴遺構       |
| 図版11 | 第14号貯蔵穴遺構        | 図版25 | 第55・56号貯蔵穴遺構       |
| 図版12 | 第15~18号貯蔵穴遺構     | 図版26 | 第56~59号貯蔵穴遺構       |
| 図版13 | 第19~21号貯蔵穴遺構     | 図版27 | 第60・61号貯蔵穴遺構       |

| 図版28 | 第62号貯蔵穴遺構                     | 図版42 | 第10層出土土器No.12~18·20·21·25(上) |
|------|-------------------------------|------|------------------------------|
| 図版29 | 縄文前期轟式土器出土状況(第11~             |      | No.30~40 (下)                 |
|      | 14層)                          | 図版43 | 第10層出土土器No.22~24·26~29       |
| 図版30 | 縄文前期轟式土器出土状況(第13~             |      | 表 (上) 裏 (下)                  |
|      | 15層)                          | 図版44 | 第10層出土土器No.41~45(上)          |
| 図版31 | 縄文前期曽畑式土器出土状況                 |      | No.46~58 · 60 (下)            |
|      | (第10・11層)                     | 図版45 | 第10層出土土器Na61~73(上)           |
| 図版32 | 縄文前期曽畑式土器出土状況                 |      | No74~84 (下)                  |
|      | (第11層・貯蔵穴)                    | 図版46 | 第10層出土土器No.1~15 (上)          |
| 図版33 | 瓢箪・瓢箪出土状況                     |      | 第11層出土土器No16~27(下)           |
| 図版34 | 遺物出土状況 (人骨・獣骨)                | 図版47 | 第12層出土土器No28~40表(上)          |
| 図版35 | 遺物出土状況(獣骨·木製品·植物遺体)           |      | 裏 (下)                        |
| 図版36 | 第11層出土土器Na 1 ~ 7 (上)          | 図版48 | 第12層出土土器No41~52(上)           |
|      | $N_0.8 \sim 1.0 \ (\text{F})$ |      | 第13層出土土器Na53~66(下)           |
| 図版37 | 第11層出土土器No11~24表(上)           | 図版49 | 第13層出土土器Na67~78(上)           |
|      | ・裏 (下)                        |      | No.79∼92 (下)                 |
| 図版38 | 第11層出土土器No25~37(上)            | 図版50 | 第13層出土土器No93~104(上)          |
|      | No.38~45 (下)                  |      | 第14層出土土器Na105~116(下)         |
| 図版39 | 第11層出土土器No46~51(上)            | 図版51 | 第14層出土土器No.117~130(上)        |
|      | 貯蔵穴内出土土器Na 3 (下)              |      | No.131~143 (下)               |
| 図版40 | 貯蔵穴内出土土器Na 1・2・4 ~13(上)       | 図版52 | 第14層出土土器No144~154(上)         |
|      | No14~19 (下)                   |      | 第15層出土土器№155~168(下)          |
| 図版41 | 貯蔵穴内出土土器No20~22 (上)           |      |                              |
|      | 第10層出土土器Na 1 ~11 (下)          |      |                              |
|      |                               |      |                              |

|   | · |   |   |
|---|---|---|---|
|   |   | - |   |
|   |   |   |   |
|   |   |   |   |
|   |   |   |   |
|   |   |   |   |
|   |   |   |   |
|   |   |   |   |
|   | · |   |   |
|   |   |   |   |
|   |   |   |   |
|   |   |   |   |
|   | ٠ |   |   |
|   |   |   |   |
|   |   |   |   |
|   | • |   |   |
|   |   |   |   |
|   |   |   | ٠ |
| · |   |   |   |
|   |   |   |   |
|   |   |   |   |

## 第1章 序 説

#### 第1節 調査の経緯と経過

昭和49年度;建設省九州地方建設局熊本工事事務所は一般国道3号の宇土市から松橋町にかけての市街地の交通渋滞の解消をはかるため、東側を迂回する松橋バイパスの建設を計画、熊本県教育委員会に対して予定路線内に対処すべき文化財の存在有無の調査が依頼された。文献調査や現地踏査を行った結果、事前の発掘調査が必要であるところとして次の遺跡が上げられた。

(1) 豊田城 遺 跡 下益城郡松橋町大字久具 中世関係

(2) 曲 野 遺 跡 下益城郡松橋町大字曲野 縄文時代

(3) 潤 野 遺 跡 宇土市立岡町大字潤野 古墳群及び住居跡群

(4) 曽 畑 貝 塚 宇土市岩古曽町大字曽畑 縄文時代

この中で(1~3)の遺跡については試掘調査を実施したうえで、調査範囲等を確認して発掘調査を行うことが適当である事が報告された。しかし、(4)曽畑貝塚については、予定路線まで貝塚が延びている可能性が強いため直接的な影響のない西側へ変更することが適当であることを報告し、当局の検討がなされた。

昭和50年度;豊田城遺跡の試掘調査及び発掘調査を実施。古墳時代や中世の遺構・遺物が検出された。遺跡名は小字名から微雨(びゅう)遺跡と変更。

上記の曽畑貝塚については検討が行われ、西側へ変更するとした場合、直接的な影響を及ぼさないためにはどれだけの距離が必要であるのかが問題とされてきた。協議が重ねられ試掘調査を行ってその結果を待って判断されることになる。

試掘調査は現存する貝塚の西南約100mと約150m地点の二カ所にA・Bトレンチを設けて実施され、双方のトレンチに縄文時代前期~中期にかけての包含層が認められた。しかし、事前の発掘調査を実施することになれば路線の決定も致し方がないとの共通理解を終えている。なお、微雨遺跡の発掘調査と曽畑貝塚の試掘調査の結果については熊本文化財調査報告第19集「微雨・曽畑」として報告書の刊行を終えている。

昭和55~59年度;曲野遺跡第 I 次~ IV 次発掘調査を実施。熊本県文化財調査報告第61・65・75 集「曲野遺跡 I ・Ⅱ・Ⅲ」を刊行。

昭和60年度;潤野遺跡の発掘調査を実施。熊本県文化財調査報告第84集「新南部・潤野遺跡」 を刊行。

昭和61年度;建設省九州地方建設局熊本工事事務所当局では路線決定の後、用地の買収が進められてきたが、曽畑貝塚周辺も終了の運びとなり事前の発掘調査が依頼された。ところで、発掘調査を実施するところは現存する曽畑貝塚の西南方向約100mの水田地である。即ち、少しでも

#### 第1節 調査の経緯と経過

掘削すれば水が湧き出るところであり、充分な遮水工事と排水設備が必要であること、それに水田下4~5 mも掘り下げる予定であり土壁の崩壊での労務災害が生じないように十分検討する必要があった。また、調査面積については低湿地という条件での調査であることを考慮し20m×40 m=800㎡が適当であろうとされた。そこで、本県土木部道路維持課の協力を得て三者により工法の検討がなされたが、それは①そのままでの露天掘り ②片面(東側)に鋼矢板を施工する ③四面に鋼矢板を施工する の中から最も安全である③の方法を採る事に決定された。

以下、発掘調査の経緯を略記しておきたい。

昭和61年9月中旬に現地にはいる。発掘調査事務所のプレハブハウスを建設し調査器材搬入を行う。調査作業員は宇土市教育委員会の紹介により確保、水抜き、雑草の除去作業を開始。図面を読み試掘調査でのAトレンチの位置を確認し、このトレンチをほぼ中央にした調査区を設定。東西にA・B、南北に1~4で一辺10mのグリッドを組む。

第1表 昭和61年度発掘調査経過図表

| 月                   | 調  | 査            | 区 | 調査結果   | 備考  |
|---------------------|----|--------------|---|--|---|
| 昭和<br>61年<br>9<br>月 | 全体 | 調査           |   | 調査区設定 雑草除去 排水作業<br>排土作業 (重機使用)<br>遺構・遺物検出確認作業<br>阿高・曽畑式土器確認<br>深掘りを行い下層の状況を確認  | プレハブ建設。<br>調査器材搬入。<br>作業員確保。<br>鋼矢板工事について<br>の検討。     |
| 10月                 |    | B — 1<br>*リッ |   | 第2砂礫層(第10層)調査<br>縄文前期:轟・曽畑式土器<br>中期:阿高式土器<br>後期:南福寺・鐘ケ崎式土器<br>などが包含されていることを確認<br>獣骨・自然遺物(ドングリ類)<br>編み物・円座など出土<br>編み物製品は一部取り上げる | 出水が多く、遺構の<br>検出困難。<br>水洗作業を実施する。<br>鋼矢板工事について<br>の検討。 |
| 11 月                |    | B — 1<br>゛リッ | _ | 第10・11層調査<br>第11層は縄文前期(曽畑式土器)の単純的<br>包含層である事を確認。   | 鋼矢板工事(12~29<br>日)。<br>遮水がなされ、調査<br>が順調に進みはじめ<br>る。    |

第1章 序 説

| 11             | A・B − 1・2<br>グリッド  | 一部包含層の水洗選別作業をおこなう。   | 植物種子が多く認め  <br>  られる。                                       |
|----------------|--|--|---|
| 12月            | A-1 グリッド<br>B-1 グリッド                                       | 第12~14層は縄文前期(轟式土器)の単純<br>的包含層である事を確認。第1号貯蔵穴検出、<br>第11層から切り込んでいる事を確認。   | 試掘Aトレンチ確認。<br>貯蔵穴群が存在する<br>ことを確認。<br>第10層出土遺物は一<br>括で取り上げる。 |
| 昭和<br>62年<br>1 | A-1 グリッド<br>A-4 グリッド<br>B-1 グリッド                           | 第13~16層調査 人骨出土(北側)<br>第10~11層調査(南側)<br>第11~15層調査轟式土器・獣骨・自然遺物出土   | 遺構は伴わず単独の<br>出土である。<br>縄文研究会検討。                             |
| 2 月            | A-1 グリッド<br>A-4 グリッド<br>B-1 グリッド<br>B-4 グリッド<br>A・B-2 グリッド | 第16~18層調査 自然遺物出土<br>第11~12層調査 曽畑式土器の包含は薄くなる<br>第15~16層調査 獣骨類も少なくなる<br>第10~11層調査<br>包含層が薄く、縄文晩期遺物が混入する<br>貯蔵穴検出 貯蔵穴は10基以上ある事を確認。<br>貯蔵穴はA・B-2グリッドに集中し、東<br>西方向に拡がる傾向を確認 | 人骨取り上げ。<br>専門調査員来跡。   |
| 3 月            |  | 第1号貯蔵穴調査 層位実測<br>第10~12層調査 第15号貯蔵穴調査<br>第15層調査<br>第17層調査 層位実測<br>第10~11層調査<br>第12~15層調査  | 編み物製品出土。<br>アマモ出土。  |

上記が調査経過であるが、貯蔵穴遺構が予想以上に検出されたこと、鋼矢板工事施工が遅れた 事などにより発掘調査は次年度6月まで延長されることになる。

昭和62年度;4月~6月発掘調査7月~3月整理・報告書作成と決まる。

#### 第1節 調査の経緯と経過

第2表 昭和62年度発掘調査経過図表

| 月   | 調                         | 査    | 区            | 調査結果   | 備考  |
|-----|---------------------------|------|--------------|--|---|
|     | A-2·3 A-4 B-1 B-2 B-3 B-4 | グググ  | リッドリッドリッドリッド | 第12~16層調査 貯蔵穴遺構検出<br>層位実測<br>層位実測<br>第2,16,17,19号貯蔵穴調査<br>第10,11 層調査 貯蔵穴遺構検出<br>第11~15層調査 終了<br>第16層調査、層位図実測 土層剥ぎ取り<br>終了                        | 新年度調査開始   |
| 5 月 | A · B -                   | - 2・ |              | 貯蔵穴遺構・調査<br>第2~48号貯蔵穴検出。<br>貯蔵穴群実測、写真撮影。   | 第7号貯蔵穴の保存<br>取り上げを検討。<br>専門調査員来跡。   |
| 6 月 | A·B-                      | - 2· | _            | 貯蔵穴遺構検出・調査<br>第8,9,10,12,14,20,23~25,34,36.38.39.<br>42~62号貯蔵穴<br>貯蔵穴群の下層の調査<br>出土遺物取り上げ<br>貯蔵穴内出土編み物製品取り上げ<br>第9,14,34,36,42,43,45,47,54,62号貯蔵穴 | 瓢箪出土。<br>編み物製品の取り上<br>げ準備。<br>猿骨出土。<br>第7号貯蔵穴取り上<br>げ。<br>発掘調査終了。<br>鋼矢板抜きとり工事<br>埋め戻し作業。 |

7月から熊本県文化財収蔵庫で整理作業を開始。報告書の作成に取り掛かる。なお、取り上げて文化財収蔵庫へ運んだ編み物製品と植物遺体の一部は、次年度から保存処理を行うように計画をすすめる。

二年間に亘る調査の事務経緯及び調査組織は次の通りである。

#### 第1章 序 説

昭和61年5月1日 教文89号 一般国道3号松橋バイパス外一件埋蔵文化財発掘調査の委託契約について(回答)

昭和61年8月13日 教文340号 埋蔵文化財発掘調査の通知

昭和61年9月30日 教文440号 受託事業建設省松橋バイパス関係曽畑貝塚発掘調査に伴う契約変更について —鋼矢板工事—

昭和61年12月4日 教文568号 受託事業建設省松橋バイパス関係曽畑貝塚発掘調査に伴う報告

昭和61年12月13日 教文609号 受託事業建設省松橋バイパス関係曽畑貝塚発掘調査に伴う契 約変更について

昭和62年3月30日 教文814号 一般国道3号松橋バイパス外一件埋蔵文化財発掘調査の完了 報告

昭和62年4月1日 教文117号 一般国道3号松橋バイパス外一件埋蔵文化財発掘調査の委託 契約について(回答)

昭和63年3月31日 教文609号 一般国道3号松橋バイパス外一件埋蔵文化財発掘調査の完了 報告

#### 調査の組織

#### 調査主体

能本県教育委員会

#### 調查責任者

丸木保賢 (能本県文化課長)

#### 調査総括

隈 昭志 (熊本県文化課長補佐)

#### 専門調查員

坪井清足(大阪府立埋蔵文化財センター所長) 三島 格(肥後考古学会会長)田辺哲夫 (初代文化課長) 江坂輝彌(慶応大学名誉教授) 賀川光夫(別府大学学長)井関弘太郎 (名古屋大学文学部教授) 紛川昭平(大阪市立大学理学部教授) 畑中健一(北九州市立大学文学部教授) 藤下典之(大阪府立大学農学部助教授) 山田 治(京都産業大学理学部教授)大迫靖雄(熊本大学教育学部教授) 渡辺 誠(名古屋大学文学部助教授) 甲元真之(熊本大学文学部助教授) 海津正倫(名古屋大学文学部助教授) 松下孝幸(長崎大学医学部解剖学第二教室助教授) 藤沢 浅(岡山大学農学部農業生物研究所文部技官) 杉村彰一(氷川高校) 柴田喜太郎(広島大学理学部地鉱教室)

#### 第1節 調査の経緯と経過

#### 調査主査

江本 直(文化課主任学芸員)

#### 調査員

丸山伸治(文化課文化財保護主事) 浦田信智(文化課嘱託) 平井浩一(文化課嘱託) 住田幸恵(文化課嘱託) •

水ノ江和同(同志社大学文学部大学院2回生) 藤崎周太郎(熊本大学文学部大学院1回生)

#### 調査指導及び協力者

乙益重隆(国学院大学文学部教授) 笠原安夫(岡山大学農学部農業生物研究所名誉教授) 潮見 浩(広島大学文学部教授) 任 孝宰(大韓民国ソウル大学博物館館長) 町田 洋(東京都立大学理学部教授) 白木原和美(熊本大学文学部教授) 西谷 正(九州大学文学部教授)橘 昌信(別府大学文学部教授) 安原啓示(奈良文化財研究所保存工学研究室長)富樫卯三郎(熊本県地名研究会会長) 泉 拓良(奈良大学文学部助教授) 西本豊弘(国立歴史民俗博物館助教授) 片岡 肇(京都文化財団歴史研究室室長) 松藤和人(同志社大学文学部講師) 宮本一夫(愛媛大学文学部助教授) 永田瑞穂(松橋高校) 田代周央(八代南高校) 高木恭二・木下洋介・平山修一(宇土市) 文化庁記念物課 国立奈良文化財研究所 縄文研究会 慶応大学考古学研究室 京都大学考古学研究室 同志社大学考古学研究室 熊本大学考古学研究室 京都大学考古学研究室 同志社大学考古学研究室 熊本大学考古学研究室 別府大学考古学研究室 宇土市教育委員会 城南町歴史民俗資料館 熊本市立博物館 山本建設株式会社 藤本工務店 元興寺文化財保存研究所

#### 調査事務

建設省九州地方建設局熊本工事事務所調査課 中島一見(課長)、松永 宏(専門職)、武田 亘弘(計画係長)、三井裕二(主任)、林 良一(主任)

熊本県土木部監理課 米村嘉人(課長) 道路維持課 平田弘記(課長) 中庭安一(参事) 松橋土木事務所工務課 本田 博(第一係長) 牧野 留(参事)

熊本県教育庁文化課 林田敏嗣 (課長補佐) 柴田和馬 (主幹・経理係長) 松崎厚生 (主幹・経理係長) 森 貴史 (参事) 谷 喜美子 (主任主事) 上村祐司 (主事)

#### 作業者

〔発掘調査〕 若松ノブエ 園川キヌコ 井上タツコ 松内クニコ 白石弘子 白石節子 中山増子 守田良子 中村テル子 本郷信子 中村次則 宇都 惣 前田志磨江 小山正子 深水保孝 井山 親 福田邦彦 稲津暢洋 坂口丈仁

〔整 理〕小佐井恵理子 前田志磨江 水本寿美子 淵上慶子 村上法子 小山正子

#### 第2節 遺跡の位置と歴史的・地理的環境

曽畑貝塚は熊本県宇土市岩古曽町曽畑に所在し、出土する曽畑式土器は九州縄文時代前期の最も代表的な土器である。貝塚の調査事例を見ると、早く明治23年、若林勝邦氏の「東京帝国大学人類学会雑誌」第5巻第49号で初めて学会に紹介され、大正時代には中山平次郎氏の採集資料の紹介と清野謙次氏の発掘があり、広く知られるところとなっている。清野謙次氏の発掘調査は大正12年に実施されたもので、現在は全く姿を消してしまっているA・B地点の状況を知る貴重な報告となっている。現存する貝塚と両地点とが確実につながっていたことが理解されるし、既に、朝鮮半島東三洞貝塚や鹿児島県徳之島遺跡出土土器と類似するとの指摘がある。地元の小林久雄氏は数多く現地に通われ昭和10年「肥後縄文土器編年の概要」の発表により曽畑式土器の形式設定を終えている。昭和34年には慶応大学考古学民族学研究室江坂輝彌調査団長を中心にして本格的な発掘調査が実施されている。それは東・西両貝塚の存在確認をなし、層位的分離で九州縄文時代土器編年の実証事例とされた。下層から押型文土器 - 轟式土器 - 曽畑式土器(下層) - 曽畑式土器(上層) - 鐘ケ崎式・市来式土器へとの移行が認められている。そして、熊本県教育委員会による昭和50年の試掘調査と今回の発掘調査が続いた事になる。

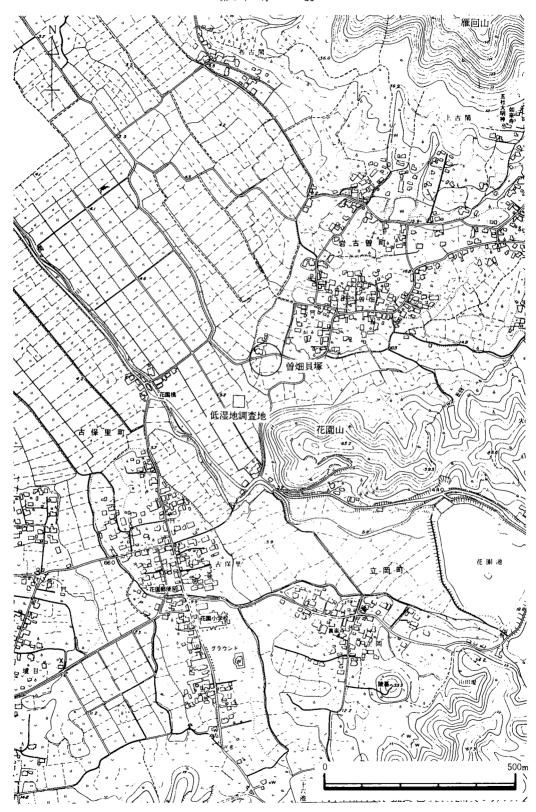
さて、曽畑貝塚の所在する宇土市は九州のほぼ中央にあたり宇土半島が西の有明海に突き出し、 天草島へと繋いでいる。この半島基部一帯に緑川、浜戸川、潤川などが沖積平野を形成し、小高 い丘陵は市街化されている。東側には雁回山(標高314m)があり山麓から伸びた舌状台地末端 部に曽畑貝塚は立地している。著名な轟貝塚、西岡台貝塚は西方向約4kmにあり、雁回山北麓に は下益城郡城南町御領、阿高、黒橋貝塚が連座し、南側の同郡松橋町大野貝塚を加えて大貝塚群 を形成している。

同じく松橋バイパス関係の発掘調査によって松橋町曲野遺跡では旧石器時代の良好な包含層が検出され、「A T火山灰」層(21,000~22,000年前)の下層に小型のナイフ形石器・台形石器・掻器それに局部磨製石斧を有する石器群が存在することが明らかになっている。この松橋町から城南町へと洪積台地が拡がっていることから今後旧石器時代遺跡の発見は増えていくであろう。すなわち、この地域で旧石器時代からの足跡が確認されているわけで、前記の貝塚群を中心とする縄文時代の大きな展開へのはしりとも思える。

弥生時代や古墳時代の遺跡も多く、境目・善導寺遺跡は大型甕棺の南限とされ西岡台遺跡の大環濠は圧巻である。熊本県内には64基の前方後円墳が存在するがこの宇土半島基部に12基が集中する。宇土市松山町に所在する向野田古墳は最も主要な前方後円墳であるが、昭和44年の発掘調査によって、二段墓壙の竪穴式石室で内部に舟形石棺(系)を納め、内行花文鏡・方格規矩島文鏡・鳥獣鏡らの舶載鏡や玉類・車輪石など豊富な遺物が出土し大いに注目をされている。また、宇土郡不知火町の国越古墳は横穴式石室で家形石棺をもち、軒まわりと入口の左右の袖石に彩色の鍵ノ手文様を施した装飾古墳である。獣文縁獣帯鏡や鹿骨製玉飾などの重要な遺物が出土している。

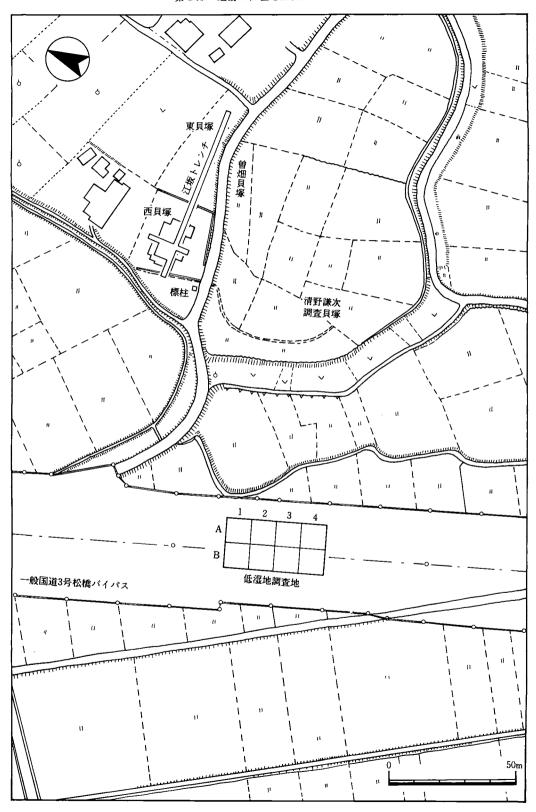


敦聚的野地・硝史型と置立の褐敷 確な業



第2図 曽畑貝塚位置図

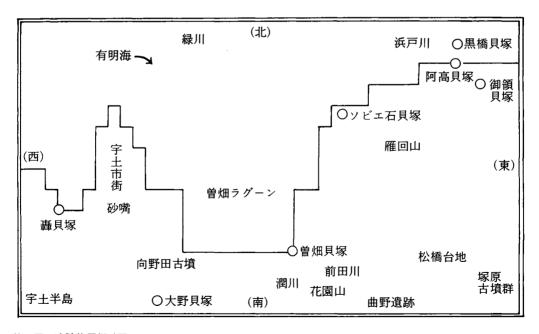
第2節 遺跡の位置と歴史的・地理的環境



第3図 調査地地形図

弁天山古墳、迫ノ上古墳、城ノ越古墳、茶臼山古墳、楢崎古墳、女夫塚古墳らを加えて4世紀~6世紀の古墳が連続する。このことはこの地域の優位性が語られようが、それは九州の中央に位置するという地理的要件をもち交通の要所であることが加わる。肥沃な生産地を持つことはいうまでもなく、山地での狩猟採集や静かな有明海・不知火海での漁猟が豊富に違いない。さらには、湾入した天然の良港に恵まれ盛んな海上交易が強く指摘される。

もとに戻るとして、曽畑貝塚は現在、畑地と宅地であり昭和51年宇土市指定文化財となっている。岩古曽町は「岩熊」「古閑」「曽畑」の集落名が重ねられたものである。標高約7~8 mにあり、西側・南側の水田は2~4 m下がる。南側は花園山とに挟まれ小谷が東へ伸びて前田川が谷水をはこぶ。今回の調査で第16層暗灰色シルト層(海抜約1.3 m)は海成層であることが明らかになり、形成時期は縄文時代早・前期と判断され、貝塚がのる台地直下まで海進したものである。その後の海退でまた台地から土砂の堆積が繰り返され、今日の地形を形成している。海進のおり、広く砂嘴が生じ、現在の宇土市街はこれにのっている。松橋台地から不知火台地・宇土半島への洪積台地の切れ目はないことから、海進流路は緑川・浜戸川の河口域に求められよう。すなわち、砂嘴や台地に囲まれた静かな内湾は『曽畑ラグーン』の名前がふさわしい。周辺の地形や遺跡を平面的に模式化した図を示しておきたい。

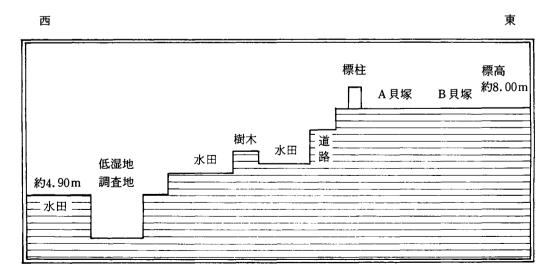


第4図 遺跡位置概略図

#### 第3節 調査区の設定

松橋バイパス路線は曽畑貝塚の西側約100mを南北にはしる。その中に適当な面積とされた20m×40m=800㎡の調査区はこの予定路線内に設定することになるが、過去に行った試掘調査を中心とした方が最も確実であるとし、地形観察からも貝塚から低い舌状台地が西側へ伸びているだろうとの判断を加えたものである。すなわち、バイパス建設図No.80~85でほぼ中心でやや東よりの部分に求められたのである。

行政区は宇土市花園町210~212番地である。曽畑貝塚宇土市指定文化財標柱から直線的に見ると、里道から約110cm下がって水田である。元来、清野謙次氏発掘地点まで続いていたものと理解され、豊富な貝殻が石灰に焼くため取り去られ、更には土取りを続けて水田化されたものであろう。明治から大正時代のことであることが、清野氏の報告にもみえている。その西側は逆に約80cm高くなり畑地で樹木の栽培が行われている。不可思議なこの高まりはA・B 貝塚がのる台地から連続したもののいわゆる台地縁であるのか、周囲からみて道路としては幅が広すぎるのである。溜池の堤防ではとの指摘をうけている。現在の水田は前田川の谷水や潤川からまかなわれ、後者の上流には大規模な溜池である立岡ノ池がある。すなわち、大規模溜池が作られることにより、周辺の小規模の溜池は用をなくしてしまいその痕跡だけを示しているものであろうか。この高まりから約1.40m下がって水田であるが、前田川からひかれた水路は不規則で蛇行を示す。むしろ、古い時期の台地縁の可能性が残される。調査の設定地はさらに約50cm、すなわち、現存するA・B 貝塚から約3 m下がっていることになる。水田面は標高約4.9mをはかる。一帯は昭和年代に整然とした耕地整理が行われている。なお、貝塚の北側は段落ちとなるが、水田面のレベルは連続し、里道は盛土により建設されている。



第5図 断面概略図

## 第Ⅱ章 発掘調査

#### 第1節 調査の方法

道路建設予定地には当局によって、中心杭と両側幅杭が打たれており、耕作が止められ雑草と 前年の株から芽を出した稲が勢いよく繁っていた。周りの稲作地に水が張られ、調査地も池のよ うで、小魚が遊んでいた。

水抜きと雑草の除去作業から開始、以前の試掘調査のトレンチの探索を行ったりする。このト レンチを中心とした調査区を設定することとする。東側の水田耕作地に影響が及ばないように、 東幅線から約5m間をとり、西へ20m、南北40mである。建設省道路建設予定図No81.5が北端と なる。

10m単位のグリッドとして、東西にA・B、南北に1~4のグリッド名として進めた。

試掘調査の結果でみると、第Ⅷ層青褐色砂礫層と第Ⅱ 層泥炭層が縄文時代前期~中期の主要な包含層であるこ とが明らかになっていた。すなわち、第Ⅱ層の下部で水 田の表面から約3mの深さがあり、さらに、早期や旧石 器時代の包含層があれば、地表から約5mの深さに及ぶ ことが予想された。第Ⅰ~Ⅷ層は赤褐色や黄褐色の粘質 土がくりかえし堆積しているもので、わずかに弥生時代 の土器細片が包含されている程度であった。遺構に伴う ものである可能性はないと判断されていた。そこで第Ⅵ 層まで、深さ約150cmは重機を用いた排土作業を行う事 とする。排土場所は南北の道路予定地内とした。

調査を進めると、上記第WII・IX層は今回の第8~11層に 相当することなど、比較的作業も順調に進んだ。「泥炭層」

の呼称も指摘を受けて、「シルト混じり砂礫層」と変更。 第8~10層は縄文時代前期~晩期の土器片が混在した状

(グリッド図)

況を呈することがわかり、「泥炭層」=第11層「シルト混じり砂礫層」は単なる前期の遺物包含 層ではなく、遺構の検出ができることが確認されるにいたった。

|深掘りすることによって、試掘調査では不明であった「シルト混じり砂礫層」の下層にも縄文 時代前期の包含層を検出。この包含層は数枚に分かれているが、轟式土器が出土することが判明 し、上層の曽畑式土器と前期は二枚に明瞭に分けることができた。この轟式土器は第12~15層に 出土し、地表下約4mまでである。さらに掘り進むと、明らかな海成層や、凝灰岩を含む礫層

#### 第1節 調査の方法

が繰り返して堆積をしていることが判明。地表下5m強である。第16層暗褐色シルト層(海成)には、流され運ばれたものであろうが、石匙などの遺物が含まれており、縄文時代早期であろうと判断された。当初からの予想に非常に近い状況となった。

鋼矢板工事の施工によって遮水ができ、縄文時代前期曽畑式土器に伴う遺構は貯蔵穴群であることも明らかになり、この分布状況の把握が急務とされてきた。

調査は部分調査から全体調査へ移行、貯蔵穴群は調査区のほぼ中央部に集中していることがはっきりしてきたため、 $A \cdot B - 1$  グリッドや $A \cdot B - 3 \cdot 4$  グリッドから進める。予想された縄文時代早期の遺構・遺物はほとんど出土せず、前期までに絞りこんだ調査を進める事になる。

第14~15層に肉眼では火山ガラスと見れる砂粒が浮き上がる。折から、「アカホヤ火山灰」を巡っては、その上下に轟式土器が出土するのか、否か、問題となっているところであるが、第15層まで轟式土器が出土するのは確実であった。地質調査での分析結果をまたねばならないことであるが、堆積土であることから一元的に捉えて可能であるのか問題を残している。

貯蔵穴群は当初十数基を確認、二十数基と予想をたてるが調査とともに大幅に増加を続ける。貯蔵穴には大石が見られ、検出作業に協力するかのようである。大石は安山岩や凝灰岩であるが、特に前者は相当に重たく、遠くから運んできたものらしく大変な労働力であったに違いない。最終的に貯蔵穴は62基となり、そのなかの3基は縄文時代晩期のものと判断。前期と晩期の両時期あることが判明するが、層位図の作成作業のために残した東断面に両者が鮮明に切り合っている状況が見られた。

貯蔵穴には見事に多くの団栗類が遺存しており、編み物製品も多い。獣骨、自然遺物、瓢箪も出土。次章から報告したい。実測や写真撮影を手ばやにすませ、可能な限り編み物製品は取り上げることにする。にわかに、材木やウレタン樹脂を用意、手作りの取り上げ作業を行う。バインダーで固めるよりよさそうである。20個体ほどを取り上げる。貯蔵穴の調査がすんだところから、下層を掘り進み調査を終了する。その間、多くの専門調査を願う。主なところを記しておきたい。

地質調査 土壌サンプリング分析 獣骨調査 出土品同定

花粉調査 土壌サンプリング分析 人骨調査 出土品同定

小型種子調査 土壌サンプリング分析 木質調査 出土品同定

大型種子調査 土壌サンプリング、出土品分析 C14測定

硅素調査 土壌サンプリング分析 魚骨調査 出土品同定

土壁剥ぎ取り作業

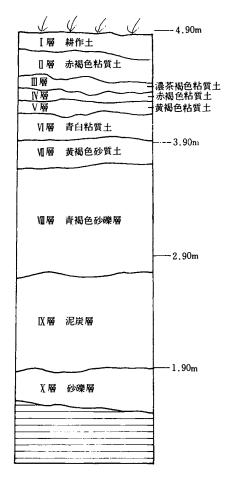
#### 第2節 基本的層位

今回の調査は前回の試掘調査層位図を参照にしながら進めたが、そのときの模式図は下に示すとおりである。第X層砂礫層まで、地表から約3.20m掘り下げている。主要な包含層は第VIII層青褐

色砂礫層と第IX層泥炭層で、前者には縄文時代前期から後期の遺物が見られ、後者は前期土器の包含層で曽畑式土器が検出され、貝類や網代などが出土している。第X層砂礫層は明確に状況が把握されていない。小規模のトレンチの調査であり遺構の検出も出来てはいない。

まとめにて、第IV層赤褐色粘質土で弥生土器の細片が出土し、器面の磨滅があることからこの時期もしくは以降における大規模の堆積作用が考えられている。第VIII層は上記の土器が出土するとして、磨滅が著しいことから生活場所ではなく、砂礫の流動・移動とともに運ばれた可能性が強いとしている。また、第IX層は土器に付着した煤が損なわれていないことや、物理的に弱い網代が遺存していることなどから、一帯が海浜に面した生活址と判断を行っている。

くしくも、試掘調査でこの層位図をとった地点 は今回の調査に出現し、第1号貯蔵穴遺構である ことが判明している。「泥炭層」との表現も貯蔵穴 を掘り進んでいたことにより生じたものと理解で きよう。



第6図 試掘調査層位図 江本(1975)

以上の結果に基づき、前節の調査方法で調査を進めているが、第X層砂礫層やそれ以下の層の 状況究明がもっと望まれていたものである。

さて、今回の調査での基本層位図は次頁に示すとおりであるが、数カ所の層位をもとにしてま とめている。第1層から第10層までA-2グリッド東壁、第11層から第15層をA-1グリッド南 壁、それ以下をB-2グリッド東壁を主として組み立てたものである。

第1層は耕作土である。粘土質の柔かい土質は、赤褐色がイメージ的に強い。県内の水田の表面の色調は黒色・暗褐色らに求められるが、この地域の特色とできる。今日、梅雨どきや、降雨量の多いとき、水かさの増した潤川は赤褐色の濁流であり、満々と流水を貯える上流の立岡ノ池は赤濁色を呈している。潤川流域で土地開発が行われると赤褐色の地肌を見せることが大変多

#### 第2節 基本的層位

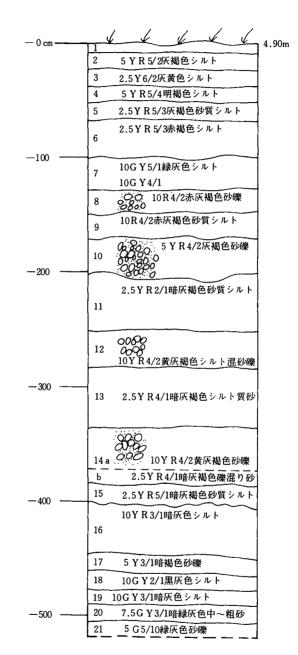
く、これらが流れだしているためであろう。付近の地質は白亜紀(後期)の火成岩で形成され、泥岩層と礫岩層が見られる。黒褐色の泥岩層は砂岩や流紋岩質凝灰岩をふくんでいる。泥岩層の上に主

に黄褐色をした礫岩層があり、砂岩の薄層をはさんでいる。礫は砂岩、花 崗岩、変成岩、蛇紋岩などで、1m近くに達する巨礫や、1~数mに及ぶ赤色泥岩を含んでいる。とくに、花園山 周辺は赤色泥岩が顕著に認められる。

第2~7層 シルトが約1.2mかさなるが、灰褐色・明褐色・赤褐色・緑灰色などの色調を呈している。5層がいくぶん砂質である以外はキメ細かく粘性が非常につよい。特に7層などは、そのまま土器の胎土に使用できるかのようである。前記、泥岩が供給したものと思われ、含まれる土器片は弥生時代を示すことによりそれ以降に堆積したものとできよう。そして、各層間は整層にあり乱れが少ない。

第8層 赤灰褐色砂礫層で、第1 礫層と通称したものである。20~30 cmの厚さがあるが、安定性に欠け途 切れたり、ブロックとして捉えられ たりする。礫石は数cm程度のもので 磨滅は激しくはない。供給地からの 距離がさほどではないことを示すも のであろう。

第9層 二枚の礫層にはさまれた 赤灰褐砂質シルトである。砂質と幾 分濁りが見られ有機質を含むかにあ る。第10層と明確に分けられる。



第7図 層位概略図

第10層 灰褐色砂礫層である。地表から約170~200cm下がる。第2礫層と通称し、第8層よりも少し磨滅が進んでいるように見える。数cmの礫石で、赤褐色や青褐色を呈するものが多い。樹根をはじめ有機質のものを多く含んでいる。また、湧水が、非常に多い。

#### 第 Ⅱ章 発掘調査

第11層 暗灰褐色砂質シルト層。試掘調査時に第IX層「泥炭層」としたもの。今回の調査でも砂質で礫の少ない層を泥炭層と呼称していたが、通称「第1泥炭層」としていたものである。第10層とは起伏が多く不整合にある。厚いところで、30~40cmを測り地表面から丁度200cm前後にある。有機質を多く含んで割に柔らかい。縄文時代前期曽畑式土器を主として出土している。

第12層 灰褐色シルト混じり砂礫層。上下層とは明確に分けられ整合している。砂礫は数cm程度で磨滅もさほど進んでいない。水分が抜けると非常に固くなる。厚いところは40~50cmあり、貯蔵穴群の壁面となる。有機質を含み、獣骨など出土しているが意外と残りは良好である。なお、この第12~15層には縄文時代前期の轟式土器が出土する。大きな破片が少なく、砂礫と共に移動したものと判断されるが、煤が付着したものなど乱れが少なく、供給地が近いことを示すものであろう。

第13層 暗灰シルト質砂層。やや粘質があり、有機質を多く含むため通称「第2泥炭層」としていた層である。厚さが50~60cmと厚く、中間位が、地表下300cmである。植物遺体や動物遺体を含んでおり、良好な遺存状態である。轟式土器の出土はこの層が最も多い。

第14層 a・b の二枚に分けられる。a 層は灰褐色を呈する砂礫層である。 b 層は暗灰褐色礫混じり砂層である。双方で50cm程の厚さがあり、上下層とは整合をなしている。数cm大の礫層であり、磨滅はひどくはない。 a・b 層の中間位付近に光り輝く、「火山ガラス」ようのものがみられる。この現象は調査区の全域に捉えられるもので、「アカホヤ」の可能性が問われたものである。

第15層 暗灰褐色砂質シルト層である。20cmと厚くはないが、下層とはやや不整合にある。有機質を多く含んでいる。地表下400cmとなる。

第16層 暗灰色シルト層である。約50cmと厚く、安定した堆積状態を示している。大きな自然 木など倒れたそのままの状態で検出される。流されてきたと見るより波打ちぎわのものが倒れて そのままといった状況を示すかにある。そして、ヤリガネガイらの自然貝が認められることにより 海成層として捉えられる。時間的には縄文時代前期並行もしくは以前とできる。

第17層 暗褐色砂礫層で凝灰岩が多く、「阿蘇IV」として、この地域の基盤と捉えられるかにあったが、下層の数枚を含め二次堆積となったものであることが判明した。従って、基盤はさらに下層となるものであろう。

第18層 黒灰色シルト層。きめが細く粘性が見れる。水分が抜けると、固くかたまる。肉眼に「火山ガラス」ようのものが見れる。「ATガラス」では、と、問える。

第19層 暗灰色シルト層。第18層が幾分白っぽくなった状態である。

第20層 暗緑灰色中~粗砂層。きれいな砂層である。丁度海抜0mである。

第21層 今回の調査の最下層で、緑灰色砂礫層である。「阿蘇Ⅳ」の基盤までは届いていない ことになろう。きれいな砂礫で、見るからに水磨されたことを示している。

#### 第2節 基本的層位

#### 参考文献

| 『宇土市史跡分布図』 宇土市教育委員会                  | 1975 |
|--------------------------------------|------|
| 『微 雨 ・ 曽 畑』 熊本県文化財調査報告第19集 熊本県教育委員会  | 1977 |
| 『宇土城跡(西岡台)』宇土市文化財調査報告書第1集 宇土市教育委員会   | 1977 |
| 『向野田古墳』 宇土市文化財調査報告書第2集 宇土市教育委員会      | 1978 |
| 平山修一 「熊本県宇土市松山町山内遺跡の遺物」 九州始源文化研究会会報2 | 1972 |
| 清野謙次 「肥後国宇土郡花園村大字岩古曽字曽畑貝塚」『日本貝塚の研究』  | 1969 |
| 小林久雄 「肥後縄文土器編年の概要」考古学評論第1巻2号         | 1953 |
| 江坂輝彌 「縄文土器-九州編(6)-」考古学ジャーナル13号       | 1967 |
| 『黒 橋』 熊本県文化財調査報告第20集 熊本県教育委員会        | 1976 |
| 松本雅明・富樫卯三郎「轟式土器の編年:熊本県宇土市轟貝塚調査報告」    |      |
| 考古学雑誌第47巻第3号                         | 1961 |

# 第1節 第12~21層の遺物

# 1. 出土状況

この第12~第16層中から出土する土器は、縄文時代前期に比定され、器壁が薄く、内外器面に 貝殻条痕による器面調整を行い、胴部上半に数条の隆帯を貼り付ける特徴を持つ轟B式と呼ばれ る土器群と、貝殻条痕による器面調整だけで他に文様を持たず口唇部に刻目を施した轟A式と呼 ばれる土器群で、総称して轟式土器と形式名が付けられた土器の単純層である。ただし、時期的 に古く縄文時代早期に比定される押型文土器が12層に1点、13層に2点、14層に2点含まれるが、 これらの層には、轟式土器より新しい時期形式の土器は全く含まれない。

次に、これら土器の出土状況を各層ごとに見てみたい。まず、轟式土器が出土する層で最上 層に当たる12層から出土する土器の量は、比較的に少なく100点を数える。この層での土器の分 布状況は、ある一定の区域に集中する傾向が見られる。それは、調査区の南側に当たるA-3・ 4 グリッドとA-2 グリッドの南側部分で、特に調査区の一番東南側に当たるA-4 グリッド内 に多く集中している。この他のグリッドには、土器の出土は全く認められない。次に、その下層 である13層と14層は土器の出土量もほとんど変わらず13層が161点、14層が123点を数える。また、 出土土器の分布状況も13層と14層はほとんど同じで、A-1グリッドからB-4グリッドへ調査 区を斜めに横断する形で帯状に広がる分布状況を示す。次に、15層であるがこの層より土器の出 土量はかなり少なくなり70点を数える。また、出土土器の分布状況は上層の13・14層と同じ状況 を示しA-2・3グリッドとB-4グリッドに特に集中する。次に、16層は土器を含めた人工遺 物が出土する層としては最下層になり、土器の出土点数は2点を数え少ない。さらに最下層の17 ~21層は、木片・木の葉・種子類などの自然遺物は多量に含むが、土器・石器・骨角器などの人 工遺物は全く含まない層である。以上、轟式土器が出土する単純層である第12~16層を中心に土 器の出土状況を簡単に見てきたが、ここでこれらの層から出土した土器の出土状況を簡単にまと めてみたい。今回の調査で土器・石器・骨角器などの人工遺物が出土する最も下の層は16層で、 轟式土器は12層からこの16層まで単純に出土する。これらの層からの土器の出土状況は、最上層 である12層のみが他の13~15層からの出土状況と異にし、A-3・4グリッドに集中する傾向、つ まり調査区の東南側に集中する傾向が認められる。また、下の13層~15層、特に13層に土器の出土 量は、各層ごとの出土量の中で最も多く出土しており土器出土量のピークを迎える。また、土器 の出土状況は上層の12層とは異なりA-1・2グリッドとB-3・4グリッドに集中し調査区を 斜めに横断する形になる。この層の土器の出土状況はさらに下層の14層と15層も同じ分布状況を

#### 第1節 第12~21層の遺物

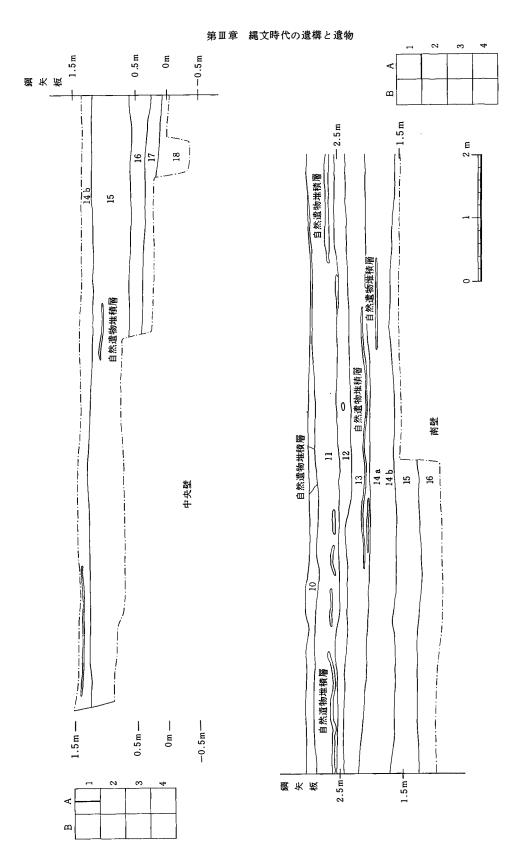
示す。ただし、15層の土器の出土状況は基本的には上層の13・14層と同じであるが、調査区の真ん中程が切れ両側に島状に独立する形になる。この状況は、おそらく土器の出土量が少ないことが関連しているものと考えられる。この13層から15層までが土器の分布状況を同じくするということは、土砂が堆積した時期に違いがあっても同じ方向から流れて来たことの証となるものであろう。ただし、この12層から16層中より出土した轟式土器は、すべて器面にローリングは受けているが文様、器面調整等はしっかりしており磨滅はあまりしていない。このことから、土器が流れて来た場所は極近くで、おそらく曽畑貝塚が立地する微高地から流れて来たのは間違いないものと考えられ、この微高地に集落などの生活遺構が存在するのであろう。

なお、第Ⅰ・Ⅱ群土器の遺物登録は下記により整理を進めているため、報告を行う各章・各節を右に示しておきたい。

第10層出土 1 ~15 第Ⅲ章第4節 第11層出土 16~27 第Ⅲ章第2節

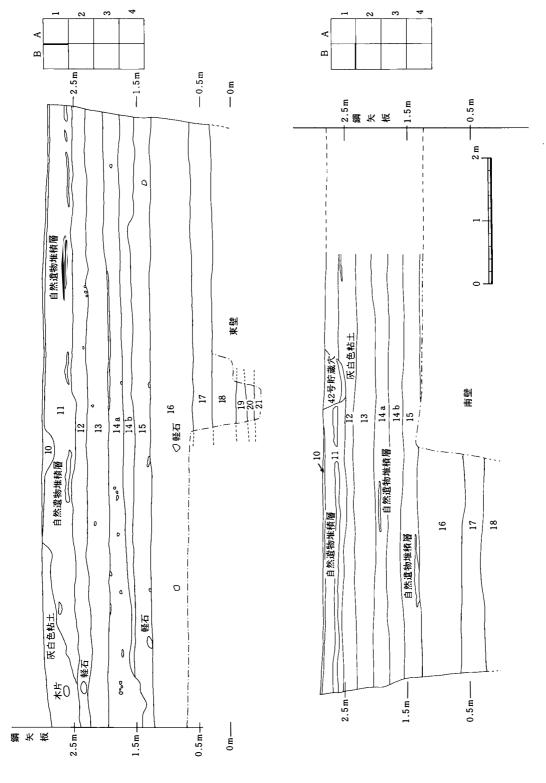
第12~16層出土 28~180 第Ⅲ章第1節 従って、この節の出土土器の報告 は28から行っている。

また、この章で報告する土層断面図は第10~21層を通して行うものであり、第11層出土土器平面・垂直分布図もこの節に纏めて提示している。



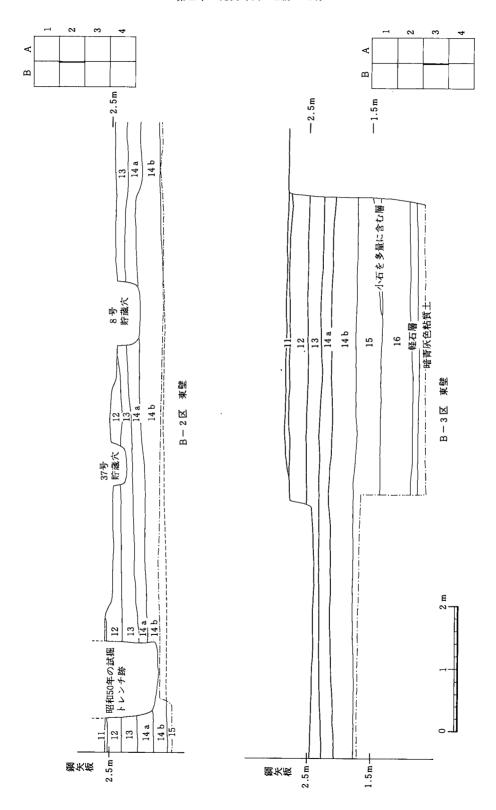
第8図 A-1区 中央壁·南壁土層断面図

第1節 第12~21層の遺物



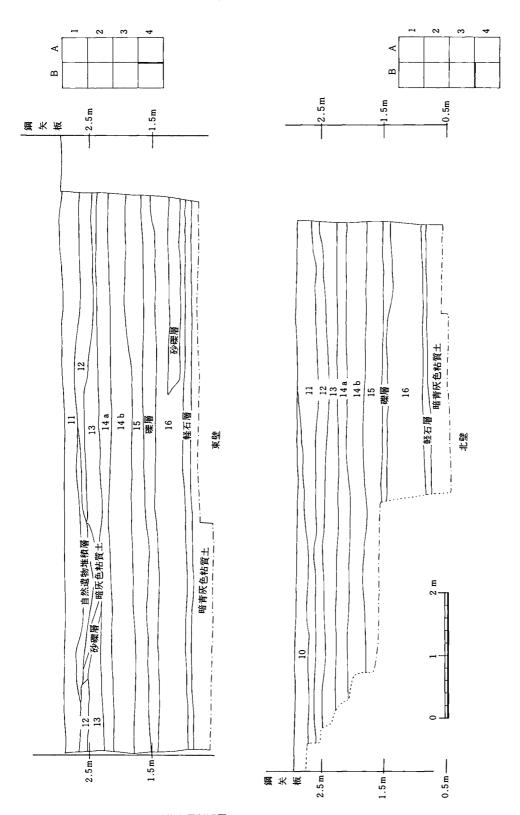
第9回 B-1区 東壁・南壁土層断面図

第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物

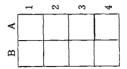


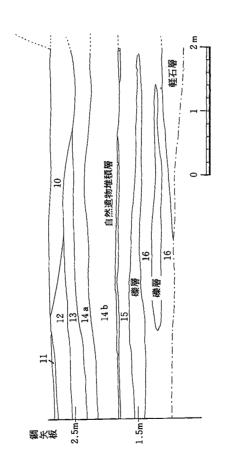
第10図 B-2·3区 東壁土層断面図

第1節 第12~21層の遺物

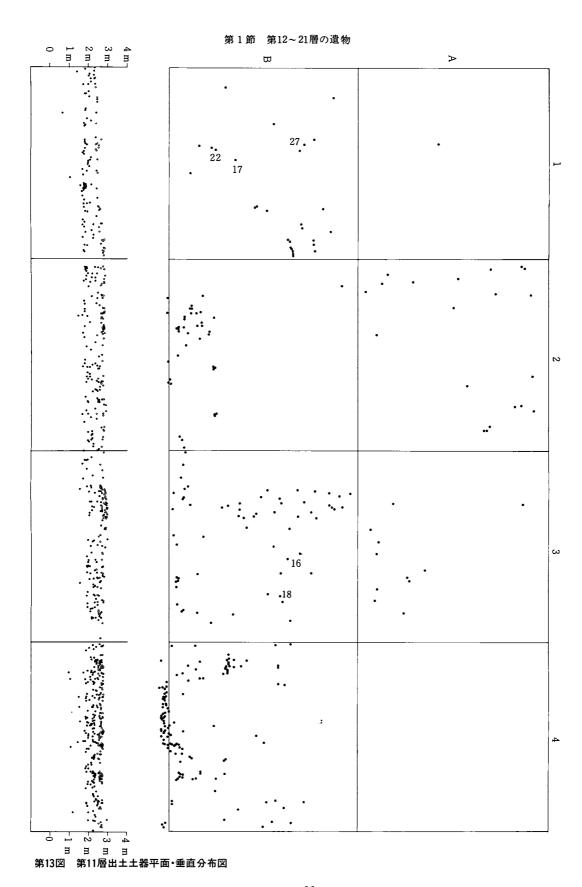


第11図 B-4区 東壁・北壁土層断面図





第12図 A-4区北壁土層断面図



第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物 52 • 28 2 ယ 33 40 • • 37 • •

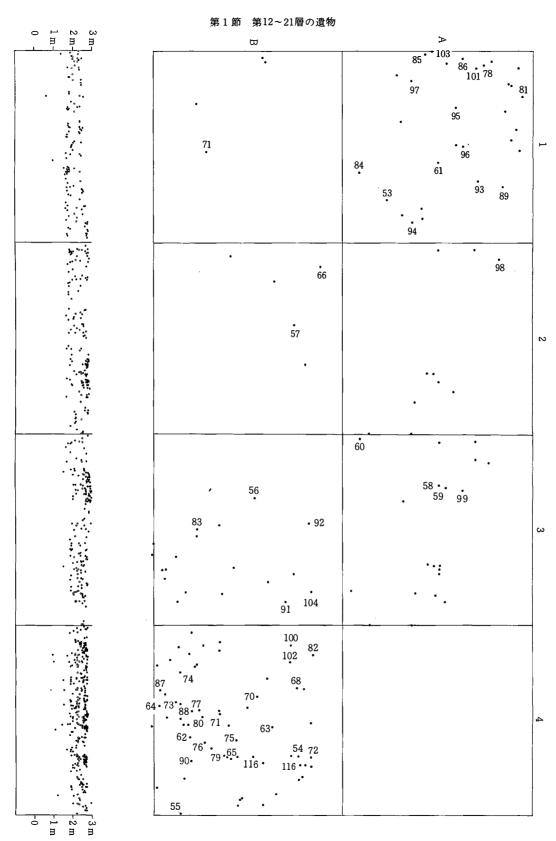
第14図 第12層出土土器平面・垂直分布図

4 m

-1 m

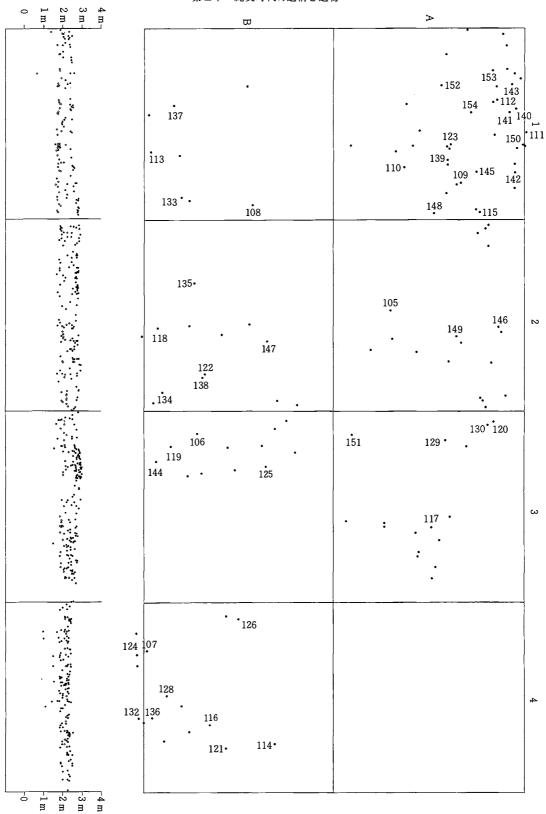
32

29

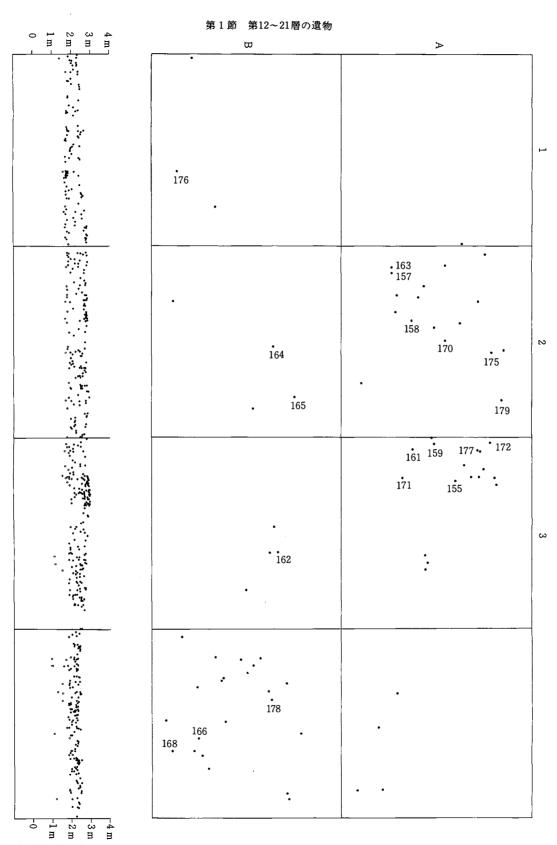


第15図 第13層出土土器平面・垂直分布図

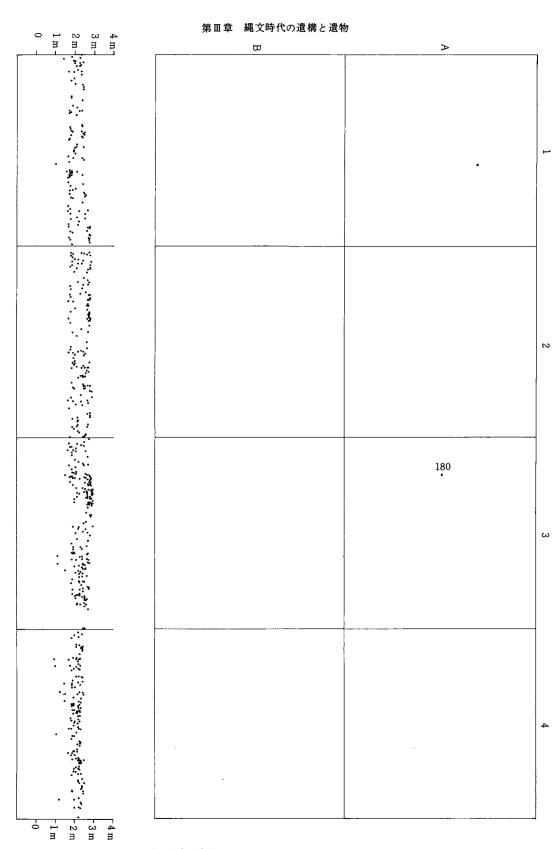
第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物



第16図 第14層出土土器平面・垂直分布図



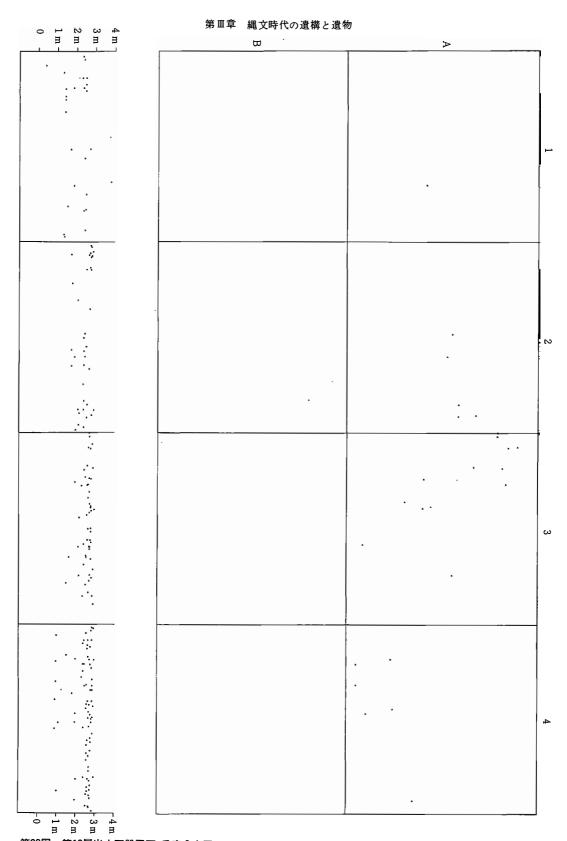
第17回 第15層出土土器平面•垂直分布図



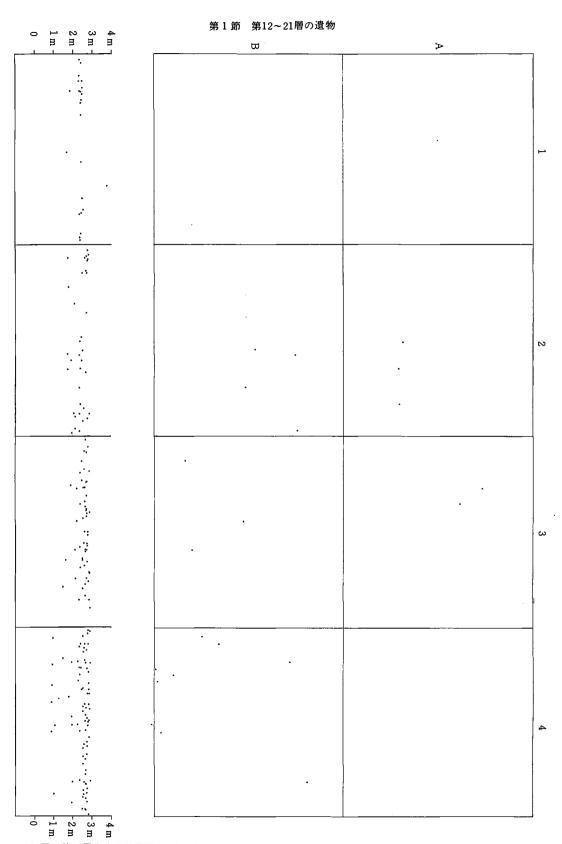
第18図 第16層出土土器平面・垂直分布図

| 0 1 2 3 4             | 第1節 第12~21層の遺物 |          |
|-----------------------|----------------|----------|
| B B B B               | ₩              | <b>→</b> |
| :.<br>:.<br>:         |                |          |
|                       |                |          |
|                       |                |          |
| · •                   |                |          |
| :<br>: :<br>: :,<br>: |                |          |
|                       | 5.             |          |
|                       |                |          |
|                       |                |          |
|                       |                |          |
| 4 m                   |                |          |

第19回 第11層出土石器平面•垂直分布図



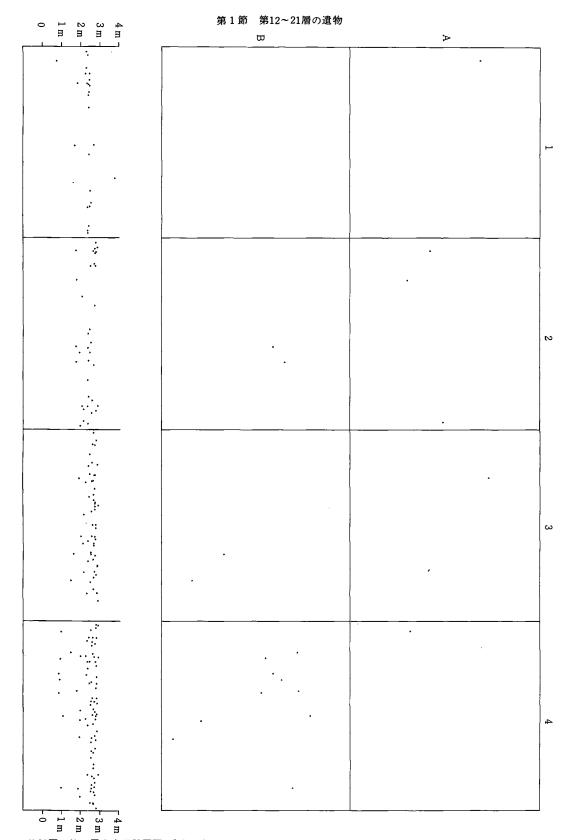
第20図 第12層出土石器平面・垂直分布図



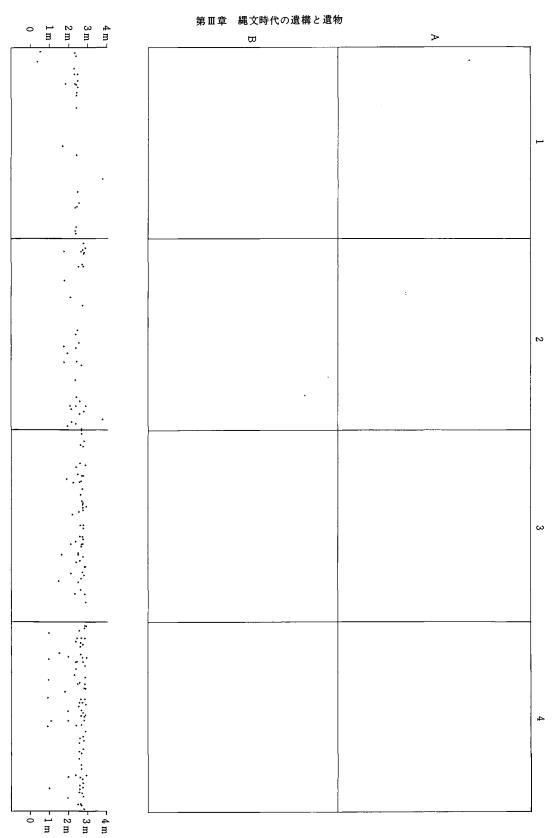
第21回 第13層出土石器平面•垂直分布図

第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物 2 -2 m -1 m

第22図 第14層出土石器平面•垂直分布図



第23図 第15層出土石器平面•垂直分布図



第24図 第16層出土石器平面・垂直分布図

## 2. 出土土器第 I • I 群土器 (第25図~第37図)

ここで取り上げる12層から16層より出土した土器は、出土状況の所でも述べたとおり外面の文様には大きな違いが認められる。しかし、総ての土器の基本的には内器面及び外器面に条痕による器面調整が施されている土器であることから、この条痕調整の土器を総称して第 II 群土器として取り扱った。ただし、外器面の文様の違いにより細かく分類は可能である。また、各層には1~2点の押型文土器が含まれるが、ごく少数の出土であることから別にせず第 II 群土器と同じ図版の最後に掲載し、この押型文土器が縄文早期の土器で時期的には轟式土器に先行することから第 I 群土器として群分けを行い説明を加えた。なお土器の説明は、本来なら分類ごとに行うべきであろうが、ここでは出土層位を重視しその出土層位ごとに行った。

## 「第 I 群土器」

第 I 群土器である押型文土器は、出土量が少なくすべてが楕円押型文であることから細分はせず、各層から抽出し個々に説明を加えるものである。

第26図52は、12層から出土したもので、外面に粗大化した大型の楕円押型文を横走させた深鉢 胴部片である。器壁は、1.3㎜を測り厚手である。第31図103と104の2点は、共に13層より出土したもので、103は、深鉢の胴部片で外面に楕円押型文を施したものである。104は、平底になる 深鉢の底部片で、底の部分近くまでやや小型の楕円押型文を斜走させている。第35図153と154の2点は、共に14層から出土したもので、104は深鉢胴部の外面に楕円押型文を横走させたもので、器壁は薄い。154も、深鉢胴部の外面に非常に小さな楕円押型文を施文したものである。いずれの土器も、激しくローリングを受けているためかなり磨滅しており調整などは不明である。このことから、第 I 群土器である押型文土器は上で少々離れた生活地より流されてきたもので、混入と見て間違いないものと考えられる。

#### 「第Ⅱ群土器」

次に、器面に条痕による調整を行った第 II 群土器は外器面の文様の違いにより大きく五つに分類し、それらをさらに細分した。なお、この分類では、口縁形態、胴部形態などの器形の違いについてはあまり考慮していない。

A類 刺突による施文

B類 押引きによる施文で、それを文様の形状によりさらに細分した。

- 1類―沈線状のもの
- 2類―刺突状のもの
- 3類―幅広の押引き文
- C類 沈線による施文

#### D類 無文の口縁部

- 1類―口唇部に刻目を施すもの
- 2類―口唇部に刻目が無いもの
- E類 隆帯による施文で、隆帯の断面でおおまかに二つに分け、それをさらに細分した。
  - 1 a 類―口縁部にあり隆帯が横走し口唇部に刻目を施すもの
  - 1 h類─□縁部にあり降帯が横走し口唇部に刻目が無いもの
  - 2類一口縁部にあり隆帯が横走し隆帯間の幅が狭いもの
  - 3類―口縁部にあり横走する降帯と波状になる降帯が併用されるもの
  - 4類―口縁部にあり縦または斜方向の隆帯が施されるもの
  - 5類―口縁部にあり隆帯が重弧文状になるもの
  - 6類―胴部にあり降帯が横走するもの
  - 7類―胴部にあり隆帯の縦と横方向を組み合わせたもの
  - 8類―胴部にあり隆帯が重弧文状をなすもの
  - 9類―胴部にあり隆帯と沈線文を併用するもの
  - 10類―胴部にあり隆帯に刻目を施し沈線文を併用するもの
  - 11類―胴部にあり隆帯に刻目を施し押引き文を併用するもの
  - 12類―胴部にあり粘土粒を貼り付けるもの
  - 13類―隆帯の断面がカマボコ形で隆帯に刻目を施すもの
  - 14類―隆帯の断面がカマボコ形で隆帯に刻目が無いもの

以上の様に第Ⅱ群の条痕調整の土器を分類し、以下この分類を踏まえながら層ごとに土器の説明を行うものである。

## 12層出土の土器 (第25図28~第26図52)

28は、直口して立ち上がる深鉢の胴部片で、外面に細い沈線状の押引き文により横方向に三本単位の区画を施した後、区画帯の中に区画帯と同じ施文具による押引き文で綾杉状に充填するもので、B-1類に属するものである。器面調整は、内外面共に貝殻による条痕調整で、外面は条痕の後ナデている。29~32は共に、直口する深鉢の口縁部で器壁が厚いのが特徴である。29・30は口唇部が丸く、31・32は口唇部にナデて平坦面を作り出している。29・30・32は、内外面共に条痕調整のみで口唇部に刻目を施すことからD-1類に分類した。31は、内外面に器面調整の後調整具と同じもので波状に文様らしきものを施文している。30は、器形の特徴は同じであるが口唇部に刻目が無いことからD-1類に分類した。33・34は、直口する口縁部に断面が三角形を呈した隆帯を貼り付け横走させて、口唇部に刻目を持つものでE-1 a 類に属する。いずれも、口唇部はナデて平坦面を作り出している。34の刻目は、竹管状の施文具により刺突したもので、隆帯の数

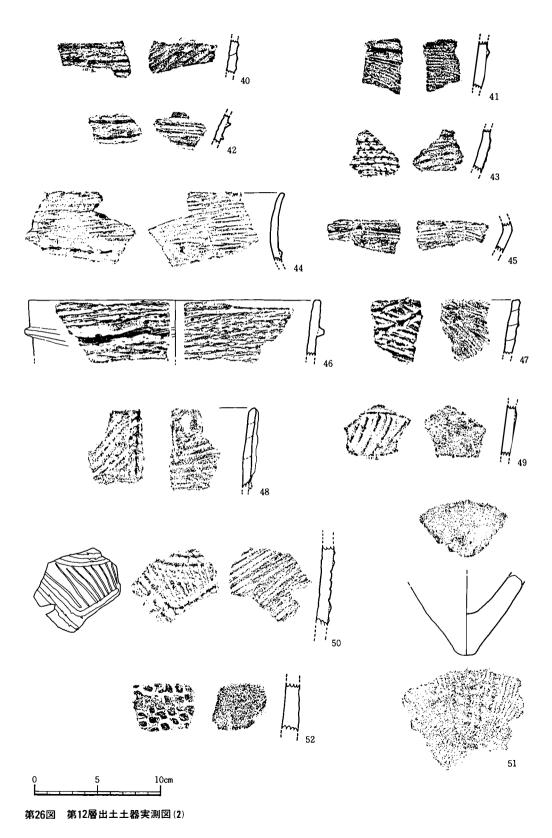
は4条である。器面調整の条痕は粗い。また、33は若干内湾気味になることから頸部が締まる形 態になるものかもしれない。35~37は、いずれも直口する深鉢の口縁部に断面が三角形を呈した 隆帯を数条貼り付け横走させ、口唇部はナデて平坦にしているが刻目は施さないもので、分類で は E-1 b 類に属するものである。いずれも、器面調整である条痕は粗く貝殻ではなく棒状のも のを使用したようである。39~43は、深鉢の胴部に断面が三角形を呈した隆帯を数条貼り付け横 走させたもので、分類ではE-1a類又はE-1b類に属するものと考えられる。41だけが、器 面調整は丁寧に行われこまやかであり他のものは粗いのが特徴である。また、39は横走する隆帯 間にヘラ状工具により斜方向に浅い条線を入れている。44は、頸部でいったん屈曲した後口縁部 が外反しながら開くもので、膨らむ胴部から頸部にかけて隆帯を貼り付け横走させている。口唇 部は、丸くなる。E-5類に属するものである。45は、内側に屈曲する深鉢胴部片で、文様は有 しないが44と同じく頸部付近に隆帯がつくものと考えられ、おそらく器形も同じであろう。46は、 復原口径23.4cmを測る鉢の口縁部片である。口縁直下に、断面がカマボコ形を呈した隆帯を貼り 付け横走させ、口唇部はナデて平坦にしているが刻目は無い。器面調整の条痕は粗いのが特徴で、 分類ではE-14類に属するものである。47は、直口する口縁部に半円状の隆帯を貼り付けたもの で、口唇部はナデて平坦にしているが刻目は無い。器面調整の条痕は粗いのが特徴で、分類では E-5類に属するものである。48・49は共にE-4類に属するもので、48は縦走する隆帯を貼り 付けた直口する深鉢の口縁部で、口唇部は丸くなり刻目は施さない。49は斜方向に隆帯を貼り付 けている深鉢の口縁部近くの破片である。50は、外傾しながら直口する深鉢胴部片で、胴部には 2本またはそれ以上を単位とした隆帯を横走させたものとV字型にしたものを組み合わせて区画 した後、細いシャープな沈線を中に斜方向に施したものである。裏には、やや幅広の条痕調整を 行っている。分類では、E-9類に属するものである。51は、内外面を条痕調整した深鉢の底部 片で、器壁は厚く尖底である。土器は若干ローリングを受け磨滅している。

ここで、この12層出土の土器について若干まとめてみたい。まず、この層出土の土器で一番特徴的なものは、28の細いシャープな沈線状の押引き文で横方向に3本単位で区画帯を設けた後、その区画帯の中に同じ押引き文で斜方向に綾杉状に文様を充塡した土器で、内面には貝殻条痕による調整痕が残っている。この文様の施文方法は、上層の11層より中心的に出土した曽畑式土器と同一で、押引き文と沈線文の違いはあれ、この土器の押引き文は細くて深いことから、一見すると曽畑式の沈線に非常に類似しているということである。この土器は、1点の出土であるが曽畑式土器とのつながりの可能性を十分考えさせられるものである。また、50も2本単位の隆帯で文様を施したあと隆帯間に、細いシャープな沈線を斜方向に充塡するという施文方法は一致している。また、13層・15層・16層に少なく14層とこの層に比較的多く出土している土器がある。それは、厚手で無文の口縁部に刻目を施したもので29~32がそれに該当する。これは、29・30・32が松本編年の轟A式土器に、31条が条痕の上に波状文を施すことから轟C式に該当するものと考えられる。従来、轟式土器の中でも古手の土器と認識されていたものが、文化層の最上層から多く出土し

第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物



第25図 第12層出土土器実測図(1)



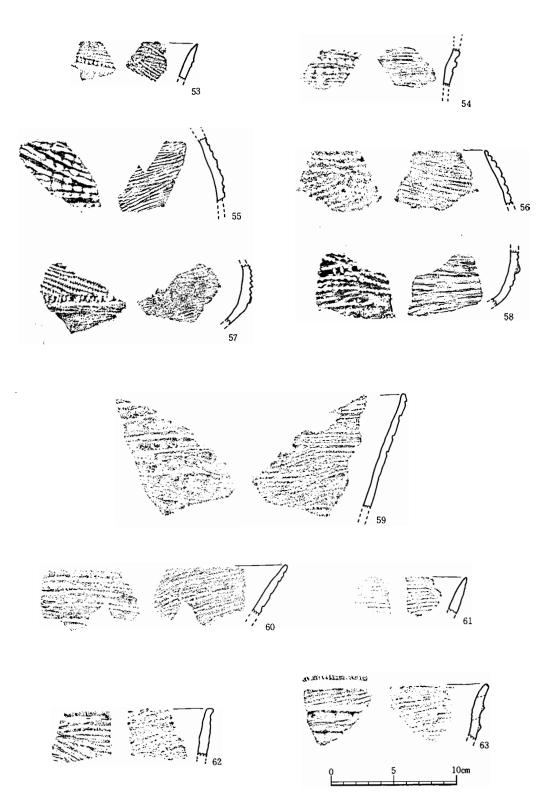
<del>- 42 -</del>

ているものである。この傾向は、従来古いとされてきた轟A式土器自体の認識を考えなおさなけらばならない時期にきているのではなかろうか。しかし、この層で最も中心的な土器で、出土土器の中の多くの比率を占めるのは、やはり直行する口縁部に隆帯を横走させ貼り付けたもので、松本分類で轟B式の1類に分類されているものである。

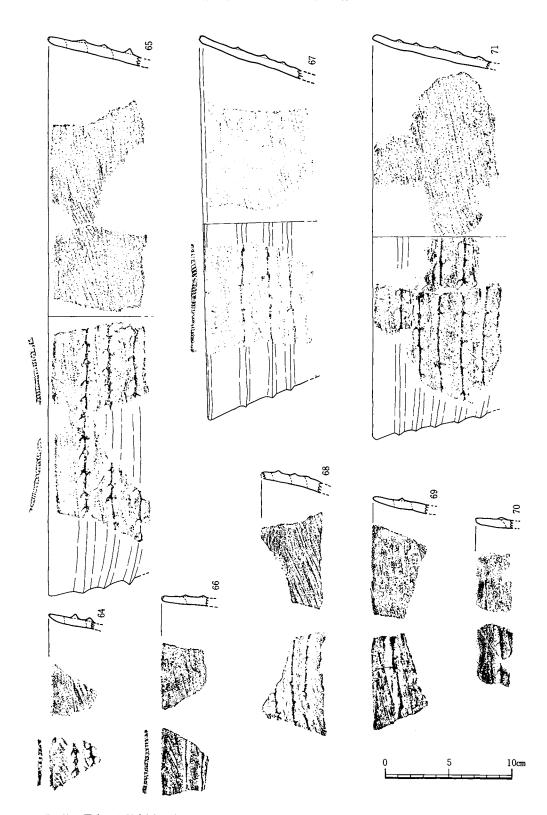
## 13層出土の土器 (第27図53~第31図104)

53は、大きく開く鉢の口縁部片で、口縁直下に刺突文が横方向に巡り刺突の部分に隆帯がある のかどうかは不明である。分類では、A類に属する。54・55は、棒状工具による幅広の押引き文 を横走または斜走させるもので、54が屈曲する頸部付近の破片、55が膨らむ胴部付近の破片であ る。分類では、B-3類に属するものである。共に、頸部でくの字状に屈曲し胴部が膨らむ器形 の深鉢であろうと考えられる。56は、内湾する口縁部に先の尖った施文具により刺突状の押引き 文を施し、横と斜方向の押引きを組み合わせて複合鋸歯状にモチーフしたもので、A類に属する ものである。57・58は、共に膨らむ胴部に刻目を施した隆帯を横走させ、隆帯の上下に先端の尖 った施文具により刺突状の押引き文を斜方向に施している。なお、施文順序は降帯を貼り付けた 後刻目を入れ、その後に押引き文を施していることから、隆帯は区画帯の役目をもち押引き文で 充塡したものであろう。分類では、E - 11類に属するものである。 共に器形は、 胴部が膨らみ頸部 がくの字状に屈曲した後口縁部が大きく開く深鉢と考えられる。59・60は、共に直口し大きく開 く口縁部に数条の沈線を横走させたもので、器壁は薄く沈線の間隔は1cm前後、59は沈線の数が 5本で60も同じ数と考えられる。共に、沈線が途中で途切れいる部分が認められることから短沈 線と考えられる。分類では、C類に属するものである。なお、59の外面には煤が多量に付着して いる。61・62は、共に内外面条痕調整のみで直口して開く深鉢の口縁部で、62は条痕が粗く端部 はナデて平坦にしており、また61の端部は尖っている。小破片のため隆帯が付くかどうかは不明 であるが、ここでは一応D-2類に分類しておく。63~67は、直口して開く深鉢の口縁部に数条の 隆帯を横走させ、口唇部に刻目が施されるものでE-1a類に属する。刻目は、すべてヘラ状の ものを使っており細くてシャープである。口唇部は、64のみが尖っており、残りは総てナデて若 干の平坦面を作っている。また、口径は65が44cm、67は31cmを測る。68は、口唇部を欠失するた め刻目を施すかどうかは不明であるが、隆帯を数条横走させた深鉢の口縁部片で、口縁部が若干 内湾気味に立ち上がってきており、おそらく頸部が締まる器形になるものと考えられる。一応E - 1 b 類に分類しておきたい。69~73は、深鉢で直口する口縁部に数条の隆帯を横走させ、口唇 部に刻目を施さないもので、E-1b類に属するものである。73のみが、端部をナデて平坦面を 作り出しているが、残りは総て端部は尖っている。口径は、71が31.7cm、73が30.8cmを測る。74 ~83は、総て口唇部を欠失するため刻目を施すかどうか不明のもので、口縁部付近の破片で数条 の隆帯を横走させていることから、E-1a類かE-1b類のいずれかに属すると考えられるも のである。74・76~80・83は、直口してやや開く器形になるもので、75と82は、内湾する口縁部

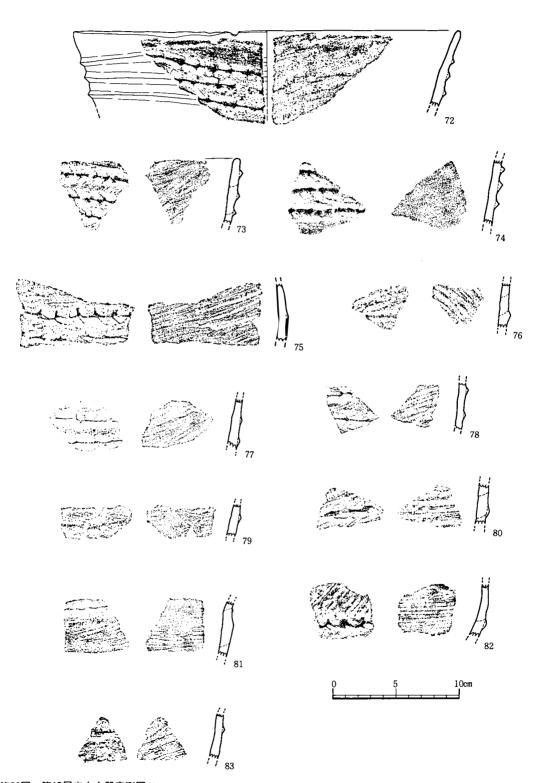
第1節 第12~21層の遺物



第27図 第13層出土土器実測図(1)

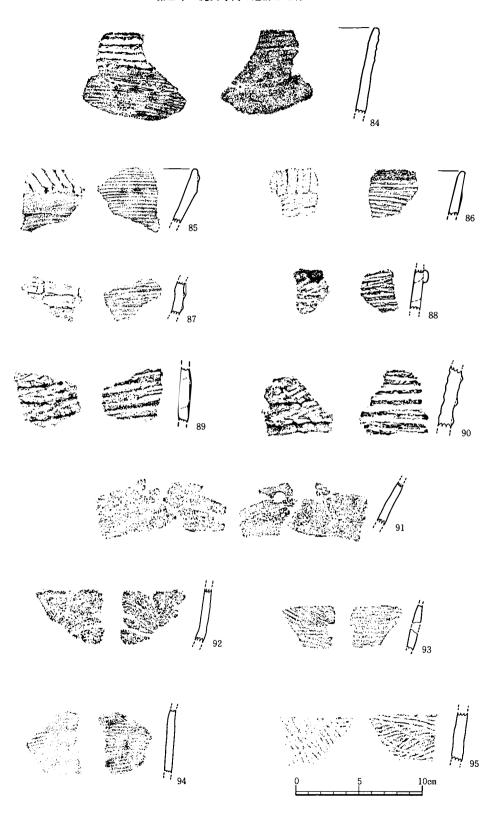


第28図 第13層出土土器実測図(2)

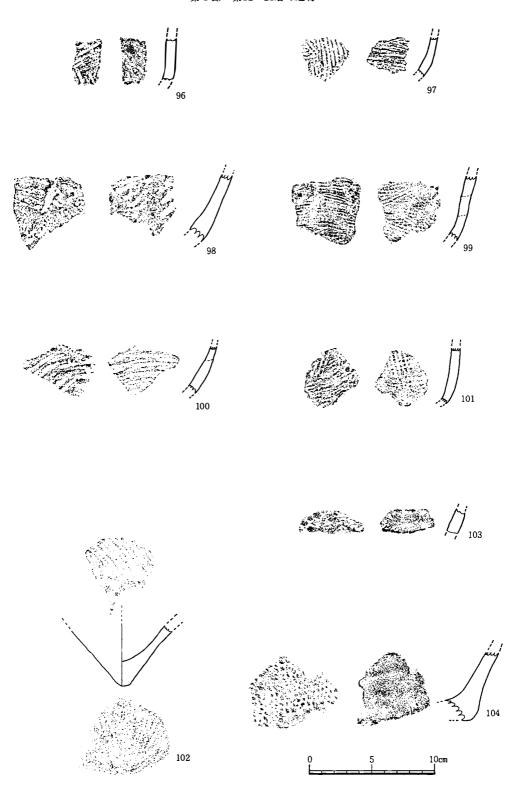


第29回 第13層出土土器実測図(3)

第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物



第30回 第13層出土土器実測図(4)



第31図 第13層出土土器実測図(5)

で頸部が締まり胴部が膨らむ器形のものと考えられる。81は、頸部で若干屈曲した後口縁部が外 反しながら外側に開く器形のものであろう。84は、直口しやや開く口縁部に5条の細いシャープ な隆帯を横走させたもので、各隆帯間の幅が5㎜前後と狭いのが特徴で、E−2類に属するもの である。また、口唇部に刻目は無く、ローリングを受けており磨滅が著しい。85は、E-4類に 属するもので、外傾しながら立ち上がってきた深鉢の口縁部で、口唇部直下にシャープな隆帯を 斜走させたものである。隆帯を貼り付けた部分は、幅1.7cm程ヘラ状工具によりナデて 面を作り 出している。86は、直口しながらやや開き気味に立ち上がる口縁部に、口唇部からシャープな隆 帯を縦位に貼り付けさらにその下に隆帯を横走させている。一応E-4類に分類した。87は、頸 部が締まり口縁部が開く器形になる鉢と考えられるもので、若干膨らむ胴部にシャープな隆帯を 縦と横を組み合わせて貼り付けたもので、E-7類に属するものである。88は、隆帯を横走させ 貼り付けている胴部片であるが、他の隆帯文土器は粘土を指でつまんで整形しシャープな隆帯を 作りだしているのに、この土器は粘土を押した様な整形をしているため隆帯がぼってりしたもの になっているのが特徴である。口縁形態も不明なことから一応E-1a類またはE-1b類に分 類しておきたい。89・90は、基本的にはシャープな隆帯を横走させることからE-1類に分類で きるものであるが、共に器壁が1cm前後と厚く、器面調整である条痕を先端の丸くなった幅の広 い棒状工具を使い調整を行っているのが特徴である。91~93は、共に深鉢または鉢の胴部片で文 様・器形等に何等特徴は無いが、胎土に多量の滑石粒を含んでいるのが大きな特徴である。91・ 92は、ローリングを受けていることから磨滅が著しく調整はよく分からないが、条痕らしきもの が観察出来ることから、内外面共に貝殻条痕による調整と見て間違いないものと考えられる。93 は、若干ローリングを受けているが、内外面に貝殻条痕による調整痕が明確に残っている。また、 外面からの補修孔が認められ破片上部の器壁が薄くなることから口縁部にかなり近い部位であろ う。3片とも、器壁の厚さが6㎜前後と薄いのも特徴である。94~101は、すべて内外面に条痕 による器面調整を施した深鉢または鉢の胴部から底部にかけての破片である。明確な底部片は無 いが、特に96~101は断面の形状により底部にかなり近い部位と考えられる。ただし、98は他の 土器に比べ器壁が底部近くになるにしたがい厚くなり、傾きも違い胴部に上がるにしたがい少し 広がることから尖底になる可能性も十分考えられる。102は、内外面に条痕調整を施した底部片 で尖底になるものである。

次に、13層出土の土器について若干まとめてみたい。まず、何と言っても押引き文を施した土器の占める割合が多いことである。B-3類に分類した54・55は、幅広の押引き文で、E-1b類に分類した57・58は刻目隆帯と併用しており、隆帯が区画帯の役目を持ちこの中に押引き文を充塡している。この類の土器はM編年ではB式の3類に分類されているものである。これらの押引き文を施した土器の器形的特徴は、口縁部の形態は不明だが、いずれも頸部で屈曲し胴部が膨らむ特徴を持ち、胴部の一番膨らむ部分まで文様を施す。ただし、56だけは口縁部が内湾し口縁直下が一番膨らむことから、浅鉢になるのであろうか。さらには、2点であるが口縁部に

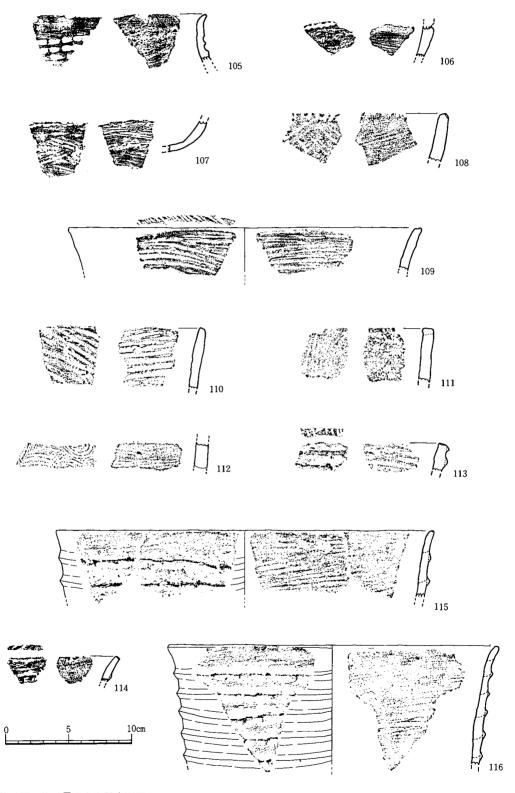
#### 第1節 第12~21層の遺物

細い沈線を1cm程の間隔をおいて5条横方向に施している。これは、隆帯を横走させた土器の文様モチーフに類似しており、隆帯が沈線に置き換えられたものであろうと解釈される。この土器と、押引き文の土器群との関連を窺い知るような土器が、上層の12層より出土した沈線状の細いシャープな押引き文で、文様モチーフが更に上層より出土する曽畑式土器に酷似したものである。また、もう一つのものは文様・器形に何等特徴はなく内外面に条痕による調整を行ったものであるが、器壁が薄く胎土に滑石を多量に含む土器群である。現在の所、轟式土器の胎土に滑石を含む例の報告は無く、曽畑式土器を初現とし曽畑式土器の大きな特徴として捉えられてきたものである。これらの土器群は、曽畑式土器と正式土器との関連を考える上で、非常に重要なキーポイントとなるもので、出土量は少ないが曽畑式土器の出自を求め轟式土器から曽畑式土器への展開を考え、この問題に答を導き出す材料の土器群として重要である。しかし、この層でも出土土器の大半を占めるのは、器形が単純でその口縁部から胴部にかけて数条の隆帯を横走させる土器群で、報告ではE-1類に分類したものである。これらの土器群は、M編年ではB式の1類に分類されている。この層からも、明確な底部片は出土していないが、傾向として見れば丸底として考えられるものは一般的に器壁が薄く、尖底として考えられるものは厚いようである。

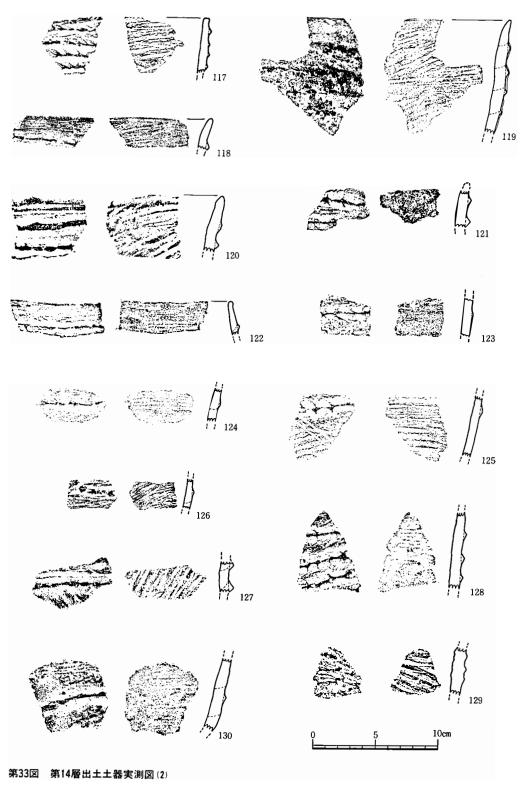
(M編年:松本雅明・富樫卯三郎編年)

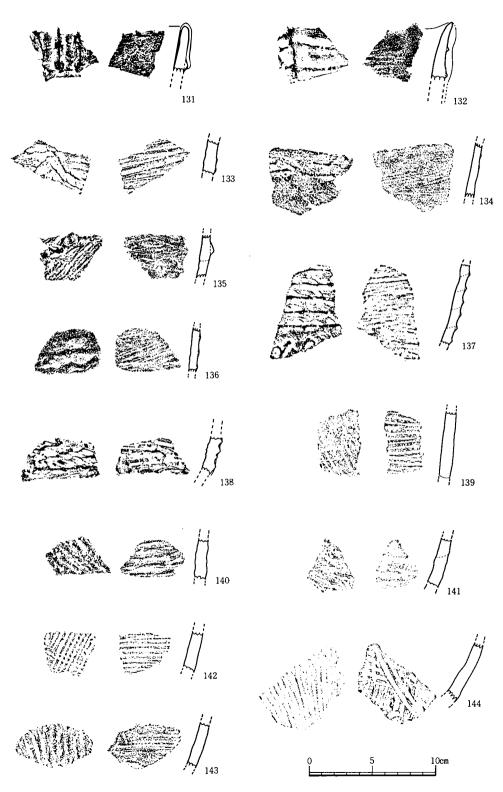
#### 14層出土の土器 (第32図105~第35図154)

105~107は共に、外面に押引き文を施文したものである。105は、内傾しながら立ち上がって きた後外反する口縁部に、先の丸い棒状の工具を使い幅の広い押引き文を横位施文したもので端 部は丸くなる。瀬戸内的な感じを受ける押引き文で、B-3類に属する。106は、屈曲 する胴部 に幅の狭い押引き文を深く横位に施文したものである。107は、丸底の浅鉢と考えられるもので、 胴部に押引き文を浅く横位に施文している。共に、B-2類に属するものである。108~111は、 無文の口縁部で口唇部に刻目を施した108・109と刻目が無い110・111がある。前者をB-1類、 後者をB-2類に分類した。共に器壁が厚いのが特徴であるが、109だけが器壁が薄く器面調整が 丁寧であることから、下に隆帯が付くのかもしれない。また、復原口径は28.2㎝を測る。112は胴 部片であるが器壁が厚く波状の文様らしきものが認められることから、前述の土器と同じもので D類に属するものであろう。113·114は、口唇部に刻目を施し隆帯を横位に貼り付けた口縁部片 で、113は直口する口縁部で口唇部直下に隆帯を貼り付けており端部はナデて平坦面を作り出して いる。114は、口縁部が外反し、端部は113と同じくナデて平坦面を作りだしておりE-1a類に 属するものである。115~120は、口縁部に数条の隆帯を横位に貼り付け口唇部に刻目をもたないE - 1 b 類に属するものである。復原口径は、115が30.1cm、116が26.4cmを測る。115・116それに 118~120は、口唇部をナデているが平坦面は作り出していない。ただし、117だけは平坦面を作り 出している。口縁部の形態は、115・116それに118が直口しながら立ち上がってきた後、口唇部の部 分だけが若干外反するもので、117と120はそのまま直口する口縁部をもつもの、119だけは口縁形 態が他の土器とは異にしているもので、口唇部直下で若干膨らんだ後やや内湾し、その後また外反

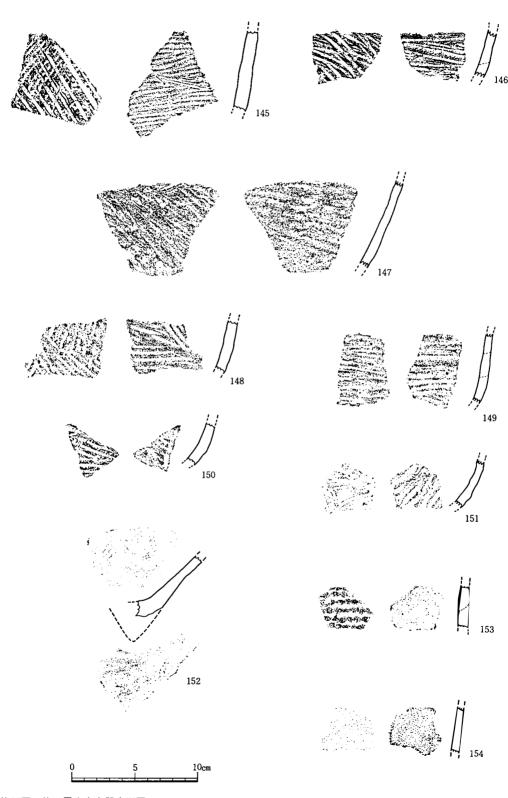


第32図 第14層出土土器実測図(1)





第34図 第14層出土土器実測図(3)



第35図 第14層出土土器実測図(4)

する器形を持ち、外面には煤が多量に付着している。121は、口唇部は欠失するがかなり近い部 分と考えられるもので、刻目を施すかどうかは不明であるためE-1類の中でaまたはb類に属 するものであろう。122は、内傾する口縁部に細いシャープな隆帯を横走させ貼り付けたもので、 口唇部に刻目は無く器壁は薄いのが特徴である。一応ここではE-1b類に分類しておく。123 ~129は、隆帯を貼り付け横走させたもので、口唇部を欠失するため刻目を持つかどうか不明な 土器で、E-1類のaまたはb類に分類できるものである。130は、傾きより胴部から底部近く にかけての部位と考えられるもので、胴部下半に降帯を貼り付け横走させていることからE-6 類に属するものである。また、底部は特徴より丸くなるものと考えられる。131と132は、共に口 縁部に横の隆帯と縦の隆帯を組み合わせたものでE-4類に属するものである。131は、隆帯を 横走させ貼り付け、上部に1.5cm程の間隔を置いて縦走させたもので、口唇部を通り越して若干 内側まで入り込む、隆帯の貼り付け順序は最初に横の隆帯の後、縦の隆帯を貼り付けている。端 部は丸くなる。132は、太い隆帯を縦方向に貼り付けた後、細い隆帯を横方向に貼り付けたもの で、縦の隆帯が突出した部分をいかし山形の口縁を作り出し、口唇部はナデて尖らしている。口 縁部が、若干外反し器壁が厚いのが特徴である。133・134は、胴部に細いシャープな隆帯を重弧 文状に貼り付けたもので、いずれも胴部から口縁部に向かって直口して立ち上がるようである。 E-8類に分類した。135~137は、横走させた隆帯を数条貼り付けた後、さざ波状になった隆帯 を1本貼り付け併用させたもので、E-3類に分類した。138は、傾きより胴部でも底部に近い 部位と考えられるもので、器壁は厚く器面調整の条痕は粗いのが特徴である。139~151は、いず れも内外面に条痕による器面調整をおこなったもので、胴部でも底部により近い部位であろうと 考えられるものである。147・149・151は、器壁の厚さが7㎜前後と薄手で、残りはすべて器壁 の厚さが1cm前後と厚手である。条痕は、そのほとんどが条痕幅がやや広く粗いのが特徴で、し かも傾きの具合により底は丸底になるものと考られる。また、すべての土器が厚さは異なるが焼 成は非常に良い。152は、尖底になる底部片である。土器は、ローリングを受け若干磨滅してい るが、条痕による調整痕が認められる。

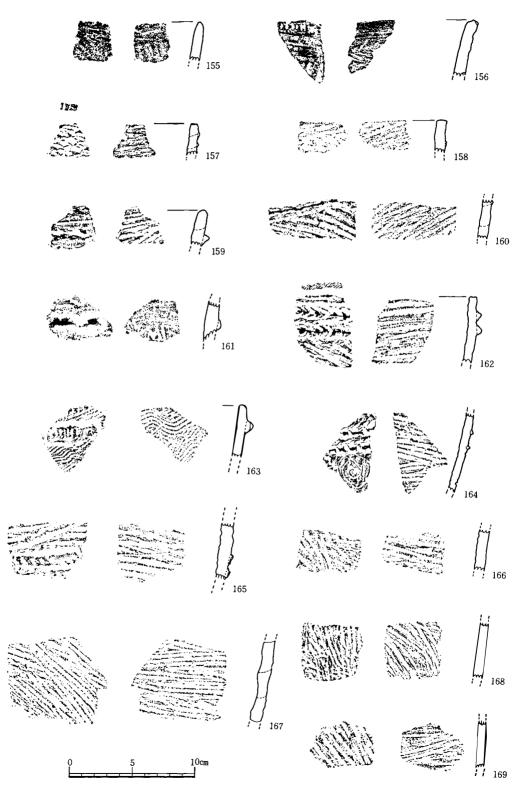
ここで、この14層出土の土器について若干まとめてみたい。この層でも、出土土器の殆どに比率を占めるのが単純な器形の深鉢または鉢と考えられるもので、口縁部から胴部にかけて隆帯を横走させていることからE-1類に分類した土器群で、M編年ではB式の1類に分類されているものである。この層で着目すべき点は上層の各層に若干数ずつの出土ではあるが、押引き文土器が入る最初の層、すなわち押引き文土器の初現がこの層に当たるということである。この層より出土した押引き文土器は、幅が広いものと幅が狭い刺突状のものとがある。文様の幅が広い押引き文土器は、口縁部片で器形は口縁部が締まり胴部に降りるに従い膨らんでいくものと考えられ、胴部から下方の形態は不明であるが、刺突状の押引き文土器の器形は、口縁部の形態は不明であるが胴部は膨らみ底部が丸底になるものと考えられ、器高が低くなりそうで浅鉢であろうか。おそらく、上記の押引き文土器とも器形は類似するのかもしれない。もう一つ、出土土

#### 第1節 第12~21層の遺物

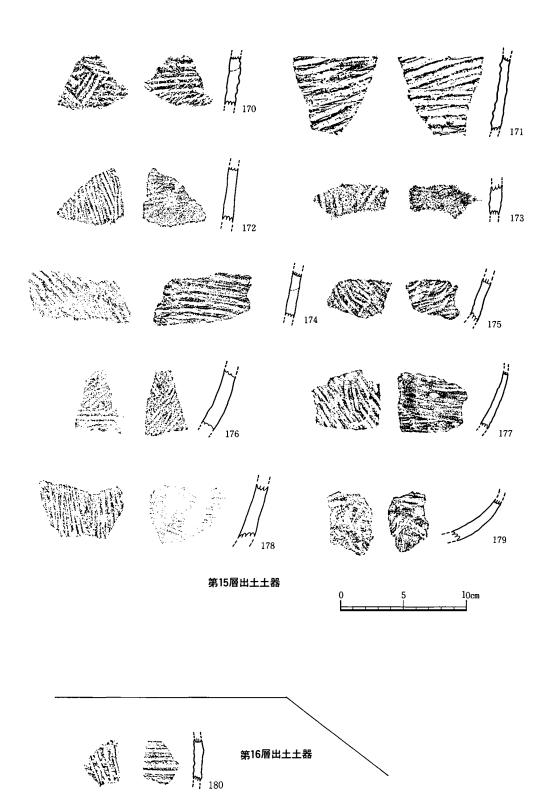
器の特徴として隆帯文土器の文様モチーフの多様さがあげられる。まず、口縁部に横走する隆帯と縦走する隆帯を組み合わせたもので、これには横走する一番上の隆帯を軸に口唇部にかけて縦走させたものと、口唇部より縦走させた隆帯を軸にしてさらに隆帯を横走させたものが見られるが、どのような文様モチーフになるのかは不明である。さらには、横走させた隆帯を軸にして半円状の隆帯を幾重にも貼り付け重弧文状の文様を構成しているもの、数条の隆帯を横走させており基本的には普通言っている隆帯文土器と変わらないが、一番下の隆帯が波状を呈しているものなども認められる。このような、隆帯文の文様モチーフの多様さはどのような意味を持つのであろうか。とにかく、このような傾向は隆帯文土器文化すなわち轟式文化の繁栄の時期を意味するのは間違いない。

#### 15層出土の土器 (第36図155~第37図179)

155・156は、共に条痕による調整痕のみを残す口縁部片である。 2 片とも、器壁の厚さが 8 ㎜ を測り厚手の方である。また、口唇部に刻目を施すことで両者共通しており、D-1類に分類され る。157は、直口する口縁部に貼り付けた隆帯ではなくヘラ状の工具により削り出した隆帯である。 口唇部は、ナデて平坦面を作り出し刻目を施している。158・159は、 隆帯を横位に貼り付けた口 縁部で、直口する口縁部に端部はナデて平坦面を作り出しているが刻目は施さないもので、E-1b類に分類できる。160・161は、口唇部を欠失するため刻目を持つかどうかは不明であるが、 隆帯を横走させ貼り付けたものでE-1類に分類されるものである。160の隆帯はシャープである が、161の隆帯は太くぼってりした感じを受けるのが特徴である。162は、若干内湾する深鉢また は鉢の口縁部片で、口唇部直下に2条の隆帯を横走させ貼り付けている。隆帯間の幅は、狭いこ とから2本の隆帯を一つの単位とした文様構成を行っているものと考えられ、さらに下部の方に も隆帯を貼り付けているのであろう。隆帯には、上下より斜方向にヘラと考えられる器具を用い 刻目状に条線を入れている。また、ナデて平坦面を作り出した口唇部には、さらにハイガイと考 えられる2枚貝の背面をそのまま押しつけ文様を施している。器面調整である条痕は、単位の幅 が広く粗いのが特徴である。163は、若干内湾気味の口縁部に、1条の断面がカマボコ形に近い ぼってりとした感じを受ける隆帯を横走させ貼り付けた後、その隆帯に刻目を施しているもので ある。また、口唇部はナデて平坦面を作り出し、その口唇部で外器面との境部分に刻目を施して いる。内外面には、クシ状のものと考えられる工具を使い、深くシャープな条線を波状に施して いる。また、焼成は非常に良好で色調が他のものとは違い内外面共に赤橙色を呈するのが特徴で、 E-13類に分類されるものである。164は、深鉢または鉢と考えられほぼ直口して立ち上がる胴部 片で、隆帯に刻目を施し断面が三角形でシャープな隆帯を横走と縦走させたものを貼り付け区画 帯を作った後、その区画帯の中に細いシャープな沈線により渦巻き状に文様を施しておりE-1 a 類に分類した。器面調整である条痕は、粗く外面はナデている。また、器壁の厚さは薄く7㎜ を測り、焼成は非常に良好なのが特徴である。165は、同じくほぼ直口して立ち上がる胴部片で、



第36図 第15層出土土器実測図(1)



第37図 第15層出土土器実測図(2)・第16層出土土器実測図

断面がカマボコ形を呈した隆帯を 2条横走させ貼り付けたもので、隆帯には刻目を施していることから E-13類に分類したものである。隆帯は、幅が広く隆帯高は低い。また、隆帯間の幅が狭いことから 2 本を単位とした区画帯を意識しているものと考えられ、他の沈線文や押引き文を併用している可能性が十分ある。器壁の厚さは 1 cmと厚く、条痕は先端の尖った棒状の器具を使い粗いのが特徴である。166~179は、いずれも内外面に条痕による器面調整を行った胴部から底部近くにかけての。破片で、175~179は特に底部近くのものですべてが傾き具合より丸底になるものと考えられる。ほとんどの土器が、器壁は薄く焼成が非常に良好で条痕が粗いのが特徴である。しかし、173と175の土器だけはやや器壁が厚く、焼成は不良でもろくなっており他の土器と異なっている。この二つの土器は、押型文土器の胎土に類似しているようである。

ここで、この15層出土の土器について若干まとめてみたい。まず、この層より出土した土器の 大きな特徴は上層の14層まで出土していた土器で、その出土土器の大半を占めていた単純な器形 の深鉢で、口縁部から胴部にかけて隆帯を貼り付け横走させた土器群、つまりE-1類に分類し たものでM編年ではB式1類に属する土器群が極少数の出土でほとんど含まれないということで ある。ただし、この層から出土した土器の固体数が少ないのも考慮しておかなければならないで あろう。かわりに、この層で注目されるのは基本的には隆帯を口縁部から胴部にかけて貼り付け 横走させて、その隆帯に細い鋭利な刻目を入れたものである。隆帯の断面は、三角形のものとカ マボコ形を呈したものがあり、器形は全体を窺い知れるものはないが単純な形態を呈した深鉢と 考えられる。さらには、この刻目を施した隆帯の他に164のように隆帯で作った区画帯の中に、 沈線など他の文様を併用し充塡しているということである。162と165も、破片であるためよく分 からないが、2本の隆帯間が他のものに比較すると狭いことから、どうも2本の隆帯を一つの単 位とした区画帯と考えられ、区画帯の中に他の文様で充塡している可能性は十分ある。163は、 土器の説明の中にも触れたがこの中では異質な土器で、色調が赤橙色で調整がクシ状のものと考 えられる工具で波状文様に変化させながら調整している。他の地域からの流入土器の可能性が考 えられる土器である。この層から出土の、胴部片を含めた全体の土器の特徴は、焼成が非常に良 好で、調整が非常に粗く調整具は貝殻でなく先の丸い棒状工具で行っているものと考えられるこ とである。

#### 16層出土の土器 (第37図180)

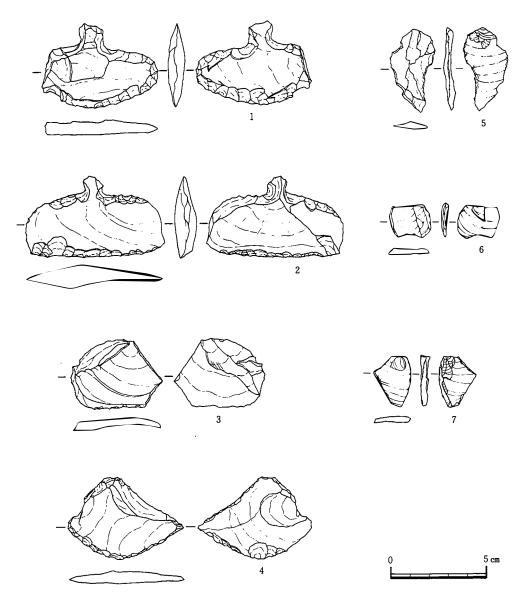
16層出土の土器は、2点だけでありそのうち1点は細片であることから1点だけ図示した。しかし、もう1点の方も内外面が条痕による器面調整を行った胴部片である。

180は、胴部片で器壁が 6 mmと非常に薄いのが特徴である。器面調整は、内外面共に丁寧な条痕で、外面は横方向の後斜方向に、内面は横方向である。調整具は、 2 枚貝の複縁であろう。

## 3. 石 器 (第38図1~7)

1・2は石匙であり、出土層は第17層と15層である。双方とも良質の安山岩の剥片を素材としている。前者は打面は残しているが、面取り作業を行うなど丁寧な仕上げである。刃部は押圧剥離を交互に施している。後者も細かな剥離を加えて刃部を形成している。

3·4は不定形の安山岩の剥片の縁片に細かな剥離を加えており、スクレーパーとできる。5~7 は良質の黒曜石の剥片で何れも細かな使用痕が残されている。



第38図 第17~12層出土石器実測図

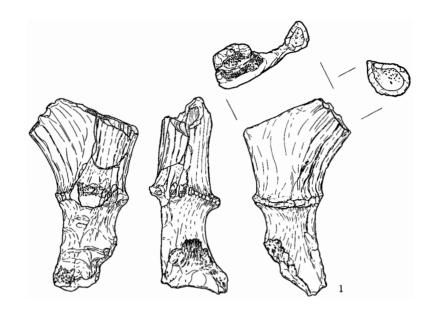
# 4. 骨 角 器 (第39図1~第40図5)

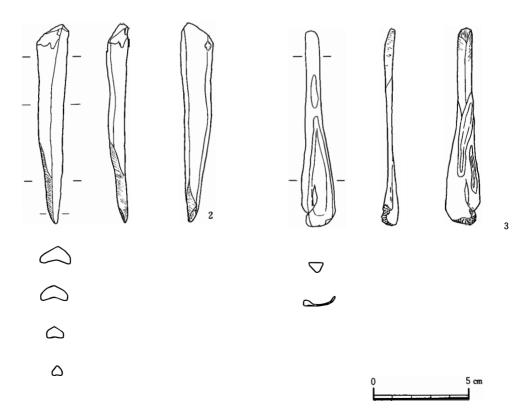
今回の調査では、骨角器の出土点数は少なく13層に4点、下層の14層に1点の合計5点だけであった。縄文時代前期の遺物を含む第12~16層の各層は、基本的にはシルトを含む砂礫層であり、水分を適量に含むことから木片・木の葉・種子類などの自然遺物の保存状態が非常に良好である。したがって、これらの自然遺物に比して、より硬質である骨角器はさらに良好に残されるはずである。しかし、今回の調査では出土点数が少なく、本来的にこの場所に残されない理由があるのであろう。まずは、第12~16層は生活に直接関連した場所ではなく、周辺より土砂が流れて堆積し、その中に土器・石器・骨角器などの人工遺物が混入した二次堆積の場所と解釈できよう。そして、縄文時代前期には鹿角器そのものの使用が少なかったことを示すのか、もしくは、遺物の供給地が鹿角器を使用・保管する場所とは違った場所であったのだろうか。

- 1 B-3区の13層より出土したもので、鹿角の基部の部分である。この鹿角製品は、鋭利な道 具を使い、最初の枝分かれ部分で切断と折り取りを施している。2カ所にきれいな切断面を確認 できる。また釣り針や銛などの漁撈具を作った可能性があることを示唆してくれる資料である。 なお、頭蓋骨の一部が残り、落角ではない。
- 2 A-3区の13層中より出土している。ローリングを受け磨滅や剥離が著しい。長さ10.4cm・幅1.8cm・厚さ9mmを測る。おそらく中型獣の四肢骨と判断される。両端を打ち欠いた後、一方をさらに細かく調整し、磨いたものである。先端を尖らせ単純な形態を呈する刺突具であろう。
- 3 A-1区の13層中より出土したものである。この骨角器も、2と同様中型獣の四肢骨を利用したものであろう。骨角器は、長さ10.3cm・幅1.8cm・厚さは基部が5 mmで先端部が1 mmを測り、形態はスプーン状を呈している。基部の方には擦痕が観察できることから、全体を磨いて形を整えているようである。先端部は、広く中央部がくぼんでいることからスプーンとして使用したものであろう。
- 4 同じく A-1 区の13層中より出土したものである。先端が尖り側縁部に人為的と思われる剥離痕が認められることから、一応骨角器とし刺突具とできよう。基部を欠失した状態で、長さ6.7 cm・幅1.5 cmを測る。
- 5 A-3区の14層中より出土したものである。剥離痕が認められないが、先端が尖った刺突具として取り扱った。法量は、長さ11.1cm・最大幅1.5cm・厚さ 6 mmを測る。

以上骨角器を報告できたが、このほかに鋭く尖った獣骨片が出土している。これらは人工的に 施した加工痕を認めることができないので骨角器と捉えることはできないが、利器として使用さ れた可能性は強いと思われる。

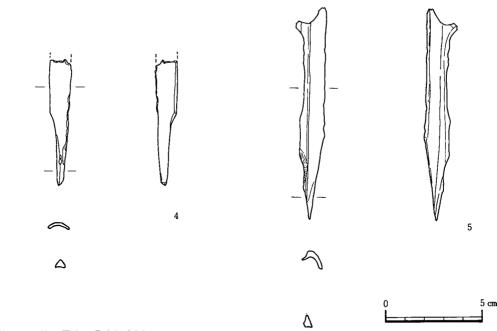
第1節 第12~21層の遺物





第39図 第13層出土骨角器実測図(1)

第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物



第40図 第13層出土骨角器実測図(2)

# 5. 流 木 類

大小さまざまの流木類の出土があったが、 $A-1\cdot 2$  グリッドでは自然木が倒れたままの状態と見れるものもあった。

これらの中には半弧をなし弓状を呈するものの出土もあったが、加工した痕跡が見られず弓製品との判断にはいたっていない。また、半割して先端が二股に分かれたもの(口絵写真参照)も見られたが用途を明確にできていない。このほか、桜の木片や、木皮類も出土しており木製品の装着に用いられた可能性が指摘される。

自然流木は表皮が剥げたものが多く流された痕跡を示している。このなかには薪の燃え残りの 状態を示すものも含まっており、当時の日常的な火の使用を偲ぶことができよう。

# 1. 出土状況

第11層は暗灰褐色砂質シルト層である。上・下層である第10・12層との分離作業を行ったが、 その判断とした事項を次表に記してみた。

南北の縦断した下位線はA-1 グリッド(西壁)北側が2.50mで、B-4 グリッド(東壁)が 2.65mであり、高低差15cmを計り南側が高く、北側へ緩やかに傾斜していることになる。東西に横断する下位線はA-1 グリッド(南壁)東側が2.56mで、B-1 グリッド(南壁)西側は2.58mとなり、むしろ僅かに高くなっている。残存状況が良好であるA-1, B-1 両グリッドから見て層の厚さは $44\sim45$ cmを計るのが本来的のようである。 $A-3\cdot4$ , B-3 グリッドでは、下位線が $2.76\sim2.80$ mと上昇し、層の厚さが10cm以下となり東・南方向に進むにつれ消失している。すなわち、地形の高まりがあったことを示していよう。

珪藻分析の結果は『浮遊性海生珪藻が検出され、海の影響の見られる汽水の環境下において堆積したと推定されている。』また、何枚もの薄い「泥炭層」が見られ、浅い皿状の窪地に木の葉や、小枝が埋った状況もあった。埋った有機質物は崩れが少ない状況を示し、粗い堆積作用ではないことや、供給地との距離が近いことなどが窺われた。

後述する貯蔵穴群はこの第11層の中位からや上位からの切り込みが見られたりしており、貯蔵 穴群が形成されるなかにも、堆積作用が進んでいたことを理解できよう。土器群は第11層そのも のに含まれているものであり、以下報告を進めるものである。概して、土器に明瞭な煤が損なわ れることなく付着したものがあったり、磨滅を受けた痕跡が少ないものもあり、水利作用で粗く 運ばれたり、磨滅が繰り返し行われたとも見られないので、本来的な土器の供給地、即ち生活居 住地に非常に近い距離であるとの判断がされる。

なお、この層の上位は不整合(波打った状態)な状況であり、粗く浸食されているものと見れる。元来、この層が現況より厚かったことに疑いはなく、その水利作用に海進現象の有無をからんだ起因の究明は、高度3.00m前後を挟み重要な視点である。

### 『遺物の平面分布状況』(第13図参照)

第11層の調査は上面で遺構検出作業を行い、確認できた貯蔵穴群の検出、調査を実施している。 遺構が検出されなかった調査区は10cmを原則として機械的に掘り下げている。出土した遺物については20分の1の縮尺でドットを落とし、高度を記録して取り上げている。遺物については大小の差異に関わらず一個一点として作業を行っており、ドットもそれに基づいている。

作成した平面分布図(第13図 第11層出土土器水平・垂直分布図)を単に読むと、遺物の平面 分布はA-2グリッド東部域を頂点として西側へ裾野が拡がる形状が捉えられる。そして、A-1・4グリッドの分布が非常にうすい。A・B-2グリッドの分布もうすいが、これは貯蔵穴群

第3表 第11層『暗灰褐色砂質シルト』層 遺物出土状況一覧表

| 項目         | 出    | 点 土   | 数   | 高度 |            | 度      | 備考    |            |       |      |    |    |
|------------|------|-------|-----|----|------------|--------|-------|------------|-------|------|----|----|
| グリッド       | 土 器  | 石器類   | 獣 骨 |    | 上位線m       | 下位線m   | 厚さ cm |            |       |      |    |    |
|            |      |       |     | 北側 | 2. 98      | 2.50   | 48    | <b>而</b> 腔 |       |      |    |    |
| A−1グリッド    | 1    |       | _   | 南側 | 2.98       | 2. 54  | 44    | 西壁         |       |      |    |    |
| A-1009F    | 1    | 3     | 7   | 東側 | 2.88       | 2. 56  | 32    | 南壁         |       |      |    |    |
|            |      |       |     | 西側 | 2.98       | 2, 55  | 43    | 用型         |       |      |    |    |
| A — 2 グリッド | 20   | 5     | 5   | 北側 | 2.58       | 2.52   | (6)   | m B#       |       |      |    |    |
| A-27591    | 20   | 3     | 3   | 南側 | 南方向約2mから消失 |        | ŧ     | 一西壁        |       |      |    |    |
| A-3グリッド    | 11   | 5     | 13  | 北側 | 2, 85      | 2.80   | 上部削平  | R#         |       |      |    |    |
| A-39991    | 11   | J     |     | 南側 | 2.84       | 2.80   | 上部削平  | 西壁         |       |      |    |    |
| A−4 グリッド   |      | 0 0   | 0   | 東側 | 東方向約1      | .5m地点で | きれる。  | 北壁         |       |      |    |    |
| A-4999F    |      |       |     | 西側 | 2.82       | 2.76   | (6)   |            |       |      |    |    |
|            |      |       |     | 北側 | 2.96       | 2.50   | 46    | 東壁         |       |      |    |    |
| B−1グリッド    | 28   | 10    | 19  | 南側 | 2.88       | 2.52   | 36    | 木型         |       |      |    |    |
| B 1999F    | 20   | 10    | 10  | 10 | 10         | 19     | 13    | 東側         | 2. 88 | 2.50 | 38 | 南壁 |
|            |      | _     |     | 西側 | 2.79       | 2.58   | 21    | 用型         |       |      |    |    |
| B−2グリッド    | 42   | 26    | 7   | 北側 | 2.58       | 2, 52  | 上部削平  | 東壁         |       |      |    |    |
| B 27791    | 72   | 20    |     | 南側 | 南方向約2mから消失 |        |       | **         |       |      |    |    |
| B−3グリッド    | ド 64 | 6     | 6 6 | 北側 | 2.88       | 2.80   | 上部削平  | 東壁         |       |      |    |    |
| D 09991    |      | 0     |     | 南側 | 2. 84      | 2.80   | 上部削平  | 木型         |       |      |    |    |
|            |      |       |     | 北側 | 2, 95      | 2. 68  | 27    | 東壁         |       |      |    |    |
| B−4 グリッド   | 120  | 129 4 | 7   | 南側 | 2.88       | 2. 65  | 23    | 木型         |       |      |    |    |
| D 40091    | 123  |       |     | 東側 | 2.90       | 2. 68  | 22    | 北壁         |       |      |    |    |
|            |      |       |     | 西側 | 2.70       | 2.60   | (10)  | 1032       |       |      |    |    |

<sup>\*</sup>出土遺物は大小に関わらず一つの破片を各一点として統計している。

<sup>\*</sup>層位での()内数字は上部が削平され、本来的でないものである。

第4表 層位識別事項一覧表

|     | 層位               | 第10層   | 第11層                                  | 第12層  |
|-----|------------------|--|---------------------------------------|---|
| 事項  |                  | 厚さ(約20㎝)   | 約40cm                                 | 約25cm   |
| (1) | 色調               | 灰 褐色 を主調とするが、赤褐色・青褐色を<br>呈する所がある。                  | 暗灰褐色、黒褐色を呈し、有機質のためより<br>暗い色調となる。      | 黄灰褐色や明褐色を呈<br>し、明るい色調である。                           |
| (2) | 砂礫の状態            | 5~6 cmの礫石が多く、<br>少し角が磨滅している。多量の砂礫であり、<br>固い層である。   | 礫石は2~3cmと比較的小さく、少量である。砂質土であり、柔らかい。    | 礫石は2~3cmと比較<br>的小さいが、多量であ<br>り砂質土が少ない。締<br>まりがあり固い。 |
| (3) | 粘質土の含有<br>及び保水状態 | 粘質土は殆ど含まれて<br>いない。水が湧き出て<br>くる。                    | 砂質土とともに、粘質<br>土がかなり含まれる。<br>幾分保水性がある。 | 砂質土に粘質土が少し<br>含まれる。保水性は弱<br>い。                      |
| (4) | 有機質の含有<br>状態     | 大きな自然木や、木の根、流木がある。流木は表面の磨滅が激しい。                    | の集合物がある。木の                            | 疎らに小さな流木、小<br>枝木、それに木の葉も<br>少量含んでいる。                |
| (5) | 出土土器             | 轟式土器、曽畑式土器、<br>阿高式土器、南福寺式<br>土器、出水式土器、古<br>閑式土器など  | 曽畑式土器。                                | 轟式土器。<br>轟-曽畑(中間式)土<br>器                            |
| (6) | 出土土器の状態          | 前・中・後期土器は小<br>破片<br>晩期土器は大きな破片<br>がある。             | 小破片。                                  | 小破片。  |
| (7) | 出土土器の磨滅の状態       | 前・中・後期土器は著<br>しい磨滅がある。<br>晩期土器は煤の付着が<br>あり、粗れていない。 | 煤は殆ど付着したまま<br>である。磨滅痕跡は見<br>られない。     | 幾分の磨滅が見られる<br>が、著しいものは認め<br>られない。                   |

<sup>\*</sup> 第11層と12層とは整合した状況を見せるが、第11層と10層とは著しい起伏が生じている。

の所在位置と重なり、貯蔵穴群形成時の攪乱により生じたものとの理解ができる。

これらの分布状況は石器の分布にも同様の現象が現れ、更に下層にあたる第12~15層の土器・石器の分布状況も同じ傾向が示されている。そして、土器を見ると何れも小破片であること、接合する点数が少ない特長も述べられる。更には土質の状況から充分残りえる木器類や骨角器等の生活用具が殆ど出土していないこともあり、生活そのものの位置とは異にしていると捉えるべきであろう。先に記した堆積状況とも併せると、第11層に含まれる遺物は、そう離れてはいない当時の生活居住地から、自然作用によって小さな土砂と共に運ばれたものと判断することが最も妥当であろう。

遺物分布の少ない  $A-1 \cdot 2$  グリッドについて、A-1 グリッドから北方向へ傾斜して行くため、分布が途切れるものと理解できるし、B-1 グリッド北側域でも同様の傾向がある。A-4 グリッド域は逆に地形が高まる傾向があり、本来的には包含層が幾分高く位置していたものと思われるが、上面に不整合面があることにより自然作用での削平が生じ包含層が消失しているものと判断される。

また、高まり行く方向が遺物の供給地と思われるが、第11層の遺物の出土高度と大きな差異のない状態で供給地、すなわち当時の居住地域が求められれば、生活場所は相当に低い所に位置することになる。海進海退に伴って居住地域が変化する可能性や、広く有明海を巡る地盤沈降現象の有無を確認することなどは今後の重要な課題であろう。

## 『遺物の垂直分布』(第13~18図参照)

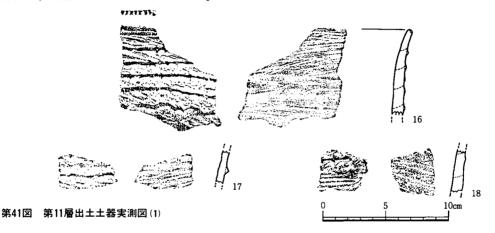
近年西北九州を中心に縄文時代前期の遺物の層位的検出に成功した事例が報告されてきている。 特に「轟式土器」・「プロト曽畑式土器」・「曽畑式土器」らの前後関係を明らかにする適切な 資料の提示が続けられている。

今回の調査において、平面位置と出土高度を記録に止め、図表化したのが第13~18図である。 第11~16層に包含される遺物を見ると「轟式土器」~「曽畑式土器」であり、所謂、縄文時代前期 の包含層であることを明らかにしている。なかでも第12~16層については既述してきたように 「轟式土器」の単純層として捉えることが可能な状況である。

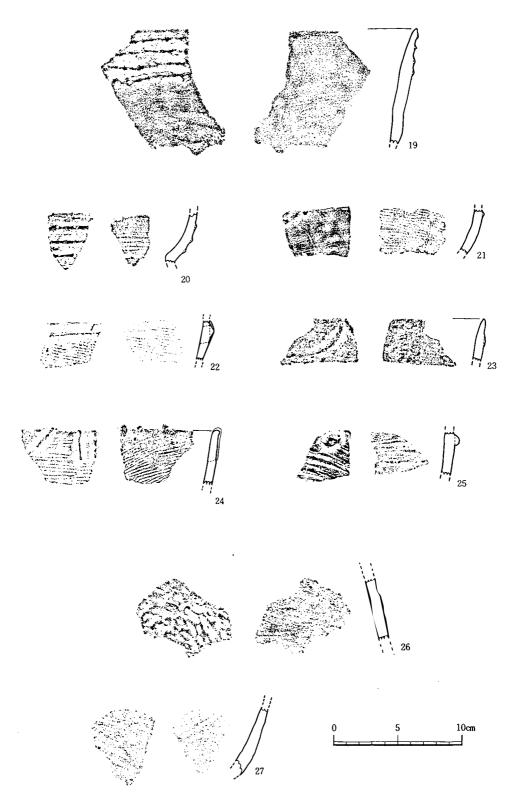
そして、第12層で取り上げた土器の中に「曽畑式土器」関係土器片は数点に止まっており、第 13層から下位では皆無である。また、第11層は「轟式土器」の出土が少なく、双方からの大きな 侵略は見られないとの判断ができ、両者は明確な時期区分ができる安定した包含状態を示してい ることが述べられる。

## 2. 第 ▼ 群 + 器 (第41図16~第42図27)

16は、深鉢の口縁部片で、口縁部がやや外反し外面に5条のシャープな降帯を横走させ貼り付 けたもので、一番下の降帯は波状を呈する。また、器壁は口唇部に近くなるに従い薄くなり、ナ デて丸くしており、その丸くなった口唇部に刻目を施している。E-3類に分類したものである。 17・18は、細くてシャープな隆帯を横走させ貼り付けた胴部片で、口唇部を欠失することから刻 目がつくかどうかは不明で、E-1類に分類した。19は、深鉢の直口して立ち上がる口縁部片で、 外面に細かくてシャープな隆帯を4条横走させ貼り付けているもので、その降帯間の幅は狭く口 縁部に集約させているのが特徴で、E-2類に分類したものである。器壁は、口唇部になるに従 い薄くなり、口唇部はナデて先端を尖らしており刻目は無い。また、器面調整はローリングを受 け磨滅が著しくよく分からないが、条痕と考えられ外面は条痕のあとナデているようである。20 は、頸部で屈曲した後内湾しながら大きく開き立ち上がっており、口縁部が膨らむ器形を呈する ものであろう。その口縁部には、隆帯を貼り付け横走させている。一応E-1類に分類した。21 は、傾きより胴部でも底部に近い部位と考えられるものである。底部は、丸底と考えられ、胴部 に隆帯を貼り付け横走させている。口縁形態などについては、そのほとんどを欠失することから 不明で、分類ではE-6類に属するものである。22は、胴部片で貼り付け横走させた数条の隆帯 間に、縦走させた降帯を貼り付けた文様モチーフを持つもので、E-7類に分類した。23・24は、 共に直口する口縁部に半円状の降帯を1条貼り付けたもので、24は、それに縦走させた降帯も併 用している。いずれも、口縁部の中でも口唇部付近に文様が集約されるのが特徴である。25は、 直口して立ち上がる胴部片で、内外面は条痕による調整を行っているが、降帯ではなく直径1cm 程の粘土粒を貼り付けているのが特徴である。ただし、小破片であることから口縁形態、底部形 熊、全体の文様構成などについては不明である。26は、内傾しながら立ち上がる胴部片で、半円 状の隆帯を数条単位で重弧文状に貼り付けたもので、分類ではE-8類に属するものである。内 面には、条痕による調整痕が残り外面はナデている。27は、胴部片であるが傾きより底部に近い 部位で、丸底になるものと考えられる。



第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物

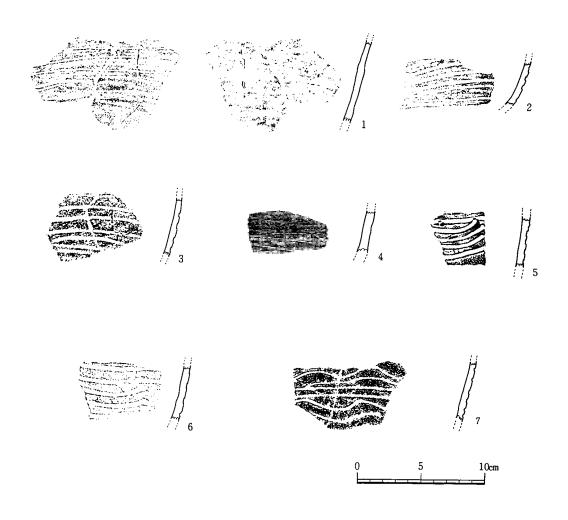


第42図 第11層出土土器実測図(2)

## 3. 第Ⅲ群土器 (第43図1~7)

ここで述べる第Ⅲ群土器は、この章の第1節で報告した第Ⅱ群土器に後行して、昨今「プロト 曽畑」と呼称されるものの範疇にはいるものと判断した7点を取り上げている。

1~5は何れも小破片で器形を明らかにしないが、沈線文を施している。微かに区画をなす横線が見られ、やや曲線化した沈線文4は非常に細い沈線である。5・6は太くシャープな沈線であり、直線の区画が見れ、弧線文様を充塡させている。焼成も充分で非常に堅緻な土器である。7は二本の横沈線の区画をなし、上下に平行する曲線を充塡させている。1の内面は条痕の痕跡があり、ナデ調整を重ねている。そのほかはナデ調整である。



第43図 第11層出土土器実測図 (第Ⅲ群土器)

# **4. 第№群土器** (第44図8~第48図51·第101図4~第108図84)

第Ⅳ群土器は『曽畑式土器』とする土器群である。従来の曽畑貝塚を中心にした調査によって「曽畑式土器」として提示された土器であるが、その標式遺跡での土器内容を明確に出来ていない状況である。今回、標式遺跡そのもので新たなる資料が出土したことにより、ここを『曽畑式土器』の土器内容をより明らかにする機会としたい。

第11層から出土した曽畑式土器は破片の大小に係わらず各一点として捉えていくと、合計273 点である。そして、特長を持ち図示が可能な破片は51点であった。

### ①器形について

概念的には大型深鉢と小型深鉢、それに椀形土器とに分けられようが、小破片が多いため復原 作業が困難である。数少ないなかに状況を示す資料を提示して器形概念のイメージ化を計ってお きたい。

第11層出土土器だけでは可能な資料がないため、第4節で報告するなかの資料をも用いて行いたい。

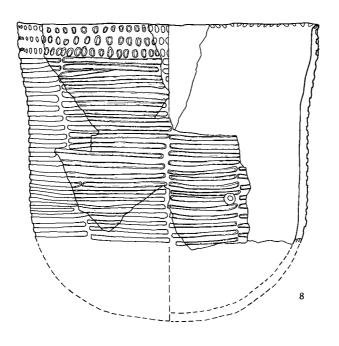
『大型深鉢』 第44図8・9の深鉢を典型とする。当然これより大型のものもあろう。そして、 大型深鉢のなかでやや小さいものを第94図3で示しておきたい。

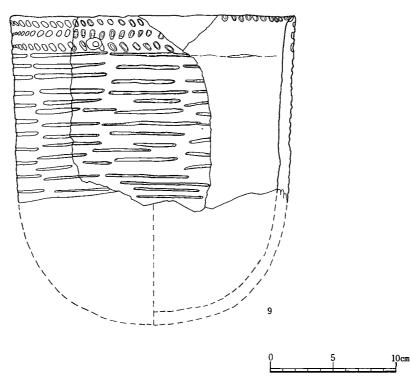
『小型深鉢』上記の大型深鉢よりも小型のものを対象としている。良好な資料に恵まれないが 第103図27~33などを示しておきたい。

『椀形土器』口径に比較して器高の低いもので、これも非常に資料が少ないが第46図26·第107図70を示しておきたい。「ボール状浅鉢」との表現もされてきている。器形の大小があろうが、ここでは一括して椀形土器としておきたい。

以上、因みに全てが復原したものを計測することになるが、目安として捉えることとしておきたい。

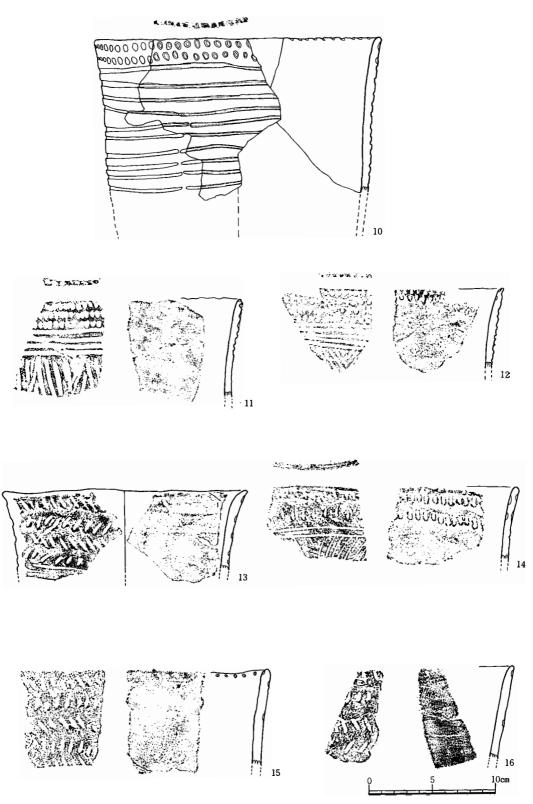
| 器    | 形 | 図 版 番        | 号 |        | 径 cm | 器        | 高<br>cm |
|------|---|--------------|---|--------|------|----------|---------|
| 大型深鉢 |   | 第44図(8)      |   | 2 4. 1 |      |          | 23.6    |
| 大型深鉢 |   | 第94図(3)      |   |        | 20.9 |          | 21.7    |
| 小型深鉢 |   | 第103図(27~33) |   | 15cm程  | 度と推定 | 13㎝程度と推定 |         |
| 小型深鉢 |   | 第106図(63)    |   | _      | 16.3 | 17.5     |         |
| 椀形土器 |   | 第46図(26)     |   |        | 12.8 | 6. 8     |         |
| 椀形土器 |   | 第107図(70)    |   |        | 13.8 | ·        | 7. 1    |



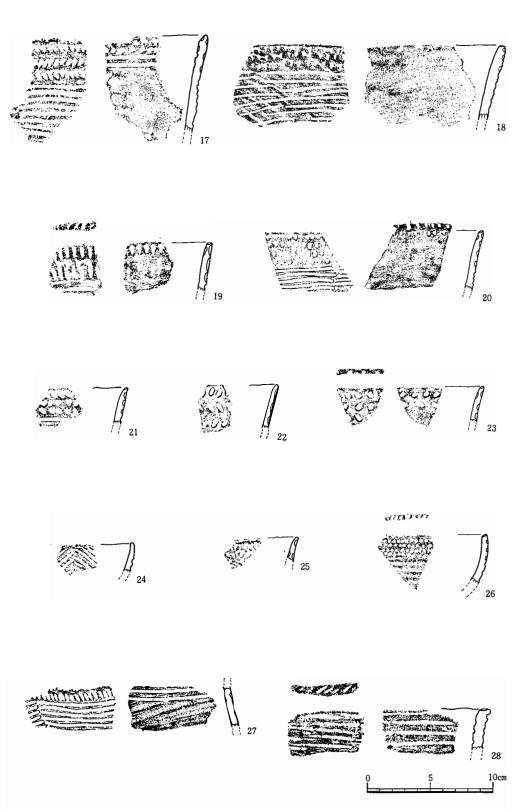


第44図 第11層出土土器実測図(第Ⅳ群土器)

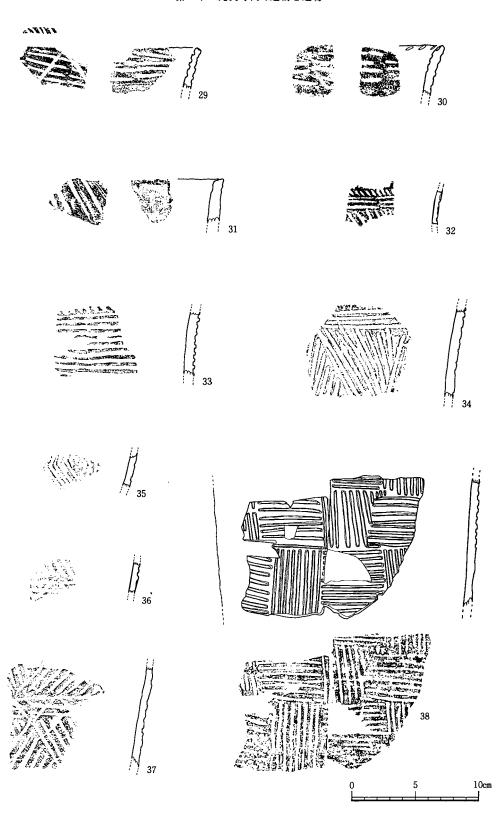
第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物



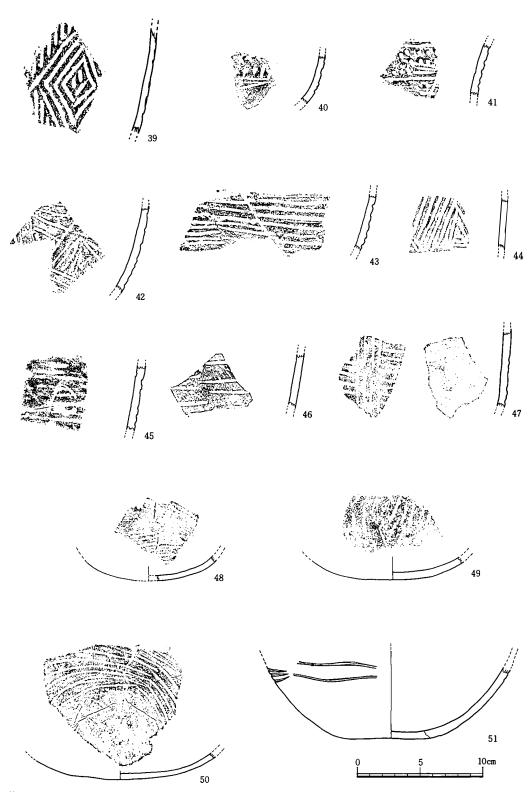
第45図 第11層出土土器実測図(第Ⅳ群土器)



第46図 第11層出土土器実測図 (第Ⅳ群土器)



第47回 第11層出土土器実測図(第Ⅳ群土器)



第48図 第11層出土土器実測図(第Ⅳ群土器)

これらの土器群については出土遺物観察表にまとめている。器形は深鉢が最も多く、椀形土器は3点と非常に少ない。

#### ②器形形状

## <口縁部形状>

全体を窺い知る資料は少ないが第44図8・9第45図10は大きい破片であり、復原を試みて見た8は口縁部がやや内湾ぎみに外反をなしており、9・10は若干外反ぎみである。頸部が少し締まり、胴部に幾分膨らみが見れる。底部は所謂丸底を呈している。深鉢での口縁部は概して外反ぎみのものがほとんどである。図示作業は出土した小破片を用いてのものであり、誤りも指摘されるかと思われるが、図示した状態での口縁部の傾きを形態図と比較してみると次のように示される。

 $\coprod$ 類 IV 類 V 類 類 類 VI 類 外 反 内 傾 直口 **(1)** (a) 0 (2)

第11層出土土器口縁部形態図

対象とした口縁部

第44図 8 · 9 第45図 10~16 第46図 17~20·28 第47図 29·30

合計 16点

結果

Ⅲ類 9点 Ⅳ類 7点

合計 16点

### <口唇部形状>

口唇部における施文文様については後述するとして、ここでは形状を主として分類を進めてみたい。なお、上記、口縁部傾斜状況についての考慮はしないことにして作業している。

#### 口唇部分類図

| I類 | Ⅱ類 | Ⅲ類 | Ⅳ類 | Ⅴ類 | VI類 | VII 類 |
|----|----|----|----|----|-----|-------|
| 3  |    |    |    |    |     |       |

- I 類 先端のやや内側に 尖りがあるもの。
- II類 先端の直状にやや 尖るもの。
- Ⅲ類 先端が丸くなるもの。
- Ⅳ類 先端のやや外側に 尖りがあるもの。
- Ⅴ類 平たくなるもの
- VI類 やや平たくなるも
- VII類 平たく、つまみが 外側にでるもの。

以上の分類に該当するものはIV類 9 点 8 · 9 · 12 · 13 · 15 · 16 · 17 · 20 · 30、 V類 2 点 18 · 29、 VI類 4 点 14 · 11 · 10 · 19、 VI類 1 点 28 となり IV類 · VI類が多い。

#### <底部形状>

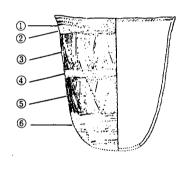
4点の底部資料第48図48~51が出土している。何れも、所謂丸底の範疇に捉えられようが、幾分平たい座りとなり、51はやや上げ底ぎみである。

## ③施文文様について

〈文様呼称について〉

全体文様……総称……『幾何学文様』

学史的・設定的文様の呼称を参照に すると右表のようにまとめられよう。



柿原野田遺跡出土土器

〔水ノ江和同 (1987) による〕

|     | 文 様 帯 | 技 法       | 構成文様         |
|-----|-------|-----------|--------------|
| 1   | 第1文様帯 | 刺突技法      | 刺突文          |
| 2   | 第2文様帯 | 沈線技法 (横)  | 横線文、沈線文、区画沈線 |
| 3   | 第3文様帯 | 沈線技法 (斜め) | 複合鋸歯文        |
| 4   | 第4文様帯 | 沈線技法(横)   | 横線文、沈線文、区画沈線 |
| (5) | 第5文様帯 | 沈線技法 (斜め) | 複合鋸歯文        |
| 6   | 第6文様帯 | 沈線技法(横)   | 沈線文、短沈線文     |

以上、福岡県甘木市、柿原野田遺跡出土土器をモデルとた文様帯区分と文様技法・構成文様が 示されるが、出土している土器の文様は種々である。主なる文様を見てみたい。

## 全体文様

### [器面文様]

全体文様が知れるものは少ないが、第45図11・12は刺突文・横区画沈線文を施し下位に斜行する沈線文があり複合鋸歯文及び短沈線文を形成するものであろう。14にも弱い二本の横区画沈線文を認めることができる。何れも口縁部から胴部にかけて刺突文・横区画沈線文・複合鋸歯文を

なし、底部へと短沈線文を施す典型的な施文を構成するものに見れる。12·14は裏面にも刺突文 を施している。

刺突文の下位に横区画沈線文をなすことなく短沈線文を連続させるものが多い。8 · 9 · 10 · 1 3 · 17 ~ 20 · 27であり、28は刺突文がなく短沈線文だけの施文である。

29の口縁部外面文様は短沈線に斜行する沈線を重ねており、山形文様と表現しておきたい。 37は二段の複合鋸歯文があり、二条めの区画沈線文を挟んで施文されたものと判断される。 38は胴部片であるが、縦横の沈線文を施した網代文様である。

椀形土器のなかで、24は口縁部に斜行する沈線文があり、26は細かい四条の刺突文である。25 は器形を明確にしないが、深く明瞭な刺突文である。

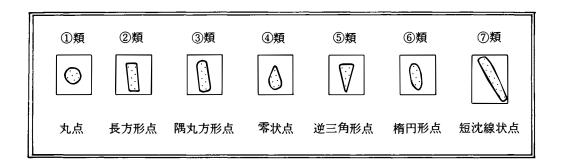
### [内面文様]

内面に刺突文が施されたものは多く、10点を数える。刺突文が殆どで一条と二条のものがあり、一部口唇部にかかるものがある。17は刺突文の下位に二条の沈線文があり、27も同様であろう。28~30は器面と全く同様の短沈線文を施している。

### [刺突文様]

ここで、口縁部に施文されている「刺突文様」について記しておきたい。各点ごとの形を次に 示してみた。

## 〔刺突文様 点状文様分類図〕



器面で刺突文様を確認できる口縁部が19点あり、以上の分類を行うと①類が多く10点であり、このほかでは③・⑤類各3点、⑥類2点、④類1点である。①類のなかで三条(列)が5点、四条が4点と拮抗している。③類は非常に幅広く四条もしくは五条になり羽状文を形成している。

内面では8点を確認でき器面同様①類が多く7点を数える。残りの1点は③類である。

### 〔口唇部文様〕

口唇部に施文が多いのも特色で9点を数える。上記、刺突文と同様に円点が多い。概して小型 の器形の場合が密に施文される傾向が指摘される。

#### ④製作技法に関して

51点の資料のなかで滑石が混入されたものは4点と少ない。胎土を見ると含まれる砂粒は角閃石、

長石、石英が殆どに見られる。粘土紐を巻き上げ製作したものと思われるが、器厚は器形の大小には係わらず均一性があり、5~6 mmに集中している。焼成は概して良好であるが、器面が粗れた不充分なものも見られる。器面調整はナデ調整であり、原調整の状況を明らかにできないが、内面には原調整痕が幾分残されている。口縁部や胴部では殆どナデ調整であるが底部近くにはヘラナデの痕跡や弱い擦痕が認められるものがある。

文様の施文具は幾種類かありそうである。前記の刺突文に丸点があることから先端の丸いもの、 14の刺突文では先端がやや尖ったもの、8では先端がやや角張ったものがあることが理解できよ う。そして、大小により更に数多い種類が想定される。

## ⑤接合状況

接合した土器が9点ある。なかで8点は第11層内での接合であり、第10層出土土器と接合した ものはただ1点であった。第11層におさまる安定した包含状態と述べられよう。

## ⑥出土高度差による新・旧時期傾向

第11層から出土した51点の土器片について高度分布状況図を作成してみた。全体的な状況については先に報告しているが、ここでは4群の土器群に分けて作業を進めてみた。4群の土器群内容を記しておきたい。

- (A) 第Ⅲ群土器 : 「プロト曽畑式土器」と称される土器群〔1~7〕
- (B) 第Ⅳ群—1類土器 :「曽畑式土器」のなかでも古期と考えられる土器で、刺突文+区 画沈線文+複合鋸歯文+短沈線文を施文していると判断される土 器である。[11. 12. 14. 32. 34. 36. 37. 38]
- (C) 第Ⅳ群—2類土器 :「曽畑式土器」のなかで単純に刺突文+短沈線文を施文している 土器である。

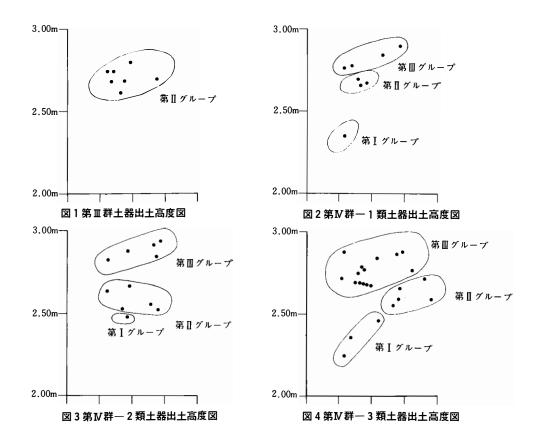
 $[8. 9. 10. 13. 17 \sim 22. 27. 33]$ 

(D) 第Ⅳ群—3類土器 :「曽畑式土器」のなかで(1 · 2類)を除いた土器である。 [15. 16. 23~26. 28~31. 33. 35. 39~51]

以上の高度位置を図表化すると次の図(1)~(4)で表される。

分布図の状況から見ると、第Ⅲ群土器は海抜高度2.60~2.80mに纏まった出土状況を示している。第Ⅳ群—1類土器は少ない点数での処理であるが、2.50m下位・2.50~2.80m・2.80m以上の3グループとできよう。下位から上位へを仮に第I~Ⅲグループと呼ぶことにしたい。とすると、もとに戻り第Ⅲ群土器は第Ⅱグループとして捉えられよう。同様に第Ⅳ群—2類も3グループとなる。第Ⅳ群—3類は最も点数が多いがやはり3グループに明確に分けることができる。以下、各グループの特色を見てみたい。

第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物



# <第 I グループ>

点数は最も少なく8・12・25・46・47の5点である。なかで、8・12は上位グループとの接合資料でもある。46・47は胴部片で文様は短沈線文と網代文と判断され、46は滑石の混入がある。25は非常に小さな破片であり明確な状況を知りえないが、器面及び口唇部の刺突文が強烈な土器である。焼成も充分で非常に堅緻である。8は接合資料で第10層も含め6点の破片が接合したもので、1点だけが深いところからの出土であり、第 II ~第 III グループの可能性が強い。同じく接合資料の12は深鉢の口縁部で、刺突文(四条)+区画沈線文(五条)+複合鋸歯文+短沈線文の典型的施文をなすものである。口唇部や内側にも丸点を施している。非常に整った土器である。

### <第 Ⅱ グループ>

土器群の混在が見られる。第Ⅲ群土器はここに集中しており、第Ⅳ群—1類・2類の集中も見られ1類は上層へと少なくなる傾向、2類は引き続き残存する傾向が見れる。29・30の刺突文を持つことなく、短直線を施文した土器もこのグループで捉えられる。

### <第Ⅲグループ>

最も多くの土器片が集中しており、バラエティにとんでいる。第IV群─2類の残存傾向は指摘 されるが、1類は少なくなっている。滑石を混入した土器もこのグループには見られていない。

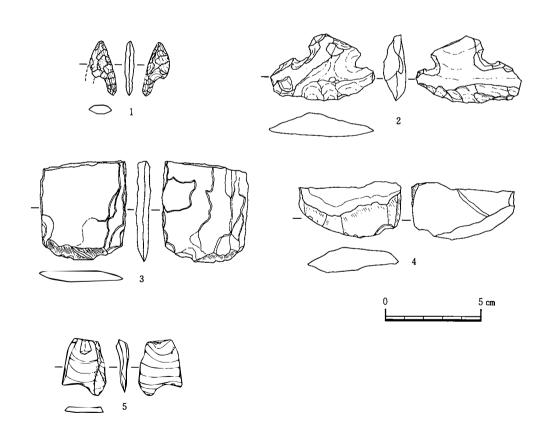
# 5. 石器

1 は磨滅の進んだ石鏃で、長脚の片方を失している。端正な形状、そして綿密な調整剥離を行っている。

2 は石匙であり、分厚い安山岩の剥片を素材としており粗い加工である。交互剥離による刃部 形成を行い、簡単な抉りを施し幅広い摘み部としている。

3・4は磨製石斧である。3は偏平の緑泥片岩が素材であるが、磨製により鋭い刃部の形成がある。面への磨製は行っていない。4は磨製石斧の壊れた小破片であり、面加工された磨製痕が見られる。

5 は良質の黒曜石の剥片で縁辺に細かな使用痕が多い。



第49回 第11層出土石器実測図

## 第3節 貯蔵穴遺構

## 1. 貯蔵穴遺構の分布状況 (第50図)

貯蔵穴群は地表下約2~2.3 mの位置、第11層に検出面があり、800㎡の調査区から総数62基が検出されている。調査区のほぼ中央部に集中して分布しており、グリッドで示せばA-2・3、B-2グリッドであり、このほかのグリッドでは検出されていない。すなわち、南北約10~15mの幅で東西に分布していることになる。このなかで、中央部南側にやや空白地帯が存在することは指摘されるが、大きな視野で見れば、ほぼ直線的な分布傾向と見れる。そして、調査区外へは東西方向へは確実に延びるものと判断される。それは、東側へはやや末広がりの傾向とともに、縄文時代後・晩期の貯蔵穴との重複現象が確認されることにより、加えて、次第に後行していくという、時期的な変遷も見せながら延びていくものと推定される。逆に西側へは先行する貯蔵穴群の存在が推定され、先細りに見れる。これらのことは、東側の台地から延びる舌状の段丘や、砂嘴状の高まりは直線的であったと判断されるが、この高まりにのり、また、沿って貯蔵穴群が形成されたがために、以上のような分布状況を示すものと理解される。一方、時期的な後行に伴い、貯蔵穴群が次第に東側の高い場所へと変遷する傾向は、立地的な変化が、その大きな理由の一つになったものと推測される。

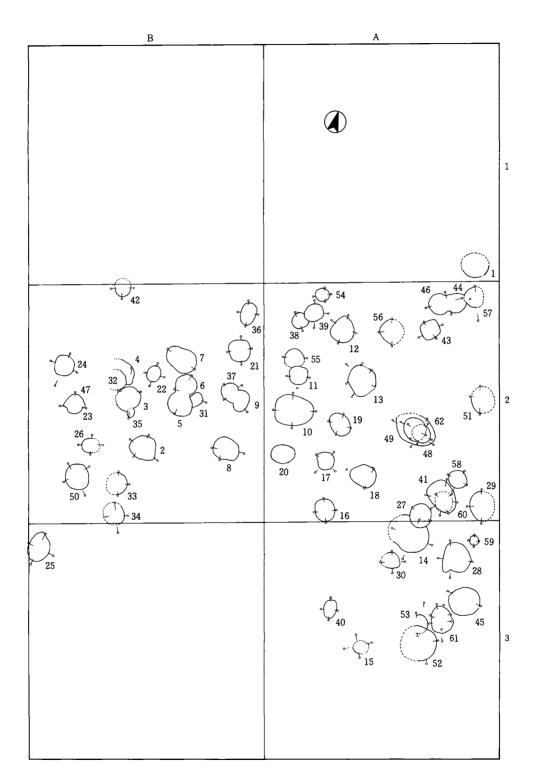
さて、全体的に貯蔵穴の重複は少なく、適当な空間域も存在している。規模は不統一的であるが、全てが円形もしくは楕円形をなす平面形状には統一性を指摘できよう。なお、貯蔵穴番号は 検出の順序に従ったものである。

# 2. 第1~62号貯蔵穴遺構

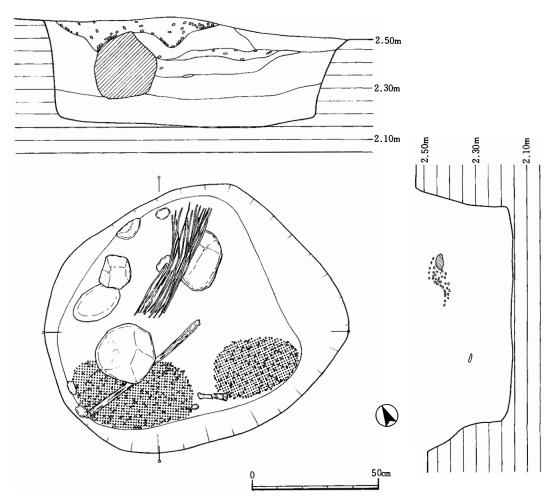
### 第1号貯蔵穴

A-1 グリッド内で、グリッドの南東コーナー部に検出した貯蔵穴である。A-1 グリッドで検出したのはこの1 基だけで、貯蔵穴群の最も北側に位置している。この貯蔵穴は、今回の調査で最初に検出した記念すべき貯蔵穴である。北側部分の約2/3が削られてなくなっているが直径1 m程の円形または楕円形プランを呈したものと考えられ、断面はU字形で深さはわりと深く約60cmを測る。昭和50年の試掘調査では泥炭層に含まれる遺物と判断され、編み物片、曽畑式土器片等が出土し、近くに何等かの遺構が存在する可能性が述べられている。貯蔵穴は、断面観察の結果、第11層の中位付近より掘り込まれており、網代編みの編み物が確認され、基底部より立ち上がっているのが確認でき、カゴ状のものではないかと考えている。また、貯蔵穴内からは若干のドングリも出土しており、取り残したものであろう。また、木の葉や木片等の自然遺物も検出されている。これは埋没時に入り込んだものと判断している。埋土が11層に近いことや貯蔵穴掘り込み面の確認ができ前期の遺構である。

第3節 貯蔵穴遺構



第50図 貯蔵穴群分布状況図



第51図 第2号貯蔵穴実測図

## 第2号貯蔵穴 (第51図)

B-2 グリッド内で、中央よりやや南寄りのところで検出された貯蔵穴である。貯蔵穴は、長径110cm、短径97cmのほぼ東西に長い楕円形プランを呈し、断面はU字形で深さは37cmを測る。 貯蔵穴内には、直径10~20cm程の石が数個あり、中央付近からは長さが50cm程に揃えられたツル 状の植物遺体が出土している。束ねられたような状態である。このほかイノシシの下顎骨等の獣骨片や木片も出土した。土層断面は貯蔵穴の基底部から中位付近までは砂礫および砂が堆積しており、その上面には自然遺物を含む灰色粘土が堆積している。このことから、貯蔵穴が中位付近まで自然堆積し、生じた凹部をツル状植物の水づけに再利用したものであろう。埋土状態から前期の遺構と判断できる。

#### 第3節 貯蔵穴遺構

### 第3号貯蔵穴 (第52図)

B-2 グリッドの2号貯蔵穴の北側から検出。長径105cm、短径101cmの円形プランを呈し、断面はU字形で深さは32cmを測る。35号貯蔵穴と切り合いがあり、35号貯蔵穴が新しい。中位付近より石皿および長さ30~40cm程の薄い木の表皮が出土しており貯蔵穴の蓋材として使用されたものであろう。基底面には、多くのドングリが詰まっていた。底面には砂礫が自然堆積している。埋土より前期の遺構と判断される。

#### 第4号貯蔵穴 (第52図)

B-2 グリッドの3号貯蔵穴の北側で検出。南側を32号貯蔵穴により切られるなどしているが、直径110cm程の不整円形プランを呈したものと考えられ、断面はU字形で深さは22cmを測る。貯蔵穴内から曽畑式土器片が出土している。基底面にはドングリが詰まり、砂礫が自然堆積している。

### 第5号貯蔵穴 (第53図)

B-2 グリッド内の、3 号貯蔵穴の東側で検出。直径100cm程の円形プランを呈したものと考えられ、断面はU字形で深さは23cmを測る。6号・31号貯蔵穴の2基と切り合っており、31号貯蔵穴が古く、6号との前後関係は明確にできていない。6号貯蔵穴と接して50×35cm程の大きな安山岩が置かれていることから、時期を同じくする可能性が強い。貯蔵穴内からは、編み物の断片や木の葉や木片等の自然遺物が出土し、基底面には多量のドングリが検出された。底面に砂礫が、上面には粘土が自然堆積している。

### 第6号貯蔵穴 (第53図)

B-2 グリッド内の、5 号貯蔵穴のすぐ北側で検出された貯蔵穴である。直径90cm程で、円形プランを呈するものと考えられ、断面はU字形で深さは26cmを測る。5 号貯蔵穴と切り合っているが前後関係については明らかにしない。貯蔵穴内からは、曽畑式土器片が数点出土し、また木片や木の葉等の自然遺物も出土している。また、貯蔵穴内には、ドングリが多量に詰まっており、取り出した形跡は認められない。

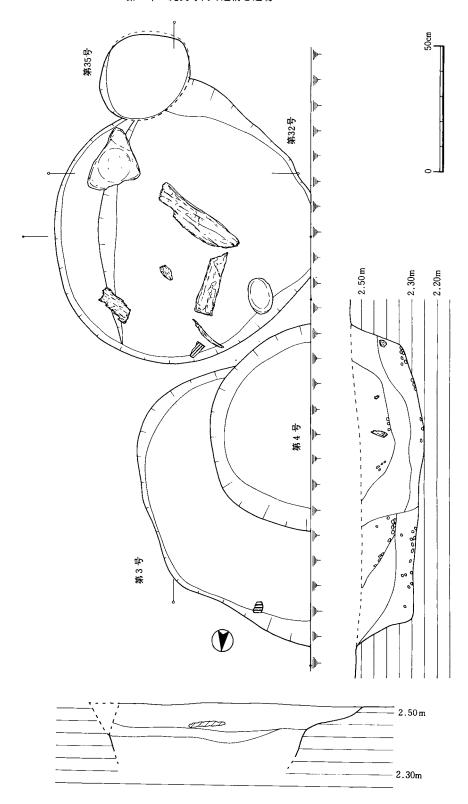
### 第7号貯蔵穴

B-2 グリッドの、6 号貯蔵穴のすぐ北側で検出。長径136 cm、短径100 cmの楕円形プランを呈している。将来の調査を期して、全体を固定し取り上げている。

### 第8号貯蔵穴 (第54図)

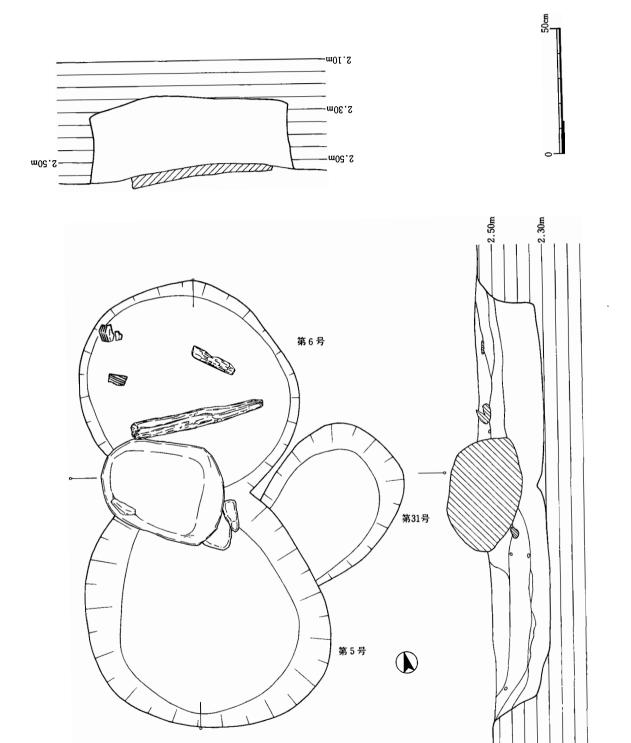
B-2グリッド内の、南側のA-2・B-3グリッドの境近くで検出。長径110 cm、短径92cm でほぼ東西に長くなる楕円形プランを呈し、断面はU字形で深さは35cmを測る。貯蔵穴内からは、曽畑式土器片と獣骨、編み物片それに、ドングリや木の葉等の自然遺物が出土している。編み物片は東壁際の中位付近で検出され、土器も出土状況を同じくしている。ドングリは基底面に少量出土している。量が少ないことから取り残しであろう。底に砂礫が堆積している。

第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物



第52図 第3号, 4号, 32号, 35号貯蔵穴実測図

第3節 貯蔵穴遺構



第53回 第5号、6号、31号貯蔵穴実測図

## 第9号貯蔵穴 (第55図)

第54図 第8号貯蔵穴実測図

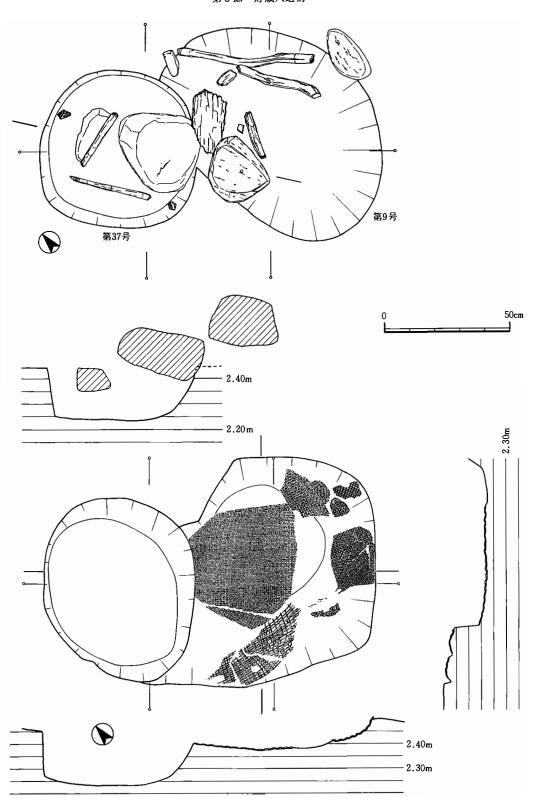
B-2グリッド内で、8号貯蔵穴の北側に37号貯蔵穴と切り合って検出された貯蔵穴である。 長径99cm、短径67cmのほぼ南北に長い楕円形プランを呈し、断面はU字形で深さは20cmを測る。 37号貯蔵穴と切り合っており、当貯蔵穴が古い。検出面に直径25cm程で人頭大の軽石があり、 あたかも目印として置かれているようである。貯蔵穴内からは、他に土器片や木片、それに25× 12cm程で薄い長方形の木皮片が出土している。貯蔵穴の基底面には少量のドングリが出土している。取り残し分であろう。底には砂礫が堆積している。

50cm

### 第10号貯蔵穴 (第56・57図)

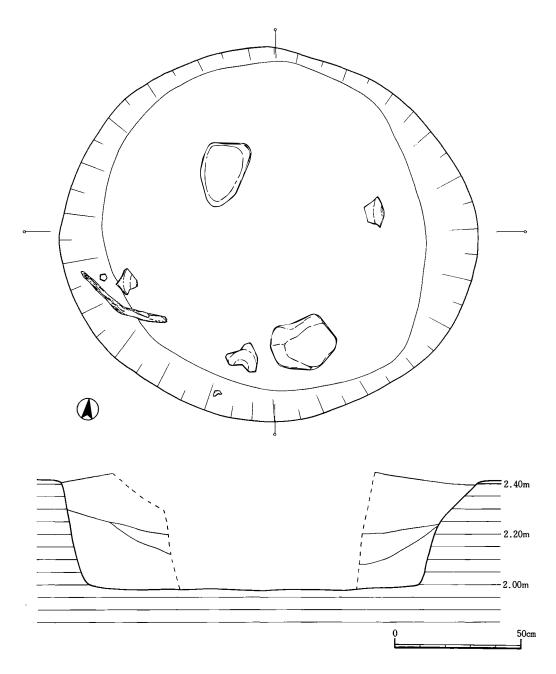
A-2 グリッド内の、9 号貯蔵穴のすぐ東側で検出。長径166cm、短径150cmのほぼ東西に長い楕円形プランを呈し、断面はU字形で深さは42cmを測る。貯蔵穴内からは、曽畑式土器数片と石皿、獣骨、それに木片や木の葉等の自然遺物と、基底部からは少量のドングリが出土している。また直径20cm程の軽石や薄い表皮らしい木片も出土している。底には砂礫が堆積しておりその上は灰黒色粘土がおおう。

第3節 貯蔵穴遺構

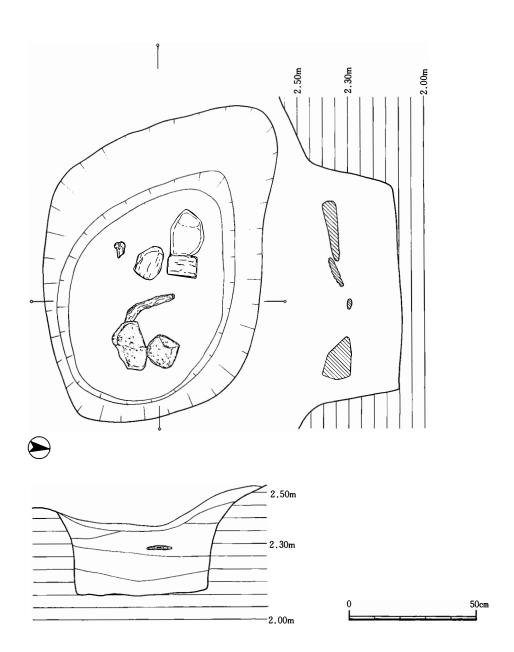


第55図 第9号、37号貯蔵穴実測図

第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物



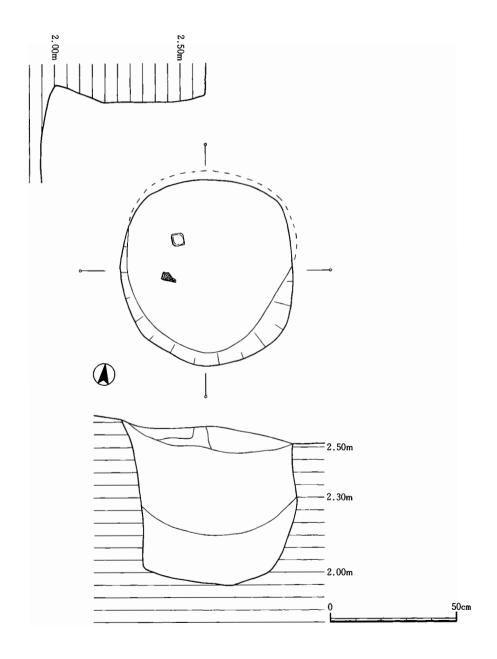
第56図 第10号貯蔵穴実測図(1)



第57図 第10号貯蔵穴実測図(2)

# 第11号貯蔵穴 (第58図)

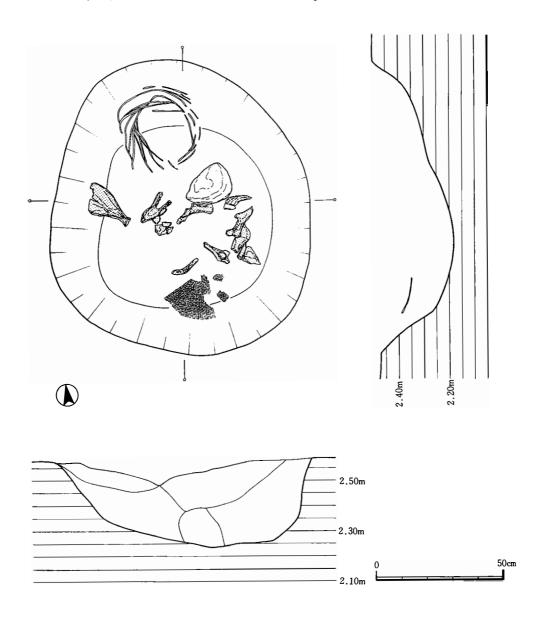
A-2 グリッド内の、10号貯蔵穴のすぐ東側で検出。長径78cm、短径70cmのほぼ円形プランを呈する。断面は若干オーバーハング気味の部分があるがほぼU字形で、深さ65cmを測る。上面からは、曽畑式土器が1点出土し、また、貯蔵穴内にはクヌギが上面までびっしり詰まっていた。中位付近より下層がまだ実の詰まった状態のもので、上層は実を取った後の殻だけのものであった。クヌギの出土は当貯蔵穴1基だけである。



第58図 第11号貯蔵穴実測図

## 第12号貯蔵穴 (第59図)

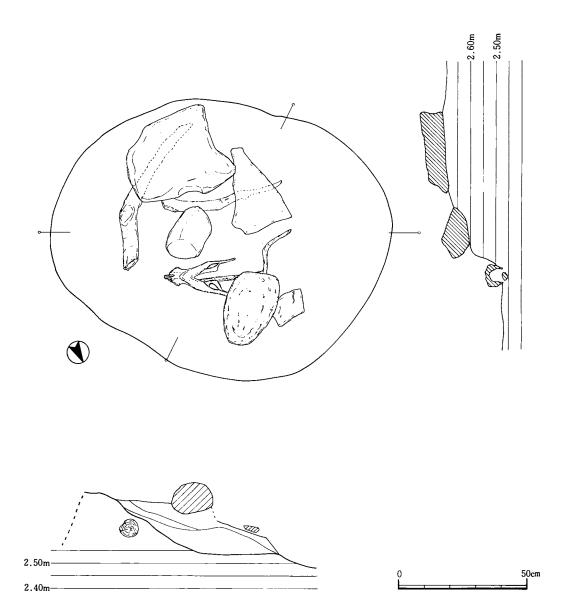
A-2 グリッド内の、39号貯蔵穴のすぐ東側で検出。長径115cm、短径103cmのほぼ円形プランを呈し、断面は皿状で深さ32cmを測る。貯蔵穴内の検出面付近には、17×14cm程で楕円形を呈した安山岩が1個検出された。また石のすぐ下からはイノシシの下顎骨や肩胛骨等の獣骨が多く出土した。投棄されたものであろう。中位面の南側壁面近くに編み物片が、北側壁面にはツル状の植物が数本円く束ねられたような状態で出土した。編み物は、縦材が放射状に延びていることから、カゴの底に近い部分と考えられる。ツル状植物は水づけされたのであろうか。底から出土したドングリは、極少量であることから取り残しであろう。



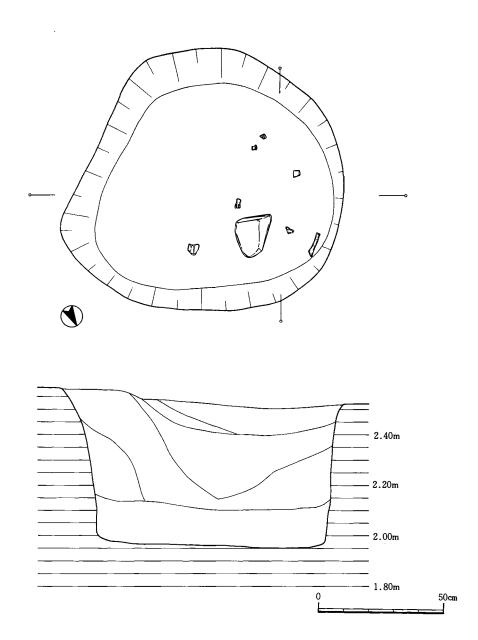
第59図 第12号貯蔵穴実測図

## 第13号貯蔵穴 (第60・61図)

A-2 グリッド内の、ほぼ中央付近に検出された貯蔵穴である。長径113cm、短径104cmのほぼ円形プランを呈し、断面はU字形で、深さ75cmを測る。貯蔵穴内上面には、破砕されたドングリの殻が10cm程皿状に堆積しており、その上には、20~30cm程の楕円形を呈した安山岩と石皿、磨石の石器やイノシシの下顎骨、木片が出土した。また中位面付近からは曽畑式土器片が数片出土した。上面のドングリの殻だけが堆積している部分と下面とは、堆積の状況に明らかに違いがある。完全に自然埋没していない段階に生じた窪地をゴミ捨て場としたものであろうか。



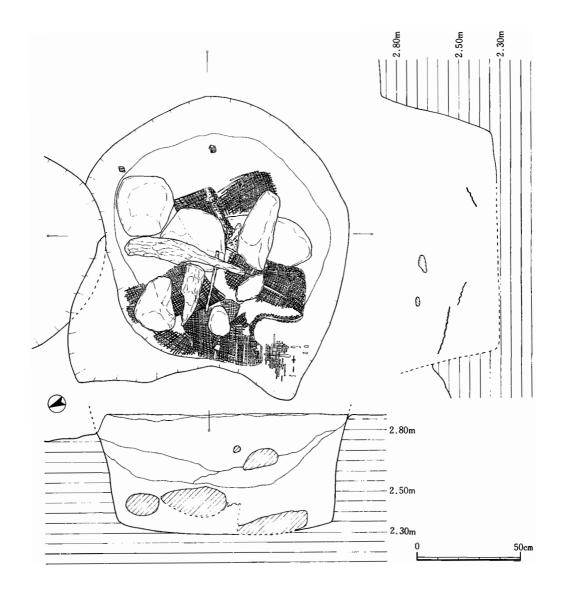
第60図 第13号貯蔵穴実測図(1)



第61図 第13号貯蔵穴実測図(2)

## 第14号貯蔵穴 (第62図)

A-2・B-2グリッドに接した位置に検出。全体形を明確にしないが、長径170cm、短径138 cm程の楕円形プランを呈するものと判断している。断面はU字形で深さは60cmを測る。27号貯蔵穴との切り合いがあり、当貯蔵穴が古い。13号貯蔵穴と同じく上面にドングリの殻だけが捨てられている。ゴミ捨て場として再利用したものと考えられる。底から編み物が出土し、底全面に広がっている。上には30~40cm程の大きさの安山岩や凝灰岩が数個見られる。また、貯蔵穴内からは曽畑式土器片や魚のうろこが数枚と、木片や木の葉それにドングリ等の自然遺物も出土している。



第62図 第14号貯蔵穴実測図

#### 第15号貯蔵穴 (第63図)

A-3 グリッド内で、グリッドのほぼ中央付近に検出された貯蔵穴である。今回検出した貯蔵穴群の南端を示す。直径65cmの円形プランを呈し、断面は皿状で深さは15cmである。底には、砂質土が3cm程堆積しており、その上には自然遺物を含んだ青灰色の粘土が堆積している。この二つの層の境付近からは、木皮が出土した。木皮は35×30cmを測り、蓋をしていたものであろう。編み物片も出土している。断片であるがツル状の植物で巻いた状態が見られカゴの口縁であろう。第16号貯蔵穴 (第63図)

A-2 グリッド内の、A-3・B-3 グリッドの境近くで検出。長径89cm、短径71cmの楕円形プランを呈し、断面は皿状で、深さ9 cmを測る。上部はかなり削平を受けているものと考えられる。底の部分よりドングリが少量出土している。

### 第17号貯蔵穴 (第64図)

A-2 グリッド内の、16号貯蔵穴のすぐ北側に検出。長径81cm、短径79cmの不整な形状を呈し、 断面は皿状で、深さ7cmを測る。上部はかなり削平を受けているものと考えられる。底の部分よ りドングリが多量に出土しているが、取り残しのものであろう。

## 第18号貯蔵穴 (第64図)

A-2 グリッド内の、17号貯蔵穴のすぐ東側で検出。直径70cmの円形プランを呈し、断面は皿状で、深さ12cmを測る。上部はかなり削平を受けているものと考えられる。貯蔵穴内からは、獣骨と底よりドングリが少量出土している。

#### 第19号貯蔵穴 (第65図)

A-2 グリッド内の、17号貯蔵穴のすぐ北側で検出。長径96cm、短径90cmの円形プランを呈し、断面は皿状で、深さは9 cmを測る。上部はかなり削平を受けている。直径28cm程の安山岩とドングリが少量出土している。

### 第20号貯蔵穴 (第66図)

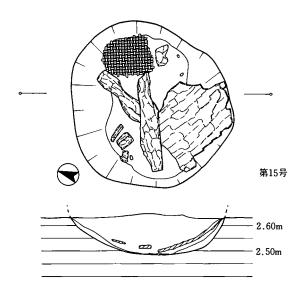
A-2 グリッド内の、10号貯蔵穴のすぐ南側で検出。長径112 cm、短径71cmで東西に長い楕円形プランを呈する。断面は U字形で、深さは17cmを測る。上部はかなり削平を受けている。貯蔵穴内の東壁際より編み物片が出土した。また、西側壁際からは、直径48cm程の安山岩も出土している。底からドングリが少量出土している。取り残しであろう

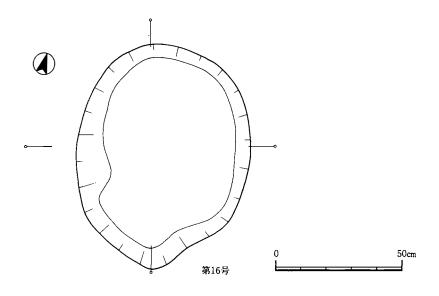
### 第21号貯蔵穴 (第67図)

B-2 グリッド内の、北東域で検出。長径91cm、短径81cmの円形プランを呈し、断面はU字形で、深さ25cmを測る。上位面の北側近くに、直径33cm程の軽石がある。また、軽石の下からはイノシシと考えられる獣骨片が多く出土した。投棄されたものと考えられる。

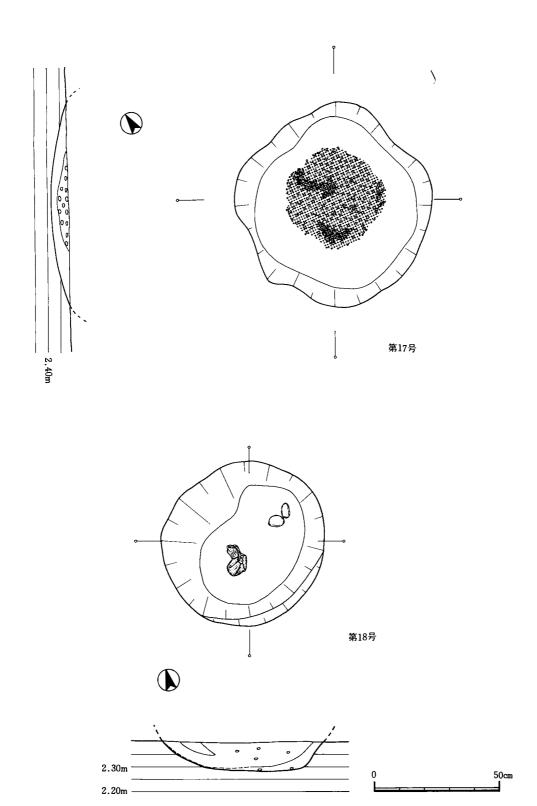
#### 第22号貯蔵穴 (第67図)

B-2グリッド内のほぼ中央付近で、4号貯蔵穴と7号貯蔵穴の間に並んで検出された。長径74cm、短径57cmの楕円形プランを呈し、深さ7cmを測る。断面はU字形であろう。上面はかなり



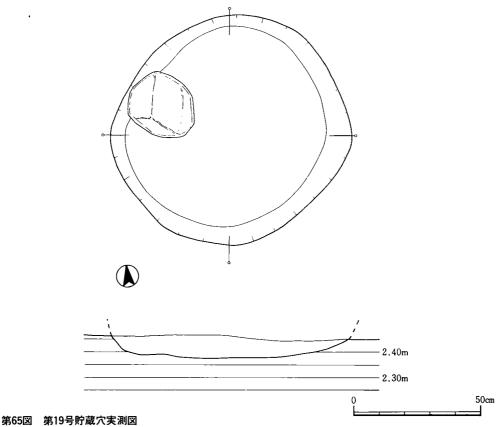


第63図 第15・16号貯蔵穴実測図



第64図 第17号、18号貯蔵穴実測図

第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物



削平を受けている。貯蔵穴内からは、ドングリが少量出土している。取り残し分であろう。 第23号貯蔵穴 (第68図)

B-2グリッドの、3号貯蔵穴のすぐ西側で、47号貯蔵穴が完全に埋没したのち、この23号 貯蔵穴をつくっている。直径48cm程で円形プランを呈するものであろう。深さ40cmを測り、断面 はU字形である。貯蔵穴内から曽畑式土器片が数片出土している。

### 第24号貯蔵穴 (第69図)

B-2 グリッド内で、4・23・47号貯蔵穴と接して出土。長径87cm、短径82cmの円形プランを 呈する。断面はU字形で、深さ37cmを測る。貯蔵穴の上面と縁から平石二点が出土し、前者は石 皿と見れる。基底面近くから曽畑式土器が数片、多量のドングリは基底にのる。ドングリは取り 残し分であろう。

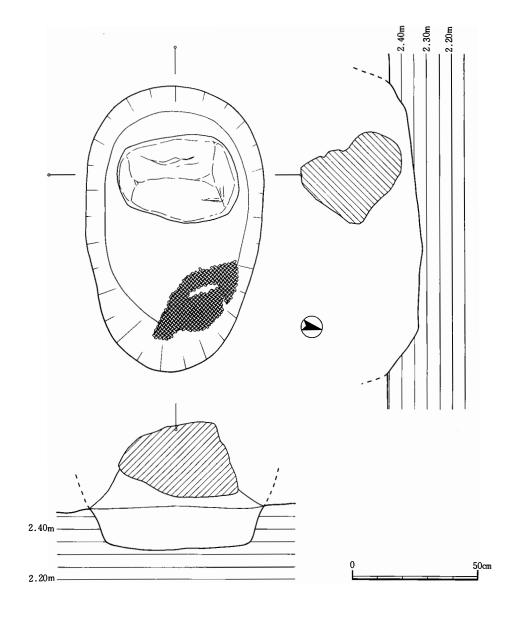
## 第25号貯蔵穴 (第70図)

B-3 グリッド内の、北西部分で検出。グリッド内からの検出は1基だけで、貯蔵穴群の端で ある。長径115cm、短径82cmで南北に長い楕円形プランを呈し、断面は中位付近が若干膨らむ袋 状のものである。深さ77cmを測る。上面の北及び南側の壁面近くには、30~50cm程の長方形の安 山岩と軽石が出土している。貯蔵穴内からは、ドングリ、木の葉等の自然遺物が出土している。

一方上面の大石の下から編み物が出土しており、**外側へ拡**がっている。この貯蔵穴の埋没後に置かれたものであろうが、編み物に補強としたツル材も見れる。

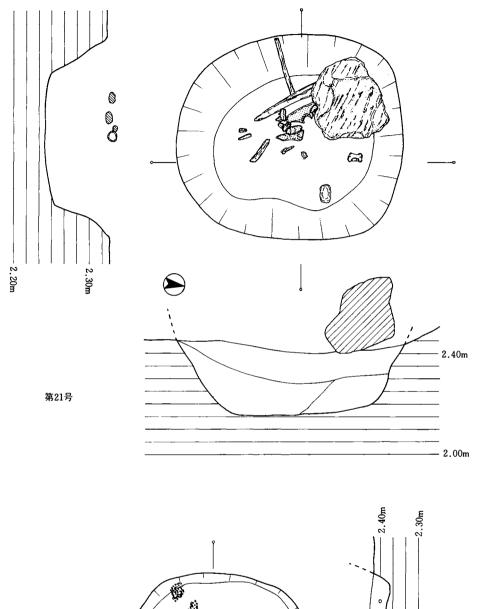
## 第26号貯蔵穴 (第71図)

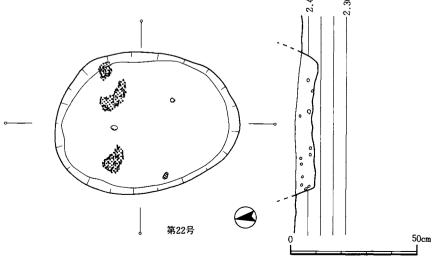
B-2 グリッド内西側域で23・47・50号にはさまれた状態で検出。長径62cm、短径59cmを測り、 楕円形プランを呈するものであろう。断面はU字形で、深さ22cmを測る。貯蔵穴内から、木片や 木の葉、それに若干のドングリ等が出土している。



第66図 第20号貯蔵穴実測図

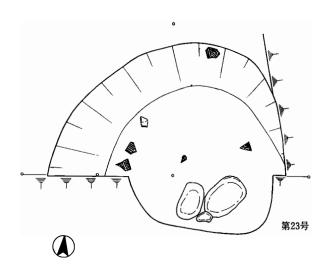
第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物

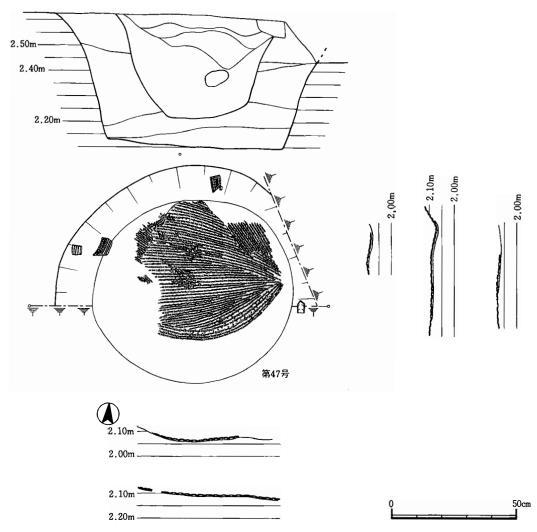




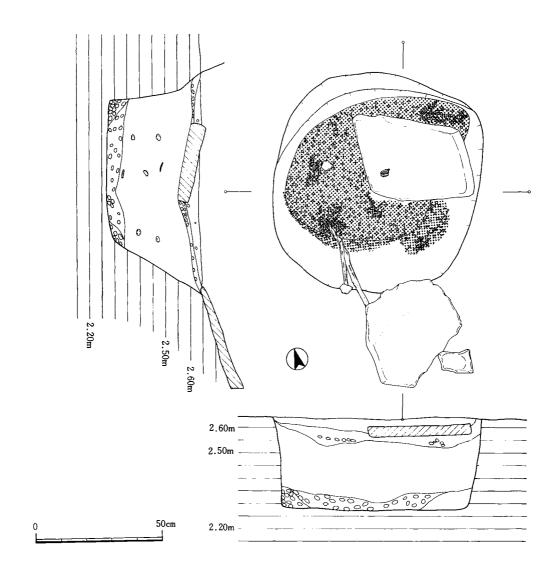
第67図 第21号、22号貯蔵穴実測図

第3節 貯蔵穴遺構

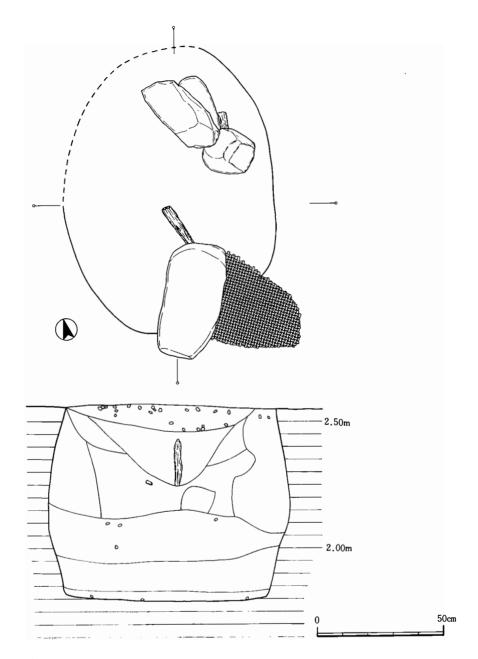




第68図 第23号、47号貯蔵穴実測図



第69図 第24号貯蔵穴実測図

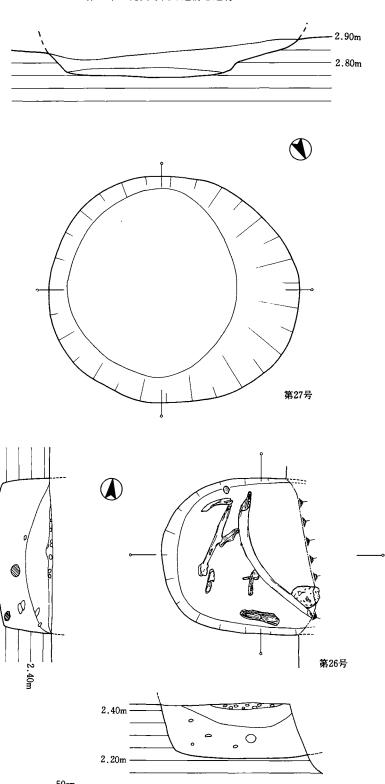


## 第70図 第25号貯蔵穴実測図

## 第27号貯蔵穴 (第71図)

A-2 グリッド内の東側域で検出。14号貯蔵穴と切り合い新しく、長径100cm、短径90cmの円形プランを呈し、深さは10cmと浅い。上面は削平を受けている。貯蔵穴内からは、基底面より多量のドングリと木の葉等の自然遺物が出土した。ドングリは取り残し分であろう。埋土に上層の砂混じりの灰色粘土が入っていることから、新しい縄文後期か晩期頃と考えられる。

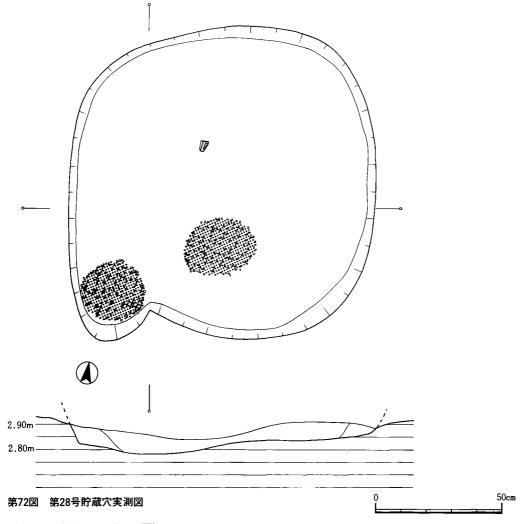
第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物



第71図 第26号、27号貯蔵穴実測図

### 第28号貯蔵穴 (第72図)

A-3 グリッド内の北東部域で、14号貯蔵穴のすぐ東側で検出。長径123cm、短径122cmの不整円形プランを呈し、深さは12cmと浅い。上面はかなり削平を受けている。貯蔵穴内からは、基底面より曽畑式土器が一片と、ドングリが少量出土している。ドングリは取り残し分であろう。



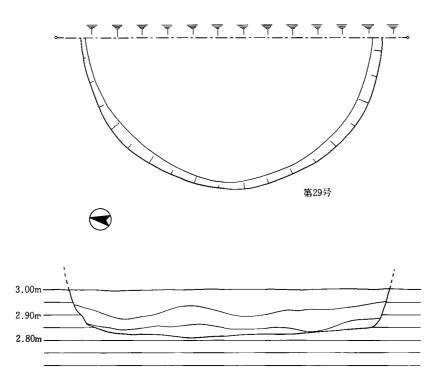
## 第29号貯蔵穴 (第73図)

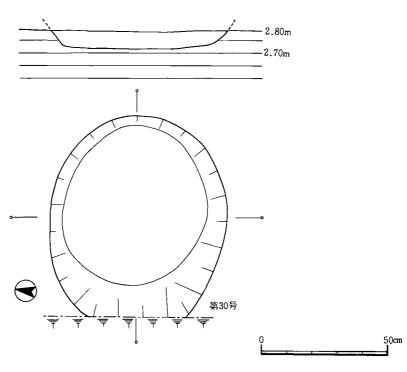
A-2 グリッド、東南コーナーで検出。全体調査は出来ていないが、直径120cm程の円形プランを呈するものであろう。深さ19cmと浅く、上面は削平を受けている。貯蔵穴内からは、ドングリが多量に出土している。27号貯蔵穴と同じく埋土が上層の灰色粘土であることから、後期か晩期頃と考えられる。

## 第30号貯蔵穴 (第73図)

A-3 グリッドの北側域で、14号貯蔵穴のすぐ南側で検出。長径80cm以上で短径71cmの楕円形プランを呈するもので、深さは7 cmと浅い。上部はかなり削平を受けている。基底面よりドングリが多量に出土している。

第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物





第73図 第29号、30号貯蔵穴実測図

## 第31号貯蔵穴 (第53図)

B-2 グリッド内、中央部で検出。5 号貯蔵穴と切り合いがあり、5 号貯蔵穴が新しい。西側部分が削られているが、長径52cm以上で、短径50cmの楕円形プランを呈する。深さは11cmで浅い。貯蔵穴内からの遺物の出土は無い。

### 第32号貯蔵穴 (第52図)

B-2 グリッドの中央部で、3 号貯蔵穴のすぐ北側で検出。4 号貯蔵穴と切り合い、この貯蔵穴が新しい。また、貯蔵穴は西側の半分程を排水溝により削平されているが、直径80cm程の円形プランを呈するものと考えられ、深さは30cmを測る。基底面より多量のドングリが出土した。ドングリは取り残し分であろう。

#### 第33号貯蔵穴 (第74図)

B-2 グリッドの南西部域、2号貯蔵穴のすぐ南側で検出。直径100cm程の円形プランを呈するものと考えられ、深さ35cmを測る。基底面からドングリが多量に出土している。ドングリは、取り残し分であろう。

## 第34号貯蔵穴 (第74図)

B-2グリッド内の南西部域で、33号貯蔵穴に並んで検出。推定直径90cm前後の円形プランを呈するものと考えられ、深さ20cmを測る。貯蔵穴内の上面には、直径30cm程の安山岩があり、その下から、編み物が出土した。編み物は、残存状態が良く基底面から壁面に沿って立ち上がり、カゴ状の入れ物と判断できる。加えて、その下位に2枚ほど確認でき、複数の編み物が入っている。編み物の中からのドングリの検出はない。

## 第35号貯蔵穴 (第52図)

B-2 グリッドのほぼ中央付近で検出。4号貯蔵穴のすぐ南側に位置している。3号貯蔵穴と切り合っているが、前後関係についての確認は出来なかった。直径35cmの円形プランを呈し、深さ23cmを測る。貯蔵穴内から少量のドングリと木の葉等の自然遺物が出土している。

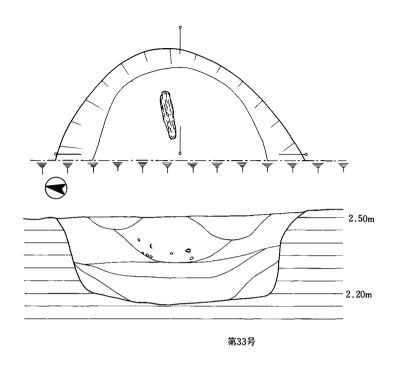
#### 第36号貯蔵穴 (第75図)

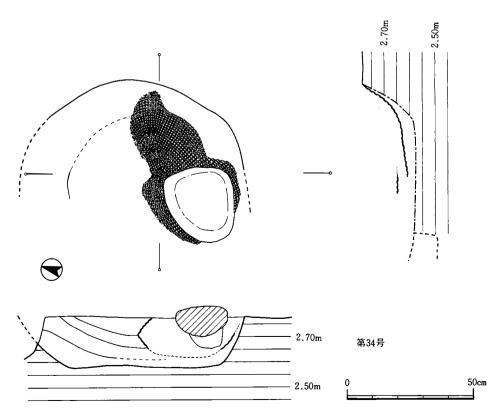
B-2グリッド内の東北コーナー近くで検出。21号貯蔵穴のすぐ北側に位置している。長径96 cm、短径72cmのほぼ南北に長い楕円形プランを呈し、深さ17cmを測る。貯蔵穴内からは、多量のドングリが出土した。ドングリは、10cm程の高さに積まれたような状態で貯蔵穴全体に広がっている。そして、このドングリの下から、編み物が出土している。編み物は、底の部分から、壁面に沿って立ち上がってきており、ドングリを覆った状態である。また、ドングリの上面にも編み物の断片が確認されていることから、ドングリを編み物の中に入れて貯蔵穴内に保存していたものと考えられる。編み物の形状は、カゴ状のわりと深い入れ物であろう。これらドングリと編み物のほか木の葉等の自然遺物が出土している。

#### 第37号貯蔵穴 (第55図)

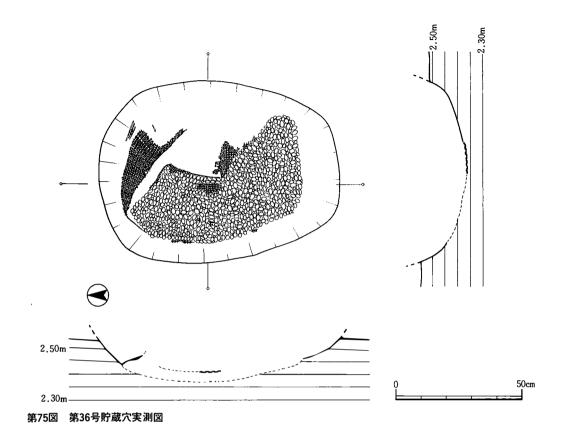
B-2 グリッド内で、5号・6号貯蔵穴のすぐ東側で検出。9号貯蔵穴と切り合いがあり、9

第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物





第74図 第33号、34号貯蔵穴実測図



号貯蔵穴を切っている。直径70cm前後の円形プランを呈するもので、深さ22cmを測る。上面には、直径30cm程の安山岩が乗っている。貯蔵穴内からは、他に曽畑式土器片が数片と木片や木の

葉、ドングリ等の自然遺物が出土している。

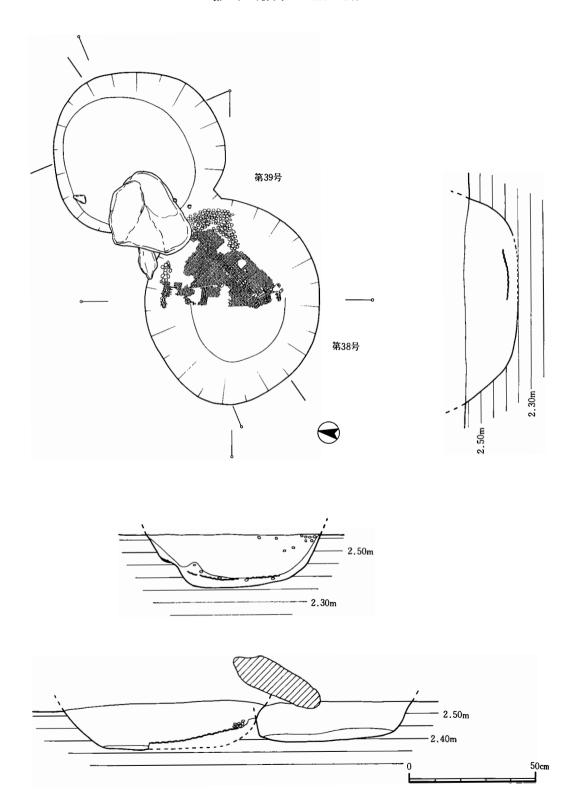
## 第38号貯蔵穴 (第76図)

B-2 グリッドの北西コーナー近くで検出。12号貯蔵穴のすぐ西側に位置している。39号貯蔵穴と切り合っており、この貯蔵穴が古い。直径70cm程のプランを呈するものと考えられ、深さは16cmを測る。貯蔵穴の上面で、39号貯蔵穴との切り合い部分には直径35cm程の安山岩が出土している。貯蔵穴内から、曽畑式土器片が数片とドングリや木の葉等の自然遺物が少量出土している。

## 第39号貯蔵穴 (第76図)

B-2 グリッド内で、38号貯蔵穴と同じ場所で切り合って検出された貯蔵穴である。38号貯蔵穴を切り、新しい。長径81cm、短径71cmのほぼ円形プランを呈し、深さ22cmを測る。基底面に3cm程堆積した砂層の上面に乗った状態で編み物が出土している。編み物の形状は、底から壁面に沿って立ち上がった状態にあり、カゴ状の入れ物と判断される。そして、細いツル状の植物を3本使って補強している部分が認められる。また、この編み物には、一部ドングリが乗っており、ドングリをカゴ状の編み物の中に入れていたと考えられる。

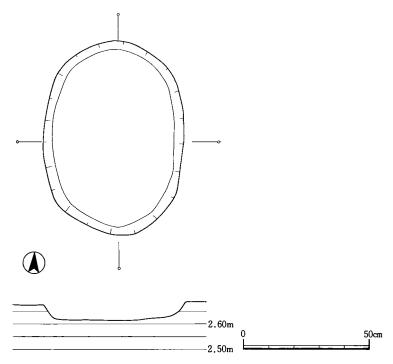
第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物



第76図 第38号、39号貯蔵穴実測図

### 第40号貯蔵穴 (第77図)

A-3 グリッドの中央部やや西側で検出。15号貯蔵穴の北側に位置する。長径77cm、短径56cm の楕円形プランを呈し、深さ8 cmを測る。上部はかなり削平を受けている。基底面にドングリが出土している。



第77図 第40号貯蔵穴実測図

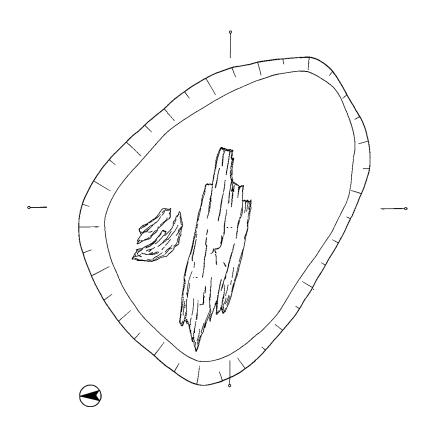
### 第41号貯蔵穴 (第78図)

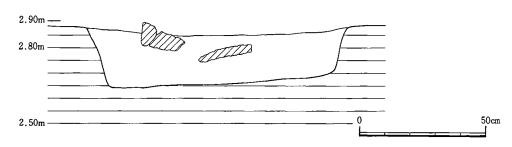
A-2 グリッドの東南コーナー近くで検出。27号・29号貯蔵穴の間に位置している。また、60号貯蔵穴の真上に作られており、切り合っていないことから、60号貯蔵穴が完全に埋没した後に作られたものと考えられる。長径130cm、短径95cmのほぼ南北に長い楕円形プランを呈し、深さ23cmを測る。貯蔵穴内から、長さ60cm程で長方形の薄い木片が上面に出土し、基底面にはドングリが少量出土した。上面から出土した木片は、貯蔵穴の上面にかぶせた蓋であろう。60号貯蔵穴との切り合いがなく、上層の灰色粘土層であることから後期か晩期頃と判断される。

## 第42号貯蔵穴 (第79図)

B-2 グリッドの北西部域で検出。直径70cm以上の円形プランを呈するものと考えられ、深さは上部を削平されて、基底部だけが残っている。貯蔵穴からは、カゴ状の編み物が出土している。上下に重なっており、複数の可能性もある。

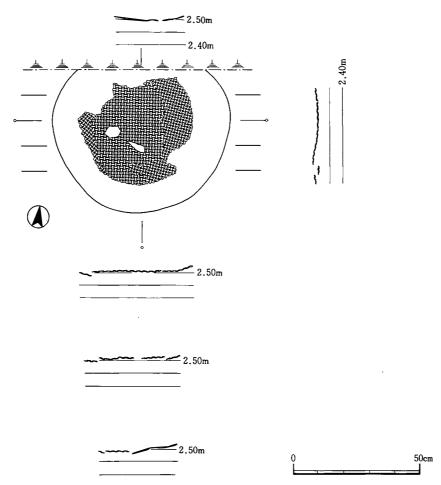
第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物





第78図 第41号貯蔵穴実測図

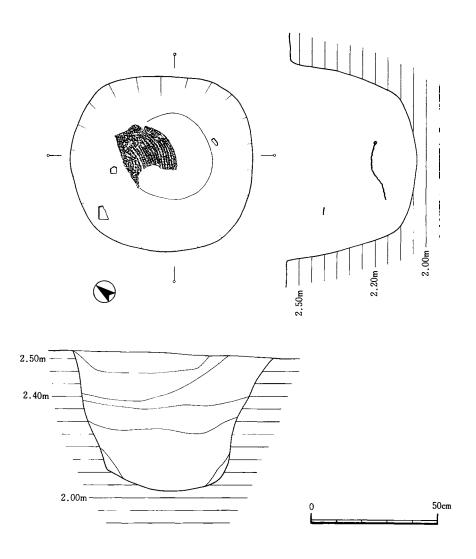
第3節 貯蔵穴遺構



第79図 第42号貯蔵穴実測図

## 第43号貯蔵穴 (第80図)

A-2 グリッドの東北コーナー近くで検出。44号・46号貯蔵穴のすぐ南側に位置している。長径73cmで、短径69cmの円形プランを呈し、断面はU字形で深さ55cmを測る。貯蔵穴内からは、曽畑式土器が数片と木の葉等の自然遺物が出土している。また、貯蔵穴の基底面よりやや上面からは網代編みの編み物が出土した。編み物は、口の部分から底まで確認され、形状を推定できる。ほぼ完全に近いもので、横向きになり土圧で潰れた状態である。編み物の編み方は、基本的には材料を2本単位とした1本送り・2本潜り・2本越えのようである。一方、編み方にはかなりのバラツキが見られる。編み物の口の部分は、縦材の余った所をまとめて束ね、さらにツル状の植物を巻いて固定し、口の部分をつくりあげている。深さが浅いことからザル状の入れ物と考えられる。この編み物は、貯蔵穴の中位付近より出土していることから、投棄したものであろうか。なお、編み物の下からドングリが少量出土しているが、これは取り残し分であろう。

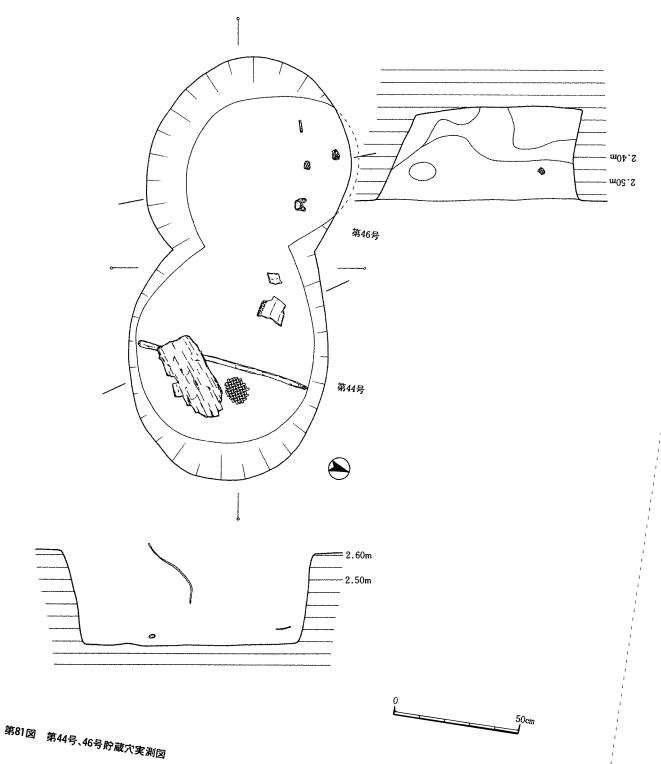


第80図 第43号貯蔵穴実測図

## 第44号貯蔵穴 (第81図)

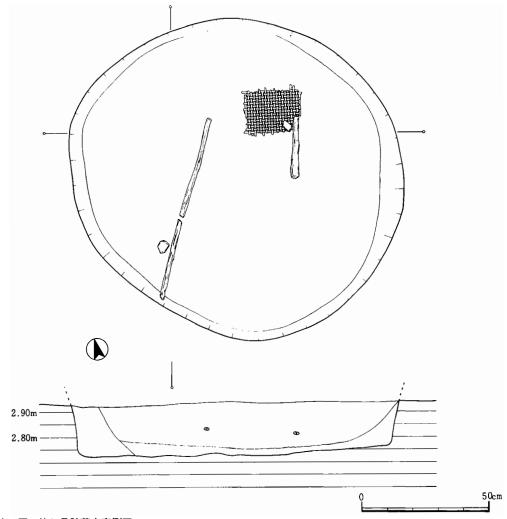
A-2 グリッドの東北コーナー近くに検出。43号貯蔵穴のすぐ南側に位置している。46号貯蔵穴と切り合いがあるが、その前後関係についての確認まで至っていない。長径110 cm前後で、短径79cmの楕円形プランを呈するものと考えられ、深さ38cmを測る。貯蔵穴内の上面から長さ35cm程の薄い木皮片が出土している。また、基底面付近から長さ70cm程の木片と曽畑式土器が数片出土し、底に密着したドングリも少量ある。

第3節 貯蔵穴遺構



## 第45号貯蔵穴 (第82図)

A-2 グリッドの東北コーナーで検出。28号貯蔵穴のすぐ南側に位置する。長径132cm、短径127cmの円形プランを呈し、断面はU字形で深さは21cmを測る。貯蔵穴内からは、無文の土器が数片と編み物が出土した。それに長さ75cm程の木片とドングリも出土している。編み物は、断片であった。埋土は上層の灰色粘土である、27号・29号・41号貯蔵穴と同じであり、後期か晩期であろう。



## 第82図 第45号貯蔵穴実測図

# 第46号貯蔵穴 (第81図)

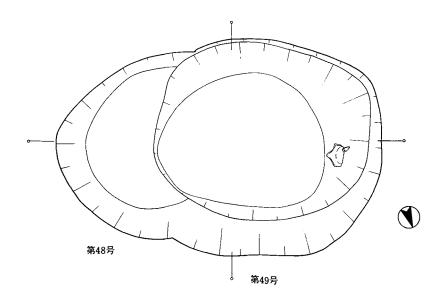
A-2 グリッドの東北コーナー付近で検出。43号貯蔵穴のすぐ北側に位置している。44号貯蔵穴と切り合っているが前後関係については確認出来なかった。直径80cm程度の円形プランを呈するものと考えられ、深さは38cmを測る。貯蔵穴内からは、曽畑式土器が数片と獣骨、および直径 7 mmで長さ5 cm程の粘土紐の断片と考えられるものも出土している。木の葉等の自然遺物やドングリも基底面に多量に出土している。

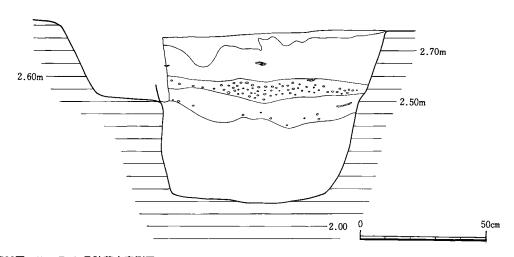
### 第47号貯蔵穴 (第68図)

B-2 グリッドの西側域で検出。23号貯蔵穴と近接する。23号貯蔵穴と切り合っているが、当 貯蔵穴が古く、ある程度埋没した後に23号貯蔵穴が作られている。直径105cm程の円形プランを 呈するものと考えられ、断面はU字形で深さは53cmを測る。貯蔵穴内からは、曽畑式土器が数片 と木の葉や木片等の自然遺物、それに貯蔵穴の基底面から少量のドングリが出土している。また、 基底面からは編み物も出土している。編み物は、貯蔵穴の基底面全体に広がっており、高さ60cm 以上のカゴ状の入れ物と考えられる。

## 第48号貯蔵穴 (第83図)

A-2 グリッドの中央よりやや東側で検出。49号貯蔵穴と切り合い、62号貯蔵穴の中に掘り込ま





第83図 第48号、49号貯蔵穴実測図

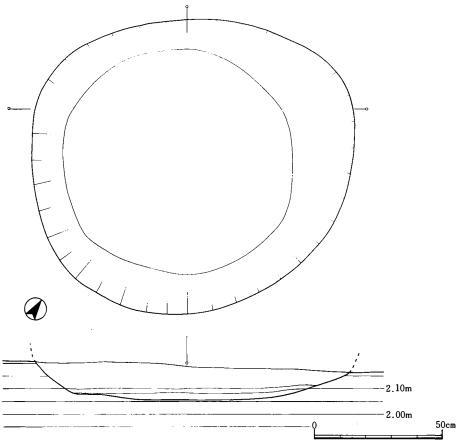
れている。前後関係は、当貯蔵穴と49号貯蔵穴は62号貯蔵穴の中に掘り込まれていることから、62号貯蔵穴が最も古い。次に49号貯蔵穴が当貯蔵穴を切っている。すなわち、古い方から62号・48号・49号の順となる。この貯蔵穴は、直径70cmの円形プランを呈するものと考えられ、深さは29cmを測る。貯蔵穴内からは、木の葉や木片等の自然遺物が出土し、基底面に少量のドングリが見られた。

### 第49号貯蔵穴 (第83図)

A-2 グリッド内で、48号貯蔵穴と切り合って検出された貯蔵穴である。48号が切られている。この貯蔵穴は、長径93cm、短径85cmの円形プランを呈し、断面はU字形で深さは68cmを測る。貯蔵穴内からは、曽畑式土器片が数片と木の葉や木片等の自然遺物が出土し、ドングリが少量見られる。

#### 第50号貯蔵穴 (第84図)

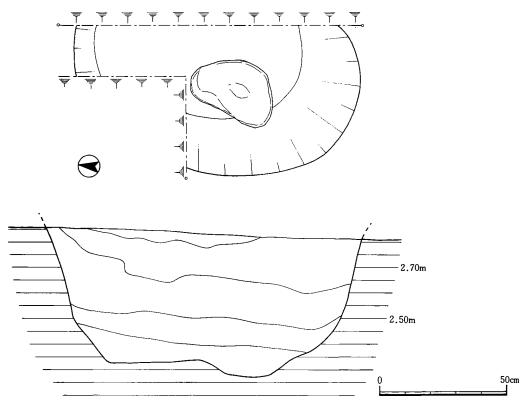
B-2 グリッドの西南コーナー近くで検出。33号貯蔵穴のすぐ西側に位置している。貯蔵穴は、 長径127cm、短径115cmの円形プランを呈し、深さ19cmを測る。貯蔵穴内からは、木の葉や木片等 の自然遺物が出土し、基底面にはドングリが多量に出土した。



第84図 第50号貯蔵穴実測図

## 第51号貯蔵穴 (第85図)

A-2 グリッドの東側境界近くで検出。貯蔵穴は、直径100cm前後の円形プランを呈するものと考えられ、深さは55cmを測る。貯蔵穴内からは、30cm程の安山岩と木の葉等の自然遺物とドングリが少量出土している。



第85図 第51号貯蔵穴実測図

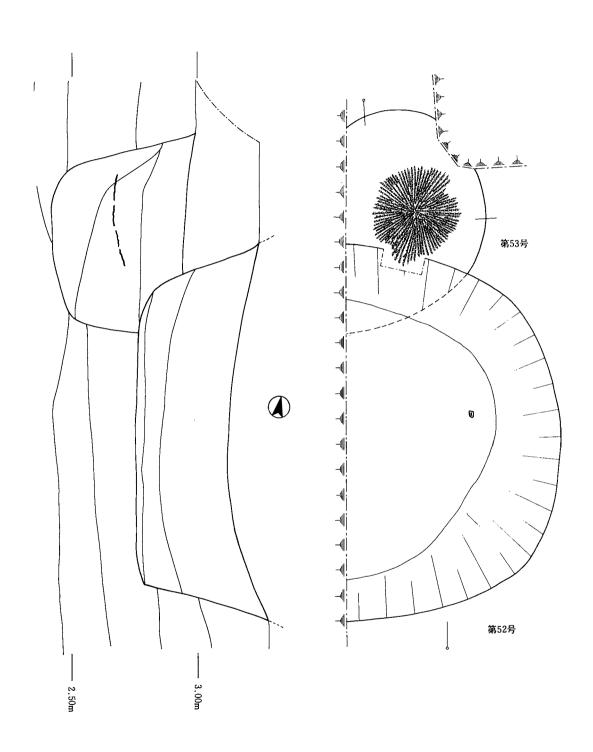
## 第52号貯蔵穴 (第86図)

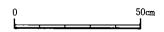
A-3 グリッドの中央付近で検出。今回調査した貯蔵穴群の中の南端となる。53号貯蔵穴と切り合い、当貯蔵穴が新しい。貯蔵穴は、西側半分ほどを削平されているが、直径150cm程の円形プランを呈するものと考えられ、深さは38cmを測る。貯蔵穴内からは、木の葉等の自然遺物とドングリが少量出土している。埋土は上層の灰色粘土であり、また9層~8層からの掘り込みが確認でき、後期か晩期の所産であろう。

#### 第53号貯蔵穴 (第86図)

A-3 グリッド内で、52号貯蔵穴と切り合って検出された貯蔵穴である。52号貯蔵穴に切られており、当貯蔵穴が古い。西側部分を削平されているが、直径80cm程の円形プランを呈するものと考えられ、深さは54cmを測る。貯蔵穴内からは、木葉等の自然遺物と、少量のドングリ、それに編み物が出土した。編み物は、縦材が中心より放射状に延びていることから底の部分と考えられる。カゴ状の入れ物であろう。

第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物





第86図 第52号、53号貯蔵穴実測図

#### 第54号貯蔵穴 (第87図)

A-2 グリッドの西北コーナー付近で検出。39号・12号貯蔵穴のすぐ北側に位置している。長径63cm、短径53cmの円形プランを呈しているが、基底面だけが残存したものである。貯蔵穴内からは、木葉等の自然遺物と少量のドングリ、それに編み物が出土した。編み物は、土圧により潰れた状態で出土し、カゴ状の入れ物と考えられる。

#### 第55号貯蔵穴 (第87図)

A-2 グリッドの西側域で検出。11号貯蔵穴のすぐ北側に位置している。貯蔵穴は、直径81cm の円形プランを呈し、深さは10cmを測る。貯蔵穴内からは、木の葉等の自然遺物が出土し、基底面にはドングリが多量に見られた。ドングリは取り残し分であろう。

## 第56号貯蔵穴 (第88図)

A-2 グリッドの北側域で検出。12号貯蔵穴と13号貯蔵穴の間に位置している。貯蔵穴は、長径10cm、短径100cmの円形プランを呈し、深さは59cmを測る。貯蔵穴内からは、曽畑式土器が数片と木葉等の自然遺物が出土し、基底面には多量のドングリが出土している。ドングリは取り残し分であろう。

## 第57号貯蔵穴 (第89図)

A-2 グリッドの東北コーナー近くで検出。44号貯蔵穴のすぐ東側に位置している。44号貯蔵穴の下から検出されており、44号貯蔵穴より古い。貯蔵穴は、直径90cm程の円形プランを呈するものと考えられ、深さは38cmを測る。貯蔵穴内からは、曽畑式土器が数片と木の葉等の自然遺物が出土し、基底面に少量のドングリが見られた。

# 第58号貯蔵穴 (第89図)

A-2 グリッドの東南コーナー近くで検出。29号・41号貯蔵穴のすぐ北側に位置している。貯蔵穴は、長径70cm、短径65cmの円形プランを呈し、深さは30cmを測る。貯蔵穴内からは、曽畑式土器が数片と木葉等の自然遺物が出土し、基底面には少量のドングリが見られた。

# 第59号貯蔵穴 (第90図)

A-3 グリッドの東北コーナー近くで検出。貯蔵穴は、直径44cmの円形プランを呈し、深さは 11cmで浅く、上面は削平を受けているものと考えられる。貯蔵穴内からは、木葉等の自然遺物が出土し、基底面にドングリが見られた。

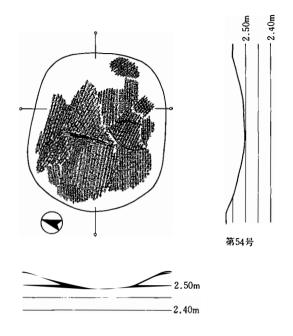
#### 第60号貯蔵穴 (第90図)

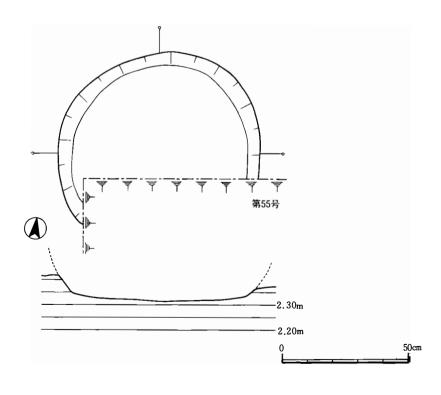
A-2 グリッドの東南コーナー近くで検出。当貯蔵穴は41号貯蔵穴の直下から検出された。長径95cm、短径88cmの円形プランを呈し、深さは41号貯蔵穴により上面を削平されており、8 cmが残存する。貯蔵穴からは、木葉やドングリが多量に出土している。

#### 第61号貯蔵穴 (第91図)

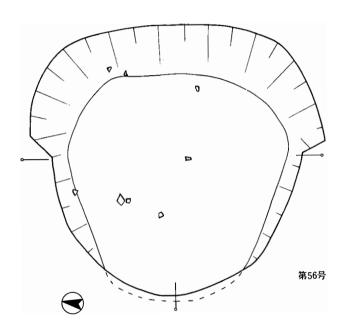
A-3 グリッドの中央よりやや東側で検出。56号・45号貯蔵穴の間に位置している。長径106 cm、短径84cmの楕円形プランを呈し、深さは70cmを測る。貯蔵穴内の中位付近から、編み物と獣骨が出土し、また基底面からは木の葉等の自然遺物とドングリが少量出土した。出土した編み物は、

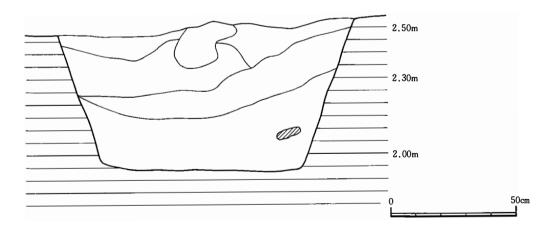
第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物





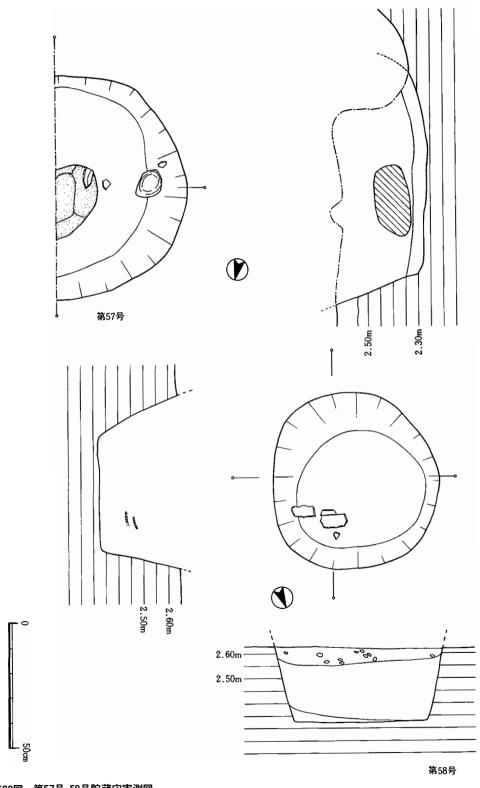
第87図 第54号、55号貯蔵穴実測図





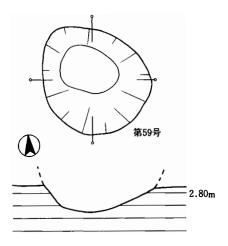
第88図 第56号貯蔵穴実測図

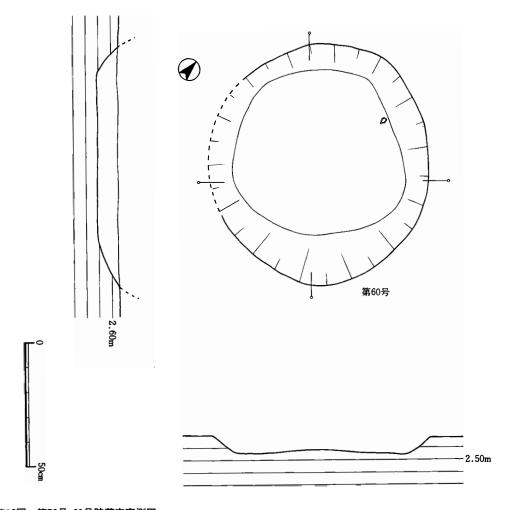
第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物



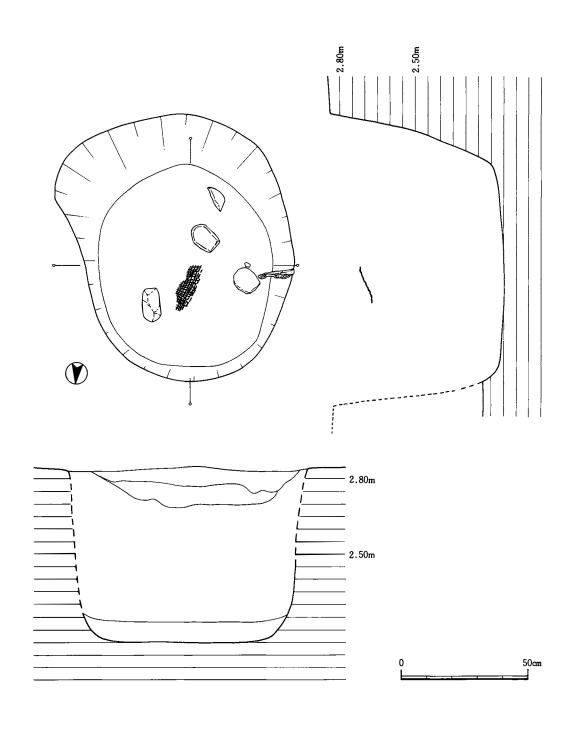
第89図 第57号、58号貯蔵穴実測図

第3節 貯蔵穴遺構



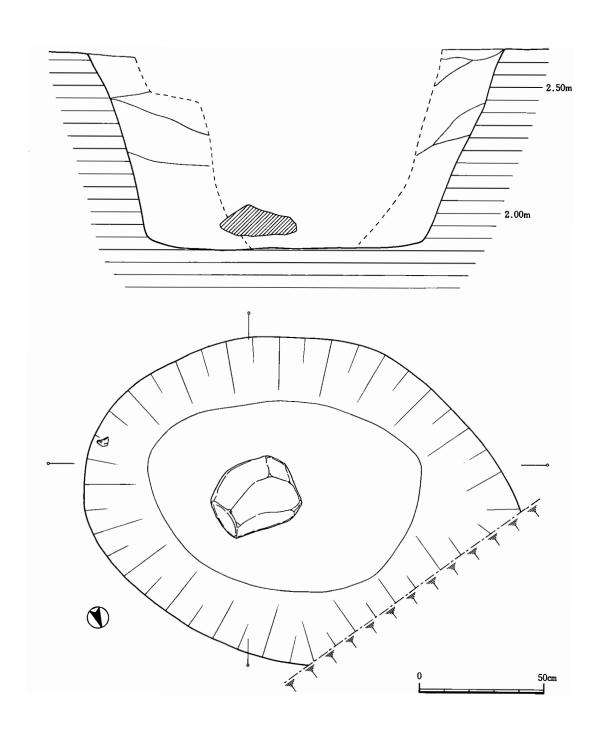


第90図 第59号、60号貯蔵穴実測図

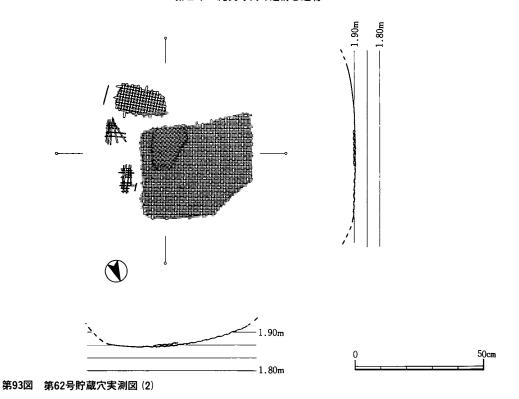


第91図 第61号貯蔵穴実測図

# 第3節 貯蔵穴遺構



第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物



断片である。また貯蔵穴の中位付近から出土しているため投棄された可能性もある。 第62号貯蔵穴 (第92・93図)

A-2 グリッドの中央部やや東側で検出。48号・49号貯蔵穴が中に掘り込んでいることから、その2基の貯蔵穴より古い。貯蔵穴は、長径172cm、短径130cmの楕円形プランを呈し、深さは79 cmを測る。貯蔵穴内からの基底面からは、編み物が出土した。編み物はカゴ状のものであろう。 貯蔵穴内からは、木の葉やドングリも少量出土している。

# 3. 貯蔵穴遺構の時期判断

今回の調査では、調査区中央付近に集中して総数62基の貯蔵穴を検出できた。これらの貯蔵穴の時期は、62基の貯蔵穴の内約92%に当たる57基が縄文前期の曽畑期に属し、約8%に当たる5基が縄文後期または晩期に属するものと判断した。それは、以下による事項を根拠としている。

- (1) 仮りに縄文前期の貯蔵穴をA群、後・晩期の貯蔵穴をB群とすれば、両者の埋土には明らかな相違が見られた。前者は第11層と相通じる暗褐色を呈する土質であり、後者は第8~9層に起因する青灰褐色を呈する粘性をもつ土質である。
- (2) 幸いに両者が切り合う状況が検出され、前後関係が明確にできている。それは、第52号と53号であり、後者が完全に埋没したのちに前者が形成されている。そして、それぞれの埋土は、先述の様相を明確に示している。
- (3) 加えて、第52号は第9層から掘り込まれ、第53号は第11層に掘り込み面を持つことが明瞭に検出できている。
- (4) また、A群の貯蔵穴で第11層の中に掘り込み面を明瞭に検出できるもの(第1号)があった。 そして、A群の貯蔵穴の底面から深さを考慮すると、ほとんどが第11層に納まると判断される。
- (5) 第11層は第Ⅲ・Ⅳ群土器を主とする包含層であり、後行する土器を含んでいない。逆に第8~10層は後・晩期遺物を主とした包含層である。
- (6) A群の貯蔵穴から検出された土器は第Ⅲ・Ⅳ群土器に集約されている。 以上の現象を把握でき、A群を前期、B群を後・晩期の所産との判断に至っている。

## 4. 貯蔵穴群の構造と貯蔵物

貯蔵穴群は現地表下約1.5~2mの深いところから検出されている。現貝塚は海抜標高約7~8mの台地縁に立地しており、その間の距離は約100m、比高差約5mがある。

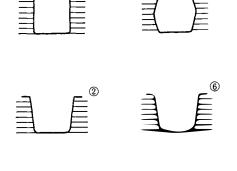
調査区内での土層は、縄文時代前期~晩期における水作用による再堆積土であることを示している。貯蔵穴群の成立期における堆積状況は、若干北側へと傾斜しているがほぼフラットな状態と見れよう。フラットな状況が、現貝塚方向へいかに延長されるかは明らかにできていないが、途中に段落ちが形成される可能性もあろう。

花園山の北麓にそって、雁回山・花園山を供給地とする土砂が運ばれ、今回の調査地付近まで 扇状地状の地形を形成したものと考えられる。そして末端部に位置した場所には、豊富な地下水 の湧水が生じる状況が浮かび上がる。この様な場所をセレクトして貯蔵穴群が構成された可能性 は強い。すなわち貯蔵穴群は、水を冠水させることを考えて作られたのであろう。大きさはバラ ツキが認められるが、およそ80~140cm程で、形状は円形または楕円形プランを呈している。円 形の貯蔵穴が43基で全体の約2/3を占め、残り約1/3程の19基は楕円形である。この形態の差異 は、後・晩期と考えた貯蔵穴が形の整った円形であることから、楕円形の貯蔵穴が古い形態のも

ので、新しくなるにしたがい円形に変化していくもの、つまり貯蔵穴の形態の差異は時期的な形態の変化として捉えてよさそうである。また、貯蔵穴の深さは30cm前後と70cm前後に集約されるが、前者は削平を受けたものであろうし、本来の深さは70cm前後と判断される。一方、貯蔵穴の断面は、ほとんどがU字形を示している。浅くて皿状を呈しているものがあるが、底部だけが残されたもので、本来的にはU字形を呈するものと見れよう。次に、すべての貯蔵穴内からドングリが出土しており、貯蔵の対象はドングリ類であったことが明らかである。ドングリの下には編み物が多く出土している。木の葉や木片等をしいてはいないようである。ここには共通して砂層が堆積している状況が認められる。堆積は薄く3~5cm程度であり、中央部分が薄く壁面近くが厚いことから、自然堆積である。構造にかかわる現象ではないようである。さて、貯蔵穴内から多くの編み物が出土している。加えて、36号貯蔵穴ではドングリをおおった状態に見れる編み物が出土している。すなわちカゴ状の編み物に入れて貯蔵していたものと判断できる。編み物はこのカゴ状の容器に入れたもののほか、底面に敷いたもの、浅いカゴ状のものなどの出土状況を示しており、種々の方法がとられている。

一方、適当な木皮や木の葉も出土しており、上部構造を示すものである。木皮による覆い、すなわち蓋がなされたものであろうし、多量の木の葉はその際につめられた可能性を有している。 ついで大石の出土があり、この上におもしとして乗せられたものと判断される。

以上により、貯蔵穴の典型的構造を次の模式図に示しておきたい。



※深さ(貯蔵穴の残存状態)

A: ほぼ完全

B: 半分程度

C:底面だけ

#### ※断面形

1:底面がフラットで垂直に立ち上がる。

2:底面がフラットで立ち上がり角度が70°以上。

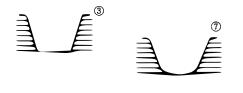
3:底面がフラットで立ち上がり角度が70°以下。

4:底面がフラットで垂直に立ち上がり上面が開く。

5:袋状のもの。

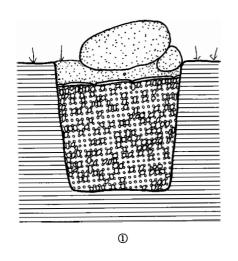
6:底面がレンズ状になり立ち上がり角度が70°以上。

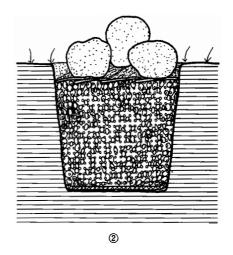
7:底面がレンズ状になり立ち上がり角度が70°以下。

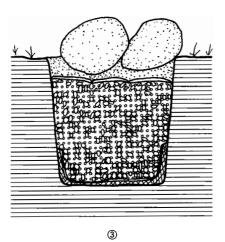


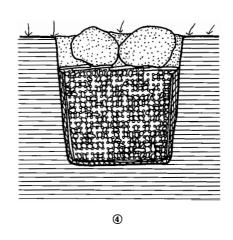


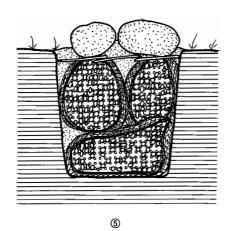
貯蔵穴断面形態模式図











## 貯蔵穴推定模式図

- ① 編み物製品を使用することなく、木の皮の蓋と重しだけのもの。
- ② 底部にだけ編み物製品をしいているもの。
- ③ 浅いザルの様な編み物製品が底部にあるもの。
- ④ 深いバスケットの様な編み物製品に納めるもの。
- ⑤ 網駕籠の口を閉じて、数個を一緒に貯蔵 するもの。

## 5. 貯蔵穴内出土土器・石器

貯蔵穴遺構のなかから出土した22点の土器がある。

#### 1) 第Ⅲ群土器 (第94図1・2)

1は胴部片で沈線文が見れ区画をなし曲線を充填させているが、粗い施文である。2は口縁部 片で確かな資料とできないが、細い沈線文がある。内面は粗い調整であり、今後に検討を要しよ う。

## 2) 第IV群土器 (第94図3~第96図22)

3は今回の調査で最も良好に残存していた土器で、完全な復原ができている。口径20.9cm、器高21.7cmを計る深鉢である。第1文様帯はややウェーブする刺突文を3条に巡らしている。2条の区画沈線を施し、第3文様帯に幾何学文がある。「×」及び「+」の割りつけを繰り返し、短沈線を充塡しているものである。六弥太格子文との表現が適当であろうか。胴部下半から底部に短沈線を施している。器面には多量の煤の付着がある。

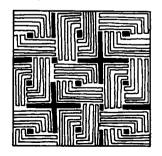
4・5は3条の刺突文と区画沈線があり、胴部に複合鋸歯文を有する典型的施文を示すものであろう。6~9は刺突文+短沈線文の施文を施すもので、7は口縁部がやや波状している。器形のバラエティがあり、口縁部は前者2点が外反し、後者2点は内傾が見られる。10は器面に短沈線文だけを施文するもので、以外にも内面に長い刺突文がある。また、内面にはナデ調整が不充分で、条痕が見れる。

11~18は胴部片であり、文様は複合鋸歯文、沈線文、網代文と見れる。13は沈線文の間に縦に並ぶ二条の刺突文を充填させている。17・18は底部へと短沈線文を連続させており、18は底部まで施文している可能性が強い。19~22は底部片であり、20は全面施文である。22は底部貼り付けを示している。

23は第46号貯蔵穴の埋土から出土した灰褐色を呈する粘土紐で、長さ4.1cm、直径1.1cmである。 粘土紐を輪積みして土器の製作を行うことを示す資料であろう。

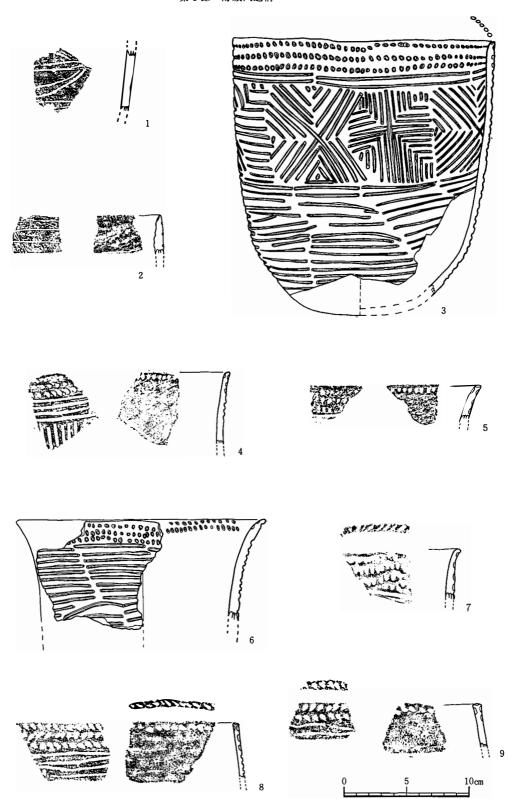
貯蔵穴内から出土した土器は磨滅を受けたものが少なく、煤の付着が顕著であったり、破片が 大きめのものが多いなど全体的に残りの良い出土状況を示していた。

なお、貯蔵穴に大石が伴うことの確認は大きな成果の一つとできるが、もう一つ大石に混じって、板状の石の出土がある。第3.10.13.24号では明らかに石皿と判断ができるもので、第13号では磨石が伴って出土している。周辺にはドングリ類の殻も多く、ここで調理を行っていたことの証とできよう。



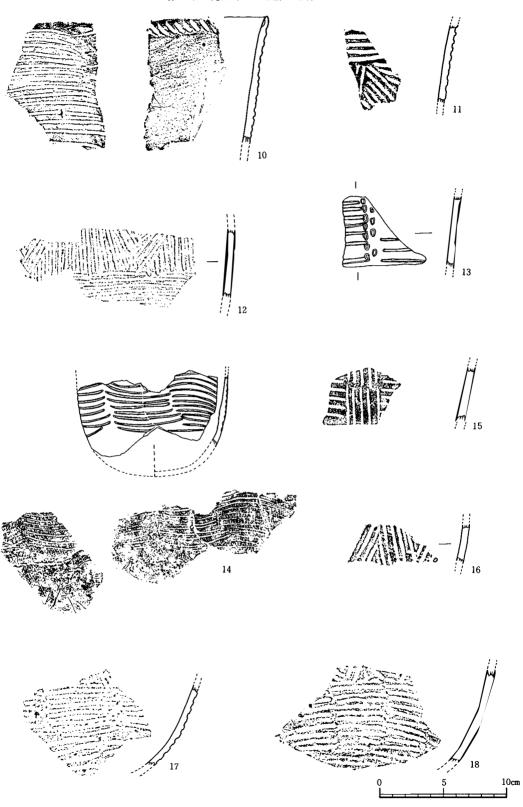
六弥太格子文 『着物文様事典』1973より

# 第3節 貯蔵穴遺構



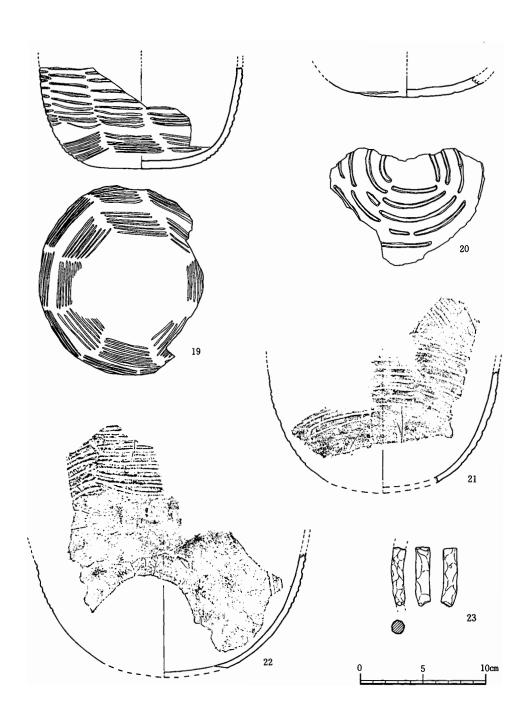
第94回 貯蔵穴内出土遺物実測図(1)

第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物



第95回 貯蔵穴内出土遺物実測図(2)

# 第3節 貯蔵穴遺構



# 6. 貯蔵穴に伴う遺物

#### (1) 編み物

今回、調査区より検出された貯蔵穴内からドングリ等の自然遺物と共に編み物が出土した。編み物は、総数62基のうち20基から出土しており、全体のほぼ1/3程である。貯蔵穴の基底面からの出土がそのほとんどであるが、貯蔵穴の中位面付近より出土しているものも数例認められる。 貯蔵穴の基底面より出土した編み物は、1号・9号・34号・36号・39号貯蔵穴などで壁面に沿って上方に立ち上がっているのが確認できている。また、36号貯蔵穴ではドングリが貯蔵されたままの状態で出土しており、編み物の中にドングリを入れて貯蔵した状態が見られた。編み物は、入れ口の部分が大きく、深いカゴ状の入れ物で厚さ1mm程に薄く裂いたものを網代編みで編んでおり、基本的には2本単位の2本越え2本潜りの編み方と思われる。そして水に強い材質を選び作成したものと思われる。編み物は全体のほぼ1/3にあたる20基から検出しているが、おそらく全ての貯蔵穴に使用されていたものであろう。詳細は第IV章第2節10で報告を行いたい。

#### (2) 円座

第11層の木の葉等の自然遺物を多く含む灰色粘土層の中から出土しており、貯蔵穴内の可能性が強い。二点出土しており、一方は植物の茎と思われる細い植物を数十本ほど束ねて直径10cm程の輪を作っている。他方は、ツルと考えられる植物材料を束ねて直径23cm程の輪を作っている。双方とも、同じ材料を数本使ってコイル状に巻いて束ねている。用途については、土器を安定させておいて置くための敷物、または、土器やものを頭の上に乗せて運搬するための敷物などを考えている。特に曽畑式土器は丸底であり必要性がある。

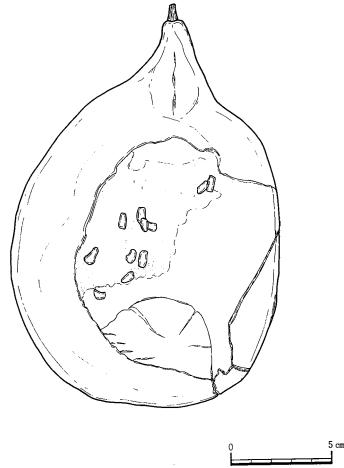
#### (3) 木製品

今回調査した貯蔵穴内からは、明確に加工痕が認められる木製品は出土は全く無い。しかし数 基の貯蔵穴内からは、長さ70cm程の木片が出土している。未加工のまま使用した可能性を持つ。

#### (4) 瓢箪

A-2 グリッドの北側部分で土層観察のために残しておいたブリッジの調査で検出されたものである。現地表より2.2 m程下げた第11層中からの出土である。43号貯蔵穴のすぐ西側に位置している。土圧により潰れ上面が少し破れていたが完全で中には種がびっしり詰まっていた。形状は、くびれが無い、洋なし型を呈しており、長さが19.1cm、幅が13.4cmを測る。なりくち部分には、ツルが8mm程残っている。残されたツルは自然落下ではなく、切断されたものと見られ、切り取ったか、もしくは手でもぎ取ったものであろう。外皮に加工痕はない。自生していたのか、それとも栽培していたのかは、この地への伝来経路解明とともに大きな問題である。明らかになった

ことの一つに、種の形状が福井県の鳥浜貝塚より出土したひょうたんの種に、極めて類似していることがあげられる。今後の事例の追加を待たねばならないが、この時期において、小規模の栽培が行なわれていた可能性も充分考慮されねばならないことであろう。外皮に全く損傷が無いことから、貯蔵穴のそばに置かれていた可能性があり、流されて来たとしても、近い距離からであろう。



# 第97図 瓢箪実測図

#### (5) その他

上記のもの以外で、貯蔵穴内から出土したものとしてまず、魚の鱗が挙げられる。魚の鱗は、14号貯蔵穴からの出土である。2号・8号・10号・12号など数基の貯蔵穴内からは、イノシシの下顎骨等の獣骨が出土している。また、13号・14号貯蔵穴など数基の貯蔵穴内からはドングリの破砕された表皮が出土している。これらの遺物は、すべて貯蔵穴の上面からの出土であり獣骨は小さく割られ、ドングリは破砕された表皮であることから、当地は調理の作業場ともされたのであろう。また、古い貯蔵穴のくぼみはゴミ捨て場とされたものと思われる。

# 第5表 貯 蔵 穴 一 覧 表

| 番号       | グリッド          | 担ね            | t (cm)              | 深さ(cm)         | 平面形              | 断面形        |  |  | 出土遺  | 物              |  |                               | 備考                         |
|----------|---------------|---------------|---------------------|----------------|------------------|------------|--|--|--|----------------|--|-------------------------------|----------------------------|
| H 3      | ,,,,          | 直径            | 長径×短径               | pre (cm)       | 1 111/112        | 1000/12    | 編み物  | 土器   | 石器   | 財 骨            | その他  | 自然遺物                          |                            |
| 1        | A-1           | 約100          | XENALE              | 約60(A)         | 円また              |            | 0  | 0  |  |                | 4 * * * * * *                                    | 木の葉                           |                            |
| 2        | B-2           | *3100         | 110 × 97            | 37(B)          | 横門               | 4          |  | (曾烟式)  | -  | イノシン<br>下顎など   | ツル状  | 木片・ドングリ(少)                    | 上面に人頭大の自然石                 |
| 3        | B-2           |               | 105 × 101           | 32(B)          | 円                | 4          | -  |  | 石皿   | LMAS.          | 植物   | ドングリ(少)                       | Zana / Carita              |
| 4        | B-2           | 110           |                     | 22(B)          | 不整円              | 4          |  | (曾畑式)  |  |                |  | ドングリ(少)                       |                            |
| 5        | B-2           | 100           |                     | 23(B)          | 円                | 3          | 0  | HANZU  |  |                |  | ドングリ(少)・<br>木の鉄・木片            | 上面に人頭大の自然石                 |
| 6        | B-2           | 90            |                     | 26(B)          | 円                | 4          |  | (曾畑式)  |  |                |  | 木の葉・木片<br>木片・木の葉・<br>ドングリ(少)  | 上面に人頭大の自然石                 |
| 7        | B-2           |               | 136 × 100           |                | 楕円               |            |  | /H MAXV  |  |                |  |                               | 検出時のまま全体振り<br>上げ。収蔵庫に保存    |
| 8        | B-2           |               | 110 × 92            | 35(B)          | 楕円               | 2          | 0  | (曾畑式)  | -  | 0              |  | ドングリ(少)・                      |                            |
| 9        | B-2           |               | 99 × 67             | 20(C)          | 精円               | 7          | 0  | 0  |  |                |  | 木の葉<br>木片・ドングリ(少)・<br>長方形の木の皮 | 上面に人頭大の軽石                  |
| 1 0      | A-2           |               | 166 × 150           | 42( B )        | 精円               | 4          |  | (曾烟式)  | 石皿   | 0              |  | 木片・木の葉                        |                            |
| 1 1      | A-2           |               | 78 × 70             | 65(A)          | 円                | 1          |  | (曾烟式)  | _  |                |  | クヌギ(多)                        |                            |
| 1 2      | A-2           |               | 115 × 103           | 32(C)          | m                | 7          | 0  | (HAMPY)  |  | イノシシの<br>肩胛骨など | ツル状<br>の植物                                       | ドングリ(少)                       |                            |
| 1 3      | A-2           |               | 113 × 104           | 75(A)          | Ħ                | 2          |  | (曾畑式)  | 野石皿  | イノシシの下顎        | */ JA 12   | ドングリ(少)・木片                    | 埋没後にゴミすて場に<br>している         |
| 1 4      | A-2・<br>B-2の境 |               | 170 × 138           | 60(A)          | 楕円               | 2          | 0  | (曾畑式)  | 73.111   | 1 22           | 魚の<br>うろこ  | ドングリ(少)・<br>木片・木の葉            | している<br>埋没後にゴミすて場に<br>している |
| 1 5      | A-3           | 65            |                     | 15(C)          | 円                | 6か7        | 0  | \ B.AH.X\  |  |                | 77,5   | 木片・木の葉                        |                            |
| 16       | A-2           |               | 89 × 71             | 9 (C)          | 精円               | 6か7        |  |  | -  |                |  | ドングリ(少)                       |                            |
| 1 7      | A-2<br>A-2    | 74            | 81 × 79             | 7 (C)<br>12(C) | 不整円円             | 6か7<br>6か7 | <del>                                     </del> |  | -  | 0              | _  | ドングリ(少)<br>ドングリ(少)            |                            |
| 1 9      | A-2           |               | 96 × 90             | 9 (C)          | Ħ                | 6か7        |  | -  |  |                |  | ドングリ(少)                       | 上面に人頭大の自然石                 |
| 2 0      | A-2           |               | 112 × 71            | 17(C)          | 精円               | 2          | 0  |  |  |                |  | ドングリ(少)                       | 上面に人頭大の自然石                 |
| 2 1      | B-2<br>B-2    |               | 91 × 81<br>74 × 57  | 25(C)          | 一円 # 四           | 7          |  | .0.  |  | 1/20           | -  | 木片・ドングリ(少)<br>ドングリ(少)         | 人頭大の自然石                    |
| 2 2      | B-2<br>B-2    | 48            | 14 × 5/             | 7 (C)<br>40(B) | 楕円               | 7 2        | -  | (曾畑式)  |  |                | -  | ドングリ(少)・                      |                            |
|          | B-2<br>B-2    | 48            | 07 11 00            |                |                  | 1          | -  | (曾加式)  |  |                |  | 木の葉 ドンクリ(少)・                  |                            |
| 2 4      | B-2<br>B-3    |               | 87 × 82<br>115 × 82 | 37(B)<br>77(A) | 楕円               | 5          | 0  | (資旗式)  | 石皿   |                | -  | 木の葉・木片<br>ドングリ(少)・木の葉         |                            |
| 26       | B-3           | _             | 62 × 59             | 22(B)          | 楕円               | 1          | <del>                                     </del> | -  | _  |                | -  | 末片・木の葉・                       |                            |
| 2 7      | A-2           |               | 100 × 90            | 10(C)          | m                | 7          | -  |  | -  |                |  | ドングリ(少)<br>ドングリ(少)・木の葉        | 後期か晩期                      |
| 2 8      | A-3           |               | 123 × 122           | 12(C)          | 不整円              | 3          |  | (資畑式)  |  |                |  | ドングリ(少)                       |                            |
| 2 9      | A-2           | 120           |                     | 19(C)          | 円                | 2          |  | (BADA)   |  |                |  | ドングリ(少)                       | 後期か晩期                      |
| 3 0      | A-3           | $\overline{}$ | 80 × 71             | 7 (C)          | 楕円               | 3          |  |  | -  |                | -  | ドングリ                          |                            |
| 3 1      | B-2<br>B-2    | 80            | 50以上×50             | 11(B)<br>30(B) | 桁 円              | 7 2        | -  |  | ├  | <del></del>    |  | ドングリ(少)                       |                            |
| 3 3      | B-2           | 100           |                     | 35(B)          | H <sub>_</sub>   | 4          |  |  |  |                |  | ドングリ(少)・木片                    |                            |
| 3 4      | B-2           | 推定 90         |                     | 20(C)          | 円                | 3          | 0  |  |  |                | <u></u>  | ドングリ(少)                       | 人頭大の自然石                    |
| 3 5      | B-2           | 35            |                     | 23(B)          | Ħ                | 1          |  |  | <del>                                     </del> |                |  | ドングリ(少)・木の葉                   | ドングリがそのまま残                 |
| 3 6      | B-2           |               | 96 × 72             | 17(C)          | 精円               | 7          | 0  |  |  |                |  | ドングリ (多) ·<br>木の葉             | り、ドングリの上面と<br>下面に編み物       |
| 3 7      | B-2           | 70            |                     | 22(B)          | 円                | 2          |  | (質畑式)  |  |                |  | ドングリ(少)・<br>木の葉・木片            | L面に人頭大の自然石                 |
| 3 8      | B-2           | 70            |                     | 16(C)          | 円                | 3          |  | 18/425/  |  |                |  | ドングリ(少)・木の葉                   |                            |
| 3 9      | B-2           |               | 81 × 71             | 22(B)          | H <sub>w</sub> m | 3          | 0  |  |  |                |  | ドングリ(少)<br>ドングリ(少)            | 上面に人頭大の自然石                 |
| 4 0      | A-3<br>A-2    |               | 77 × 56<br>130 × 95 | 8(C)<br>23(C)  | 楕円               | 2          |  |  | <del>                                     </del> |                |  | 木片・ドングリ(少)                    | 後期か晩期                      |
| 4 2      | B-2           | 70            | 130 × 33            | 2 (C)          | H 13             | ?          | <del>                                     </del> | <del>                                     </del>   | -  | <del></del>    | <del>                                     </del> | 767                           | IXAIN SCAI                 |
| 4 3      | A-2           | <u>_</u> _    | 73 × 69             | 55(A)          | 円                | 6          | 0  | (資畑式)  |  | 1              |  | ドングリ(少)・<br>木の葉               |                            |
| 4 4      | A-2           |               | 推定110×79            | 38( B )        | 精 円              | 7          |  |  | -  |                |  | 木片・ドングリ(少)                    |                            |
| 4 5      | A-2           |               | 132 × 127           | 21 (B)         | 円                | 1          | 0_   | (質畑式)  |  |                |  | 木片・ドングリ(少)                    | 後期か晩期                      |
| 4 6      | A-2           | 80            |                     | 38(A)          | 円                | 7          |  | (曾畑式)  |  | 0              |  | 木の葉・<br>ドングリ(少)               | 粘土紐の断片                     |
| 4 7      | B-2           | 105           |                     | 53(A)          | 円                | 2          | 0  | (曾畑式)  |  |                |  | 木の葉・<br>  ドングリ(少)・木片          |                            |
| 4 8      | A-2           | 70            |                     | 29(B)          | 円                | 3          |  | THE STATE OF THE S |  |                |  | ボングリ(小)・木片                    |                            |
| 4 9      | A-2           |               | 93 × 85             | 68(A)          | 円                | 4          |  | (曾畑式)  |  |                |  | 木の葉・ドングリ(少)・木片                |                            |
| 5 0      | B-2           |               | 127 × 115           | 19(C)          | 円                | 7          | <del>                                     </del> | (日)四天()  | 1  | 1              |  | 木の葉・                          | -                          |
| 5 1      | A-2           | 100           | -                   | 55(A)          | H                | 3          | <del>                                     </del> |  | -  |                |  | ドングリ(少)・木片<br>木の葉・<br>ドングリ(少) |                            |
| 5 2      | A-3           | 150           |                     | 38(B)          | 円                | 2          | <del>                                     </del> |  | -  |                |  | 木の集・                          |                            |
| $\vdash$ | A-3           | 80            |                     | 54(A)          | 円                | 6          | 0  | -  | 1  |                |  | ドングリ(少) 木の葉・                  | <del> </del>               |
| 5 3      |               | 80            | 62 4 52             | 54(A)<br>不明(C) | -                |            | 0  | -  |  |                | _  | ドングリ(少)<br>木の葉・<br>ドングリ(少)    |                            |
| 5 4      | A-2           |               | 63× 53              | _              | 円田               | ?          | +  | <del> </del>   | +-   |                | -  | ドングリ(少)<br>木の葉・<br>ドングリ(少)    |                            |
| 5 5      | A-2           | 81            | 110                 | 10(C)          | PI<br>m          | 7          |  | <del>                                     </del>   | +  |                |  | 本の鉄                           | -                          |
| 5 6      | A-2           |               | 110 × 100           | 59(A)          | l m              | 2          | -  | (曾畑式)  |  | -              |  | ドングリ(少)                       |                            |
| 5 7      | A-2           | 90            |                     | 38( B )        | l H              | 2          | _  | (曾畑式)  | -  |                |  | しじっかり(小さ                      |                            |
| 5 8      | A-2           |               | 70 × 65             | 30(B)          | Ħ                | 2          | -  | (方取智)  | _  |                |  | 木の業・ドングリ(少)                   |                            |
| 5 9      | A-3           | 44            |                     | 11(C)          | Ħ                | 6か7        |  |  |  |                | <u> </u>   | ドングリ(小)                       |                            |
| 6 0      | A-2           |               | 95 × 88             | 8 (C)          | 円                | 6か7        |  |  |  |                |  | 木の葉・<br>ドングリ(少)               |                            |
| 6 1      | A-3           |               | 106 × 84            | 70(A)          | 精円               | 2          | 0  |  | 1  | 0              |  | 木の葉・<br>ドングリ(少)               |                            |
|          |               |               | 172 × 130           | 79(A)          | 精 円              | 2          | 0  | T  |  |                |  | 木の葉・ドングリ(少)                   |                            |

## 第4節 第8~10層の遺物

## 1. 出土状況

調査は第10層上面まで重機による排土作業を実施し、その間は遺物の採集程度の調査で終えている。第10層は本来的な調査を行っているが、遺物の混在状況を見て一括での取り上げ作業を行っている。また、調査当初は遮水・排水状態の不備な状況のもとで調査を進めていたため、第10層と第11層との区分を明確にできずに第10層として一括して取り上げている遺物がある。ここでは、多くの時期の遺物があるため、可能な限り区分を行って報告を行いたい。

## 2. 第Ⅰ・Ⅱ 群土器

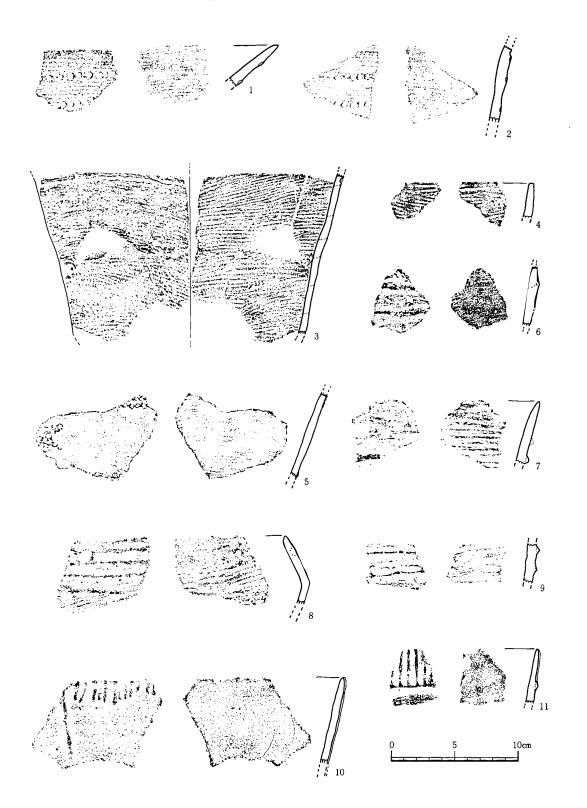
#### 第 I 群土器 (第99図15)

この層より出土した第 I 群土器は、1点だけで15がそれにあたる。15は、ローリングを受けかなり摩滅しているが、外面に粗大化した大型の楕円押型文が施文されており、傾き具合より深鉢の底部に近い部位で、底部は尖底になるものと考えられる。

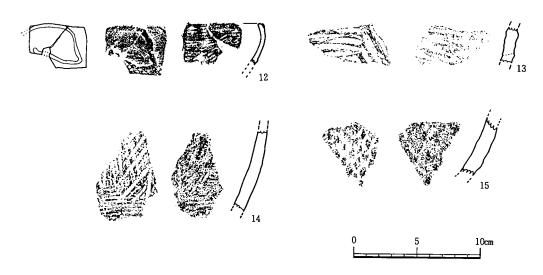
#### 第 Ⅱ 群土器 (第98図 1 ~ 第99図14)

1は、深鉢の口縁部片で口縁部が大きく外傾し広がることから、頸部でくの字状に屈曲する朝 顔形の器形になるものと考えられる。文様は、その大きく広がる口縁部に棒状工具により刺突文 が施される。器面調整は、内外面共に丁寧な条痕である。2は、胴部片であるが1と同じもので、 丁寧な条痕調整の後外面に刺突文を施している。1と2は共にA類に分類した。3は、深鉢の胴 部片で胴部上半から口縁部にかけて細い沈線状の押引き文を施文している。ただし、口縁部と底 部を欠失するため形態は不明であるが、直口する口縁部で底部は傾きより丸底と考えられ、B-1類に分類した。4は、条痕調整だけの無文の口縁部片で、口縁端部はナデて平坦面を作り出して いるが刻目は施さず、器壁は薄い。D-2類に分類した。 5 は、外傾しながら立ち上がる胴部片で、 その胴部に明確には不明であるが刺突状の刻目を施した隆帯を縦と横に貼り付けた区画帯を作り 出した後、中に区画帯と同じ刺突状の刻目を施した隆帯をX状に貼り付け充塡しているようであ る。条痕による調整は、非常に丁寧で器壁が薄く焼成が良好なのが特徴である。 E-10類に分類 した。6・7は、隆帯を横走させ貼り付けた口縁部または近くのもので、口唇部に刻目を施さな いE-1b類に分類したものである。口縁部の形態は、共に直口するものでやや外傾する。7の 口唇部は、やや尖り気味である。8は、口縁部に隆帯を4条横走させたもので、口唇部はナデて 丸くなるが刻目は施さない。6・7と同じくE-1a類に属する。ただし、器形は異なり胴部上 半で内側に内傾しそのまま口唇部に至るもので、器高が浅い浅鉢と考えられる。また、外面より |穿孔した補修孔が認められる。9は、隆帯を横走させ貼り付けた口縁部近くの破片で、口縁形態 や刻目を施すかどうかは欠失するため不明である。E-1類に属するものである。10は、直口す

第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物



第98図 第10層出土土器実測図(1)

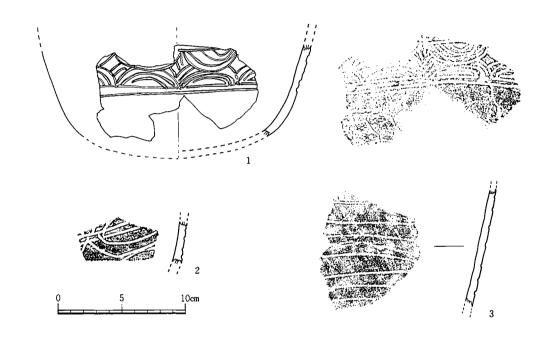


第99回 第10層出土土器実測図(2)

る口縁部をもつ鉢または深鉢の口縁部片で、全体の文様モチーフは不明であるが口唇部より1本 単位の隆帯を縦走させ区画帯を設けた後、さらに口唇部より長さ1.5cm程の粘土紐を縦方向に張 り付けているが、この粘土紐は雑に貼り付けられている。この土器の口唇部の文様は、雑に貼り 付けたのが意図的なものかどうかは不明だが、今回の調査で43号貯蔵穴内より出土した編み物の 口の部分、つまり余った材質をツル状の植物を巻いて束ねた部分にそっくりであることを付け 加えておきたい。また、口唇部は丸くなり土器自体がローリングを受け磨滅しているが、内外面 共に丁寧な貝殻条痕による器面調整を行っている。11は、直口して立ち上がる口縁部に隆帯を横 走させ貼り付けた後、口唇部との間に約5㎜間隔で隆帯を縦走させ貼り付けた文様モチーフをも つもので、 E-4類に属するものである。 12は、 これも特殊な土器で浅鉢と考えられる口縁部片 である。底部より、外傾しながら立ち上がり口縁部に至るもので、口唇部直下で内湾する。文様 は、土器の大部分を欠失することからどのような文様モチーフなるかは不明であるが、口縁部を 中心に隆帯を横に長い楕円形に貼り付けている。口縁部は、ナデて端部は丸くなるが刻目は施さ ない。また、この土器は器壁がかなり薄いのが特徴で、器面調整の貝殻条痕は丁寧で外面は貝殻 条痕の後丁寧なナデである。一応E-5類に分類しておきたい。13は、胴部片で外面に幅が広く 先の丸い棒状工具による凹線で重弧文状の文様を施文している。内面は、外面文様の施文具と同 一のもので器面調整を行っている。この土器は、外面に凹線状の文様を施文しているが、中期の 阿高式ではなくまた内面を条痕による調整を行っていることから第Ⅱ群の中に入るものと考えた。 14は、貝殻条痕による深鉢の胴部片で、斜方向の条痕を組み合わせて複合鋸歯文らしきものを描 いている。また、器壁が厚く焼成もあまり良くないことから、D類に属するもので松本・富樫分 類では轟A式に当たるものと考えられる。

## 3. 第Ⅲ群土器

第Ⅲ群土器が3点ある。1は二条の明瞭な横区画をなし、上下に向き合う重弧沈線文を充填させている。2も同様に横区画と重弧沈線文様を施した土器であるが簡素化された文様と見れる。3は細い沈線文があるもので、内面もナデ調整であり所在を明確にできない土器である。一応、この時期の範疇にはいる可能性があるものとして取り上げておきたい。



第100図 第10層出土土器実測図(3)

## 4. 第Ⅳ群土器

第Ⅳ群土器として84点を取り上げている。第Ⅳ群—A~E類らに分類して報告を進めたい。分類の主なる(原則的)ところは以下の通り。

第Ⅳ群—A類 :刺突文+横区画沈線文・充塡文様(複合鋸歯文・直線文)

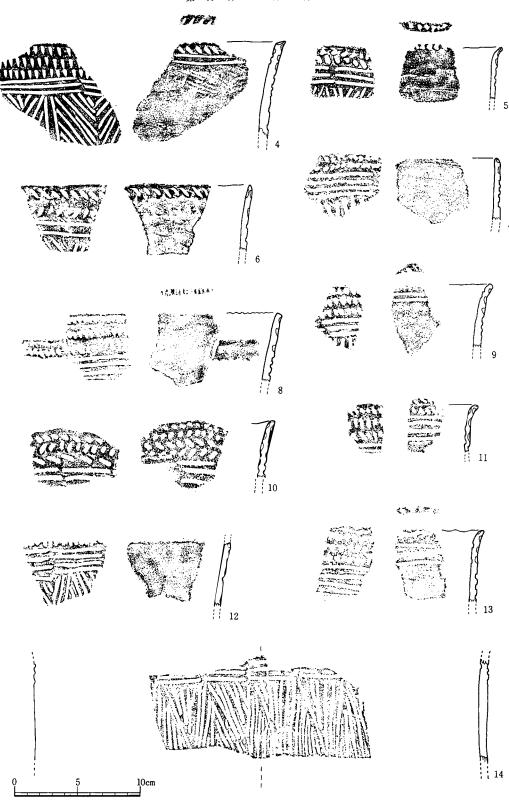
第Ⅳ群—B類 :刺突文+山形文

第Ⅳ群一C類 : 刺突文+横沈線文

第Ⅳ群一D類 :刺突文なし、縦区画沈線文+菱形状文様

第Ⅳ群—E類 :刺突文なし、横沈線文

第Ⅳ群—F類 :刺突文なし、斜格子文・沈線羽状文・その他



第101図 第10層出土土器実測図(4)

## 1) 第IV群─A類土器 (第101図4~第102図26)

この土器群として23点を取り上げている。10点の口縁部はⅡ類7、Ⅲ類4~6・8~13となり、5・9・11はやや外弯ぎみである。口唇部の形状はⅡ類6、Ⅲ類7・13、Ⅳ類4・5、Ⅵ類8~10などに分けられよう。

特徴的に刺突文、横区画沈線文、複合鋸歯文、短沈線文と連続することが見られる。刺突文は2条5~7、3条4・8~11・13とがある。刺突文の各点は「逆三角形点」、「楕円形点」、「丸点」、「短沈線状点」があり、バラエティーに富む。構成文様は「帯列」や、くの字、「羽状文」を形成する。口唇部文様の施文も半数を越えている。内面文様も多く、7点に見られる。刺突文+横沈線文が原則と見られ、両者が単独となる場合と、逆に10に見られるように重厚に施すものもある。横区画沈線文は2~4条あり、短沈線文である。

12は斜行沈線文を密に施した所謂複合鋸歯文が見られ、同様に15~24にも見ることができる。 21では破片の中央部に横区画沈線文があり、複合鋸歯文が上下2段に構成されているものがあ ることを確認できる。また、22は乱れた沈線文であるが、粗い施文のなかに複合鋸歯文と底部 へ続く短沈線文を認めることができる。

25・26は胴部から底部へかけての資料であるが、横沈線文があり、複合沈線文ではなく、縦沈線文を充塡させたものと判断できる。

## 2) 第Ⅳ群—B類土器 (第103図24~40)

器面や内面に山形文の施文がある土器群14点を纏めて見たものである。 8 点の口縁部は I 類 29、Ⅲ類27・28・31~33、 V 類30・34と分けられる。口唇部はやや平たくなるものが凌駕している。刺突文は 6 点に見られ、 1~3条があり、丸点が多く「帯列」となることを指摘される。また、口縁部 8 点全ての内面に施文されている高率が注目される。口唇部施文も 5 点あり過半数となっている。刺突文と短沈線文様に山形文を加える文様構成が普遍と見れ、山形文は両面にあるものと、片面だけに施文されたものがある。

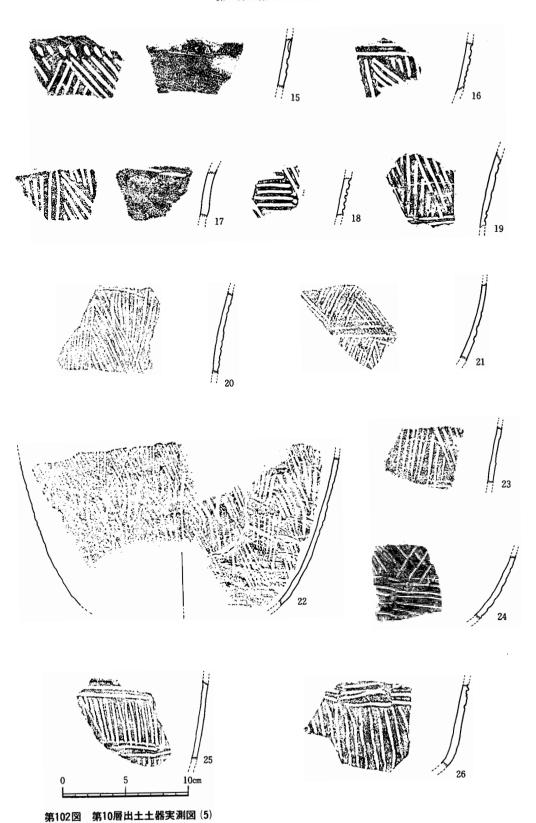
35は第3文様帯に弧沈線があり、36・38は網代文、37は複合鋸歯文もありバラティーに富む。39は小破片であるが、波状する口縁に細い山形文、横区画沈線文を確認できる。同じく40も刺突文を持たないが、複合鋸歯文の下位に横区画文を施し、山形文を重ねている。鋸歯文と山形文との関わりを示しているものであろうか。

#### 3) 第Ⅳ群—C類土器 (第104図41~48)

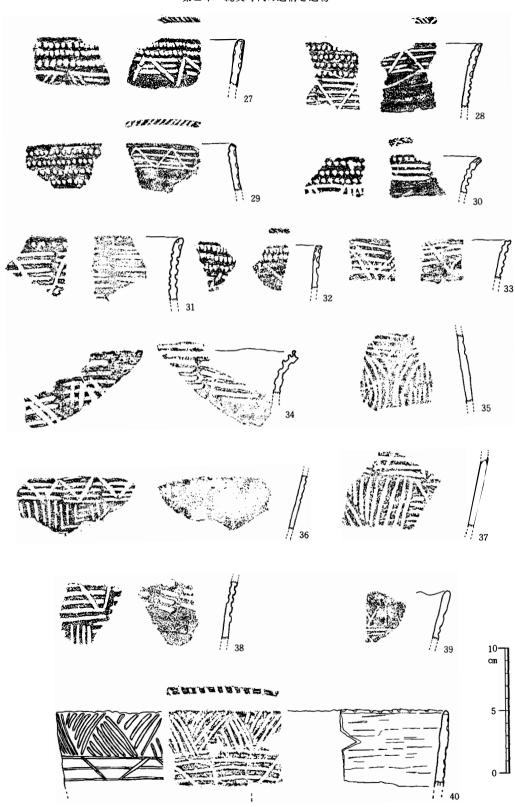
刺突文の後、下位はすべて沈線文を施す土器群がある。41はやや外反する深鉢で、口唇部は 幾分平らとなっている。横に長い沈線文でもある。なお、刺突文は5条と多く、羽状文を構成 している。42~44はその胴部片と思われる。

#### 4) 第IV群—A~C類土器:□縁部(第104図45~第105図61)

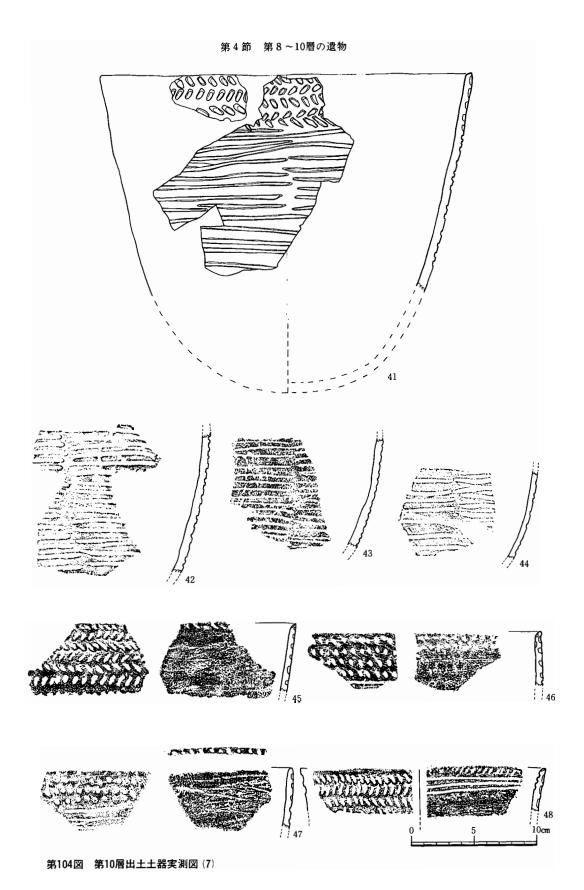
刺突文を施す17点の口縁部があるが、何れも小破片であり、全体の構成文様を明らかに出来ないものである。楕円点の刺突文は羽状文を、丸点の刺突文は帯状文を構成する傾向がある。



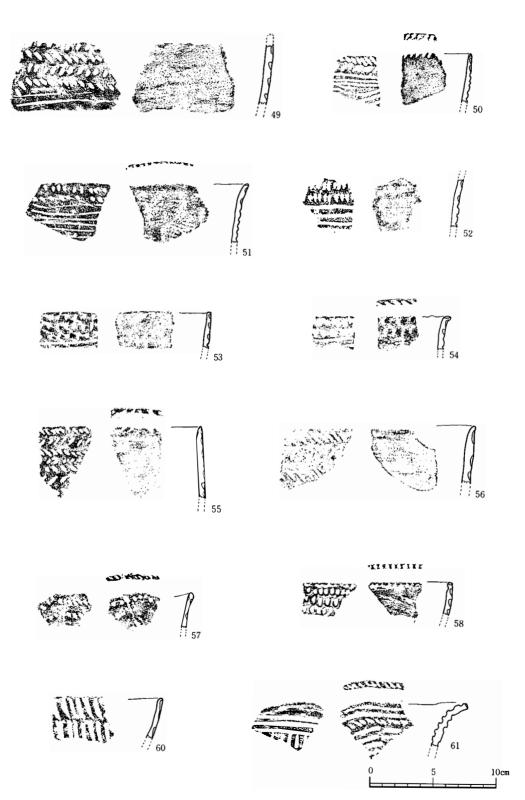
第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物



第103回 第10層出土土器実測図(6)

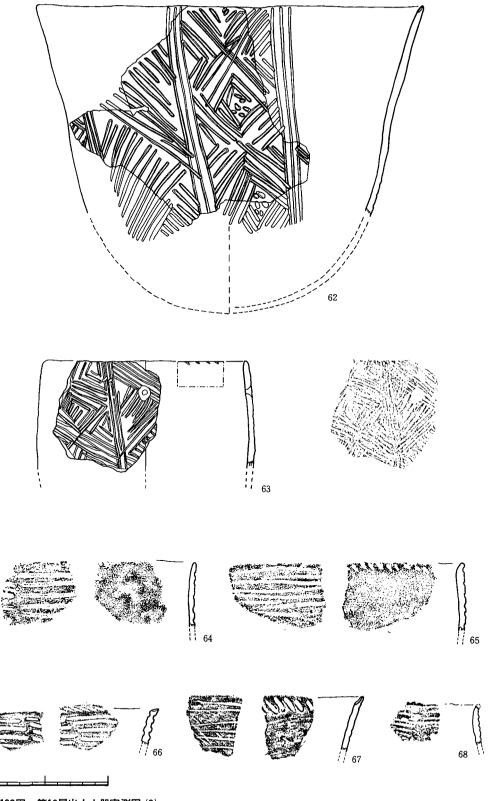


— 150 —



第105図 第10層出土土器実測図(8)

第4節 第8~10層の遺物



第106図 第10層出土土器実測図 (9)

第2文様帯が横区画沈線文となるのか、単に沈線文になるのかの判断が困難である。恐らく横区画沈線文を有する可能性が強いものとして、46・47・49・50・52~54などを挙げられよう。 IV群—A類に相当しよう。45・55は7条の刺突文で特異であり、48は内面に3条の沈線文と多い。57~60は小型の深鉢で57は波状口縁、59は非常に小さな刺突文を施文する特色がある。また、60は短沈線文状の口縁文様であり、刺突文の範疇に含めるのか判断が困難である。61も特異な大きく外反しやや羽状する口縁部で、独特の文様を構成している。内面は上下の沈線文に挟まれた状態で、刺突文が施されている。内面調整のナデ調整が不充分で、ヘラ調整や条痕が若干認められるものもある。

#### 5) 第IV群—D類土器 (第106図62·63)

D類は刺突文がなく縦区画沈線文を施し、幾何学文様を充填させている土器である。62は口縁部がやや外反する大形の深鉢である。3本の縦区画沈線文が3組確認できる。この区画を行った後、「×」で小区画を行い、「六弥太格子文」状の施文が見れる。形成された「菱文」の内側は刺突文で埋めている。隣の文様帯は斜行する沈線文様で鋸歯文を構成しており、この施文形態を横方向に繰り返すものであろう。63は口縁部がやや内傾する深鉢であるが、全く同様の施文形態を示している。

#### 6) 第Ⅳ群—E類土器 (第106図64~68)

E類は器面に刺突文がなく、短沈線文だけの施文である。刺突文の幅や深さは種々であり、 口唇部、内面に刺突文を施したものがある。

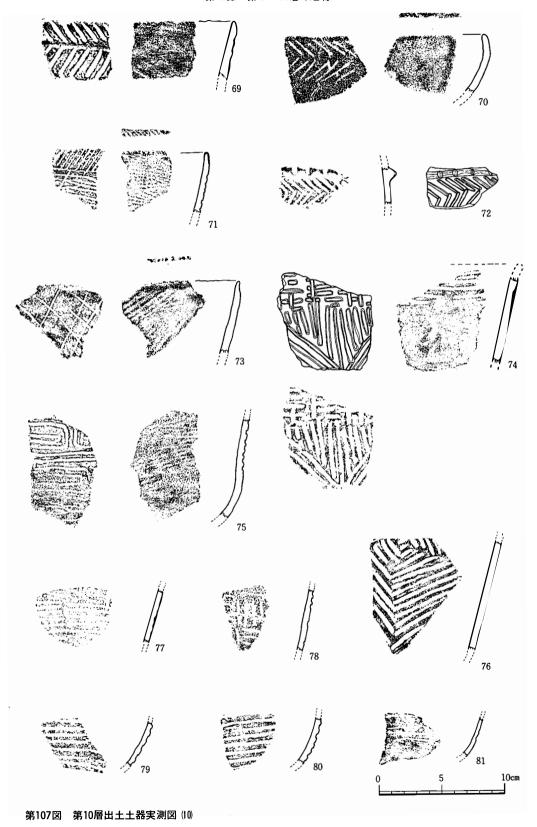
#### 7) 第IV群─F類土器 (第107図69~73)

69・70・72は沈線による羽状文である。「沈線羽状文」とでも呼べようか。70の器形は椀形 土器である。72は滑石が混入されており、特徴的なことにカマボコ状で刻みを施した突帯を有 している。71は内面に条痕の調整痕を残し、特異な文様構成を示す資料である。73も同様の形態を示すものであるが、浅い沈線で「菱格子文」を見せている。やはり、内面に条痕の調整痕 を残している。

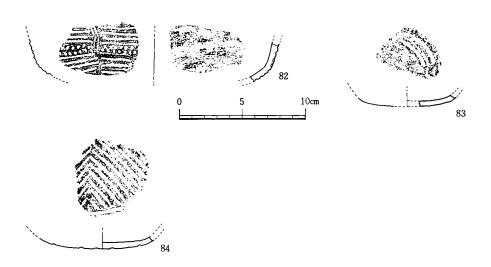
#### 8) 第Ⅳ群土器:胴部・底部 (第107図74~第108図84)

全体文様を明確にできない胴部・底部片である。74は内面の短沈線文から口縁部であり、刺突文を持つことなく短沈線文、鋸歯文を構成するものであろう。75は雷文状である。76は斜行する沈線文と菱形内を刺突文で埋めることにより、D類の胴部片と判断される。77・78は網代文と見れる。82は底部近くの破片であるが、沈線文に挟まれ2条の刺突文がある。縦区画沈線文も有している。84は鋸歯文の施文が明確である。

第4節 第8~10層の遺物



第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物

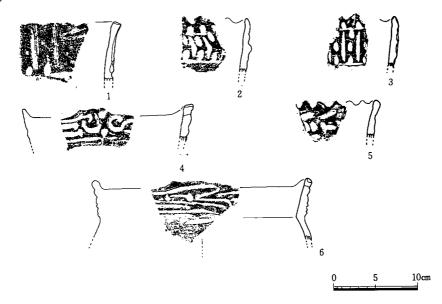


第108図 第10層出土土器実測図(川)

## 5. 第 ¥ 群土器 (第109図1~6)

この群の土器の出土点数は、非常に少ない。 1~3と5は、直口して立ち上がる鉢または深鉢の口縁部片である。いずれも、口唇部には指を器面に深く押し付け刻目状に刻んでいることから、口縁部はさざ波を呈しているのが特徴である。口縁部の破片であることから胴部の形態や文様については不明であるが、口縁部文様は凹点文と直線的なやや幅広の凹線文を組み合わせて施している。 1 には、胎土に少量の滑石粒を含むが、他の土器には全く含まない。器面調整は、すべてナデで、色調は 1 が淡い暗褐色で 2・3 は赤褐色、5 は黒みを帯びた赤褐色である。 4 は、復原口径20.4cmを測る鉢の口縁部片である。口唇部は、ナデて平坦面を作り出した後山形の突帯を貼り付け、その突帯の頂部には 2 カ所指を押し付け刻目状に刻んでいる。口縁部文様は、前記の土器と同じく凹点文とやや幅広の凹線文を組み々わせて作り出しているが、前記の土器との相違点は簡略化した渦巻文と思われる曲線の文様が入ることである。器面調整は、ナデで色調は暗褐色を呈する。6 は、復原口径26.4cmを測る深鉢の口縁部片である。頸部でくの字状に屈曲した後、直口気味にやや外傾して立ち上がり口唇部に至り、胴部は若干膨らむものと考えられる。口唇部は、4 と同じくナデて平坦面を作り出した後、山形の突帯を貼り付けた後頂部を 4 カ所刻目状に刻んでいる。文様は、口縁部のみで胴部には施さない。口縁部文様は、凹点文と曲線化した細い凹線文を組み合わせたものを施している。曲線化した凹線文は、入組文の簡略化したものであろうか。

以上の土器は、一般的に阿高式または阿高系と呼ばれる土器群で、いずれも、文様が口縁部に 集約されることや凹線文が直線化すること、またそれぞれの文様が簡略化されていることなどの 理由より、阿高式土器の中でも後出のものと考えられ中期の後葉から末に位置付けられるものと 考えられる。

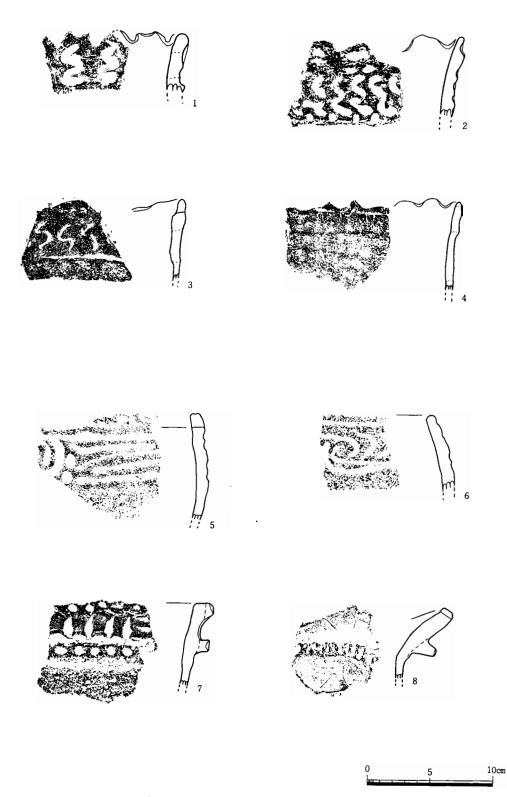


第109図 第10層出土土器実測図(第V群)中期

## 6. 第VI群土器 (第110図1~第111図10)

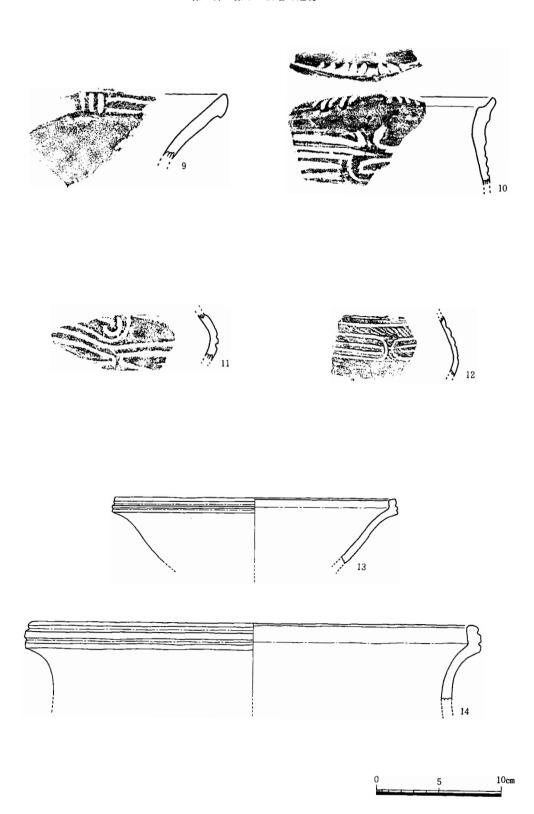
この群の土器は、型式的に数型式の土器群に分けられるが、ここでは後期に属する凹線文系の 土器として一括して取り扱い「第VI群土器」とした。

1と2は、直口する深鉢または鉢の口縁部片で、口唇部は指を深く押し付け刻目状に刻んでいることからさざ波状を呈する。文様は、肥厚させた口縁帯に「W」字状の凹線文を併列させている。器面調整は、共にナデて、色調は共に黒みを帯びた黄灰色である。3は、口唇部をナデて平坦面を作り出した後山形の突帯を貼り付けた深鉢の口縁部片で、口縁部は直口して立ち上がる。文様は、口縁直下に棒または箆状工具による細い凹線を横走させ文様帯を作り出し、その文様帯の中に同施文具により「S」字状の文様を描き並列させている。器面調整は、ナデで色調は淡い黄灰色をしている。4は、直口して立ち上がる深鉢口縁部で、口唇部には指を深く押し付け刻目状に刻んでいることからさざ波状を呈する。口縁部には、幅1.5cm程の文様帯を作り出しているが文様はない。器面調整はナデで色調は淡い褐色を呈する。5は、若干内湾する深鉢の口縁部片で、ナデて平坦にした口唇部には突帯を貼り付けている。文様は、口縁部にのみ施され、やや幅の狭い凹線と凹点を組み合わせて文様を描いている。器面調整は、ナデで色調は薄い暗褐色を呈する。6は、5と同じく若干内湾する深鉢の口縁部片で、やや幅の狭い凹線で入組文と考えられる曲線化した文様を施文したもので、文様は口縁部に集約される。器面調整は、ローリングを受け磨滅しているため不明で、色調は薄い黄灰色を呈する。7は、直口して立ち上がる深鉢の口縁部片で、



第110回 第10層出土土器実測図(第Ⅳ群)後期(1)

# 第4節 第8~10層の遺物



第111図 第10層出土土器実測図 (第 VI · VII · VIII群) 後期 (2)

口唇部と直下の口縁部に幅1 cm程の断面がカマボコ形を呈した2条の突帯を平行させ貼り付け、その突帯には指頭による凹点により刻みを施す。突帯間の文様帯には、縦と横の凹線文を組み合わせた文様を構成する。器面調整は、ナデで色調は薄い暗褐色を呈する。8 は、肥厚させた山形の口縁部を持つもので、頂部には刻みを施す。器形は、頸部で屈曲した後口縁部は外反する。また、頸部屈曲部のやや上方には幅1 cm高さ1.5cm程の突帯を貼り付け、その突帯には細い刻目を施す。器面調整は、ナデで色調は薄い黄灰色を呈する。9 は、口縁部が外傾しながら大きく開くもので、器形は深鉢と考えられる。口唇部直下には、幅1 cmほどの文様帯を作り出し、文様帯には棒状工具によると考えられる細くて深い凹線文を3条縦に施したものを基本として、左右に2条平行して横走させ文様を展開させている。器面調整は、ローリングを受けて磨滅していることから不明で、色調は薄い褐灰色を呈する。10は、口縁部が内傾する深鉢の口縁部片で、口縁部は低い山形を呈する。口唇部には、山形の一番低い部分に合わせて平坦面を作り出しその面には凹点文を施す。また、山形の峰部分にも刻目を施している。口縁部外面には、棒状工具による細い凹線で渦巻文らしき文様を描いている。器面調整は、ナデで色調は黒味を帯びた薄い灰褐色を呈する。

以上、「第VI群土器」について説明を行ってきたが、これらの土器群は凹線文により文様を構成することから中期阿高式土器の流れをくむものと考えられ、前述したように文様の特徴より後期の初頭から中葉にかけて数型式に分けられる。 $1 \sim 4$  は後期初頭の南福寺式に、 $5 \sim 8$  は出水式にそれぞれ比定できるものと考えられ、また $9 \cdot 10$ は中葉頃に位置付けられるものと考えられる。ただ、10は文様モチーフの特徴より磨消縄文が施される直前のものと考えられ鐘が崎系の土器であろうか。

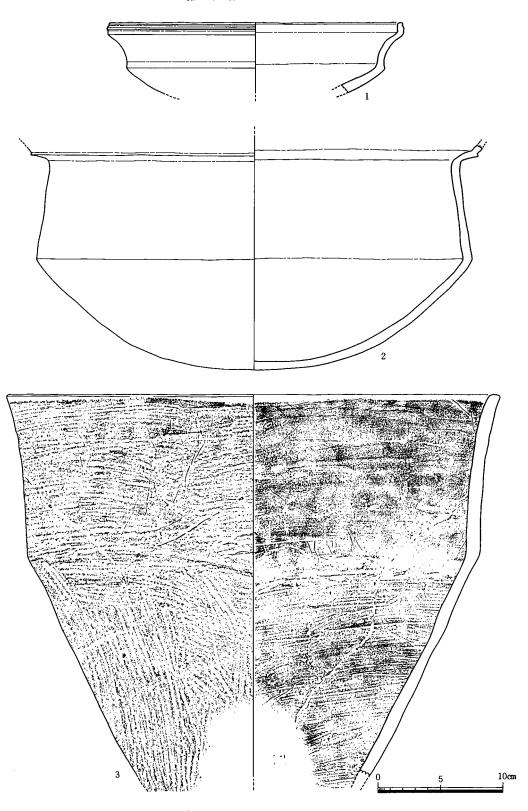
## 7. 第**W**群土器 (第111図11·12)

磨消縄文系の土器群を「第Ⅲ群土器」とした。11と12は、共に胴部が膨らみ頸部がくの字状に屈曲した後、口縁部が大きく開く器形の深鉢胴部片である。11は、胴部に縄文を施した後箆状工具による細くて深い凹線により入組文を施し、中の縄文を部分的に磨り消している。器壁は薄く器面調整はナデで色調は暗黒灰色を呈している。また、器面はローリングを受け磨滅しており縄文は消えかかっている。12は、胴部上半より頸部にかけて文様を施したもので、縄文を施した後箆状工具による細くてシャープな凹線により、左右対象の文様を描き中の縄文を部分的に磨り消している。凹線文は、曲線も含むが全体的に直線的な感じを受ける。器壁は、4mmと非常に薄く、器面調整は外面が研磨内面がヘラ削りである。また、色調は外面が黒色内面が暗褐色を呈する。11は、鐘ケ崎式に12は三万田式に比定されるものと考えられる。

#### 8. 第**亚**群土器 (第111図13·14)

後期末の土器群を『第Ⅷ群土器』とした。この土器群は、器形・文様・器面調整などの特徴よ

第4節 第8~10層の遺物



第112回 第10層出土土器実測図 (第12群) 晩期

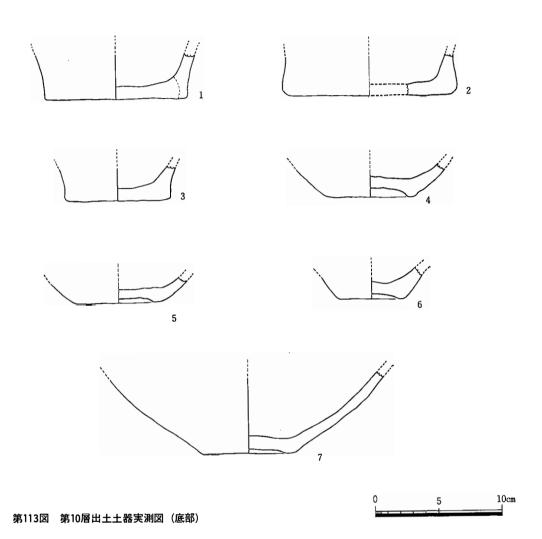
り御領式に比定される。13は、浅鉢片で復原口径22.6cm、現存高5.2cmを測る。底部よりほぼ直線的に大きく開いて立ち上がってきた後、幅1cm程の内傾する口縁帯が付く。口唇部は、面を作り出し、口縁帯には2条の沈線が施される。器面調整は、内外面共に研磨で色調は黒色を呈する。14は、精製深鉢土器の口縁部片で、復原口径35.8cm、現存高5.9cmを測る。頸部がすぼまった後緩やかに外反しながら広がり口縁部に至るもので、口縁部には幅2cm程の口縁帯をもつ。口縁帯は、内傾し2条の沈線が施される。器面調整は、内外面共に研磨で色調は淡い暗褐色を呈する。

## 9. 第 X 群 土 器 (第112 図 1 ~ 3)

晩期の土器を一括して「第IX群土器」とした。この群の土器も、数型式に分けられる。1は、 浅鉢で復原口径23.4cm、現存高5.6cmを測る。器形は、胴部が内側に屈曲した後頸部下半で一旦 すぼまり、緩やかに外反しながら広がり口縁部に至る。口縁部には、幅1cm程の口縁帯をもつ。 口縁帯は、内傾し2条の浅い沈線が施される。器面調整は、ローリングを受け磨滅しているため 不明だが、色調は淡い暗褐色を呈する。2は、大型の浅鉢で口縁部を欠失するため口径は不明で あるが、胴部最大径34.8cm、現存高17.6cmを測る。底部は、丸底で内湾し大きく開きながら立ち 上がり、胴部ではやや内側に屈曲し頸部は内傾気味に直口しながら長く立ち上がる。胴部の屈曲 部には、明確な稜が認められ屈曲部は底部近くに下がるのが特徴である。口縁部は、大きくくの 字に屈曲した後外傾する口縁帯が付き、その口縁帯には数条の沈線が施されるものと考えられる。 器面調整は、内外面共に研磨で色調は黒色を呈し、また内外面には多量のススが付着している。 3は、粗製深鉢片で底部の形態のみが不明である。器形は、胴部で内側に屈曲した後、直口気味 に立ち上がり口縁部がやや外反して広がる形態をもつ。土器の法量は、復原口径は39.6cm、現存 高30.4cmを測る。器面調整は、内外面共に条痕で外面にはススが付着している。また、色調は内 面が暗褐色外面が黒色を呈している。器形の特徴より、1と2は晩期初頭の天城式に、3は晩期 前半の古閑式に比定される土器と考えられる。

#### 10. 底部 (第113図1~7)

1~3は、平底の底部片で、法量は1が底径11cm、2が底径13.8cm、3が底径8.2cmを測る。いずれも、深鉢または鉢の底部片であろう。器面調整は、1と3の底部外面がヘラ削りで外面の他の部分と内面はナデで、2は全体ナデで仕上げている。また、色調は1と3が薄い黄橙色で2が明るい暗褐色である。4~7は、底部を削り取ったものでいわゆる上げ底の底部片である。法量は、4が底径6.8cm、5が6.6cm、6が5.2cm、7が7.4cmを測る。器面調整は、4と5の外面が研磨で内面がナデ、6が内外面共にナデ、7が内外面共にヘラ削りである。色調は、4が薄い黄灰色、5が内面黒色で外面が薄い明褐色、6が内面黒褐色で外面が淡い黄橙色、7がやや明るい暗褐色である。また、5と6は、内面にススが付着している。いずれも、時期的には後期に属する底部と考えられる。



#### 第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物

### 11. 石器・抉状耳飾

時期を明確にできない資料であるが、17点の石器を報告しておきたい。

1・2は石鏃である。1は薄い歪みのある安山岩の剥片を素材としており、粗いリタッチで終了している。2は部厚いチャートが素材で、プレッシャーフレーキングを施しているが良質でない石材が原因しているのでもあろうか端正な仕上がりとはなっていない。 先端の尖りも不充分で、脚部は不揃いである。

3はリタッチの見れる石器であるが、器種を明確にできない。不定の調整剥離であるが、先端 が尖ることによりドリルとして用いられたものであろうか。

4~6は石匙である。4は安山岩、5・6は黒色のチャートの剥片を素材としている。4は粗い刃部加工で不整な形状を示すが、折れたあと再加工を施している。後者の2点は綿密な刃部加工を行い、摘み部位を丁寧に作成している。

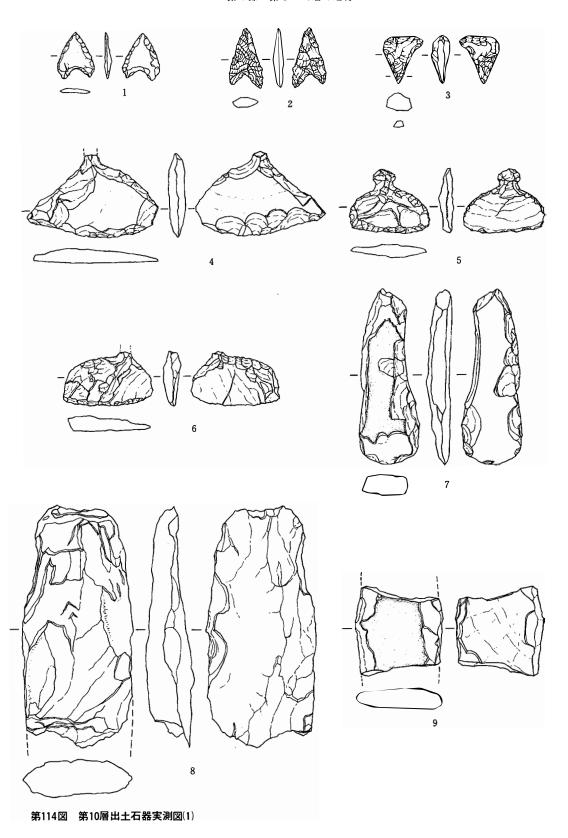
7は打製石斧であるが、安山岩の剥片を素材としたもので、側面は一方が粗い調整で片方は折断した平坦面をその儘に残している。刃部は細かな剥離を加え弧を描く。8・10は磨製石斧、9は打製石斧の破片である。

11は円盤形石器である。両面は自然面であり粗い調整剥離を加え円形化をはかっている。

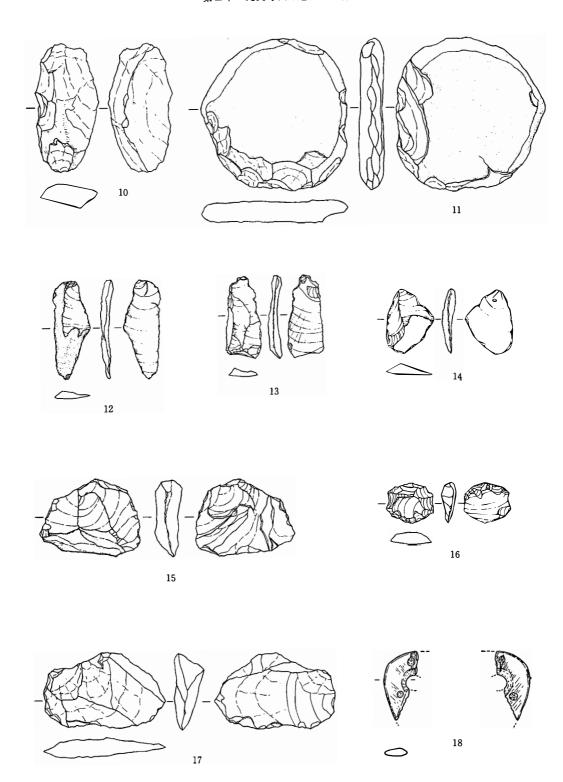
12~14は何れも黒曜石の、使用痕のある剥片である。良質の黒曜石であり、それなりの剥片剥離技術の展開が見れる。

15~17はスクレーバーと見れる。不整形剥片の縁片に刃部加工しており、16はラウンドスクレーパーとできる。

18は A — 2 区第10(砂礫)層から出土している。抉状耳飾の欠損品で全体の半分程を欠失する。形態は、逆三角形を呈するものと考えられ下方に切り込みが入る。両端の欠損部分には、直径 5 mmで中心径 1 mmの孔を両側からあけており、上方の孔は貫通し、下方のは途中で止めている。これは、欠損した抉状耳飾りに穴をあけ、ペンダントに再利用したものであろう。石材は、乳白色を帯びたくすんだ縁色を呈し、硬玉と判断されるであろう。



第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物



第115図 第10層出土石器実測図(2)

## 第4節 第8~10層の遺物

# 第6表 出土土器観察一覧表・第Ⅰ・Ⅱ群土器(1)

| 番号       | 分類等名                         | ヴッッキ      | 出意             | 28        | 残存部位         | 形類の特殊<br>ロ 録 部<br>底 部                            | 文様の特徴  | 口唇部<br>第文  | 住<br>住<br>四<br>四<br>百 | 数数   | 色<br>外            | 肉内                 | 胎土<br>1. 角閃石<br>2. 長石<br>3. 石英 | 類根        | <b>等面</b>       | 四整内             | 6Q <b>*</b> 5                               |
|----------|------------------------------|-----------|----------------|-----------|--------------|--|--|------------|-----------------------|------|-------------------|--------------------|--------------------------------|-----------|-----------------|-----------------|---|
| 1        |                              | A - 4     | 2.756          | 原体        | 口級部          | 類部で組飾、ロ<br>緑部が大きく開                               | 2条の劉奕文   | +>         |                       | 0.9  | 瓜色                | やや明るい明報色           | 3. 石英                          | я         | 貝級条項            | 貝要条項            |   |
| 2        | 184                          | A · B · 2 |                | 森林        | 野部           | -S   | 3条の創突文   |            |                       | 0.9  | 黑色                | やや明る<br>い暗褐色       | 1 2                            | Ą         | 貝穀条旗            | 貝敬条項の<br>あとナデ   |   |
| 3        | 日本<br>B-14日<br>日本            | A - 4     | 2.596<br>2.646 | 深体        | <b>新</b>     |  | シャープな押引き文  |            |                       | 0.65 | 暗褐色               | 明るい<br>野猫色<br>やや聞い | 1                              | Ą         | 典與              | 条庭              | 外面にはスス付着                                    |
| 4        | D-2和<br>II群                  | A - 4     | 2.741          | 外型        | 口袋部          | <b>đ</b> o                                       |  | +>         | <u> </u>              | 0.6  | かや時い              | 黄ি色                | 1 3                            | Ą         | 条項              | 条棋              | 二本単位で区画を搬し中に                                |
| 5        | E-10 🛱                       | A · B · 2 |                | 深体        | 野郎           |  | 陸帯の上から刺突   |            |                       | 0.6  | 黑色                | <b>無色</b>          | 2                              | 良         | 条旗の後ナ           | 条旗の後ナ           | 二本単位で区画を施し中に<br>X状に腫帯を施す。さらに<br>その上から刺突     |
| 7        | I 群<br>E-1 b 知<br>E-1 b 知    | B - 4     | 2.649          | 深体        | 口較部          | 直口しやや外類  | 断面三角形の隆帯を模位に<br>貼り付け   |            |                       | 0.8  | 質無灰色              | <b>食無灰色</b>        | 3                              | <b>木良</b> | 条項の後ナ           | 条件              | やや母親  |
| 8        | E-16類                        | A - 4     | 2.700          | -         | 口枝部          | 直口しやや外類<br>類部で内側に屈<br>曲、そのまま口<br>縁部は内質           | 関位の貼り付け随符<br>展曲部より上部に三条の関  | ナシ         |                       | 1.0  | 灰褐色               | 黄灰色                | -1                             | Ŗ         | <del> </del> -' | 祖い条項            | 相修孔あり<br>やや磨滅している                           |
| 9        | E-15 🛱                       | A - 4     |                | 没体        | 日報部          | 緑部は内質  | 位の貼り付け随着   | 72         | ļ.,                   | 0.7  | 薄い気褐色<br>音福色      | 野褐色                | 3                              | 良好        | 条項              | 条項              | やや療滅している                                    |
| 10       | E-150                        | A · B - 2 |                | 深井        | 口数器          | atic .   | 12 M. c. 18 M 01 D. M 17   | ナシ         |                       | 0.6  | 灰褐色               | 灰褐色                | 1                              | Ř         | 条瓜のあと<br>ナデ     | 後い月収条<br>質      | やや研組  |
| $\vdash$ | 184                          |           |                |           |              |  | 歴帯を報道に貼り付けた協<br>西の中に短い陸帯を口縁部<br>に数条縦に貼り付ける。<br>関位に陸帯を貼り付けた後、<br>口唇部から薩帯を重らして |            | <u> </u>              | _    |                   |                    | 2                              | _         |                 |                 |   |
| 11       | E-450                        | A · B - 2 |                | 深体        | □15€         | 直口の日本の一口の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の | いる。  | ナシ         |                       | 0.6  | 明褐色               | 明褐色                | 3                              | 不良        | 条項の後ナ           | 条項<br>扱い貝殻条     | やや磨破  |
| 12       | E-551                        | A - 4     | 2.711          | #         | 日枝部          | 湾  | 陳帝を貼り付ける<br>(楕円形?)   | ナシ         | -                     | 0.3  | <b>無色</b>         | 無色                 | 1                              | 不良        | 7               | 類状工具に           | やや器器  |
| 13       | 10                           | A - 4     | 2.711          | 深体        | 8480         |  |  |            |                       | 1.0  | 橙色                | 明褐色                | 3                              | 良好        | 線状工具に<br>よる条仮   | よる条瓜            |   |
| 14       | DAI                          | A - 1     | 2.135          | 深体        | SPS.         |  | 条項が競杉状になる  |            |                       | 1.0  | 培赤褐色              | 暗褐色                | 3                              | 良         | 祖い条庭            | 狙い条旗            | 松本・富徳編年のA式                                  |
| 15       | ( 27                         | B - 4     | 2.469          | 深体        | 住部近          |  | 外面に楕円押型文を施文  |            |                       | 1.1  | 母灰褐色              | 暗灰褐色               | 2 3                            | 不良        | 不明              | 不明              | 樹蔵する  |
| 16       | II 8#<br>E-3類                | В - 3     | 2.639          | 深鉢        | 口棒部          | 口縁部がやや外<br>反                                     | 5条の種併を関位に貼り付け一番下の種帯は彼伏を呈する。  | 利目         |                       | 0.9  | 黑色                | 灰白色                | 1 少3 多                         | Ą         | 条件              | 条棋              | 外面にスス付着                                     |
| 17       | I群<br>E-la類                  | B - 1     | 2.465          | 深体        | 近く           |  | 機位の隆帯貼り付け  |            |                       | 0.6  | 暗風褐色              | <b>無色</b>          | 3 少                            | Ą         | 担い条項            | 組い条項            |   |
| 18       | [[新<br>E-1版]                 | B - 3     | 2.483          | 深体        | 野部           |  | 関位の陸帝間に隆帝を斜方<br>向に貼り付ける  |            |                       | 0.8  | 灰黑色               | 灰黑色                | 1 少<br>2 少<br>銀母多量             | Ą         | 条俱              | 条與              |   |
| 19       | 1群<br>E-16類                  | B - 2     |                | 深体        | 口軽部          | 直口しやや外反  | 4条の隆帯を機位に貼り付<br>け隆帯間の幅が狭い  | + >        |                       | 1.0  | 黄灰色               | 起灰色                | 1<br>2<br>3                    | 不良        | 条权              | 条棋              | やや器組  |
| 20       | E-251                        | A · B - 2 |                | 深体        | 照廊           | 頭部で屈曲しま<br>った後内膚しな<br>がら立ち上がる                    | 機位の隆帝貼り付け(数条)  |            |                       | 0.7  | 黑色                | 灰黄色                | 2 3                            | Ą         | 条度の後ナ<br>デ      | 条页              |   |
| 21       | 1 84                         | A · B - 2 |                | 深体        | <b>9</b> 5   | 底部近くで  | 刻目隆帯の横位貼り付け  |            |                       | 0,7  | 黄橙色               | 暗褐色                | Ź                              | B         | 条概              | 条织              |   |
| $\vdash$ | E-1050                       |           |                | -         | 口線部          | 丸底?  |  |            |                       |      |                   | a.                 | 1 少                            | _         |                 |                 |   |
| 22       | E-750                        | B - 1     | 2.36           | 深体        | 近く           | at c   | 機位の機帯貼り付け<br>口軽部より弧状に隆帯を貼  | +5         |                       | 0.9  | 灰白色               | 財協色<br>財協色         | 3                              | e<br>e    | <b>条</b> 與      | 条旗              | 鉄分が付着し調整不明                                  |
| 24       | E-522<br>I \$#               | A · B · 2 |                | 深鉢        | 口軽部          | ato .  | り付けている。<br>口唇部より縦位のものと気<br>状のものを交互に貼り付け                                      | + >        |                       | 0.7  | 褐灰色               | 暗褐灰色               | 1 1/2                          | RH        | 条件              | *#              | 2000  |
| 25       | E-5和<br>E-12 類               | A · B - 2 | -              | <b>聚体</b> | 84 SE        |  | 6.1cm程の粘土粒を貼り付   |            |                       | 0,8  | 時褐色               | やや明る               | 3 少<br>2 少<br>3 多              | A         | #:EK            | ##              |   |
| 26       | O St                         | A · B · 2 | _              | 深体        | 野部           | -  | ける<br>数条を単位とし気状に貼り   |            |                       | 0.9  | 赤褐色               | い 新総色<br>黒色        | 1 1/2                          | e.        | 担いナデ            | 組い条項            |   |
| 27       | E-8#4<br>1 ##                | B - 1     | 2.08           | 展体        | 医部近          | A.G.   | 付ける。薩帶は新で圧略  |            | 1                     | 1.1  | 異接色               | 明褐色                | 3 步-                           | 44        | 担い条棋            | 担い条項            | 煩きより丸底と考えられる                                |
| 28       | ) \$7<br>B-180               | A - 2     | 2.433          | 深体        | 明娜           |  | 沈線状の押引き文   |            |                       | 0.7  | 黄色帯び              | 灰色                 | 3 <u>3</u>                     | 良好        | 条旗の接+<br>デ      | 条俱              |   |
| 29       | B-150<br>187<br>D-150<br>187 | A - 4     | 2.044          | 深体        | 口整部          | at ci  |  | 利日         |                       | 1.2  | た<br>交色帯び<br>た時福色 | 灰色帯び<br>た暗褐色       | 1 3                            | Ŗ         | 条項              | 条収              | 条旗による観形状の支援ら<br>しきもの                        |
| 30       | D-151                        | A - 4     | 1.926          | 採料        | 口較部          | đo.  |  | #H         | _                     | 0.9  | 問場色               | 政色                 | 3 3                            | 良         | 条俱              | 条俱              | 条項による機と斜方向の文<br>機らしきもの                      |
| 31       | D-1類                         | A - 4     | 2.421          | 深体        | 口較部          | ião  |  | MH         |                       | 1.1  | 黑色                | 無色                 | 2 1<br>3 1                     | Ð         | 貝般条旗            | <b>*</b> Ø      | 条度調整のあと同一施文具<br>と思われるもので流水文ら<br>しきものを描いている。 |
| 32       | E 群<br>D-1類                  | A - 4     | 1.977          | 深体        | 口鞣部          | at c   |  | \$1H       |                       | 0.8  | 黑褐色               | 暗食褐色               | 3 1                            | Ą         | 条度の後ナ<br>デ      | 条質の後ナ<br>デ      | 条旗で機と斜方向の文様ら<br>しきもの                        |
| 33       | :3.57<br>E-la.521            | A - 3     | 2.21           | 深鲜        | 口鞣部          | 直口して立ち上<br>がり口縁がやや<br>内海                         | 構位の隆帯貼り付け  | 朝日         |                       | 0.6  | 暗褐色               | же                 | 2 1/2                          | д         | 条旗              | 条模              |   |
| 34       | 1 21                         | A-4       | 2,511          | 深体        | 口級部          | đa   | 欄位の隆帯貼り付け(4条)  | 竹管に<br>よる剣 |                       | 1.0  | me.               | Де                 | 1 少2 多                         | REF       | 担い条項            | 担い条項            |   |
| 35       | E-la類<br>I群                  | A - 4     | 2.341          | 深体        | 口級部          | at s   | 機位の隆帯貼り付け  | 70         |                       | 0.8  | me.               | 明褐色                | 3 2 14                         | B         | 条項の後ナ           | 条组              |   |
| H        | 1計<br>E-16類                  |           | -              | -         |              |  |  |            |                       | -    | -                 | -                  | 1 1/2                          |           | -               |                 |   |
| 36       | E-16類                        | A - 3     | 2.606          | 深体        | 口段部          | at co  | 横位の降帯貼り付け  |            | _                     | 0.8  | 灰白色               | 淡黄灰色               | 3多 無曜石                         | Ř         | 条項              | 条収              |   |
| 37       | E-16類                        | A - 4     | 2.346          | 深体        | 口軽部          | Œn_  | 機位の條格貼り付け  | +>         | L.                    | 0.9  | 黄味帯び<br>た後明褐<br>色 | 暗褐色                | 2                              | A         | 祖い条項            | 粗い条痕            |   |
| 38       | [群<br>E-1類                   | A - 4     | 2, 381         | 深体        | 好部           |  | 機位の除帯貼り付け  |            |                       | 0.8  | 暗褐色               | 负担色                | 1<br>2<br>3                    | Ą         | 条斑              | 条俱              |   |
| 39       | 1 # E - 1 # A                | A - 4     | 2.331          | 深体        | 6H &S        |  | 横位の降帯貼り付け  |            |                       | 0.9  | жe                | щė                 | 1 2 3                          | Ą         | 祖い条項            | 担い条収            |   |
| 40       | E-1類<br>E-1類                 | A - 4     | 2.256          | 深体        | 明部           |  | 横位の隆帝貼り付け  |            | H                     | 0.7  | 無色                | Me                 | 2                              | Ą         | 条旗              | 条俱              |   |
| 41       | E - 1 #1                     | A - 1     | 2.55           | 深体        | 8F186        |  | 機位の隆帯貼り付け  |            |                       | 0.8  | 黄灰白色              | 黄灰白色               | I<br>2<br>3.55.MaL₹i           | やや不良      | # <b>8</b>      | 条俱              |   |
| 42       | E-1類                         | A - 4     | 2.176          | 深体        | <b>卵部</b>    |  | 模位の機併貼り付け  |            |                       | 0.5  | 無褐色               | 暗褐色                | 2<br>3                         | R         | 条旗の後ナ           | 条旗              |   |
| 43       | E-1知                         | B - 4     | 2.232          | 深体        | 明部           |  | 作り出し降帯   |            |                       | 0.8  | 明褐色               | 黄灰色                | 2<br>3                         | Ą         | 条瓜の後ナ<br>デ      | 条棋              |   |
| 4        | □ 群<br>E-6期                  | A - 3     | 2.65           | 深体        | 口軽部          | 口級部が外反し<br>大きく広がる                                | 横位の隆帯貼り付け  | +0         |                       | 0.6  | 終い位色              | はい役色               | 1 2                            | Ą         | 条组              | 条组              |   |
| 45       | 127                          | A - 4     | 2.316          | 深体        | 明部           | 胴部が膨らみ内<br>関に屈曲                                  | 機位の隆帯貼り付け  |            | <u> </u>              | 0.7  | 風色<br>灰色帯び        | 無色                 | 1 重母                           | R         | <b>₩</b> Ø      | 兼概              |   |
| 46       | E-14 知<br>ISF                | A - 4     | 1.821          | 深体        | 口袋部          | ato -  | (カマポコ形)<br>口唇部より重弧文状の種帯  | +>         | 23.4                  | 0.7  | た暗褐色              | 暗褐色<br>浅い黄疸        | 3                              | Ą         | 担い条紙            | 祖い条棋            |   |
| 47       | E-5類                         | A - 4     | 2.311          | 深体        | 口級部          | at o   | 貼り付け<br>口縁部に横+様の種帯を併   | +>         | $\vdash$              | 0.8  | 暗褐色<br>灰黒色        | e<br>me            | 2                              | R<br>R    | 条页<br>条页        | 条组              |   |
| 49       | E-4類                         | A - 3     | 2.094          | 深体        | 日報報          |  | 用させて文様を構成<br>機+斜方向の陸帯を併用さ  | 77         | -                     | 0.7  | やや明る              | 明褐色                | 2                              | R         | *W              | <b>乗以</b><br>ナデ | <del></del>                                 |
| 50       | E-4類                         | A - 3     | 2.703          | 深体        | 5785<br>5785 |  | せて文様を構成<br>2本単位の種帯間にシャー  |            |                       | 1.0  | い時褐色<br>赤褐色       | Me.                | 3<br>2 少                       | R         | + =             | 担い貝殻条           |   |
| ت        | E-9/1                        | <u> </u>  |                |           |              | L  | プな沈線を充填  | <u> </u>   | Ь                     | _    | <u> </u>          | L                  | 3 少                            |           |                 | Ø               |   |

# 第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物

(2)

| 番号            | 分類群名                                   | ヴッァキ    | 出高度    | 28 | 残存部位         | 形態の特徴<br>ロ 緑 郎<br>底 部 | 文様の特徴                                     | 口器部施文 | 法径高      | 章<br>2502 | <u>e</u>     | 胸内           | 助土<br>1. 角閃石<br>2. 長石 | 焼収      | 多面外                  | 四整内                    | (A) *                                 |
|---------------|--|---------|--------|----|--------------|-----------------------|---|-------|----------|-----------|--------------|--------------|-----------------------|---------|----------------------|------------------------|---------------------------------------|
| 51            |  | A - 4   | 1.872  | 深体 | 底部           | 尖底                    |   |       |          | (ca)      | 波い褐色         | 黑灰色          | 3. 石英                 | Ř       | 条痕                   | <b>ж</b> Д             | 異性が厚い                                 |
| 52            | 1 87                                   | A - 2   | 2.387  | 深体 | M88          |                       | やや大型の楕円搾型文を外<br>面に施文する                    | -     |          | 1.3       | 灰白色          | 無灰色          | 3                     | R       |                      | + +                    | ローリングを受け廃棄                            |
| 53            | 11 834                                 | A - 1   | 2.396  | 深鉢 | 口数部          | 直口して立ち上<br>がりやや外値     | 刺突文                                       | +>    |          | 0.6       | 褐色           | щe           | 1 2                   | £       | 条項の後ナ                | 条概                     |                                       |
| 54            | 100                                    | B - 4   | 2.486  | 遊林 | 598S         | 原曲する胴部                | 横走する幅広の押引き文                               | -     |          | 0.6       | 浸い<br>灰黒色    | 液心           | 1                     | В       | 施文の後ナ<br>デと貝殻条       | 投い貝殻条                  |                                       |
| 55            | B-3#1                                  | B - 4   | 2. 233 | 深体 | MARK.        | **** ( SUM            | 構造または製造する製法の                              |       | -        | 0.6       | <b>从黑色</b>   | 炭黒色          | 3                     | RET     | 強くて丁家                | 與<br>接 <u>了了事</u>      | 全体的に丁寧                                |
| 56            | 8-341<br>18#                           | B - 3   | 2.749  | 深井 | 口線部          | 一郎 一                  | 押引き文<br>横走と斜走の押引き文                        | +>    | -        | 0.4       | 黑色           | 展灰色<br>黒色    | 1 2                   | PP      | な貝殻条度<br>条度の後ナ       | 公月穀条旗<br>条旗            | EHU/M 7 7                             |
| 57            | B-2類                                   | B - 2   | 2.373  | 深体 | 5466<br>5466 | ふくらむ射部                | 機器に刺孔・押引き文を充                              |       |          | 0.8       | 灰黑色          | 灰黑色          | 3                     | 不良<br>良 | デ 条旗の後ナ              | 没い貝数業                  | 芸面に光沢あり                               |
| 58            | E-1150<br>E-1150                       | A - 3   | 2.401  | 深体 | 開部から底部       | ふくらむ胴部                | 編<br>  機器に対日+押引き文を充                       | -     |          | 0.8       | 風褐色          | 液い<br>灰褐色    | 3                     | B       | デ<br>条項の後ナ           | 報く遊い                   | I I I I I I I I I I I I I I I I I I I |
| 59            | 1 57<br>C 20                           | A - 3   | 2,516  | 提供 | 口袋部          | 直口しやや外傾               | 5条の構造する短沈線                                | + 2   |          | 0.6       | Mе           | <b>馬色</b>    | 1                     | 20      | 貝級条項の<br>あとナデを       | #Q                     | 内面炭化物若干                               |
| 60            | 11.88                                  | A - 3   | 2.54   | 溶性 | 口級部          | 直口しやや外傾               | 横走する短沈線                                   | +2    |          | 0.6       | iku          | 減い           | 2                     | 不良      | あとナデを<br>施す<br>貝殻楽痕の | <b>月投条係</b>            | 外面炭化物付着                               |
| 61            | C如<br>1数<br>D-2和                       | A - 1   | 2.381  | 深体 | 口較部          | ăo .                  |   | +>    | -        | 0.7       | 灰褐色<br>無褐色   | 無褐色          | 1                     | 良良      | 接ナデ<br>条項            | *A                     |                                       |
| 62            | D-250<br>USF<br>D-250<br>USF<br>E-1a50 | B - 4   | 2.25   | 深鉢 | 口袋器          | 直口                    | 隆帯の横走貼り付け                                 | ナシ    |          | 0.8       | 浸い<br>質橙色    | 投い           | 2                     | 良好      | 担い条項                 | 狙い条項                   |                                       |
| 63            |  | B - 4   | 2.296  | 深体 | 口袋部          | 直口しやや外反               | 隆帯の横走貼り付け                                 | 期日    | _        | 0.7       | <b>無色</b>    | 無色           | 1                     | Ą       | 条項                   | 条填                     |                                       |
| 64            | IF<br>E-la類                            | B - 4   | 2.281  | 深鉢 | 口線部          | 直口しやや外反               | 隆帯の横走貼り付け                                 | 輔日    |          | 0.6       | 液灰褐色         | 换褐色          | 1<br>2<br>3           | Ą       | 条旗                   | 条俱                     |                                       |
| 65            | 0 83 E                                 | B - 4   | 2, 199 | 深鉢 | 口線部          | ito                   | 隆帯の横走貼り付け                                 | 利日    | 44.4     | 0.8       | 無色           | 设益灰色         | 1                     | 8.67    | *a                   | *a                     | <del></del>                           |
| 66            | E-la類<br>I群                            |         |        |    | 口袋部          |                       |   |       |          |           | -            |              | 2                     |         | 条痕の後ナ                | 条旗の後ナ                  |                                       |
| - 86          | E-la 🛱                                 | B - 2   | 2.076  | 深体 | D 45k tar    | <b>1</b> 10           | 隆帯の構走貼り付け                                 | 利日    | ļ        | 0.6       | 黑色           | 黑色           | 1                     | 良好      | Ŧ                    | Ŧ.                     | -                                     |
| 67            | 187<br>E-la 10                         | В - 3   | 2.783  | 深鉢 | 口棒部          | 祖口                    | 隆帯の横走貼り付け                                 | 利田    | 30.5     | 0.7       | 無褐色          | 褐色           | 1<br>2<br>3           | 良好      | 条级                   | ¥Щ                     |                                       |
| 68            | 11 81                                  | B - 4   | 2.221  | 深体 | 口袋部          | 若干内膚                  | 種帯の横走貼り付け                                 |       |          | 0.9       | .果色          | 灰白色          | 1                     | Ą       | 条舆                   | <b>*</b> Ø             |                                       |
| 69            | E-1650                                 | B - 4   | 2.633  | 深鉢 | 口較部          | at o                  | 陸帯の横走貼り付け                                 | _     | $\vdash$ | 0.7       | 明褐色          | 暗褐色          | 1                     | A<br>B  | #Ø                   | # <b>A</b>             |                                       |
| 70            | E-16類                                  | B - 4   | 2.244  | 深体 | 口較部          | ito —                 | 藤帯の横走貼り付け                                 |       | $\vdash$ | 0.7       | 無路色          | 投灰褐色         | ,                     | ę.      | 条項の後ナ                | 条痕の後ナ                  |                                       |
| _             | E-1b類<br>ISF                           | B-4 2.5 | 2. 244 | -  |              |                       |   | -     |          |           |              |              | 1                     | _       | デ条痕の後ナ               | <i>ī</i>               |                                       |
| 71            | E-1b類<br>IS#                           | B - 1   | 2.229  | 深体 | 口棒部          | ato                   | 陸帯の横走貼り付け                                 | -     | 32. 1    | 0.7       | 黑色           | 灰褐色          | 3                     | 良好      | デー条膜の後ナ              | 条項の後ナ                  |                                       |
| 72            | E-1b類                                  | B - 1   | 2.309  | 深鉢 | 口較部          | ato .                 | 隆帯の横走貼り付け                                 |       | 31.0     | 0.7       | 灰褐色          | 灰褐色          | 3                     | 良好      | デ                    | デ                      |                                       |
| 73            | 164                                    | B - 4   | 2.188  | 深鉢 | 口段部          | ďΩ                    | 降帯の横走貼り付け                                 |       |          | 0.8       | 黑色           | 淡黄灰色         | 1<br>2<br>3           | Ą       | 条項                   | 条旗                     |                                       |
| 74            | E-16類<br>I群                            | B - 4   | 2.218  | 深鉢 | 野部           | đio .                 | <b>陸帯の検走貼り付け</b>                          |       |          | 0.6       | 明褐色          | 前褐色          | 1                     | 不良      | 条俱                   | <b></b> ₽Ø             |                                       |
|               | E-1類<br>I群                             | -       |        |    |              | 口線内湾                  |   |       |          |           |              |              | 3                     |         | -                    |                        |                                       |
| 75            | E-1類<br>I 群                            | B - 4   | 2.296  | 深体 | 野部           | 刷部ふくらむ                | 陸帯の横走貼り付け                                 |       |          | 0.7       | 風褐色          | 黄褐色          | 3                     | 良好      | 条與                   | 条項                     |                                       |
| 76            | E-1類                                   | B - 4   | 2. 239 | 深体 | 明部           | 直口                    | 陸帯の横走貼り付け                                 |       |          | 0.7       | 暗褐色          | 暗褐色          | 2 3                   | 良好      | 粗い条項                 | 祖い条項                   | l                                     |
| 77            | 1 24                                   | B - 4   | 2.16   | 深鉢 | 5F18%        | 直口                    | 陸帯の横走貼り付け                                 |       |          | 0.8       | 黑色           | 黑色           | l<br>2                | Ŕ       | 条旗                   | #-8X                   | -                                     |
| _             | E-1類                                   |         |        | _  |              |                       |   |       | _        |           |              |              | 3                     | -       |                      |                        |                                       |
| 78            | E-150                                  | A - I   | 2. 108 | 深体 | 野部           | tt i.i                | 隆帯の横走貼り付け                                 |       |          | 0.6       | 黑色           | 黑色           | 3                     | R.      | 条模                   | 条瓜                     | 表面にカーボン付着                             |
| 79            | E-1類                                   | B - 4   | 2.326  | 深体 | 明部           | đ:::                  | 隆帯の横走貼り付け                                 |       |          | 0.7       | 川相色          | 黑褐色          | 2                     | 段析      | <b>%</b> Ø           | 条纸                     |                                       |
| 80            | [ 群<br>E-1期                            | B - 4   | 2.489  | 深鉢 | 明部           | ÆП                    | 隆帯の横走貼り付け                                 |       |          | 0.8       | 做他色          | <u>me</u>    | 2                     | Ř       | 条级                   | 条旗                     |                                       |
| 81            | E 21                                   | A - 1   | 2.386  | 深体 | 類部           | くの字状に疑曲               | <br>陸帯の横走貼り付け                             |       |          | 0.8       | щe           | 灰褐色          | 1                     | R.      | 3-SI                 | #.G                    | 外面にスス付着                               |
| 82            | E-1類                                   | B - 4   | 2.122  | 深鉢 | <b>新</b> 郡   | 口級内湾                  | 波状隆帯の横走貼り付け                               |       |          | 0.7       | e            | 黑色           | 3                     | R       | *#                   | *4                     |                                       |
| 83            | E-igg                                  | B - 3   | 2.051  | 深体 | Mes.         | 別部ふくらむ                | 藤帯の横走貼り(tt                                |       |          | 0.7       | BIBA.        | <b>新福色</b>   | 3                     | - R     | *#                   | *4                     |                                       |
|               | E-1類                                   |         |        | -  |              |                       | 5条の降荷の構走貼り付け                              |       | ì        |           |              |              | 1                     |         |                      |                        |                                       |
| 84            | E-2類                                   | A - 1   | 2.381  | 深体 | 口鞭部          | 直口しやや外反               | 5条の降荷の構定貼り付け<br>接荷間の幅は挟く一番ドの<br>発荷が波状を呈する |       |          | 0.7       | 984          | 暗褐色          | 3                     | 良       | 条旗                   | 条瓜                     | ローリングを受け磨滅する                          |
| 85            | 1 群<br>E-4類                            | A - 1   | 2.33   | 深鉢 | 口輸部          | 外額                    | 口縁部に斜方の隆帯貼り付<br>け                         |       | I        | 0.8       | 黑色           | 明褐色          | 1<br>3                | R       | 条痕の後ナ<br>デ           | 貝股条項                   |                                       |
| 86            | 124                                    | A - 1   | 2.25   | 深鉢 | 口縁部          | 直口しやや外反               | 横走+縦走の陸帯貼り付け                              |       |          | 0.8       | 黑色           | 灰黑色          | 1 2                   | 良       | 貝般条旗<br>ナデ           | 条旗                     | 外面にスス付着                               |
|               | E-4知<br>I 群                            | B - 4   | 2      |    | m~           | 頸部が締まり<br>口縁が開く       | 発帯の構造貼り付け                                 |       |          |           |              |              | 3                     |         | 条旗の後ナ                | 2.07                   |                                       |
| 87            | E-7類                                   |         | 2. 447 | #  | 明部           | 口段が開く                 | 2本の種類間にだけ最方向<br>の短い種帯を充塡<br>体帯を扱す場になけて関す  |       |          | 0.7       | 無灰色          | 没黄橙色         | 3                     | Ą       | Ť                    | 条項                     |                                       |
| 88            | E-1類<br>I群                             | B - 4   | 2.275  | 深鉢 | 研部           |                       | 接帯を指で押し付けて模走<br>貼り付け                      |       |          | 0.8       | 灰黑色          | 决员灰色         | 2                     | Ą       | 秦兵                   | 条項                     |                                       |
| 89            | E-150                                  | A - 1   | 2.065  | 深鉢 | 9月部          |                       | 隆帯の構走貼り付け                                 | _     |          | 0.9       | 黑色           | 黑色           | 3                     | Ą       | 祖い条真                 | 祖い条旗                   |                                       |
| 90            | E-150                                  | B - 4   | 2.318  | 深鉢 | 明部           |                       | 隆帯の横走貼り付け                                 |       | - 4      | 1.3       | <b>球科阻</b> 色 | /炎数极色        | 2                     | 良わり     | 担い条旗                 | 祖い条項                   | WT. 6 B                               |
| 91            | 1 27                                   | B - 3   | 2. 131 | 深体 | <b>野部</b>    |                       |   |       |          | 0.7       | 時場色          | 黑色           | 滑石                    | 不良      | 条痕が残る                | 不明                     | 滑石を多量に含む                              |
| 92            | 144                                    | B - 3   |        | -  | BHSS .       |                       | <del></del>                               |       |          | υ. 6      | 明褐色          | 無色           | 1976                  | 不良      | 不明                   | 米供が残る                  | 滑石を多量に含む<br>滑石を多量に含む                  |
| 93            | 124                                    | A - 1   | 2.446  | 深鉢 | 明部           |                       | J   |       |          | 0. 5      | 暗赤褐色         | 暗赤褐色         | 3 荷石                  | Ŗ       | 条度                   | 条與                     | 初台を多量に含む<br>補修孔有り                     |
| ο,            | T 22                                   | A - 1   | 2 421  |    | 野部           |                       |   |       |          |           | 80 U 70 A    | BALE NO A    | 1                     |         | 3.07                 | *#                     |                                       |
| *             | 1#                                     |         | 2. 421 | 程制 | ersis        |                       |   |       |          |           | 暗灰褐色         |              | 3                     | Ą       | 条項                   | ***                    | かなり磨滅がはげしい                            |
| 95            | I \$#                                  | A - 1   | 2. 153 | 深井 | <b>59</b> 68 |                       |   |       | ]        | 0.9       | 通い明認<br>色    | . <u>M</u> @ | 1 2                   | Ą       | 担い条項                 | 担い条項                   |                                       |
| 96            | 1 <b>8</b> 4                           | A - 1   | 1.955  | 深鉢 | 作部近          | 丸底?                   |   |       |          | 0.9       | 黄褐色          | 黑色           | 1<br>2<br>3           | Ř       | 条項                   | 条與                     |                                       |
| 97            | 0 <b>6</b> 9                           | A - 1   | 2.015  | 深鉢 | 底部近く         | 丸底?                   |   |       | $\neg$   | 0.7       | 暗黑褐色         | 黑色           | 2 3                   | Ą       | 条項                   | 条與                     | _                                     |
| 96            | I #                                    | A - 2   | 2. 161 | 深鉢 | 底部           | 尖底?                   |   |       | _ †      | 1.0       | 沒典概色         | 黑色           | 3                     | Ą       | 条旗の後ナ<br>デ           | 担い条項                   |                                       |
| 99            | 0 <b>6</b> ‡                           | A - 3   | 2.24   | 深体 | 底部近<br>く     | 丸底?                   |   |       |          | 0.8       | 灰白色          | 灰白色          | 1 3                   | Ą       | 条與                   | <del></del> Α <u>Q</u> |                                       |
| 100           | 181                                    | B - 4   | 2.4    | 深鉢 | 底部近く         | 丸底?                   |   |       |          | 0.8       | 淡褐灰色         | 黄色           | 1<br>2<br>3           | Ą       | <b>条</b> 权           | 条旗                     |                                       |
| 101           | 1 <b>5</b> ‡                           | A - 1   | 2.341  | 深鉢 | 底部           | 丸底?                   | <del></del>                               |       |          | -         | 黑色           | 暗褐色          | 1                     | £.      | 担い条項                 |                        | 内面底部付近にスス付着                           |
| $\overline{}$ | 187                                    | B - 4   | _      |    | _            | 失底                    |   |       |          |           | 彼い           | 換い           | 3<br>J                | **      |                      | 強い貝殻                   |                                       |
| 102           | 4 60                                   | 3-1     | 2.32   | 深鉢 | 底部           | - Z                   |   |       | $\dashv$ | 0.7       |              | 灰白色          | 3                     | 不良      | 貝般条項                 | <b>*</b> 4             |                                       |
| -103          | 1 24                                   | A - 1   | 2.341  | 深体 | 5月部          |                       | 外面に楕円押型文を施す                               |       |          | 0.9       | 明褐色          | 黑色           | 1<br>2<br>3           | Ą       | 不明                   | 不明                     | ローリングにより密載                            |
| 104           | 1 23                                   | B - 3   | 2.176  | 深井 | 底部           | 平底                    | 外面底部まで楕円押型文を<br>施す                        |       | $\neg$   | 1.0       | 費みがかった灰白     | 黄灰色          | 1                     | Д       | ナデ                   | + =                    |                                       |
|               |  |         |        | !  |              |                       |   |       |          |           | <u>e</u>     | - $ -$       | 3                     |         |                      |                        | <u> </u>                              |

# 第4節 第8~10層の遺物

(3)

| 1  | 番号            |                  | ヴッキ   | 出高田            | 25.53    | 残存部<br>位     | 形態の特徴<br>ロ 縁 部<br>底 部 | 文様の特徴                    | 口唇部<br>箱文 | 上<br>程<br>四度 | (G)<br>改<br>改<br>改 | l          |             | 胎土<br>1. 角閃石<br>2. 長石<br>3. 石英 | 晚椒         |                                       |                  | 偏 考                                     |
|--|---------------|------------------|-------|----------------|----------|--------------|-----------------------|--------------------------|-----------|--------------|--------------------|------------|-------------|--------------------------------|------------|---------------------------------------|------------------|---|
|  | 105           |                  | A - 2 | 2.106          | 深体       | 口較部          | 外反                    | 福広の押引き文を構走               | +÷        |              | Г                  | 黑色         | 暗褐色         |                                | А          | ナデ                                    | 貝殻条痕の<br>後粗いナデ   |   |
| 1  | 106           |                  | B - 3 | 2.023          | 深体       | 胴部           |                       | 押引き文を構走                  |           |              | 0.8                | <b>無色</b>  | 黑色          | 3 少                            | Ą          |                                       | 条與               |   |
|  | 107           | 1 57             | B - 4 | 2. 093         | 没体       |              |                       | 押引き文を模走                  |           |              | 0.6                | Me         | <b>从色</b>   | 1 1/2                          | Ą          | 条组                                    | æα               |   |
| 10   | 108           |                  | B - 1 | 1.79           | 深井       | 口枝部          | at p                  |                          | 対目        |              | 1.0                | 但色         | 淡·<br>黄橙色   | 1 2 3                          |            | 条庭                                    | 条斑               |   |
| 10   1   | 109           | 0 <b>8</b> #     | A - 1 | 1, 755         | 24       | 口投版          | 直口しやや外反               |                          | 218       | 28. 2        | 0.7                | 明褐色        | 自然を         |                                | В          | 3.01                                  | 3.0              |   |
|  | -             | 121              |       |                | $\vdash$ |              |                       |                          |           |              | <del> </del>       |            | <del></del> |                                | -          |                                       |                  |   |
|  | -             | D - 2類           |       |                | -        |              | -                     |                          |           |              | <del> </del>       |            |             | 1                              | 00         |                                       |                  | W-27                                    |
| 10   |               | 11               |       | <del> </del> - | _        |              | ш.:                   |                          | 77        |              |                    |            |             | 3.                             |            |                                       | l .              | 外面に波状の文様らしきも                            |
| 14   | $\rightarrow$ | DER<br>III       | _     |                | _        | _            | at o                  | 隆帯の横走貼り付け                | 期目        |              |                    |            |             | <u>;</u>                       |            |                                       | 7                | のを描く                                    |
| 18   | 114           | E-la 🖺           | B - 4 |                | 深体       | 口格部          |                       | 種帯の機走貼り付け                | 刘目        |              | 0.5                | 褐色         |             | 1                              | 良好         | 7                                     |                  |   |
| 14   | 115           | 互 \$#<br>E-1 b 類 | A - 1 | 1.83           | 深井       | 口較部          | や外反                   | 隆帯の機走貼り付け                | 期目        | 30. 1        | 0.7                | Mе         | 暗貨褐色        | 1 少<br>2 少<br>3 少              | R          | Ŧ                                     | 条贝               |   |
| 14   | 116           |                  | B - 4 | 2.271          | 深体       | 口棒部          |                       | 隆帯の機走貼り付け                | ナシ        | 26. 4        | 0.8                | 無褐色        | 黑褐色         | 1<br>2<br>1                    | 良好         | 衆県の役ナ                                 | 条旗               |   |
| 1  | 117           |                  | A - 3 | _              | 深体       | 口糠部          | 直口                    | 隆帯の横走貼り付け                | ナシ        |              | 0.6                | 灰黑色        | 灰黑色         |                                | Ą          | 泰庭                                    | ÆŒ               |   |
| 19   | 118           | E-1981           | B - 2 | 2.027          | 深件       | 口棒部          | や外反                   | 隆帯の横走貼り付け                | ナシ        |              | 0.6                | 换褐色        | 液腸色         | 3 \$                           | Ą          | 条旗                                    | 条段               |   |
| 100  | 119           |                  | B - 3 | 1.936          | 深体       | 口段部          | 口級部が内海し<br>た後また外反     | 隆帯の模走貼り付け                | ナシ        |              | 0.9                | A 6        | _           |                                | A          |                                       | 本の<br>口縁部はナ<br>デ | 外面にススが多量に付着                             |
| 12   12   13   14   15   16   16   16   16   16   16   16  | 120           | E-15 20          |       | <u> </u>       |          | _            | αα                    |                          | +>        |              |                    |            | た薄灰黒<br>色   |                                |            |                                       |                  |   |
| 1  | -             | is               |       | _              |          |              | 内部                    |                          | + >       |              | _                  |            |             | 1 1/2                          |            |                                       | デ                |   |
| 1  |               | 11.57            |       | _              |          |              | ram.                  |                          | 72        | -            | -                  |            |             | 31                             |            |                                       |                  | -                                       |
| 19   | $\rightarrow$ | I群<br>E-1類       |       | -              |          |              |                       |                          |           |              |                    |            |             |                                |            | 条棋                                    | 条與               |   |
| 19   | 125           | 0 <b>8</b> #     | B - 3 | 2. 124         | 深体       | <b>57</b> 68 |                       | 種帯の横走貼り付け                |           |              | 0.6                | 灰黑色        | 灰褐色         |                                | 良軒         |                                       |                  | 外面にスス付着                                 |
| 1  | 126           |                  | B - 4 | 2. 133         | 深体       | <b>69</b> 88 |                       | 隆帯の横走貼り付け                |           |              | 0.5                | 黑色         | 無色          | 1 少                            | Ą          |                                       |                  | 内面にスス付着                                 |
| 1  | 127           | I \$#            | A - 2 | 1.739          | 深体       | 野部           |                       | 陸帯の横走貼り付け                |           |              | 0.8                |            | 灰褐色         | 1                              | Ą          | 条項                                    | 条挺               |   |
| 12   | 128           | 0 S#             | B - 4 | 2. 168         | 深鲜       | 94 SE        |                       | 隆帯の横走貼り付け                |           | _            | 0.8                |            | 黄灰色         |                                | Ą          | 泰庭                                    | 条权               |   |
| 30   1   | 129           | 11 11            | A - 3 | 2,004          | 深生       | 54 FR        |                       | 1条の隆帯の指走貼付け              |           |              | 1.0                | <b>瓜灰色</b> | 灰白色         | 1                              | ρ          | 上条度<br>下条度の後                          | *g               | <b>値きより底部に近い窓位</b>                      |
| 1  | -             | 0 <b>8</b> #     |       |                |          |              | <b>_</b>              |                          | _         | _            | <u> </u>           |            |             |                                |            | · · · · · · · · · · · · · · · · · · · |                  |   |
| 1  |               | E - 6類<br>I群     |       | <del></del>    |          | -            | at o                  |                          |           |              | _                  |            |             | 3 少                            |            |                                       | 貝殻条狐の            | 外面 <b>炭化物付着</b>                         |
| 13 日   | 132           | 181              | B - 4 | 2.221          | 深井       | 口棒部          | 直口し外反                 |                          |           |              | 1.0                | 暗褐色        | ee.         | 2 1/2                          | 良軒         | 条旗の後ナ                                 | 貝殻条項の            | 外面炭化物付着                                 |
| 13   | 133           | 121              | B - 1 | 1.685          | 深体       | 明部           |                       |                          |           |              | 1.0                | 明褐色        | 极色          | 2                              | R          | デ<br>条度                               |                  | West and west                           |
| 15   15   15   15   15   15   15   15  | 134           | 0 S¥             | B - 2 | 1.925          | 深体       | <b>97</b> 66 |                       | 陸帯を重弧文状に貼り付ける            |           |              | 0.6                | 暗褐色        | 黑色          | 1 少                            |            | 条項の後ナ<br>デ                            | 条棋               | ローリングを受け磨滅                              |
| 15   15   15   15   15   15   15   15  | 135           | 3 <b>8</b> ¥     | B - 2 | 2.048          | 凝鉢       | 野部           |                       | 波状に隆帯を貼り付ける              |           |              | 0.8                | 灰褐色        | 灰白色         | 1 少2 少                         | £.         | 条瓜                                    |                  |   |
| 13   15   15   16   17   18   18   18   18   18   18   18  | 136           | I \$\$           | B - 4 | 2 197          | 2344     | 53 ex        |                       | 陸帯の横走貼り付け                |           | _            | 0.6                | matil As   | m210 A      |                                | <b>T</b> O | 条膜の後ナ                                 | 3.07             | ローリングを呑け事業                              |
| 18   18   18   18   18   18   18   18  | -             | 2 <b>6</b> 7     |       | -              | -        |              |                       | 直線+波状<br>種帯の横走貼り付け       |           | -            | -                  |            | 液い          |                                |            |                                       |                  |   |
| 1-   1-   1-   1-   1-   1-   1-   1-  | 131           |                  |       | 1.09           | (K)#     | 97 SD        |                       | ~                        |           | -            | 0.7                |            |             |                                | _          |                                       | **               | <b>井田に入入刊石</b>                          |
| 140   日本   1.72   日本   日本   日本   日本   日本   日本   日本   日   | 138           | E - 7類           |       | 2. 107         | 深体       | 野部           |                       |                          |           |              | 0.8                | 灰黑色        |             | 3                              | Ŗ          |                                       | 条與               |   |
| 14   日野   A - 1   1.8   原妹   野部  | 139           | 1 57             | A - 1 | 1.75           | 深体       | <b>9</b> 8   |                       |                          |           |              | 0.9                |            | 御他色         | 3                              | Ą          | 祖い条瓜                                  | 担い条項             | 整理は厚手                                   |
| 14   17  | 140           | g <b>\$</b>      | A - 1 | 1.8            | 深体       |              |                       |                          |           |              | 0.9                | 色の部分       | <b>無色</b>   |                                | Ŗ          | 祖い条旗                                  | 祖い条項             |   |
| 142   197   A - 1   1.87   254   555   755   | 141           | I 8#             | A - 1 | 1.72           | 深井       | 底部に<br>近い網   |                       |                          |           |              | 1.0                | i交い位色      |             | 2                              | Ą          | 粗い条項                                  | 粗い条項             | 厚手                                      |
| 14   日野   日 - 3   2.05   深林   技能症   九在 ?   | 142           | 1 27             | A - 1 | 1.87           | 深体       | 底部近く         |                       |                          |           |              | 0.9                | 赤褐色        | った時期        |                                | QĦ         | ¥α                                    | 条件               | 5011年手<br>-                             |
| 14 0 即 8 - 3 2,005   | 143           | 1 St             | A - 1 | 1.74           | 深体       | 明部           |                       |                          |           |              | 0.8                | 赤橙色        | 黒色<br>(うすい) | 1 2 3                          | Ŗ          | 祖い条項                                  | 細い条項             |   |
| 14   1.75   2   2   2   2   2   2   2   2   2  | 144           | II 87            | B - 3 | 2,065          | 深体       | <b>建部近</b>   | 丸底?                   |                          |           |              | 0.9                | 淡黄白色       |             |                                | 良好         | 群方向の条<br>旗                            |                  |   |
| 147   14 | 145           | I \$#            | A - 1 | 1.795          | 深体       | 5A88         |                       |                          |           |              | 1.1                | 明黑褐色       | 黄味がかった暗褐    | 1 2 3                          | Ą          |                                       |                  | <b>登</b> 位は厚手                           |
| 148   日本   日本   日本   日本   日本   日本   日本   日   |               | I ##             | A - 2 | 1.923          | 深体       | 野部           | <u> </u>              |                          |           | -            | 0.7                | Mе         |             |                                |            |                                       |                  | -                                       |
| 148   日野   A - 1   1.75   株   野部   |               |                  |       |                | -        | 底部近          | 丸底?                   | <del></del>              |           |              |                    |            |             | _                              | _          |                                       |                  |   |
| 159   日野   A - 2   1.887   保林   花部   九庄 ?  | _             |                  |       | <del>-</del>   | -        | -            |                       | -                        |           | -            | -                  |            |             | 3 3                            | -          | 担い各位                                  |                  |   |
| 150 日野 A - 1     1.715 厚妹 配差 九左?     九左?     0.8 景性 風色 3 2 9 3 以来収 条便の後す       151 日野 A - 3 2.192 茂妹 在記述 九左?     九左?     外面に円弧状の皮い状態     0.7 灰風色 段後 5.40 人 日 未収の後す     大佐の 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大   | -             |                  |       | <del>  -</del> | <u> </u> |              | 丸底?                   |                          |           |              | <u> </u>           |            |             |                                |            |                                       |                  | 5n8                                     |
| 151   B幹   A - 3   2.192   没体   世紀   大臣 7   外面に円弧状の使い状態   0.7   灰田色   2   少   大豆 7   不同   表面 7   大豆 7   | -             |                  |       |                |          |              |                       |                          |           | -            |                    | 浸い         |             | 1                              |            |                                       |                  | -                                       |
| 152   日本   A - 1   1.79   保体   在部   大久中も   小尖形になると   1.79   保体   日本   1.79   保体   日本   1.79   保体   日本   1.79   | -             |                  |       |                | -        | ٢.           |                       | 外面に円弧状の投い沈線              |           |              | <u> </u>           | 黄橙色        |             | 2 少                            |            | 条項の後ナ                                 | Ť                |   |
| 133     137     A - 1     1.785     資体 卵部     外面に大型の楕円押型文     0.9     灰白色     2     やや 不良     ナデ     器面はかなりローリングをうけている   | -             | -                |       |                | -        |              |                       |                          |           | _            |                    |            |             | 6411                           |            |                                       |                  | _ ,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,, |
| 133 世界 A-1 1.765 開発 開都   |               |                  |       | _              |          |              | が尖底になると<br>考えられる      | M Silva LiBi a seminari. |           | _            | -                  |            |             | 2 3                            |            | 小明                                    |                  |   |
| 154   正野   A - 1   1.795   緑体   朝恋   だが計画に小さな楕円停留   0.6   灰白色   無褐色   2   不良   不明   ローリングがほげしい   |               | _                |       |                | <u> </u> |              |                       |                          |           | _            |                    |            |             | 質問                             | 不良         |                                       | -                | をうけている                                  |
|  | 154           | 10               | A - 1 | 1.795          | 深体       | <b>9</b> 5   |                       | だが外面に小さな楕円仲間<br>文が施されている |           |              | 0.6                | 灰白色        | 無褐色         | 3                              | 不良         |                                       | 不明               | ローリングがはげしい                              |

# 第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物

(4)

| 香号  | 分類                            | 出った<br>グリッド    | 出表    | 28 | 残存部           | 形態の特徴    | 文様の特徴                            | 口唇部                | 进  | 2               | ė                   | Д          | 胎土                       | 規収       | 25 B                | 四 整                 |          |   |
|-----|-------------------------------|----------------|-------|----|---------------|----------|----------------------------------|--------------------|----|-----------------|---------------------|------------|--------------------------|----------|---------------------|---------------------|----------|---|
|     | 群名                            | グリッド           | 高度    |    | 62            | 10 14 18 |                                  | 施文                 | 世代 | 野型<br>平<br>(ca) | ж                   | 内          | 1. 角閃石<br>2. 長石<br>3. 石英 |          | #                   | 内                   | (A)      | # |
| 155 | 11群<br>D-1第                   | B - 3          | 1.79  | 深体 | 口段部           | 直口       | - "                              | 期目                 |    | 0.8             | 灰白色                 | 灰白色        | 2                        | 良        | 条垣                  | 条旗の接す               |          |   |
| 156 | 1 # 1 M                       | B - 1<br>B - 4 | 2.743 | 深体 | 口袋部           | 直口       | -                                |                    |    | 0.8             | <b>無色</b>           | 灰黑色        | 1 3                      | 良        | 条旗                  | 条旗の後ナ               |          |   |
| 157 | E-la A                        | 4 0            | 1.809 | 深鉢 | 口核部           | 直口       | へラ状工具による削り出し<br>機器               |                    |    | 0.6             | 暗褐色                 | 暗褐色        | 3 4                      | Ą        | 不明                  | 条瓜                  |          | _ |
| 158 | 11 8#<br>E-1 b #11            | A - 2          | 1.675 | 深体 | 口線部           | at p     | 隆帯の横走貼り付け                        |                    |    | 0. B            | 浸い<br>赤褐色           | 浸い<br>赤褐色  | 2 &                      | Ą        | 条項                  | 条旗                  |          |   |
| 159 | I 群<br>E-1 b 知                | A - 3          | 2. 12 | 深鉢 | 口粒部           | đị D     | 陸帯の横走貼り付け                        |                    |    | 0.9             |                     | 灰黑色        | 1 2 3                    | Ą        | 祖い条項                | 担い条兵                |          |   |
| 160 | 11数<br>E - 1数                 | A - 2          | 2.58  | 深井 | <b>厨部</b>     |          | 陸帯の模走貼り付け                        |                    |    | 0.8             | 換い<br>灰褐色           | 接い<br>灰褐色  | 2 3                      | やや<br>不良 | 祖い条痕                | 担い条項                |          |   |
| 161 | 11 群<br>E - 1 類               | A - 3          | 1.908 | 深鉢 | 明部            |          | 隆帯の横走貼り付け                        |                    |    | 1.1             | 灰黑色                 | 無色         | 1<br>2<br>3              | やや<br>不良 | 条俱                  | 条页                  |          |   |
| 162 | 11 群<br>E-10 類                | B - 3          | 2. 12 | 深井 | 口條器           | やや内膚     | <b>期日基帝の根走貼り付け</b><br>(2条単位)     | ハイガ<br>イ 背面<br>の押圧 |    | 0.8             | A 6                 | 無色         | 2 35                     | 良好       | 粗い条棋                | 粗い条痕                |          |   |
| 163 | 11 数<br>E-13 類                | A - 2          | 1.739 | 森林 | 口粒部           | やや内膚     | 刻目隆帯の横走貼り付け<br>(カマポコ形)           | 利目                 |    | 0.7             | 赤褐色                 | 赤褐色        | 1 1/2<br>2<br>3          | 良好       | クシ又は貝<br>で波状に施<br>す | クシ又は貝<br>で波状に施<br>す |          |   |
| 164 | I 群<br>E-10 類                 | B - 2          | 1.788 | 深鉢 | 96            |          | 刻目隆帝の横走貼り付け<br>(2条単位)<br>勇老き状の沈線 |                    |    | 0.7             | 暗褐色                 | 暗褐色        | 3                        | 良好       | 担い条項                | 担い条項                |          |   |
| 165 | [ <b>群</b><br>E-13 <b>期</b> ] | B - 2          | 1.82  | 深体 | 野部            |          | カマボコ形騒帯の横走貼り<br>付け(2条単位)         |                    |    | 1.0             | 無褐色                 | 無褐色        | 1<br>2<br>3              | 良好       | 祖い条項                | 祖い条項                |          |   |
| 166 | 11 22                         | B - 4          | 1.842 | 深鉢 | 明部            |          |                                  | <u> </u>           |    | 0.8             | 淡暗褐色                | 没黄色        | 1 2                      | 良        | 祖い条項                | 粗い条項                |          |   |
| 167 | 1 83                          | A - 3          | 1.769 | 深体 | 明部            |          |                                  |                    |    | 1.0             | せ 単色                | <b>無灰色</b> | 2 3                      | Ą        | 粗い条項                | 粗い条項                |          |   |
| 168 | 11 数                          | B - 4          | 1.971 | 深鉢 | 明節            |          |                                  |                    |    | 0.7             | 黑色                  | 黑色         | 1 2                      | 良好       | 組い条項                | 粗い条項                |          |   |
| 169 | I ##                          | A - 3          | 1.671 | 深体 | 開節            |          |                                  |                    |    | 0.6             | 淡い<br>赤褐色           | 淡い         | 2.3                      | Ą        | 粗い条痕                | 粗い条痕                |          |   |
| 170 | 0 <b>6</b> 9                  | A - 2          | 1.857 | 深体 | <b>9</b> 86   |          | 条旗と思われるが複合鋸樹<br>状に描く             |                    |    | 0.8             | 暗赤褐色                | 無色         | 2 3                      | A        | 条紅                  | 粗い条項                |          |   |
| 171 | 0 <b>8</b> 9                  | A - 3          | 2.013 | 深体 | 明部            |          |                                  |                    |    | 0.7             | 暗褐色                 | 暗褐色        | 3                        | 良        | 粗い条項                | 組い条項                |          |   |
| 172 | 181                           | A - 3          | 1.762 | 深鉢 | <b>阿部</b>     |          |                                  |                    |    | 0.8             | 暗褐色                 | 暗褐色        | 1<br>2<br>3              | Ą        | 縦方向の条<br>旗          | 条庭の後ナ<br>デ          |          |   |
| 173 | E \$\$                        | A - 3          | 1.671 | 深体 | 網部            |          |                                  |                    |    | 0.9             | にぶい<br>質視色          | 食福色        | 1<br>2<br>3              | 良好       | 祖い条項                | 粗い条項                | 表面磨破している |   |
| 174 | 18                            | A - 2          | 1.778 | 森林 | 5 <b>9</b> 66 |          |                                  |                    |    | 0.7             | 換費灰色                | 暗褐色        | 1<br>2<br>3              | Ą        | 担い条項                | 担い条項                |          |   |
| 175 | 0 <b>\$</b> \$                | A - 2          | 1.652 | 深体 | 底部近く          | 丸底?      |                                  |                    |    | 0.7             | 褐色                  | 無褐色        | 2                        | 良好       | 粗い条度                | 粗い条項                |          |   |
| 176 | E 83                          | B - 1          | 1.579 | 深体 | 底部近<br>く      | 丸底?      |                                  |                    |    | 1.1             | 黄色                  | 質色         | 1 3<br>2<br>3 1/2        | Ą        | 担い条項                | 粗い条項                | 厚手である    |   |
| 177 | 181                           | A - 3          | 1.638 | 深体 | 主部近           | 丸底?      |                                  |                    |    | 0.5             | 瓜褐色                 | 灰褐色        | 2 少                      | 良好       | 粗い条痕                | 担い条項                |          |   |
| 178 | 11 87                         | B - 4          | 1.519 | 深体 | 底部近           | 丸底?      |                                  |                    |    | 0.9             | 黄橙色                 | 無褐色        | 2 2                      | Ą        | 担い条項                | 粗い条項                |          |   |
| 179 | 18                            | A - 2          | 1.649 | 深体 | <b>安慰近</b>    | 丸底?      |                                  |                    |    | 0.9             | 赤褐色<br>上部に少<br>ヶ風褐色 | 黑褐色        | 2 3<br>3 4               | 良好       | 粗い条項                | 粗い条項                | 外面にススが付着 |   |
| 180 | 0 <b>8</b> ‡                  | A - 3          | 1.487 | 深井 | 明部            |          |                                  |                    |    | 0.6             | 黄褐色                 | 黄褐色        | 1 2                      | 良好       | 粗い条項                | 粗い条旗                |          |   |

### 第4節 第8~10層の遺物

第7表 第11層出土土器観察一覧表

|    | 0.4-         |               |                  |            |          |            |       |                          | 文様の特徴   |             |               | 口唇部        |             |                      | Α  | 23  |         |                  | 25 (fi   | NA.          | 府 減            |                            |
|----|--------------|---------------|------------------|------------|----------|------------|-------|--------------------------|---|-------------|---------------|------------|-------------|----------------------|--|---|---------|------------------|----------|--------------|----------------|----------------------------|
| 番号 | 分類群名         | 出土            | 黒虚               | 25         | 8        | 残存         | 部位    | 形態の特徴                    | 外面  | 件           |               | 施文         | 法<br>足<br>高 | 壁                    | 色外   | 内   | 胎 I:    | 焼成               | 外        | 内            | 状 態            | 偏 号                        |
| 1  | <b>□ 8</b> # | A-2           | 2. 473           | 鉢土         | 髮        | 84         | 部     |                          | 区画不明<br>沈森文   | tr          | L             | ボー明        | -           | 5 cm                 | 後政府色   | に発生   | 1-2-3   | F4.              | 3        | 3            | 少々あり           |                            |
| 2  | II 8#        | B-2           | 2. 69            | 深          | #        | 胴          | 83    |                          | 区西不明<br>九段文   | 14          | L             | 不明         | -           | 5 cm<br>5 cm         | にが<br>が<br>が<br>は<br>は<br>は<br>は<br>に<br>が<br>は<br>に<br>が<br>に<br>が<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>の<br>に<br>。<br>に<br>の<br>に<br>。<br>に<br>。<br>に<br>。<br>に<br>。<br>に<br>。<br>に<br>。<br>に<br>。<br>に<br>。<br>に<br>。<br>に<br>。<br>に<br>。<br>に<br>。<br>に<br>。<br>に<br>。<br>に<br>に<br>に<br>に<br>に<br>に<br>に<br>に<br>に<br>に<br>に<br>に<br>に | 温度  | 1-2-3   | 不                | 3        | 3            | 著しい            | スス付着 (内・外面)                |
| 3  | 11 St        | B-3           | 2. 705           | 深          |          | 駉          | 部     |                          | 大小文本文本文本文本文本文本文本文本文本文本文本文本文本文本文本文本文本文本文本  | 14          | L             | ボ 朝        | -           | 5 m<br>5 m           | 灰黄褐色   | 没负担色  | 1-2-3-4 | 7                | 3        | 3            | 著しい            | スス付着 (外面)                  |
| 4  | III SH       | A · B-2       | -                | 华          |          | 89         | 部     |                          |   |             | L             | 不明         | -           | 7ma<br>6==           | 提灰色<br>灰質色<br>灰白色  | によい<br>質性色  | 1.2.3   | 4-               | 3        | 3            | あり             | スス付着 (外面)                  |
| 5  | 田幹           | B-2<br>B-2    | 2. 62            | 深深         | _        | 明明         | 部     |                          | オ語文<br>は画本明<br>沈線文  |             | L             | 不明不明       | -           | 6mm                  | 据灰 <u>色</u><br>灰白色   | 英 <del>山色</del><br>灰白色  | 1-2-3   | H.               | 3        | 4            | 少々あり           | <del></del> -              |
| 7  | ■ <b>8</b> ‡ | B-2           | 2.802            | 华土         |          | EF)        |       |                          | 区画あり<br>元段文   | _           | L             | 不明         | -           | 5cm<br>5cm           | 褐灰色  | にぶい<br>黄橙色  | 1.2.3   | 不や               | 3        | 3            | 著しい            |                            |
|    |              | B-2           | 2.537            | t          | #        | □#         | から    | 13137(17                 | 区画なし<br>列突文(3)・沈線文  | 4           | $\exists$     | 有          | 24.2        | 5mm<br>5mm           | 是超色  | に数据文  | 1.2.3   | R                | 3        | 4-3          | * L            | スス付着 (外面)<br>補修孔あり         |
| 8  | IV ST        | <u> </u>      | 2.896            | 1          |          |            |       | "                        |   | -           | _             |            | 22.7        | 5ma<br>5ma           | 灰褐色<br>褐灰色<br>紫褐色  | 授權<br>暗褐色   |         | 10子              |          |              | <u>-</u>       | 福修孔あり<br>スス付着(外面)<br>補修孔あり |
| 10 | IV ST        | B-2<br>B-2    | 2.687            | 深          | 林        |            | から    | "                        | 区西なし<br>刺突文(3)・沈線文<br>区画なし<br>刺突文(2)・沈線文  | 4           | $\forall$     | なし<br>有    | _m.<br>23.1 | 6m<br>6m             | 製掘 <u>色</u>  | になり   | 1.2.3   | 甚                | 3        | 3            | なしなし           | 福修孔あり<br>スス付着 (外面)         |
|    | -            | A-1           | 2.001            | H          |          |            |       |                          | 列突又(2)・戊線又  | <del></del> | -+            |            | cm          | 5.00m<br>600m        |  | 温度  |         | - 挺-             | $\vdash$ |              |                |                            |
| 11 | IN SE        | B-2           | 2 202            | ╁          | 林        | 1          |       |                          | 区画あり<br>朝安文(3)・沈線文<br>複合文領曲文<br>区画あり  | 14          |               | fi         |             | 5am                  | <b>没货租色</b>  | 赤灰色   | 1.2.3.4 | 挺                | 3        |              | あり             | スス付着(外面)                   |
| 12 | IV SE        | A-2           | 2. 337<br>2. 783 | 74         |          | -          | ₩部    | やや外反                     | 京の(4)・沈線文<br>教技・協議文<br>「医院あり<br>東東文(3)  |             |               | 有          | 19.7        | 5 cm<br>6 cm<br>7 cm | 超灰色  | はない   | 1.2.3   | -17              | 3        | 3            | <b>b</b> 9     | 海状口轻                       |
| 13 | IN SE        | A-2<br>A-1    | 2.644            | 探          |          | t -        | 林部    | "                        | 製薬支(3)  | 4           | L             | 14 L       | CIR         | 6en<br>5ea           | 福灰色  | 明福灰色  | 1.2.3   | 日                | 3        | 3            |                | 波状口縁<br>スス付着(外面)           |
| 14 | IN SE        | A-3<br>B-2    | 2.831            | 8          | #        | ₩          | 林部 林部 | "                        | 列突文(2)<br>水線文・斜花線<br>区國本文 (不明)<br>図密本 (不明)<br>図字文 (不明)  | -           | -             | なしなし       | Ē           | 5 ma<br>8 ma         | 現形色<br>無褐色   | 灰褐色   | 1-2-3   | 赶                | 3        | 3            | 少々あり           | スス付着 (外面)                  |
| 16 | IA SE        | B-2           | 2.69             | 17         |          | t –        | 林歌    | "                        | 例要文 (不明)<br>  区画不明<br>  例要文 (不明)  | $\vdash$    | $\dashv$      | なし         | -           | 6m<br>6m<br>6m       | 黑褐色  | によい   | 1.5.3   | 1                | 3        | 3            | あり             | スス付着(外面)                   |
| 17 | IV 8#        | B-3           | 2.939            | 1-         | #        | 1          | 幹部    | "                        | 区画なし<br>刺突文(3)・沈線文  |             | T             | 有          | -           | 5 cm                 | 明褐灰色<br>灰白色  | 灰白色   | 1-2-3   | 不多               | 3        | 3            | 少々あり           | -                          |
| 18 | IV S¥        | B-2           | <b> </b> -       | 8          | #        | _          | 緑部    | ,,                       | 区画なし<br>刺突文(3)・沈線文  | 4           | ı             |            | -           | 6ca<br>6ca           | 視灰色  | 灰白色<br>に黄色<br>黄色  | 1-2-3   | R                | 3        | 2            | 少々あり           | スス付着 (外面)                  |
| 19 | IV S#        | B-3           | 2, 526           | 鲜          |          | -          | 縁部    | -                        | 区断不明  |             | +             | 有          | -           | 5 tata<br>5 tata     | 褐灰色  | 双色<br>にぶい<br>黄橙色  | 1-2-3   | 子で               | 3        | 3            | あり             |                            |
| 20 | IV 8‡        | A-2           | 2.801            | 野          |          | -          | 林郎    | -,-                      | 列突文(3) · 沈線文  | -           | +             | 有          | -           | 5mm                  | 褐灰色  | 質性色<br>だぶい<br>数倍色   | 1.2.3   | Ė.               | 3        | 3            | あり             | スス付着 (外面)                  |
| 21 | IN EX        | B-3           | 2.929            | + +        |          | +          | 経部    | "                        | 大阪大明   大阪 X   大阪 X | 4           | L             | 有          | -           | 5 ma<br>5 ma<br>5 ma | 褐灰色  | 灰黄褐色  | 1.2.3   | 英                | 3        | 3            | あり             |                            |
| 22 | IV S¥        | B-3           | 2.858            | \$i<br>±   | 影        |            | 林部    | ,,                       | (大)   |             |               | 不明         | -           | 5 mm<br>5 mm         | 灰黄褐色   | にぶい<br>質性色  | 1-2-3-4 | 水<br>.良          | 3        | 3            | あり             |                            |
| 23 | IV ST        | A · B<br>-2·3 | -                | ş          | 形器       | 0          | ₩部    | "                        | 区画不明  |             |               | Ħ          | -           | 4 mm<br>4 mm         | 淡黄色  | い色い色<br>が優く優し<br>が  | 1.2.3   | R                | 3        | 3            | あり             |                            |
| 24 | IN SE        | A-2           | 2.707            | #          | . 形      |            | 林部    | やや内病                     | 区画不明<br>科尤段   | 12          | ι             | 14 L       | -           | 5 cm<br>5 cm         | 褐灰色  | たが発展  | 1.2.3   | 权                | 3        | 3            | あり             |                            |
| 25 | IV ST        | A-3           | 2. 464           | 1          | 影        |            | 極部    |                          | 区應不明<br>刺突文   | 12          | ι             | fi         | -           | 5 mm<br>6 mm         | にない  | 黄檀色   | 1.2.3   | B.               | 3        | 3            | 少々あり           |                            |
| 26 | IV S¥        | A-4           | 2.761            | #<br>±     |          | 1          | 棒部    | やや内海                     | <b>新興安し</b>   | 4           | ι             | fi         | -           | 5==<br>6==           | 超灰色  | 灰褐色   | 1-2-3   | 松                | 3        | 3            | 少々あり           |                            |
| 27 | IN EX        | A-1           | -                | **         | . 23     | 10M        | tet.  |                          | 区画なし<br>製実文・沈線文<br>区典工明   |             | Į             | <b>杉明</b>  | -           | 500<br>500           | 提  | 泛   | 1-2-3   | 1                | 3        | 2            | 少々あり           |                            |
| 28 | IV ST        | A-2           | 2. 889           | L.         |          | -          | 林部    | 01 <b>98.5.9.</b> (1216) | ZUEXX   |             | Ì             | fi         |             | . 6cm.               | <b>投資</b>  |   | 1.2.3.4 | 育                | 3        | 3            | 著しい            |                            |
| 30 | IV ST        | B-3<br>B-4    | 2.661            | <b>禁</b> 士 |          | _          | 林部    |                          | (人國不明<br>九線文·斜池線<br>  区國女[  | ł           | ļ             | fi<br>なし   | _           | 6ma                  | に<br>は<br>が<br>反<br>を<br>の<br>に<br>の<br>の<br>の<br>の<br>の<br>の<br>の<br>の<br>の<br>の<br>の<br>の<br>の   | 楊灰色<br>に正<br>位  | 1.2.3   | 椞                | 3        | 3            | 少々あり<br>あり     | スス付着 (外面)                  |
| 31 | IV SE        | B-3           | 2. 584           | 1          |          | +          | 林部    |                          | 区語なし<br>では<br>ななし<br>を記述される<br>に対象がある。  | 4           | L             | 4 L        | -           | 5 mm                 | <b>灰龍色</b>   | ほ<br>仮<br>格色  | 1-2-3   | 12               | 3        | <del>3</del> | 少々あり           |                            |
| 32 | IV SE        | A-2           | 2.762            | -          | **       |            | を出    | Ī                        | 文画あり・列突文<br>文線文・斜次線   | 14          | L             | ド 明        | -           | 9m<br>4m<br>4m<br>7m | 秘灰色  | 赤灰色   | 1.2     | 1                | 3        | 3            | <i>ው ላ</i> ሕ ባ | スス付着 (外面)                  |
| 33 | IN SE        | B-3           | 2.564            | 深          |          | 89         |       | ļ :                      | は<br>対域の<br>大変を<br>大変を<br>大変を<br>大変を<br>大変を<br>大変を<br>大変を<br>大変を  |             | ١             | ボ 明        | -           | - 7ma<br>- 6ma       | 明な<br>を<br>を<br>を<br>を<br>を<br>を<br>を<br>を<br>を<br>を<br>を<br>を<br>を<br>を<br>を<br>を<br>を<br>を<br>を  | 表版<br>技術性<br>技術性  | 1.2.3   | 1                | 3        | 3            | & L            | スズ付着(内・外面)                 |
| 34 | IV #         | B-3           | 2.895            | _          | #        | 嗣          | 部     | L                        | 理合建的文   | u           | ١             | ⊀ 明        |             | .6m                  | 機能   | 施技を   | 1.2.3   | Ħ                | 3        | 4            | 著しい            | 部) 774 (775                |
| 35 | IN 8#        | B-2           | 2.691            | 1          |          | BFI        | 部     |                          | 区商不明<br>科花線:押点文<br>日本系列:科学文   | 4           | ١             | 作 明        | -           | 4 cm<br>5 cm         | 相灰色  | 英植色   | 1-2-3   | Ħ                | 3        | 3            | 著しい            |                            |
| 36 | IV S‡        | B-2           | 2.661            | 井          | 髮        | 阳          | 部     |                          | 区画あり・制御文<br>大線文・斜地線   | ti.         | L             | ボ 明<br>    |             | 4m<br>4m             | 褐灰色  | 褐灰色   | . 5     | 質                | 3        | 2            | あり             |                            |
| 37 | IV \$¥       | B-2           | 2, 661           | 篠          | #        | 嗣          | 部     |                          | 押方文<br>に高めり<br>複合文<br>押方文   | 4           | L             | 不 明        | <u> </u>    | 5 ma<br>5 ma         | 褐灰色  | を使  | 5       |                  | 3        | 4            | あり             | スス付着 (外面)                  |
| 38 | IV S\$       | B-2           | 2. 47<br>2. 683  | 篠          | #        | 眮          | 部     |                          | 掃呂安岡 ×<br>  | ů           | ı             | <b>ボ</b> 明 | -           | 6==<br>6==           | 陽灰色<br>に最低色  | 福灰色<br>にぶん<br>英様色   | 1-2-3   | ¥.               | 3        | 3            | 少々あり           | スス付着 (外面)                  |
| 39 | IV \$\$      | В-3           | 2.863            | 葆          | <b>#</b> | 嗣          | 部     |                          | 区画不明<br>沈線文·押点文   | te          | L             | ボ 明        | -           | 4 co                 | に過失無に  | 灰 黄褐色<br>褐灰色  | 1-2-3   | 不良               | 不明       | 3            | 少々あり           | スス付着 (外面)                  |
| 40 | IV S#        | B-2           | 2.741            | #<br>±     | 形 25     | <b>5</b> P | 部     |                          | 区画不明<br>刺突文·沈線文   | 4           | L             | ボ 明        | -           | 6ma<br>6ma           | 社会<br>に質性色   | 研<br>展<br>大<br>の<br>の<br>が<br>の<br>の<br>の<br>の<br>の<br>の<br>の<br>の<br>の<br>の<br>の<br>の<br>の | 1.2.7   | R<br>tř          | 3        | 3            | 少々あり           |                            |
| 41 | IN EX        | B-2           | 2. 693           | Т          |          | 銅          | 部     |                          | 区画あり・刺突文<br>沈線文・斜沈線文  | ボ           | 明             | 不 明        | -           | 5 mm                 | 福灰色<br>にぶい<br>黄檀色  | 単に数に扱い<br>はない色い<br>目い色い   | i       | 8                | 3        | 3            | 著しい            |                            |
| 42 | IN BE        | A-2           | E                | æ          | #        | 65         | 部     |                          | <b>経験数: 海営文</b>   | 4           | L             | 不 明        | -           | 5 mm<br>6 mm         | 医摄影  | かい  | 1-2-3   | 3                | 3        | 3            | あり             | -                          |
| 43 | IV 8¥        | B-2           | 2, 777<br>2, 755 | 篠          | #        | 駉          | 部     |                          | 区面不明<br>沈線文   | 4           | L             | 不明         | -           | 5 ma                 | 機火色<br>にが<br>放射色   | 灰白色<br>灰色色<br>褐灰色   | 1.2.3   | D<br>好<br>D      | 3        | 3            | 少々あり           |                            |
| 44 | IV 8¥        | A-3           | 2.843            | ä          | #        | 69         | 部     |                          | 大阪の大阪の大阪の大阪の大阪の大阪の大阪の大阪の大阪の大阪の大阪の大阪の大阪の大  | 4           | L             | 不明         | -           | 5 mm                 | が<br>地域に<br>数に<br>数に<br>数に<br>数に<br>数に<br>数に<br>数に<br>数に<br>数に<br>数  | 灰黄色   | 1-2-4   | 好好               | 3        | 4            | 少々あり           | · <del>-</del>             |
| 45 | IV \$#       | B-3           | 2.89             | +          | #        | -          |       |                          | 区画あり<br>沈線文・斜沈線文  | _           |               | 不明         | -           | 5mm<br>6mm           | <b>皮囊基色</b>  | 灰黄褐色  | 1-2-3   | * 8              | 3        | _            | 著しい            |                            |
| 46 | 物料           | A-2<br>A-2    | 2.27             | 深          |          | 嗣          |       | <u> </u>                 | 大阪 マッ   | 4           |               | 不明         | -           | 5m<br>6m             | 養灰色<br>褐灰色   | 灰白色<br>褐灰色  | 1.2.3.5 | - <del>[</del> ] | 3        | 4            | 少々あり           | スス付着 (外面)                  |
| 48 | IA 84        | B-4           | 2.585            | 1 40       |          | BE         |       | <u> </u>                 | <b>科本版文</b><br><b>大阪文</b>   | 4           | $\rightarrow$ | 不明         | -           | 5m                   | 揚灰色  | 福灰色   | 1.3.5   | - <b>H</b>       | 3        |              | 苦しい            | へ 八 13 43 (7)              |
| 49 | IA £         | B-3           | 2.921            | 深          |          | 鹿          | 部     |                          | 戊舊不明<br>沈鏡文   | ŭ           | L             | 不明         |             | 3m<br>6m<br>6m       | 福灰色<br>灰質福色  | 明褐灰色  | 1-2-3   | *                | 3        | 6            | 著しい            | 7 7 4 2 7 1072             |
| 50 | IV 8#        | B-2           | 2. 387<br>2. 683 | æ          | #        | 氐          | 部     |                          | 泛霞  | 4           | L             | 不明         | _           | 5 <b>ca</b>          | 能  | 褐灰色   | 1-2-3   | 不良               | 3        | 3            | 著しい            | スス付着(外面一<br>部・内面)          |
| 51 | IV 8¥        | B-2           | 2.796            | Ø          | #        | 瓞          | 部     |                          | 医 <u>两</u> 不明<br>无線文  | u           | L             | 不 明        | -           | 700<br>700           | 地区におおば次に伸ぶ色と   | 褐灰色   | 1.2.3   | Ą                | 3        | 6            | 著しい            |                            |

※約土 1. 長石 2. 角閃石 3. 石类粒 4. 黒曜石 5. 滑石 6. 雲母 7. 砂粒 器面関整 1. 貝殻条痕 2. 条痕→ナデ消し 3. ナデ 4. ヘラナデ 5. ヘラミガキ状 6. 振痕状凋骸

## 第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物

## 第8表 貯蔵穴内出土土器観察一覧表

|     | 分類           | # ±              |       | Γ        |         |              | IS DE CALE    | *****                         |    | _ |        | :+          | A .                  | -                               |   |         |    |   | -              | - max   |                                 |
|-----|--------------|------------------|-------|----------|---------|--------------|---------------|-------------------------------|----|---|--------|-------------|----------------------|---------------------------------|---|---------|----|---|----------------|---------|---------------------------------|
| 番号  | 群名           | 出土グリッド           | 出度    | 8        | 髄       | 残存部位         | 形態の特徴<br>口縁部  | 文様の特徴<br>外 面                  |    | ā | 口野部 施文 | □{¥         | 55 gg                | 外                               | 内   | 胎土      | 烧成 | 外 | <b>胸整</b><br>内 | 形 被 状 糖 | (A) ,*                          |
| 1   | 四群           | A-2              | -     | 华土       | 形<br>25 | <b>SP</b> 88 |               | 区画あり<br>沈線文                   | 4  | L | 不明     | -           | 6ma                  | 淡黄色                             | 明褐灰色  | 1-2-3-4 | 良好 | 3 | 3              | 少々あり    |                                 |
| 2   | <b>Ⅲ 8</b> ‡ | A-2              | -     |          | 形<br>28 | 口較部          |               | 区画なし 沈線文                      |    |   | * L    | -           | 5 ma                 | 掲灰色<br>にぶい<br>黄橙色               | にぶい<br>英俊色  | 1-2-3   | 良好 | 3 | 不明             | あり      | スス付着<br>(外面一部)                  |
| 3   | IV <b>21</b> | -                | -     | 深        | #       | 口縁から<br>胴部   | はほ直口する        | 区画あり<br>制突文(3)・沈線文<br>堤何学文様   | 12 | L | 有      | 21.0<br>cm  | 6===<br>6===<br>6=== | 掲灰色<br>無褐色<br>灰白色<br>にお色<br>黄橙色 | 福灰色<br>にぶい<br>黄橙色<br>灰褐色  | 1-2-3   | 良好 | 3 | 4-3            | なし      | 級歯文・鍵手文<br>スス付着 (外面)<br>内面炭化物か? |
| 4   | IV S#        | B-2              | -     | 深        | #       | 口稜部          | やや外反する        | 区画あり<br>制突文(3)・沈線文<br>(複合錫樹文) |    |   | 有      | -           | 4aa                  | 褐灰色                             | 褐灰色   | 5       | 良好 | 3 | 4              | 少々あり    | スス付 <b>君</b><br>(外面一部)          |
| 5   | IV 5#        | B-2              | -     |          | 形       | 口軽部          | ,,            | 区画あり<br>刺突文(3)・沈線文            |    |   | 有      | -           | 5 mm                 | 揭灰色<br>黑褐色                      | 灰黄褐色  | 5       | 良好 | 3 | 3              | なし      | スス付 <b>君</b><br>(外面一部)          |
| 6   | [V E#        | A-2              | -     | 深        | #       | 口棒部          | 外反する          | 区画なし<br>劉突文(3)・沈線文            |    |   | なし     | 20. 1<br>cm | 6 ma                 | 褐灰色<br>灰白色                      | 灰白色灰黄色  | 1-2-3   | 段舒 | 3 | 3              | なし      | スス付着 (外面)                       |
| 7   | 14 <b>24</b> | B-2              | -     | 祼        | #       | 口棒部          | 口縁がやや<br>波状する | 区画あり<br>刺突文(3)・沈線文            | u  | L | Ħ      | -           | 5 ma<br>6 ma         | 灰白色                             | にぶい<br>黄椎色  | 1-2-3   | 良好 | 3 | 3              | 少々あり    | スス付着(外面)                        |
| 8   | [V S#        | -                | _     | 深        | #       | 口棒部          | やや内質す<br>る    | 区画なし<br>制突文(3)・沈線文            |    |   | Ħ      | -           | 5 mm<br>5 mm         | 褐灰色                             | 褐灰色   | 3-5     | 良好 | 3 | 3              | あり      |                                 |
| 9   | [Y 5\$       | B-2              | _     | 井土       | 形<br>25 | 口較部          | "             | 区画不明<br>刺突文(3)・沈線文            |    |   | Ħ      | -           | 5mm<br>5mm           | 黄灰色 灰黄色 .                       | 黄灰色<br>灰黄色  | 5       | 段好 | 3 | 3              | あり      |                                 |
| 10  | IA 8#        | A · B - 2        | -     | 深        | #       | 口軽部          | 外反する          | 区画なし 沈線文                      |    |   | なし     | -           | 5 mm<br>5 mm         | 褐灰色<br>明褐灰色                     | 褐灰色   | 1-2-3   | 段野 | 3 | 2              | なし      | スス付着 (外面)                       |
| 11  | IA SE        | A-3              | _     | 深        | #       | 阿部           |               | 区画あり<br>沈線文<br>複合媒樹文          | u  | L | 不明     | -           | 5 mm<br>5 mm         | 褐灰色<br>灰黄褐色                     | にぶい<br>仮褐色  | 1-3-5   | 良好 | 3 | 3              | 少々あり    |                                 |
| 1 2 | IA £#        | A-2              | 2.749 | 深        | #       | 刷部           |               | 区画あり<br>沈線文<br>複合版樹文          | 4  | L | が明     | -           | 5 ma<br>5 ma         | 褐灰色<br>灰黄褐色                     | 褐灰色<br>没黄橙色   | 1-2-3   | 良好 | 3 | 4              | & L     | スス付着 (外面)                       |
| 1 3 | IA 24        | B-2              | -     | 深        | #       | <b>89</b> 81 |               | 区画不明<br>沈線文・押点文               | u  | L | 不 明    | -           | 5 mm                 | 明褐灰色                            | 灰黄褐色<br>によい<br>黄橙色  | 1.5     | 軽  | 3 | 3              | 者しい     |                                 |
| 14  | 水群           | B-2<br>A · B - 2 | _     | <b>禁</b> | 形器      | 易新           |               | 区画不明<br>沈線文 -                 | u  | L | 不明     | -           | 4 ma                 | 褐灰色                             | 灰 に<br>根<br>と<br>に<br>を<br>と<br>の<br>に<br>を<br>と<br>の<br>と<br>の<br>と<br>の<br>と<br>の<br>と<br>の<br>も<br>の<br>も<br>の<br>も<br>の<br>も<br>の<br>も<br>の | 1-2-3-4 | 段好 | 3 | 4              | 少々あり    | スス付着(外面)<br>スス付着<br>(外面一部)      |
| 1 5 | IV S#        | A-2              | -     | 葆        | #       | <b>明</b> 部   |               | 区画不明<br>沈線文                   | u  | ι | 不明     | -           | 6m                   | 黑褐色                             | 灰黄褐色  | 1-2-3-4 | 段好 | 3 | 4              | &L      | スス付着 (外面)                       |
| 16  | IA 24        | A-2              | -     | 深        | #       | <b>刷</b> 郵   |               | 区画不明<br>複合銀出文                 | te | L | 不 明    | -           | 6 cm                 | 褐灰色                             | 褐灰色   | 1-3-6   | 好  | 3 | 3              | 少々あり    | スス付着 (外面)                       |
| 17  | IV S#        | A-2              | -     | 深        | #       | 厨部から<br>底部   |               | 区画不明<br>沈線文・斜沈線文              | te | L | 不明     | -           | 4 ma<br>5 ma         | 黄灰色                             | 灰黄色   | 1-2-3   | 好  | 3 | 4              | &L      |                                 |
| 18  | IA 24        | A-2              | -     | 深        | 鉢       | 底 部          |               | 区画不明<br>沈镍文                   | ¢. | L | 不明     | -           | 5 ma<br>6 ma         | 灰白色<br>褐灰色                      | <b>福灰色</b><br>灰黄褐色  | 1-2-3   | 好  | 3 | 4-3            | 少々あり    | スス付着 (外面一部)                     |
| 19  | IV S#        | B-2              | -     | 课        | #       | 電力           |               | 区画不明<br>沈線文                   | te | L | 不明     | _           |                      | 褐灰色<br>灰黄褐色<br>明褐灰色             | にぶい<br>黄橙色<br>褐灰色<br>黒褐色  | 1.5     | 段好 | 3 | 4-3            | なし      | スス付着 (外面)<br>炭化物付着か<br>(内面)     |
| 2 0 | IA 24        | A-2              | -     | 裸        | #       | <b>鹿</b> 翻   |               | 区画不明<br>沈線文                   | te | L | 不明     | -           | 5 ma<br>5 ma         | 褐灰色<br>にぶい<br>黄檀色<br>灰褐色        | 褐灰色<br>灰褐色  | 1-2-3   | 良好 | 3 | 4-3            | なし      |                                 |
| 2 1 | IV Sŧ        | A-2<br>A-B-2     | 2.737 | 祼        | #       | 胴部から<br>底部   |               | 区画不明<br>沈線文·斜沈線文              | te | L | 不明     | -           | 5 mm                 | 黄灰色<br>にぶい<br>黄色                | 費灰色<br>灰白色  | 1.2.3   | 良好 | 3 | 2.3            | 少々あり    |                                 |
| 2 2 | IA Sŧ        | A-2              | -     | 傑        | #       | 開部から<br>底部   |               | 区画不明<br>沈線文                   | u  | L | 不 剪    | -           | 5 ma<br>4 ma         | 褐灰色                             | 無褐色<br>褐灰色  | 1-2-3   | 良舒 | 3 | 4-3            | &L      | スス付着(外面)<br>内面炭化物か?             |

# 第4節 第8~10層の遺物

第9表 第10層出土・採集土器 (第Ⅲ・Ⅳ群) 観察一覧表(1)

| 番号  | <del>9</del> | Ø          | 出土              | 出土高度                      | 5         |     | 幾存部           | 形態の特徴<br>ロ 軽 部<br>旺 部 | 文様の特殊  | ០ទីនី | 注题<br>口径<br>器高 | t<br>sem     | ė                  | <b>A</b>                 | 胎士      | 焼破             | <b>25</b> (15) | AB    | 磨滅             | ω *                                 |
|-----|--------------|------------|-----------------|---------------------------|-----------|-----|---------------|-----------------------|--|-------|----------------|--------------|--------------------|--------------------------|---------|----------------|----------------|-------|----------------|-------------------------------------|
| B-9 | E#           | 名          | グリッド            | m                         | -         | az. | 位             | E 85                  |  | 施文    | 器高             |              | #                  | <u>内</u>                 | 40 1.   | L.,            | *              | 内     | -e-            |                                     |
| 1   | to           | SŦ         | B - 2           | 2. 537<br>2.482<br>2. 896 | 1782<br>1 | #   | # #           |                       | 区画あり 外面  |       |                | 5 cm<br>5 cm | 無灰色<br>灰褐色         | にぶい<br>資福色<br>無褐色<br>灰褐色 | 1-2-3   | 段              | 3              | 4 - 3 | 14 L           | スス付着 (外面)<br>接合(5点) 10間 1点11間 4点    |
| 2   |              | <b>8</b> 1 | B - 2           |                           | 課         | #   | <b>5</b> 4 88 |                       | 区画あり 外面<br>沈線文                                       |       |                | 6m<br>6m     | 褐灰色<br>黄灰色         | 暗灰色                      | 1-2-3   | R              | 3              | 3     | 4 L            | スス付着 (外面)                           |
| 3   |              | CI         | B - 2           | 2.687                     | 深         | #   | an ac         |                       | 区画なし 外面<br>沈線文                                       |       |                | 6 cm         | 18 <u>@</u>        | によい<br>格 色<br>格 色        | 1.2.3   | R<br>FF        | 3              | 3     | 12 L           | フス付着 (外面)                           |
| 4   | IV :         | <b>8</b> ‡ | A · B - 4       |                           | 深         | #   | 口袋部           |                       | 区画あり 外面・内面<br>刺突文(3)・沈線文・複合線曲文                       | 有     | -              | 6m<br>6m     | 褐灰色                | にない                      | 1-2-3-4 | R              | 3              | 2     | 者しい            | 10用一括                               |
| 5   | N            | ST         | B - 4           | 2,522                     | #<br>±    | 形   | 口級部           |                       | 区局あり 外面<br>制突文(2)・沈線文・複合総曲文                          | 有     | -              | 400          | 福灰色<br>にぶい・<br>橙 色 | 褐灰色<br>浅黄铅色              | 1-2-3   | R              | 3              | 3     | 者しい            | 10/8                                |
| 6   | N I          | S#         | A · B - 2       |                           | 深         | _   | 口稜部           | 波状する                  | 区画あり 外面・内面<br>刺突文(2)・沈線文・複合協曲文                       | 有     |                | 5cm          | 福灰色                | 灰褐色<br>にぶい<br>黄褐色        | 1-2-3   | R<br>FF        | 3              | 3     | 少 々            | スス付着 (内・外面) 10間一括                   |
| 7   | IV.          | <b>8</b> ‡ | A · B- 2        |                           | 課         | #   | 口鞍部           |                       | 対決文(2)・元鉄文・複合銀曲文<br>  区画あり 外面<br>  刺突文(3)・沈線文・複合銀曲文  | 不明    |                | 6m<br>7m     | 灰黄褐色               | 灰黄褐色                     | 1.2.3   | や不や良           | 3              | 3     | 者しい            | スス付着(外面)10暦一括                       |
| 8   | ľ            | E#         | A · B · 2       |                           | 課         | #   | 口粒部           |                       | 区画あり 外面<br>列突文(3)・沈禄文                                | 有     |                | 5ee          | 褐灰色                | 祖灰色<br>灰黄褐色              | 1-2-3   | Ą              | 3              | 3     | <b>5</b> 9     | スス付着(外面)10間 一括                      |
| 9   | īv           | EI .       | A · B - 2       |                           | 課         | #   | 口段部           |                       | 区番あり 外面・内面   | 有     |                | 5mm          | 灰褐色                | 掲灰色                      | 1-2-3   | R              | 3              | 3     | 着しい            | 10周一括                               |
| 10  | IV.          | E#         | A · B - 2       |                           | 課         | #   | 口袋器           | 波状する                  | 夕 突文(3)・沈線文・複合銀曲文<br>  区画不明   外面・内面<br>  夕 突文(3)・沈線文 | 有     | -              | 5 ma         | 明得灰色<br>灰白色<br>褐灰色 | 灰質褐色<br>にぶい<br>質優色       | 1-2-3   | e <del>f</del> | 3              | 3     | 者しい            | 内面文様 10層一括<br>劉奕文(3)・沈線文            |
| 11  | D:           | E#         | A · B · 2       |                           | #         | 形   | 口粹部           |                       | 区画あり 外面・内面   | 有     | -              | 7 cm<br>3 cm | 灰褐色                | 投資機色                     | 1-2-3   | 不              | 3              | 3     | 若しい            | 内面文禄 10周一括                          |
| 1 2 | N            | <b>8</b> ‡ | ·3<br>A · B - 2 |                           | 土庫        | #   | 野 部           |                       | 刺突文(3)・沈線文<br>区画あり 外面・内面                             | 不明    | -              | 4 co         | 食糧色<br>によい<br>食糧色  | によい<br>黄檀色<br>皮根色        | 1.2.3   | R              | 3              | 3     | 若しい            | 刺突文(1)·沈線文<br>10階 (中)               |
| 1 3 | IV           | G          | B - 3           |                           | 葆         | #   | 口段部           |                       | 例突文(1+3)・沈線文・複合媒像文<br>(3両あり 外面・内面                    | 有     |                | 5 mm         | 灰質褐色<br>褐灰色        | 灰黄褐色                     | 1-2-3   | R              | 3              | 3 · 4 | y *            | 内面文様 例突文(1)・沈線文<br>スス付着(外面) 10層 2点  |
| 14  | IV           | <b>8</b> 1 | A · B - 2       |                           | 禪         | #   | 野部            |                       | 例实文(3)・沈禄文<br>  区画あり 外面・内面                           | 不明    | -              | 5ca<br>7ca   | 掲灰色<br>投資色<br>灰白色  | によい                      | 1-2-3   | Ą              | 3              | 3 · 4 | <b>b</b> 9     | 内面文禄 沈線文 10層一括                      |
| 1 5 | IV           | E#         | A · B · 4       |                           | 療         | #   | 日韓部           |                       | 大線文・複合総像文<br>区画なし 外面                                 | 不明    |                | 5 cm         | によい                | 視灰色                      | 1-2-3   | 好<br>不や        | 3              | 3     | おり             | スス付着 (外面)<br>10間一括                  |
| 1 6 | IV           | <b>8</b> ‡ | A · B - 2       | -                         | 課         | #   | M B           |                       | 刺突文 (2+?)・複合製樹文<br>区両あり 外面                           | 作明    | -              | 5 cm         | 明褐灰色               | 数据色<br>によい<br>数据色        | 1-2-3   | R              | 3              | 3     | y 4            | スス付着 (外面) 10層(下)                    |
| 17  | N            | <b>S</b> I | B - 2           |                           | 裸         | #   | <b>9</b> 85   |                       | 沈線文・解沈線文・押点文<br>区画あり                                 | 1:明   |                | 5 cm         | 褐灰色                | 褐灰色                      | 1.2.3   | ef<br>R        | 3              | 3     | あり少々あり         |                                     |
| 18  | ľV           | g;         | 表 採             |                           | æ         | #   | 9A 88         | -                     | 沈禄文<br>[公西不明 外面                                      | 卡明    | -              | 5 mm         | 資灰色                | 褐灰色                      | 1-2-3   | R<br>R         | 3              | 3     | <i>b</i> 1     |                                     |
| 19  | IV.          | E#         | A · B · 2       |                           | 深         | #   | SA BE         | -                     | 沈線文・斜沈線文・押点文<br>区画あり 外面                              | 不明    |                | 5 m          | 機灰色<br>鎖灰色         | <b>農灰色</b>               | 5       | ef<br>R        | 3              | 2     | <b>b</b> 9     | スス付着 (外面) 10暦一括                     |
| 2 0 | īv           | CI         | A - 2           | 2.879                     | 課         | #   | 5A 88         |                       | 沈線文·複合総曲文<br> 区画不明 外面                                | 不明    | i –            | 5m           | 接貨色<br>福灰色         | 褐灰色                      | 1-2-3   | R              | 3              | 3     | # L            | 10/8                                |
| 2 1 | N            | B          | A · B - 2       |                           | 探         | #   | 5F (18        |                       | 夜合総由文<br>  区画あり 外面<br>  夜合総由文                        | 不明    | -              | 5m           | におい                | にぶい<br>責任色               | 1.2.3   | 良好             | 3              | 2     | 少 ·            | 10阳一括                               |
| 2 2 | īv           | <b>.</b>   | A · B · 2       |                           | 碟         | #   | 5A 88         |                       | 限台級領文<br>  | 不明    |                | 5 co         | 掲灰色<br>掲灰色<br>に最優し | 掲灰色<br>にぶい<br>黄疸色        | 1-2-3   | R              | 3              | 3 · 4 | あり<br>少々<br>あり | 炭化物 (内面) 10階一括5点<br>スス付着 (外面)       |
| 2 3 | IY .         | a          | B - 4           | 2.747                     | 探         | #   | 5H 85         |                       | 戊酸文  | 不明    | -              | 5m<br>5m     | によい。位色によい。         | にない<br>概色                | 5-7     | R              | 3              | 3     | あり             | 10周                                 |
| 2 4 | īv           |            | B - 2           |                           | 展         | ŧŧ  | FP 85         |                       | 区西不明 外面  | 不明    | -              | 5mm          | 福灰色<br>灰質褐色        | 灰白色                      | 1-2-3-4 | R              | 3              | 3 · 4 | 若しい            | 10億一括                               |
| 2 5 | -            | 4          | A · B · 2       |                           | 課         | _   | 5F 85         |                       | 沈線文・斜沈線文<br>区画あり 外面                                  | 不明    | -              | 5 cm         | 掲灰色<br>掲灰色         | 費灰色<br>褐灰色               | 1-2-3   | e <del>f</del> | 3              | 3     | <b>a</b> 0     | 10層(中)                              |
| 2 6 | IV           | +          | A · B · 2       |                           | <u> </u>  | #   | 9 8           |                       | 沈線文<br>区西不明 外面                                       | 不明    | _              | 4m<br>5m     | 灰黄褐色               | 掲灰色                      | 1.2.3   | ₽F<br>Q        | 3              | 3 · 4 | y 1            | スス付着 (外面一部) 内面に炭化物                  |
| 2 7 |              | -          | A · B · 2       |                           | <br>BR    | _   | D#265         |                       | 沈線文<br>  区画なし 外面・内面                                  | 有     | -              | 5ma          | 掲灰色<br>黄灰色         | 質性色<br>灰質褐色              | 1.2.3.7 | EF B           | 3              | 3     | おり 若しい         | スス付着 (内・外) 10層<br>内面文様 刺突文(2) 10層一括 |
| 2 8 | IV           | _          | A · B · 2       | _                         | 6R        | _   | 口袋器           | -                     | 刺突文(3)・沈線文・解沈線文<br>区画なし 外面・内面                        | 有     |                | 5cm          | 褐灰色                | 灰白色                      | 1.2.3.7 | R<br>R         | 3              | 3     | 少 4            | 沈線文·斜沈線文<br>内面文様 沈線文·斜沈線文           |
| 28  | 14           | **         | A-8-2           | L                         | i se      | *   | 口袋服           |                       | 制突文(4)·沈镍文·斜沈镍文                                      | Ħ     | <u> </u>       | 5 <b>cm</b>  | 黄灰色                | ベビ色                      | 1-2-3   | 籽              | 3              | : 3   | <b>a</b> 9     | スス付着(外面) 10間一括2点                    |

# 第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物

(2)

| _          | _        | _          |           | _             | ,        | _            |                  |                       |                     |                |                |              |                    |                   |         |          | -                |  |                |                                |
|------------|----------|------------|-----------|---------------|----------|--------------|------------------|-----------------------|---------------------|----------------|----------------|--------------|--------------------|-------------------|---------|----------|------------------|--|----------------|--------------------------------|
| <b>#</b> 号 | 9        | 87 I       | 出 ゼ       | 出版            | 15       | RE 1         | 残存部              | 形態の特徴<br>口 緑 部<br>昨 部 | 文様の特徴               | 11 特部          | 11/18          | 2을 막긴<br>1절  | e<br>**            | AT<br>th          | 86 I;   | 使収       | 25 mi<br>外       | AI SE  | # #            | <b>100</b> 5                   |
|            | TV .     | +          |           |               | _        | +            | _                |                       | 区両不明 外面・内面          | 11             |                | 5 cm         | 楊灰色                | は後色               | 1.2.3   | R        | 3                | 3  | 1 "            | iYi的文様 例文文·斜沈線文                |
| 2 9        | 14       | *          | A · B - 2 |               | 課        | <b>*</b>  '  | 口棒部              |                       | <b>刺突文(4)・沈線文</b>   | "              |                | 5 <b>cm</b>  | <b>埃黃褐色</b>        | MILE              | 1.2.3   | ŧf       | ,                |  | h n            | スス付着 (外面) 10 明 括               |
|            |          | _          |           |               | #        |              |                  |                       | 区尚不明 外面・内面          |                |                | 6m           |                    | 灰黄褐色              | 5       | R        | 3                | 3  | 券しい            | 1内面文楼 對党文(1)                   |
| 3 0        | RV I     | B          | B - 4     | 2.814         | ±        | 25   '       | 口棒部              |                       | 刺突文(3)・沈禄文・斜沈禄文     |                |                | 6 cm         | 掲灰色                | 褐灰色               | ٥       | ₹f       | 3                | . 3  | Mr.            | 沈線文 309                        |
|            |          | 7          |           |               |          | $^{\dagger}$ |                  |                       | 区画なし 外面・内面          |                | 1 -            | 6ma          | 埃山色                |                   |         | я        |                  |  |                | 内面文様                           |
| 3 1        | N I      | #          | A · B - 2 |               | 碟:       | #            | 口棒部              |                       | 劉奕文(1)・沈線文・斜沈線文     | なし             |                | 600          | 掲灰色                | 灰白色               | 1-2-3   | ŧf       | 3                | 3  | 着しい            | 例突文(I)·沈線文                     |
|            |          | +          |           | _             | #        | 形            |                  |                       | 区画不明 外面・内面          |                | <del>  -</del> | 5 <b>m</b>   | 褐灰色                |                   |         | 不        |                  |  |                | 内面文様 10号一括                     |
| 3 2        | IV :     | 87         | A · B - 2 | 1             | ±        | - 11         | 口袋部              |                       | 刺突文(3)・沈線文          | Ħ              |                | 6ma          | 灰囊色                | 灰黄褐色              | 1-2-3   | R        | 3                | . 3  | 者しい            | 刺突文(2)                         |
| _          |          | $^{+}$     | -         |               |          | +            | _                |                       | 区画なし 外面・内面          |                |                | 5 cm         | 灰白色                | 楊灰色               |         | 4        |                  |  |                | 内面文様                           |
| 3 3        | ľ        | £#         | A · B - 2 |               | 深        | #            | 口棒部              |                       | 沈線文・解沈線文            | Ħ              |                | 6=           | 灰褐色                | 灰白色               | 1-2-3   | ふつう      | 3                | . 3  | 着しい            | <b>刺突文(I)・沈線文</b>              |
| $\dashv$   |          | +          |           | -             | _        | +            | _                |                       | 区画なし 外面・内面          |                |                | 5 <b>an</b>  |                    | CEU               |         | ÷        |                  |  | _              | 内面文様 押引文 沈線文                   |
| 3 4        | IN I     | ti l       | A · B - 2 |               | 禄        | #            | 口鞭部              |                       | 沈線文・斜沈線文            | Ħ              |                | 5 🚥          | 黑褐色                | 責担色<br>灰質色        | 1-2-3   | よつか      | 3                | 3  | 者しい            | スス付着 (内面) 10個一括 2 点            |
| -          | _        | +          |           |               | $\vdash$ | +            |                  | <del></del>           | 区画不明 外面             |                |                | 6m           | C EU               | 沒質磁色              |         | 不        |                  |  |                | 10層一括                          |
| 3 5        | N.       | 8#         | ?         |               | 深        | # !          | 99 SS            |                       | 沈縄文・解沈線文            | 不明             |                | 500          | 貸班色                | にぶい<br>黄橙色        | 1-2-3   | Ą        | 3                | 3  | 着しい            |                                |
| -          | _        | +          |           | _             | _        | +            |                  |                       | 区画不明 外面             |                |                | 500          |                    |                   |         | Ą        | -                |  |                | 10間一括                          |
| 36         | N S      | #          | A · B - 2 |               | 禄        | # !          | 照 部              |                       | <b>注题文- 解注题文</b>    | 不明             |                | 400          | 灰褐色                | 褐灰色               | 1-5     | 17       | 3                | 3  | 者しい            |                                |
| $\dashv$   |          | +          |           | -             |          | +            |                  |                       | 反而不明 外面             |                |                | 5 m          | <del></del>        |                   |         | -        |                  | -  |                | 1019                           |
| 3 7        | N :      | <b>E</b> # | B - 4     | 2.921         | 深        | # !          | ណ្ត              |                       | 大粮文·科尤镍文            | 本明             | i              | 5 cm         | 灰黄褐色               | 褐灰色               | 1-2-3-7 | もつう      | 3                | 3  | 者しい            | 22 g                           |
| -          |          | $\dashv$   |           |               | _        | +            | _                |                       | 区画なし 外面・内面          |                |                | 5m           | 現灰色                |                   |         | 不        |                  | -  |                | 内面文楼 沈線文                       |
| 3 8        | N        | E#         | B - 3     | 2.528         | 裸        | #            | 口稜部              |                       | 沈線文・斜花線文            | 不明             | ļ              | 3 св<br>6 св | 灰褐色                | 褐色                | 1-2-3   | я        | 3                | 3  | 着しい            | 10層 1125                       |
| _          |          | 4          |           |               | 44       |              |                  |                       | 区商あり 外面             |                |                | 600          |                    |                   |         | _        |                  | -  |                | 10月 1125                       |
| 3 9        | IV .     | 27         | A · B - 2 |               |          | ~ L          | 口棒部              | 波状する                  |                     | なし             |                | 4120         | 他色                 | におい<br>親位色<br>没質色 | 1.3.6   | 402      | 3                | . 3  | h n            |                                |
|            |          | 4          |           | <u> </u>      | ±        | 25           |                  |                       | 沈線文·斜沈線文            |                | -              | - 4 RES      | 111.11.11          | N M C             |         | 9        |                  |  | w *            | 10層一括                          |
| 4 0        | N        | <b>E</b> # | A · B - 2 |               | 課        | #            | 口輕部              |                       | 区画不明 外面             | fī             |                | 7 mg         | 採白色<br>揚灰色         | 褐灰色               | 1-2-3   | DE<br>DE | 3                | 4  | <b>b</b> 9     | 10/9 10                        |
|            |          | 4          | A - 1     | _             | ļ        | 4            |                  | -                     | 沈線文·斜沈線文            |                | 30.0           | /mm<br>6mm   | 福灰色                | 灰白色               |         | 不        |                  |  | <b>3</b> , 9   | スス付着 (外面)                      |
| 4 1        | ľV       | 87         | A · B - 2 |               | 篠        | #            | ロ 緑<br>から<br>副 部 |                       | 区西なし 外面             | άι             | 30.0           | 700          | IN RE              | 場白色               | 1-2-3   | B        | 3                | 3  | # L            | ·····//                        |
| _          | <u> </u> | 4          |           |               | <u> </u> | +            | 94 BS            |                       | 刺突文の・沈線文            |                | -              |              |                    | it file           |         | R        |                  |  |                | 10号 -括3点                       |
| 4 2        | ľ        | 64         | A · B - 2 |               | 課        | #            | 9A 88            |                       | 医两不明 外面             | 不明             |                | 6 CE         | 養灰色<br>灰黃褐色<br>褐灰色 | 黄檀色<br>褐灰色        | 1.2.3   | 好        | 3                | 3 - 4  | 着しい            | スス付着 (外面)                      |
| _          | <u> </u> | 4          |           |               | <u> </u> | +            |                  |                       | 沈镍文                 |                |                | 600          | MIXE               | 柳水巴               |         | Ř        | _                |  |                | 10冊(下)                         |
| 4 3        | ľV       | <b>E</b> # | A - 1     |               | 课        | #            | 好能               |                       | 区尚不明 外面             | 本明             | !              | 8 mm         | 灰白色                | 灰白色               | 3-5-7   | 0.F      | 3                | 3  | 舞しい            | lou ())                        |
| _          |          | 4          |           |               |          | +            |                  |                       | <b>沈線文</b>          |                |                |              | 6.50               | (CASIC)           |         | -        |                  |  | _              | 10段 - 括                        |
| 4 4        | IV.      | <b>E</b> # | A · B - 2 |               | 瘘        | #            | <b>54</b> 8%     |                       | 【《画不明】外面            | 不明             | 1              | 4m<br>4m     | 数据色                | 後担色<br>褐灰色        | 1.2.3   | R        | 3                | 3 · 4  | ь n            | 26                             |
| _          | <u> </u> | 4          |           |               |          | _            |                  |                       | <b>沈線文</b>          |                | ļ              | 500          | 状質褐色               | IT GILL           |         | er<br>vo |                  |  |                | 10股 · 括                        |
| 4 5        | N        | 87         | A -B - 2  |               | 瘫        | #            | 口棒部              |                       | 区画不明 外面・内面          | ω <sub>L</sub> |                |              | 他色                 | #10 C             | 1-2-3   | 作的       | 3                | 4 - 3  | 着しい            | 1046 - 10                      |
|            |          | 4          |           | <u> </u>      |          | +            |                  |                       | 例明文(7)              | 1              | -              | 5 mm         | 据现色                | C.Sit.            |         | R        |                  |  | 4 4            | 内面文様 刺突文(2)                    |
| 4 6        | ľ        | 87         | A · B - 2 |               | 禄        | #            | 口棒部              |                       | 区画不明 外面。内面          | &L             | 1              | 5 cm         | Norke              | 做报色<br>研灰色        | 1.2.3   | l R      | 3                | 4 - 3  | . ,            | スス付着 (内。外面) 10層 -括             |
|            |          | 4          |           | <u> </u>      | _        | 4            |                  |                       | 利売文(1)・沈線文          | ļ              |                |              | 18K6.              | 一場水色<br>- 灰黄褐色    |         | ."       | <del> </del> — - |  | n ".           | スス付着 (外面) 10間・括                |
| 4 7        | IV.      | 81         | A · B - 2 |               | 探        | #            | 口較部              |                       | <b>沃西不明</b> 外面      | ti             |                | 5 <b>cm</b>  | 出現色                | 灰褐色               | 1-2-3   | R        | 3                | 6  | 者しい            | A A IS AGE OF THE STATE OF THE |
| _          | _        | 4          |           | <u> </u>      | _        | +            |                  |                       | 制突文(3)·沈線文          | ļ              | 19.8           | 5m           | 灰黄褐色               |                   |         | R        |                  |  | y 1            | 内面文様 沈線文 10層→括                 |
| 48         | ľV       | <b>E</b> # | A · B - 2 |               | 禄        | #            | 口袋部              | i                     | 区画なし 外面・内面          | -61            | 19.8           | 6 <b>cm</b>  | <b>掲灰色</b>         | 灰白色               | 1-2-3   | R<br>H   | 3                | 4 . 3  | B 9            | スス付着(外面)                       |
|            |          | 4          |           |               | _        | 4            | _                |                       | 刺突文(4)              |                | -              | 5 cm         | 10 KU              | 1. 6.             |         | - 60     | -                |  | - "            | 10 間一括                         |
| 4 9        | ľV       | <b>5</b> ‡ | B - 2     |               | 禄        | #            | 口線部              |                       | 区画なし、外面             | なし             |                |              | 競技色<br>褐灰色         | にぶい<br>貨糧色<br>異灰色 | 1-2-3   | Air<br>R | 3                | . 4  | 着しい            | 10 10                          |
|            | _        | 4          |           |               |          | - -          |                  |                       | 利突文(3+?)・沈線文        |                | ٠.             | 5 ===        | 福灰色                | 灰褐色               |         | R        |                  | <u>.                                    </u> |                |                                |
| 5.0        | l N      |            | B - 4     | 2.824         | 体土       | 形器           | 口校部              |                       | 区画なし 外面・内面          | #L             |                | 4 cm         | 221970             |                   | 1-2-3   | 1        | 3                | 3  | 着しい            | 内面文様 10階                       |
| οU         | "        | **         | B - 4     | 2.024         | ±        | 20           | r144 tib         | ĺ                     | 刺突文(2)· 沈線文         |                |                | 340          | にない                | 発担色               |         | А        |                  |  |                | 刺突文(1) 237                     |
| _          |          | 7          |           |               |          | 1            | _                |                       | 区画なし 外面             |                | 1              | 400          |                    |                   | ,       | R        |                  | : 6  | 着しい            | 10号 ~括                         |
| 5 1        | ľV       | <b>E</b> # | A · B - 2 |               | 禄        | #            | 口鞭部              |                       | 例突文(Z)・沈線文          | fi             |                | 4 ==         | 灰黄褐色               | 灰黄褐色              | 1-2-5   | ŧ₹.      | 3                |  | <b>*</b> ' ' ' |                                |
|            | -        | +          |           |               |          | $^{\dagger}$ | _                |                       | 区西不明 外面             | -              | 1              | 5=           | 揭灰色                | 明褐灰色              |         | 45       |                  |  | 着しい            | スス付着 (外面) 10階一括                |
| 5 2        | ľV       | #          | A · B - 2 |               | 碟        | #            | 口較部              |                       | 何突文 (2 + ?)· 沈線文    | 不明             |                | 5m           | 明褐灰色               | 褐灰色               | 1-2-3   | 日午       | 3                | 4 · 3  | <b>2</b> ' ' ' |                                |
|            |          | +          |           | $\vdash$      | #        | 形            |                  |                       | 区画あり 外面             |                | 1              | 500          | 褐灰色                | 灰黄褐色              |         | R        | _                |  | 4 *            | スス付着(外面)10層一括                  |
| 5 3        | IV.      | #          | A · B - 2 |               | 1        | 25           | 口鞣部              |                       | 刺突文(3)- 沈線文         | 4 L            |                | 6=           |                    |                   | 1-2-3-4 | 65       | 3                | 3  | י מ            |                                |
|            | -        | 1          |           | $\vdash$      | #        | 形            | _                |                       | 区画不明 外面             | T              | -              | 4m           | 灰黄褐色               | にだい               |         | R        | 3                | 3  | 差しい            | 10/89                          |
| 5 4        | N N      | 27         | A -B - 2  |               | ±        |              | 口較部              |                       | <b>劉突文(2) - 沈線文</b> | fi             |                | 5=           | t ぶい<br>黄橙色        | Aug               | 1.3.5   | ŧŦ       | 3                | : 3  | • " "          |                                |
| _          |          | $\dashv$   |           | $\overline{}$ | $\vdash$ | $\top$       |                  |                       | 区西不明 外面 内面          |                |                | 500          | 12.50              | におい               | 1.2.3   | や不や      | 3                | , 3  | 表しい            | 内面文様 10層一括                     |
| 5 5        | IV.      | <b>5</b> ‡ | A -B - 2  | -             | 深        | #            | 口棒部              | [                     | <b>劉</b> 奕文(7)      | & L            |                | 5œ           | 黄橙色                | 與键色               | 1.2.3   | 長        | 3                | 3  | # L L L        | <b>判</b> 突文(1)                 |
|            | <u> </u> | $\dashv$   |           |               | $\vdash$ | +            |                  | <del></del>           | 区画不明 外面             |                |                | 7=           | 褐灰色                | 灰褐色               |         | Ą        |                  | ·  | 4 *            | スス付着 (外面)                      |
| 5 6        | IV       | Sİ         | A - 2     |               | 深        | #            | 口棒部              | 1                     | 刺突文(3)              | &L             |                | 7 🚥          | にぶい<br>黄橙色         | にぶい<br>責任色        | 1-2-3   | 67       | 3                | 4 · 3  | <b>b</b> 9     |                                |
|            |          | _          |           | _             | _        | _            | -                |                       |                     |                |                |              |                    |                   |         |          |                  |  |                |                                |

(3)

|     |            |             |        |                   |              |                       |                          | ( •       | •               |                  |                   |                          |         |                |           |                |            |                              |
|-----|------------|-------------|--------|-------------------|--------------|-----------------------|--------------------------|-----------|-----------------|------------------|-------------------|--------------------------|---------|----------------|-----------|----------------|------------|------------------------------|
| 書号  | <b>∂</b> ¶ | 出 ±<br>グリッド | 出度     | <b>8</b> 8        | 残存器<br>位     | 形態の特徴<br>ロ 緑 部<br>底 部 | 文様の特徴                    | 口唇部 族 文   | 进位<br>口径<br>25高 | 性<br>器磁          | <u>e</u><br>ታ     | 内内                       | 胎士      | 袋成             | 25 面<br>外 | 四整内            | B ×        | 9 5                          |
| 5 7 | IV E       | A · B - 2   |        | <b>并形</b>         | 口枝部          | 波状する                  | 区画不明 外面·内面<br>刺染文(2)     | 有         |                 | 4 cm<br>5 cm     | 褐灰色               | 掲灰色                      | 5       | 段料             | 3         | 3              | 差しい        | 内面文様 10冊括<br>刺突文(1)          |
| 5 8 | IV E       | A · B · 2   |        | # 形<br>土 智        | 1 口袋窓        |                       | 区西不明 外面<br>刺突文(3)·沈级文    | 有         |                 | 5 cm             | 褐灰色<br>浅黄色        | 灰黄色<br>/臭黄色              | 1-2-3   | R              | 3         | 3              | 少 々<br>あ り | スス付着(外面)10階一括                |
| 5 9 |            | *           |        |                   |              |                       |                          |           |                 |                  |                   |                          |         |                |           |                |            | 欠番                           |
| 6 0 | N E        | A · B - 2   |        | <b>并</b> 形        | 口棒部          |                       | 区西不明 外面 沈線文              | &L        |                 | 5 an<br>5 an     | 揭灰色               | によい<br>異位色               | 1-2-3   | 不良             | 3         | 3              | 着しい        | スス付着(外面)10層一括                |
| 6 1 | IV E       | A · B · 2   |        | 深乡                | 口段部          | 波状する                  | 区拠あり 外面・内面<br>沈線文・斜沈線文   | 有         |                 | 5 m<br>5 m       | 現灰色               | 明揚灰色                     | 1-2-3   | や<br>不や<br>良   | 3,        | 3              | 着しい        | 内面文様 沈線・押点文<br>スス付着 (外面)     |
| 6 2 | IV E       | A · B · 2   |        | 深乡                | 日禄から野部       |                       | 区画あり 外面<br>沈線文・複合螺衝文・押点文 | 有         | 31, 1<br>rs     | 5 m2             | 褐灰色<br>灰黄褐色       | にぶい<br>質性色<br>灰質色        | 1-2-3-4 | かつう            | 3         | 3              | 少 々<br>あ り | スス付着(外面)10層一括12点             |
| 6 3 | N E        | B - 2       |        | 深 #               | 口線器          |                       | 区画あり 外面<br>複合銀曲文         | 有         | 17.0<br>ca      | 4 mm<br>5 mm     | 掲灰色<br>無褐色        | 掲灰色<br>黄灰色               | 1-2-3   | 段              | 不明        | 3              | 少 々<br>あ り | スス付着 (外面)                    |
| 6 4 | tv s       | B - 4       | 2.768  | 深料                | 口鞭部          |                       | 区画なし 外面<br>沈線文           | &L        |                 | 4m               | 灰褐色               | 灰褐色                      | 1-2-3   | Ą              | 3         | 3              | 着しい        | 10Æ9<br>436                  |
| 6 5 | IV \$      | A · B - 2   |        | 深乡                | 口鞭部          |                       | 区画なし 外面・内面<br>沈線文        | & L       |                 | 5 cca            | 明揭灰色<br>浅黄橙色      |                          | 1-2-3   | 不良             | 3         | 3              | 着しい        | 内面文様 10階<br>刺突文(1)           |
| 6 6 | N E        | A · B - 2   |        | 深耸                | 口種部          |                       | 区画なし 外面・内面<br>沈線文        | Ħ         |                 | 5 cm             | 灰白色<br>にぶい<br>資格色 | 灰白色                      | 1-2-3   | そつう            | 3         | 3              | 着しい        | 内面文様・沈線文<br>スス付着 (外面一部)      |
| 67  | IV E       | A · B - 2   |        | 深料                | 口線部          |                       | 区画なし 外面・内面<br>沈線文        | άl        |                 | 5 cm             | 褐灰色               | にぶい<br>責任色<br>責灰色        | 1-2-3   | 段野             | 4 · 3     | 4 · 3          | 少 *<br>あり  | 内面文様 <b>劉</b> 奕文(1)<br>10暦一括 |
| 68  | ıv s       | A · B - 2   |        | <b>并</b> 元<br>土 智 | 170 RB       |                       | 区両なし 外面<br>沈線文           | 作明        |                 | 4m<br>4m         | 明福成色<br>にぶい<br>極色 | 相灰色                      | 1.5     | 好              | 3         | 3              | 着しい        | 10月                          |
| 6 9 | IV E       | A · B - 2   |        | 深耸                | 口棒部          |                       | 区画不明 外面<br>斜沈镍文          | 有         |                 | 6 co<br>7 co     | 褐灰色               | 灰白色                      | 1-2-3   | ę<br>ef        | 3         | 3              | 少 *<br>あり  | スス付着(外面)10暦一括                |
| 70  | N 8        | B - 4       |        | <b>并</b> 形        | 口級部          |                       | 区画なし 外面<br>羽状文           | &L        |                 | 5 cm<br>6 cm     | によい<br>橙色         | にぶい<br>発性色               | 1-2-3   | や<br>作<br>良    | 3         | 3              | 着しい        | 10 <b>日</b><br>216           |
| 7 I | IV E       | A · B · 2   |        | <b>并</b> 表        | 口検部          |                       | 区西不明 外面<br>沈線文·斜沈線文      | fī        |                 | 5 cc             | は形色               | にぶい<br>黄橙色               | 1-2-3-4 | や<br>化や<br>R   | 3         | 6              | <b>b</b> 0 | 10階 -括                       |
| 7 2 | IV S       | A · B - 2   |        | <b>并</b> 形        | FØ 85        | 降帶朝日                  | 区西不明 外面<br>科沈線文          | 1:明       | _               | (技術<br>10m<br>4m | 灰白色<br>にぶい<br>黄橙色 | 灰白色<br>にぶい<br>質権色        | 1-5     | R<br>H         | 3         | 3              | 者しい        |                              |
| 73  | N S        | # A·B-2     |        | 深料                | 1            |                       |                          | fi        |                 | 6 cm<br>6 cm     | 褐灰色               | 移场                       | 1-2-3   | ふつう            | 3         | 2              | 者しい        | スス付着 (外面一部) 10層一括            |
| 7 4 | IV E       | A · B · 2   |        | 深乡                | <b>59</b> 55 |                       | 区画なし 外面・内面<br>沈線文・複合銀曲文  | が明        |                 | 5 <b>c</b> c     | 掲灰色               | 灰褐色                      | 1-2-3   | غد<br>اخ<br>اخ | 3         | 3              | 着しい        | 内面文様 沈線文 10階一括<br>スス付着 (外面)  |
| 7 5 | IV S       | A - 1       |        | 深乡                | 野部           |                       | 区西不明 外面<br>沈缺文           | 不明        |                 | 6 cm<br>5 cm     | にぶい<br>責任色<br>掲灰色 | にぶい<br>質性色<br>にぶい<br>質褐色 | 1-2-3-4 | や<br>不や<br>良   | 3         | 2              | 着しい        | スス付着(外面) 10層(下)              |
| 7 6 | IV E       | A · B - 2   |        | 深矣                | 野郎           |                       | 区西不明 外面<br>科沈線文          | 不明        |                 | 6 cm             | 褐灰色               | 視灰色                      | 1-2-3   | や<br>不や<br>良   | 3         | 3 · 4          | 着しい        | 10個                          |
| 77  | IV E       | A - 2       | 2. 988 | 深 #               | 59 BS        |                       | 区西不明 外面<br>沈線文           | <b>不明</b> |                 | 5 <b>cc</b> 2    | 掲灰色<br>によい<br>貫祖色 | にぶい<br>資価色<br>掲灰色        | 1-2-3   | や<br>不や<br>良   | 3         | 3              | 者しい        | スス付着 (外面一部) 10階 1319         |
| 78  | IV E       | A · B - 2   |        | <b>并</b> 形        | 月 彩          |                       | 区西不明 外面<br>沈線文           | 不明        |                 | 5 cm             | はおい               | 褐灰白色                     | 5       | R<br>H         | 3         | 3              | 着しい        | 10個一括                        |
| 79  | N S        | B - 3       | 2. 671 | <b>外</b> 形        | から           |                       | 区晒不明 外面<br>沈線文           | 不明        |                 | 5 cm             | 役色                | にぶい<br>恒色<br>褐灰色         | 3.5     | 良好             | 3         | 3              | 者しい        | 1005                         |
| в о | IV E       | A · B - 2   |        | 深料                | 底 部          |                       | 区西不明 外面<br>沈線文           | 不明        |                 | 5 m2             | 灰褐色<br>褐灰色        | 褐灰色                      | 1-5     | R<br>H         | 3         | 3              | 者しい        | スス付着 (外面) 10間 (下)            |
| 8 1 | IV E       | A · B - 2   |        | <b>并</b><br>土 智   | ま 器          |                       | 区西不明 外面<br>沈缺文           | 不明        |                 | 3 cm             | 貴灰色<br>掲灰色        | 灰黄色<br>賀灰色               | 5       | R<br>ef        | 3         | 3              | 着しい        | 10년                          |
| 8 2 | IV E       | A · B - 2   |        | <b>并</b> 元<br>土 智 | から           |                       | 区画不明 外面<br>沈線文·押点文       | 不明        |                 | 5cm<br>4cm       | 褐灰色<br>明褐灰色       | 明揭灰色                     | 1-2-3   | や<br>不や<br>良   | 3         | 3              | 者しい        | スス付着(外面一部)10層一括              |
| В 3 | IV S       | A · B - 4   |        | 深身                | E 8          |                       | 区画不明 外面<br>沈镇文           | 不明        |                 | 4m<br>4m         | 掲灰色<br>にぶい<br>負債色 | 相灰色                      | 1-2-3   | 不良             | 3         | 3              | 着しい        | 10相                          |
| 8 4 | N 8        | A · B - 2   |        | 課員                | E 55         |                       | 区西不明 外面<br>沈線文           | 不明        |                 | 4 co<br>5 co     | 灰褐色<br>褐灰色        | 明揭灰色<br>揭灰色              | 1-2-3   | や<br>不や<br>良   | 3         | 3 <sub>.</sub> | 着しい        | 1019                         |

# 第Ⅳ章 分析・考察

## 第1節 理化学分析

## 1. 曽畑貝塚低湿地遺跡の花粉学的研究

北九州大学文学部教授 畑 中 健 一

熊本県宇土市花園町に所在する曽畑貝塚低湿地遺跡(縄文時代前期)のトレンチ壁面から採取 した試料31点について花粉分析を行い、植生環境とその変遷について考察した。報告書をまとめ るにあたり、発掘現場で、分析試料の採取にご協力いただいた熊本県教育庁文化課主任学芸員江 本直氏に心から謝意を表する。

#### 1. 分析方法

分析試料の処理は、10%苛生加里液処理—水洗—弗化水素(55%)による珪酸塩の分解—水洗 —氷酢酸処理(脱水)—アセトリシス処理—水洗—塩化亜鉛飽和溶液による比重分離—水洗の順 に行い、グリセリン・ジェリーに包埋した。

検鏡は通常400倍で行い、必要に応じて1000倍を使用した。

分析結果の表示は、樹木花粉の総数を基本数として百分率を求めた。ただし、上層で高率に出現するハンノキ属(Alnus)やツツジ科(Ericaceae)・モチノキ属(Ilex)・グミ属(Elaeagnus)・ニシキギ科(Celastraceae)・ブドウ属(Vitis) などの低木類は基本数から除外した。

### 2. 分析結果と考察

全層を通じて検出された花粉・胞子はつぎの通りである。ただし、第14・15層(砂礫層)と、 第16層(植物遺体の細片を含むシルト質粘土層)では、層準によって花粉化石の検出は殆ど不可 能であった。

木本類(AP):マッ属(Pinus)・モミ属(Abies)・ツガ属(Tsuga)・マキ属(Podocarpus)・シイノキ属(Castanopsis) ・アカガシ亜属(Cyclobalanopsis) ・コナラ亜属(Lepidobalanus) ・ヤマモモ属(Myrica) ・ツバキ属(Camellia) ・ブナ属(Fagus) ・クマシデ属(Carpinus) ・カバノキ属(Betula) ・ニレ・ケヤキ属(Ulmus/Zelkova) ・サワグルミ属(Pterocarya) ・オニグルミ属(Pterocarya) ・オニグルミ属(Pterocarya) ・カルシ属(Pterocarya) ・カルシ属(Pterocarya) ・カルシ属(Pterocarya) ・カルシ属(Pterocarya) ・カルシ属(Pterocarya) ・カメガシワ属(Pterocarya) ・カエデ属(Pterocarya) ・カルシ属(Pterocarya) ・カメガシワ属(Pterocarya) ・カエデ属(Pterocarya) ・カルシ属(Pterocarya) ・カメガシワス (Pterocarya) ・カエデス (Pterocarya) ・カスカシャス (Pterocarya) ・カスカシス (Pterocarya) ・カスカ

(Ligustrum)

低木・草本類(NAP):ハンノキ属(Almus)・ツツジ科(Ericaceae)・モチノキ属
(Ilex)・グミ属(Elaeagnus)・ブドウ属(Vitis)・ニシキギ科(Celastraceae)・キヅ
タ(Hedera)・イネ科(Gramineae)・カヤツリグサ科(Cyperaceae)・ヨモギ属(Artemisia)・
キク科(Compositae)・タデ属(Persicaria)・アカザ科(Chenopodiaceae)・カラマツソウ属
(Thalictrum)・アキギリ属(Salvia)。

**シ**ダ類 (FS): ウラジロ属 (Gleichenia) ・ヒトツバ属 (pyrrosia) ・ゼンマイ属 (Osmunda)・イワヒバ属 (Selaginella)、およびその他の単条溝型・三条溝型胞子。

主要花粉の消長は図1(花粉ダイアグラム)に示した。(シダ類胞子は Pteridophyta として一括表示した)

分析試料を採取したトレンチ壁面の土層は、その花粉構成から次の四時代に区分することがで きる。

I) 落葉広葉樹(温帯要素)優占時代(19~17層下部)

ニレ・ケヤキ属とエノキ・ムクノキ属の優占によって特徴づけられる。針葉樹ではモミ属(モミ)が0.5~13%、マキ属(イヌマキ)が7~9%出現する。常緑広葉樹では19層上部でツバキ属(ヤブツバキ)が急増して57%、第18層ではモチノキ属が89%と高い出現率を示すが、ニレ・ケヤキ属やエノキ・ムクノキ属など落葉広葉樹の出現率が高く、またコナラ亜属、ブナ属、クマシデ属、オニグルミ属なども低率ながらほぼ連続的に出現するところから、明らかに現在よりやや冷涼な気候が想定される。この層準の堆積物からは土器類は検出されていないが、以上の花粉構成から縄文早期頃の堆積物と推定される。

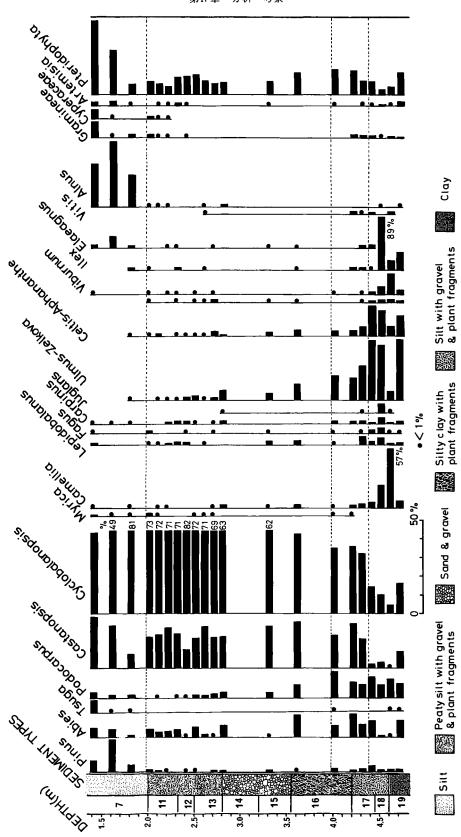
Ⅱ) 落葉広葉・常緑広葉樹混交時代(第17層上部~16層下部)

下層で優占したニレ・ケヤキ属、エノキ・ムクノキ属は第17層上部から衰退に転じる。一方暖温帯要素のシイノキ属、アカガシ亜属がいちじるしい増加を示す。また、マキ属(イヌマキ)も増加して第16層下部で15%に達し、落葉広葉樹林から常緑広葉樹林への推移期(冷凉気候から温暖気候への転換期)に当たることを示唆している。縄文早期~前期初頭の堆積物と推定される。

### Ⅲ) 照葉樹林時代 (第16層上部~11層)

この花粉帯は、暖温帯要素のアカガシ亜属とシイノキ属の優占によって特徴づけられる。とくにアカガシ亜属は42~82%と高率に出現するが、これらの花粉化石は、堆積物から検出される堅果遺体(どんぐり)からみて、その多くはイチイガシ(Cyclobalanopsis gilva)に由来すると考えられる。気候の温暖化によって、落葉広葉樹は殆ど消滅し、遺跡周辺の丘陵地一帯にはイチイガシを優占種とするカシ型の照葉樹林が旺盛に繁茂したと推定される。

考古学的調査結果から、第15~12層は轟式文化層(縄文前期前半;約6,000 y. B. P.)、第 11層は曽畑式文化層(縄文前期後半;約5,000 y. B. P.) に対比されているが、この対比は花 粉分析結果とも矛盾しない。第16層は、下位の堆積物とともに無遺物層であるが、花粉構成から



曽畑貝塚低湿地遺跡の花粉ダイアグラム

みると、縄文前期と推定される堆積物で、上位の第15層に続くものと考えられる。

Ⅳ) 二次林拡大(傾向)時代(第7層)

前時代に続いてシイノキ属は依然として高率に出現するが、アカガシ亜属の出現率は本層上部で49%以下に低下する。一方、二次林要素のマツ属(アカマツ・クロマツ)は増加に転じ、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属(ヨモギ)などの草本類も本層上部で僅かではあるが増加傾向を示す。また下位の層準では殆ど出現しないハンノキ属(ハンノキ)が本層で異常な増加を示す。この層準は弥生時代(弥生前期?)に対比されているが、花粉構成に認められるアカガシ亜属の減少、マツ属や草本類の増加傾向は、人類文化の発展に伴って自然林が破壊され、その跡地にマッの二次林が拡大し、雑草類も増加し始めたことを物語っている。

またハンノキ属の異常な増加から、遺跡の近傍に沼沢(或るいは湿地)が出現し、ここにハン ノキ林が形成されたと考えられる。

この沼沢地もしくは湿地帯?は、所謂「弥生海退」によって発達した海岸の自然堤防の後背地 に形成された潟湖(Lagoon)と考えてよいであろう。

#### 3. まとめ

曽畑貝塚低湿地遺跡のトレンチ壁面から採取した試料について花粉分析を行い、本遺跡の植生 環境とその変遷について考察を行った。

トレンチ壁面の土層は、花粉構成によって下位からつぎの四時代に区分することができる。

- I. 落葉広葉樹優占時代(第19~17層下部)
- Ⅱ. 落葉広葉・常緑広葉樹混交時代(第17層上部~16層下部)
- Ⅲ. 照葉樹林安定時代(第16層上部~11層)
- Ⅳ. 二次林拡大(傾向)時代(第7層)

I時代はニレ・ケヤキ属とエノキ・ムクノキ属の優占によって特徴づけられる。

常緑広葉樹は劣勢で、コナラ亜属、ブナ属、クマシデ属、オニグルミ属を伴い、やや冷涼な気候を示唆している。縄文早期に対比される。

Ⅱ時代は落葉広葉・常緑広葉樹混交林の時代で、植生の推移期(冷涼気候から温暖気候への転換期)にあたる。

Ⅲ時代はイチイガシを中核とした照葉樹林の安定期で、轟式文化(第15~12層)、曽畑式文化 (第11層)は、この極盛相林を背景として発展した。

IV時代は二次林の拡大と、照葉樹林の衰退を示唆している。花粉構成にみとめられるこのような変化は、弥生時代に入ってからの人類文化の影響(自然林の破壊)によるものと判断される。また「弥生海退」によって遺跡の周辺に形成された潟湖には、ハンノキの群落が出現した。

## 2. 曽畑貝塚低湿地遺跡出土の植物種子の同定

岡山大学農学部文部技官 藤 沢 浅

#### 1. はじめに

最近の考古学的な発掘調査においては、自然科学的な分析が注目されている。特に植物遺体である花粉やプラントオパールおよび植物の種実類などを分析するいわゆる環境考古学は、古代の植生や気候の解明および当時の人々の生活を知るうえでも非常に重要な研究といえよう。このことでよく知られているものに『湖上村落』と称されるスイスの新石器時代の遺跡がある。湖上村落というのは、湖の上に村落があるというのではなく、湖畔に住居を建て生活していた村落という意味である。ここでは食べ物の残りなどが直接戸外の湖に投げ捨てられていたため、水底の泥中に埋没した多くの木の実や種子類が6000年前に捨てられた時と変わらない状態で出土した。それによって当時の人々の暮らしが解明されたのである。このように遺跡から出土する植物遺体は古代人の生活を知る上で貴重な情報源であり、今後この方面の研究はより重要になると思われる。ただ、この研究は多大な時間と労力を要するために、今日のような発掘から報告書の刊行までの限られた時間内に分析を完了するということはなかなか困難である。

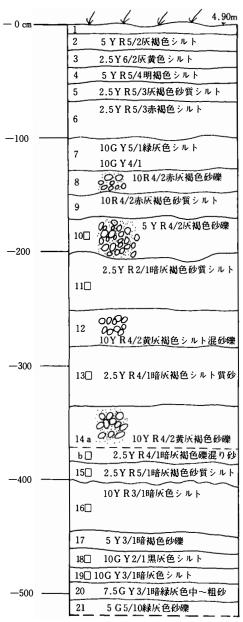
さて、熊本県宇土市岩古曽町に位置する曽畑貝塚は九州の縄文時代前期の代表的な遺跡として知られている。本遺跡は雁回山の西麓に位置し、昭和34年に慶応大学の発掘調査で縄文前期と後期の貝塚が発見されている。今回の熊本県教育庁文化課の発掘調査はこの貝塚から南西へ100m離れた地点で、65年度開通の国道3号松橋バイパスの建設用地内である。これまでの調査で植物製の編み籠やドングリなどの木の実の類が多数出土し、また本年の5月13日までに縄文前期、約5000年前のものとみられるヒョウタンが完全な形で出土している。なおこれまで縄文前期からヒョウタンが出土した例は縄文のタイムカプセルとして有名な福井県三方町の縄文時代前期(約6000年前)の鳥浜貝塚があり、今度が全国でも二例目であり注目されている。

本年9月から調査を担当している熊本県教育委員会文化課の江本 直氏から本遺跡の種子分析 を依頼されたので、その結果をここに報告する。

#### 2. 分析方法

今回分析した地層は図1に示したように縄文中期から前期にわたる第10, 11, 13, 14—B, 15, 16, 18, 19層である。

種子の分析方法は水洗選別法でおこなった。まず各試料土を200gずつとり、水を入れた大型ビーカーに 1~5日間放置した後に、静かにガラスで攪拌し土塊を溶かした。次に径18cmの杓子状金網にガーゼを3枚重ねて敷き、その上に溶かした試料土を少量ずつ置き、次に上から水道水でゆっくり水洗して微細な土砂を洗い落とした。なおガーゼ3枚重ねると0.4m程度の有機物は全て検出できる。ちなみに雑草の種子で最も微小なものの長さが0.5m程度なので水洗中に流失するこ



第1図 層位概略図(□印サンプリング層)

とはない。次にカーゼ上に残った大粒の砂礫と有機 物を水の入った径15cmのシャーレーに移した。

この作業を繰り返し、その試料土の水洗が完了する。次に小型のシャーレーに水洗した有機物を少量ずつ移しそれに水を注ぎ、実体顕微鏡下で種子をピンセットで拾い出し、蒸留水を入れた小標本瓶に保存した。こうして各層ごとの水洗選別が完了した後に、それぞれの種子を現生種子と比較し同定した。また損傷粒や部分片で同定できないものは走査電子顕微鏡で観察し同定した。

### 3. 結果

同定された植物種子は疑問種を含めて20種類、16 科19属であった。これらの種類の和名と学名を表1 に示す。和名および学名は主に『新日本植物誌(大 井 1965)』に従った。また主要なものを含めほと んどの種類の写真を図版1~21に示す。図版8aを 除いては全て走査電子顕微鏡で撮影したものである。 なお図版21ghは今回の分析では検出されなかった アマモの種子であり、これについては後述する。 今回の分析では種子以外にマツ科の葉片、キイチゴ 属の棘や、木本植物の未熟な果実や冬芽が若干検出 された。また植物学的には下等植物に分類される蘚 類の植物体が検出された。また同定不可能であった 不明種は18粒であるが、その中には種子とは違うも のが含まれているかもしれない。植物遺体以外では 虫こぶまたは菌糸塊と考えられる炭化した黒粒や、

昆虫やその羽根片、粒の大きさと外形からその卵と思われるものが検出された。

次に層別にみた各植物の出土粒数を表2に示した。各層につき200gの土量を分析したにもかかわらず各層とも出土種子が極めて少なかったのは、今回の分析土壌がやや乾燥した砂礫質であったためと考えられる。

まず第10層では有機物が若干みられたが種子は全く検出されなかった。ただ昆虫の遺体と黒粒のみであった。以下種子だけについてみると、第11層は有機物はやや多く、特に木本類の細片が目についた程度で、同定された種子は疑問種を含めて6種15粒であった。第13層では草本、木本

類の細片がかなり多くみられ、種子も9種13粒と、前者よりやや種類が多かった。次に第14—B 層は有機物は第13層と同じ程度であったが、種子は3種6粒と少なかった。これは礫混じりの砂質土壌にも関係があると思われる。第15層は有機物はかなり少なかったが、種子は10種16粒と多く、種類ともに13層に似たものであった。次に第16層は有機物が最も多くみられ、種子は13種26粒と他の層と比べ最も多かった。ここの層は土壌が他に比べてややシルト質であり保存状態が良かったために、他の層より多数の検出をみたものと考えられる。第18,19層は完全な粘土質の土壌であり、有機物は全く検出されなかった。

#### 4. 考察

#### 木本植物

同定された種子20種類のうち木本は11種類であり、他にマツ科の葉が1個体みられた。このうちヤマグワ、ニワトコなどの落葉性広葉樹が9種類と多く、常緑広葉樹のクスノキ、ヒサカキの2種、針葉樹はマツのみであった。これらの中で照葉樹林の構成要素になるものではヒサカキがある。この木本は普通は人里から離れた山林に自生している。いっぽう、二次林の構成種および人里に近い所に自生するのはカジノキ、ヤマグマ、マタタビ、タラノキ、ニワトコ、キイチゴ類、アカメガシワ、クスノキである。なお二次林とは原生林が自然および人手によって破壊されたあと自然に成立する森林であり、ここには陽地を好む植物が生育する。これら植物の中には実が食べられるもの、薬用になるものなど今日でも我々の生活上有効に利用できるものが多くある。ところで木の実といえばアイヌ民族を思い出すように、彼らにとって植物、特に木の実は日常生活には欠くことのできない重要な食料であった。今回検出されたヤマグワ、マタタビ、ニワトコ、キイチゴ類などはアイヌの人々にとって貴重な植物のひとつであり、本遺跡の人々もこれらを重要なものとして利用していたことは確かであろう。

#### 草本植物

同定された20種類のうち草本は9種類と少なかった。そのうちオヘビイチゴ、チドメグサ、ツユクサなど6種類は田のあぜ、道ばたや畑地周辺に生育する雑草である。またカラムシ属、ムラサキケマンはあき地や道ばた、林縁の周辺に生育する人里の植物であり、サンショウソウは山地の林内の陰湿地に生育する山野草である。

#### 注目すべき植物について

さて同定された植物の生育地、用途を表1に簡単に記したが、興味深い種類についてここでもうすこし詳しくのべてみたい。なおこれらの種子は各地の縄文、弥生の遺跡からよく検出をみるものである。

- 1) <u>ヤマグワ</u>はクワ科クワ属に属する落葉低木で山野に自生し、桑畑にも栽培される。クワ属は養蚕で栽培されているものや輸入、改良された種類がある。ヤマグワの果実は濃紫色に変わると生食でき、また果実酒、ジャムの原料となる。
- 2) <u>カジノキ</u>は暖地性の落葉低木で、同じ属のコウゾとともに我が国の所々で栽培される。コウゾは各地の山地に自生するが、カジノキは古い時代に東南アジアを経て中国から我が国に渡来したものとされる。今日の西南日本の山地で自生しているものは、昔栽培していたものが野生化したものと考えられている。ビルマからタイ北部の山地やその他東南アジアに野生品が多いためこの地域が原産地とされている。秋には径2cmの果実をつけ子供はこれを好んで食べるようであるが、いっぽうではコウゾとともに枝皮の繊維を製紙の原料とすることで知られている。ポリネシアの原住民がタバと呼んで使用している原始的な布はこれから作られている。このカジノキとコウゾの種子はほとんど同じ形態をしており区別がむつかしい。ややカジノキの種子が2mm前後と大きいので本遺跡出土のものはカジノキと同定した。これらは福井県鳥浜貝塚(縄文前期)や福岡の四箇遺跡(縄文後期)からも検出され注目されている。
- 3) <u>=ワトコ</u>は山野に広く自生する大形の落葉低木で、高さ3~5 mに達し生長が早い。秋に長さ4 mほどの赤色の果実をつける。材は柔らかく、枝の中には太い髄を有する。漢名を『接骨木』といい、葉を薬用として利用する。イギリスでは、この植物の仲間であるセイヨウニワトコの果実を発酵させてニワトコ酒が作られている。また花を採集して乾かしたものを煎じて服用すると発汗作用があるので体があたたまり、果実も下剤となるなどすぐれた薬効がある。ニワトコの髄は植物学の実験の際に柔軟な組織をカミソリで切る時に、この髄にそれを挟んで切片を作る時に利用される。この植物は遺跡から検出例が最も多いもののひとつである。ニワトコの果実は小さく、食用として利用はあまり考えられないが、筆者らは米子市目久美遺跡(縄文前期・弥生中期)の土器片内側にびっしり付着した炭化のニワトコの果実と種子を同定しており、古代人がなんらかに利用していたことは確かと思われる。
- 4) <u>タラノキ</u>は山野に普通の落葉低木で、高さ4mほどになる。茎には大小の鋭い棘があり、この棘も種子とともによく検出される。今日ではこの若芽は木の芽の王様として珍重され、人々に乱獲されている。筆者の知るところ、京都付近ではこの乱獲がたたって山野ではもうタラノキはお目にかかれないそうである。そのためか最近では各地でこの栽培が行われているようである。
- 5) マタタビは山地に広く自生する落葉性つる植物である。果実は長楕円形で先が少し尖り、長さ3cmくらいで、熟すと黄色になり、辛い味がするが食用および薬用として愛好される。猫が非常に好む植物で、この果実をかじると酔った状態になることで有名である。この語源は『旅人が、その果実を食べて元気を回復し、またを旅する』という意味からきたとされているが、植物学者

の牧野富太郎はこれを否定している。なお同じ属のサルナシとは種子が非常に似ており区別の難 しいものであるが、マタタビの種子がやや外形がずんぐりしている傾向があり、本遺跡のものは マタタビと同定した。サルナシの果実は広楕円形で、熟すと淡緑色となり、甘ずっぱい味で食べ られる。果実が梨に似ており、猿が食べる梨という意味である。

- 6) <u>キイチゴ</u>属は山地に自生する灌木または草本で、大部分は北半球に産する。我が国には100種類近くのものが自生している。食用とされるのは果実の集団である擬果いわゆる苺である。どの種類も甘ずっぱく美味であるが、種子が堅くやや歯ざわりがする。この植物も検出例の多いもののひとつで、古代人の重要な植物であったことがわかる。
- 7) <u>ヒサカキ</u>は常緑低木で山地に普通である。よく混同されるものにサカキがあるが、これは暖地に自生または栽培される常緑の亜高木で、枝葉を神前に供えることで知られている。。このサカキが自生しない本州北部ではこのかわりにヒサカキをサカキと称して用いている。この植物も出土例は多いが、これは利用されたものではなくて、種子が小さく堅いため土中でも残存しやすいためと考えられる。
- 8) アカメガシワは温暖な日当たりのよい平地や河原の土手などに自生する落葉高木で、非常に生育が早く、10mにもなる。新芽や若葉が鮮紅色で美しく、よく目立つ植物である。地方によってはカシワと称され、この葉の上に食物をのせて神前に供えたり、また団子を包んで蒸すのに利用される。そのため別名にゴサイバ,サイモリバ(御菜葉,菜盛葉)などがある。若葉は食用にもされ、葉や果実は駆虫剤としても利用される。ところで種子は球形で紫黒色で光沢があるが、遺跡から検出されるものはほとんど表面の種皮がとれて図版 5 e , 9 a のように突起状をなすので、サンショウの種子と見間違いやすい。
- 9) <u>サンショウソウ</u>は暖地の浅い山や丘陵の陰湿地に多い多年生のつる性草本である。「熊本県植物誌」によるとやや稀な植物とされている。本遺跡では図版13 e, 18 c e f のようにほぼ完全形で淡褐色の種子が 4 粒検出された。種子は広楕円形で表面に小さなこぶ状突起があり、長さが約0.7mmと微細である。この植物は検出例の少ないものである。
- 10) <u>カラムシ</u>属は草本または低木で、熱帯には100種類ある。我が国には12種類あるがその中には多くの変種があり、特に分類の難しい植物である。古代ではこの属の茎の繊維を利用していたようである。この植物も出土例の多いもので、本遺跡では最も粒数が多かった。なお検出された種子は淡褐色であり、外形が図版9gや13cなどのようなやや異なるものがあり、種類の異なるものが混入しているかもしれない。

- 11) <u>ムラサキケマン</u>は山麓や竹林の下の半陰地、また道ばたや畑地の近くに生育する柔らかい越年性の草本である。初夏に多数の紅紫色の花を総状につけ美しい。この植物の検出例はあまりないが、当時の遺跡周辺に多く生育していたものが落ち込んだものであろう。
- 12) <u>ナス</u>属は草本または木本、ときにつる性になり、熱帯および暖帯に分布し、世界で約1500種類ほどある。そのうち我が国には7種類が自生しており、他に外国からの帰化植物や栽培種がみられる。本遺跡で分析された2粒の種子(図版12gh,17ef)は同じ種類のものであった。ナス属の種子の表面は拡大写真のように波状隆起の網目模様が特徴であり、種の同定までは難しい。他の分析された種類から察して、道ばたや荒地に生育する雑草のイヌホオズキではないかと思われる。
- 13) <u>ツユクサ</u>は畑地、道ばた、人家などのやや湿った草地に生育する一年生の雑草である。万葉時代はツキクサ(着草)とよばれたように、青紫色の花汁は染料として利用された。この花汁は水に浸すと簡単に消える性質があることから、後にはそれを利用して、織物の下地絵の具として重宝された。また民間薬として茎葉の乾燥したものを煎じて利尿剤とした。種子はコッペパンの半切型で4 mmほどの大きさであり、表面を拡大すると多角形を集めた亀甲紋様である。本遺跡から分析されたものは図版18gのように炭化していたためこの紋様はみられなかった。

#### アマモ (Zostera marina L.) について

今回の分析では検出されなかったが、本遺跡の縄文前期層からアマモが出土した。本年3月中旬に江本氏が『米粒のようなものが出土した』ということでその種子2粒が筆者のもとに持参された。一見するといかにも小型の米粒のようであった。種子は炭化していなく淡黄褐色で、4 mm前後の長楕円形と表面を走る縦の肋の特徴からアマモの種子(図版21gh)であることが判明した。アマモはアマモ科アマモ属に属する海産性の植物の代表で、一般の海藻類とはまったく別の種類である。世界の海中に約10種あり、我が国にはそのうち5種が自生している。九州にはアマモ、コアマモの2種が自生しているが、コアマモはアマモにくらべてやや稀な植物である。アマモの葉は幅1cm、長さ1mと長く、別名『リュウグウノオトヒメノモトユイノキリハズシ』と植物名の中でいちばん長い名がつけられている。生育地は沿岸で、水深3~10mの浅海中である。特に内湾域の干潮線下に多く、魚貝類の格好の生息地となっている。アマモは甘藻の意味で、根茎が甘いことによる。葉を食用としている地方がある。また藻塩草ともいわれ、奈良時代にはこの葉を集め海岸につるして干し、また海水をかけ天日に干し食塩濃度を高くして、最後に釜で煮つめて食塩をとった。また種子はデンプン、タンパク質に富むためメキシコ西北部沿岸の人は食用にしている。

このアマモの種子の出土は全国でもこれが初めてと思われる。遺跡の立地場所から出土しても

#### 第Ⅳ章 分析・考察

不思議ではない。ただ当時の人々がこれを利用していたとすれば興味深いことである。

5. まとめ

- (1) 熊本県宇土市曽畑貝塚低湿地において、『縄文中期』から『縄文前期』にかけての8試料の種子分析を行った。
- (2) 同定された種子は20種類、16科19属であった。そのうち木本は11種類で、カジノキ、ヤマグワ、マタタビ、ニワトコなどの食利用植物があった。また草本は9種類で、そのうち6種は畑地雑草である。その他種子以外に木本の未熟な果実や冬芽、マツ科の葉片および蘚類などが検出された。
- (3) 検出された植物遺体の多くは、今日でもその木の実が食利用されるものである。このことから、当時の人々の生活にこれら木の実の果たす役割が大であったことが裏づけられた。いっぽうでは、南方から渡来したといわれるカジノキが検出され、また南アフリカが原産地といわれるヒョウタンの完全な果実が出土していることなどから、縄文時代の草期ないしは前期初頭ごろには中国から我が国に渡来していたと考えられる。このことは、今までの単なる採集の生活だけでなくて、やはりなんらかの栽培があったとしても不思議ではないだろう。ただそれが植えられていた程度のものなのか、簡単な栽培がなされていたのかは今のところ不明である。
- (4) 植物遺体の量は埋土状態によって大きく左右される。今回の試料土は砂礫質で植物遺体の残存しにくい土壌であったため、出土粒数が極端に少なかったことが惜しまれる。今後さらに多くの地点での分析を行えば、興味ある結果が得られるものと思われる。

### 謝辞:

本文を草するにあたり、植物種子の分析、同定の機会を与えていただいた熊本県教育委員会文化課の江本直氏に感謝いたします。

#### 引用文献

大井次三郎;『改訂新版 日本植物誌』 至文堂(1965)

熊本記念植物採集会編;『熊本県植物誌』(1969)

牧野富太郎;『新牧野植物図鑑』北隆館(1974)

大滝 末男·石戸 忠;『日本水生植物図鑑』北隆館(1980)

沼田 真・吉沢長人編;『新版 日本原色雑草図鑑』 全国農村教育協会(1980)

笠原 安夫;一鳥浜貝塚(第7次発掘)の植物種子の検出と同定―とくにアブナラ類とカジノキ

#### 第1節 理化学分析

およびコウゾの同定—『鳥浜貝塚』 p. 49-79 若狭歴史民族資料館 (1984)

M・シャークリー (河合信和訳) ; 『古代社会を復元する』 p 82-94 学生社 (1986)

江坂 輝爾; --縄文時代の栽培植物--『日本考古学論集5』 p. 195-200吉川弘文館 (1986)

黒松康悦・粉川昭平; 一亀井遺跡出土の大型植物遺体―近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵発掘調査概要報告書 p. 339—388 (1986)

笠原安夫・藤沢 浅;一米子市目久美遺跡出土の土器片の植物同定—加茂川改良工事に伴う埋蔵 文化財発掘調査報告書『目久美遺跡』 p. 96—97 (図版77—78) 米子市教育委員会 (1986)

# 第Ⅳ章 分析・考察

## 表1-(1) 曽畑貝塚低湿地の植物種子一覧表

|            |          |                        |                               | 出土  |            |            |
|------------|----------|------------------------|-------------------------------|-----|------------|------------|
| 科          | 名        | 和名                     | (下線は属)                        | 粒数  | 出土層        | 用途,生育場所    |
|            |          |                        |                               |     |            | 果実は食用、古く大陸 |
| 7          | ワ        | カジノキ                   | Broussonetia papyrifera Vent. | 2   | 13, 15     | から渡来し暖地に野生 |
|            |          | h — 8 D                | Maran bankusia Kaida          | 1   | 10         | 果実は食用になる、  |
|            | ,        | ヤマグワ                   | Morus bombycis Koidz.         | 1   | 13         | 山地や平地に自生   |
| 1          | ラ        | サンショウ                  | Delliania minima Makina       | 5   | 15, 16     | 暖地の林縁や丘陵に  |
| 1          | サ        | ソウ                     | Pellionia minima Makino       | ,   | 13, 10     | 自生         |
|            | ,        | カラムシ属                  | Boehmeria sp.                 | 2 7 | 11, 13, 14 | 茎の繊維を利用、   |
|            |          | <i>17 / 12 / 12</i> 44 | Doenneria sp.                 | 2 ' | - B 15, 16 | 原野に自生      |
| 2          | ス        | クスノキ                   | Cinnamamum comphere Sich      | 5   | 13, 15, 16 | 材を利用       |
| /          | +        |                        | Cinnamomum camphora Sieb.     |     | 13, 13, 10 | 暖地に自生      |
| マ          | タ        | - 7 7 15               | Astinidia nabutawa Manin      | 1   | 16         | 果実は食用や薬用に利 |
| タ          | ビ        | マタタビ                   | Actinidia polygama Maxim.     | 1   | 10         | 用、山地に自生    |
| <b></b>    | ヾキ       | 1. 14. 4. 4            | Form in a size of the b       | 5   | 11 14 B    | 神事に使う、やや乾い |
| ′′         | `+       | ヒサカキ                   | Eurya japonica Thunb.         | "   | 11,14-B    | た山地に自生     |
|            |          | ムラサキ                   | Canadalia in in Dan           | 5   | 11, 13, 15 | 路ばたや畑地の周辺に |
| ケ          | シ        | ケマン                    | Corydalis incisa Pers.        | 3   | 16         | 生育         |
| バ          | ラ        | オ ヘ ビ<br>イ チ ゴ         | Potentilla anemonefolia Lehm. | 1   | 15         | 原野や田の畔に生育  |
| ,          | ,        | ヘビイチゴ<br>属             | Potentilla sp.                | 1   | 16         | 原野や田の畔に生育  |
|            |          | L / J J 🗷              | D.I.                          |     | 10         | 果実は食用になる、  |
| ′          | <b>'</b> | キイチゴ属                  | Rubus sp.                     | 2   | 13         | 山野に自生      |
| トウ         | フダ       | アカメ                    | Mallotus japonicus Muell.Arg. | 5   | 11, 13     | 葉は盛り皿に代用、  |
| 13         | ゛サ       | ガシワ                    | manotus Japonicus Muen.Aig.   |     | 14-B,16    | 日当たりのよい場所  |
| 3.7        | , ,      | サンショウ                  | Zanthoxylum sp.               | 1   | 16         | 若葉や果実は食用や薬 |
|            |          | 属?                     | Zanthoxytum sp.               | 1   | 10         | 用になる、山地に自生 |
| クロメコ       | ョウ<br>Eド | クマヤナギ                  | Berchemia sp.                 | 1   | 13         | 果実は食用になる、  |
| +          | - I*     | 属?                     | Бегенения эр.                 | 1   |            | 山野に自生      |
| <b>ф</b> - | コギ       | タラノキ                   | Aralia elata Seemann          | 2   | 15, 16     | 若芽を食用とする、  |
|            | - ~      | 7//7                   | Arana Ciata Secinanii         |     | 10, 10     | 山野に自生      |
| セ          | IJ       | チドメグサ                  | Hydrocotyle sp.               | 1   | 16         | 路ばたや田畑の周辺に |
| Ľ          | 9        | 属                      | iiya ocoryic sp.              | 1   | 10         | 生育         |

# 第1節 理化学分析

表1-(2) 曽畑貝塚低湿地の植物種子一覧表

| 科 名        | 和名               | 学                        | 名<br>(下線は属) | 出土粒数 | 出土層                         | 用途,生育場所                  |
|------------|------------------|--------------------------|-------------|------|-----------------------------|--------------------------|
| ナス         | ナス属(イ<br>ヌホオズキ)  | Solanum sp.(S.nigrum L.) |             | 2    | 15, 16                      | 路ばたや畑地に生育                |
| スイカズラ      | ニワトコ             | Sambucus sieboldiana Bl. |             | 6    | 11, 13, 15<br>16            | 葉を薬用にする、日当<br>たりのよい林縁に自生 |
| キ ク        | ノゲシ属             | Sonchus sp.              |             | 1    | 11                          | 路ばたや畑地に生育                |
| ツ ユ<br>ク サ | ※  <br>ツユクサ      | Commelina communis L.    |             | 1    | 16                          | 花を染料、やや湿った<br>路ばたや荒地に生育  |
| マッ         | マツ科の葉片           | Pinaceae                 |             | 1    | 16                          | 山地に自生                    |
| バラ         | キイチゴ属 の棘         | Rubus sp.                |             | 1    | 15                          | 果実は食用になる、<br>山野に自生       |
| 蘚類         | スギゴケ類、<br>他(植物体) | Pogonatum etc.           |             | 1 2  | 11, 13, 14<br>- B 15, 16    | 山林内の地上や岩上に<br>生育         |
|            | 樹木類の未<br>熟な果実    |                          |             | 5    | 13, 15, 16                  |                          |
|            | 一部※              |                          |             | 4    | 13, 14-B<br>15, 16          |                          |
|            | 一部※              |                          |             | 1 8  | 13, 14-B<br>15, 16          |                          |
| 7          | 黒粒 ※ (虫こぶ?)      |                          |             | 1 5  | 10,11,13<br>14-B,<br>15, 16 |                          |
| o          | 昆虫の遺体            |                          |             | 5    | 10, 11, 13<br>15, 16        |                          |
| 他          | 昆虫の卵?            |                          |             | 6    | 13, 15, 16                  |                          |

※印は炭化したもの。

表2-(1) 曽畑貝塚低湿地の層別にみた各植物種子の出土粒数

<各層200gの土量を分析>

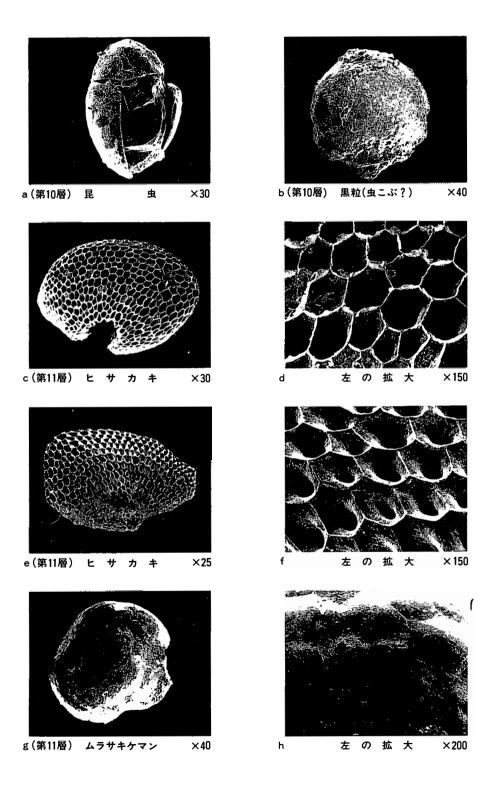
|         | 層序名              | 灰褐色砂礫  | 暗灰褐色   | 暗灰褐色シルト質砂 | 暗灰褐色 砂  | 暗灰褐色 | 暗 ジル 色 ト | 黒ルルト | 一    |
|---------|------------------|--------|--------|-----------|---------|------|----------|------|------|
| 1       | 土 層              | 10 層   | 11 層   | 13 層      | 14-B層   | 15 層 | 16 層     | 18 層 | 19 層 |
|         | 時 代              | 縄 文中 期 | 縄 文前 期 | 縄 文 前 期   | 縄 文 前 期 | 縄文前期 | 縄 文 海成層  |      |      |
| 木       | カジノキ             |        |        | 1°        |         | 1    |          |      | •    |
| 本       | ヤマグワ             |        |        | 1         |         |      |          |      |      |
| 植       | マタタビ             |        |        |           |         |      | 1°       |      | 1    |
| 物       | タラノキ             |        |        | _         |         | 1    | 1°       |      |      |
| (食<br>利 | ニワトコ             |        | 2      | 1°        |         | 1    | 2°       |      |      |
| 用       | キイチゴ属            |        |        | 2(1°      |         |      |          |      |      |
| されれ     | キイチコ属の棘          |        |        |           |         | 1°   |          |      |      |
| る種類     | サンショウ属?          |        |        |           |         |      | 1°       |      |      |
| 類       | クマヤナギ属?          |        |        | 1°        |         |      |          |      |      |
| _       | クスノキ             |        |        | 1         | -       | 3(1° | 1        |      |      |
| 木       | ヒサカキ             |        | 4°     |           | 1       | _    |          |      |      |
| 本       | アカメガシワ           |        |        | 2         | 1°      |      | 1        |      |      |
| 植植      | 未熟な果実            |        |        | 2°        |         | 2°   | 1°       |      |      |
| 1111    | 冬芽               |        |        | 1°        | 1       | 1°   | 1°       |      |      |
| 物       | マツ科の葉            |        |        |           |         |      | 1        |      |      |
| 草       | サンショウソウ          |        |        |           |         | 1°   | 4°       |      |      |
| -       | カラムシ属            |        | 6°     | 3°        | 4°      | 4°   | 10°      |      |      |
| 本       | ムラサキケマン          |        | 1°     | 1         |         | 2(1° | 1        |      |      |
| 植       | オヘビイチゴ           |        |        |           |         | 1°   |          |      |      |
| 114     | ヘビイチゴ属           |        |        |           |         |      | 1        |      |      |
| 物       | チドメグサ属           |        |        |           |         |      | 1°       |      |      |
|         | ナス属 (イヌ<br>ホオズキ) |        |        |           |         | 1°   | 1°       |      |      |
|         | ノゲシ属             |        | 1°     |           |         |      |          |      |      |
|         | ツユクサ             |        |        |           |         |      | 1°       |      |      |

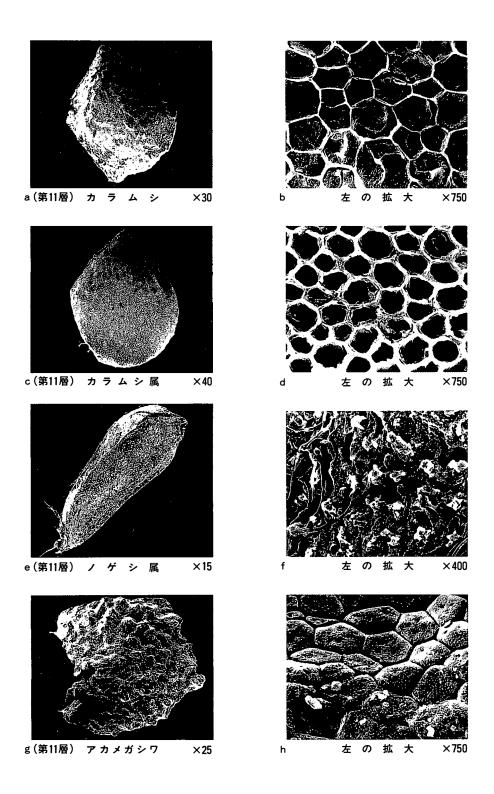
# 第1節 理化学分析

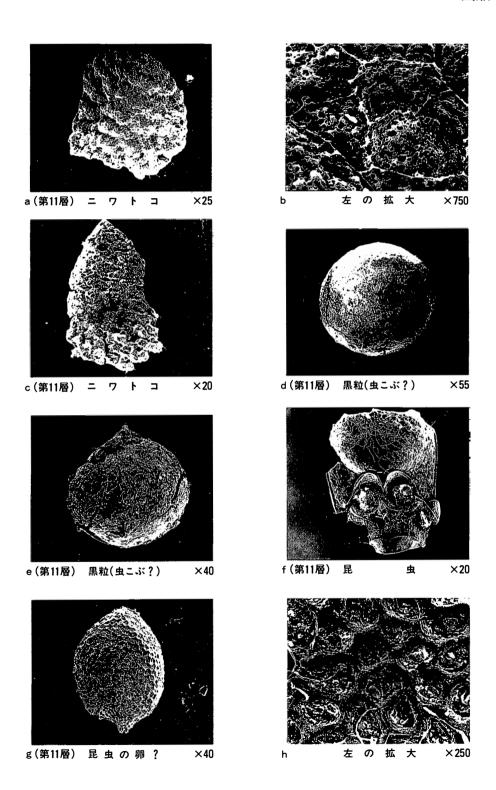
表2-(2) 曽畑貝塚低湿地の層別にみた各植物種子の出土粒数

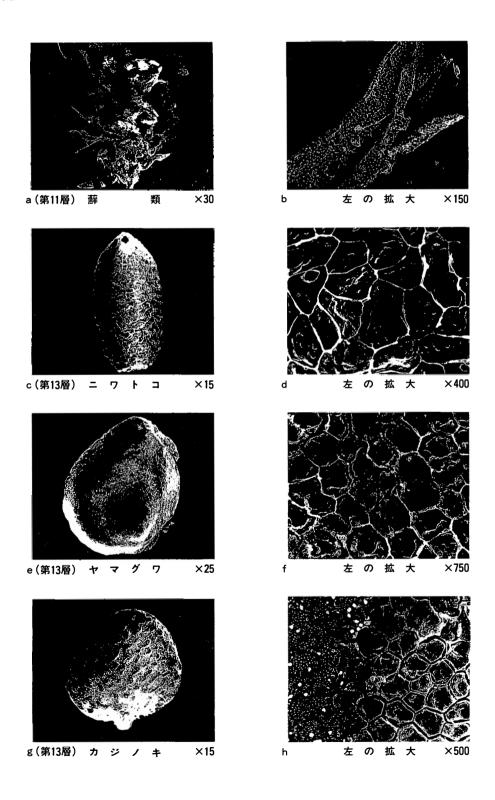
|      | 層 序 名        | 灰褐色砂礫  | 暗灰褐色 | 暗灰褐色    | 暗灰褐色    | 一 暗灰褐色  | 一 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ | 黒 シルト | 暗 ジルト |
|------|--------------|--------|------|---------|---------|---------|---|-------|-------|
|      | 土 層          | 10 層   | 11 層 | 13 層    | 14-B層   | 15 層    | 16 層                                    | 18 層  | 19 層  |
|      | 時 代          | 縄 文中 期 | 縄文前期 | 縄 文 前 期 | 縄 文 前 期 | 縄 文 前 期 | 縄 文 海成層                                 |       |       |
|      | 蘚類(スギゴ<br>ケ) |        | 1°   | 2°      | 3°      | 3°      | 3°                                      |       |       |
|      | 不明           |        |      | 4°      | 3(2°    | 1       | 10 (3°                                  |       |       |
| 植物以外 | 黒粒(虫こぶ)      | 2      | 2    | 1       | 5       | 2       | 3                                       |       |       |
|      | 昆虫遺体         | 1      | 1    | 1       |         | 1       | 1                                       |       |       |
|      | 昆虫の卵?        |        | 1    | 1       |         | 1       | 2                                       |       |       |
| 計(   | 植物以外は除く)     | 0      | 15   | 22      | 13      | 23      | 42                                      | 0     | 0     |

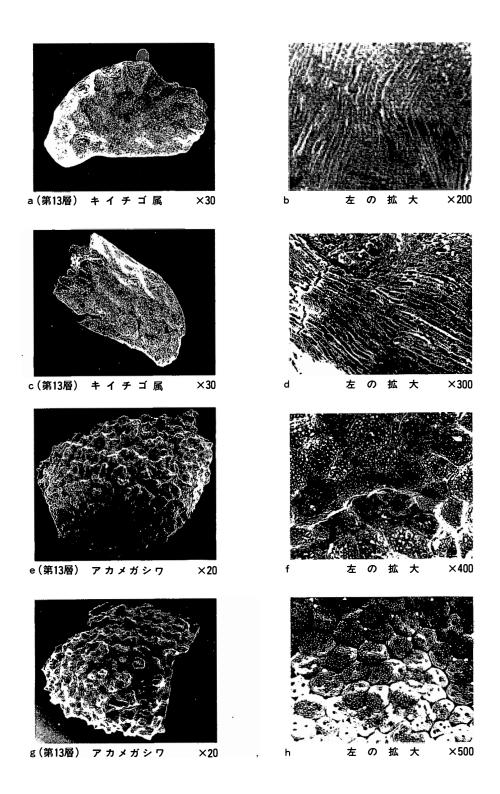
<sup>(\*</sup> 印を付けた種子はほぼ完全形のもの)

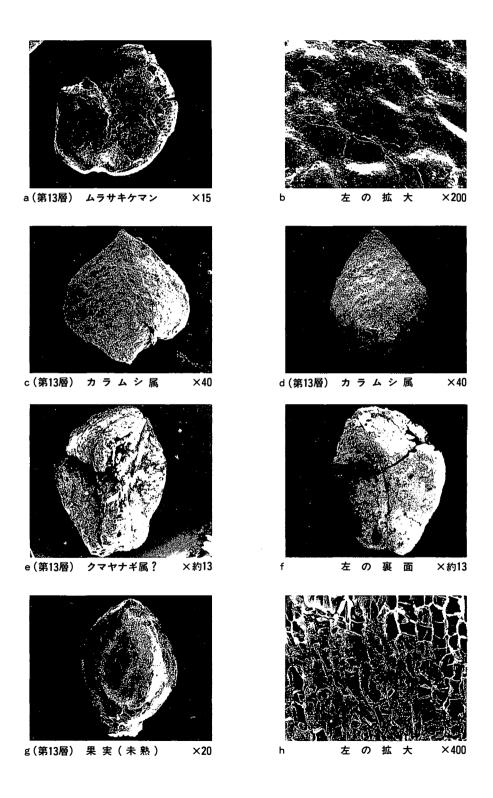


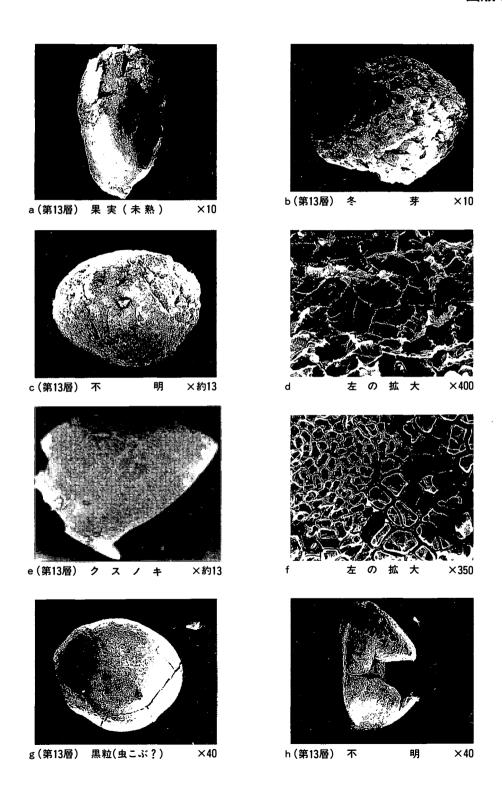


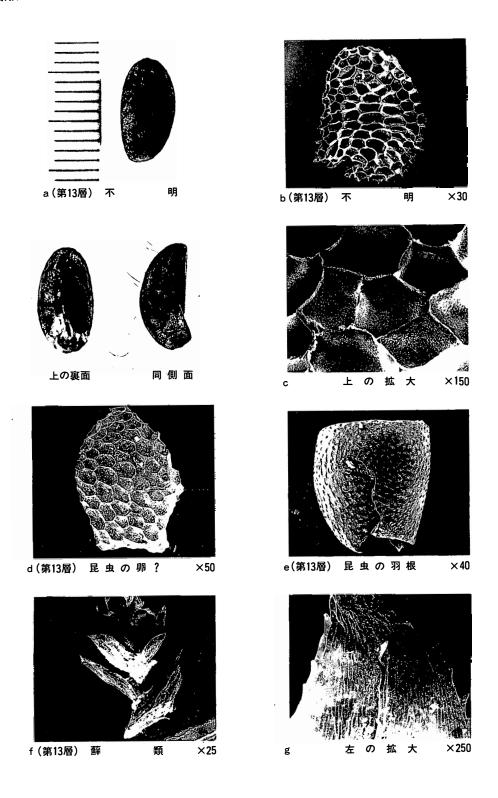


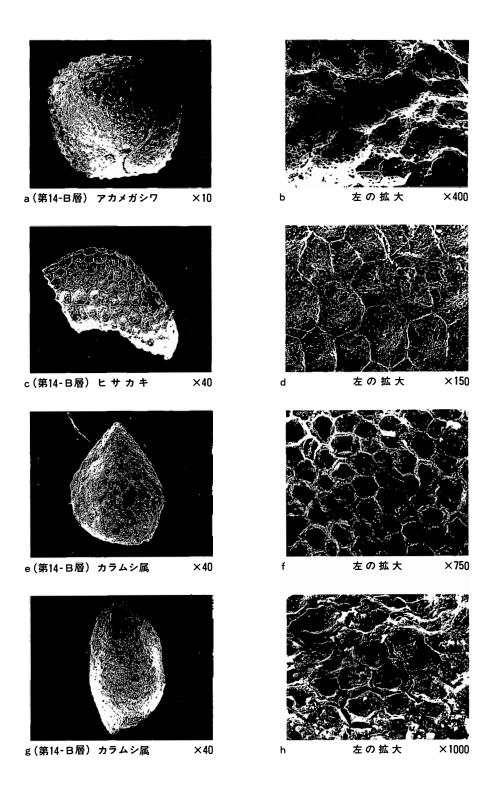


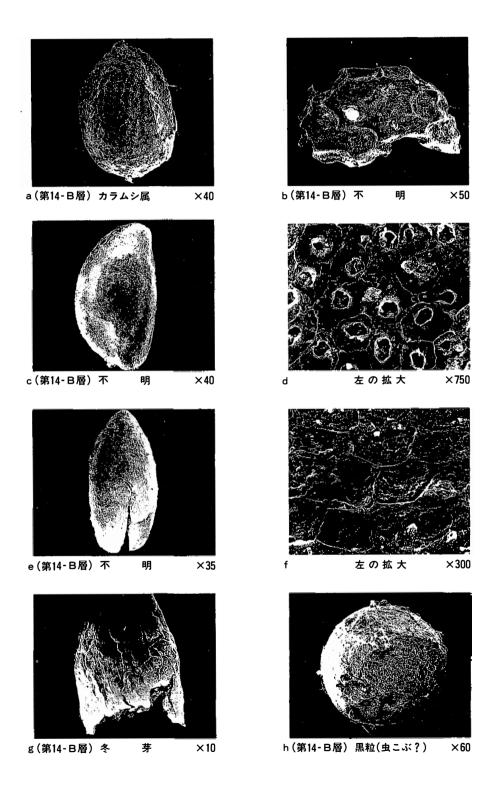


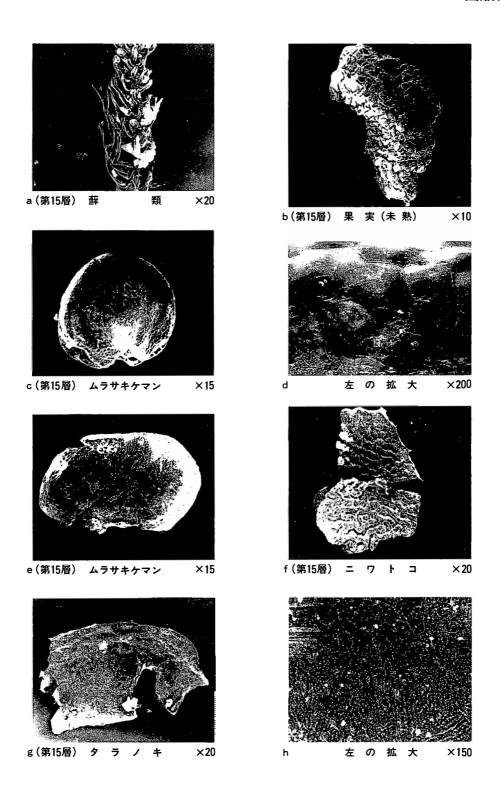


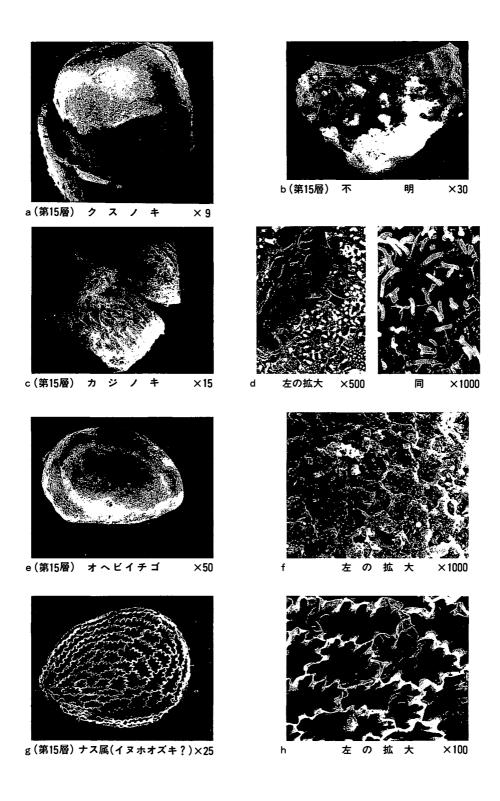


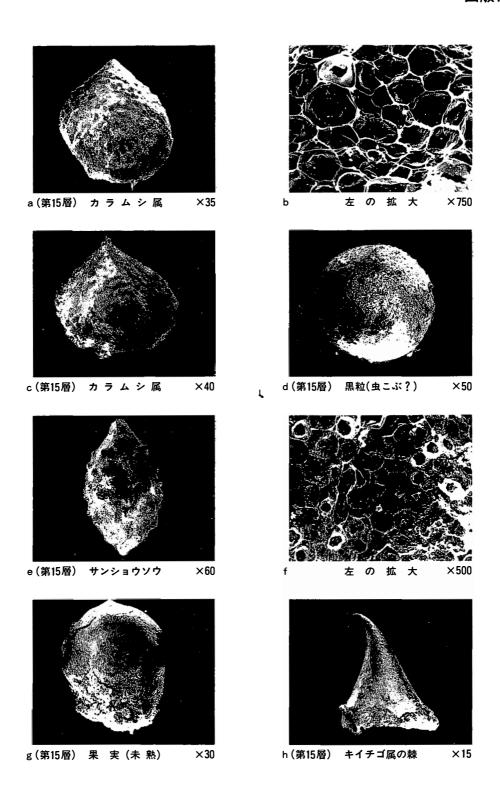


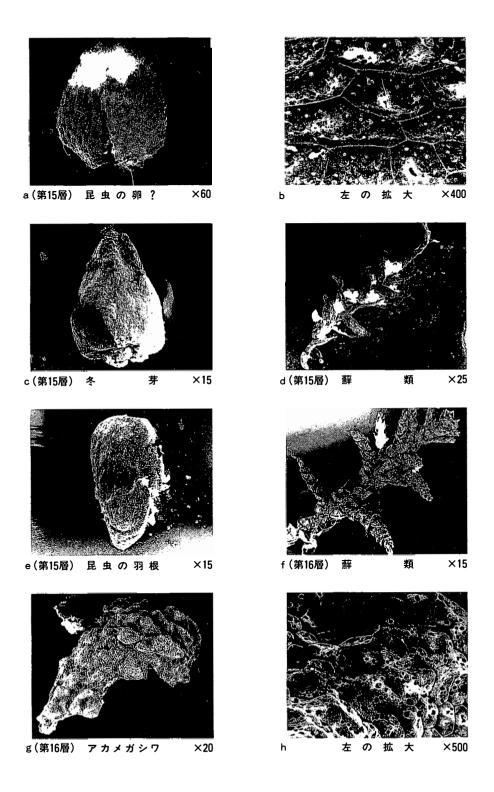


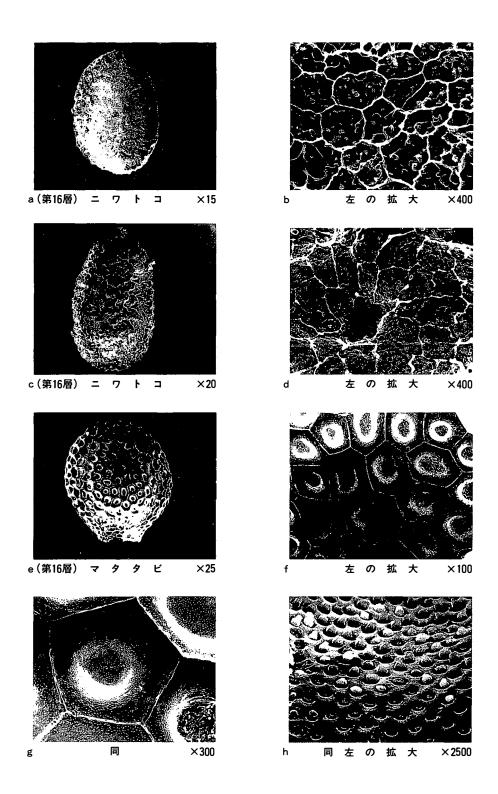


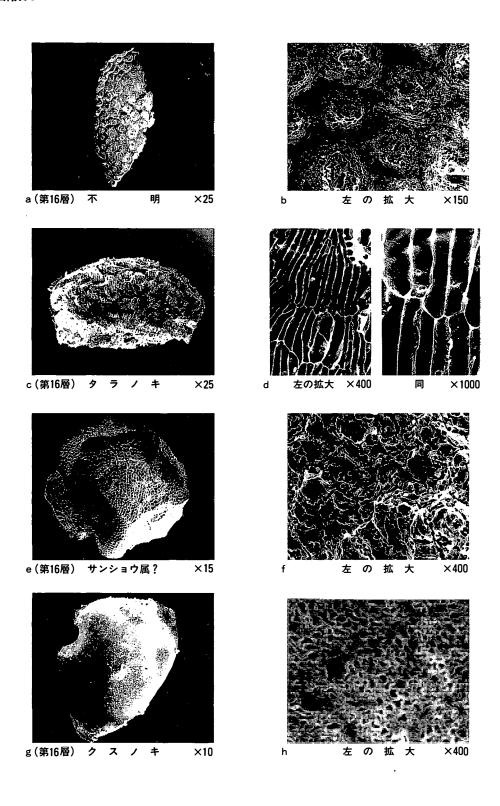


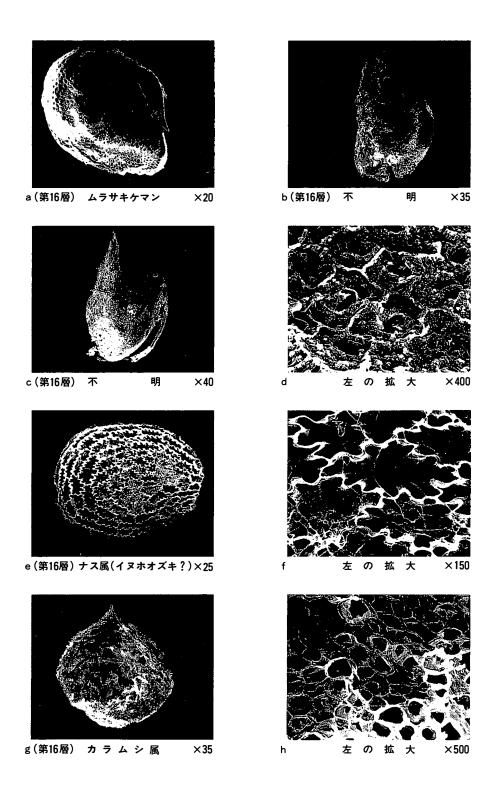


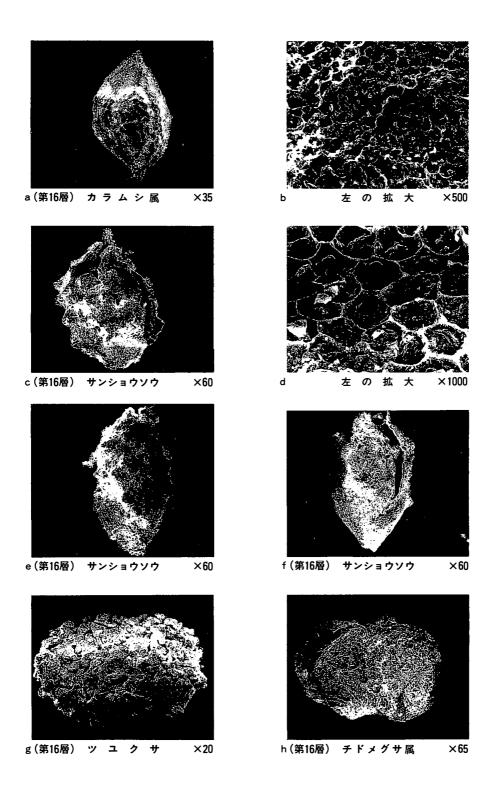


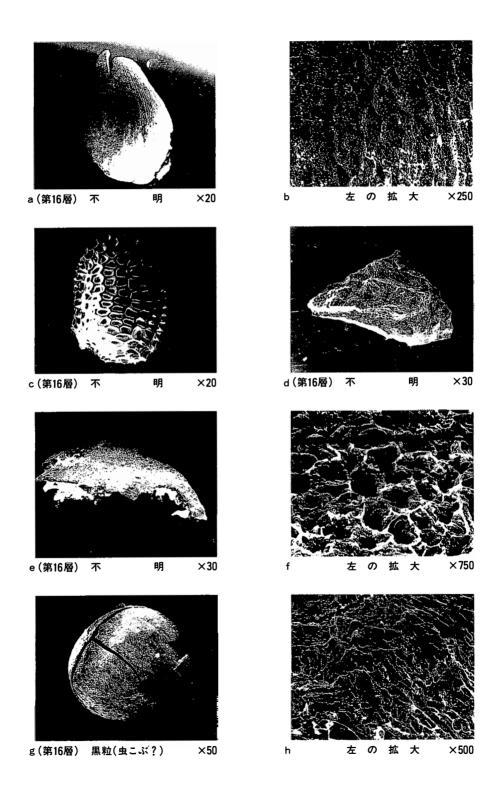


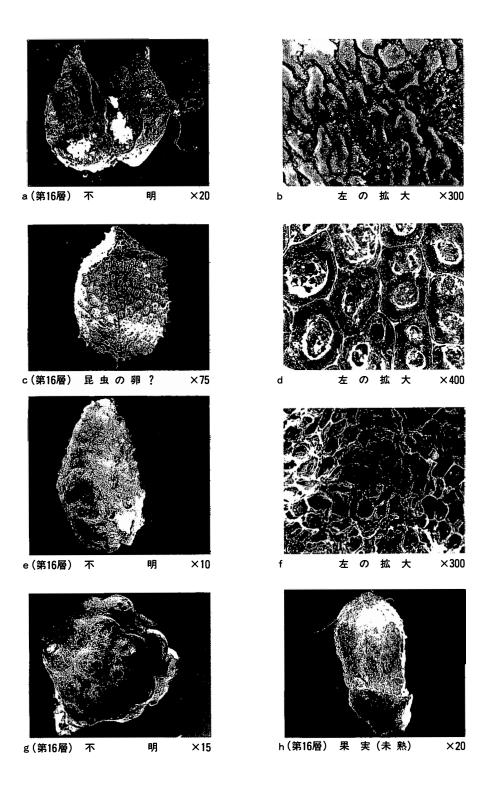


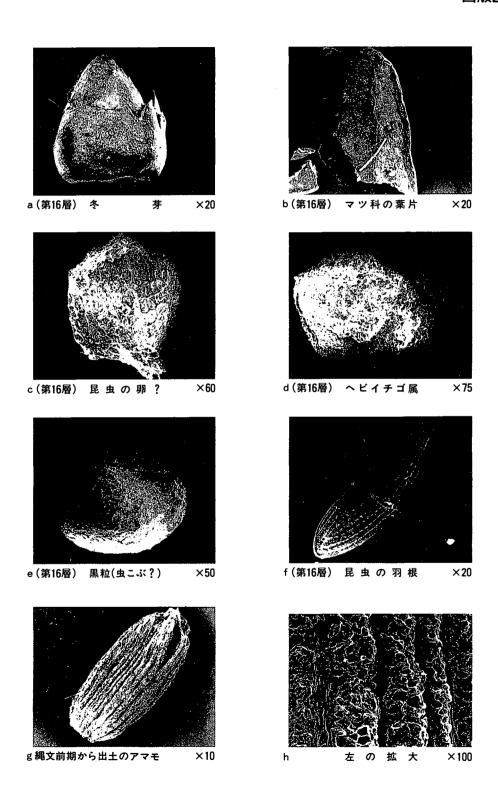












## 3. 曽畑貝塚低湿地遺跡出土の大型植物遺体

名古屋大学文学部助教授 渡 辺 誠

## 1. 植物遺体のリスト

1986~87年に熊本県教育庁文化課によって発掘された、宇土市曽畑貝塚低湿地出土の大型植物 遺体(種子類)は、次の14種である。

- I. 裸子植物門 GYMNOSPERMAE
  - 1. イチイ科カヤ

Torreya nucifera SIEB. et ZUCC.

- Ⅱ. 被子植物門 ANGIOSPERMAE
  - 1. クルミ科オニグルミ Juglans mandschurica MAXIM. subsp. Sieboldiana ( MAXIM . )
    KITAMURA
  - 2. ブナ科クヌギまたはアベマキ Quercus acutissima or Quercus varabilis BLUME
  - 3. ブナ科アラカシ

Quercus glauca Thunb.

4. ブナ科シラカシ

Quercus myrsinaeforia Blume

5. ブナ科イチイガシ

Quercus gilva Blume

6. クスノキ科クスノキ

Cinnamomum Camphora L.

7. ツバキ科ツバキ

Camellia japonica L.

- 8. トウダイグサ科アブラギリ Aleurites cordata THUNB.
- 9. ミカン科サンショウ 2

Zanthoxylum piperitum DC.

10. センダン科センダン

Melia azedarach L.var. subtripinnata MIQUEL

- 11. ウルシ科チャンチンモドキ Choerospondias axiillaris (ROXB.)B.L.BURTT et A.W.HILL
- 12. ウリ科ヒョウタン類

Lagenaria sp.

13. エゴノキ科エゴノキ

Styrax japonica SIEB. et ZUCC.

これらのなかでもっとも多いのは  $II-2\cdot 5$  であり、他はごく少量である。これは本調査地区がドングリ類の貯蔵穴地区であることを反映している。

#### 2. 出土状態の検討

食用価値との関連において出土状態を検討するに当たっては、まず貯蔵穴の出土例と包含層からの出土例とを区別する必要がある。しかし貯蔵穴内から出土した場合でも、本来食用化が不可能な種類については、偶然性の他に、食用以外の利用価値について検討する必要がある。また逆に、包含層の出土例で食用価値のあるものについては、花粉分析の成果を参考にして、周辺に生えていたのか、あるいは遠隔地から運ばれたものであるのかを検討する必要がある。

## 2-1) ドングリ類の貯蔵穴

いうまでもなく今回の調査の重要性は、62基にものぼるドングリ類の貯蔵穴の検出である。そ してこれらの貯蔵穴中のドングリ類の出土状態によって、貯蔵穴を3群に分類することができる。

- 第1群 取り出されないままドングリ類で充満しているタイプ······2基 第11・36号
- 第2群 取り残し状態でドングリ類が出土しているタイプ……………55基 第2・3~9・12~14・16~30・32~35・37~41・43~62号

このうち第2群と第3群とは、廃棄用ピットに転用されている。しばしば動物遺体などが検出 されることが、転用を明示しているとみなされる。

これらの貯蔵穴の所属時期は、大部分が縄文時代前期の曽畑期であるが、第2群に属する第27・29・41・44・45号の4基は、縄文時代後・晩期である。

そして第1・2群の貯蔵穴より検出されたドングリ類の種類は、主体を構成するものが明確であり、2大別される。

第1は、クヌギまたはアベマキ(図版、3)のみの場合で、第11号1基のみである。

第2は、イチイガシ(図版,4)主体の場で、他の56基はすべてこれに含まれる。十分に検討する時間がなかったので数量で示すことはできないが、後者の場合にはまれにアラカシ(図版,5)やシラカシも含まれている。そして重要なことは、イチイガシのみは食用化に当ってアク抜きを必要としないが、クヌギ・アベマキ・アラカシ・シラカシなどはすべてアク抜きをしないと

ただしこの曽畑人の主食であったドングリ類の食用化(アク抜き)の方法や、低湿地での貯蔵 の意義などについては、別稿(第2節3)にて記すことにする。

なおドングリ類以外の貯蔵穴内出土の大型植物遺体は、食用価値のないセンダンが第52号貯蔵穴(曽畑期)より12点出土しているにすぎない。

## 2-2) 包含層出土の食用植物

食べられない種類なのである。

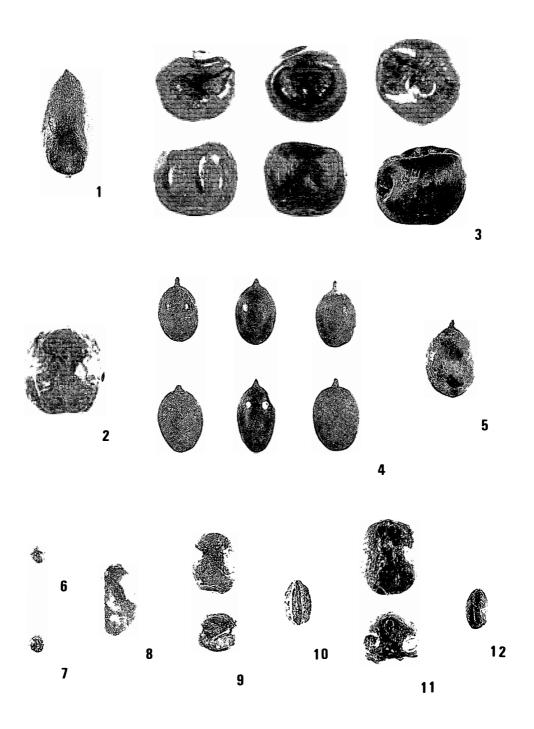
包含層からもドングリ類は多量に出土しているし、花粉分析の結果でも確認することができる。 ドングリ類以外の包含層出土の食用植物は、次のとおりである。

a. カヤ (図版,1) A-1区第16層 (曽畑期) より3点出土。

宮城県以南から九州にかけての山林に散生する高木の針葉樹であり、材は碁盤や将棋盤に用いられ、種子は脂肪に富み食用・薬用とし、食用油もとれる。

b. オニグルミ (図版, 2) A-1区第15·16層、B-2区第16層(曽畑期)より5点出土。 北海道から九州にかけて、川沿いや適湿の地に生える落葉高木であり、材は狂いが少なく家具、

第1節 理化学分析



図版 植物遺体 (縮尺, 実大)

1:カヤ、2:オニグルミ、3:クヌギまたはアベマキ、4:イチイガシ、

5:アカガシ、6:クスノキ、7:サンショウ、8:ツバキ、9:アブラギリ、

10:センダン、11:チャンチンモドキ、12:エゴノキ.

指物材に用いられる。種子は脂肪に富み美味で、油もとれる。

c. ツバキ (図版, 8) A-1・B-4区第16層 (曽畑期) より6点出土。

海岸によく成育する常緑高木であり、材は堅く器具に用い、種子からは油をとり、頭髪用・燈 用・食用とする。ただし縄文時代に油をとって利用したという確証はない。

d. チャンチンモドキ (図版,11) A-3・4区第11層 (曽畑期) より 2 点、A・B 区第10層 (阿高期) より 2 点出土。

熊本県・鹿児島県に分布する落葉高木であり、果実は食べられるがうまくないという。

e. サンショウ (図版, 7) A-3区第11層 (曽畑期) より1点出土。

落葉低木で、若葉を汁やあえものに用い、果実を香辛料にする。

以上の5種のうち、オニグルミ以外は花粉が検出されていないので、食用植物などとして遠くより運ばれたとみることができる。

なおヒョウタン類については、別に藤下典之氏によって詳しく報告されているので、ここでは 触れないことにする。

2-3) 包含層出土の他の植物

包含層出土の食用植物以外の植物遺体は、次のとおりである。

a. クスノキ (図版, 6) 採集品1点。

関東地方以西から九州にかけて分布する常緑高木であり、葉や材から樟脳をとる。

b. アブラギリ (図版,9) A-1区第16層 (曽畑期) より1点出土。

中部地方以南から九州にかけて分布する落葉高木であり、種子から桐油をとる。材は器具、漆器をみがく木炭に、樹皮からは皮をなめすタンニン・染料をとる。

c. センダン (図版,10) 第52号貯蔵穴 (曽畑期) より12点、A·B区第10層 (阿髙期) より1点出土。

海辺の山地に生える落葉高木であり、核果を数珠に作る。薬用にもされる。

d. エゴノキ (図版,12) A-1区第16層 (曽畑期) より1点、A·B-2区第10層 (阿高期) よりは多量に出土。

山地や原野の小川のふちに生える落葉樹であり、果皮にエゴサポニンを含み、洗濯や、毒流し 漁に用いられる。また弾力性に富む枝は、カゴなどのふちの芯にも用いられる。

これらはいずれも花粉が検出されておらず、付近に生えていたものが堆積したものとは考えられない。そしてそれぞれに利用価値はあるのであって、十分に考慮しておく必要はある。特にエゴノキは、毒流し漁やカゴ細工などとの関係において重要視されるのである。

### 3. 本遺跡の特徴

本遺跡出土の食料資源としての大型植物遺体の特徴は、イチイガシが圧倒的に優先していることである。ドングリ類のなかでもナラ類ではなくカシ類が多いことが、九州をはじめとする西南

#### 第1節 理化学分析

日本の特徴であるが、カシ類のなかでも唯一アク抜きを必要としないイチイガシが優先しているということは、曽畑人の主体的な適応の姿を示しているとともに、背後にイチイガシの豊富な森のあったことが推定されるのである。おそらくこのことが、集落立地の重要な条件の一つであったと考えられる。

そしてアク抜きの技術ももっていたのであり、クヌギまたはアベマキをぎっしりつめていた第 11号貯蔵穴は、そのことをきわめて明白に示しているのである。

東北日本の縄文時代遺跡に多いクリが出土していないこと、カヤやオニグルミもきわめて少ないことも、西南日本の照葉樹林帯の特徴をよく示しているということができる。

## 参考文献目録

北村四郎・村田源、1971:原色日本植物図鑑・木本編 I 。大阪・保育社。

"・", 1979: 原色日本植物図鑑・木本編Ⅱ。大阪・保育社。

## 4. 曽畑貝塚低湿地遺跡から出土した木質遺物に関する一考察

熊本大学教育学部教授 大 迫 靖 雄

## I. はじめに

曽畑貝塚低湿地遺跡から出土した木片について、以前、熊本県文化財報告「徴雨・曽畑」に記 載した。しかし、以前に取り上げた木片は、すべて加工を施してない流木であった。今回は、主 として、生活用具に使用されていたカゴ材料に関する検討という点で非常に興味を持った。

過去の報告を紐解いてみても、カゴ材料の鑑定結果は非常に少ない。カゴ材料の場合、一般的 に形状が小さいために、材料の鑑定にあたっては、技術的に困難な点がある。そのため、出土し た多くのカゴ材料の種の特定をしなかったことが考えられる。しかしながら、生活用具の材料や 加工法を明らかにすることは、当時の生活様式や生産技術の水準を知る上からも、きわめて重要 な意味を持つと考える。このような考えに基づいて、本報告では、まず、カゴ材料および流木の 樹種鑑定を行い、この結果に基づいて、環境考古学的考察を行ってみたい。

## II. 樹種の鑑定

本遺跡からは多量の木材および食料貯蔵用カゴが出土した。このうち、縄文時代前期轟期文化 層(第12層~)および曽畑期文化層(第11層)から出土した流木3個体および曽畑期文化層から 出土した10種のカゴ材料について鑑定を行った。以下(1)流木、(2)カゴ材料について述べる。

#### (1)流木の樹種鑑定

上記したように、流木は3個体の樹種鑑定を行った。各流木の個体番号を流木1~3とする。 出土した層は流木1(第16層)、2(第13層)、3(第11層)である。以下、各個体ごとに鑑定結 果を示す。

## 〔流木 1〕

本流木は第16層から出土したもので、直径10cm程度の丸太の一部と思われるが、髄近くの部分 が年輪に沿って欠落している。炭化した部分があり、薪として使用された可能性が強い。木口面 の巨視的観察から、年輪幅は髄近くで小さく樹齢が高い部分で大きくなることを示しており、種か ら発芽したことが推定される。残存状態は比較的良好であったため、ミクロトーム切片の作成が 可能であった。検眼の結果を以下に示す。

#### 木口面(写真1,2)

写真1, 2とも下側が樹心、上側が樹皮側を示す。年輪界はやや不明瞭で、早材から晩材への 移行はゆるやかである。樹脂細胞は年輪内にほぼ均等に多数散在している。

#### 柾目面(写真3,4)

#### 第1節 理化学分析

写真3の左端に年輪界が見られる。仮道管壁に有縁壁孔の正面がみられるが、らせん肥厚は見られない。写真4には、短冊型をなした樹脂細胞ストランドが見られる。また、樹脂細胞の水平壁は平滑である。放射組織はすべて放射柔細胞からなり、分野壁孔はヒノキ型で1分野に1ないし2個存在している。

## 板目面(写真5,6)

仮道管壁の正面には有縁壁孔は見られない。木口面、柾目面で見られた樹脂細胞ストランドが 散在しているのが見られる。放射組織は単列で、細胞高は1~10数個である。

以上の結果から、本流木は、イヌマキ(Podocarpus macrophyllus D. Don)と鑑定される。 [流木 2]

本流木は第13層より出土したもので、樹皮は残存していないが、ほぼ完全な丸太の状態であった。直径は約6cmで、表面に一部炭化した部分があった。このことから、本資料も流木1と同様、薪として使用されていた可能性が強い。また、本資料の一端は2叉に分れており、いずれも著しい偏心が見られる。本資料の場合も、残存状態は比較的良好で、ミクロトーム切片の作成が可能であった。検眼の結果を以下に示す。

## 木口面(写真7、8)

写真7,8とも下側が樹心、上側が樹皮側を示す。年輪界はやや不明瞭で、早材から晩材への 移行はゆるやかで、流木1ときわめて類似している。樹脂細胞は年輪内に均等に散在しているが、 木口面では流木1ほど明白ではない。

## 柾目面 (写真9.10)

板目面(写真11.12)

写真9の右側に年輪界が見られる。仮道管壁に有縁壁孔の正面が見られるが、らせん肥厚は見られない。写真9,10とも短冊型をした樹脂細胞ストランドが見られるが、写真3より、その数は多く、年輪内に均等に分布していることが見られる。また、樹脂細胞の水平壁は平滑である。 放射組織はすべて放射柔細胞からなり、分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1~2個存在している。

本資料は、流木2の偏心した幅広い部分すなわち圧縮あて材部を示す。すべての仮道管に、らせん状の裂け目が見られ、圧縮あて材の特徴を示している。また、仮道管の正面には有縁壁孔は見られない。木口面、柾目面で見られた短冊型をした樹脂細胞ストランドは見られる。放射組織は単列で、細胞高は1~10数個を示している。

以上の結果から、本資料も流木1と同様、イヌマキ(Podocarpus macrophyllus D. Don)と鑑定される。

### [流木 3]

本資料木は第11層曽畑期文化層から出土したもので、樹心を欠く、直径約8cmの丸太の一部であることが推定される。本流木は前述した流木1,2と比較して老化の程度が著しい。表面には、放射組織が老化し、損失したと思われる空隙部分が多く見られ、広放射組織の存在が推定された。

#### 第Ⅳ章 分析・考察

以上のような資料の残存状態のため、検眼用切片の作成は困難であったが、徒手切片法を用いて 切片を作成し検眼した。以下検眼結果を示す。

## 木口面 (写真13)

下側が樹心、上側が樹皮側を示す。写真13は2年輪を示している。いずれも、年輪界に沿って 1~3列の大道管が並んで孔圏部を形成しており、環孔材であることを示している。孔圏外の小道管は数個かたまって火炎状に配列していることが見られる。大道管のまわりには周囲仮道管が見られる。また孔圏外には短接線状柔組織が見られる。放射組織は写真13右側および中央部に2本幅広い広放射組織が見られるが、他はすべて単列放射組織を示している。

#### 柾目面 (写真14, 15)

写真14の中央よりやや右側にチロースを含んだ大道管が見られる。また、写真14,15の大道管の側面からせん孔板は単せん孔であることが示される。また、道管の側壁には対列壁孔が見られる。道管の周囲には多くの周囲仮道管が見られる。放射組織は、すべて平伏細胞からなる同性であることを示している。

## 板目面 (写真16)

本写真は孔圏外の板目面を示している。軸方向の組織は、点在している小道管以外は木繊維を示している。放射組織は左側に複合型の広放射組織が見られるが、他はすべて単列放射組織であることを示している。

以上の結果から、本流木はコナラ(Quercus serrata Murray)と鑑定される。

#### (2)カゴ材料の樹種鑑定

本遺跡からは、多量の食物貯蔵用のカゴが出土した。そこに使用されていた材料の寸法も多種 多様であった。そこで、断面形状を基準にして、10種のカゴ材料を抽出して樹種鑑定を行った。

なお、本報告で取り上げたカゴ材料すべてについて、徒手切片法により検眼用切片を作成したが、いずれも、断面がきわめて小さな上、老化もはげしいため、切片の作成は困難であった。特に、厚さ方向の切片作成は困難であった。

まず、本項で取り上げた10種のカゴ材料の断面形状を図1に示す。本図の断面形状から見ると、カゴ材料の断面形状は、①厚さがほぼ一定の長方形、②半円形、③三角形の3種類に分類される。このうち、①に属するものが最も多い。これに対して、②に属するものは、すべて同一の樹種と思われ、③に属するものは1材料にすぎない。ただ、①に属するものは若干厚さむらのあるものもある。しかしながら、このタイプに属するものはいずれも板目板状で使用されていた。

なお、鑑定の結果、同一樹種と思われるものがあるので、これらを一括して鑑定結果を述べる。 資料番号は、いずれも出土したカゴNo.とするが、同一カゴ番号のうち、2材料以上の鑑定を 行ったものについては、カゴ番号の後に番号をつけた。

#### 〔カゴ材料 No14, 20-2, 62〕

ここで示すカゴ材料は、いずれも同じ樹種の特徴を示している。また、いずれの断面形状も① に属しており、薄く、比較的均一な厚さであった。木取はいずれも板目であった。以下、鑑定結果を示す。

#### 木口面 (写真17~20)

写真17, 18はカゴ材料No62, 写真19はNo14, 写真20はNo20-2の木口面を示す。いずれも、板目木取りで、左右が樹心、樹皮方向を示しているが、年輪界は明白でない。道管は単独または2~3個が放射方向に複合しているのが見られる。道管の分布は均等で、場所による道管の大きさに差はなく、散孔材であることを示している。また、接線方向に白い帯状の組織群が走っている。これは、軸方向の帯状柔細胞群と考えられ、イチジク属の特徴を示しているといえる。放射組織は写真18によって、1~5列のものが見られる。

## 柾目面 (写真21, 22)

本写真は、いずれもカゴ材料No62の柾目面を示す。写真21の中央部に道管が示されている。この場合、道管と放射柔細胞の接する面に、かなり大きな壁孔が存在するのが見られる。道管のせん孔板は単せん孔を示す。軸方向組織は柔細胞群と木繊維群が交互に現われ、縞状を示している。放射組織は1本の直立細胞からのみなるものと、数細胞高の平伏細胞からなるものが見られる。

#### 板目面 (写真23, 24)

本写真もカゴ材料No62の板目面を示す。写真23の左側に一部木繊維群が見られるが、他は柔細胞ストランド群を示している。写真24から、放射組織は上、下端が直立細胞、その他が平伏細胞からなる異性放射組織であることを示している。また、単列放射組織は直立細細胞からのみなることを示している。また、放射組織の細胞幅は1~5または6細胞、細胞高は最大数十細胞であることを示している。

以上の結果から、カゴ材料No.62,14,20-2は同一の樹種で、イヌビワ( $Ficus\ erecta\ Thunb.$ )と鑑定される。

## 〔カゴ材料 No.20-1〕

図1に示したように、本資料の断面は三角形を示している。そのため、厚さ方向および幅方向の切片作成は、きわめて困難であった。ただ、資料の老化の程度は他の資料と比較すると少ない。 以下検眼結果を示す。

## 木口面(写真25)

本写真は左側が樹心、右側が樹皮方向を示す約1年輪を示している。写真から明らかなように、中央やや右側に大道管がほぼ1列に並び、明白な孔圏部を形成している。孔圏外では道管径のきわめて小さな小道管が多数集まり、円形または接線状に集団管孔を示している。大道管の周囲には周囲柔細胞の存在が見られる。また、小道管の集団管孔の周囲を周囲柔細胞がとりかこんでい

るのが見られる。放射組織は1~数列を示している。

柾目面(写真26, 27)

本写真に大道管は見られないが、小道管の集合が見られ、そのせん孔板は単せん孔を示している。また、小道管壁にらせん肥厚が見られる。小道管のまわりには柔細胞ストランドが見られ、その中に結晶が存在するものが見られる。放射組織はおおむね平伏細胞であるが、上、下縁辺は 方形細胞からなる異性を示す。

### 板目面(写真28)

本資料の断面形状から推定できるように、板目面の切片作成は困難であった。そのため、切片 状態は悪いが、本写真は孔圏外の部分を示しており、中央よりやや右側の小道管壁にらせん肥厚 が見られる。また、小道管の周囲には柔細胞ストランドが見られる。放射組織は切片状態が悪い ため、明白でないが、1~数列の平伏細胞からなり、上、下縁辺にやや大きな細胞を含む異性で あることを示している。

以上の結果から、本資料は、ケヤキ (Zelkova serrata Makino) と鑑定される。

### 〔カゴ材料 No.36〕

本資料は断面寸法が非常に小さな上に、老化が進んでいたため、切片の作成が困難であった。 以下、検眼結果を示す。

### 木口面(写真29)

写真上方に道管が厚さ方向に並んでいるのが見られる。また、下方左側に年輪の一部が見られる ことから、本資料は板目木取りされていることが分る。このことから、本資料は放射孔材である といえる。また、写真下方には、接線方向に数個の柔細胞幅からなる独立帯状柔組織が見られる。 放射組織は本写真で見るかぎりは、すべて単列を示している。

## 柾目面 (写真30)

左右の幅は資料の厚さを示す。本写真において、中央部および右側に道管が見られ、せん孔板は単せん孔を示す。また、道管の周囲に仮道管が見られ、写真中央部には柔細胞ストランドも見られる。放射組織はすべて平伏細胞からなる同性を示す。

#### 板目面(写真31)

写真右側に道管が存在する。放射組織はすべて単列であることを示している。また、他の組織は木繊維と柔細胞から成り立っている。

以上の結果から、本資料をカシ類(アカガシ亜属: Cyclobalanopsis Prantl)と鑑定する。しかし、資料の形状がきわめて小さいため、カシ類の特徴である広放射組織は観察されなかった。 〔カゴ材料 Na 9〕

本資料は老化が著しく、きわめてもろい状態にあったため、切片の作成は非常に困難であった。 以下、検眼結果を示す。

#### 木口面(写真32)

#### 第1節 理化学分析

本写真は左右が資料の厚さ方向を示す。また、左右が樹心側と樹皮側を示し、板目木取りした ものであることを示している。ただ、本写真上では年輪界は明白でない。本写真上には左右方向 に3列の道管の並びが観察され、本資料が放射孔材であることが示されている。接線方向に独立 帯状柔組織が見られる。放射組織は、きわめて小さい。

#### 柾目面(写真33, 34)

写真33の資料幅は本資料の厚さを示している。写真上に2本の道管が見られ、せん孔板は単せん孔を示している。写真34から、道管の周囲に仮道管が見られる。また、道管の横に、柔細胞ストランドも認められる。放射組織はすべて平伏細胞からなる同性を示している。

## 板目面 (写真35)

写真上に道管が存在し、その周囲に仮道管が見られる。また、柔細胞ストランドも認められ、 その一部は結晶を含んでいる。放射組織はすべて単列を示している。

以上の結果から、本資料もカゴ材料Na36と同様の特徴を示しており、カシ類(アカガシ亜属: Cyclobalanopsis Prantl)と鑑定される。しかしながら、本資料の場合も、カシ類の特徴である広放射組織は観察されなかった。これは、資料の形状が小さすぎるためとも思われる。

### 〔カゴ材料Na 1 - 1, 12, 39〕

図1から明らかなように、カゴ材料No1-1, 12, 39は1本の茎を半分にして使用していることを示している。また、これらの茎は、いずれも、直径が約3 mm程度のもので、外見から、つる性の植物であることが推定される。これらの材料についても、他のカゴ材料と同様に、徒手切片法により、検眼用切片を作成した。ただ、これらの材料は、いずれも半円をなし、しかも寸法が小さなため、検眼用切片の作成は非常に困難であった。特に、板目面の切片作成は不可能であったので、検眼は行えなかった。以下、木口、柾目両面の検眼結果を示す。

## 木口面 (写真36~38)

写真36、37はカゴ材料No.1-1、写真38はカゴ材料No.39の木口面を示す。いずれも、半円に近い断面形状を示し、1本の茎を半分に裂いたものであることがうかがわれる。いずれも、樹皮側から髄付近までを表わしている。組織の構成要素は道管要素、師管要素、木繊維および放射組織からなることを示している。また、放射組織は幅広い。

## 柾目面 (写真39)

本写真はカゴ材料Na1-1の柾目面を示している。右側に道管が見られ、左側に師管が見られる。しかしながら、本写真では放射組織の存在は定かではない。

以上の結果から、本カゴ材料はつる性樹種であるといえる。また、木口および柾目面の特徴から、アケビ(Akebia quinata Decne.)であることが推定される。しかしながら、板目面の検眼結果が得られなかったなど、樹種を特定するためには、データ不足であり、若干疑問が残る。

#### 〔カゴ材料Na1−2〕

本材料は老化が特に著しいために、検眼用切片の作成はきわめて困難であった。また、図1

からも明らかなように、材料の厚さも非常に薄い。ただ、一側は凹凸が見られるのに対して、他の側は平滑であった。また、厚さはよく揃っていた。本材料の場合も、板目面の切片の作成は不可能であったので、木口面および柾目面の検眼結果を示す。

## 木口面 (写真40)

写真の左側が凹凸を示しており、最外層は表皮が見られる。右側は二次師部が見られ、一部、 放射組織が見られる。

## 柾目面 (写真41)

写真の左側の最外層に、わずかに表皮が見られ、二次師部も見られる。また、右側には、柔細 胞が見られ、ところどころに放射組織が見られる。

以上の結果から、本カゴ材料は樹皮であることが推定される。しかしながら、樹木の特定はできなかった。

## Ⅲ. 出土木質材料の環境考古学的考察

食物貯蔵用のカゴが、古代遺跡から出土した例はしばしば報告されている。このことは、植松 4) や荒木らが指摘しているように、カゴが全国各地で人間の生活ときわめて密接に関係していたためと思われる。ところが、カゴ材料について述べたものはきわめて少ない。過去にカゴ材料が特定された例については、島地らの調査によっても、数例にすぎない。そして、報告された例から、アケビ、タケ、ヒノキが見られるが、縄文時代の出土物については、布勢遺跡(鳥取市)から出土したヒノキの例が示されているにすぎない。この他、福井県鳥浜貝塚から出土したカゴ材料にヒノキが使用されていたとする報告もある。しかしながら、カゴの出土数からすると、材料の判明した数は、あまりにも少ない。また、植松は縄文時代の生活様式、カゴの普及状態や森林植生から推定して、カゴ材料として、多種の樹皮やつる類が使用されていたことを推定している。しかし、今のところ、これらを実証する報告はない。

ところで、本報告で示したカゴ材料は、上記した材料とは異なり、広葉樹を主とした多種の材料で作製されている。本曽畑遺跡は九州の中央部平野地に位置し、典型的な照葉樹林帯に属して6)いる。このことは、花粉分析によっても明らかとなっている。そのため、本遺跡も多種の広葉樹に囲まれていたことが推定できる。ただ、針葉樹も存在していたことは、流木1,2がイヌマキであることから明らかである。しかしながら、流木1,2は曽畑期文化より古い、第16,13層から出土している。これに対して、カゴ類が出土した曽畑期文化(第11層)からは、流木も含めて、出土木すべてが広葉樹であった。また、貯蔵してあった果実も、ほとんどがイチイガシで、一部クヌギであった。このことは、広葉樹からなるカゴ材料は周囲の環境から入手しやすい樹木を加工したものであることが推定される。このような、本報告における結果は、照葉樹林帯における木材利用の1つの例を示したものとして興味深い。

カゴ材料として、使用されていた樹種のうち、つる類については、現在でもカゴ材料として使

2)

用されており、古代遺跡から出土したカゴ材料としても多く使用されている。本遺跡の場合、1本のつるを半分に裂いたものを使用している。つる類はこのように加工することが容易で、しかも均一に仕上げたものが得やすい状態にあったことが推定できる。

これに対して、つる類と比較して、加工が困難と思われる樹木の場合、多くのものが、きわめて薄い板目板として使用されていた。このうち、厚さが一定の断面を持つイヌビワの場合、現在でも、しばしば見られる樹種であるが、特に使用されているわけではない。しかし、万葉集の中にも「知智の実(=イヌビワ)の父の命(みこと)柞葉(ははそば)の母の命・・・・」と詠まれ、その存在が認められている。また、当九州地方では、神事に使用され、方言としてタブノキとして別しまれている。ただ、このような樹種がどのような理由でカゴ材料として使用されたか定かではない。しかしながら、イヌビワの場合、顕微鏡写真17~20からも明らかなように、細胞壁の薄い柔細胞群と細胞壁の厚い木繊維群が接線方向に交互に並んでいるため、繊維方向に裂くなどの方法で、薄い板目板を作製することが容易であったことが推定される。また、イヌビワは、落葉小径木であるため、採取するには都合のよい樹木であったと考えられる。さらに、イヌビワは、材質的にはち密なわりには比較的軽軟で、比較的取り扱いやすい材と思われる。ただ、耐朽・保存性が低い。しかしながら、この点については、例えば、製作されたカゴが、水中または乾燥した状態で使用されたとすれば、さして問題にならないであろう。

カゴ材料No.9,36のカシ類の場合、材質は硬く、加工しにくい。しかし、放射孔材であり、管 孔に沿った切削は比較的容易であるため、農工具等に使用された例はきわめて多い。したがって、本報告の場合も、まず、柾目板を作製し、これから薄い板目板を作製したことが考えられる。カシ類の場合、接線方向に細胞壁の薄い独立帯状柔組織が発達しており、これに沿った割裂が行われたことが考えられる。なお、カシ類については、出土した種子の中にも多量のイチイガシが見られ、花粉分析からもアカガシ亜属が高率に出現している。したがって、カシ類(この場合、イチイガシの可能性大)は利用するのに手頃な樹木であったことが推定できる。

これに対して、かなり硬い材料であるケヤキの場合、断面形状が三角形をしている。ケヤキは 環孔材であり、孔圏に沿った割裂加工は比較的簡単であったと思われる。ただ、ケヤキの場合、 材質が硬いため、厚さの一定した加工が困難であったことが考えられる。

以上、出土した木質材料について述べたが、いずれにしても、これだけ薄く木材を加工するためには、きわめて精度の高い加工法が要求される。この加工技術的な面については、いずれ多方面から検討する必要があろう。

## Ⅳ. おわりに

過去において、同定されたカゴ材料は、タケ類、ヒノキ、アケビ等わずかな種類にすぎなかった。しかしながら、本遺跡から出土したカゴ材料には、多くの広葉樹材が使用されていることが明らかとなった。本報告では、得られた結果に基づいて、カゴ材料として用いられた樹種、木取り

## 第Ⅳ章 分析・考察

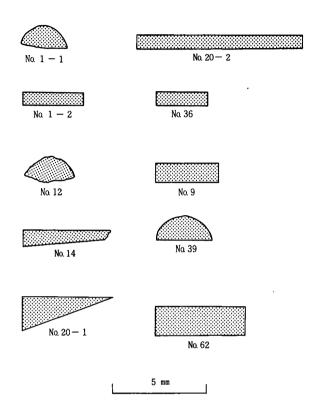
や加工技術について考察した。今後さらに検討すべき問題点は多いと思われる。しかし、カゴは古代より人間生活と密接な関係にあり、カゴ材料として多種の材料が使用されていたにちがいないとする、植松などの仮説がある程度実証されたと思う。しかも、高度な加工精度が要求されるカゴ材料の製作がどのようにしてなされたのかきわめて興味ある点である。

カゴ材料の種類や形状の分布を明らかにする中で、今後、異なった視点から、当時の生活様式の一端が明らかになることも期待できる。

## 参考文献

- 1) 大迫靖雄、第 I M 層出土の木片について、熊本県文化財調査報告書、第19集、『微雨・曽畑』、1976、 pp.35.36。
- 2) 島地 謙、伊東隆夫編、日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、1988。
- 3) 植松なおみ、古代遺跡出土カゴ類の基礎的研究、物質文化、35,20 (1980)。
- 4) 荒木ヨシ、縄文式時代の網代編み、物質文化、17, 29 (1971)。
- 5) 森川昌和、縄文のタイムカプセル、芸術新潮、51 (1987. 12)。
- 6) 西田正規、縄文時代の環境、『岩波講座 日本考古学 2 人間と環境』、岩波書店、111 (1985)。
- 7) 平井信二、木の事典、第13巻、1981。
- 8) 北村四郎補、岡本省吾、原色日本樹木図鑑、保育社、1959。

## 第1節 理化学分析



## 図1 材料鑑定を行ったカゴ材料の断面形状

## 写 真 説 明

| 1, 2:流木1 木口面   | 19:カゴ材料No14 木口面       | 32:カゴ材料Na9 木口面       |
|----------------|-----------------------|----------------------|
| 3, 4:流木1 柾目面   | 20:カゴ材料Na20-2 木口面     | 33, 34:カゴ材料Na.9 柾目面  |
| 5, 6:流木1 板目面   | 21, 22:カゴ材料Na62 柾目面   | 35:カゴ材料№9 板目面        |
| 7, 8:流木2 木口面   | 23, 24:カゴ材料No62 板目面   | 36, 37:カゴ材料Na1-1 木口面 |
| 9, 10:流木2 柾目面  | 25:カゴ材料No20-1 木口面     | 38:カゴ材料No.39 木口面     |
| 11, 12:流木2 板目面 | 26, 27:カゴ材料No20-1 柾目面 | 39:カゴ材料No.1-1 柾目面    |
| 13:流木3 木口面     | 28:カゴ材料Na20-1 板目面     | 40:カゴ材料No.1-2 木口面    |
| 14, 15:流木3 柾目面 | 29:カゴ材料Na36 木口面       | 41:カゴ材料No.1-2 柾目面    |
| 16:流木3 板目面     | 30:カゴ材料Na36 柾目面       |                      |

31:カゴ材料Na36 板目面

17, 18:カゴ材料Na62 木口面

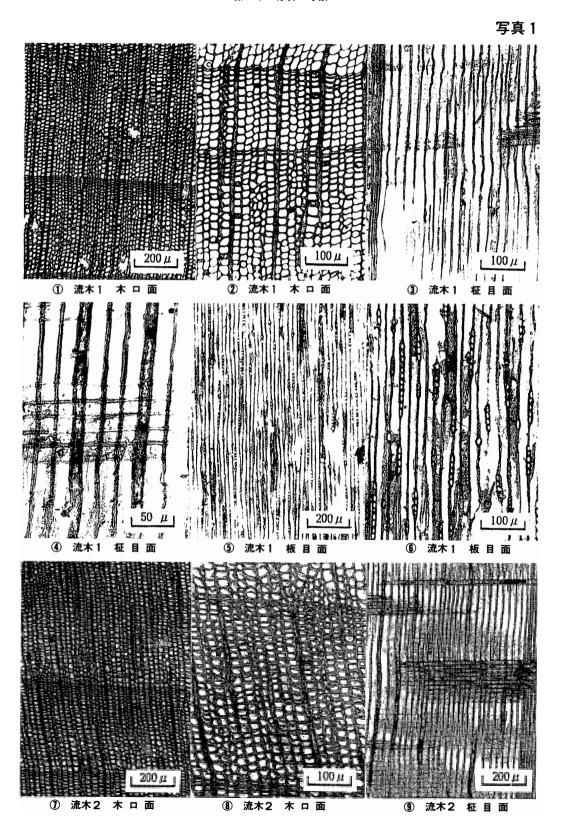
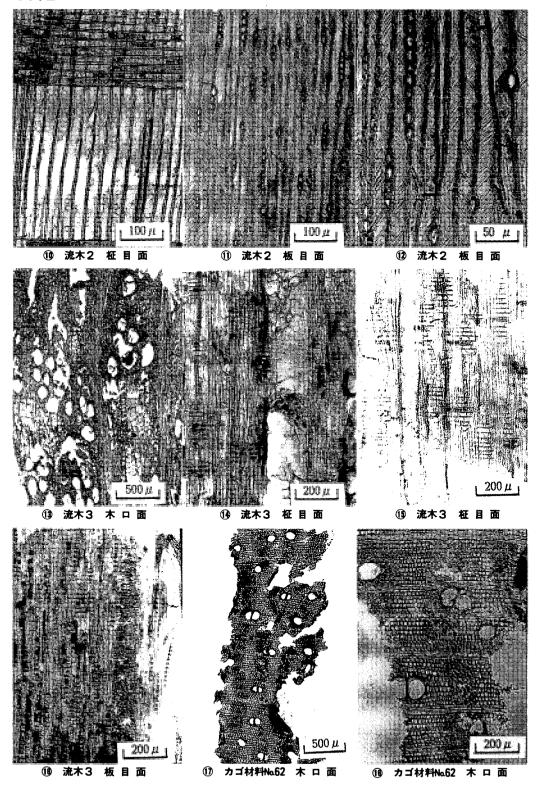
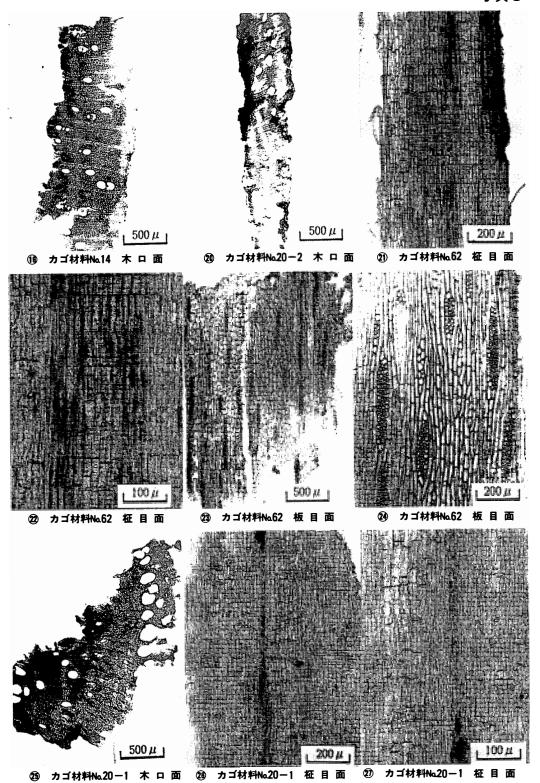


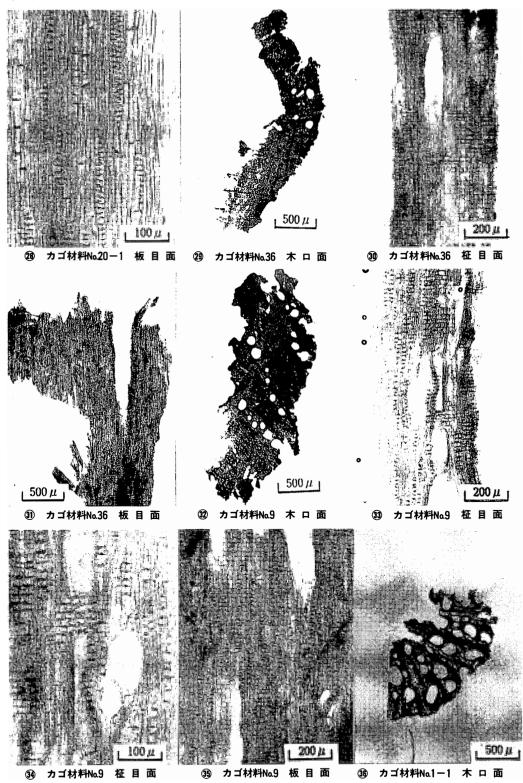
写真2

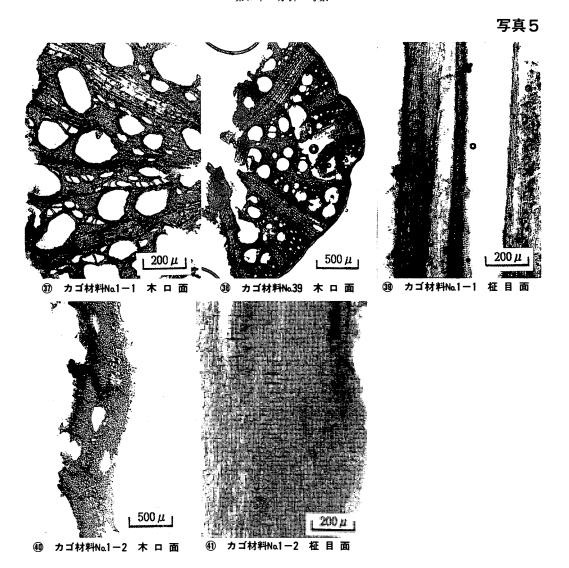


# 写真3



# 写真4





## 5. 曽畑貝塚低湿地遺跡出土の動物遺体

名古屋大学文学部助教授 渡 辺 誠

## 1. 動物遺体のリスト

1986~87年に熊本県教育庁文化課によって発掘された、宇土市曽畑貝塚低湿地出土の動物遺体 は、次の8種である。

- I. 無脊椎動物門 INVERTEBRATA
  - A. 斧足綱 GASTROPODA
    - 1. イタボガキ科マガキ

Grassostrea gogas Thumberg

- Ⅱ. 脊椎動物門 VERTEBRATA
  - A. 魚綱 PISCES

1. エイ類の1種

Rajida sp.

2. タイ科クロダイ

Acanthopagrus schlegelii Bleeker

- B. 鳥綱 AVES
  - 1. ガンカモ科の1種

Anatidae sp.

- C. 哺乳綱 MAMMALIA
  - 1. オナガザル科ニホンザル

Macaca fuscata BLYTH

2. イタチ科ニホンカワウソ? Lutra lutra whiteleyi GRAY

3. イノシシ科イノシシ

Sus scrofa leucomystax Temminck

4. シカ科ニホンジカ

Cervus nippon nippon Temminck

#### 2. 魚貝類について

漁撈活動を示す魚貝類遺体の出土はきわめて少なく、次の5点のみである。

- 1:マガキ 左殻1.A1区、第11層(曽畑期).
- 2:エイ類 尾棘1. B3区、第15層(轟期).
- 3: クロダイ 前上顎骨r1. B4区、第15層(轟期).
- 4: クロダイ 前上顎骨 l 1. A 3 区、第12層 (轟期).
- 5:タイ類 主鰓蓋骨 1 1. A 3 区、第12層(轟期).

かって清野謙次氏や江坂輝弥氏によって発掘調査された貝塚は、別に記されているように台地 上に形成されており、今回調査された低湿地地区とはかなりかけ離れている。魚貝類遺体の出土 がきわめて少ないのは、低湿地地区をそれらの主たる廃棄地区として意識していなかったことを 示しているのであろう。

第Ⅳ章 分析・考察

7 7 4 · m—∾# 蚕 \_ 裈 \_ 4 — 4 E \_ 2 — B 322452 -2 ÷ <del>+</del> 2231 1 31 3 88 2 က 7 ~ א עי -אי ע 2 16 2 -2 2 က ָא יִּר 2 7 12 10 က 2 רי ע א יי ת \_ 6 盘 ን › ተ <del>-</del> -8 7 B A 2 в — 4 1 ო — ო က 2 20 9 N — ک 2 10 δ2 8 8 ∢ – ⊸ 9 2 ~ 2 2 8 9 2 11 2 6 4 11 5 2 8 ကက 4 | -168 **小 結** 12 4 — 4 က က 3 4 -- 6 w — 4 8 9 з — в \_ \_ 2 -- B 靐 m ---ဗ 4 - N  $\binom{5}{2}$ 7 \_ 17 **⋖** — → 3 \_ 6 w — 4 2 2 — B 2 7 \_ 16 4 - 87 2-1-٧--- ٦ 2 83 概 B - 4 \_ 80 **a** -- **e**  $\binom{5}{2}$ \_ 00 B - 2 **m** — --က **⋖** --- **▼** 7 A — 2 10 < -- --2 福 Ħ <del>---</del> 概 92 ¥ 斯湖 即頭骨 頭頂骨 後頭骨 上頸骨 中節骨 推 権 推 權 田 福 照 霞

ノシシ部位別数量表

 $\prec$ 

1表

— 233 —

## 第1節 理化学分析

# 第2表 イノシシ上・下顎骨および遊離歯一覧表

歯式中 | は門歯、Cは犬歯、Pは小臼歯、Mは大臼歯、小文字はそれぞれの乳歯を示す。また( )を付したものは歯が製落していることを示す。?は歯槽部の欠失を示す。 ×は未期出を示す。第4、6妻も同じ。

|     |       |                 | 歯 式                      | M <sub>3</sub>    | Mz                                    | M,       | P. | Р.             | ГР,               | P,                | С      | Į,   | I,               | į,         | !.  | Į,          | ļ,  | С                    | P,       | Ρ,  | Р,             | P.                | Мі       | М,             | м,     |
|-----|-------|-----------------|--------------------------|-------------------|---------------------------------------|----------|----|----------------|-------------------|-------------------|--------|------|------------------|------------|-----|-------------|-----|----------------------|----------|-----|----------------|-------------------|----------|----------------|--------|
| 期   | 上頭骨   | 15              | В 3                      | (M <sub>3</sub> ) | M <sub>2</sub>                        |          |    | m,             | m;                | m,                | ¢      | i,   | i z              |            | 11  | i :         | i,  | c                    | m ,      | m ; | m,             | m,                |          |                |        |
|     |       | 1 4<br>"<br>1 3 | B 2<br>B 4<br>A 1<br>A 2 | М,                | M <sub>2</sub><br>M <sub>2</sub>      | M,<br>Mı | P. | ۲,             | Γ,                |                   |        |      |                  |            |     |             |     |                      |          | m,  | m <sub>3</sub> | (m <sub>4</sub> ) | M,       | M <sub>2</sub> | М      |
|     | 上頸遊離歯 | 1 4<br>"<br>1 3 | A 1                      |                   | M,                                    |          |    |                |                   |                   | \$ C   |      |                  |            |     |             |     |                      |          |     |                |                   | Mı       |                |        |
|     |       | 1 2<br>"        | A 2<br>A 3<br>A 4        |                   |                                       |          |    |                | Р,                |                   |        |      |                  |            |     |             |     |                      |          |     |                |                   |          | М,             | М      |
|     | 下頭骨   | 1 5             | A 2<br>A 3<br>B 3        | M,                | M <sub>2</sub>                        | M,       | P. | P,             | (P <sub>2</sub> ) | ×                 | (C)    |      | ( I <sub>2</sub> | I,         | I t | I 2)<br>I 2 | ?   | C f<br>C f<br>× f    | ×        | Р,  | P,             | P,                | M,       | M <sub>2</sub> | м      |
|     |       | "<br>"<br>1 4   | "<br>B 4<br>A 1          | M,                | ?<br>M <sub>2</sub><br>M <sub>2</sub> | M,       | m, | m <sub>3</sub> | m <sub>2</sub>    | ×                 | \$×    | ×    | ×                | ×          | ×   | ×           | ×   | × \$                 | ?        | P : | m,             | m <sub>4</sub>    | M,       | ?              |        |
|     |       | "               | "                        |                   |                                       |          | P. | Ρ,             | Ρ,                | Pı                | \$(C   | )    |                  |            |     |             |     |                      |          |     |                |                   | M,       | M <sub>2</sub> | М      |
|     |       | "               | A 2<br>A 3<br>B 4        | М,                | (M <sub>2</sub> )                     | M,       | P، | Р,             | (P,               | P,                | С      | 1 3) | 1 2              | Ι,         | 1,  |             |     |                      |          |     |                |                   | M,       | M <sub>2</sub> | M      |
|     |       | 1 3<br>"        | A 1<br>A 2<br>"          |                   | M <sub>2</sub>                        | М        | Р, | Pı             | Ρ,                | ?                 | ?      | ?    | I 2<br>(12       | I ;<br>I i | I : | l 2<br>l 2) | ?   | ?                    | ?        | ?   | Ρ,             | Ρ,                |          | 1413           |        |
|     | 下頸遊離歯 | 1 5<br>"        | A 2<br>B 1<br>B 3        |                   |                                       |          |    |                |                   |                   | \$ C   |      |                  |            |     | 1 :         |     |                      |          |     |                |                   |          |                |        |
|     |       | 1 4<br>"        | B 4<br>A 1               | Мз                | M <sub>2</sub>                        |          |    |                |                   |                   |        |      | 1 2              |            |     |             |     | c t                  |          |     |                |                   |          |                |        |
|     |       | "               | "<br>"<br>A 2            |                   |                                       |          |    |                |                   |                   | 1°C    |      |                  |            |     |             |     | C Î                  |          |     |                | Р,                |          |                |        |
|     |       | "               | "                        |                   |                                       |          |    |                |                   |                   | 1 C    |      |                  |            |     |             |     |                      |          |     |                |                   |          |                |        |
|     |       | "               | "                        |                   |                                       | .,       |    |                |                   |                   |        |      |                  |            | I,  |             |     | C î                  |          |     |                |                   |          |                |        |
|     |       | 1 3             | A 1<br>"<br>"<br>A 2     |                   |                                       | M,       |    |                |                   |                   |        |      | 1,               | Ι,         |     |             |     | C î                  |          |     |                |                   |          |                |        |
|     |       | "               | B 1<br>B 3<br>B 4        | М,                |                                       |          |    |                |                   |                   | \$ C   |      |                  |            |     |             |     |                      |          |     |                |                   | М        |                |        |
|     |       | "               | " A 4                    |                   |                                       |          |    |                |                   |                   | \$ C   |      | l ;<br>l ;       |            | Ι.  |             |     |                      |          |     |                |                   |          |                |        |
| 曾畑期 | 上預遊離歯 | 11              | B 1                      | М,                |                                       |          |    |                |                   |                   |        |      | • • •            |            |     |             |     |                      |          |     |                |                   |          | M <sub>2</sub> |        |
|     | 下顎骨   | 1 1             | A 2<br>A 2               | M,                | M <sub>2</sub>                        | M,       |    | P ,            | (P <sub>2</sub> ) | ?                 | (\$C   |      | I 2<br>I 2       |            |     | l ,         | (1, | (C<br>C <del>f</del> | )<br>)P, | Р,  | Р,             | Р,                | М        | M <sub>2</sub> |        |
|     |       | "<br>"<br>" ''  | A B 2<br>"<br>2<br>1 2   |                   | M <sub>2</sub>                        | M,       | Р, | Pı             | р.                | (P.)              | (‡ C   | L,   | I 2)             | ?<br>I.    | ?   | (I;         | I,  | c t                  | )P,      | P.  | P,             | P.                | M,       | M <sub>2</sub> |        |
|     |       | ",              | 1 3                      | M <sub>3</sub>    | M <sub>2</sub>                        | M,       |    |                |                   |                   |        |      | 12               |            |     |             |     |                      |          |     |                |                   |          | M <sub>2</sub> | N<br>N |
|     | 下頸遊離歯 | "               | A 2                      |                   |                                       |          |    |                |                   |                   |        |      |                  |            | 1.  | 1,          |     |                      |          |     |                |                   |          |                |        |
|     |       | "               | B 2                      |                   |                                       |          |    |                |                   |                   |        |      |                  | 1,         | 1;  | Ι,          |     |                      |          |     |                |                   |          |                |        |
|     |       | " "             | B 3                      |                   |                                       |          |    |                |                   |                   | \$ C   |      |                  | Ι,         | 1,  |             |     |                      |          |     |                |                   |          |                |        |
|     |       | "               | A B 2                    | M <sub>3</sub>    | Ma                                    |          |    | Ρ,             |                   |                   |        |      |                  |            |     |             |     |                      |          |     |                |                   |          |                |        |
|     |       | ",              | "                        |                   |                                       |          |    |                |                   |                   |        |      | Ι,               |            |     | I 2<br>I 2  |     |                      |          |     |                |                   |          |                |        |
|     |       | "<br>ピット        | 8<br>2 1                 |                   |                                       |          |    |                |                   |                   | \$ C   |      |                  | Ι,         |     |             |     |                      |          |     |                |                   |          |                |        |
| 阿高期 | 下頸遊離歯 | 10              | A B 2 1                  | t                 |                                       |          |    | Ρ,             | Ρ,                | (P <sub>1</sub> ? | 1) 2 C | ?    |                  | 1,1        | ?   | ?           | ?   | C \$                 | ( P      | Р:  | ) P:           | P.                | M,<br>M, | M <sub>2</sub> |        |

第Ⅳ章 分析・考察

# 第3表 シカ部位別数重表

|   |   | _ | 時  | 期      | ă             | 前 |             | -                  |                 |       |             | ħ                    |                 |             |       |             | 期             |                 |       |       |       |        |            | 曾           |                  | Ħ               | 8             |              | 期            |        |        |
|---|---|---|----|--------|---------------|---|-------------|--------------------|-----------------|-------|-------------|----------------------|-----------------|-------------|-------|-------------|---------------|-----------------|-------|-------|-------|--------|------------|-------------|------------------|-----------------|---------------|--------------|--------------|--------|--------|
|   | / |   | 題  | 位      | 16            | 小 |             | 15                 |                 | _     | 1           | 4                    |                 |             |       | 13          |               |                 |       | 12    |       | 小      |            | 1           | 1                |                 | r,            | ۲.           | ť.           | 小      |        |
|   | 部 |   | 地位 | K      | A<br> <br> 11 | 計 | A<br> <br>3 | B<br> <br> <br>  3 | B<br> <br> <br> | A   1 | B<br> <br>1 | B<br> <br> <br> <br> | B<br> <br> <br> | A<br> <br>1 | A   2 | В<br> <br>1 | B<br> <br>  3 | B<br> <br> <br> | A   2 | A   3 | A   4 | 計      | A<br> <br> | A<br>1<br>3 | B<br> <br> <br>1 | B<br> <br> <br> | بر<br>1<br>21 | ۳<br>۱<br>43 | ۳<br>۱<br>46 | 計      | 計      |
| 侧 | 頭 | 骨 |    | e e    |               | 0 |             |                    |                 |       |             |                      |                 |             |       |             |               |                 |       |       |       | 0      |            | 1           |                  |                 |               |              |              | 1      | 1      |
| Ł | 顎 | 遊 | 離  | 歯      |               | 0 |             |                    |                 | 1     |             |                      |                 |             |       | 1           |               |                 |       |       |       | 2      |            |             |                  |                 |               |              |              | 0      | 2      |
| 下 | 顎 | 骨 | Τ  | l<br>Y |               | 0 | 1           |                    |                 |       |             |                      | 1               | 1           |       |             |               | 1               |       |       |       | 2 2    |            |             |                  |                 |               |              |              | 0      | 2 2    |
| 下 | 顎 | 遊 | 離  | 歯      |               | 0 |             |                    |                 | 2     |             |                      |                 |             |       |             |               |                 |       |       |       | 2      |            |             |                  |                 |               |              |              | 0      | 2      |
| 肩 | 胛 | 骨 |    | l<br>Y | 1             | 0 | 1           |                    |                 |       |             |                      | 1               | 2           |       |             |               |                 |       |       |       | 3      |            |             |                  |                 |               |              |              | 0<br>0 | 3 2    |
| Ł | 腕 | 骨 |    | l<br>Y |               | 0 |             | 1                  |                 |       | 1           |                      | 1               |             | 1     |             | 1             |                 |       |       |       | 1 4    |            |             |                  |                 |               |              |              | 0      | 1 4    |
| 橈 |   | 骨 |    | γ      |               | 0 |             |                    |                 |       |             |                      |                 |             |       |             |               | 1               |       |       |       | 1      |            | 1           |                  |                 |               |              |              | 1      | 2      |
| 尺 |   | 骨 |    | γ      |               | 0 |             |                    |                 |       |             |                      |                 | 1           |       |             |               |                 |       |       |       | 1      |            |             |                  |                 |               |              |              | 0      | 1      |
| 中 | 手 | 骨 |    | l      |               | 0 |             |                    |                 |       |             |                      |                 |             |       |             |               |                 |       | 1     |       | 1      |            |             |                  |                 |               |              |              | 0      | 1      |
| 寛 |   | 骨 |    | l<br>Y |               | 0 |             |                    | 1               |       |             |                      |                 | 1           |       | 1           |               |                 |       |       |       | 1 2    |            |             |                  |                 |               |              |              | 0      | 1 2    |
| * | 腿 | 骨 |    | l<br>Y |               | 0 |             |                    |                 |       |             | 1                    | 1               |             |       |             |               |                 |       |       |       | 0      | 1          |             |                  | 1               |               |              | 1            | 1 2    | 3 2    |
| 脛 |   | 骨 |    | l<br>Y | 1             | 0 |             |                    |                 |       |             | :                    | 1               | 2           |       |             | 1             |                 |       |       | 1     | 1      |            | 1           |                  |                 |               |              |              | 0      | 2<br>5 |
| 距 |   | 骨 |    | γ      |               | 0 |             |                    |                 |       |             |                      |                 | 1           |       |             |               |                 |       |       |       | 1      |            |             |                  |                 |               |              |              | 0      | 1      |
| 踵 |   | 骨 |    | γ      |               | 0 |             |                    |                 |       |             |                      |                 | 1           |       |             |               |                 |       |       |       | 1      |            |             |                  |                 |               |              |              | 0      | 1      |
| 中 | 足 | 骨 |    | l<br>Y |               | 0 |             | L.                 |                 |       |             |                      |                 | 1           |       |             |               |                 | 1     |       |       | 0<br>2 |            |             | 1                |                 |               | 1            |              | 1      | 3      |
| 基 | 節 | 骨 |    |        |               | 0 |             |                    |                 |       |             |                      |                 |             |       |             |               |                 |       |       |       | 0      |            | 1           |                  |                 |               |              |              | 1      | 1      |
| 中 | 節 | 骨 |    | _      |               | 0 |             |                    |                 |       |             |                      |                 |             |       |             |               |                 |       |       |       | 0      |            |             |                  |                 | 1             |              |              | 1      | 1      |
| 軸 |   |   | _  | 椎      |               | 0 |             |                    |                 | 1     |             |                      | 1               |             |       |             |               |                 |       |       |       | 2      |            |             |                  |                 |               |              |              | 0      | 2      |
| 腰 |   |   |    | 椎      |               | 0 |             |                    |                 | 2     |             |                      |                 |             |       |             |               |                 |       | 1     |       | 3      |            |             |                  |                 |               |              |              | 0      | 3      |
|   |   | 計 |    |        | 2             | 2 | 2           | 1                  | 1               | 6     | 1           | 1                    | 6               | 10          | 1     | 2           | 2             | 2               | 1     | 2     | 1     | 39     | 1          | 4           | 1                | 1               | 1             | 1            | 1            | 10     | 51     |

# 第4表 シカ上下顎骨および遊離歯一覧表

|   |   |               |                          | 歯式                      | γ  | e                            |
|---|---|---------------|--------------------------|-------------------------|--|------------------------------|
| 時 | 期 | 上・下           | 層位                       | 地区                      | M <sub>3</sub> M <sub>2</sub> M <sub>1</sub> P <sub>3</sub> P <sub>2</sub> P <sub>1</sub> C I <sub>3</sub> I <sub>2</sub> I <sub>1</sub>   | I, I, I, C P, P, P, M, M, M, |
| 8 | 期 | 下 顎 骨 " " " " | 1 5<br>1 4<br>1 3<br>1 3 | A - 3 B - 4 B - 4 A - 1 | M <sub>3</sub> M <sub>2</sub> M <sub>1</sub> P <sub>3</sub> M <sub>3</sub> M <sub>2</sub> M <sub>1</sub> P <sub>3</sub> P <sub>2</sub> P <sub>1</sub> M <sub>3</sub> M <sub>2</sub> M <sub>1</sub> M <sub>3</sub> M <sub>2</sub> M <sub>1</sub> P <sub>3</sub> | P, M, M, M,                  |
|   |   | 上顎遊離歯         | 1 4                      | A - 1<br>B - 1          | M <sub>2</sub>   | М,                           |
|   |   | 下顎遊離歯         | 1 4                      | A - 1<br>A - 1          | M <sub>2</sub>   | Мз                           |

#### 第1節 理化学分析

清野謙次氏(1969)はハマグリ・アカガイ、江坂輝彌氏(1959)はハマグリ・カガミガイ・カキ・巻貝・クロダイ・ボラ・アジ・イワシ・サバ・メバルなどの出土を記している。いずれも報告書は未刊行であるが、内湾型の漁撈活動を推定することができ、今回発掘の資料もそれらと特に異なることは認められない。

### 3. 鳥類について

次の1点が出土しているにすぎない。

1. ガンカモ科の1種 鳥口骨r1. A1区、第14層(轟期).

#### 4. 哺乳類について

4種の哺乳類遺体の検出部位と数量は、第 $1\sim6$ 表及び図版 $1\sim3$ に示すとおりである。それぞれの最少個体数を時期別に記すと、第7表のとおりである。

|                 |              | 時期    |        |   |    | 1 | <b>a</b>       |   | Į | 月 |    |                |    |
|-----------------|--------------|-------|--------|---|----|---|----------------|---|---|---|----|----------------|----|
|                 |              |       |        |   | 15 |   |                | 1 | 4 |   | 13 | als.           | 計  |
|                 |              | 地区    |        | Α | Α  | В | Α              | Α | В |   | Α  | 小計             | ĒΙ |
| 時期              | 種名           | 部位    |        | 3 | 4  | 4 | 2              | 3 | 1 |   | 1  | # I            |    |
| <b>H</b> r.     |              | 下 顎 骨 | l<br>r |   |    |   | $\binom{1}{1}$ |   |   |   |    | $\binom{1}{1}$ |    |
| 期               | ニホンザル        | 上腕骨   | l<br>r |   |    | 1 |                | 1 |   |   | 1  | 2              |    |
| <del>//</del> / |              | 大 腿 骨 | l<br>r | 1 |    | 1 |                |   |   | 1 |    | 1 2            |    |
|                 |              | 脛 骨   | r      |   |    |   |                |   | 1 |   |    | 1              | 9  |
|                 | ニホン<br>カワウソ? | 下顎骨   | r      |   | 1  |   |                |   |   |   |    | 1              | 1  |
|                 |              | 計     |        | 1 | 1  | 2 | 2              | 1 | 1 | 1 | 1  | 10             | 10 |

第5表 小型哺乳類部位別数量表

哺乳類の最少個体数が24であるが、その約7割をイノシシが占めており、きわめて特徴的である。そして各時期にわたって出土するのもイノシシのみである。他の2割を占めるのはシカであるが、これは轟期にしかみられない。小型哺乳類であるニホンザルとニホンカワウソ?の2種も、轟期にのみみられる。

| 種 名                | 時期 | 層位 | 地区           | 歯 式  |
|--------------------|----|----|--------------|--|
| ニホンザル<br>ニホンカワウソ ? |    |    | A 2区<br>A 4区 | $M_3M_2M_1P_1(C \sim C \updownarrow)P_1 P_2P_3 M_1M_2M_3$<br>$(C P_1)P_2P_3(M_1M_2)$ |

第6表 小型哺乳類下顎骨一覧表

#### 第Ⅳ章 分析・考察

種類も個体数も少ない上に、4種がすべて存在するのは轟期に限られ、曽畑期にはイノシシしかみられなくなるのも特徴的である。阿高期も同様で、さらに個体数は減少している。イノシシの個体数は轟期も曽畑期も8で同じであるが、他の部位を含めた頻度数でみてみると、轟期168、曽畑期89と半数に減少し、阿高期ではさらにその10分の1以下になり、轟期にはそれに他の3種の数も加わるのであり、轟期に動物遺体廃棄のピークがあったことがわかる。

| <b>時期</b>  |   | Ī | 重   | 期     |   | 曽 | 火 | H | 期     |   |   | i   | t     |
|------------|---|---|-----|-------|---|---|---|---|-------|---|---|-----|-------|
| 種名数量       | 個 | 体 | 数   | %     | 個 | 体 | 数 | • | %     | 個 | 体 | 数   | %     |
| ニホンザル      |   |   | 2   | 12.5  |   |   | 0 |   | 0     |   |   | 2   | 8.3   |
| ニ ホ ン カワウソ |   |   | 1   | 6.3   |   |   | 0 |   | 0     |   |   | 1   | 4.2   |
| ニホンジカ      |   |   | 5   | 31.2  |   |   | 0 |   | 0     |   |   | 5   | 20.8  |
| イノシシ       |   |   | 8   | 50.0  |   |   | 8 |   | 100.0 |   |   | 16  | 66.7  |
| 計          |   |   | 1 6 | 100.0 |   |   | 8 |   | 100.0 |   | 2 | 2 4 | 100.0 |

第7表 哺乳類最小個体数

これらのイノシシやシカは、縄文時代遺跡ではもっとも普遍的な種類であり、きわめて重要な 狩猟対象動物であった。それらは肉ばかりでなく、毛皮も利用し、骨も骨角器に盛んに利用され ていたのである。今回の調査でもB3区第13層(轟期)より、加工痕のある角座部分左側1点が 出土している。(第3章第1節第39図参照)

これらは若干の貯蔵穴を除き、集中的に出土することはなく、その数の少ないこともすでに記したとおりである。このことは、低湿地地区が廃棄地区として意識されていたとしても、動物の霊の送り場として特に強くは意識されていなかったことを示していると考えられる。そして曽畑期以降の動物遺体の減少は、ドングリ類の貯蔵という新たな低湿地の利用が始まり、一段と廃棄地区としての意識が後退したためとみることができる。

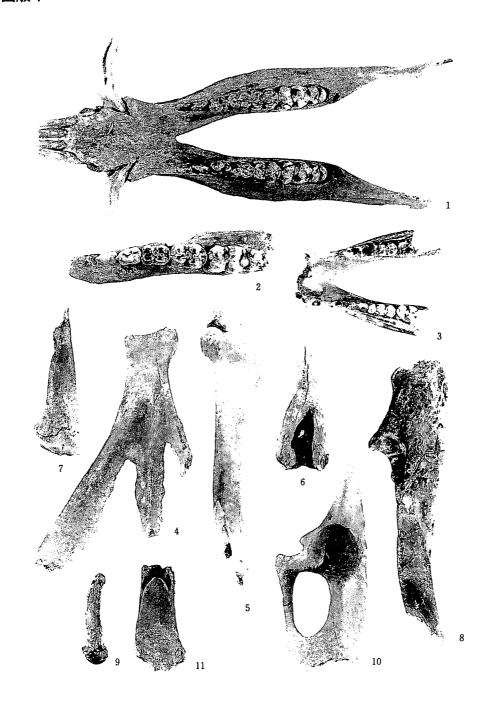
#### 5. おわりに

以上に記したように、動物遺体もまた曽畑貝塚全体の空間利用体系のなかでの位置づけが重要である。本稿ではその検討を十分に行うことができなかったが、従来の調査資料をも含めて、今後の検討課題としておきたい。

#### 謝辞

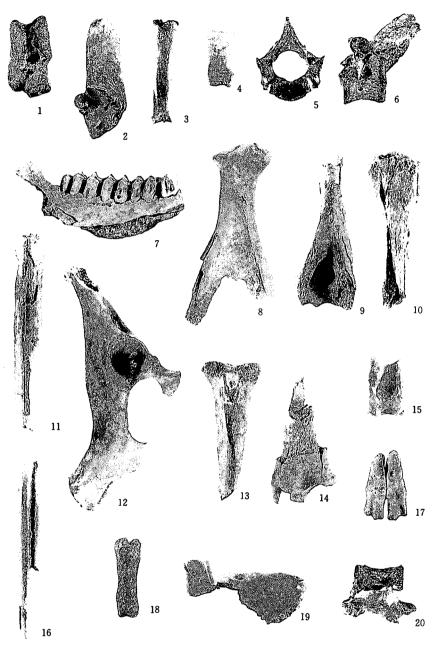
なお本稿をまとめるに際して、名古屋大学文学研究科修士過程学生伊藤和彦、同文学部学生鈴木 元の両君には、資料整理に多大な御協力を仰いだ。また京都大学霊長類研究所の毛利俊雄先生にも御教導を仰いだ。明記して深謝の意を表する次第である。

# 図版 1



動物遺体1 イノシシ (縮尺1/2)

1: 下顎骨, 2: 同 r , 3: 同若小個体, 4: 肩胛骨  $\ell$  , 5: 上腕骨 r , 6: 同  $\ell$  遠位端, 7: 桡骨 r , 8: 尺骨  $\ell$  , 9: 第5手根骨  $\ell$  , 10: 寬骨  $\ell$  , 11 脛骨  $\ell$ 



動物遺体 2 イノシシ(1~7) およびシカ(8~20) 縮尺 1/2.

1:イノシシ距骨 r, 2:同踵骨 l,, 3:同第3足根骨 l, 4:同基節骨,

5:同頸椎, 6:同胸椎, 7:シカ下顎骨 r, 8:同肩胛 l, 9:同上腕骨 r,

10: 同橈骨 r, 11: 同中手骨 l, 12: 同寛骨 r, 13: 同脛骨 r, 近位端, 14:

同 r 遠位端, 15:同距骨 r, 16:同中足骨 r, 17:同 r 遠位端, 18:同基節骨,

19: 同軸椎, 20: 同腰椎.

# 図版3



動物遺体3 (縮尺実大).

1:ニホンザル下顎骨, 2:同大腿骨ℓ, 3:同脛骨 r, 4:同上腕骨ℓ,

5:ニホンカワウソ?下顎骨ℓ.

# 第Ⅳ章 分析・考察

# 引用文献目録

江坂輝彌, 1959: おしゃれだった曽畑人-貝塚発掘の資料に見る。熊本日々新聞. 11月6日.

清野謙次,1969:日本貝塚の研究。東京・岩波書店。

# 6. 熊本県曽畑貝塚低湿地遺跡出土の縄文時代人骨

#### はじめに

熊本県宇土市花園町に所在する曽畑貝塚低湿地の発掘調査が1986年(昭和61年)の9月から翌87年6月まで行なわれ、人骨が出土した。曽畑貝塚は熊本県屈指の貝塚で、縄文時代前期の標式遺跡としてあまりにも有名である。清野謙次は1922年(大正11年)にこの曽畑貝塚で人骨を採集し、翌1923年(大正12年)に発掘調査を行ない、合計6体の人骨を発掘している。

今回の調査で出土した人骨は3体で、しかもその残存量は少なく、曽畑縄文前期人の特徴を全面的に明らかにすることはできなかったが、縄文時代前期の人骨は九州ではもとより全国的にもその数は少なく、資料としては貴重であり、また、残存状態は悪かったとはいえ、その特徴の一端を知ることは可能であった。その結果を報告したい。

## 資 料

今回の発掘調査で出土した人骨は3体分で、いずれも不完全な人骨で、この3体の人骨はすべて女性骨である。なお、各人骨の性別・年令は表1のとおりで、各人骨の残存状態は図2に示した。

表 1 人骨一覧 (Table 1. List of skeletons)

| 人骨番号       | 性別 年令 | 出土地点 | 備考        |
|------------|-------|------|-----------|
| 1号人骨       | 女性 壮年 | A-1⊠ | 前頭骨のみ     |
| 2号人骨       | 女性 不明 | A-3⊠ | 左側大腿骨体    |
| 3 号人骨<br>- | 女性 不明 | B-4⊠ | 左側大腿骨体遠位部 |

この3体の人骨は、別稿で述べられているように、考古学的所見より縄文時代前期に属する人 骨群である。

計測方法は、Martin-Saller (1957) によった。

#### \* Takayuki MATSUSHITA, Tetsuaki WAKEBE

Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University

[長崎大学医学部解剖学第二教室(主任:内藤芳篤教授)]

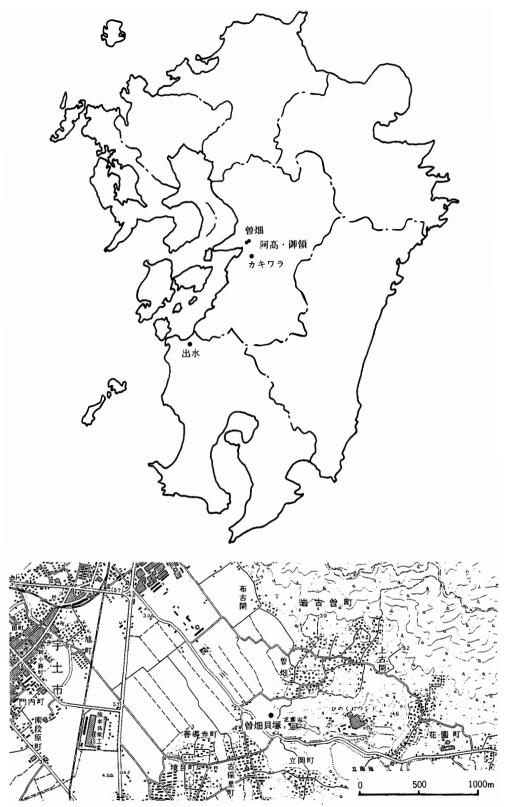


図1. 遺跡の位置(Fig.1.Location of Sobata Shell-mounds,Kumamoto Prefecture)

#### 第1節 理化学分析

今回は比較資料として、阿髙縄文人(大森、1960)、御領縄文人(金関・他、1955)、出水縄文人(大森・他、1960)、カキワラ縄文人(松下・他、1986)、津雲縄文人(清野・他、1926、1928)、大友弥生人(松下、1981)を用いた。

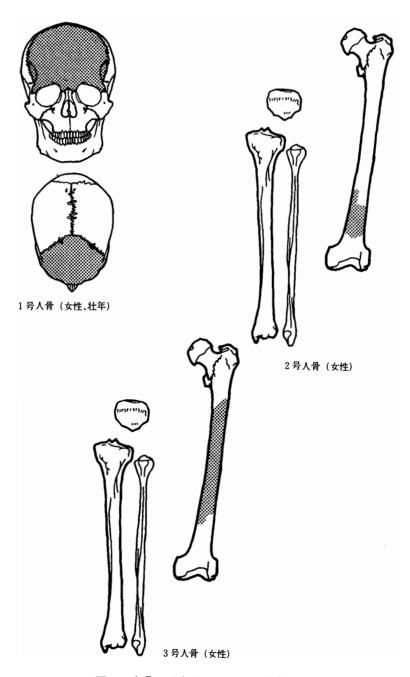
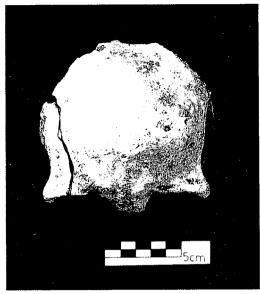


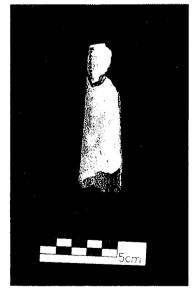
図2 人骨の残存部、アミカケ部分

(  ${\bf Fig.2.Regions}$  of preservation of the skeleton.Shaded area sare preserved .)

# 第Ⅳ章 分析・考察



1号人骨 (女性、壮年)·前頭骨 (Frontale bone of the Sobata No. 1)



3号人骨(女性) (Left femur of the Sobata No.3)



2号人骨 (女性) (Left femur of the Sobata No.2)

## 所 見

各人骨の残存部は図2に示すとおりである。また、各骨の計測値は文末に一括して掲げた。 1号人骨(女性、壮年)

#### 1. 頭蓋

前頭骨が残存していた。骨壁は厚く、ブレグマ付近の厚さは7 mmである。眉間は膨隆しているが、眉上弓にはほとんど隆起は認められないので、前頭鱗から眼窩部にかけてややくぼんでいる。前頭結節の発達は良好である。

縫合は冠状縫合が観察できたが、おそらくこの縫合は開離していたものと思われる。

#### 2. 性別・年令

性別は、眉上弓の隆起がほとんど認められず、前頭結節の発達が良好であることから、女性と 推定した。年令は、冠状縫合がまだ開離していたと考えられることから壮年と推定した。

#### 2号人骨(女性、年令不明)

左側大腿骨体が残存していた。保存状態はあまり良くなく、緻密質は剥落している部分が多い。 径は小さく、骨体両側面の発達もそれほど良好なものでない。

計測値は、骨体中央矢状経が25mm (左)、横径は24mm (左) で、骨体中央断面示数は104.17(左) となり、粗線や骨体両側面の後方への発達はそれほど良くない。

性別は、大腿骨体の諸径が小さいことから、女性と推定した。年令は不明である。

#### 3号人骨(女性、年令不明)

左側大腿骨体の遠位部が残存していたにすぎない。骨壁はあまり厚くない。また、径も大きくない。

性別は、大腿骨の径が大きくないことから、女性と推定した。また、年令は不明である。

#### 考 察

女性の頭蓋と大腿骨に関して、九州の縄文人および津雲縄文人との比較を行なってみた。

#### 1. 頭蓋

前頭骨が残存していたにすぎないので、表2に示しているように比較できた計測項目は著しく制限された。最小前頭幅は95mmで、御領縄文人、阿高縄文人および津雲縄文人よりも大きく、出水縄文人よりは小さい。また、正中矢状前頭弧長と弦長はともに比較に用いた阿高縄文人、御領縄文人および出水縄文人のいずれよりも小さく、比較的津雲縄文人に近い。すなわち、本前頭骨は他の縄文人に比較して、長さが短い傾向にある。

表 2 頭蓋計測値(女性、mm) (Table 2.Comparison of female skull mesurements and indices)

|       |          |   | 曽 畑<br>縄文前期人<br>(松下・他) |   | 阿 高<br>縄文中期人<br>(大森) |    | 領<br>後期人<br><b>]</b> ・他) |   | 水<br>中期人<br>系・他) | 津 雲<br>縄文後期人<br>(清野・他) |       |  |
|-------|----------|---|------------------------|---|----------------------|----|--------------------------|---|------------------|------------------------|-------|--|
|       |          | n | M                      | n | М                    | n  | M                        | n | M                | n                      | M     |  |
| 9.    | 最小前頭幅    | 1 | 95                     | 6 | 93. 17               | 1  | 91.5                     | 2 | 98. 50           | 15                     | 93.8  |  |
| 26.   | 正中矢状前頭弧長 | 1 | 120                    | 7 | 127.86               | 1  | 122.5                    | 1 | 125              | 14                     | 119.5 |  |
| 29.   | 正中矢状前頭弦長 | 1 | 106                    | 7 | 111.73               | 1. | 110.0                    | 2 | 109.50           | 15                     | 105.1 |  |
| 29/26 | 矢状前頭示数   | 1 | 88.33                  | 7 | 88.45                | 1  | 89.8                     | 1 | 85.60            | 14                     | 87.9  |  |
| 43.   | 上顏幅      | 1 | 106                    |   |                      |    | _                        |   | _                |                        | _     |  |

#### 2. 大腿骨

女性の大腿骨体中央部の計測値を他の地域の縄文人と比較してみた。表3のとおり、骨体中央 矢状径はカキワラ縄文人よりは大きいが、その他の資料よりは小さい。骨体中央横径に関しては、他の縄文人とはあまり大差ない。骨体中央周は79㎜で、これもカキワラ縄文人よりはかなり大きいが、他の比較資料とは大きな差は認められない。すなわち、縄文人としては平均的な大腿骨と 考えられ、表3をみる限りでは、カキワラ縄文人の大腿骨が著しく小さいことが際立っている。また、骨体中央断面示数は104.17で、この示数値はカキワラ縄文人よりは大きく、阿高縄文人、御領縄文人および出水縄文人よりも小さく、津雲縄文人および大友弥生人に近い。すなわち、骨体両側面の後方への発達は阿高縄文人、御領縄文人および出水縄文人ほど強いものではなく、その程度は大友弥生人程度である。各計測値と示数値は表3で比較した資料のなかでは津雲縄文人の平均値に最も近いようであるが、最近の縄文人の研究では、縄文後期人にも地域差が存在し、津雲縄文人はけっして縄文人の標準値ではなく、やや体格が小さい縄文後期人であることがわかってきている。本縄文前期人の大腿骨は津雲縄文後期人に近く、径が小さい大腿骨であった。

表3 大腿骨計測値(女性、㎜)( Table 3.Measurements and indices of female femora )

|             |          |    | 曽 畑    |    | 可高     |    | 卸領     |    | キワラ    |    | 出水     |    | 友      |    | 雲     |
|-------------|----------|----|--------|----|--------|----|--------|----|--------|----|--------|----|--------|----|-------|
|             |          | 縄  | 文前期人   | 縄  | 文中期人   | 縄フ | 文後期人   | 縄  | 文後期人   | 縄  | 文中期人   | 劲  | 5生人    | 縄ス | 7後期人  |
|             |          | (松 | (下・他)  | (  | (大森)   | (金 | 関・他)   | (松 | :下・他)  | () | た森・他)  | (1 | 松下)    | (清 | 野・他)  |
|             |          |    | 左      |    | 左      |    | 右      |    | 右      |    | 右      |    | 右      |    | 右     |
|             |          | n  | M      | n  | М      | n  | M      | n  | М      | n  | M      | n  | М      | n  | М     |
| 6.          | 骨体中央矢状径  | 1  | 25     | 14 | 26.64  | 1  | 26. 5  | 3  | 22. 33 | 2  | 28.00  | 30 | 26.00  | 26 | 25.0  |
| 7.          | 骨体中央横径   | 1  | 24     | 14 | 25.00  | 1  | 24. 5  | 3  | 23.00  | 2  | 24.00  | 30 | 25.03  | 26 | 24.0  |
| 8.          | 骨体中央周    | 1  | 79     | 14 | 80.50  | 1  | 80.0   | 3  | 73. 00 | 1  | 81     | 28 | 80.32  | 26 | 77. 4 |
| <b>5/</b> 7 | 骨体中央断面示数 | 1  | 104.17 | 14 | 106.61 | 1  | 108. 2 | 3  | 97.09  | 2  | 116.67 | 30 | 104.05 | 26 | 103.9 |

## 要 約

熊本県宇土市花園町ある曽畑貝塚低湿地の発掘調査で縄文前期人骨が出土した。縄文時代前期の人骨は全国的にも出土数が少なく、資料としてはきわめて貴重であるが、残存量が少なく、その特徴をあますところなく明らかにすることはできなかった。しかし、性別やその特徴の一端を知ることができた。その結果は次のとおりである。

- 1. 今回出土した人骨は3体分の人骨であるが、いずれも人体の一部のみである。
- 2. 3体とも女性人骨であった。
- 3. この3体の人骨はいずれも縄文時代前期に属する人骨である。
- 4. 残存していたのは1体分の前頭骨と2体分の大腿骨であった。前頭骨は長さが短かく、大腿骨は径が小さく、柱状性も認められず、計測値や示数値は津雲縄文人の平均値に最も近い大腿骨であった。
- 5. 九州では縄文時代前期人骨の出土例はきわめて少なく、九州人の起源に関する研究は遅れている。本例は残存量は少なかったが、今後の縄文人の研究にとって貴重な資料となるものである。

《擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた熊本県教育庁文化課の諸先生方に 感謝致します。》

表 4 頭蓋計測値(mm)(Skull)

|       |          | 曽畑<br>1 号人骨<br>女性 |
|-------|----------|-------------------|
| 9.    | 最小前頭幅    | 95                |
| 26.   | 正中矢状前頭弧長 | 120               |
| 29.   | 正中矢状前頭弦長 | 106               |
| 29/26 | 矢状前頭示数   | 88. 33            |
| 43.   | 上顏幅      | 106               |

表5 大腿骨計測值 (mm) (Femur)

|     | 曽畑                |
|-----|-------------------|
|     | 2 号人骨             |
|     | 女性                |
|     | 左                 |
| 6.  | 骨体中央矢状径 25        |
| 7.  | 骨体中央横径 24         |
| 8.  | 骨体中央周 79          |
| 9.  | 骨体上横径 一           |
| 10. | 骨体上矢状径   一        |
| 6 / | 7 骨体中央断面示数 104.17 |

#### 参考文献

- 金関丈夫、原田忠昭、浅川清隆、1955:熊本県下益城郡豊田村御領貝塚発掘の人骨について。 人類学研究、2:93—163.
- 2. 清野謙次・宮本博人、1926: 津雲貝塚人人骨の人類学的研究 第二部 頭蓋骨の研究(前編)。 人類学雑誌、41:95—140.
- 3. 清野謙次・宮本博人、1926: 津雲貝塚人人骨の人類学的研究 第二部 頭蓋骨の研究(後編)。 人類学雑誌、41: 151 —208.
- 4. 清野謙次・平井 隆、1928: 津雲貝塚人人骨の人類学的研究 第四部 下肢骨の研究。其一人類学雑誌、43、第4付録:303—390.
- 5. 清野謙次、1969:肥後国宇土郡花園村大字岩古曽字曽畑貝塚。日本貝塚の研究、岩波書店、: 1-9.
- Martin—Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie. Bd. 1. Gustav Fisher Verlag, Stuttugart: 429
   597.
- 7. 松野 茂、地後井泰然弘、永田忠寿、1967: 肥後国上益城郡嘉島村六嘉かきわら貝塚出土人 骨について。熊本医学会雑誌、41:41—52.
- 8. 松下孝幸、他、1980: 串島遺跡出土の人骨。串島遺跡(長崎県文化財調査報告書51): 133-135.
- 9. 松下孝幸、他、1980:五島・白浜貝塚出土の縄文晩期人骨。白浜貝塚(福江市文化財調査報告書2):120-133.
- 10. 松下孝幸、1981: 宮の本遺跡出土の人骨。宮の本遺跡(佐世保市埋蔵文化財調査報告書): 93-109, 114-118, 145-146.
- 11. 松下孝幸、他、1983:佐賀県唐津市菜畑遺跡出土の人骨。菜畑遺跡(唐津市文化財調査報告 5):388 —398.
- 12. 松下孝幸、1984: 鹿児島県知名町(沖永良部島)中甫洞穴出土の人骨。中甫洞穴(鹿児島県 知名町埋蔵文化財発掘調査報告書): 33—58.
- 13. 松下孝幸、他、1986:熊本県小川町七ッ江カキワラ貝塚出土の縄文時代人骨。七ッ江カキワラ貝塚・竹の下貝塚(熊本県文化財調査報告第79集): 39—70.
- 14. 内藤芳篤、1973: 沖の原遺跡の人骨。長崎大学解剖学第二教室
- 15. 岡本辰之輔、1929: 肥後国下益城郡阿高貝塚人人骨の人類学的研究(頭蓋骨に就いて)第一報。人類学雑誌、44(第一附録): 1-26.
- 16. 岡本辰之輔、1929: 肥後国下益城郡阿高村西阿高貝塚人人骨の人類学的研究(其の二、四肢骨について)。人類学雑誌、44(第三附録):77—105.
- 17. 大森浅吉、1960: 故南山大学教授中山英司博士により測定された阿高貝塚人骨の測定値。人類学研究、7 (附録):211-230.
- 18. 鈴木文太郎、1918:肥後轟貝塚河内道明寺にて発掘せる人骨に就いて。人類学雑誌。33:59 -66.

# 7. 曽畑貝塚低湿地遺跡の C 14 測定結果

昭和 62年 11月 27日

# 熊本県教育庁 御中

# 曾畑貝塚低湿地遺跡14C年代測定報告書

御依頼試料の放射性炭素年代測定結果を下記のとおり御報告申しあげます。

京都産業大学理学部 年代測定研究室 山田 治

| 測定番号       | 試 料 名 · 採 取 地   | 測    | 定 | 結  | 果  |
|------------|---|------|---|----|----|
| K S U—1559 | 曽畑貝塚低湿地遺跡B-2区,6号貯蔵穴,11層<br>ドングリ,縄文前期曽畑期文化(-200~250cm) | 5060 | ± | 35 | ВР |
| KSU—1560   | 曽畑貝塚低湿地遺跡A-3区,15号貯蔵穴,11<br>層木片 (-200~250cm)           | 4910 | ± | 40 | ВР |
| к s u—1561 | 曽畑貝塚低湿地遺跡 A - 1 区, 13層中木片縄文<br>前期轟期文化 (-300~330cm)    | 6040 | ± | 40 | ВР |
| K S U—1562 | 曽畑貝塚低湿地遺跡 B - 4 区,15層中木片縄文<br>前期轟式文化(-380~400cm)      | 5860 | ± | 45 | ВР |

### 第2節 考 察

#### 1. 曽畑貝塚付近における地形環境の変遷

名古屋大学文学部助教授 海 津 正 倫

#### I. はじめに

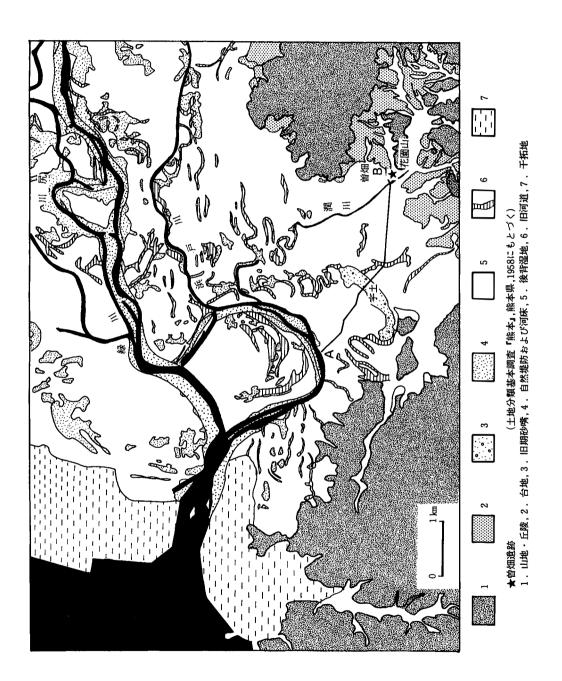
各地の臨海部に発達する沖積平野は、最終氷期最盛期(およそ18,000~20,000年前)以降における顕著な海水準変動の影響を受けて発達している。わが国でもこれまでに多くの研究によって沖積平野の地形や堆積物がこのような著しい海水準の変動にともなって変化し、発達して、現在に至ったことが明らかにされている(たとえば海津、1981など)。熊本平野南部の沖積地において発掘のおこなわれた曽畑遺跡の地形環境も、このような顕著な海水準変動の影響を受けて変化してきたと考えられる。ここでは、曽畑遺跡の発掘成果や、付近の地形、沖積層の特徴や堆積物の珪藻分析結果等にもとづいて、遺跡の立地環境の変遷について考察する。

なお、珪藻分析にあたっては、曽畑遺跡B—1区東壁から40cm間隔の深さで得られた試料について、過酸化水素水による有機物の除去、沈澱法による粗粒物質及び細粒物質の除去、さらに硝酸と塩酸の混合液による無機物の融解をおこなったのち、プレパラートを作成し、これら各層準の試料について、生物顕微鏡下(×1000)で各200個体を同定した。

#### Ⅱ. 曽畑遺跡周辺の地形と沖積層

曽畑遺跡は、熊本平野南縁部に、宇土市街地を中心として南に向けて袋状に張り出した東西約4 km、南北約2.5kmの沖積地に面して立地している。沖積地の地表面は南東部で約4 m、北西部で約2.5 mの海抜高度を持ち、その中央部には、宇土城跡をのせる低地南西部の小丘付近から北東にむけて幅約250m、長さ約1.2kmの旧期砂嘴と考えられる微高地がのびている。低地は東、西、南を海抜50~200m程度の丘陵に囲まれており、南部及び東部ではそれらの丘陵と低地との間に、低地との比高が3~5 m程度の洪積台地が発達している。低地の東にそびえる花園山(62.7m)の北側の、曽畑集落をのせる洪積台地の南西部には、今回発掘の行われた曽畑遺跡に隣接して曽畑貝塚が立地している。低地には周囲の丘陵から何本かの小河川が流入しており、各河川に沿って発達する谷底平野が低地の沖積面に連続している。これらの小河川のうち花園山の南から流入し、曽畑遺跡の南を流れる河川は潤川とよばれている。

袋状低地の北には熊本平野がひろがり、平野の南部には緑川とその支流である浜戸川がほぼ東西方向に流れる。熊本平野南部の、袋状低地の北には大きく曲流した緑川の旧河道があり、東から流れる浜戸川や袋状低地から流れる潤川が流入している。熊本平野南部の地形はかなり低平で、平野の前面には島原湾に面して幅 5 kmにおよぶ広大な干潟が発達している。平野南部の沖積低地の地形は緑川や浜戸川沿いに発達する小規模な自然堤防とその背後の後背湿地、後背湿地上に認



第1図 曽畑遺跡付近地形分類図

められる旧河道等によって特徴づけられる。地表面の海抜高度は河口から12.5km付近で約5 m、河口から約7.5kmの鹿児島本線沿いの地点付近で約3 m、河口から2.5km付近で約1.5m程度である。

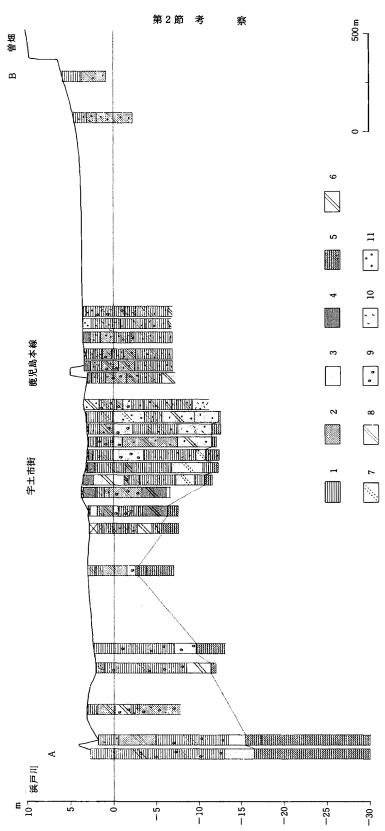
宇土市街地を中心とする袋状低地の沖積層は、東部と西部で比較的顕著な違いを見せている。本地域の沖積層の下位には、約70,000年前に九州地方中部を広くおおった Aso — 4 火砕流堆積物であると考えられる凝灰質堆積物が存在し、未熔結凝灰岩あるいは凝灰質シルトとしてボーリング柱状図に示されている。この凝灰質堆積物の上面高度は、宇土市街地のやや西よりの栄町付近において高く(-3 m)、西及び東側の地域において-10 m以深の海抜高度を示していて、ちょうど袋状低地の地表面下に尾根をはさんだ二つの谷状の地形が埋没している様子を読み取ることができる。この埋没した基盤の尾根の西側に堆積している沖積層は、基盤をおおう層厚2~5 m程度の小礫混じり砂層と、それをおおう沖積層最上部までの比較的厚いシルトあるいは粘土層によって構成されている。このシルト・粘土層はきわめて軟弱で、一部に細砂の薄層をはさむことがあるが、N値は大部分が0または1である。また、シルト・粘土層及び海抜-10 m以浅の砂層中には貝化石が多く含まれており、表層付近には腐植物も混入している。

一方、埋没した基盤の高まりの東側の地域では、沖積層は砂層とシルト・粘土層との互層によって構成されている。本地域の沖積層は、全体として基盤をおおう層厚3~5 mの砂層、その直上に発達する層厚5~8 m程度の礫混じりの泥質層、泥質層をおおって海抜-5~0 m付近に発達する中部の砂層、砂層上に発達する層厚2 m程度の泥質層、最上部の層厚2 m弱の砂層の5 層に大きく細分される。このうち最上部の砂層は、宇土市街地をのせる旧期砂嘴の部分において特に顕著に発達しており、また、中部の砂層は宇土市街地からやや東側の地域で最も顕著に発達している。東部の曽畑遺跡に近い地域では、中部の砂層が発達せず、下部の泥層と上部の泥層とが連続して比較的厚い泥層を形成している。宇土市街地より東側の地域では、貝化石は主として中部の砂層と上部の泥層、それらの相当層に認められ、下位の砂層や泥層中には認められない。また、腐植物も上部の泥層と中部の砂層に対比される泥質層中に多く含まれる。

#### Ⅲ.曽畑遺跡の堆積物と珪藻分析結果

珪藻分析のおこなわれた曽畑遺跡 B-1区東壁の土層は、第3図に示す通り第X層から第XXI層までの各層に細分される。このうち最上部の砂礫層からなる第X層は下位のXI層をわずかに刻んで発達していて、X層と下位のXI層との間には小規模な不整合の存在を読み取ることができる。X層の上限はこの断面では明らかではないが、サンプルを採取した東壁の、南から約4mの部分では、X層とXI層との境が海抜2.9~3.0mにある。

X層の下位に発達するXI層は薄い泥炭層をはさむ暗灰褐色(2.5 Y R 3/1)の砂質 シルトからなり、小礫、木片を混入している。層厚は約50cmで、下位のXII層との境の海抜高度は+2.45mである。本層の上部海抜+2.80mから得られた堆積物の分析結果では、浮遊性海生珪薬であるMelosira sulcata が28個体(14%)、Cyclotella stylorum が17個体(8.5%)出現しており、さら



1.粘土 2.シルト 3.砂 4.礫混り砂および砂礫 5.未固結礙灰岩

9. 貝殻

第2図 表層地質断面図 (断面図位置は第1図参照)

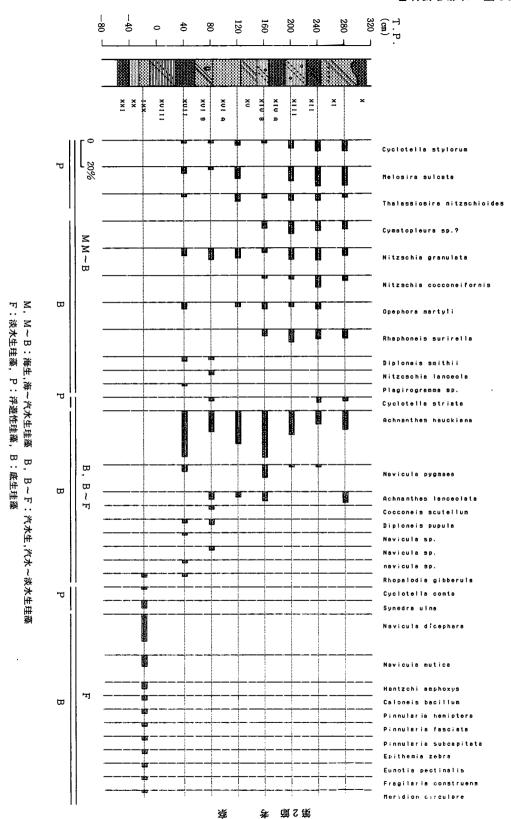
に、底生の海生~汽水生珪藻であるNitzschia granulata 12個体(6%)、Nitzschia cocconeiformis 8個体(4%)、Cymatopleura solea ?13個体(6.5%)さらに、浮遊性汽水生種の Cyclotella striata 6個体(3%)、底生汽水生種の Achnanthes hauckiana 28個体(14%)、底生淡水~汽水生種の Achnanthes lanceolata16個体(8%) などが優占種として出現している。このような珪藻群集 から判断すると、本層準は海の影響のみられる汽水の環境下において堆積したと推定される。また、本層の下部に薄い泥炭層が断続的に発達することから、本層の堆積時期の初期に水域が一時的に縮小し、湿地が拡大するような時期があったと考えられる。

XI層におおわれるXII層は、暗褐色(10YR4/2)のシルト混じり砂礫で、層厚は21cmである。 本層中の+2.40mの層準からは、XI層とほぼ同じ組成の珪藻群集が認められ、 Melosira sulcata、 Cyclotella stylorum などの浮遊性海生珪藻、Nitzschia granulate、Nitzschia cocconeiformis、 Cymatopleura sp.?\* などの海~汽水生種、Cyclotella striata、Achnanthes hauckiana などの汽水 (汽水~淡水)生種が多く認められる。これらのうち、Melosira sulcata、Nitzschia cocconeiformis、 Nitzschia granulata などはXI層に比べて若干多く、Achnanthes hauckianaはやや少なくなってい る。さらに、 Rhaphoneissurirella、Opephora martyii など海~汽水生の珪藻も出現し、全体と してXI層に比べて海の影響がやや強い状態であったと推定される。 VⅢ層は層厚33cmの、暗褐色 (2.5YR4/1)礫混じりシルト質砂から成り、その上面高度は+2.24mである。本層中の+2.00 mから得られた堆積物中の珪藻群集は、XII層中の+2.40mに含まれる珪藻群集と出現頻度は若干 異なるものの、ほぼ同じ優占種によって構成されている。すなわち、 Melosira sulcata、 Cyclotella stylorum, Thalassiosira nitzschioides, Rhaphoneis surirella, Cymatopleura solea?, Nitzschia granulata. Nitzschia cocconeiformis. Opephora martyii. Achnanthes hauckiana 🌣 どを主としており、やはり、海の影響が強い汽水の環境下での堆積環境を推定することができる。 XIV層は層厚約42cmの砂礫層で、粗粒な上部のXIV層Aと細粒な下部のXIV層Bとに細分される。 上部のXIV層Aは、直径10cmに達する軽石を含む黄灰褐色(10YR4/2)の砂礫層で、層厚は24 cm、上限の海抜高度は+1.91mである。下部のXIV層Bは、礫混じりの暗灰褐色(5 Y R 4/1) シルト質砂で、層厚は18cm、礫層中には軽石が多く含まれている。珪藻分析はXV層Bの海抜+ 1.60mの層準についておこなわれた。本層準においては、X層、XI層、XI層における珪藻分析結 果と比較的類似してはいるものの、Melosira sulcata が出現しないことや、同じ浮遊性海生珪藻 である Cyclotella stylorum の出現頻度も小さいなどの特徴がみられる。また、汽水性の Achnanthes hauckiana やNavicula pygmaeaの出現頻度が高く、これらのことから、本層準は、 海の影響がやや弱くなり、汽水的な条件がやや強くなった環境下において堆積したものと推定さ

XV層は層厚24cmの暗灰褐色(2.5Y R3/1)砂質シルト層で、その上面高度は+1.49mである。 \*属名、種名とも不明(不確実)であるが、他の海~汽水生種とよく似た出現傾向を示しているので海~ 汽水生種として扱った。

れる。

# 果結补公藥卦 図 8 葉



本層については珪藻分析をおこなっていない。

XVI層は暗灰色のシルト及び粘土質シルト層からなり、層厚42cmのXVI層 Aおよび26cmのXVI層 Bの上下 2 層にわけられる。上位のXVI層 Aは、暗青灰色(5 B G 3/1)のシルト層からなり、その上面高度は+1.25m、下位の暗灰色(10 Y R 3/1)を呈する粘土質シルト層との境は海抜+0.83mにある。本層上部の+1.20mにおける珪藻分析結果は、Nitzschia cocconeiformis、Cymatopleura sp.? および Navicula pygmaea が出現しないことなどの違いがみられるものの、全体としては、第211層、第XIII層における珪藻群集とほぼ同じ傾向が認められる。これにたいして、下位のXVI層 Bにおける+0.80mの層準の珪藻分析結果は、Thalassiosira nitzchioides、Rhaphoneis surirella、Cymatopleura solea?、Nitzschia cocconeiformis、Opephora martyii などを含まないこと、Melosira sulcata、Cyclotella stylorum の出現頻度が低いこと、海~汽水生種の Diploneis smithii、Nitzschia lanceola、汽水~淡水生種の Diploneis pupula、Cocconeis scutellum、Achnanthes lanceolata などを含むことなど、上位の層準とはかなり異なった特徴を示している。このような珪藻群集の特徴は、上位の層準に比べて海の影響の弱い汽水的環境であったことを示している。

XVII層は層厚30cmの暗褐色(5 Y3/1)砂礫層で、上面高度は+0.57mである。礫径は10~20 mm程度のものが多く、最大50mm程度の軽石片も混入している。マトリックスは細砂からなる。本層の+0.40mから採取された堆積物の珪藻分析結果によると、珪藻群集の特徴は、海生浮遊性の Melosira sulcata、 Cyclotella stylorum、 Tharassiosira nitzschioides や、海~汽水生底種の Nitzschia granulata、Opephora martyii、 汽水生の Achnanthes hauckiana、Navicula pygmaea などが出現する点で上位の各層準とかなり共通しているが、Rhaphoneis surirella、Cymatopleura solea?、Nitzschia cocconeiformis などが出現しない点など若干の相違もみとめられる。

XVIII層は黒灰色(10 G Y 2 / 1)のシルト質粘土からなり、層厚は37 cm、上限の高度は + 0.27 m である。本層中の海抜高度0.00 m から採取された試料の珪藻含有率はきわめて低く、200個の珪藻を数えるには至らなかった。ただ、本層において出現する珪藻は、第XVII層以上にみられた珪藻とは全く異なる種類のもので、それらは下位のIXX層において認められる珪藻とほぼ同様の種類であった。

IXX層は層厚14cmの暗灰色(10G Y 3/1)シルトである。その上限高度は-0.10m、下限高度は-0.24mである。本層の下部-0.20mの高さから得られた試料の珪藻群集は、XVII 層以上の地層において認められた珪藻群集とは明らかに異なるもので、汽水域にも生息することのある Rhopalodia gibberula がわずかに含まれるほかは、すべて淡水産の珪藻によって構成されている。主な出現種は、Navicula dicephala、Navicula mutica、Hantzchia amphoxys、Synedra ulna などで、このほか、Pinnularia 属の珪藻も比較的多く認められる。

IXX層の下位には層厚15cmの暗緑灰色(7.5G Y3/1)を呈する中〜粗砂が堆積しており、その下位の海抜-0.39m以下には緑灰色(5 G5/1)の砂礫層が堆積している。砂礫は5~15mm程度

のものが多く、最大礫は25㎜程度の大きさである。礫種は緑泥片岩礫が大半を占めている。

#### Ⅳ、曽畑遺跡周辺における地形環境の変遷

曽畑遺跡の面する袋状沖積地の沖積層基底は、宇土市街地のやや西よりで浅くなっていて、沖積層の堆積場を西と東とに大きく二分している。ちょうど尾根をはさんで二つの谷があり、その谷を埋める二つの堆積場に沖積層が堆積した状態となっている。この谷の形成時期については、明確な証拠が得られていないが、基底に発達する凝灰質堆積物がこの付近に広く分布する Aso —4 火砕流堆積物であると考えられることから、晩期更新世以後の時期に形成されたと考えるのが妥当であり、おそらく、日本各地の沖積低地において発達する最終氷期最盛期の低海水準にともなって形成された谷の形成期に相当するものと推定される。

この谷を埋める堆積物(沖積層)は、埋没した尾根の西側の部分において、基盤上に 2~3 m の砂層が堆積し、それをおおってほとんど全層がシルトあるいは粘土層からなる泥質堆積物によって構成されている。堆積物中にはほぼ全層にわたって貝化石が認められることから、これらの堆積物は最終氷期最盛期以降の海進にともなって堆積したものと考えられる。堆積物は基盤上の比較的薄い砂層とその上にのる厚い泥質堆積物によって特徴づけられるが、このような堆積物の特づから、下位の砂層は海進にともなう基盤の波食によって堆積した砂層であると考えられ、それをおおう泥層は、その後の海進によってやや水深の増大した内湾沿岸底に堆積した堆積物であると推定される。本地点における沖積層の基底が一15m付近にあり、日本各地における従来の研究成果において一15m付近に海面があった時期がおよそ8,000年前頃であることから、この付近における沖積層の堆積時期は、それ以降の時期であったと推定される。

これに対して、埋没した基盤の尾根の東側の地域(袋状低地の東側及び南側の地域)では、基盤の直上、地表付近、そして-5~0m付近の三層準に砂層の堆積が認められ、それらにはさまれて泥質堆積物が堆積している。堆積物中には全体に礫が多く混入し、貝化石は中位の砂層(海抜0~-5m付近に発達する砂層)およびそれをおおう泥質堆積物中に多く認められる。また、沖積層の上半部には腐植物も多く混入する。

本地域では沖積層の下部に貝化石が認められないこと、下部の粘土層、砂層中に礫が多く混入していることから、最下部の砂層、下部の粘土層は、主として陸上の堆積環境のもとに堆積したと推定される。一方、中部の砂層は現在の宇土市街地よりやや東よりの部分にレンズ状に堆積している。このような堆積の状態は、宇土市街地の部分における最上部の砂層の分布状態と酷似しており、宇土市街地をのせる砂層が旧期砂嘴と考えられる地形をなすこと、中部の砂層中に縄文海進期に堆積したであろうと考えられる貝化石が混入していることを考えあわせると、この中部の砂層も、縄文海進期のある時期に形成された旧期砂嘴を構成する堆積物であろうと推定される。

この砂層の分布高度は、ちょうど埋没した基盤の尾根の高さにあたっていることから、この砂層の堆積が始まる頃に、西側の沖積層の堆積域と東側の沖積層の堆積域とがつながって一つの広

い袋状の入り江と沖積地が形成され、その入り江の湾口の部分に中部の砂層によって構成される 砂嘴が形成されたと推定される。ただし、この砂層の東側の地域には西側の地域にみられるよう な貝化石を多くふくむ泥質堆積物がそれほど広くは分布していないことから、この時期の砂嘴の 内陸側の水域はあまり広くなかったと考えられ、袋状低地の縁辺部には低湿な沼沢地が広がって いたものと推定される。

#### Ⅴ. 曽畑遺跡における環境変遷

曽畑遺跡は、袋状低地縁辺部の、花園山の北を流下してきた小谷がこの低湿地あるいは入り江に面するような場所に位置している。今回のトレンチの最下位の層準は、海抜約−0.50mにあたる。珪藻分析結果では第XIX層の暗灰色シルトが淡水の環境下で堆積したことが明らかにされており、その上位のXVⅢ層においても、やはり淡水珪藻が多く認められていて、淡水の環境下において堆積したことが明らかである。

しかしながら、第XVII層の暗褐色砂礫層では堆積物が砂礫層であるにもかかわらず、珪藻分析結果では海~汽水生珪藻が多く出現しており、入り江が拡大してそこに顕著な海水の流入があったことが推定される。珪藻分析を行った試料の採取高度は+0.40mであるが、この高さは中部砂層の上面高度ときわめてよく一致している。さきに述べたように、この砂層を旧期砂嘴の構成層と考えると、この砂層が消失することは、すなわち、入り江の口をふさいでいた砂嘴が消失することであり、その結果として水域が急激に拡大し、袋状低地の奥にまで海水が達しやすくなったと考えられる。このような変化は海面上昇とのかかわりのもとに説明されると思われるが、さきに述べた珪藻群集の急激な変化は、このような地形環境の変化を考えると、かなりうまく説明することができる。また、XVII層の堆積物が砂礫質であることについては、この時期になんらかの形で砂礫の堆積量が増大したと考えられるが、この場合には、水域の拡大にともなって汀線付近で丘陵や台地の崖端を侵食する波食がおこなわれ、それにともなって供給された砂礫が堆積した可能性もある。

沖積層中部の砂層をおおう堆積物は、字土市街地から東の地域にかけて貝化石を多く含む泥質堆積物によって構成されている。このような堆積物の特徴は水域の拡大があったことを示しており、水域すなわち潟湖の拡大にともなって海水が進入してきたと考えると、曽畑遺跡第 XⅦ層(+0.40m)からⅧ層(+2.80m)までの珪藻分析結果において海生~汽水生珪藻が多産することと極めてよく調和している。ただし、珪藻分析結果では、海抜+1.60m付近に一時的に海水の影響の弱い状態が認められる。この時期は文化層の点からは轟期の初期に当たると考えられるが、海の影響が弱くなった理由については明らかでない。すでに述べたように、この時期には入り江の湾口部には大規模な砂嘴は発達していなかったと考えられるので、曽畑遺跡周辺部の局地的な地形変化、たとえば支流小谷から流入する小河川の流路が移動したなど、の影響があったとも考えられる。なお、Ⅷ層を掘り込んで作られた貯蔵穴中の堆積物からも、Ⅷ層とほぼ同様に海~汽

水生珪藻が多産する。

第II層においては泥炭層が形成されたり、珪薬分析結果からも海~汽水生珪薬がやや少なく、海の影響が若干弱くなったことが明らかである。この時期は曽畑期にあたっているが、このような海水の影響の弱まる状況が地形的な環境変化に由来するのか、海面変化それ自体に由来するのかは今のところ明らかでない。ただ、第II層とそれをおおう第X層との間には小規模な不整合が形成されており、この不整合が海退によるものであるとするなら、この海退に向かう過程での海面高度の低下に伴う海水の流入状況の変化によって海の影響が若干弱くなったと考えられる。また、沖積層の上部の泥層上には、宇土市街地をのせる旧期砂嘴の構成層である砂層が微高地をなして堆積している。この砂層の下位の層準に断片的に薄い砂層がみられることから、小規模な砂嘴が断続的に存在し続けていて、その成長、縮小に伴って入り江の奥への海水の流入の度合が変化したことも考えられる。

ところで、本地域の海成層の上限高度は、珪藻分析結果から、曽畑期に少なくとも+2.80m以上であったことが明らかである。この値は九州地方においてこれまで明らかにされてきた縄文時代前期頃の海面高度(旧汀線高度)としてはやや高い値となっている。この点については本地域が島原湾に面した地域であり、この地域の潮差がかなり大きいことが大きくかかわっているものと思われる。また、もしXI層の上限が侵食されているとするなら、海成層上限高度はこの値をさらに上回るであろうし、波多野ほか(1973)や下山ほか(1984, 1986)等によって明らかにされているように、縄文海進高頂期が約6,000年前頃よりもさらに新しい時期であったとすると、XI層以上の層準においても海成層が認められる可能性があり、海成層上限高度はさらに高くなると考えられる。現在のところ、曽畑期より新しい時期の堆積物については十分な検討を行っていないため、この点については今後の課題としたい。

#### Ⅵ. おわりに

以上述べてきたように、曽畑遺跡およびその周辺地域の地形環境の変化は、曽畑遺跡の立地する袋状低地の地形変化と第四紀末期における顕著な海面変化とによって大きく規定されており、これらの変化にともなって遺跡の立地環境もかなり変化している。本稿では曽畑遺跡の堆積物の珪藻分析結果と袋状低地の沖積層の特徴にもとづいて地形環境の変化を検討したが、これらの結果は、袋状低地のいくつかの地点についてさらに多くの珪藻分析をおこなうことによって、より確実なものとなると考えられる。

#### 文 献

波多江信広・鎌田泰彦・赤井静夫(1973)佐賀県伊万里市の伊万里貝層。第四紀研究, 12-3, 103-114。下山正一・亀山徳彦・宮田雄一郎・田代雄二(1984)福岡県糸島平野の第四系。北九

## 第Ⅳ章 分析・考察

州大学文学部紀要、[B]、17、39-58。

下山正一・佐藤喜男・野井英明(1986)糸島低地帯の完新統および貝化石集団。九州大学理学部 研究報告、地質学、14-4、143-162。

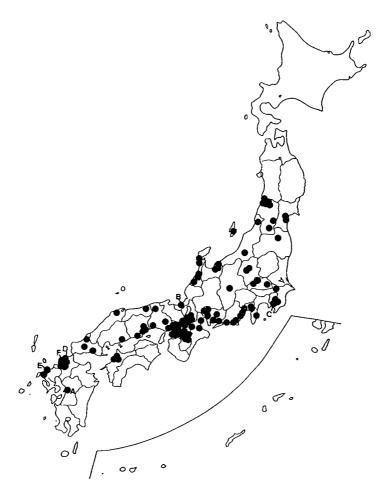
海津正倫(1981)日本における沖積低地の発達過程。地理学評論、54-3、142-160。

# 2. 曽畑貝塚低湿地遺跡(縄文前期)から出土したヒョウタン仲間

Lagenaria siceraria Standl. の果実と種子について

大阪府立大学農学部助教授 藤 下 典 之

1988年2月現在、ヒョウタン仲間の完形果実は2府6県の12遺跡から、その種子は長崎、佐賀、福岡から山形、宮域の各県にいたる28都道府県の115遺跡から出土している(第1図)。



第1図 ヒョウタン仲間の種子出土遺跡の分布、A~E:縄文時代

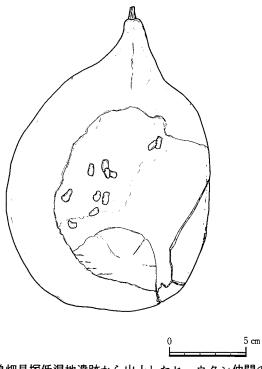
A:曾畑貝塚低湿地遺跡(前期), B:鳥浜遺跡(早期), C:大坪遺跡(前期)

D:四箇遺跡(後期), E:菜畑遺跡(晚期), F:板付遺跡(晚期)

#### \*註

ヒョウタン、フクベ、ユウガオ、センナリヒョウタンなどの分類学上の変種を含むが、種子の形態や 大きさからそれらを明確に識別することはできない。 今回の曽畑貝塚低湿地遺跡のものも含めて、種子出土遺跡数を時代別にみると、縄文時代6、弥生時代40、古墳時代30、奈良・平安時代18、中世8、複合あるいは不詳14となる。筆者はこれまでに上記115遺跡の内の、62遺跡からの種子と、16遺跡からの果実(果皮片を含む)について大きさや形態を調査することができた。その結果、ヒョウタン仲間の日本への渡来時期や渡来の種類など系統発生的研究面で種々の知見を得、それらを19編の報文にまとめてきた。

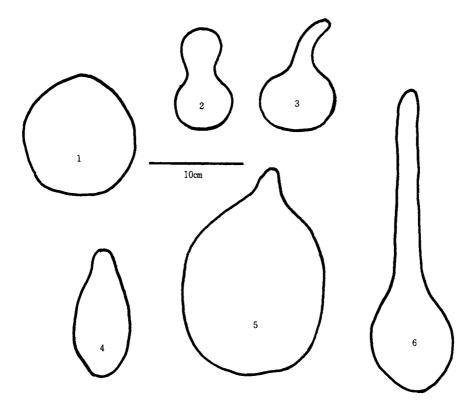
今回の調査の対象は宇土市花園町の水田下2mの約5,000年前・縄文前期の包含層から出土した、ヒョウタン仲間の完形果実1個とその果実に含まれていた種子の内の30粒とである。この遺跡には貯蔵穴が60基あり、木器、土器などの生活用具はほとんど出土していないが、多量のイチイガシの種実(ドングリ)と、それを入れて水に漬けるのに用いていたと思われる木製の網代が発掘されている。



第2図 曽畑貝塚低湿地遺跡から出土したヒョウタン仲間の果実 (熊本県教育庁文化課作図)

#### 果実

曽畑貝塚低湿地遺跡出土の果実は第2図のように、土圧で果皮の一部が破損し、そこから内部の種子を包含する胎座組織と一部の種子が見える状態であった。しかし、果実の原型はよく残っていて果梗側(ツルの着いていた側)が尖ったやや縦長のギボシ(擬宝珠)型で、その大きさは最大縦径が19cm、同じく横径が14cmであった。筆者はヒョウタン仲間の出土完形果実をその形から6型に分け、それぞれの型に相当する代表的な出土果実を第3図に示した。現生のヒョウタン仲間の果実には、偏球型やヘチマ型(円筒)もあり、偏球型と推定できる果皮片の出土(藤原宮ほか)はあるが、ヘチマ型の出土は現時点では皆無である。最近は意図的に果実をねじまげたり、



第3図 遺跡から出土したヒョウタン仲間の果実の形

(利倉西) 2. ヒョウタン型(古留) 3. フラスコ型(山賀) 4. ナスビ型(境田) 5. ギボシ型(曽畑) 6. 首長フラスコ型(江上A)
 ( ) 内は遺跡名 第1表参照

枠にはめこんで本来の果形から逸脱した加工品が市場に出ている。上記6型の各型内でも果実自体の大きさにはかなりの違いがみられ、また各型の中間型もあるが、ここでは大きさは不問にしてより相似の型に入れ、出土遺跡名とその推定時代をあげて第1表にまとめた。

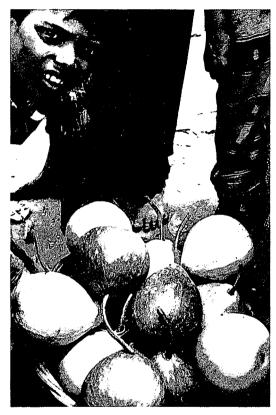
| 笙 1 実 | 遺跡から出土 | たヒーウ | タン仲間の果実の形 |
|-------|--------|------|-----------|
|       |        |      |           |

| 時代 | 果 形* | 球 型                | #  | ボニ   | / 型 | t  | ス            | 型 | フ ラ              | ス     | 그 켈              | 単首長っ        | フラスコ型        | ヒョウタン型 |
|----|------|--------------------|----|------|-----|----|--------------|---|------------------|-------|------------------|-------------|--------------|--------|
| 縄  | 文    |                    | 曽畑 | (熊本) | )   |    |              |   |                  |       |                  |             |              | _      |
| 弥  | 生    | 爪生堂 (大阪)           |    |      |     |    |              |   | 山賀<br>若江山<br>下池田 | 大阪とした | ()<br>(阪)<br>(阪) | 江上 A<br>東土川 | (富山)<br>(京都) |        |
| 弥  | 生    | 利倉西(大阪)            | 新保 | (群馬  | **  | 新保 | (群馬)<br>(山形) |   | 四ッオ              |       |                  |             |              |        |
| ~  | 古 墳  |                    |    |      |     | 児田 | (山ル)         |   |                  |       |                  |             |              |        |
| 古  | 墳    | 中田 (大阪)<br>和爾 (奈良) |    |      |     |    |              |   | 岡崎公              | 関     | (京都)             |             |              |        |
| 奈良 | ・平安  | 佐堂(大阪)**           |    | _    |     |    |              |   |                  |       |                  | 平城京         | (奈良)         |        |
| 中  | 世    |                    |    |      |     |    |              |   |                  |       |                  |             |              | 古留(奈良) |
| ~  | 江 戸  | _                  |    |      |     |    |              |   |                  |       |                  |             |              | 1      |

現生する偏球型、ヘチマ型の出土は未確認。各型とも大きさに変異がある。\*第3図を参照 \*\*果梗部の果皮片から推定した

#### 第Ⅳ章 分析・考察

曽畑貝塚低湿地遺跡出土の果実はギボシ型で、似た形をしたものが群馬県の新保遺跡(弥生後期~古墳時代、果梗側果皮片より推定)から出土している。現生のもので、これに近い果形をしているものに、福井県の鳥浜遺跡に近い三方町で御盆に佛壇に供えたという'セン'(現在は絶滅し普通のヒョウタンが代用されている)がある。沖縄県の竹富島ではすくい器'ヒシャクジラ'として同型の果実を半截したものが使われていた。また、1979年に筆者が遺伝資源探索でバングラデシュに出張した折バザールで同型の野菜用の果実(第4図)が売られているのをみた。ヒョウタン仲



第4図 バングラデシュのバザールで売られていた 野菜用のギボシ型のヒョウタン仲間

間の果実は世界各地で民具として多角的に利用され、民族植物学 ethnobotany の上でも非常に注目されている。筆者の知る限りでも水、酒、種子、かぎ煙草、薬味、炭などの容器、コオロギの飼育容器、假面、装飾用具、装身具、ペニスケース、海女の浮、航海用の天測器、柄杓、楽器、佛壇への供物などがあり、苦味のない種類ではその未熟果を野菜やカンピョウ(干瓢)や料理の添物にも利用されている。対馬には曽畑貝塚低湿地遺跡出土の果形に似たヒョウタンがあり、それを'ハケ'または'ハケボ'と稱し、その成熟果の皮を煎じて飲むとリューマチに利き、また、焼いた灰を粉末にし酒に入れて飲むと化膿止めの薬効があるとされ、大工の間で珍重されているとも言う。八代湾では昔、一抱えもある大きいヒョウタンをうき代りに利用し「オヨギヒョウタ

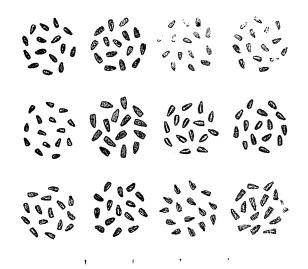
ン」と稱していたと伝えられる。果型と利用方法の間には密接な関係がみいだされないので、曽畑貝塚低湿地遺跡出土のギボシ型果実がどのように利用されていたかの速断はできない。弥生時代の瓢形土器(果実の中央部分がくびれたいわゆるヒョウタン型)は、ヒョウタンの果形を模倣したものとする説もある。しかし、第1表に示すようにヒョウタン型の果実は、中世へ江戸時代の古留遺跡からただ1例出土したのみであるから、模倣説は極めて疑わしいと言えよう。 種子

曽畑貝塚低湿地遺跡出土のヒョウタン仲間の種子の内、計測したのは、果皮の破損部分に近い 胎座に包含されていた30粒のみである。胎座全体は吸水状態であったがよく原形を止どめていた ので、埋土中に破損部分より種子が果実の外へ散逸したおそれはまずないと思われた。それだけ に全種子を計測して、本邦の最南西地から出土した、しかも縄文前期の一果実内の種子数(100 ~150粒くらい包含していると推定した)や種子の大きさの変異は是非押えておきたい対象であ ったが、できるだけ出土状態のままで永久保存したいとの県教育庁文化課の意向を尊重し、30粒 のみとした。



第5図 曽畑貝塚低湿地遺跡から出土したヒョウタン仲間の 完形果実に含まれていた種子

曽畑貝塚低湿地遺跡出土のヒョウタン仲間の種子は、第5図と第2表中の図に示すように、発芽孔側にむけて形が急に細くなり、発芽孔側を頂点とした鋭角の二等辺三角形に近い形をしていた。一方、他の遺跡出土種子(第6図)は発芽孔側にむけて除々に細くなり、長方形の一方が尖るような形をしていた。長崎県の里田原遺跡の種子(本邦で最小)は曽畑貝塚低湿地遺跡のそれに似ていた(第6図)。ヒョウタン仲間の種子の形態的特性を現わす場合、筆者は種子の縦軸方向の最大部分を長さとし、その中央部分の横軸を幅としてきた。しかし、今回は曽畑貝塚低湿地遺跡出土の種子の特性をより明確に出すために、第2表中の図に示すようにA(従来の長さ)、



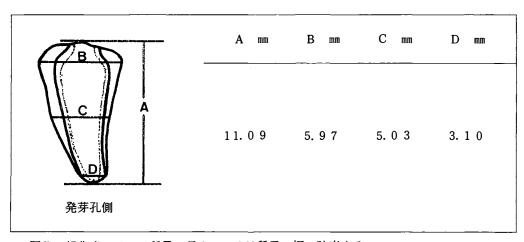
第6図 各地の遺跡から出土したヒョウタン仲間の種子

上段左より池上 (弥生)、水越 (古墳)、周防国府 (7 C)、長原 (6 ~ 7 C)
中段左より里田原 (弥生、最小)、水原城館 (中世、最大)、瓜生堂 (弥生)、利倉西 (弥生~古墳)
下段左より四ッ池 (弥生~古墳)、下池田 (弥生)、東土川 (弥生)、中田 (古墳)

#### 物差しは全長17cm

B、C(従来の幅)、Dの4部分を計測した。方法は既往のもの同様に種子を研究室内で除々に自然乾燥させた後、0.1mmまで読みとれるルーペで計測した。その結果を第2、3表に示したが、平均長Aは11.09mm、平均幅Cは5.03mmであった。この計測値を既往の出土遺跡別にみた種子の

第2表 曽畑貝塚低湿地遺跡から出土した種子の大きさ・形態



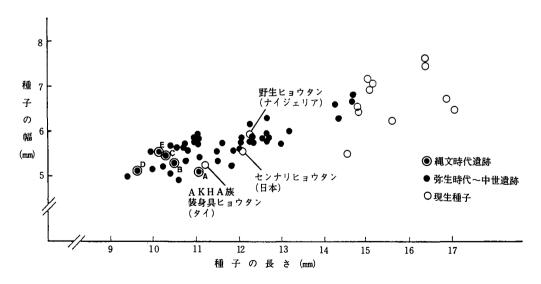
既往の報告書ではAは種子の長さに、Cは種子の幅に該当する。

第3表 曽畑貝塚低湿地遺跡および他の縄文時代の遺跡から出土した 1) ヒョウタン仲間の種子と現生の小型種子の大きさ

| 遺跡名        |     | 時代            |             | 所在地      |     | 計測   | 平均長        | 平均幅 |          | 長さ/幅・          | 長 さ (mm) の 変 異 |              |               |               |               |                |  |  |
|------------|-----|---------------|-------------|----------|-----|------|------------|-----|----------|----------------|----------------|--------------|---------------|---------------|---------------|----------------|--|--|
|            |     | -410          | (県)         |          |     | 種子数  |            |     | mm<br>mm | XC/14          | 8.0<br>~ 8.9   | 9.0<br>~ 9.9 | 10.0<br>~10.9 | 11.0<br>~11.9 | 12·0<br>~12·9 | 13.0<br>~ 13.9 |  |  |
|            |     |               |             |          |     |      | <u>—</u> н | ±   | 種        | 子—             |                |              |               |               |               |                |  |  |
| <u>R</u>   | 浜 E | 早<br>3. C.5.5 | 期<br>5~6.56 | 福        | 井   | 26   | 10.53      |     | 5. 26    | 2.00           |                | 4            | 16            | 6             |               |                |  |  |
| 大          | 坪   | 前             | 期           | 千        | 葉   | 2    | 10.25      |     | 5. 30    | 1.93           |                | 1            |               | 1             |               |                |  |  |
| 曾          | 畑   | 前             | 期           | 熊        | 本   | 30   | 11.09      |     | 5.03     | 2.20           |                | 1            | 7             | 22            |               |                |  |  |
| 四          | 窗   | 後             | 期           | 福        | 岡   | 7    | 9.63       |     | 5.08     | 1.89           | 2              | 2            | 3             |               |               |                |  |  |
| 菜          | 畑   | 晩             | 期           | 佐        | 賀   | 117  | 10.06      |     | 5.50     | 1.82           |                | 42           | 75            |               |               |                |  |  |
|            |     |               |             |          |     |      | ——現        | 生   | 種        | <del>7</del> — |                |              |               |               |               |                |  |  |
| AKH<br>ヒョウ |     | 英装身。<br>ノ     | 具用          | タイ       | 原産  | 100  | 11.16      |     | 5.26     | 2.12           |                |              | 32            | 53            | 15            |                |  |  |
| 十成ヒ        | 3 5 | ウタン'          |             | 日本       | 産   | 20   | 11.99      |     | 5.58     | 2. 15          |                |              | 9             | 1             |               |                |  |  |
| 野生ヒ        | 3 5 | ウタン           |             | ナイ<br>原産 | ジェリ | r 20 | 12.21      |     | 5. 80    | 2.10           |                |              |               | 8             | 7             | ;              |  |  |

#### 1) いずれも大阪府立大学農学部で栽培・採種したもの

大きさの図(第7図)に入れると、種子の長さは中位から小型寄りであった。出土種子の大きさ を遺跡の遍年別にみた第4表からは、時代が新しくなるにつれて種子が長さ幅とも大型化してい く傾向がよくわかる。また、縄文時代の出土種子の大きさ(長さ)の変異幅が狭いのは、出土遺 跡数や計測種子数の少ないこともあろうが、渡来したヒョウタン仲間の種類が少なかったことを



第7図 出土遺跡別にみたヒョウタン仲間の種子の大きさ

遺跡または品種・系統(現生)ごとの長さと幅の平均値を示した。

A:曾畑貝塚低湿地遺跡(前期) B:鳥浜遺跡(早期) C:大坪遺跡(前期)

D:四箇遺跡(後期) E:菜畑遺跡(晩期)

第Ⅳ章 分析・考察 第4表 遺跡の編年別にみたヒョウタン仲間の種子の大きさ

| āt  | 測                  | 平均長                                  | 平均幅  | 長さ   | 各長さ(mm)の比率%  |  |      |  |  |   |  |  |  |  |  |  |
|-----|--------------------|--------------------------------------|--|--|--|--|------|--|--|---|--|--|--|--|--|--|
| 追跡数 | 種子数                | œm.                                  |  | 幅  | 8.0<br>~ 8.9   | 9.0<br>~ 9.9   |      |  |  |   |  | 15.0<br>~15.9  | 16.0<br>~16.9  | 16.0<br>~16.9  |  |  |
| 5   | 182                | 10.29                                | 5.38   | 1.91   | 1.1  | 27.5   | 55.5 | 15.9   |  |   |  |  |  |  |  |  |
| 17  | 1302               | 11.31                                | 5.72   | 1.97   | 0.8  | 8.2  | 29.3 | 37.0   | 21.2   | 3.3   | 0.2  |  |  |  |  |  |
| 18  | 122€               | 11.85                                | 5.77   | 2.05   |  | 1.9  | 21.3 | 36.5   | 19.3   | 14.8  | 3.9  | 1.9  | 0.3  | 0.   |  |  |
| 9   | 425                | 12.21                                | 5.69   | 2.14   |  | 2.4  | 19.3 | 23.3   | 31.5   | 9.4   | 5.9  | 6.8  | 1.4  |  |  |  |
| 3   | 135                | 13.46                                | 5.37   | 2.11   |  | 8.9  | 7.4  | 1.5  | 3.7  | 26.7  | 37.0   | 14.1   | 0.7  |  |  |  |
|     | 5<br>17<br>18<br>9 | 5 182<br>17 1302<br>18 1226<br>9 425 | 5 182 10.29<br>17 1302 11.31<br>18 1226 11.85<br>9 425 12.21 | 5 182 10.29 5.38<br>17 1302 11.31 5.72<br>18 1226 11.85 5.77<br>9 425 12.21 5.69 | 5 182 10.29 5.38 1.91<br>17 1302 11.31 5.72 1.97<br>18 1226 11.85 5.77 2.05<br>9 425 12.21 5.69 2.14 | 5 182 10.29 5.38 1.91 1.1<br>17 1302 11.31 5.72 1.97 0.8<br>18 1226 11.85 5.77 2.05<br>9 425 12.21 5.69 2.14 |      | 5       182       10.29       5.38       1.91       1.1       27.5       55.5         17       1302       11.31       5.72       1.97       0.8       8.2       29.3         18       1226       11.85       5.77       2.05       1.9       21.3         9       425       12.21       5.69       2.14       2.4       19.3 | 5       182       10.29       5.38       1.91       1.1       27.5       55.5       15.9         17       1302       11.31       5.72       1.97       0.8       8.2       29.3       37.0         18       1226       11.85       5.77       2.05       1.9       21.3       36.5         9       425       12.21       5.69       2.14       2.4       19.3       23.3 | 5       182       10.29       5.38       1.91       1.1       27.5       55.5       15.9         17       1302       11.31       5.72       1.97       0.8       8.2       29.3       37.0       21.2         18       1226       11.85       5.77       2.05       1.9       21.3       36.5       19.3         9       425       12.21       5.69       2.14       2.4       19.3       23.3       31.5 | 5       182       10.29       5.38       1.91       1.1       27.5       55.5       15.9         17       1302       11.31       5.72       1.97       0.8       8.2       29.3       37.0       21.2       3.3         18       1226       11.85       5.77       2.05       1.9       21.3       36.5       19.3       14.8         9       425       12.21       5.69       2.14       2.4       19.3       23.3       31.5       9.4 | 5       182       10.29       5.38       1.91       1.1       27.5       55.5       15.9         17       1302       11.31       5.72       1.97       0.8       8.2       29.3       37.0       21.2       3.3       0.2         18       1226       11.85       5.77       2.05       1.9       21.3       36.5       19.3       14.8       3.9         9       425       12.21       5.69       2.14       2.4       19.3       23.3       31.5       9.4       5.9 | 5       182       10.29       5.38       1.91       1.1       27.5       55.5       15.9         17       1302       11.31       5.72       1.97       0.8       8.2       29.3       37.0       21.2       3.3       0.2         18       1226       11.85       5.77       2.05       1.9       21.3       36.5       19.3       14.8       3.9       1.9         9       425       12.21       5.69       2.14       2.4       19.3       23.3       31.5       9.4       5.9       6.8 | 5       182       10.29       5.38       1.91       1.1       27.5       55.5       15.9         17       1302       11.31       5.72       1.97       0.8       8.2       29.3       37.0       21.2       3.3       0.2         18       1226       11.85       5.77       2.05       1.9       21.3       36.5       19.3       14.8       3.9       1.9       0.3         9       425       12.21       5.69       2.14       2.4       19.3       23.3       31.5       9.4       5.9       6.8       1.4 |  |  |

1983年7月現在の計測資料で、以降のものは未採用、曽畑貝塚低湿地遺跡の計測値を含む

暗示している。一方、曽畑貝塚低湿地遺跡出土の種子の幅は第3表や第7図からみると、出土種子中では最も小さい位置にあり、発芽孔側にむけて急に細くなっている特徴がよく伺える。また、曽畑貝塚低湿地遺跡出土の種子で最も幅の広いB部分の計測値と、従来幅として計測していたC部分との差は0.94mmで、1mm近い差があった。さらに既報の中で常にとりあげている種子の長さ A/幅Cの値は、曽畑貝塚低湿地遺跡の種子の2.20に対して、他の遺跡のそれは1.82(菜畑遺跡、縄文晩期)~2.32(坂尻遺跡、8~9世紀)であった。編年別に求めたその値(第4表)は縄文時代(曽畑貝塚低湿地遺跡を含む)の1.91、弥生時代の1.97、古墳時代の2.05、奈良・平安時代の2.14、中世の2.11が示すように、次第に種子が細長い形に変っていく傾向がみられる。一方、これらの値と曽畑貝塚低湿地遺跡の2.20の値を対比すると、後者の種子の中央部分が非常に細いことがよくわかる。

メロン仲間 Cucumis melo L.の種子はすでに28都府県の109遺跡から出土し、熊本県下でも苗代津(筆者計測済)、蓮花寺、高橋南貝塚の3遺跡から発掘されている。しかし宮崎、鹿児島、沖縄の各県下からの出土がないために熊本県の本邦での最南端の出土県となっている。一方、同じウリ科植物で、イネ、モモ、クルミなどとともに全国的に高い頻度で出土するヒョウタン仲間の種子や果実は、熊本、宮崎、鹿児島、沖縄の各県では未知の状態であった。残存遺跡数や発掘遺跡数そのものが少ないことにもよるのであろうが、本邦の南方地方からのウリ科植物の遺体出土のない事実は、渡来経路を考える上で大きな要因の一つになっていた。しかし、今回、ヒョウタン仲間の出土では最南西地に当たる熊本県下で約5,000年前の縄文前期の包含層から、種子を内蔵したままのギボシ型完形果実が発掘された。この事実は、その渡来の時期や経路や種類、あるいは農耕の存否などを考究していく上で今後貴重な資料となるであろう。

## 3. 縄文時代食用植物研究上の意義

## 名古屋大学文学部助教授 渡 辺 誠

曽畑低湿地検出の多量のドングリ類貯蔵穴は、縄文時代の食用植物を研究する上での、新たな しかも重要な資料を多数提供しているのであり、それらについて次の2点に焦点を絞り、若干の 検討を試みることにする。

#### 1) 低湿地貯蔵の意義

縄文時代の重要な食料資源であるドングリ類も他の食用植物と同様に、貯蔵方法には2種類ある。

第1は、長期保存である。この場合はよく乾燥させて、屋根裏などに貯蔵する。古い民家を解体したときに、ドングリ類を貯えた俵などが発見される場合があるが、それらはこの場合の好例である。次の穴貯蔵に比べて考古学的には確認が難しいが、焼失家屋において炉の上に多量のドングリ類などの木の実が検出されることもあり、屋根裏貯蔵のあったことを知ることができる。

第2は、短期保存であり、生貯蔵である。この場合は地面を掘り下げた貯蔵穴などに貯蔵する。 雪国では積雪期の生鮮食料を確保するために、今でも有効な方法とされている。ドングリ類やト チの実などの木の実の場合も、その冬に食べるものだけを穴に入れて貯蔵する。こうしておけば、 皮むきやアク抜きが面倒にならなくてよいという。

発掘時に確認しやすいのは後者の場合であることから、しばしば縄文時代の貯蔵方法はこれだけとされたり、あるいは西南日本だけの地域的な方法などと誤解されている。それら以上に大きな誤解は、低湿地の貯蔵穴をアク抜きの施設とする考えである。

その誤解の原因は簡単なことである。第1は、研究者がドングリ類の民俗にうといことである。 その証拠に、低湿地の貯蔵穴でアク抜きをしている民俗例は、1例といえども紹介されたことは ない。逆に短期の生貯蔵の例はある。

第2は、ドングリ類の種の同定が行われていないことである。その証拠に、アク抜きを必要としないイチイガシ(後日の判明)の貯蔵穴まで、アク抜き施設とする報告書がしばしばみられるのである。もちろん同定結果なしにアク抜き施設とするような見解は論外である。

曽畑低湿地検出の多量のドングリ貯蔵穴は、この問題に対してきわめて明解な解答を示してくれている。

すでに大型植物遺体の項で報告したように、検出された62基の貯蔵穴のうち、ドングリ類の検出されている57基のドングリ類の同定結果は次のとおりである。すなわち、アク抜きを必要とするクヌギまたはアベマキを主体とするのはわずかに1基のみであり、他の56基はアク抜きを必要とする少量のアラカシやシラカシを含むものの、アク抜きを必要としないイチイガシを主体として

#### 第Ⅳ章 分析・考察

いるのである。言いかえるならば、曽畑低湿地の貯蔵穴では、短期の生貯蔵が主体だったのである。 類例は同じ宇土市内の西岡台遺跡(印刷中)でも確認されているし、アク抜き施設としている 既報告の諸遺跡にも多数みられる。

### 2) アク抜きの上限

アク抜きを必要としないイチイガシを主体としているなかに、1基のみではあるがアク抜きを 必要とするクヌギまたはアベマキを主体とする貯蔵穴もまた重要である。

筆者はドングリ類を第1表のように分類している。

| 民 俗 分 類                   | 属  | ı               | 種(出土例のみ)       | 森林帯             |
|---------------------------|--|-----------------|----------------|-----------------|
| A. クヌギ類<br>製粉または加熱処理+水さらし |  | コナラ             | クヌギ<br>カシワ     | 落葉広葉樹林帯         |
| B. ナラ類<br>製紛または加熱処理+水さらし  | コナラ属・  | 亜 属             | ミズナラコナラ        | (東北日本)<br>(韓 国) |
| C. カシ類<br>水さらしのみ          | <b>ゴ</b> ノ / / / / / / / / / / / / / / / / / / | アカガ<br>シ亜属      | アカガシ<br>アラカシ   | 照葉樹林帯           |
| D. シイ類など                  |  | ) <u>1</u> E/P3 | イチイガシ          | (西南日本)          |
|                           | シイノキ属  | <b>E</b>        | ツブラジイ・スタ<br>ジイ | (韓国南海岸)         |
|                           | マテバシィ  | <b></b>         | マテバシイ          |                 |

表 1 ドングリ類の分類

クヌギまたはアベマキはA類である。これらは製粉した場合には水さらしだけでアク抜きができるが、粒のままの場合には、かなりきついボイリングと水さらしのくり返しが必要である。これらに対してイチイガシは、水さらしによるアク抜きを必要とするカシ類のなかにあって唯一アク抜きを必要とせず、D類のシイ類に含められる。

このことによって、縄文時代前期の曽畑期にアク抜き技術が存在したことは明かである。もっともこのことは、縄文時代草創期の鹿児島県曽於郡志布志町東黒土田遺跡のドングリ類貯蔵穴によって、すでに確認されていることである。そしてそれによって、筆者は縄文土器の起源をドングリ類のアク抜きに求める見解を表明している。この筆者の見解は縄文時代前期の本遺跡例などによってさらに補強することができるのであり、ドングリ類などを主食とする縄文時代の食料問題、および縄文土器をはじめとする関連要素の研究を深める上でも、本遺跡の果たす役割はきわめて大きいといえるのである。

# 第2節 考 察

# 参考文献目録

瀬戸口 望,1987:東黒土遺跡発掘調査報告。鹿児島考古,15.22~54頁。鹿児島。 渡辺 誠,1975:縄文時代の植物食。東京・雄山閣。

- , 1987 a:日韓におけるドングリ食と縄文土器の起源。名古屋大学文学部研究論集,史 学33. 97~111 頁。名古屋。

# 4. 曽畑貝塚低湿地遺跡緊急調査を見学して

慶応大学名誉教授 江 坂 輝 彌

曽畑式土器は縄文時代前期に西九州地方一帯から薩南諸島に渡り、その末端は沖縄本島にまで 到達している。しかしこの土器文化は九州の脊稜山脈を越えて東九州側へは広く波及していない。 分水嶺を越えて大分県大野川上流地域の一部などに本形式土器の小遺跡が散見する程度である。

本州西部、四国、九州地方の縄文時代早期末ないしは前期前葉の土器に施文された文様から曽畑式土器に施文された平行沈線を主調とした幾何学的文様への発展の程度はたどることは困難であり、韓半島東南部の櫛文土器に共通する器形、文様があり、丸底深鉢の曽畑式独特の煮沸用具としての土器の起源は韓半島に求め、前期後半の西九州地方一帯に広く分布する曽畑式土器文化は西北九州地方へ韓半島の櫛文土器文化の波及によって発生し特異な土器文化であると見做すことができるのではなかろうか。この土器文化に伴う、片刃の肉薄な磨製石斧も韓半島の櫛文土器に伴存の磨製石斧と近似している。

曽畑貝塚の隣接水田地帯のバイパス新設工事地区内で発見された轟A・B式、曽畑式土器の時代のカシの実の充満した貯蔵穴を伴う遺跡の発見は大変興味あるものであった。

縄文時代の人々がクルミ、クリ、トチ、ナラ、クヌギ、カシ、シヒなどの木の実を保存し冬場の大切な保存食としていたことは最近の調査研究で次第に明らかにされ、日本列島各地でこれらの木の実を貯蔵した貯蔵穴の発見があいついでいる。

これらの木の実を食する風習はわが日本列島地域のみでなく、隣接の韓半島にも認められ、ソウル市岩寺洞、江原道鰲山里遺跡などの各地の櫛文土器、無文土器の遺跡から炭化した木の実が発見されている。

恐らく落葉潤葉樹林帯と照葉樹林帯の接点付近の温帯地域の先史時代には広く見られる現象ではなかろうか。

今後ユーラシア大陸の東部地域を巨視的な観察眼によって調査研究を進める必要性を痛感する。 何か所感をとの希望があり、中国へ出発間際にしたためた短文を大阪空港にて投函する。

# 5. 中国長江流域にみる編物 (網代) について

# 一曽畑出土資料と関連して―

別府大学学長 賀 川 光 夫

(-)

縄文時代後、晩期に編布が存在すること、編布以前にカゴやムシロなどの編物があることなどは出土遺物や土器底部圧痕などにより指摘されてきた。特に渡辺誠は考古資料に加えて民俗学的アプローチから編器や、編機に及び詳細な研究をおこなっている。しかし編布、編物などの研究は資料の制限もあって全容を知る手掛かりに欠けるところが多かった。このたび調査が行われた、曽畑貝塚低湿地遺跡は有機質遺物を多数含み保存可能な泥炭層であり資料の包蔵条件をそろえていた。そのため、これまでに類例をみないほどの編物資料が出土した。

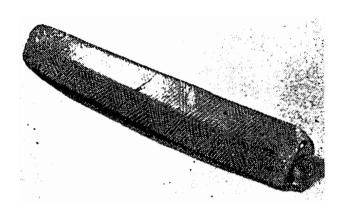
編物は採集、狩猟、魚撈、運搬など様々な用途で古くから生活の主要な道具として利用されてきた。温和な気候条件下の日本列島は、各種材料に欠けるところはなく、編物においては巾廣い道具として利用されてきた。材料としては、楮、栲または栲の他葛も使用されていたし、藤も、竹も使用されていたと思われる。古文にみえる「白たい」「白にぎて」は材料として「楮」または「栲」があてられ、古典にあらわれる木綿などの編物は「ゆう」と読ませてすべてこれら「穀木」を材料としている。しかし、編物の材料はこれら古典に出てくるものの他、古くは広葉樹のカシ、ブナなどの繊維がもちいられることも考えておく必要がある。

編織布については葛布についても検討を加えるべきであり、この技術は静岡県掛川市周辺において近年までおこなわれていた。葛の繊維は硬くのびないので緯糸にしかつかえなく、経糸には木綿、麻を使用していた。これまでの出土資料の中で葛と木綿を使いわけたものを明らかにした (3) 例はないように思うが、渡辺誠の指摘にも経糸はやわらかい蔓材、緯糸は糸状の繊維がもちいられている例があり、このような編布またはカゴが存在した可能性も確かめる必要がある。

「栲」は本来柳を折り曲げてつくったものとされ「栲」と混同しているともいわれる。「栲」もまた「楮」と同じとする説もあるので、木綿の材料を選定するのはむずかしい。木皮や繊維など「髱」を含めて多種類に及ぶものと思われる。したがって数多くある道具を大別すれば編布と網代の二種類にしておけばあまり混乱がなくてすむように思う。「網代」とすれば、材料は、竹も葦などを含むことになるから問題はなかろう。竹は本来、木でもなく、草でもなく「いぶかしき」ものであるから、木説、草説の両者をよしとして、編物の材料には好適で、予想以上に使用されていたものと考えることができる。

さて、ここで43号貯蔵穴から出土した網代と、曽畑式土器との編技法と文飾技法を対比してみると、かなりの共通点がみられるように思う。編技法と土器文飾は、経、緯糸のからみ合いの技術と、そのモチーフによるとみてよい。私は両者の関係に興味をもっていたのであるが渡辺誠のカゴ底圧痕(御経塚遺跡)に対する指摘や浙江省河姆渡遺跡出土の「編織文骨匙」文飾と曽畑式

# 第Ⅳ章 分析・考察





# 図1 文様構図上の類似

- 上 浙江省河姆渡遺跡出土「編織文骨匙」
- 下 曽畑出土土器文様(編織文様?) 上は『文物』1980年、5.より転写

土器文様の比較(図1)などその他若干の資料によって思考を強めることができた。曽畑式土器の文飾が編技法の技術をモチーフとしたことになると、縄文時代における編器の利用について一段と注目しなければならぬ。

 $(\underline{-})$ 

さて編器の材料に麻、綿以前の「穀ち木」や竹などをもちいたとすると、温暖な草木について注目しなければならない。考古資料からこれを隣接の中国大陸にその資料を求めることができるであろうか。近年考古学研究に自然科学的アプローチが主要な課題となりつつある。日本を含む隣邦諸国の植生に対する研究は、大きな成果をあげており、生活に関連のある資源のとりあつかいについても注目されるようになった。このことは中国考古学会においても同じである。

中国では先史時代の初期から編織の技術が存在していたとみられる。河北省武安県磁山遺跡は安志敏によって年代考証がおこなわれ、仰韶文化以前(早期)として編年される。土器の分折は勿論のこと、「14Cの検査をもって中原新石器文化を対照して新石器文化の源流を論述している。この最新の考察によれば、紀元前5~6000年前(ZK439、-BC5400~5200)の間に比定されている。更に中国社会科学院考古研究所における「碳14年代数据集」による検査を補強しているが、同様の数値(BK78029-BC5110~4910)となっており現在より7000年前の遺跡で、河南省斐李崗についで古い遺跡とされている。

磁山遺跡の土器は燒成低温、胎土粗雑、小石多量(夹砂)で文様に縄文が多い。更に泥質硬陶などからみて仰韶文化と対比できるとしている。

縄文についてはくわしく述べていないが、編物の材料を示す資料として注目される。その縄文の圧痕は、広口鉢型土器(盂)や皿型土器(盘)にみられ、中に編織文がある。この編織圧痕についての精細はわからないが、おそらく葦編で、実測図から判断すると中国で古くから伝えられている葦箔とみられ「すのこ状編物」とみてよい。

葦編は浙江省河姆渡遺跡第3層より良好な資料が出土している。報告には写真が添付されているので状況がよくわかり、解説には2経、2緯の編織法と記して詳細はわからない。経2本、緯2本を単位に編織する方法で、材質は葦である。

植物茎を利用した編物は、土器底部の編物圧痕としてみられることがあり、前述の滋山遺跡の 葦箔は中国の初見とみてよい。土器底部圧痕は日本では縄文早期にみられるのを初見とする。熊 本県下益城郡城南町御領貝塚の一例は河姆渡遺跡第3層の葦編織とほぼ似た状態のアンペラ圧痕 である。広義の出水下層式にぞくする山形押捺文土器底部にみられるアンペラ圧痕文は、茎また は木材(原体)3本を1単位(幅7.0~75ミリ)としており、経3本緯3本の茎または木材を編 む。編む方法としては2本越え1本潜りの方法が採用されている。材質については圧痕は逆カマ ボコ状を呈し数本の細い条がみとめられるとしているが、植物の茎か、木の割材、木皮かの判断 はつかない。

河姆渡遺跡出土の編物の材料も検査の結果を待って判断しなければならないが、編技術からみ



章編 浙江省河姆渡遺跡出土 『文物』1980年5号「浙江省河姆渡遺址第2期発掘的主要収穫」より転写

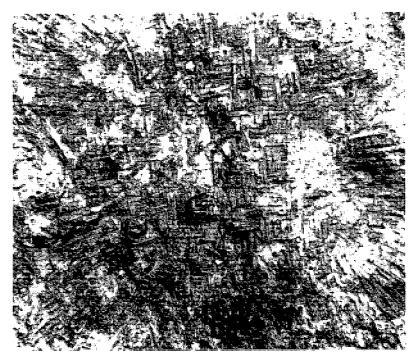


図2 編物 曽畑A-3 50号貯蔵穴綱代

てきわめて似た方法のアンペラ編技法である。河姆渡遺跡からは骨ヒ(匙)の文様として編織文 を施すものが出土(「陽刻編織文図案」としており、曽畑式土器の文様と極似)している。更に 紡錘車の出土など、編布、編物について参考になる遺物が多くみられる。

華北滋山遺跡及び華中の河姆渡遺跡における編物の出土は、それぞれ中国における編物技術の 伝統が先史時代早期において普及していたことを知る手掛りとなった。特に良渚時代には江蘇省、 浙江省など、大湖、杭州湾沿岸の低湿地遺跡で多くの資料がみつかっている。その中で良渚文化 (9) 期の浙江省湖州市南方錢山漾遺跡は多数の竹編物が発見されている。竹編物出土は第4層の灰黒 色の軟質土で黒陶を主とする土器とともに木器類、コメや胡麻などの食用植物とともに出土して いる。とくに穴状遺構より出土した胡麻種子数百粒は竹編物底下より発見されており、竹編物の 用途が明らかとなった。

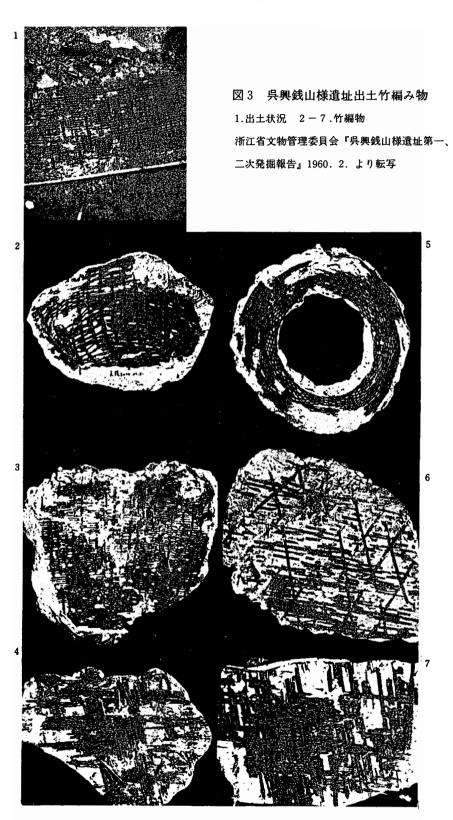
大湖南岸の呉興一帯は古来竹の産地であった。この地方の竹は「震澤底定、篠簜既敷」(禹貢) とあり「篠」は「筱」で細い竹である。また「箭屬小竹也」で篠竹は箭竹ともよび「東南之美者、 有会稽之竹箭焉」と述べている。

錢山漾遺跡では、二百以上の竹編物が出土している。第4層は泥炭層で、しかも竹編物は水面下に位置することから四分の一の資料をとり出したにすぎない。特に注目すべき出土品には曽畑同様網代(竹編器)に芝蔴(ゴマ、脂麻)数百粒が発見されている。おそらく遺跡の状況から見て曽畑貝塚低湿地遺跡の如く保存施設からの出土と考へられる。編物の多くは磨かれたヒゴで編まれているが、一部では加工されない竹を使用したものもある。竹は直径2.5センチ未満のものが多く、現在杭県一帯のシノダケに類似しているとみている。

竹編物は魚具としての「倒梢」や建物に使用する「竹蓆」、物入れ運搬、農作業などに使用する「籠」「手籠」「箕」などである。一部のものには、口の部分に細かい文様があり、下半分には平たいとゴを使っており、現在杭州で使用している籠に似ている。特に「梅花眼」や「辮子口」のように高いレベルを必要とする。

編技術は多様で分類すると下記の如くである。

- (1) 一経一緯人文字模様に仕上げる。ヒゴは細くて薄い。円形、楕円形の枠を作って密に織る。「団簸」「簸箕」に似て「楊器」(コメ、ヌカをおとす)「晒器」(ゴマなどの顆粒を晒す)「養蚕」にも使用される。
- (2) 二経二緯(多経、多緯も含む)、ヒゴは太く節をとっていないものもある。竹蓆としての 用途が考へられる。
- (3) 梅花眼、3組の「稀朗」とむらなく平行に並んだ竹ヒゴを織り合せて花模様を作る円柱形の籠、「刀篰」に似ている。
  - (4) 菱形花格 緯の密な平行線と経の粗なヒゴが交鎖して形成している。
- (5) 密緯粗経十字文、もっとも数の多い竹編物で出土編物の半数を占める。緯は細かい竹ヒゴを密接して編み、経のヒゴは1または2を使用し、間隔は大きい。種類は「籮」「篰」「籃」などがある。



- (6) 竹縄、3本の竹ヒゴをもみ合せて作ったもので直径3センチ、長さ16.3メートル。
- (7) 草編物、第4層 12穴より発見された帽子状の細かな編物で原料については未確認。

この他編布も数多く出土し、材料、編技術などについて研究資料となった。銭山漾遺跡は黒陶を主として出土し、良渚文化に編年され、出土植物などによる「Cの年代測定により、最高紀元前3310年(炭化コメ)、新しいデータとしては紀元前2075年(竹縄)という年代が出されている。

杭州市水田畈遺跡は下層第4層に黒陶や灰陶を出し、上層第3層からは印紋陶及び釉陶を出土する。このことから良渚文化と湖熟文化の二時期とすることができる。第4層には多量の植物種子が発見され特に灰杭中より印紋陶、灰陶に混入して竹編物が出土していることは注目される。この編物は実測図が付されているが幅に違いのある竹材を2経、2緯編技法としている。報告書には「籃子」の残片にみえる、として復原図を付して説明している。

中国長江流域周辺の先史遺跡からは数多くの編物が出土しているが材質、技法について精察されたものは必しも多く報告されていない。これまでのところ葦などの草編物、竹編物が目立つ。竹編物は材料が豊富であることと、低湿地帯における最適の材料であることによって数多く選択されたものと考えることができる。

さて中国長江流域は西日本一帯の気候に類似し、常緑広葉樹林、一部に落葉樹をふくむ照葉樹林帯である。これらの植生には編物の材質として適当なものが多いと思われるが、果して数多くの資料が出土している。これら先史時代の編物材料についての充分な研究は今後の課題である。このたび曽畑貝塚低湿地遺跡の調査によって植物繊維をもとにして編物、編布の一部にイヌビワ、アケビ、カシ類、ケヤキなどが材料として使用されており、常緑、落葉樹林の一部が対象とされていることが明らかとなった。また轟式土器文化層下の第16層の木材と、一部第12層(轟式)の流木に針葉樹林が存在していたことなど、植生の問題に木材遺体そのものからの割り出しが可能になった。このような検査結果は半島、大陸、特に中国長江流域低湿地帯の考古学研究に大きな研究課題となろう。

わが国の編布、編物の問題については渡辺誠の研究によるところが多いが、その材質研究についてのカジノキ(楮)の原流を東アジアとしたとする説を江坂輝彌は立てている。このことは『広州記』(斐淵)にみえる栲(コウゾ)の製作に同じで、江坂のタパの文化に広がりをもつという見解が次第に明確化されることになる。ここに江坂輝彌の研究に敬意をあらわしたいと思っている。

### 注

- (1) 渡辺誠 「スダレ状圧痕の研究」、『物質文化』、26 、1976
- (2) 朝日新聞社刊『週間朝日百科』96、「世界の植物―編物と染め」(吉田光邦、「織りの文化と系譜」1977
- (3) 渡辺誠 「編布およびカゴ底圧痕について」 野々市町御経塚遺跡』、1983

# 第Ⅳ章 分析・考察

- (4) 邯郸市文物保管所、邯郸地区滋山考古隊短訓班「河北磁山新石器遺址試掘」『考古』1977 (6期)
- (5) 安志敏、「斐李崗、磁山和仰韶—試論中原新石器文化的淵源及発展」 『考古』 1979 (4期)、河南省開封地区文物管理委員会編『斐李崗文化』 1979
- (6) 中国社会科学院考古研究所、文物出版社編『中国考古学中碳14年代数据集1965-1981』、1983
- (7) 河姆渡遺址考古隊「浙江河姆渡遺址第2期発掘的主要収獲」『文物』1980 (5期)
- (8) 下村悟史 「押型土器底部のアンペラ状圧痕の一例」『古代文化』28、1976
- (9) 浙江省文物管理委員会「浙江錢山漾遺址第1、2次発掘報告」『考古学報』1960 2
- (10) 浙江省文物管理委員会「杭州水田畈遺址発掘報」『考古学報』1960 2

# 6. 九州曾畑貝塚低湿地遺跡発掘参加報告

大韓民国 ソウル大学博物館長 任 孝 宰

九州の熊本県宇土市曽畑貝塚は新石器時代における韓・日の文化交流関係を語ってくれる日本内最大の代表的遺跡であり、両国の学界で早くから注意されてきた。なぜならば、ここで出土した土器類は、日本新石器時代の特徴的縄文伝統とは違う異質の存在であり、その諸特徴が、むしろ韓国新石器時代の櫛文土器と類似性が多いためである。ところで、今から3年後、来る1990年に完成予定の国道バイパスが作られ、この遺跡を貫通するので、熊本県教育委員会の主管下に熊本県文化課調査団(調査主任・江本 直)は昨年9月から、おおよそ9カ月間、約800㎡に及ぶ大規模な緊急発掘を行ったが、それを契機にして、筆者は日本古代学協会の招請により、曽畑貝塚低湿地遺跡発掘に6月中に一週間参加する機会を持つことが出来た。

今回の発掘作業は貝殻が堆積している貝塚の中心部から南西に約100m離れた地点を集中発掘していて、現地表より約3m厚さの遺物包含層から曽畑土器片約2000点をはじめ多量のドングリなど2500点が出土した。特に、この包含層の下には、いつも地下水が流れているため、湿った泥炭層が形成されていて、信じられない程、当時の先史人達が使用した、木器や食料品などが原形のまま保存されており、筆者を大層驚かせた。幅1.5m、深さ約60cmの大きさの楕円形貯蔵穴62個が発掘されていて、その穴の中には腐っていない、驚くべき量のドングリ、緑色そのままの木の葉、瓢箪、そしてドングリを入れていた籠など、今日まではなかなか残り難い植物性物質などが、まるで幾日前に捨てたように生々しい姿を残していて、それだけでは無く体重100kgを超える猪、鹿などの獣骨、そしてタイなどの魚骨も多量に出土して先史時代の生活層それに自然環境の復元研究にも稀に見る貴重な端緒が提示された。

遺物のなかで、われわれの関心を強く引いたのは、やはり数的にもっとも多く出土した約2000 点の土器であった。土器をどのような形態に作ったのか、その表面にどんな手法でどのような紋 様を施紋したかという点は、時代の変遷や文化的関連性を最も敏感に反映する重要な要素となる 為、このような事をよく観察・分析すれば先史時代の韓・日の関係を語ってくれる決定的な歴史 的論拠となる。

日本の学界では、ここで出土した土器を曽畑遺跡の地名を取り曽畑式土器という名称で呼んでいる。このような型式は日本においても特に九州地域に密集分布しており、いままで約150カ所が知られている。ところで、この土器は日本の新石器時代の典型的な縄文土器の伝統とは大いに違い、異質的である。

今度の発掘により出土した土器を観察して見る時、明らかな特徴が見られるが、最初に、その 土器の形態は底部が円底をなす砲弾形で、二番目に、紋様装飾にあっては縄文ではなく線を引い て(沈線により)幾何学的紋様を施紋しつつ、三番目に、土器表面を上にして三等分して各々異

#### 第Ⅳ章 分析・考察

なる紋様要素を施紋して装飾しており、土器をつくる粘土に滑石を混入してある。このような諸特徴は、日本の縄文時代の他の土器には見ることの出来ない異質的なもので、韓国の櫛文土器と共通した特徴点だ。加えて、いままで日本内で発見された約150カ所のこのような系統の遺跡は等しく韓半島と距離上、最も近い九州地域に密集、分布しており、年代上にあっては韓国櫛文土器がB. C. 4000年前後であり、日本の場合B. C. 3500年前後と近似性がある。 このような曽畑土器の諸特徴が、日本内の他の地方の土器には見ることが出来ない反面、地理的に近い韓半島のものと共通性が著しく、年代的にも近似しているが、韓国側が約500年前にあるので、曽畑土器文化の源流を、韓半島において大きく繁栄した櫛文土器文化に求めることは無理のない道理ではないかと考えられる。

勿論、土器の裏面に紋様があったり、口縁部の上面が波状をなすことがあるなどは、韓国櫛文 土器には見ることの出来ない細かい相違点であるが、今回の発掘で多く出土した曽畑土器文化の 故郷が韓半島という点では、異論を提起する余地が無いことは明らかなことだ。

曽畑貝塚が、このような韓国と関係する国際性を持った遺跡であるためか、発掘現場には日本内の韓国考古学の第一人者である西谷正教授(九州大)を始め、韓・日新石器時代の食物の比較に情熱を傾けている渡辺誠教授(名古屋大)、サラ・タイラー(英国ケンブリッジ大)、鄭漢徳氏(在日韓国人考古学者)等、多くの韓・日関係研究学者の姿がみられた。

解放以後、40年という歳月が流れたが、韓・日考古学界は各々に高い障壁を廻らした状態で独自の研究だけ継続されて来たといっても言い過ぎではない。そうして、両側の学界間の関係者が多くの分野に出てきているので、それを解決する上でも、このような曽畑遺跡発掘を契機として、両国の学者達の共同ないし協同調査がなによりも必要なことである事を再び感じずにはいられなかった。そうすればこそ、韓・日古代史に謎として残っている諸問題が少しずつ解けていくのは明らかである。

このような意味で、今度の曽畑貝塚の発掘調査を契機にして両国の学者が発掘現場で胸襟を開いて韓・日間に関連する学術上の見解を交換、討議する事が出来たことは、それだけでも意義深いことだと考えられ、これを起点として幅広い相互の共同研究が起こることを期待する。

(1987 大韓民国考古学研究会 発表要旨)

(訳) 熊本県教育庁文化課参事 島津義昭

# 7. 縄文時代前期「轟式土器」について

#### 1)研究史

轟式土器は、轟貝塚出土の土器を標式とする型式名で、今日縄文時代前期の前半期に位置づけられている。轟貝塚が学史に登場するのは古く、1881年、エドワード・モースが貝塚を巡り、この貝塚に立ち寄ったことを記載したことに始まり、明治期に鳥居竜蔵らの来跡と広く学会に注目されるようになっている。

轟貝塚の最初の発掘調査は1917年京都帝国大学の鈴木文太郎によって手がけられ、以来主なるところ合計5回実施されてきている。昭和の戦前・戦後で区切れば、前者3回と後者2回である。

鈴木の調査は試掘程度の小規模調査であったが、人骨3体を検出した報告がある。2年後の1919年には同じく京都帝国大学の濱田耕作・清野謙次と熊本県史跡調査会が共同で、前回の調査区を中心に本格的な発掘調査を行い、多量の土器・石器や人骨が検出されている。人骨に伴う装飾品の出土も報告されている。その後、出土土器については三森定男の再検討がある。次いで、翌年には長谷部言人が単独で調査を行っている。

1958年夏には、大規模の発掘調査が実施されている。肥後考古学会会長小林久雄を中心としたものであるが、当時の宇土町・熊本日日新聞社などの全面的協力と県内の研究者が一同に介しての、地元を主体にした初めての調査であった。これには、今日の基本的分類とされる松本雅明・富樫卯三郎の著名な分類作業が提出されている。周知の轟式土器 A ~ D類の型式分類と細分である。おって、1965年慶応大学文学部江坂輝彌の発掘調査もあり、良好な包含層を検出している。

1935年小林久雄により型式設定された轟式土器は、県内各地の出土状況や、特に下益城郡松橋町宮島貝塚での層位的把握を基にして、曽畑式土器や阿高式土器と共に縄文前期に編年されている。ここでの、曽畑式土器に先行するとの層位的事実に加えて、松本らの発掘調査に基づく見解は、轟式土器はA→B→C→D式への時間的移行と、A式=早期末、B式=前期初頭、C・D式=前期中葉に位置づけられる編年が進められている。1965年乙益重隆は西北部九州域の縄文時代

|   | 松本・富樫(1961) | 江坂(1967)  |
|---|-------------|-----------|
| 古 | 轟A式         | 轟下層式      |
|   | 轟B式<br>轟C式  | 轟上層式      |
| 新 | 轟D式         | ## L/B 24 |

|   | 坂田(1980) | 河口(1985)            |
|---|----------|---------------------|
| 古 | 轟Ⅰ式      | 轟Ⅰ式                 |
|   | アカホヤ     | 車車 1 7人             |
|   | 7 7 7 7  | 轟 Ⅱ 式 アカホヤ          |
|   | 轟Ⅱ式      | 車車 エング ノ ソ 小 イ      |
|   | 車車 エング   | <b>班</b> 冊 <b>-</b> |
|   | 4- m #   | 轟Ⅲ式                 |
|   | 轟Ⅲ式      | 4- vr <del>st</del> |
|   |          | 毒Ⅳ式                 |
| 新 | 轟Ⅳ式      |                     |
|   |          |                     |

轟式土器の編年観

を集成しているが、底部形状の特色などを見て轟式土器の中でA式を早期に位置づけ、B~D式は前期に分離している。一方、南九州を中心に出土する塞ノ神式土器はこの時点で前期後葉に位置づけられているが、その後層位的に把握される事例が多くなり、江坂輝彌は塞ノ神式→轟式→曽畑式土器との変遷を提示している。

轟式土器の新たな細分作業も開始され、南九州出土土器を加えた河口貞徳・坂田邦洋らの作業がある。ここには、鍵層である「アカホヤ」火山灰層の上下を巡る轟式土器の出土状況の把握・解釈の問題がにわかに生じてきている。そして、周知の新東晃一や高橋信武の論考は各土器の明確な出土層位の把握に加えて、轟式土器そのものの規定概念の明確化が必要とされてきている。

また、轟式土器から曽畑式土器への変遷、出自を求めようとする動向も生じている。中村愿、田島龍太、渡辺康行らは「野口・阿多タイプ」「プロト曽畑」土器群の設定を、層位的な出土状況を基にして行っている。轟式土器に見られる、刺突文・隆帯文区画・沈線文・押引き文などの諸要素からの変遷で、中間的な形状・文様構成を持つ土器群が成立し、曽畑式土器が生じるものとの観点である。

他方、従来から注意が払われていた、瀬戸内地方の前期土器である羽島下層式土器との関連は、 潮見浩・中越利夫らによる再検討が加わり、鎌木義昌を含めてその出自と伝播論の問題を論じて いる。これには、増子康真、網谷克彦、宮本一夫らの言わば広域的な伝播論が展開されてきてい る。

隆帯文土器については、及川民次郎らが古くより朝鮮半島の隆起線文土器との類似性が指摘されてきているが、江坂輝彌、広瀬雄一は轟B式土器が影響を与えたとする「轟B式土器北上伝播説」を唱えている。これに対して、ソウル大学の任孝宰、鄭澄元らは「隆起線文土器南下伝播説」を主張している。それは、C¹¹測定結果が隆起線文土器の方が古くでて年代の開きがあること、双方の土器の文様には共通性があるが、器形・成形技法などには大きな差があり、それが時間差を示すものであるとの考え方を根拠としている。

最近では山口信義、水ノ江和同らの轟B式土器を中心とした見解の発表も行われている。轟B 式土器そのものを詳細に見て、形態的・時間的変移や出自の問題への積極的見解である。

### 2)『轟式土器』についての検討

今回の調査に於いて、曽畑文化層の下層より多量の条痕文土器を主体とする文化層が検出された。この条痕文土器群は、主に隆帯を貼り付け文様を施す特徴をもち総称して『轟式』の型式名が設定されているものである。轟式土器は、第12~16層にかけてのシルト混じりの礫層より出土し、出土点数は12層100点・13層161点・14層123点・15層70点・16層2点の総数456点である。県内において、出土量が比較的少ない中で、轟貝塚調査以来のまとまった量の出土である。この第12~16層は、轟式土器だけを包含する単純層で、上層の第11層が曽畑期の文化層であることから、今回の調査により層位的に(古)轟式→(新)曽畑式の編年を裏付けた意義は大きい。

まず、出土した轟式土器の文様について、轟貝塚資料と比較しながら見てみたい。ただし、『松

本・富樫』編年(以後M編年とする)のC式3類は特徴より塞ノ神式に、D式3類は曽畑式に比定 されることから除外して進めたい。また、轟貝塚にはもう一つ、京大資料がある。これは、三森 定男により分類されているが、文様の特徴より、1類=轟B式、2類=並木式、3類=轟C・D 式、4類=阿高式、5類=曽畑式にそれぞれ比定できる。この分類では、他型式の土器がほとん どであり、M編年との混同を避けるためここでは取り扱っていない。比較表には簡単に掲載して おきたい。出土土器の中で主体を占めるのは、口縁部に数条の隆帯を横走させ貼り付け、器壁が 薄く焼成が良好な特徴をもつもので、分類ではE-1類に、M編年ではB式1類に当たる土器で ある。この土器群は、各層に普遍的に含まれるが、最下包含層の第15層がE-13類の刻目隆帯文 土器より少なく、第14層より出土量が大幅に増える傾向が認められる。また、14層になると貼り 付けた隆帯に変化が現れ、色々なモチーフの隆帯文が出土し、胴部に隆帯を貼り付けるものもあ る。しかし、主体となるのはやはり文様が口縁部に集約されるものである。さらに、第14層から はB-2・3類に分類した押引きによる文様を施した土器が出土する。この土器は、上層の第13 層より出土し、E-11類に分類した胴部に刻目隆帯と押引き文を併用して施す土器との関連が考 えられる。また、E-11類の土器は、第15層出土のE-13類に分類した断面がカマボコ形を呈し 刻目を施す土器との関連も考えられる。前記の三者を出土層位や文様の系譜より考えて、E-13 類の刻目隆帯とB-2・3類の押引き文とが融合した結果がE-11類となること。つまり、E-13類+B-2・3 類→E-11類の図式を考えている。ちなみに、E-11類の土器はM編年のB式 3類に当たるものである。また、E-1類とE-13類の土器は第15層の同一層から出土している が、上層でも同じ傾向が認められ、この現象は本来の姿として捉えられる。両者共に、轟式の主 流の土器として捉えられる。すなわち、E-11類はE-13類の文様の発展形態として考え、E-1類の文様は、縦方向や斜方向などの各種の文様モチーフに分化させながら、そのまま残るとい う発展形態をたどれるものと見ている。

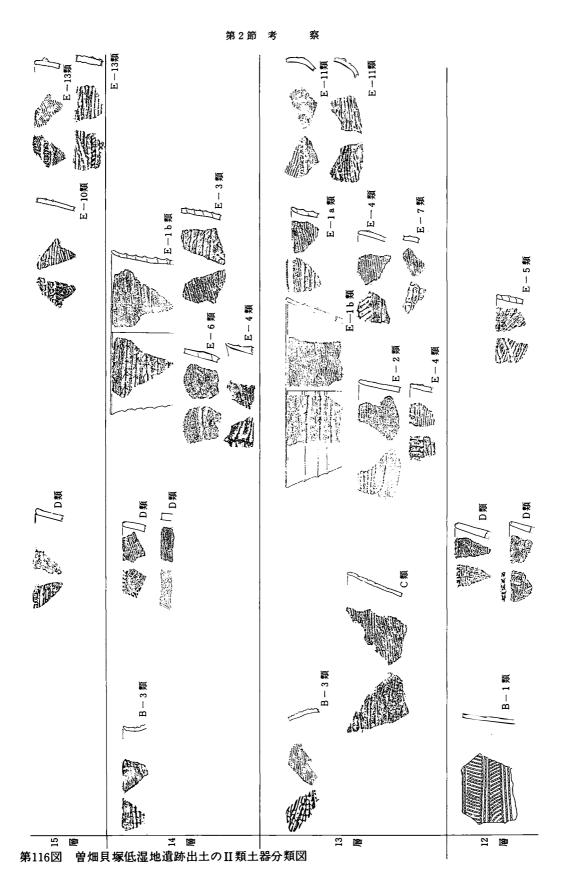
曽畑貝塚低湿地遺跡出土のII群土器と『松本・寛樫』および三森分類との比較

| 曾畑低 | 湿地 | <u>#土:</u> | 上器 | 頭 | 『松本・宮樫』分類 | 三森分類   |
|-----|----|------------|----|---|-----------|--------|
| 群   |    | ,          | a  |   | (熊大資料)    | (京大資料) |
|     | А  |            |    | 類 |           |        |
|     | В  | _          | 1  | 類 |           | -      |
|     |    | _          | 2  | 類 |           | 1類?    |
|     | İ  | -          | 3  | 類 |           |        |
| •   | С  |            |    | 類 | D式 1類     |        |
|     | D  | -          | 1  | 類 | A式·C式1類   | 3 類    |
|     |    | -          | 2  | 類 | A式·C式1類   | 3 類    |
|     | Е  | -          |    | 類 | B式1類      | 1類?    |
|     |    | -          | 11 | 類 | B式1類      | 1類?    |
|     |    | -          | 2  | 類 | B式2類      | 1類?    |
|     |    | -          | 3  | 類 | B式2類      | 1類?    |
|     |    | -          | 4  | 類 | B式2類?     | 150?   |
|     | 1  | -          | 5  | 類 | B式2類?     | 1類?    |
|     |    | -          | 6  | 類 |           |        |
|     | 1  | -          | 7  | 類 |           |        |
| 群   | 1  | -          | 8  | 類 |           |        |
|     | 1  | -          | 9  | 類 | 1         |        |
|     | 1  | -          | 10 | 類 | B式3類      | 1類     |
|     | 1  | -          | 11 | 類 | B式3類      | 1 類    |
|     | 1  | -          | 12 | 類 |           |        |
|     | (  | -          | 13 | 類 | B式3類      |        |
|     | 1  | _          | 14 | 類 |           |        |

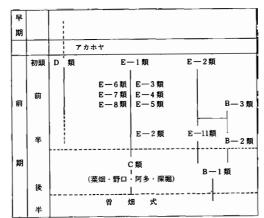
※三森分類(京大資料)の実施図および文章を照合し判断すると 1 原一番B式 2 原一並木式 3 原一番C・D式 4 原一阿高式 5 原一管短式 に相当するものと考えられ、2・4・5 原は除外した。

次に、前述の隆帯をもつ土器群と比較すると、器壁が厚く焼成がやや不良の土器が認められる。この土器は、分類ではD類に、条痕による複合鋸歯文あるいは流水文に類似した文様らしきものが認められることから、M編年では前者が轟A式に、後者がC式に相当するものと考えられる。このD類土器も、第15層を初現として上層の第12層まで普遍的に出土し、なおかつ、上層になるにしたがい量的に増える傾向が見られる。また、M編年で述べられるC式に相当する土器は層位的に上層より出現するのではなく、意外にも下層の第14層中から認められ、A式土器と同時に存在することが確認される。このことは、松本・富樫が言う(古)

A式→B式→C式→D式(新)の編年は一概には該当せず、むしろA式・B式・C式の土器が、 縦ではなく横につながる系統、つまり同時併存する状況を示している。また、B式3類とした刻 目隆帯と刺突文や沈線文を併用する土器群は「B式の変形として捉らえられるものであって、轟 式の主流では無い」とされている。しかし、今回の調査結果では刻目隆帯に押引き文を併用した E─11類は、その祖型と考えられる刻目隆帯のみを施した土器E─13類の発展形態として捉えら れる可能性が強いことから、逆の結果となっている。次に、第12層と第13層中より注目される土 器が出土している。前層からは、押引き文による文様モチーフをもち、B─1類に分類した土器 と、後層からは短沈線文による文様モチーフをもち、C類に分類した土器。前者のB―1類土器 は、押引き文により区画帯を設けた後、中に綾杉状に充塡するもので、押引きが深い。そして、 細くシャープで、区画帯をもち、綾杉状文様を充塡するなど曽畑式との共通点が多い。この土器 は、胴部片だけの出土であり、全体形を不明としているが、轟B式、または、曽畑式と同様で口 縁形態に変化は少なく丸底を呈する深鉢と考えている。また、後者のC類土器は直口する口縁部 に沈線が途中で途切れる短沈線文を5条または数条横走させたものである。短沈線は細くシャー プで、間の間隔は広く1.5 cm程でE—1類の横隆帯文土器と隆帯間の間隔と同じである。器形は、 直口する口縁で胴部の変化が少ない深鉢で、底部は丸底であろう。前者のB-1類土器は、現在 のところ県内はもちろん県外にも類例を見ないが、器面調整と施文具は轟式の特徴を、文様モチ ーフや施文方法は曽畑式の特徴を備えており、より曽畑式に近い。後者のC類土器は、長崎県長 崎市の深堀小学校遺跡出土の第Ⅲ群第1類に分類されている沈線文土器に類似している。より轟 式的な文様モチーフを残していることから、『野口・阿多』タイプとされ、沈線または短沈線文 により重弧文状や半円状の文様モチーフをもつ土器群より先行するものであろう。いずれにして も、両者は轟式から曽畑式に移行する途中段階の土器、つまり、『野口・阿多』タイプや 『プロ ト曽畑』あるいは、『中間土器群』と呼ばれる一連の土器群の中の一つとして捉えられる。次に、 出土した轟式の器形の特徴について見てみたい。今回出土した轟式土器は、すべてが小破片で器 形全体を窺い知る程の土器片は無い。そして、生活址遺構の検出がないため、生活の場そのもの ではなく、包含層は二次堆積土と判断できる。ところで、土器の出土量はかなり多く、土器自体 があまり磨滅していないことから、遺物の供給地すなわち生活場所は近くに接していると思える。 また、層自体は時間的に正しい堆積順序を示すものと判断している。出土土器の器形は、大まか に2種類に分けられる。一つは、底部より直口気味に立ち上がりそのまま口縁部に至る単純な形 態の丸底を呈する深鉢と、他方は胴部が膨らみ頸部で締まったあと口縁部が大きく開く深鉢であ る。いずれも、文様モチーフの違いにより分けられる。前者は、横走貼り付けの隆帯文土器で、 口縁部に文様を集約させたE―1類土器を中心としたものである。これには、縦方向または斜方 向の隆帯文土器も含まれる。つまり、 E―1類土器を祖型として隆帯が変化したと考える土器群 である。後者は、胴部に文様を集約させたもので、刻目隆帯と押引き文あるいは沈線など他の文 様を併用するE―11類土器に限られるようである。押引き文だけを施文する土器は、膨らむ胴部



に短い口縁部が付くもので、口縁部は外反し、浅い器形の鉢または深鉢であろう。底部は、尖底と丸底と考えられるものが出土している。今回出土の隆帯を施文する土器は、すべて器壁が薄く、焼成は非常に良好である。底部近くの破片の傾斜角度からみて丸底と判断できる。出土した尖底の器形が問題となる。これらの尖底は、器壁が厚く焼成があまり良くない。これは、D類土器が示す特徴と一致することから、この土器群の底部と考えられる。M編年のA式かC式土器に当たる。



第10表 曽畑貝塚低湿地遺跡に於ける轟式土器編年

### 3) 県内資料との比較と編年

現在、県内に於いて轟式土器が出土している遺跡数は非常に少ない。地域ごとに見てみると、おおまかに①県北部地域:尾田貝塚(玉名郡天水町)②宇土半島周辺地域:轟貝塚(宇土市宮ノ庄町)・曽畑貝塚(宇土市岩古曽町)・曲野遺跡(下益城郡松橋町)・宮島貝塚(下益城郡松橋町)③熊本市周辺地域:庵の前遺跡(熊本市竜田町)・竜田陳内遺跡(熊本市竜田町)・松ノ木坂遺跡(上益城郡矢部町)④阿蘇周辺地域:谷頭遺跡(阿蘇郡西原村)・桑鶴土橋遺跡(阿蘇郡西原村)・本屋敷遺跡(阿蘇郡西原村)・小無田鶴遺跡(阿蘇郡久木野村)・西一丁田遺跡(阿蘇郡久木野村)⑤八代周辺地域:岩立C古墳(八代郡宮原町)⑥人吉地域:鼓ガ峰遺跡(人吉市願成寺町)の六つの地域グループに分けられる。各遺跡共に、土器の出土量が非常に少なく、まとまった量が出土しているのは轟貝塚だけである。なお、②グループの西岡台貝塚・曽畑貝塚・宮島貝塚、④グループの本屋敷遺跡・小無田鶴遺跡・西一丁田遺跡は未報告であるため明確な比較はできていない。

### 1. 尾田貝塚

菊池川左岸で扇状地先端部の微高地上に位置する。第4層下部から、器壁が厚く内外面に条痕のみをもつものと、器面を丁寧なナデで調整した後、内面口縁部と外面全体に数条単位の押引き文を平行または波状に施文し、さらに細い隆帯を縦位に貼り付けた文様モチーフをもつ2種類の土器群が出土している。これらの土器群には、曽畑式土器が共伴している。

#### 2. 曲野遺跡

台地上の遺跡で、『アカホヤ』の火山ガラスを含む第Ⅲ層(黄褐色土)中から押型文土器や曽畑式土器、晩期の土器などと共に出土している。土器は、器壁が厚く内外面に粗い貝殻条痕に器面調整を行った、尖底片である。上半部を欠失するが轟A式の底部片と見ている。

# 3. 庵の前遺跡

熊本市東部の白川右岸の山麓部に位置する遺跡で『アカホヤ』を含む第Ⅲ層(褐色土)の下部 から第Ⅳ層(暗褐色土)上面が包含層で、押型文土器や塞ノ神式土器など混在した状態で出土し ている。土器は2個体あり、一つは内外面に条痕による器面調整を施した後波状らしき文様を全 面に施している。器形は、直口気味に立ち上がり、口縁部がやや外反する深鉢である。他方は、 内外面に条痕による器面調整を施した、尖底の底部片である。轟A式とされる。

#### 4. 竜田陳内遺跡

熊本市東部の白川右岸の丘陵上に位置する遺跡で、前述の庵の前遺跡に近接する。『アカホヤ』を含む第IV層(暗褐色土)上面から、押型文土器や後・晩期の土器と共に出土している。土器は、少量の出土で条痕調整の後、口縁部に隆帯を横位に貼り付けた轟B式1類土器と、膨らむ胴部に刻目隆帯と押引き文を併用した文様をもつ轟B式3類土器の二種類である。なお、同調査区からは多量の曽畑式土器も出土しているが、地点を異にしている。

#### 5. 松ノ木坂遺跡

阿蘇外輪山の裾野で、標高600~700mの台地上に位置し表面採集資料である。土器には、隆帯をもつものはなく、口唇部に刻目をもち、横と斜方向の条痕により文様らしきものを施した土器群と、内外面を条痕による調整を行った後流水状または波状に文様らしきものを施した土器群がある。前者は特徴より轟A式、後者は轟C式であろう。共に、塞ノ神式土器や曽畑式なども出土している。

#### 6. 谷頭遺跡

阿蘇外輪山の西斜面で、標高約400mの舌状台地上に位置し第Ⅲ層上面(アカホヤ?)から一括して出土している。土器は、1個体だけで条痕調整の後細い隆帯を横位に貼り付けたもので、器高が高く細身の深鉢である。ఓ\_\_\_"は、平底を呈する。報文では轟B式に近似する土器としている。この他に、塞ノ神式土器や手向山式土器、それに後・晩期の土器も出土している。

# 7. 桑鶴土橋遺跡

阿蘇外輪山の西麓で、台地上に位置している。遺物は、『アカホヤ』が含まれると考えられる 第IV層(黄褐色土)中からの出土で、隆帯を横位に貼り付けた轟B式土器と隆帯に刻目を施した 轟B式3類土器、それに波状の文様らしきものを施した轟C式、隆帯を縦に貼り付けた口縁部を もつ土器などが出土している。轟C式土器の底部は、丸底のようである。この他に、同層からは 曽畑式土器が多量に出土している。

## 8. 岩立C古墳

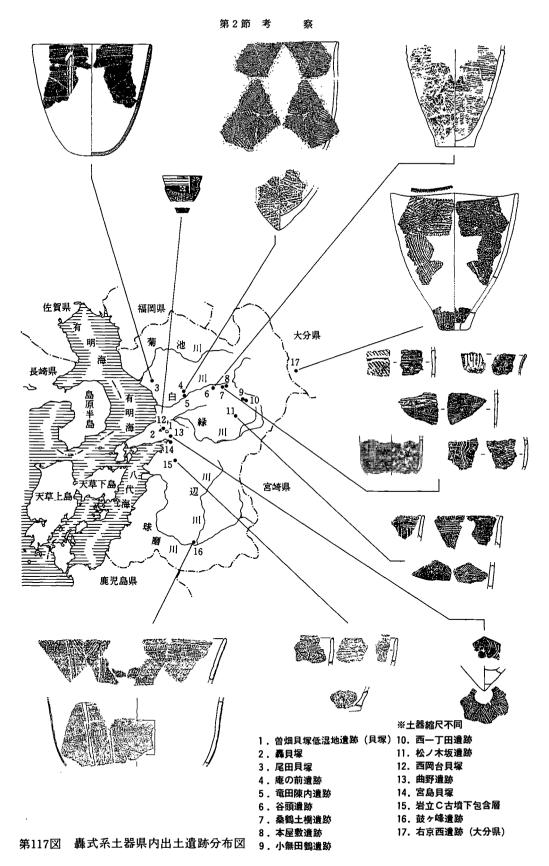
谷に向かって舌状に延びる徴高地の先端部に位置し、古墳の墳丘下部包含層中より出土した。

『アカホヤ』層との関係は明らかでない。出土土器は、口縁部に隆帯を横走させ貼り付けた轟B式土器と、条痕だけの轟A式土器、条痕調整の後流水状あるいは波状の文様らしきものを施した轟C式と考えられる土器が出土している。また、2点ではあるが、轟式のものと考えられる平底の底部片が出土している。他に、同層からは撚糸文土器も共伴して出土している。

### 9. 鼓ヶ峰遺跡

球磨盆地を流れる球磨川の右岸でシラスを基盤とした舌状の台地上に位置し、土器は、VIa層(黄褐色砂質土)中より出土しており、下層のVIb層(黄褐色粘質土)が『アカホヤ』である。出土土器は、ナデによる丁寧な器面調整を行った後、内面口縁部と外面全体に3~5条単位の押引き文を口縁部より間隔をおいて平行に施文し、さらに上から細い隆帯を貼り付けている。隆帯は、縦と横を組み合わせたモチーフをもつ。同層からは、曽畑式土器なども共伴して出土している。また、『アカホヤ』の下層であるVII層からは押型文土器と共に、内外面または片方に条痕をもつ土器も出土している。

以上、県内に於いて出土した轟式土器について簡単に述べたが、問題点と出土遺跡の時期的な 位置について若干触れてみたい。まず、各遺跡共に4型式に分類された轟式土器の中で1型式単 独で出土した所は少なく、ほとんど複数の型式が同一層から出土する傾向が認められる。庵の前 出土の土器で、A式とされている波状の文様らしきものを施す土器は、C式と判断でき、A式と C式土器の共伴と捉えて可能であろう。また、松ノ木坂・岩立C古墳包含層出土の轟式にも同様 に捉えられる。桑鶴土橋の場合は、B式1類とB式3類土器ならびにC式土器が共伴状態で出土 している。これらの事例は、A式とC式土器が共存する可能性を強く示したものと見れよう。こ のような、各遺跡に於ける轟式土器の出土傾向は、今回曽畑貝塚低湿地の調査で出土した轟式土 器がA式とC式土器が共存すると判断できることと同じくしている。加えて、ここではB式土器 も共伴しているのである。このように見てくると、A式とC式土器は、胎土や焼成、器面調整、 器壁の厚さなどに、種々の類似点が認められる。すなわち、時期を異にしてC式土器を分離する ことには疑問が持たれる。とすれば、M編年の再考を必要としてくるが、さらに類例の増加を待 ちたい。轟式の底部は、轟貝塚を含め曲野遺跡・庵の前遺跡・谷頭遺跡・桑鶴土橋遺跡・岩立C 古墳下包含層の6遺跡で出土している。曲野と庵の前は、A式のものと考えられる尖底の底部、 桑鶴土橋はC式で丸底の底部である。轟貝塚は、A式が尖底あるいは丸底の底部で、B式とC式 は平底であろうとされている。しかし、明確に全体を復原できるものはなく、捉え方もあいまい であると言わざるをえない。また、岩立Cの平底底部片を、調査者は轟式のものとされている が、一方は、底径が大きく底部と体部の境が丸くなりほぼ直に立ち上がる。また、同層からは撚 糸文土器も出土していることなどから塞ノ神式土器の底部である可能性が強い。他方は、明確 な底部片ではなく復原であり尖底とも考えられることから、これも轟式に平底の底部が存在する という明確な事例とはできまい。今回の曽畑の調査に於いても平底の底部は出土していない。谷 頭遺跡の隆帯をもつ平底の深鉢は、大分県直入郡荻町に所在する右京西遺跡の『アカホヤ』火



第Ⅳ章 分析・考察

第11表 熊本県内出土の轟式系土器編年

| 早期 |    | 谷頭・庵⊄ | 前遺跡         |      |                     |
|----|----|-------|-------------|------|---------------------|
|    |    | アカホヤ  |             |      |                     |
|    | 初頭 | 轟貝塚   | 曽畑貝塚<br>低湿地 |      | ン木坂・桑鶴土橋遺跡<br>墳下包含層 |
|    | 前  |       |             |      |                     |
| 前  |    |       |             | 竜田陳内 | ]遺跡                 |
|    | 半  |       |             | 尾田・鼓 | ケ峰遺跡                |
| 期  | 後半 |       | 曾           | 畑    | 式                   |

山灰直下の層から出土した土器に類似し、このほか県内では類例を見ない。調査者は、従来の轟式範疇に含めないとして、新たに轟1・2式として形式設定を行っている。『アカホヤ』 火山灰直下からの出土であることから、轟式の中でも古式と考え、また、轟式の底部は平底→尖底・丸底に変化するとしている。この土器は、轟式とするかどうかが論議されている。少なくとも、県内で轟式の平底の存在を確認した事例は他にない。B式は丸底で、A式とC式は尖底または丸底である。B式は現在のところ、『アカホヤ』直上より出土するのが一般的で、県内の事例もそのことを如実に示している。しかし、A式やC式については『アカホヤ』直下の層までさかのぼる可能性があり、庵の前の事例がその可能性を示唆している。ちなみに、今回の曽畑の調査に於いて地質分析を実施したところ、『アカホヤ』の火山ガラスは第16層中に多量に含まれるという分析結果がでている。尾田・鼓ヶ峰出土の轟式は、器面調整や文様モチーフに於いて従来の轟式とは異にしており、今のところ県内・県外を含め他に類例を見ない土器である。しかし、隆帯を持ち押引きを併用することや器形に於いて共通する部分も認められる。出土した両遺跡に於いては、同じ層より曽畑式を共伴する共通点があり、調査者が言うように轟式の発展形態で捉えられるのであろうか。今後、類例資料の出現が待たれる。

以上、簡単に県内資料について述べてきたが、最後に各遺跡間の時期的な前後関係を見てみたい。現在のところ、県内で一番古く編年できるのは、『アカホヤ』直下の層から出土した右京西タイプと類似する土器が出土した谷頭遺跡と、A式とC式土器が同じく『アカホヤ』直下から出土した庵の前遺跡の2遺跡があげられる。次には、『アカホヤ』を挟み轟貝塚・曽畑貝塚低湿地遺跡・曲野遺跡・松ノ木坂遺跡・桑鶴土橋遺跡・岩立C古墳下包含層と6遺跡が来る。ただし、轟貝塚・曽畑貝塚低湿地遺跡は曽畑期まで継続的に営まれているようである。残りの4遺跡は、ほぼ同時期ぐらいで若干前後するかもしれない。その後には、竜田陳内遺跡、最後に轟式の中でも新しい時期に尾田貝塚・鼓が峰遺跡という時期関係が考えられよう。

#### 第2節考察

第12表 轟関係引用・参考文献一覧

麻生 優 「長崎県岩下洞穴」『日本の洞穴遺跡』1967

麻生 優 『岩下洞穴の発掘記録』中央公論美術出版 1968

麻生 優・下川達弥 『下本山岩陰』佐世保市教育委員会 1972

網谷克彦 「北白川下層式土器」『縄文文化の研究』第3巻 雄山閣 1982

網谷克彦 「福井県鳥浜貝塚の資料」『縄文研究会第2回大会発表資料』 1985

池水寛治他 『荘貝塚』〔出水市文化財調査報告書〕1 1979

泉 拓良 「近畿地方の早期末~前期初頭」 『西日文縄文文化研究会第2回大会発表資料』 1985

犬飼徹夫 「狩猟・魚撈の生活と文化」『愛媛県史』原始・古代1 1982

植田 真 『陰田』 米子市教育委員会 1984

内田律雄 「西川津遺跡出土の土器」『縄文研究会第2回大会発表資料』 1985

補田信智 『曲野遺跡Ⅲ』〔熊本県文化財調査報告〕第75集 熊本県教育委員会 1985

江坂輝彌 「入門講座縄文土器―九州編(5)―」『考古学ジャーナル』12 1967江坂輝彌 「入門講座縄文土器―九州編(6)―」『考古学ジャーナル』15 1967

江坂輝彌 「西北九州地方の縄文文化と朝鮮半島南部の先史文化」 『考古学ジャーナル』183号1980

江坂輝彌 「縄文文化の起源を探る」『列島の文化史』 2 1985

及川民次朗 「南朝鮮牧ノ島東三洞貝塚」『考古学』第4巻第5号 1933

太田正康 『上福万遺跡・日下遺跡・石川府第1遺跡・石川府古墳群』 島根県教育文化財団 1985

太田正康 『下山南通遺跡』島根県教育文化財団 1985

岡田敏彦 『長田遺跡』〔一般国道33号砥部道路関係埋蔵文化財調査報告〕Ⅱ

(財) 愛媛県埋蔵文化財調査センター 1981

緒方勉・木﨑康弘 「庵の前遺跡」『日本考古学年報35』 1982

乙益重隆 「九州西北部縄文文化の発展と地域性」『日本の考古学』 Ⅱ 1966

小畑弘巳 「矢部町名連川の縄文時代遺物」『赤れんが』創刊号 赤れんが出版会 1981 賀川光夫他 「大分県枌洞穴発掘調査概報―第1・2次調査―」『考古学論叢』Ⅲ 1977

角田政治 『熊本縣誌』 1917

片岡 肇 「手向山式土器の研究」『平安博物館紀要』1 1972

加納 梓 「蟲C・D式と第四類土器について」『長崎市立深堀小学校校舎増築に伴う埋蔵文化財緊

急発掘調査報告書』 1984

鎌木義昌・木村幹夫 「各地域の縄文式土器 中国」『日本考古学講座』 3 1956 河口貞徳 「鹿児島県片野洞穴発掘調査概報」『九州考古』 24 1965

河口貞徳 「黒川洞穴」『考古学ジャーナル』10号 1967 河口貞徳 「鹿児島県片野洞穴」『日本の洞穴遺跡』 1967

河口貞徳 「塞ノ神式土器と轟式土器」『鹿児島考古』第19号 1985 木村幹夫 「鹿児島縣大口盆地の遺跡」『考古學雑誌』第22巻第10號

栗田勝弘 『平草遺跡』〔大分県日田郡天瀬地区遺跡群発掘調査報告書〕 天瀬町教育委員会

甲元眞之 「先史時代の対外交流」『日本の社会史』第1巻 1987 小島俊彰 『極楽寺遺跡発掘調査報告』富山県教育委員会 1965

小都 隆 『洗谷貝塚』福山市教育委員会 1976

小林久雄 「九州縄文土器の研究」『人類学先史学講座』第11巻 1939

小原貴樹他 『目久美遺跡』鳥取市教育委員会 1986 坂田邦洋 『韓国隆起文土器の研究』 1978

坂田邦洋 『対馬越高尾崎における縄文前期文化の研究』 〔別府大学考古学研究室報告〕第 3 冊 1979

坂田邦洋 「九州縄文早・前期土器の編年」『史学論叢』11号 1980

# 第Ⅳ章 分析・考察

坂田邦洋 「尾田貝塚」『史学論叢』第12号 1981

坂田邦洋 「九州産黒曜石からみた先史時代の交易(一)」 『賀川光夫先生還暦記念論集』 1982

坂本嘉弘 『右京遺跡』〔荻台地の遺跡Ⅱ〕大分県教育委員会

潮見 浩 「月崎遺跡」『宇部の遺跡』 1968

潮見 浩 『帝釈観音堂洞穴遺跡の第2~4次調査』〔帝釈峡遺跡群の調査Ⅲ〕 1968

潮見 浩 『広島県尾道市大田貝塚発掘調査報告』〔広島県文化財調査報告〕 第9集 1971

潮見 浩 「本州西端地域の縄文前期土器」『鏡山猛先生古希記念古文化論攷』 1980

宍道正年 『島根県の縄文式土器集成』 1974

宍道正年 「県下における縄文早期ないし前期土器の一様相―いわゆる轟式系統土器の発見」『季刊

文化財』第23号 1974

宍道正年 「島根県の縄文土器研究の問題」『山陰考古学の諸問題』 1986

新東晃一 『下剥峯遺跡の調査』西之表市教育委員会 1978

新東晃一 「火山からみた南九州縄文早期・前期土器の様相『鏡山猛先生古希記念古文化論攷』1980

新東晃― 「南九州の縄文時代包含層の構造―特に縄文時代早・前期を中心にして―」『鹿児島の歴

史と文化』鹿児島県歴史資料センター刊 1984

新東晃一 「南九州の時代区分について」『考古学研究』第33巻第2号 1986

鈴木文太郎 「河内國府及肥後蟲に於ける人骨の発見を報し、及び日本石器時代住民に及ぶ」『京都帝

國大學文學部考古學研究報告』第2冊

鈴木文太郎 「肥後躡貝塚河内道明寺等にて發掘せる人骨に就いて」 『人類學雑誌』第33巻第3號

高橋信武 『右京西遺跡 荻台地の遺跡 X』荻町教育委員会 1986

多々良友博・森田孝志『金立開拓遺跡』佐賀県教育庁文化課 1984

橘 昌信 『大分県二日市洞穴発掘調査報告書』別府大学付属博物館 1980

田中良之 「新延貝塚の所属年代と地域相」『新延貝塚』 鞍手町埋蔵文化財調査会 1980

出口 浩・池畑耕一 『上焼田遺跡』 [鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告] (5) 1977

富永直樹 『野口遺跡』〔久留米市文化財調査報告書〕第28集 久留米市教育委員会 1981

中越利夫 「帝釈峡遺跡群出土の縄文前期土器の研究(1)」 『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査

室年報』VII 1985

長井数秋他 『古代の松山平野』松山市教育委員会 1982

中島直幸・田島龍太 『菜畑』〔唐津市文化財調査報告書〕第5集 唐津市教育委員会 1982 中村修身 「福岡県直方市日出橋遺跡の縄文土器」『九州考古学』41~44 1971

西住欣一郎 『鼓ヶ峰遺跡』〔熊本県文化財調査報告〕第96集 熊本県教育委員会 1988

橋本澄夫 「石川県能登半島佐波縄文遺跡の研究」『石川考古学研究会誌』 第10号 1966

濱田耕作・島田貞彦 『薩摩國出水町尾崎貝塚調査報告』 「京都帝國大學文學部考古學研究報告」第6冊

広瀬雄一 『韓国隆起文土器論―編年を中心として―」『異貌』第11号 1984

広瀬雄一 「韓国隆起文土器の系譜と年代」『異貌』12号 1986

広瀬雄一 「韓国離島域の生産活動の諸問題」『考古学の世界』 5 号 学習院考古会 1986

藤田憲司他 「羽島貝塚の資料」『倉敷考古館研究集報』第11号 1975 ト部吉博 『タテチョウ遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会 1979

増子康眞 「北白川下層式土器の再検討」『考古学研究』第29巻第1号 1982

松岡 史 「第二編古代」『唐津市史』 1962

松岡 史・橘 昌信他『五島大板部洞窟の調査―縄文時代の水中貝塚―』大板部洞窟調査団 1986

松岡 史・森 醇一郎「佐賀県西唐津海底遺跡出土の縄文土器」『考古学ジャーナル4』 188号 1981

松藤和人他 『伊木力・熊野神社遺跡発掘調査概報』多良見町教育委員会 1985 松藤和人他 『伊木力遺跡―第2次発掘調査概報』多良見町教育委員会 1986

#### 第2節考察

松村道博他 『谷頭遺跡調査報告』谷頭遺跡調査団 1978

松村 瞭 「琉球荻堂貝塚」『東大理學部人類學研究報告』第三編 松本雅明・富樫卯三郎「矗式土器の編年」『考古学雑誌』第47巻第3号 1961

丸山伸治・平井浩一 『竜田陳内遺跡』[熊本県文化財調査報告] 第98集 熊本県教育委員会 1988

三森定男 「肥後轟貝塚の土器に就て一覚書—」『考古学』 第6巻第2号 1935 三森定男 「肥後轟貝塚の土器に就て一續編—」『考古学』 第6巻第5号 1935

三森定男 「九州縄文土器に於ける一形式」『ドルメン』

宮本一夫 「近畿・四国地方における縄文前期初頭の土器細分」 『京都大学構内遺跡調査研究年報』

昭和59年度 1987

村井眞輝他 『五ツ穴古墳群』〔熊本県文化財調査報告〕第34集 熊本県教育委員会 1979

山口信義
「隆帯文(轟B式)土器研究ノート」

『(財) 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室紀要』創刊号 1987

横山將三朗 「釜山府絶景島東三洞貝塚報告」『史前學雜誌』 5-4

和田吉之助・富樫泰時『神沢海岸遺跡発掘調査報告書』本庄市教育委員会

金延鶴 「幾何文(櫛文)土器の編年」『考古学ジャーナル』183 号 1980

金元龍(訳)西谷 正『韓国考古学概説 増補改訂版』 1984

鄭澄正(訳)宮本一夫「韓国南海岸地方における隆起文土器の研究」 『考古学雑誌』第72巻第2号 1986

大分県 『大分県史 先史編1』 1983

志分志町教育委員会 『別府遺跡』〔志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書〕 1979

帝釈峡遺跡調査団編 『帝釈峡遺跡群』 1976

金峰町教育委員会 『阿多貝塚』〔金峰町埋蔵文化財調査報告書〕第1集 1978

熊本大学考古学研究室『桑鶴土橋遺跡』〔研究室活動報告5〕 1979

# 8. 縄文時代前期「曽畑式土器」について

# (1) 曽畑貝塚の調査の歴史

曽畑貝塚の調査の歴史は古く明治中期にのぼり、日本の考古学の進展に当初から参加してきており、九州地域においてもっとも早くから注目されてきた遺跡である。そして日本国内の縄文時代研究の枠を越えて、早くから大陸との関連が問われてきたことも周知のことである。

「古くはA, B地点の周囲の水田一面にも貝殻が在ったのだが明治年間に掘り下げて水田とせられたのであった。」とは、清野謙次氏(1969)『日本貝塚の研究』に記せられた、本来の曽畑貝塚の分布状況・範囲を明確に教えてくれる貴重な報文である。明治年間に「貝殻をとって石灰に焼く」という商業が行われた程に大規模の貝塚であったことが知れるし、現存する貝塚へと一帯となり繋がっていたことも理解される。曽畑貝塚が学会に初めて登場するのは若林勝邦氏(1890)『東京人類学会雑誌』第5巻第49号であり、中山平次郎氏(1918)『考古学雑誌』第8巻第5号「肥後国宇土郡花園村岩古曽字曽畑貝塚の土器」が著名である。発掘調査は行われておらず採集された土器や石器の紹介が行われたものであるが、当時から「細形刻紋」土器として注目され朝鮮半島の土器や南島から出土する土器との関連に注目されてきている。

1923年に清野謙次氏の発掘調査が実施されている。土器では轟式土器・曽畑式土器・阿高式土器・鐘ケ崎土器などが出土しており時期的に複合した貝塚であることが知られ、石器や貝類など豊富な遺物が出土している。曽畑式土器の文様について(1)点線並列紋、(2)短直線或いは長めの直線の並列紋、(3)短直線を斜めに並列させて羽状とした紋様、(4)直線を組み合わせて重複三角形に近い紋様、(5)直線を組み合わせて重ねた四角形紋様、(6)直線を組み合わせて重ねた菱形紋様との分類が行われており、それは今日の分類作業の原典ともなっている。

宇土半島基部には当時から著名な貝塚が多く宇土市轟貝塚、松橋町大野・宮島貝塚、城南町阿高・御領貝塚などがあり、九州の貝塚研究の先駆をなしてきている。1930年鳥居龍蔵の来熊により御領貝塚の発掘調査が行われ、これを契機に肥後考古学会が発足し、地元の研究者による本格的な活躍が始まることになる。著名である小林久雄氏の『肥後縄文土器編年の概要』(1935)、『九州の縄文土器』(1939)などの発表がある。曽畑貝塚にも小規模の発掘調査を行ったり、幾度となく通われ曽畑式土器の分析と編年的位置づけが行われることになる。

氏による曽畑式土器の位置づけは当時の少ない資料、大規模の発掘調査ができないなかにあって大きな変移を見ながら見事な編年大系が築き上げられている。当初、「肥後縄文土器の上限に阿高式土器を置くことは、大体に於いて許容されるべきこと」との視点から轟式土器・曽畑式土器は後行するものとされながら、一方においては関東や中国地方の貝塚調査に於ける層位的事例に比較して阿高式土器を最上限に位置づけることに疑問も発せられている。『縄文式土器の研究』。

肥後の縄文式土器

|                   | 形            | 式                               | 名                                     |  | _  |
|-------------------|--------------|---------------------------------|---------------------------------------|--|----|
| 早水台<br>沈 目<br>戦場谷 |              |                                 |                                       |  | 早  |
| 田中白坂石清水           | 石 坂          | 曽 畑 日勝山                         | 量                                     |  | 期  |
|                   | 吉 田          | 手向山                             | · · · · · · · · · · · · · · · · · · · |  | 前  |
|                   | 塞ノ神          |                                 |                                       |  | 期  |
| 竹崎                |              | 阿頭 出南<br>地水寺<br>宿               | 岩彩                                    | ·<br>·<br>·<br>·<br>·<br>·<br>·<br>·<br>·<br>· | 中期 |
|                   | 御手洗 A<br>市 来 | 渡鹿(西原<br>鐘ヶ所<br>御手洗 B<br>西 万田 K | 夏) 和                                  | 重 野  | 後期 |
|                   |              | 御 領<br>ワクド石<br>黒 川              |                                       | :  | 晚  |
|                   |              | (三万田 E<br>山ノ寺<br>夜 臼            | )<br>                                 |  | 期  |

小林久雄(1939)(『城南町史』より 一部補記)

但し、阿高式土器とは製作技法の相違、文様の著しい相違が指摘され、直接的な推移を否定。「全く他の文化的要素の介入と考えざるを得ない」とされた。そして、「轟式土器が茅山式土器並びに東三洞土器に類似すると同様に、此種土器も東三洞及牧ノ島瀛仙町貝塚土器と対比すべきもので、其三角組合文及異方向の集束平行線の組合の如き、文様としての類縁を辿る事が出来やう。尚南方奄美大島の土器にも多少の類縁があるのであろうが、殊に琉球土器との関係は相当密接なものがあり、恐らくは之等が琉球土器の祖原を成すものであろう。」との記述は今日にして揺るぎのない視点となっている。

『御手洗遺跡の土器に就いて』において御手洗式土器の分類位置づけに関して大きな展開が見られる。御手洗遺跡出土土器の分類により、ついには縄文の施文形態を通して阿高-御手洗-西平-御領との変遷に到達されているのである。ここで、いまだ轟式土器、曽畑式土器とも御手洗式土器の範疇としながら、松橋町宮島貝塚の発掘調査を通しての轟式土器と曽畑式土器との層位的上下関係を重視し前者が古いこと、そして轟式土器がかなり古くなるとの予感を感ぜられるのである。

『薩摩国枕崎町花渡川遺跡』によって第一類(細形刻文)、第二類(条痕文)、第三類(隆起線文)、第六類(太形凹文)との分類がおこなわれ、曽畑式土器及び轟式土器が層位的な確証はな

いとしながらも古く位置づけはじめられている。そして、『肥後の縄文式土器』に到って明確に阿高式土器から御領式土器へとの系統を論ぜられるとともに「私は以前の考えよりも轟・曽畑を」古く考えています。これは阿高、其の他と、直接に関係づける関連性が非常に少ないのであります。」と記述がなされているのである。

戦後は1959年、慶応大学考古学研究室江坂輝彌氏を中心とした調査団による発掘調査が実施されている。現在、曽畑東・西貝塚と呼ばれる一帯の調査であり、東西50m×幅2mと直交する10m×2mを2本、合計3本のトレンチを設けて実施されている。以下、当時地元で報じられた成果を見ると、まず清野謙次氏の調査地点を中心としていた貝塚の分布範囲は、北側の台地まで拡がっていることを明らかにして、東貝塚と西貝塚とに分けられることが判明している。東貝塚は縄文後期を主体としているが、西貝塚は縄文早期から後期まで4層に分層ができている。「表土下20cmのところに厚さ20~30cmの第1貝塚があり、出土する土器は縄文後期のものに限られる。その下部が第 ■ 層で厚さ10cmの土。第 ■ 層は貝層で30cm、礫が多く貝もハマグリなど大型のものばかりで、出土する土器は弧線文(上部)直線文(下部)の特徴がはっきりした曽畑式だった。第 ■ 層は褐色土が40cmほどあり、その下は赤粘土になっている。第 ■ 層に含まれる土器には貝殻条痕文や細い隆起線の文様があり曽畑式よりも古いものと推定されている」。

今日の考古学調査成果から付近の土層と比較すれば、第 V 層の赤粘土が「鳥栖ローム層」に相当し、第 IV 層は本来的であれば下位から「ニガシロ層」 - 「黒褐色粘質土層」 - 「黄褐色土・アカホヤ層」となりそうである。40cmの厚さがあることから「アカホヤ」をめぐる層位的把握のできる可能性を有していると見れよう。出土した曽畑式土器は深鉢と鉢形土器であるが、明確に横位の区画を施したり、刺突文を施文した土器が見られず、短直線や山形文を複合させる資料が多い。縦位の区画を施したり、短直線を主とした口縁部内面の施文率が高いようである。清野謙次氏の発掘調査出土資料では、横位の区画をなし、刺突文や複合鋸歯文を施した資料が報告されている。今回の発掘調査でも後者の資料の出土があり、これらの資料比較・分析作業を必要としている。

1976年建設省一般国道 3 号松橋バイパス建設計画に伴い、熊本県教育委員会が貝塚の西南方向約100m離れた水田地に試掘調査を実施。縄文時代前~後期の良好な包含層を検出しており、両者の協議を進め今回の調査に至っている。貝類も若干出土しており貝塚が拡大する可能性も考えられ、また検出された曽畑式土器には口縁部に刺突文を施したものも見られ、土器内容の拡充も期待された。

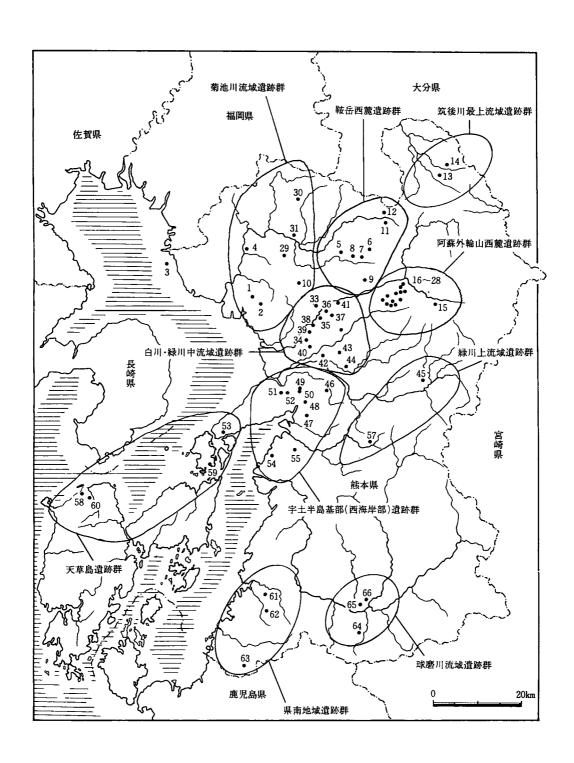
### (2) 熊本県内出土の曽畑式土器

今日まで熊本県内から出土した曽畑式土器の遺跡地名と関係文献目録を次表の通り作成している。

| 番号                   | 著 者   | 報告名   | 文 献 名   | 巻 数                 | 年 代                          |
|----------------------|---|---|---|---------------------|------------------------------|
| 1<br>2<br>3<br>4     | 若林 勝邦<br>中山平次郎<br>清野 謙次<br>同  | 肥後旅行記<br>肥後国宇土郡花園村岩古曽字曽畑貝塚の土器<br>肥後国宇土郡花園村大字岩古曽字曽畑貝塚<br>日本原人の研究                                       | 東京人類学雑誌<br>考古学雑誌<br>歴史地理                      | 5-49<br>8-5<br>43-2 | 1890<br>1918<br>1924<br>1925 |
| 5<br>6<br>7<br>8     | 小林 久雄<br>小林 久雄<br>乙益 重隆   | 日本原人の研究<br>九州の縄文土器<br>肥後縄文土器編年の概要<br>肥後組文土と編年の概要<br>肥後出来原治療施度   | 人類学先史講座<br>考古学評論                              | 11巻<br>1-2          | 1935<br>1953<br>1954         |
| 9<br>10<br>11        | 松尾 禎作<br>乙益 重隆<br>江坂 輝彌   | 佐賀県西唐津海底遺跡<br>肥後のあけぼの<br>熊本県上益城郡カキワラ貝塚<br>曽畑貝塚発掘調査報告  | 日本考古学年報 4<br>日本の歴史 I<br>日本考古学年報<br>第15回日本人類学会 | 8                   | 1955<br>1958<br>1959<br>1960 |
| 12                   | 松本 雅明<br>富樫卯三郎  | 轟式土器の編年   | 研究発表抄録<br>考古学雑誌                               | 47-3                | 1961                         |
| 13<br>14<br>15       | 杉村 彰一<br>  同<br>  賀川 光夫   | 曽畑式土器文化に関する一考察<br>曽畑式土器論考<br>曽畑式土器に関する一考察   | 熊本史学<br>九州考古学<br>同                            | 23<br>24<br>22      | 1962<br>1965<br>1964         |
| 16<br>17<br>18       | 坂田 邦<br>城坂 斯<br>江  近  近  近  近  近  近  近  近  近  近  近  近   | 城南町史<br>縄文土器 九州編 (6)<br>縄文文化の発展と地域性(0) 九州西北部  | 考古学ジャーナル<br>日本考古学Ⅱ縄文<br>時代                    | 13号                 | 1964<br>1967<br>1967         |
| 19<br>20             | 清野 謙次<br>中村 愿   | 肥後国宇土郡花園村大字岩古曽字曽畑貝塚<br>曽畑式土器  | 日本貝塚の研究<br>  縄文文化の研究 (雄<br>  山閣)              |                     | 1969                         |
| 21<br>22<br>23<br>24 | 佐世保市教<br>坂田 新洋<br>近田 朝<br>野   | <ul><li>▼ 下本山岩陰<br/>曽畑式土器に関する研究 江湖貝塚<br/>「原始」<br/>曽畑式土器に関する研究 尾田貝塚<br/>曽畑式土器に関する研究 曽畑式土器の形態</li></ul> | <b>童</b> 北村史                                  | :                   | 1972<br>1973<br>1973<br>1974 |
| 25<br>26<br>27       | 同 同 同 同 同 工本 直他   | 胃畑式土器に関する研究 胃畑式土器の形態<br>対馬越高尾崎における縄文前期文化の研究<br>微雨・曽畑  | 熊本県文化財調査報<br>告第19集                            |                     | 1975<br>1975<br>1976         |
| 28                   | 江坂 輝彌   | 朝鮮半島櫛目文土器文化と西九州地方縄文前<br>期文化の曽畑式土器との関連性について  | 考古学ジャーナル                                      | 128号                | 1976                         |
| 30                   | 佐賀県立博<br>館<br>金峰町教委   | 勿   九州の原始文様<br>  阿多貝塚   | 金峰町埋蔵文化財調                                     |                     | 1977                         |
| 31                   | 松本 健郎   | 菊池川流域文化財調査報告書   | 查報告書(1)<br>熊本県文化財調査報<br>告第31集                 |                     | 1978                         |
| 32<br>33             | 松村 道博   | 晶 中後迫遺跡調査報告<br>曽畑土器考  | 「九州の原始文様」<br>佐賀県博                             |                     | 1978<br>1978                 |
| 34<br>35             | 髙宮 廣衛<br>江坂 輝彌  | 縄文時代の沖縄諸島<br>朝鮮半島と西北九州 櫛目文系土器と曽畑式<br>土器   | 同 上   |                     | 1978<br>1978                 |
| 36                   | 熊本大学考<br>学研究室   | 古   桑鶴土橋遺跡(2)   | 研究室活動報告(5)                                    |                     | 1979                         |
| 37<br>38             | 坂田 邦洋<br>福岡市教委  | C14年代からみた九州縄文時代の編年<br>四箇周辺遺跡調査報告書(4)  | 別府大考古学研究報<br>告2 福岡市埋蔵文<br>化財調査報告書63           |                     | 1979<br>1981                 |
|                      | 久留米市教   |   | 久留米市文化財調査<br>報告第28集                           | 100 =               | 1981                         |
| 40                   | 松岡  | 佐賀県西唐津海底出土の縄文土器<br>いわゆる曽畑式土器の問題   | 考古学ジャーナル                                      | 188号<br>188号        | 1981                         |
| 42<br>43<br>44       | 元<br>定工町教委<br>田中 良之<br>賀川 光夫  | 字田川<br>宇田川<br>曽畑式土器の展開「末盧国」<br>曽畑式文化について  | 1.2HIT / 1.2                                  | 100 7               | 1981<br>1982                 |
| 45<br>46<br>47       | 日<br>日<br>日<br>日<br>島<br>日<br>恵<br>原<br>村<br>教<br>妻<br>一<br>変<br>り<br>し<br>で<br>り<br>し<br>で<br>り<br>り<br>り<br>り<br>り<br>り<br>り<br>り<br>り<br>り<br>り<br>り<br>り<br>り | 菜畑遺跡縄文前~中期の土器群の編年と様相<br>  西原村の史跡と文化財<br>  深堀第Ⅲ群土器について   | 菜畑<br>深堀小学校                                   |                     | 1982<br>1982<br>1983         |
| 48<br>49<br>50       | 五和町教委<br>平田 豊弘<br>久原 巻二   | │ 沖ィ原遺跡<br>也│「原始・古代」<br>│ 西北九州沿岸の沖積世海面変化  | 苓北町史<br>長崎北陽台紀要(1)                            |                     | 1984<br>1984<br>1985         |
| 51<br>52             | 松藤 和人<br>  水ノ江和同<br>  | 也 伊木力遺跡 第2次発掘調査概報<br> 西北九州における曽畑式土器の諸様相<br>   | 多良見町教育委員会                                     |                     | 1986<br>1987                 |
| 53                   | 甲元 真之   | I 先史時代の対外交流   | 日本の社会史第1巻<br>列島内外の交通と国家                       |                     | 1987                         |
| 54                   | 浦田 信智   | 扁│曲野遺跡Ⅲ   | 熊本県文化財調査報告                                    | 第75集                | 1985                         |

第Ⅳ章 分析・考察 第14表 熊本県内曽畑式土器出土遺跡一覧表

| Nα         |              | 跡                      | 名                    |   | 所                 | 在            | 地                       |     | 調        | 査       | 遺        | 物        | 保  | 管   | 文        | 献 |
|------------|--------------|------------------------|----------------------|---|-------------------|--------------|-------------------------|-----|----------|---------|----------|----------|----|-----|----------|---|
| 1 2        | 竹崎貝塚<br>尾田貝塚 |                        |                      | 玉名郡                                     | 天水町               | 「竹崎<br>尾田    |                         |     | 発掘訓      |         | 玉名<br>天水 | 高校<br>町参 | 杏玉 | 昌会  | 2·<br>2· |   |
| 3          | ヒイデン         | / 洲海底道                 | 遺跡                   | "                                       | 長洲町               | 「ヒイデン        | 洲                       |     | 採        | 集       |          |          |    |     |          |   |
| 4          | 若園貝均         | ₹                      |                      | //<br>-#- \ul. =#                       | 菊水町               | 「大字江田        | 字若闌                     |     | 発掘訓      | 問査      | 菊水       | 町歴       | 民資 | 料館  | 1.       |   |
| 5<br>6     | 松ケ平桜ケ水       | 運跡<br>遺跡               |                      | 衆他却                                     | 心心心へ              |              | 字松ケ平                    | 1   | 採 //     | 集       |          |          |    |     | 3<br>2:  |   |
| 7          | 御願所も         |                        |                      | "                                       |                   | 「字御願所        | 七尾                      |     | "        |         |          |          |    |     | 2        |   |
| 8          | 牟田平進         | 掛跡                     |                      | "                                       | "                 | 牟田平          |                         |     | 発掘訓      |         | 菊池       |          |    |     |          |   |
| 9          | 中後迫          | 遺跡                     |                      | ",                                      | ボムコ               | 中後迫<br>町字野々  | <b>É</b> L.             | İ   | 採"       | 集       | 熊本       | 県教       | 育委 | 貝会  | 32       | 2 |
| 11         | 野々島 水源石川     | 遺跡                     |                      |   | 大字水               | 《源字石川        | ATT                     | -   | и<br>″   |         |          |          |    |     |          |   |
| 12         | 伊野遺跡         | js                     |                      | "                                       | 房                 | 「字伊野         |                         | 1   | "        |         |          |          |    |     |          |   |
| 13<br>14   | 満願寺と<br>田の原  | : ゼンコ <b>道</b><br>: 海味 | 部                    | 阿穌郡                                     |                   |              | j願寺ヒゼン<br>Iの原           | / = | 発掘訓      |         |          |          |    |     |          |   |
| 15         | カスポ野中        | · 校庭遺跡                 | <b>f</b>             | ",                                      |                   |              | ,水野中校庭                  |     | 加加       |         |          |          |    |     |          |   |
| 16         | <b>包子莨目</b>  | - 滑跡                   | •                    | "                                       | 西原町               | 「息子真日        |                         | _   | "        |         | 西原       |          |    | 員会  | š        |   |
| 17         | 古関・遺標の平      | 跡                      |                      | "                                       | "                 | 古閑           |                         |     | "        |         |          | ,        |    |     |          |   |
| 18<br>19   | 祭の平          | 退跡<br>3 滑跡             |                      | ",                                      | "                 | 襟の平<br>宮山牟田  | ì                       |     | "        |         |          | ,        |    |     |          |   |
| 20         | 宮山本村         | 遺跡                     |                      | "                                       | "                 | 宮山本村         | İ                       |     | "        |         |          | ,        | ,  |     |          |   |
| 21         | 宮山宮の         | )後 遺跡                  |                      | "                                       | "                 | 宮山宮の         |                         |     | "        |         |          | ′.       |    |     |          |   |
| 22   23    | 宮山出の         | )口 遺跡<br>r良 遺跡         | <u>ን</u><br>ሐ        | ",                                      | "                 | 宮山出の宮山多々     |                         |     | "        |         |          | ,        |    |     |          |   |
| 24         | <b>蒸館</b> 十叔 | <b>遺跡</b>              | 4.                   | "                                       | "                 | 小森字桑         |                         |     | 発掘訓      | 問査      | 熊本       | 大学       | 文学 | 部   | 3        | 6 |
| 25         | 古屋敷          | 遺跡                     |                      | "                                       | "                 | 古屋敷          |                         |     | 採        | 集       | 西原       | 村教       | 育委 | 員会  |          |   |
| 26<br>27   | 本屋敷          | 遺跡<br>うしろi             | 1 遺跡                 | "                                       | "                 | 本屋敷<br>大切畑う  | しる泊                     | 1   | "        |         | 1        | ,        |    |     |          |   |
| 28         | 易坂の下         | フレクルマーラング 遺跡           |                      | ",                                      | "                 | 扇坂の下         |                         |     | "        |         |          | ,        |    |     |          |   |
| 29         | 広 遺跡         | ĸ                      |                      |   | 鹿央村               | 大字広          | (諏訪原)                   |     |          |         | ,,, ,    | - 4      |    |     |          |   |
| 30         | 天/岩戸         | 洞穴                     | +                    |   | 菊鹿町               | 大字山内         | 字鶴次郎                    |     | 発掘訓      |         | 熊本       |          |    |     | 3        | 1 |
| 31<br>32   | 方保田東戸島 遺     | 東原 遺跡<br>東跡            | n.                   | 山鹿市                                     | 力保<br>一定<br>日本    | 1果尿<br>「     |                         | - 1 | "        |         | 山鹿       | 印教       | 月安 | 貝云  |          |   |
| 33         | 竜田町随         | 内 遺跡                   | <b>f</b>             | ,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,, | 竜田町               | 大字陳内         | 字戸ノ上                    |     | 発掘訓      | 周査      | 熊本       | 県教       | 育委 | 員会  |          |   |
| 34         | 神水 遺         | 财                      | L                    | "                                       | 神水                | 707354       |                         | 1   | "        |         |          | ,        |    |     |          |   |
| 35<br>36   | 利用部・         | 潤野遺跡<br>跡 A 対          | 小<br>1b 占            | ",                                      | <b>利用司</b><br>上南部 | 了町西谷<br>で町   |                         |     | "        |         | 能太       |          |    | 員会  |          |   |
| 37         | 迎八反田         | <b>遺跡</b>              |                      | "                                       | <b>並</b> 代表       | 田            |                         |     | 採        | 集       | ,,,,,,   | ,        |    | ^_  |          |   |
| 38         | 渡鹿小矶         | 資原 遺跡                  | <b>f</b>             | "                                       |                   | 渡鹿小矿         |                         |     | "        |         |          |          |    |     |          |   |
| 39<br>40   | 保田窪<br>大曲 選  | 退跡                     |                      | ",                                      | 西図町               | 、町保田窪<br>「大曲 | <u> </u>                |     | "        |         |          |          |    |     |          |   |
| 41         | 上古閑          | 遺跡                     |                      | "                                       | 弓削                | 「上古閑         |                         |     | "        |         |          |          |    |     |          |   |
| 42         | カキワラ         | ,貝塚                    |                      |   | 郡嘉島               | ,町上六嘉        | i                       | -   | "        |         |          |          |    |     | 1        | 0 |
| 43         | 小池原<br>辺田見見  | 遺跡                     |                      | ",                                      | 細砂服               | 小池原<br>[辺田見  |                         | -   | "        |         |          |          |    |     |          |   |
| 45         | 片平 道         | 跡                      |                      | "                                       | 矢部町               | 大字城平町阿高      | 字片平                     |     | "        |         |          |          |    |     |          |   |
| 46         | 阿髙貝均         | <b>X</b>               |                      | 下益城                                     | 郡城南               | 町阿髙          | •                       |     | 発掘誌      |         | 城南       | 町歴       | 民資 | 料館  | _        | ^ |
| 47<br>48   | 宮島貝塚<br>曲野 遺 | Ķ<br>⊪ p.λ·            |                      | ",                                      | 松和松林              | 町宮島<br>町曲野   |                         |     | "        |         | 能太       | <b></b>  | 杏禾 | 員会  | 5.<br>5  |   |
| 49         | 曽畑貝均         | ₹                      |                      | 宇土市                                     | i岩古曾              | 町曽畑          |                         |     | "        |         | 慶応       | 大学       | 文学 | 部   | ľ        | • |
| 50         | 曽畑貝均         | 低湿地                    | 遺跡                   | "                                       | 花園町               | 「花園          |                         |     | "        |         | 慶熊京      | 県教       | 育委 | 員会  | ١.       | _ |
| 51         | 轟貝塚          |                        |                      | "                                       | 宮ノ                | ' 荘轟         |                         |     | "        |         |          | 大学       | 又字 | 凯   | 1        | 2 |
| 52         | 馬場神山         | 」中坪滑別                  | 亦                    | 宇土市                                     | 大字馬               | 場            |                         |     | 採        | 集       | жж       | ハナ       | ヘナ | 네   |          |   |
| 53         | 波多崎見         | 塚                      | -                    | 宇土郡                                     | 三角町               | 放多崎          |                         |     | "        |         |          |          |    |     |          |   |
| 54         | 産島貝塚         |                        |                      | 八代市                                     |                   | L1011 vv AL. |                         |     | "        |         |          |          |    |     |          |   |
| 55  <br>56 | 四ツ江月<br>泉村第四 | な。<br>日中学校を            | 交底遺跡                 | /八1人引                                   |                   | 「四ッ江<br>阿中学校 | 校庭                      |     | "        |         |          |          |    |     |          |   |
| 57         | 柿迫貝塚         | ₹                      | -v=v=w,              | _′′                                     | "                 | 柿迫           |                         |     | "        |         |          |          |    | 4-1 |          |   |
| 58         | 沖ノ原見         | 塚                      |                      | 天草郡                                     |                   | 工工字列         | アノ原                     |     | 発掘i<br>採 | 周査<br>集 | 五和       | 町歴       | 氏質 | 料館  |          |   |
| 59<br>60   | 柳貝塚<br>黒染地   | 遺跡                     |                      | ",                                      | 大矢野               |              | 川字黒染地                   |     | 1休 //    |         | 本渡       | 市歴       | 民資 | 料館  | 4        | 9 |
| 61         | 石神 追         | 跡                      |                      |   | <b>i小津</b> 菊      | 木石神          | , , , , , , , , , , , , | -   | "        |         |          |          |    |     |          |   |
| 62         | 深川平野         | 予 遺跡                   | *                    | 水俣市                                     |                   |              |                         |     | "        |         |          |          |    |     |          |   |
| 63<br>64   | 湯出招川<br>鳴石 道 |                        | W)                   | <i>"</i><br>人き                          | 湯出招               | 3川内<br>b屋町鳴石 | i                       |     | "        |         |          |          |    |     |          |   |
| 65         | 上ノ寺          | 遺跡                     |                      | "                                       | 願足                | き町上ノ         | 寺                       |     | "        |         |          |          |    |     |          |   |
| 66         | 鼓ヶ峰          | 遺跡                     | B-D- <del>/</del> r· | 11 味味料                                  |                   | で 男田野        |                         |     | 発掘調      |         | 熊本       | 県教       | 育委 | 負会  |          |   |
| 67         | 里田岡省         | 1 一                    | <b>遺跡</b><br>————    | 环腭机                                     | 光田門               | 「字里田岡<br>——— | 田仲仁                     |     | 採        | 集       |          |          |    |     |          | _ |



第118図 熊本県地域縄文前期曽畑式土器分布状況図

熊本県内で曽畑式土器を出土した遺跡は一覧に示す通り、約70ヵ所を数えている。殆どが採集 作業での確認に委ねられていることは否めず、発掘調査や採集作業の進度の差異があることを前 提としなければならないが、大まかな分布傾向は求めることができよう。

分布図の作成を行うと、県内の中北部に大半が存在し、南部地域や天草地域では散在した状況を示している。周知のように前者には菊池川・白川・緑川、後者には球磨川らの主要な河川が存在し、遺跡の分布に大きな係わりがあることを述べられよう。そして遺跡群を大きく捉えると、筑後川最上流域遺跡群、菊池川流域遺跡群、鞍岳西麓遺跡群、阿蘇外輪山西麓遺跡群、白川・緑川中流域遺跡群、宇土半島基部(西海岸部)遺跡群、球磨川流域遺跡群などとして捉えることができる。

## 〔筑後川最上流域遺跡群〕

県下の最も北側に位置し、九州山地を構成する久住山・涌蓋山の西麓で700~800m上の高原帯に立地している遺跡群である。筑後川の最上流域であり、東九州地域との関連を求める作業に重要な地点である。すでに、下城遺跡の発掘調査等を通して、後期旧石器時代や縄文時代早期における人為的痕跡が知られている地域でもある。縄文時代前期の遺跡や遺物について大きく明らかにされた段階ではないが、この地域にも足跡が確実に残されていることが述べられる。

# (菊池川流域遺跡群)

下流域では貝塚 [尾田・竹崎・若園] を形成し、このなかで最も高い若園貝塚が海抜約11mである。土器群内容は、すでに発掘調査が行われ報告された尾田貝塚に求められるが、調査者は沈線の幅が広くて浅いものが多く、文様構成も乱れているため曽畑式土器の終末期のものと判断がなされている。地理的には西海岸域であり、今後先行する土器群が検出されてしかりであるが、中流域の台地上での分布が非常に少ないのも特色である。発掘調査が行われた天ノ岩戸洞穴での遺物がみれ、波状をなす口縁部の深鉢で刺突文や複合鋸歯文での文様構成がある。滑石の混入もあり、下流域の資料よりも古い様相を示している。なお、最上流域の菊池市水源地区にも数ケ所遺物が出土している。支流である合志川の上流域に遺跡群があり、次に鞍岳西麓遺跡群として捉えている。

### (鞍岳西麓遺跡群)

阿蘇外輪の一角をなす鞍岳西麓一帯に纏まった遺跡群が所在する。高度200~400mの壮大な傾斜地では中後迫遺跡に代表され、複合する文化層が検出される。火山灰層にも恵まれ、文化層の層位的な把握が可能なところである。事実、中後迫遺跡では「アカホヤ」層の上位から曽畑式土器が出土している。2~4条の刺突文と、区画をなし複合鋸歯文を施した土器は底部まで施文が及び古い様相の残存傾向を見せている。

### (阿蘇外輪山西麓遺跡群)

白川左岸で海抜高度200~300m上に立地し、西海岸部から35km程内陸部に入った地点となる。 広大な平地が広がる中に県内で最も集中する遺跡群が所在する。阿蘇カルデラ内で遺跡は少なく、 僅かに南郷谷で久木野中学校校庭遺跡が確認されているのに止まるので、この流域での東限を示 すことになる。言わば、東進の行き止まり現象とでも捉えられるのであろうか。桑鶴土橋遺跡の 発掘調査が実施されており、多くの資料が提示されており、多くの資料が提示されている。出土 している深鉢は概して刺突文が少なく、短直線からの開始が多い。特徴的に殆どの口縁部内面に 施文があり、やや外反した口縁部も多い。出土層も「アカホヤ」上位に求められている。

#### (白川・緑川中流域遺跡群)

白川左岸段丘上に集中傾向があり、海抜高度30~50m上に位置し、西海岸部からの距離は20km 以内である。白川流域では右岸に少なく、遺跡は左岸に多く位置する状況は縄文時代の各時期や他の時代でも同様の傾向が指摘され、河川敷への高さに起因するものと理解されている。そのような中で、今回発掘調査が実施された熊本市竜田陳内遺跡は右岸に位置し、良好な資料を提示している。一方、緑川流域で台地縁に立地する嘉島町や御船町では貝塚が形成されている。カキワラ貝塚と辺田見貝塚であり、高度10mを下がり最も内陸部の貝塚となる。

竜田陳内遺跡での土器群は滑石の混入率が低いこと、口縁部に刺突文の施文が非常に少なく、 口縁部内面の施文が多いなど特色があり、県内西海岸部土器に比してやや新しい時期であること を示すかにある。一方、カキワラ貝塚の土器には刺突文や区画それに複合鋸歯文の施文が見られ、 古い様相を如実に示している。

# (宇土半島基部 (西海岸部) 遺跡群)

著名な曽畑貝塚・轟貝塚・阿髙貝塚・宮島貝塚など大貝塚群が形成されている。海抜髙度10m 以下の台地縁に立地し、縄文海進期においては、海辺に位置していたものと見られる。そして何 れも内湾で遠浅が拡がり、背後には雁回山や白山などの山稜がひかえるなど、自然環境に究めて 恵まれた場所が選ばれている。

今回の発掘調査によって低湿地に貯蔵穴群が形成されている事実が判明し、貝塚の捉え方に変化が求められてきている。轟貝塚近くの馬場遺跡の貯蔵穴群も当然同様の形態を持つものと評価されようし、今後、各貝塚の新たなる調査と構造の解明を図らなければならない。

出土した土器群も従来の曽畑貝塚出土土器に比して、深鉢は刺突文や区画、複合鋸歯文などの施文が活発である。両者に時間的な幅が指摘できるもので、この遺跡の開始がより早いものであったこと、そして、長期に亘る遺跡であることが指摘される。

このほか、海岸近くに位置する遺跡として八代地域の四ツ江・産島貝塚や天草島の著名な二江・柳貝塚があるが、貝塚内容の把握作業を進めなければならない。

# 〔その他遺跡群〕

南部地域や球磨・人吉地域での状況が次第に明らかにされてきている。特に、後者では鼓ケ峰 遺跡の発掘調査があり、内陸部に40kmも入った地域の特色が提示されている。口縁部の外反状態 や文様構成・施文など地域性を示すかにある。

# (3) 熊本県地域における曽畑式土器の編年

県内で見られる曽畑式土器の検討作業を行い、編年案を次図に示しておきたい。前述の遺跡群の時間的移行は凡そ〔字土半島基部(西海岸部)遺跡群〕→〔菊池川流域・白川・緑川中流域遺跡群〕→〔鞍岳西麓・阿蘇外輪西麓遺跡群〕→〔筑後川最上流域・球磨川流域遺跡群〕として捉えられるであろうとの観点から進めている。そして、宇土半島基部(西海岸部)遺跡群の土器群を第Ⅰ期として第Ⅳ期まで順次捉えてみたものである。

### (4) 日本列島における曽畑式土器編年傾向

### 1) 曽畑式土器の学史

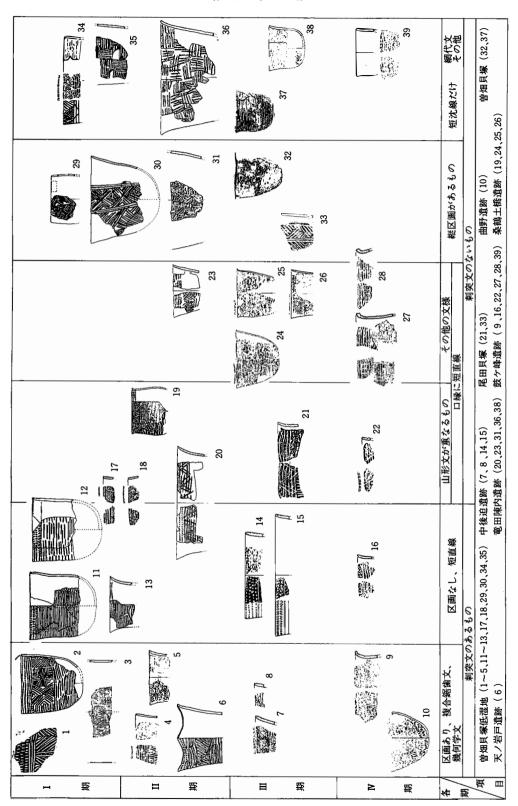
1890年曽畑式土器が学界に登場してから今日まで100年を経過することになる。曽畑貝塚の調査の歴史については先に少し記してきたところであるが、1935年小林久雄氏の「曽畑式土器」の形式名の設定の後、曽畑式土器をめぐって今日まで多くの論考が行われ、編年的位置づけが行われてきている。特に最近は西北九州を中心に恵まれた遺跡状況のもとでの発掘調査の成果が著しく、層位的な実証も加わり明確な編年作業も進んできている。

### ①1980年以前

発掘調査資料の少ないなかで、各地の資料を基に積極的な研究活動が実施されている。古く中 山平次郎、横山將三郎、小林久雄氏らによって曽畑式土器が朝鮮半島釜山市東三洞貝塚や瀛仙町 貝塚出土の櫛目文土器との関係が指摘されていたが、両者の相互比較に不可欠である九州地域を 中心とした曽畑式土器の集成と編年の基礎的作業から進められることになる。

杉村彰一氏の「曽畑式土器文化に関する一考察」、「曽畑式土器論考」(1962.65) は最も基礎的作業が進められたもので、佐賀県唐津市西唐津海底遺跡・熊本県宇土市曽畑貝塚・鹿児島県大口市日勝山遺跡らの資料を基にした編年と文化伝播論が述べられている。文様構成・施文法を重視し、文様帯による区分法の確立に加えて、整然とした規則的な配列から不規則への移行が時期的移行となるとの視点である。「西唐津海底遺跡→曽畑貝塚→日勝山遺跡と変容し発展したものと理解できる」と第Ⅰ~Ⅲ期の時期区分が提示され、九州西北沿岸部→有明沿岸部→内陸部・薩南諸島との時期的変遷を見せるとの観点は以来、今日まで支持されてきている。曽畑式土器の出自については「第Ⅰ期の曽畑式土器は朝鮮半島櫛目文土器に類似する」との従来からの視点を踏襲している。この後、江坂輝彌・乙益重隆氏らの同様の編年作業が加わり、前者は西唐津海底遺跡資料の中に「隆帯文+沈線文土器や口縁部にのみ刺突文を持つ土器群」が在ることを指摘している。

坂田邦洋氏の『曽畑式土器の研究』「長崎県福江市江湖貝塚」「熊本県玉名市尾田貝塚」がある。 江湖貝塚は五島列島に位置する貝塚であり、九州西北沿岸部に加え列島に曽畑式土器が良好に存 在することを示すとともに、土器形態、施文に非常なバラエティがあることを提示している。尾 田貝塚は有明海内陸部にあり、貴重な地理的位置にある。出土している曽畑式土器は概して施文 状況は新しいもののようである。坂田氏は放射性炭素の測定を数多く実施しており、曽畑式土器



第119図 熊本県地域曽畑式土器編年案

の年代が江湖貝塚ではB.P5310±40年(GAK-4055マガキ)、尾田貝塚ではB.P4980±60など 測定結果がある。曽畑貝塚でもB.C3240±130年であり近似した数値がかさなり、縄文時代前期 での位置づけに対する大きな参考資料と成ってきている。

一方、鹿児島県鬼界カルデラ噴出のアカホヤ火山灰 (B. P6,000~65,000年) が全国的に降下している事実が明らかにされるとともに、火山灰層に恵まれた鹿児島県地域を中心に曽畑式土器はこのアカホヤ火山層の上位から出土する事例が増加して、次第に周知の事実と成ってきている。熊本県地域でも比較的火山灰に恵まれた阿蘇外輪山西山麓で調査が行われた阿蘇郡西原村桑鶴土橋遺跡や菊池郡大津町中後迫遺跡でアカホヤ火山灰層の上位から曽畑式土器が出土することが確認されるに至っている。

#### ②1980年以後

曽畑式土器の細分作業をはじめとして、成立起因の追求や成立後の展開と消失状況の追求など 多くそして積極的研究活動が展開されてきている。

江坂氏が指摘した西唐津海底遺跡資料のなかの「隆帯文+沈線文土器や口縁部のみ刺突文を持 つ土器」が曽畑式土器に先行する土器群があり、鹿児島県出水市荘貝塚や日置郡阿多貝塚出土土 器のなかに轟式土器から曽畑式土器へと移行すると考えられる土器群が注目されていた。そのよ うな中で中村愿氏は『縄文文化の研究』に「曽畑式土器」を発表している。曽畑I式は長崎県江 湖貝塚や下本山岩陰出土土器を、曽畑Ⅱ式を熊本県曽畑貝塚出土土器、曽畑Ⅲ式は鹿児島県種子島 本城遺跡・沖縄県東原遺跡出土土器らを基本土器としている。従来の編年をより具体化して資料 を示しているが、注目されるものに曽畑式土器の生成と消滅に積極的な展開がある。それは生成 に関する「阿多・野口タイプ」の設定である。これはみみず張れ突帯文を有する轟B式土器の新し いタイプのなかに曽畑式土器にみられる丸底を呈する器形があり、野口遺跡ではみみず張れ突帯 文が沈線文に変わり、更に沈線による重弧文が充塡された土器が存在することに注目したもので ある。阿多貝塚では沈線化は重弧文様に止まらず、羽状文やX字状文あるいは横位の凹線文が連 続的に押引きされる文様などがある事なども加えている。そして、刺突連点文や爪形文などの刺 突施文法は、瀬戸内地方や中国地方の前期前半にみられる伝統的手法であることなどから瀬戸内 の羽鳥下層Ⅱ式土器の影響と考えている。一方終末は各地域で地方色を強く浮きだしているが、 北西九州では新たな流入土器によって、後続の中期土期の母体を形成していたのであるとみてい る。

佐賀県小城郡三日月町竜王遺跡の発掘調査では曽畑式土器が層位的に上下に分けられる事例が 報告され、下層に出土する土器は滑石混入土器が多く、上層の土器は文様構成が崩れたものなど が出土している。次第に層位的な実証事例がみられるようになってきている。

曽畑式土器の起源に関する論考は田島龍太「菜畑遺跡縄文前~中期の土器群の編年と様相」 『菜畑』や渡辺康行「第Ⅲ群土器について」『長崎市立深堀小学校校舎増築に伴う埋蔵文化財緊 急発掘調査報告』が続いている。何れもその報文に詳しい。 前者は「プロト曽畑」を提唱している。菜畑遺跡発掘調査の結果に基づくものであり、第 I ~ V 期に分けられた中で第 I 期〔菜畑15, 16タイプ〕、第 II 期〔西唐津タイプ〕〔野口,阿多タイプ〕がそうである。層位的な確証のもとで進められ、明確に第 I 期は「隆帯文土器群と沈線文(弧線文を主体に幾何文を含む)土器群の共存で示されるもの」、第 II 期西唐津タイプは「隆帯文土器と刺突文+沈線文土器群(江坂曽畑 I 式)で示される土器群」、また、西唐津タイプとは平行共存の地方差として捉えている野口・阿多タイプ土器群(中村愿:野口・阿多タイプは中間的な折衷タイプの土器群とする。)は野口III類、阿多 V A-1.2、V B-1~3、V C で示されるとしている。なお、続いては第 III 期〔江湖タイプ〕、第 IV 期〔曽畑タイプ〕、第 V 期〔山鹿IV・Vタイプ、轟 C・Dタイプ、3 式変容タイプ〕と成ることが明示されている。

後者は層位的な根拠を全てに擁したとはされないようであるが、菜畑遺跡で設定された〔プロト曽畑〕の範疇と捉える土器、またバリエーションに富む土器群が数多く提示されている。この第Ⅲ群土器は第1~9類に分類されている。第8類は隆帯文の数が減少したもので轟B式新期における単純退化型であり、また、第9類は条痕文だけの胴部片であり除くとして、その他の土器群に認められる施文技法として刺突文、押引文、沈線文、隆帯文があり、横位区画も隆帯文、刺突文、押引文、沈線文などで行われている。第5類の資料の中で主に沈線で区画をなすが、押引文での区画を行い同じく押引で重弧文を施す特徴的な土器も見られる。また、押引文と沈線文とを併用する資料があり、押引文から沈線文への移行を示しているとも見れよう。

一方、曽畑式土器に関して口縁部の内面施文状況を層位的な統計処理を行い、「内面に文様のないもの」→「内面の文様が刺突文だけのもの」→「内面の文様が刺突文+沈線文のもの」と層位的に新しくなっていくことを確実に摑むことができている。

田中良之氏は縄文時代中期土器の祖形を追求するなかで、並木式土器の発生・成立に関して九州北岸に主として出土する押引文を有する土器群を「曽畑(新)式」と呼称している。また、曽畑式土器の新しい時期の土器として考える轟C・D式土器とは地域を異にして存在していたものとの見解がある。

最近、水ノ江和同、桒畑光博氏らの積極的研究が相次いで発表されている。前者は『西北九州 における曽畑式土器の諸様相』であり、後者は『南九州における曽畑式系土器群の動態とその背 景』である。

『西北九州における曽畑式土器の諸様相』では西北九州地域に限定をしているが、層位的・一括性に安定した資料を対象としており、曽畑式土器文様の「割りつけ」方法に関する施文パターンの変遷を基準とした編年試案と、展開論がある。西北九州曽畑Ⅰ式~Ⅲ式とされ、基本的見解は第Ⅰ式の「割りつけを定型的・計画的に土器外面全体に施すもの」の施文パターンの変化・消滅していく段階で続く第Ⅱ・Ⅲ式として捉えているものである。土器群は曽畑Ⅰ式は深堀遺跡第6層の江湖タイプの土器群、Ⅱ式は菜畑、伊木力遺跡土器群、Ⅲ式は山鹿貝塚第4層や元松原遺跡の土器群を典型例としている。口縁部の文様帯に刺突文が施文されたものは概ね古くされてい

#### 第Ⅳ章 分析・考察

たが、この捉え方をすると第 II 段階に口縁部文様帯に刺突文があるものがあったり、逆に第 1 段階に口縁部直下から区画文を施す土器があることも述べられよう。そして、轟 B 式土器や阿多・野口タイプ土器群から系譜を引く諸特徴の存在が判明し、曽畑式土器成立に関する一側面を窺うことができたとしている。また、曽畑式土器の出現地は西北九州であると考え、ここを中心に九州全域に展開したものとしている。

乗畑氏は南九州地域の曽畑式土器の集成作業を行っている。従来、南九州地域の代表的なものとして「日勝山式土器」が知られ、曽畑式土器の南下にともない地域色の強い土器としてのイメージを大きく変更している。西北九州地域で古く位置づけられる資料が多く堤示され、八代海を介して早い段階で薩摩半島を中心とした地域に流入されている事実が示されている。また、その「先行する野口・阿多タイプの進出経路を発展させたものと考えられる」との注目される見解が述べられている。

#### 註 引用・参考文献(1988年)

来畑光博「南九州における曽畑式系土器群の動態とその背景」1988甲元真之『高畑赤立遺跡発掘調査報告書』蘇陽町教育委員会1988西住欣一郎『鼓ケ峯遺跡』熊本県文化財調査報告第96集1988丸山伸治他『竜田陳内遺跡』熊本県文化財調査報告第98集1988

#### 9. 縄文時代前期の生活域 ―曽畑貝塚低湿地遺跡調査から見た―

#### (1) 曽畑貝塚と低湿地

#### 〔貝塚の範囲確認〕

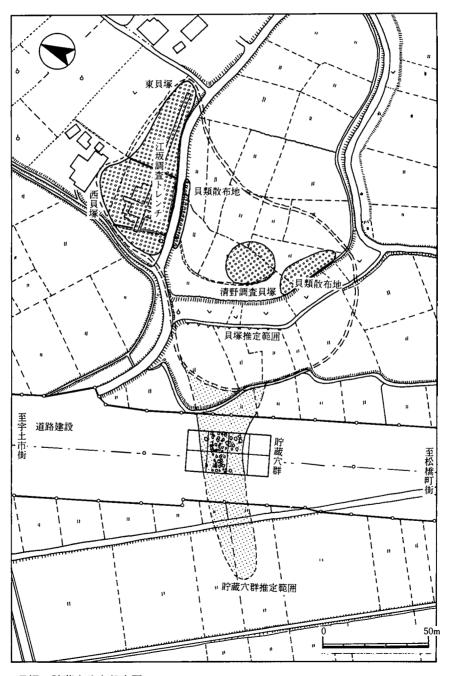
貝塚の範囲を確認するための本格的な調査は今日まで行われていないが、昭和63年度から地元の宇土市教育委員会が国庫補助事業を受けて継続的に実施する予定となっている。貝塚の範囲を明確にすることは将来の指定史跡などとして保存化をはかる場合などに最も必要とされる重要な作業である。範囲確認調査の結果を見て明確化されるものであるが、現状において範囲を知る方法は今日まで実施されてきた、小規模の発掘調査の結果の報文と現状での表面的観察に因らねばならない。

現在、宇土市指定文化財曽畑貝塚の標柱が宅地である山口家の入口横に建てられている。標柱の建てられた畑地は貝類が散布しているが、耕作のため細かく砕けている。この畑地の西側は水田まで約2.2mの段落ちになっている。縄文海進による浸食作用による痕跡との指摘がある。東走する市道の北側一帯に貝類が散布し明確に確認できる貝塚であり、宅地から東側50mにトレンチを設けて江坂輝彌氏らの発掘調査が実施されており、所謂、曽畑西貝塚と東貝塚の確認が行われているもので、前者は縄文早期~後期の遺物が出土し、後者は縄文後期の遺物を主としている。両貝塚の北側の範囲は明確でなく、表面の貝類の散布もあまり見られない。むしろ、貝塚の北限を見せるかにある。東貝塚の東側も貝類の散布がなく東限を示している。

平坦地が北側及び東側に拡がることにより住居地としてされた可能性が強い。市道と貝塚上面 とは約1mの高低差があり、側面に薄く貝層が確認できるところがある。市道そのものが緩やか な傾斜面をカットして建設されている。今回の発掘調査の折り、この市道に上水道の工事が行わ れたため宇土市教育委員会が小規模の緊急調査を行っており、山口家南側で僅かに残る貝層を確 認できている。同じく工事に拠る深掘り部分を観察すると標柱から西側では貝類の確認はできて いない。市道から南側の水田に落ちる側面には10~20cmの貝層が見れる。そして、清野謙次氏の 発掘調査が行われた地点へと貝塚が繋がっていたものであろう。言わば貝塚の最たる主要部分で あったと思われるところである。明治年間に貝殻を焼いて石灰として販売されていた程であるか ら相当大規模の貝塚であったことが偲ばれる。また清野氏の報文に、この地区の貝層が水田化の 為に曽畑貝塚は完全に消滅してしまうと危惧されていることからも、当時はこの地区が貝塚の最 も主要なところであると思われていたことを示唆している。一帯は現在水田と成っており、表面 では殆ど貝類を見ることはない。この清野氏発掘調査地点の西側に現在樹木を栽培している高ま りの畑地がある。このなかには貝類が幾分散在していることから、当時から客土して溜池の堤防 とされたものと見られる。最近この水田が客土されるという出来事があったが、その折り、一部 排水溝が設けられ水田より1m程掘削されており、その排土の中に多量の貝類と遺物が認められ た。即ち、現在の水田の下に良好な貝層が未だ残されていると判断出来るのである。本格的な調

#### 第Ⅳ章 分析・考察

査を待たねばならないが、恐らく清野氏の調査地点から西側に向かっては水田に潜りながら貝塚の範囲は拡がっていくものと見れるのである。今回の低湿地の調査区では貝塚であることを示す貝類は全く出土していないから、貝塚の延びはこの調査区まで延びていないことは確実であるので途中で切れてしまうことになろうが、調査区の相当近くまであったものと推定をしている。以上から推定した貝塚の範囲を点線(二重)で示しておきたい。



第120図 貝塚・貯蔵穴分布想定図

#### (2) 居住域の推定

#### [縄文時代早期]

今回の調査では第12~15層に押型文土器の破片が数点出土している。本来的な出土層ではないし、何れの土器も著しい磨滅が生じている。出土した土器片の量も非常に少ないことから、土器の供給地とは距離を持つと判断しておきたい。江坂氏発掘調査のトレンチ第IV層から押型文土器が出土しており、居住地としての立地に最も恵まれたこのトレンチ周辺を早期における主要な居住地と考えるべきであろう。

この居住地周辺に存在していたであろう土器片が、単に水利により運ばれたと見ることに成るが、縄文時代早期は縄文時代海進の生じる前である。元来の台地が今回の調査地近くまで延びていて、その台地が海進での浸食に拠って削られ、台地上に存在していた早期の土器が沈下した土器だけが残された可能性も考えておきたい。

#### 〔縄文時代前期前葉〕

第12~16層が包含層であり出土した土器片は何れも細片であることから、二次堆積土の中に含まれる遺物群として捉えている。海進に拠って現在の貝塚近くまでが浸食された後、砂礫などにより再堆積作用が生じたものであろう。再堆積の原因は前田川に運ばれた砂礫を主としたものであり、扇状地状の堆積状況と判断している。早期の押型文土器よりも焼成がよく堅緻であることから磨滅が少なく見れるのではとも思えるが、磨滅現象は少ない。ともすれば、運ばれた距離が非常に短いと判断できよう。西貝塚第IV層や清野氏発掘調査地点からも轟式土器は出土しており、当時の生活空間が大きく拡がっていたことが窺えよう。

#### [縄文時代前期後葉]

第11層は曽畑式土器を主とした包含層で、轟式土器と同じく二次堆積であると判断され、微高地を形成していたものと見られる。この微高地に貯蔵穴群が形成されたものでであり、貯蔵穴群と居住地との位置関係を是非求めたいところである。貝塚所在地域を居住地域とすれば、80~100m程離れた低位地域に貯蔵穴を形成するという図形ができあがるのであるが、単に両者を結びつけることは出来ないようである。

- ①曽畑東・A 貝塚から出土した土器群と今回の貯蔵穴群及び周囲から出土した土器群とには時間差が認識される。
- ②第11層及び貯蔵穴内から出土した土器は磨滅が少なく、カーボンが顕著に付着したものがあるなど、供給地そのもの、もしくは供給地は非常に近い場所であると判断される。
- ③貯蔵穴は帯状に東西に延びる可能性があり、時間的に変移する可能性があること。

以上の事柄を述べることができ、現状で最も居住地としての状況を見せる東・A貝塚周辺だけでなく、確認された貯蔵穴群の近くを居住地としていた可能性も非常に強い。そして、時間的な変化と共に居住地も変移していくとの見解も述べることができよう。

#### (3) 貯蔵穴群の存在

検出された貯蔵穴群は殆どが縄文時代前期曽畑式土器で一部後・晩期のものがある。この場所が長い期間に渡って貯蔵穴を設けるのに相応しい条件を有していたものであろう。考えられるこの地域の状況は東側の台地と谷から砂礫が運ばれた扇状地状の高まりに立地したものと思われ、周囲は遠浅の波がすぐ近くまでやって来るような場所と見られる。少し掘込めば浸透した谷水の湧水があると判断され、この現象を巧みに利用したものと考えている。数多く見られる大きな石は貯蔵穴の位置を示すための物でもあろうし、強い湧水による貯蔵物の浮上を防止する目的もあるものと判断している。重く大きな石は擬灰岩もあるが相当遠くから運ばれてこなければならないような安山岩もあり、重り石としての重要性が窺われる。そして、貯蔵する為には単に水に漬ければというだけでは、貯蔵物の腐敗に繋がるもので、そこには絶えず流水している条件が充たされねばならないことを示しているものであろう。

以上、縄文時代前期に貯蔵穴群を確実に有していることを述べることができ、貯蔵穴群は居住 地近くの湧水のあるところに設けられることを明らかにしている。時間の経過により、地形・地 理的変化により湧水場所も変化が生じようし、それに応じて貯蔵穴群の形成場所も変遷するもの と判断されるが、貯蔵穴群に伴って土器群や石皿の出土があり、貯蔵されていたイチイガシ類の 剥ぎ殻も多いので、この場所で調理を行った場合もあるようである。

#### 10. 縄文時代の技術(編み物製品)

縄文時代前期の曽畑式土器の時期に比定される貯蔵穴を中心として、21点を数える編み物が検出された。編み物に関する報告例は、近年増加の傾向にあるが、植物遺体は腐食し易いこともあって、直接資料は意外に少なく、土器の圧痕などをもとにした間接資料の報告が多い。また時期的にも、先史時代に遡るものは少なく、とりわけ縄文前期の資料は、数例を除けば殆ど皆無と言ってよい。その意味で、今回当遺跡から検出された編み物は、縄文前期における人々の技術水準を知る上でも恰好の資料となるものと思われる。以下、観察によって得られた所見を報告したい。 <編み物の出土状況>

**≇**‡ 1

今回出土した編み物は、1点を除けばいずれも当遺跡のA-2,B-2区付近に分布する貯蔵 穴内からの検出である。貯蔵穴は総数62基で、そのうち縄文後・晩期の貯蔵穴(5基)からは1 点、縄文前期・曽畑式土器の時期に比定される貯蔵穴(57基)からは19点の編み物が、それぞれ 検出されている。単純に見ても貯蔵穴の約1/3に編み物が遺存していることになる。腐食して失 われた編み物や、再利用などのため撤去された編み物の存在を考えれば、この割合は増加するに 相違なく、編み物の設置は貯蔵穴の構成に不可欠の要件であったことが窺える。

次に、貯蔵穴内での編み物の検出状況であるが、ほとんどは貯蔵穴の底面に密着するかたちで 検出されており、明らかに壁面に沿って立ち上がるものは、第34号貯蔵穴内の10の編み物に見る のみである。このように編み物の残存が底部にかぎられているのは、数度にわたるドングリ等の 掘り出しと、その後の廃棄により、上部が破壊された可能性が高いためと考えられる。

また貯蔵穴内のドングリの残存状況を見ると、いずれも編み物の上に乗るかたちで検出されており、編み物の下に及ぶものは見られない。このため、貯蔵穴にドングリを保存する際には、まず内部に区画のため編み物を敷き込み、その後でドングリを入れたものと判断できる。遺跡周辺は低湿地であり、現在でも穴を掘ると水が滲み出してくるほどである。ドングリは保存の際、虫害を防ぐため、これらの低湿地の貯蔵穴に、言わば水に漬け込む形で保存されたものと推定されるが、その意味でも編み物の設置は、通水性を確保しながら貯蔵穴の崩壊とドングリの土中への埋没を防ぎ、ドングリの取り出しを容易にするなどの目的を持っていたものと考えられる。

#### <編み物の形態> (P134貯蔵穴推定模式図参照)

貯蔵穴内に残された編み物は、前述の通り上部が失われたものが多いが、少数の遺物から全体の形態を類推すると次のようになる。なお、ここで使用するカゴ・ザルの呼称の区別は、比較的に大型、編み目が粗く、運搬や貯蔵を目的に製作されたもの→カゴ、同じく小型、編み目が密で、 註2 生活雑器としての用途を持つもの→ザル、とそれぞれ呼びならわした。

#### (1)ザル状と推定されるもの(5,14,17,21)

植物遺体であるのにも係わらず、比較的に残りが良く、全体の形態をほぼ推定できる資料が多い。中でも14は、底部~胴部~口縁にかけての技法の全体像が知られる。推定される直径は約30cm

内外、深さが12cm程度であり、頻繁に使用する生活用具としては手頃な大きさの物である。また 17は、口縁を欠くものの底部を中心に胴部~口縁近くまで放射状に遺物が残存しており、法量も 14とほぼ同程度のものと推定される。

これらの資料に共通することは、いずれも使用される素材が均質でやや細く、編み目(2本越え・2本潜り・1本送りが多い)も詰まっており、丁寧かつ堅牢に製作されていることである。 他の編み物が比較的に粗製で、編み目も粗いものが多いことを考えると、これらは貯蔵穴用に本来的に製作されたものではなく、いずれも一般的な生活用具として作られ、後に貯蔵穴用として転用されたか、放置もしくは投棄されたものである可能性が高いと思われる。

#### (2)袋状のものと推定されるもの(11)

ほとんどの貯蔵穴中のドングリは、いずれも掘り残しであったが、第36号貯蔵穴では、ドングリは多量にまとまって塊状をなしていた。11の編み物は、これらの塊状のドングリの下に敷き込まれるような形で検出されている。しかもドングリ塊の上部にも、断片的にではあるが、同じ編み物の細片が数ケ所でドングリを覆っているのが分かる。ドングリのまとまり具合などからすれば、11の編み物の原形は、あるいは袋状を呈しており、ドングリの運搬に使用されたあと、そのまま貯蔵穴中に保管されたものではあるまいか。

#### (3)その他 カゴ状のものと推定されるもの(10)

ほとんどの編み物が貯蔵穴の底面からほぼ水平に検出されているのに対し、10の編み物のみが 壁面に沿って約15cm程度の立ち上がりを見せる。口縁部が失われているため、原形は貯蔵穴の縁 まで延びるかどうかは不明だが、いずれにせよ貯蔵穴の形に合わせて「いびつ」ながらも、カゴ 状の形態を呈していたことが知られる。底面に検出された他の資料中にも、同様に壁面に沿って 立ち上がる傾向を示すものが多く、またいずれも縁留めを施した例が見られないことから、編み 物が底面のみに敷き込まれたものとは考えにくい。やはり、貯蔵穴の規模に見合う大型のカゴと して設置されたと考えた方が妥当であろう。

なお、これらの編み物に共通する特徴は、「1本越え・1本潜り・1本送り」が多く比較的編み目の大きな、「四ツ目編み」の手法をとっていること、編み材が不揃いで、いかにも粗製であること、などである。恐らくは数例見られる「ザル」が転用品と推定されるのに対して、これらの粗製の編み物は、貯蔵穴用に本来的に製作し設置されたものであろう。

一覧表の「全体の形状」の中では、不明と記した編み物片も、その多くは(3)のカゴ状の編み物に類似しており、貯蔵穴に本来的に設置した編み物と判断している。

#### <編み方の技術>

#### (1)編み方

編み物製品の基本的な編み方は、網代編み・四ツ目編み・六ツ目編み・ザル編みなどが一般的な 註3 例として挙げられる。このうち、当遺跡において見られる編み方は、網代編みと四ツ目編みの二 通りに限られる。両者の区別は明確ではないが、「網代編み」は、比較的に編み目の詰まった編

#### 第2節考察

み方であり、「四ツ目編み」は、逆に目の空いた、いわば雑な編み方と言える。当遺跡出土の編み物の場合、おおまかには全点が広義の網代編みに含まれようが、編み目に概ね素材1本分以上の隙間が認められる場合には、明らかに隙間の作製意図があったものとみなして「四ツ目編み」と称することとした。なお両者の比率であるが、全21点中観察可能な19点の内訳は、①網代編み14点②四ツ目編み4点①と②の両方が混在するもの1点である。次に、経条(たて芯)緯条(よこ芯)との組み合わせ本数による編み目のバリエーションであるが、当遺跡で見られる編み方は4通りが挙げられ、その比率は次のようになる。



② 2本越え・2本潜り・





1本越え・1本潜り・
 1本送り

1本送り 11例(44%)

③ 2本越え・2本潜り・ 2本送り1例(4%)

4本越え・4本潜り・ 2本送り1例(4%)

12例 (48%) 11例 **※①~④**が混在するものもある。

#### 編み目模式図

こうした結果から、当遺跡において基調をなす編み目は、①と②であることが言える。ただし、編み物の形態と編み目の相関関係を見ると、①の編み方はカゴと推定される遺物において多く、②の編み方はザルの編み目において、③、④はザルの底編みにおいてのみ認められる。また、5や17に見られるように、一個体の編み物中においても部位により編み方の変わる例を見ることができる。つまり、編み方や編み目の違いは、単に思いつきのものではなく、製作の対象となる製品の種類によって、また同一製品においても部位の違いにより編み方を使い分けていることが知られるのである。この場合、一般的に②の技法はより精巧な製品を作る場合に使用していることが知られる。

#### (2)技法

次に、編み物の部位による編み方の技法であるが、比較的に残存の程度の良いいくつかの資料を中心に、部位別の技法の違いを見てみたい。

#### (口縁部)

口縁部の技法が知られる資料は、3点がある。そのうち、14と17はザルと推定される編み物である。いずれも、経条の余った部分を折り曲げて束ね、さらにツルで巻き補強している。現在でも殆どの編み物製品は、基本的に同様の技法により縁留めされている例を見ることができる。また、7でも同じく縁留めの技法が見られるが、この資料は付随する胴部の編み材が、幅広く、編み方や編み目も他の2例のザルと異なっている。このため恐らくは大型のカゴ類の編み物の縁と推定するものである。縁留めそれ自体の技法は、ザルの例と変わりはない。また、1の編み物は

口縁部付近と推定しているが、横に数条のツルを編み込んでいるのが観察される。補修の目的よりも恐らく補強の意味を持つものと考えている。

#### (胴部~底部)

全体の形態が不明な編み物が多く、胴部~底部の編み方の明確な区別が難しいので、胴部と底部を一括した。

まずザル状の編み物片の場合は、胴部の編み方と展開を知ることができる。まず14の資料は、胴部全体を不規則ながらも、「2本越え・2本潜り・1本送り」で編み、底部へと続けている。一方、17の資料は、底部では2本の経条を1単位とした「4本越え・4本潜り・2本送り」で約12cm程度の底編みを縦横になしたあと、胴部では、それを1本で1条の経条に放射状に展開し、「1本越え・1本潜り・1本送り」の基本的な編み方をなし、さらに口縁部近くでは、「2本越え・2本潜り・1本送り」と編み方を変えている。類似した編み方は5の資料にも見られる。底部で「2本越え・2本潜り・2本送り」で底編みをした後、経条を放射状に展開し、胴部では、「2本越え・2本潜り・1本送り」の編み方で展開している。いずれにしても、ザル状の編み物の場合には、基本的には底編みをした後で、放射状に経条を展開させ、部位により編み方を変え、完成させている。

一方で、その他に検出した編み物である。前述のように検出部位の不明なものが多いが、いずれも貯蔵穴の底面で検出されていることから、底部~胴部にかけての部位であると推定している。これらの編み物の特徴は、編み方は四ツ目編みが多く、網代編みでも比較的に編み目の大きいものが多い。また、編み材もザル編みに比べれば、不揃いで雑な作りとの印象を否めない。典型的な例としては、8や20の資料が挙げられよう。ただこれらの資料は、底面では、「1本越え・1本潜り・1本送り」の四ツ目編みが多いが、壁面が倒れて、折り重なっている部分などでは、「2本越え・2本潜り・1本送り」など編み方の異なる部位を同時に出土しているし、また見られるように、胴部の上方の口縁部に近い部分では、下部よりも比較的に編み材の幅の狭いものを使用したりなど、部位による編み分けの技術なども推定することができる。また、一般的に現在でも編み物製品中には補強のため一定の間隔毎に芯を入れる例があるが、当遺跡の出土資料中には認められなかった。

#### (3)編み材の選択

出土の資料によっては、編み材が非常に均質なもの、あるいは不揃いのものなど、さまざまな 例が認められた。すでに指摘したように、一般的にはザル状の生活雑器には均質な材料を使用しており、逆に本来的に貯蔵穴に設置されたと思われるカゴ状の製品には、編み材は不揃いなものが多い。このことは、当時の人々が、製作しようとする製品の種類や、用途によって材料の選択を行っていたことを裏付けている。また材料の調達に当たっても、たとえば材質は違うものの、モミジから編み材を採取する場合には、樹皮・樹幹の剥ぎ易い梅雨上がりの一時期を見計らって 採取・保存しておき、製品を製作する場合には、2~3日水に漬け柔らかくした後で使用するな

註 4

どの民俗例も報告されている。当遺跡の編み物はいずれも、木質の材料で製作されているが、材料の採取や選択にあたっては当然同様の技術的な知識を有していたことが考えられる。

なお、編み物の素材については、第Ⅳ章第1節の材質同定の項を参照願いたい。

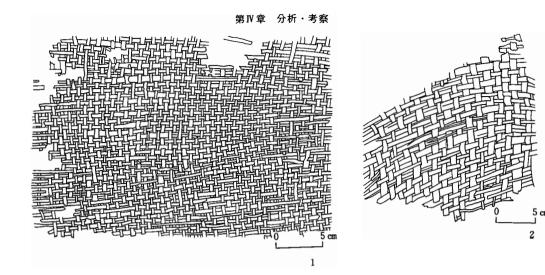
#### <結び>

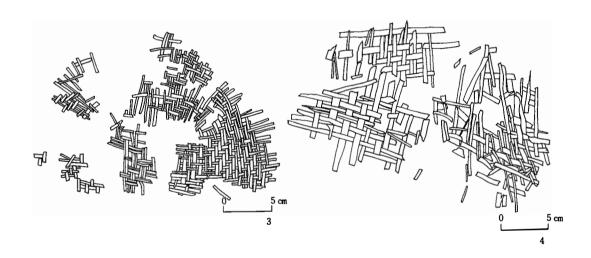
西日本における縄文時代の編み物は少数の例外を除けば、「2本越え・2本潜り・1本送り」 <sub>註5</sub> が基調になるものと言われている。しかし、編み物の直接資料の報告例が少なく、またその時期 も縄文時代後・晩期に限られており、現在の時点では編み物の地理的・時間的な変遷を明確にで きていないのが現状である。

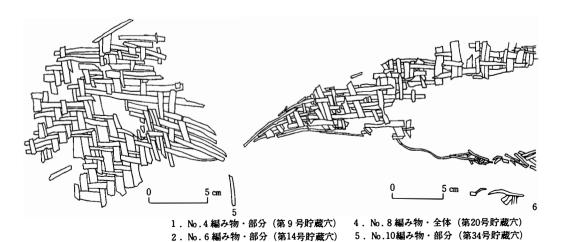
前述のように当遺跡出土の編み物は、ほとんどが縄文時代前期の資料である。21点の資料中、第45号貯蔵穴から出土した15の編み物の細片のみが後・晩期の資料であるが、「1本越え・1本潜り・1本送り」の基本的な編み方を繰り返しており、両者の間に技術的な差異は認められない。資料が少ないため判然とはしないが、前期の技術が後・晩期に到るまで伝えられていることが分かる。

さて、当遺跡に匹敵する縄文時代前期の編み物の直接資料は、福井県鳥浜貝塚に見られる。鳥浜貝塚での出土編み物の種類は、「カゴ・ザル・バスケット・袋などの容器、敷き物、網類」など多彩であり、精巧に作られた生活上の雑器が数種類にわたって出土している。それに対して、当遺跡出土の編み物は「カゴ・ザル・袋」などに限られているのが特徴である。また、鳥浜に見られるモジリ編みなどの編み方が、当遺跡では見られないこと、使用される素材が異なることなどが両者の相違点として挙げられる。ただ当遺跡の編み物は、貯蔵穴に伴うものであり、いずれも貯蔵穴の中に設置され、ドングリの貯蔵の際通水性を確保しながら、貯蔵穴の崩壊を防ぎ、ドングリの取り出しを容易にする目的を持ったものと推定される。かなり高度の編み物の技術に対して、出土遺物の種類の少なさは、設置場所が貯蔵穴に限定されていたためであり、素材の違いも水中で使用するという用途の違いで理解できよう。前述した豊富な編み方の技術や材料の選択の仕方などからして、当遺跡においても、鳥浜貝塚におけるような、種々の編み物製品の存在は当然予想される。曽畑遺跡の生活域での編み物の出土に期待が持たれるところである。

- 註1. 不明の1点は、明確な遺構確認を行なう以前に検出されたものであるが、恐らくは貯蔵穴に伴なう遺物であろう。
- 註2.「カゴ」および「ザル」の区別は必ずしも明確ではない。ここでは「大日本百科辞典」(小学館) 「日本民族資料事典」(文化庁文化財保護部)などを参考にしておおまかに規定するにとどめた。
- 註3. 一般的な編み方の模式図は、本稿の最後に示している。
- 註4. 天野 武『民具の見方』 第一法規 1983
- 註5. 荒木ヨシ「縄文時代の網代編み」『物資文化』12. 1968
- 註 6. 森川昌和他 『鳥浜貝塚』1979







3. No. 5 編み物・全体 (第12号貯蔵穴) 6. No.11編み物・部分 (第36号貯蔵穴)

第121図 編み物製品実測図(1)

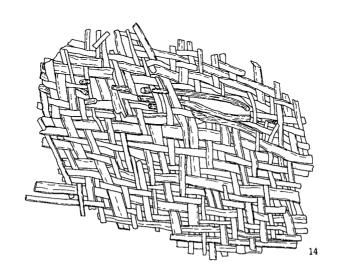
— 320 —

第122図 編み物製品実測図(2)

7. No.17編み物(第53号貯蔵穴) 8. No.18編み物(第54号貯蔵穴)



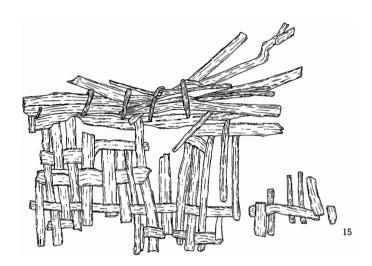


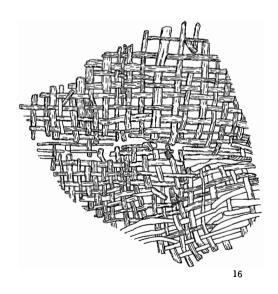


13. No.14編み物 (第43号貯蔵穴)

5 cm

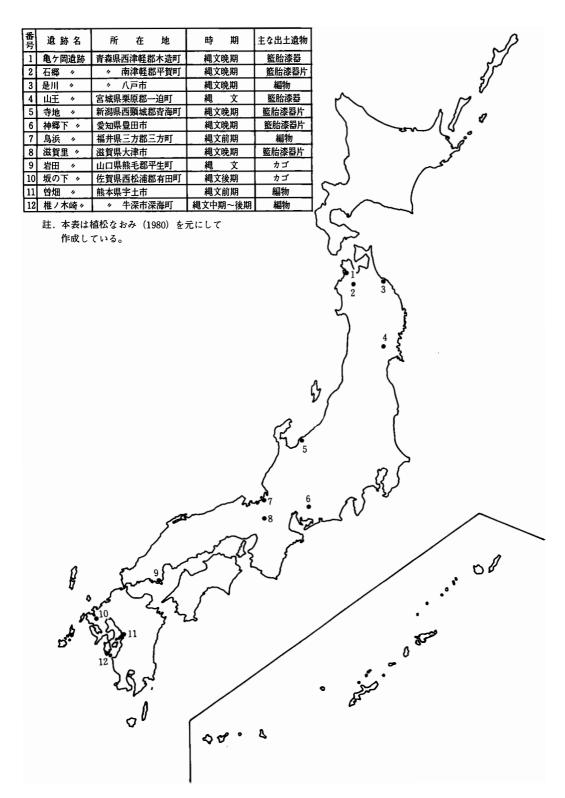
14. Na.1編み物 (第1号貯蔵穴)





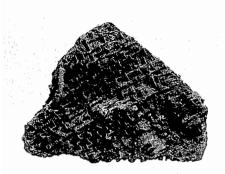


15. No. 7 編み物(第15号貯蔵穴) 16. No. 1 編み物(第1号貯蔵穴)



第126図 縄文時代編み物製品出土地図

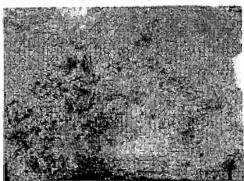
## 写真1



1. Na.1 編み物(第1号貯蔵穴)



3. No.4編み物(第9号貯蔵穴)



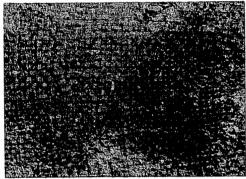
5. Na.5 編み物(第12号貯蔵穴)



7. No.6 編み物(第14号貯蔵穴)



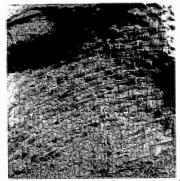
2. Na.1 編み物 (第1号貯蔵穴)



4 No.4 編み物・部分 (第9号貯蔵穴



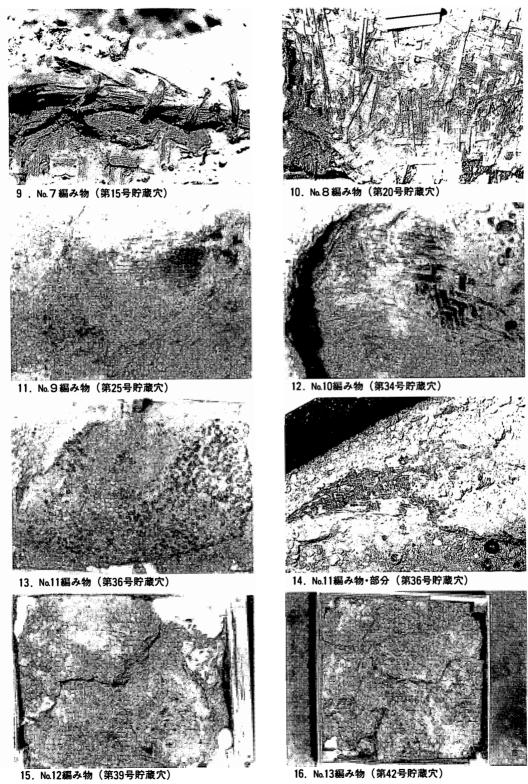
6. Na.5 編み物・部分(第12号貯蔵穴)



8. Na.6編み物・部分(第14号貯蔵穴)

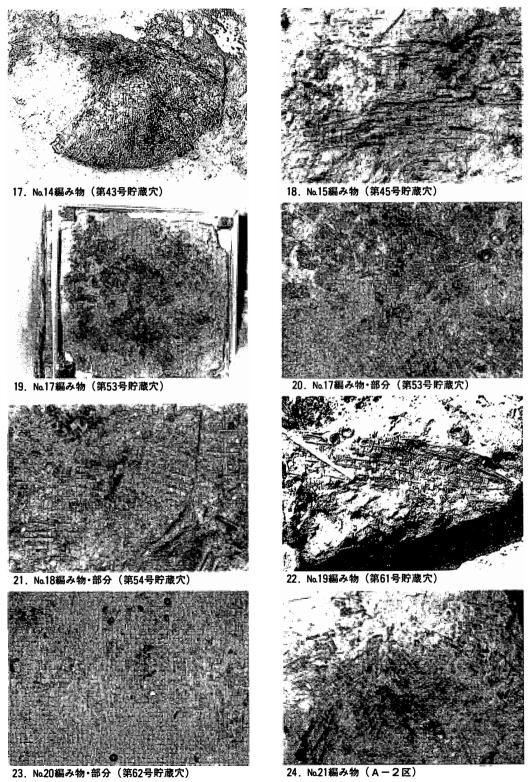
編み物

# 写真2



編み物

## 写真3



編み物

| 表     |  |
|-------|--|
| 迴     |  |
| 1     |  |
| 떕     |  |
| 製     |  |
| 1     |  |
| 4     |  |
| 濓     |  |
| Ĥ     |  |
| $\Xi$ |  |
| 脑     |  |
| #     |  |
| 厾     |  |
| 赙     |  |
| 鱼     |  |
| 遂     |  |
| 貮     |  |
| 鱼     |  |
| 皿     |  |
|       |  |
| [5表   |  |
| 15    |  |
| 第1    |  |
|       |  |

( )内はほぼ標準的な材の幅

| 缸                                     |  |  |  |             |     |                   | - ** ,   |   | <b>D</b>  |   |  |
|---------------------------------------|--|--|--|-------------|-----|-------------------|--|---|---|---|--|
| <b>*</b>                              | アケビ<br>難皮  |  |  |             |     | カン類               |  | 7 7 E   | 1357  |   |  |
| · · · · · · · · · · · · · · · · · · · | ・騒み方は全般的に粗雑であり、規則性もかなり切れている。<br>繋材も不能いで、編み目もやや粗い。編み目の途中の韓条に<br>3条のツルを連続して編み込んでいる。補強などの目的から<br>であろっか。 | ・ 経条にやや太目、 株条にやや細目の材料を使用する。 材は不満いて、 個み方は音楽、 個み目は材料・本分類等の関語を特 | 2。N1 と 回級、 数条のシルを積条に編み込んでいる。(1)<br>(2)は、 鰡み方に指揮はおるが、ツルを編み込む技法の共通性から、同一個体の可能性が高い。 | ・細片のため、観察不能 | 子 し |                   | ・値がほぼ同じの材を使い、精密に編みあげている。編み目はやや低く、離、数ともに約13本分弱程度の原間がある。<br>特条にやや部目の材を使い題んでいる。(1)と(3)は、連続しておりず、また、編み方も異なることから同一個体がピッかは判明しない。 | ・はぼ均質の材を使用して、目を詰めて編みあげている。2本を1条にして底部を編み、 野部でそれを1本で1条に近げ腰部させている。部位により編み方を使い分けていることが理解できる資料である。 | ・軽・棒ともに、やや幅広い材を用いており、編み方は粗い部分と密な部分の両方がある。部分によっては、材の細いもの2本を1条として利用している部分も見られる。編み物全体がかなり幅広いものであったと推定される。貯蔵穴内では機重にも折り配なるようにして検出され、上部には、大きな石の落ち込みも見られた。 | ・使用されている案材は幅広く、不揃いで、編み目も組く組織な作りである。なお録の部分は上に余った経条を折り束れたものをツルを利用して補強している。緑留めの技法の知られる質料である。 | ・羅み目は際間の広い部分があり、紫材は不揃いで、全体的に<br>粗い編み方である。基本的な編み方のほか、幅の狭い材の場<br>合は、2 本を1 銀にした部分も見られる。なお編み材の幅の<br>異なる編み物片は、同一個体かどうか判断できない。                         |
| (里) 郷 恵 市 G 存 株                       | 器 7.0~1.9 (3.9)<br>器 6.2~2.0 (4.0)<br>沙ル器約3.2  | 語 5.0 ~2.1 (3.9)<br>数 4.2 ~1.8 (3.0)                         | アル隆3.7~2.2   |             |     |                   | 経 4.2 ~ 2.2 (3.1) 厚さ約0.7<br>株 4.3 ~ 2.2 (3.1) 厚さ約0.7<br>経 4.9 ~ 1.6 (3.0) 厚さ約0.4<br>株 3.0 ~ 1.5 (2.0) ~ 0.5                | 経4.0~2.4(3.1) 厚さ約1 韓3.5~1.5(2.6)  | 経 9.5 ~6.5 (8.0)厚さ約0.7<br>韓 8.1 ~4.0 (5.2)厚さ約0.9  | 経 6.9~2.3 (4.8)<br>韓 9.0~4.2 (6.2)<br>ツル経約2.1   | ・編み材の異なる編み物片が二種類<br>窓かられた<br>(特 8,0 ~ 4,0 (6,5)   厚さ1.0<br>株 6,5 ~ 3,5 (5,0)   「1.1<br>(5)種 7,2 ~ 4,2 (6,0)   厚さ0.8<br>株 6,2 ~ 2,0 (3,9)   ~ 1,0 |
| な カ                                   | ・2本越え・2本潜り・1本送り<br>(経・株とも)<br>網代題み   | ・1本越え・1本潜り・1本送り  | 四ッ目編み  |             |     | (1)、(2)の両機が認められる。 | (I) 1本越え・1本潜り・1本送り<br>網代編み<br>(2)2本越え・2本潜り・1本送り<br>網代編み (経・韓とも)  | (佐部)<br>(佐韓とも)<br>(佐韓とも)<br>和代語み<br>(明報)<br>(佐韓とも)<br>(佐韓とも)<br>朝代語み・1本送り<br>(佐韓とも)           | 1本値え・1本潜り・1本送り網代編み  | ・1本格夫・1本港り・1本送り四ッ日編みに近いもの   | ・1本越え・1本潜り・1本送りややや四ツ目編みに近いもの   |
| 第 班 第                                 |  |  |  |             |     | 貯蔵穴の底面及び一部壁面      |  | 5. 建二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二  | <b>序敵穴底面~壁面</b>   |   | 序蔵穴底面<br>・数片の編み物が打工重なるよう<br>に出土  |
| <b>残存法量·</b><br>残存部位                  | <b>顕部か?</b><br>12×15œが現存   | 千嵐   | 13 × 13. 2cm   |             |     | 底~胸部?             | 84×76cm  | 氐~調部<br>28×23·m   | 底~胸部?<br>60×80㎝   | 口橡~駒部<br>12.3×16.2cm  | <b>周部~底部?</b><br>23×30⊞  |
| 全体の形状                                 | (1)<br>笛片のため不明   | (2)<br>FILE  |  |             |     | 不明                |  | ザル?   | 不明(カゴ?)   | 不明 (カゴ?)  | 不遇   |
| 神図神<br>神(中)                           | (2)  | (1)  |  |             |     | æ €               |  | (9)   | (3)   | (6)   | (10)   |
| 金図名                                   | 1  | ī  |  |             |     |                   | ,  | 1   | 1   | 2   | 2  |
| <b>医中</b>                             | (14)   | (16)   |  |             |     | (1)               |  | (3)   | (2)   | (15)  | <del>\$</del>  |
| 図図簿                                   | 124  | 125  |  |             |     | 121               |  | 121   | 121   | 125   | 121  |
| 陈允                                    | _  |  |  | 2           |     | 6                 | _  | 21  | 14  | 15  | 8  |
| 2                                     | -  |  | *  | 2           | æ   | 4                 |  | S   | 9   | 2   | 80   |

( ) 内はほぼ標準的な材の幅

| 阿   |   |   | カシ類   | アベ   |  |  |  |   |   |   |
|---|---|---|---|--|--|--|--|---|---|---|
| <b>*</b>  |   |   |   | 7.7  |  |  |  |   |   |   |
| 经   | ・比較的に目の詰った編み方をしている。縁の部分はツル状のもので巻き縁留めしている。   | ・貯蔵穴内の編み物が、底面から壁面にかけて立ちあがることを示す資料である。編み目は全体的に詰まっており、編み方は底部から層部にかけて上がるにつれて、細目の材を使用している。                                      | ・多量のドングリ機の下に敷き込まれる形で出土している。ドングリ機の上部数ケ所にも編み物片が検出されていることからあるいは袋状の編み物製品であった可能性もある。 | <ul><li>・不揃いの編み材を使用しており、編み目は、やや照問がある。</li><li>壁面への立ちあがりは見られない。</li></ul> | ・やや細目の編み材を使用し、編み目の詰まった編み方をしている。材の細はほぼ均質である。      | ・軽・鉢ともにほぼ均質な材を使用し酵杏に編んでいる。基類<br>となる編み方は必ずしも正確なものではなく、不規則な部分<br>もか・こは範部分は、範囲を編んだあと、余った腫条を析<br>りまげて表わたものをツルで巻き留みている。検出状況は良<br>く、当遺物は破損した状態で貯蔵で内に投棄あるいは放置された可能性が高い。 | ・出土の編み物のうち、唯一周文後・晩期に比定される貯蔵穴から検出されたものである。ここで見る限りにおいては、他の組文前類の編み物とも技術的な差異は認められない。 | ・編み材は不衡いのものを使用し、編み目はやや組い。 残存の<br>状態が悪い。     | ・均質な編み材を使用し、精密に編みあげている。底部では2<br>本の材を1条としてを作り、関部ではそれを一本の材で1条<br>となし、展開させている。そのに口縁にが部分では「2本<br>越え・2本巻り・1本巻り」と編み方を変えている。つまり<br>部位により編み方を変える技法が見られる資料である。 | ・編み方は粗く、編み目は、材1~2本分の隙間を空けて編まれている。上下2片の編み物の関係は不明であるが編み方等に差は認められない。 |
| 兼なの計22億(mm)   | 日線に近い部分<br>軽 3.0 ~1.8 (2.5) 厚さ0.3<br>株 3.7 ~1.2 (2.0) 厚さ0.3<br>田間部<br>軽 3.0 ~1.5 (2.7) 厚さ0.4<br>株 3.8 ~2.0 (3.0) ~0.5 | 庭部-底部に近い闘部<br>軽 9.0 ~4.2 (6.1)   身さ0.7<br>韓 8.0 ~4.2 (6.1)   身さ0.7<br>闘形上方<br>韓 8.0 ~3.3 (4.3)   厚さ約0.8<br>韓 5.2 ~1.8 (3.5) | 程 7.2 ~4.3 (5.2) 厚さ約0.5<br>韓 5.3 ~2.8 (3.6) 厚さ約0.5                              | 経 5.2 ~2.4 (4.5) 厚さ約1.0 緯 4.3 ~1.0 (3.5)                                 | 程 5.0~1.8 (3.2) 厚さ約0.3<br>緯 4.3~1.5 (2.7) 厚さ約0.3 | 軽 4.0~1.6 (2.9)<br>株 4.0~1.5 (2.9)<br>ッル硅約3.0  | <b>経 約4.0   厚さ約0.4 韓 約3.1   厚さ約0.4</b>   | 程 7.0 ~2.0 (3.7) 厚き約0.6<br>韓 6.3 ~2.0 (3.8) | 経 3.2~1.9 (2.9)   厚さ約0.7  | 経 7.0 ~4.0 (5.0) 日本の (5.1) 日本の (5.1)                              |
| 力   | 1本越え・1本潜り・1本送りが<br>基期<br>2本越え・2本潜り・1本送りも<br>混本<br>現代編み  | (経・緯とも)<br>・2 本総え・2 本潜り・1 本送り<br>類代題み   | (経・粋とも)<br>・2本越え・2本潜り・1本送り<br>網代編み  | ・1 本越え・1 本潜り・1 本送り<br>網代編み   | 経・掉とも)<br>2本越え・2本潜り・1本送り<br>網代編み                 | 2 本越え、2 本替り・1 本送り網代編み  | ・1 本越え・1 本潜り・1 本送り<br>関代編み   | 豊り・1 本送り                                    | 部位により3通りの編み分けが見られる。<br>(4 を始え、4 本着り・2 本送り<br>8 年編み、1 本着り・2 本送り<br>(四部)<br>(日部)<br>(日部)(経・4 とも)<br>(日間)(経・4 とも)<br>(日間上方)(経・4 とも)                      | ・1本越え・1本潜り・1本送り   |
| *   | 4 × 2 卷 卷   | 校 2   | 2 本礎  | 1 本  | 2本番  | 4 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2  | ₩<br>₩   | 2本禮   | 通りの<br> 本 本 本 本   | 恕 七   |
| <b>U</b>  | ・1 本越夫・1 本潜り<br>基調<br>2 本越夫・2 本潜り<br>混在<br>網代編み   | (経・辞とも)<br>・2 本磁え・<br>網代編み  | (経・緯とも)<br>・2本越え・:<br>網代編み  | ·1本越え<br>超代編み  | (経・辞とも)<br>・2 本総え・<br>網代編み                       | ・2本越夫・期代編み、期代編み、   | ・1本越え<br>網代編み  | (経・緯とも)<br>・2本越え・2本潜り<br>網代編み               | れる。<br>(佐部)<br>(本語)<br>(本語)<br>(本語)<br>(東部)<br>(南部)<br>(東京)<br>(東京)<br>(東京)<br>(東京)<br>(東京)<br>(東京)<br>(東京)<br>(東京                                    | ·1本越え·<br>四ッ目編み   |
| 女 出 存 国   | 貯蔵穴底面<br>・厨部らしい編み物片と口袋部と<br>見られる編み物片とが、重なる<br>形で出土  | 貯蔵穴底面~壁面<br>・貯蔵穴の底面から壁面にかけて、<br>約15m程度の立ちあがりを見せ<br>る。   | 貯蔵穴底面及びドングリ機上部<br>・多量のドングリ機に敷き込まれる形で出土。   | 貯蔵穴底面<br>・一部が折れ重なる形で出土   | 貯蔵穴底面  | <b>貯蔵</b> 穴中位  | 貯蔵穴 (後・晩期) 底面  | 貯藏穴底面                                       | 貯蔵尓底面?  | 貯蔵穴 底面<br>・広い編み物片の上部約6cmに小<br>片が重なる形で出土。                          |
| 残存法量·<br>残存部位   | 口椽~駒部<br>24×19.5cm  | 厨部~供部36×60⊞   | 扇部~底部?<br>73×50㎝  | 胴部~底部:30×35cm  | 胴部~底部?<br>42×43㎝                                 | 口橡~酮~底部<br>23.7×25.8㎝  | 不明<br>5.6×4.8cm  | 不明<br>(駒~氐部?)                               | 厨~底部<br>(底部を中心に<br>放射状に)<br>38×35cm   | 不明<br>(周~底部?)<br>59×45cm  |
| 全体の形状   | 不绸  | カゴ?   | 袋状の編み物?   | 不明   | 不明   | ザル   | 不明   | 不明  | ¥n.   | 不明  |
| 其中(中  | (11)  | (12)  | (13)  | (12)   | (16)   | (17)   | (18)   |   | (20)  | (21)  |
| 母<br>(<br>田<br>(<br>日<br>日<br>日<br>日<br>日<br>日<br>日<br>日<br>日<br>日<br>日<br>日<br>日<br>日<br>日<br>日<br>日 | 2   | 8   | 2 2   | 2  | 2  | ေ  | က  |   | e e   | 8   |
| <b>版中中</b>  |   | (5)   | (9)   | (10)   |  | (13)   | (6)  |   | (4)   | (8)   |
| 図 番号<br>(寿 号)   |   | 121   | 121   | 123  |  | 124  | 123  | -   | 122   | 122   |
| 所<br>入<br>No  | 52  | 7E  | 88  | 8  | 23   | 43   | 45   | 47  | 83  | 35  |
|   |   | 2   | 11  | 12   | 13   | 14   | 15 /   | 16  | 17 (  | 81  |

( ) 内はほぼ標準的な材の幅

| Ħ                      |  | х<br>К, 7  |   |
|------------------------|--|--|---|
| #=                     |  | 74   |   |
| 金米                     | ・ほぼ均質な材を使用している。編み目にはやや祭間あり。                  | ・騒・棒は、幅の既なる材を使用している。編み目の隙間は広 イヌピワく、材質も均質でない。雑な作りである。 | ・ほぼ均質な編み材を使用し、目の詰ったアジロ編みを行って<br>いる。                                 |
| (国) 御風 古の 英米           | 器 4.3 ~3.0 (2.9)   卓さ0.4<br>賞 3.2 ~2.7 (2.9) | ・1本総大・1本織り・1本送り                                      | ・2本越大・2本港り・1本送り 語 4.5~2.6 (3.0) 厚さ0.3<br>類代編み 数、5.0~2.0 (3.0) 厚さ0.3 |
| ¥                      | ・1 本越え・1 本潜り・1 本送り<br>関代編み                   | ・1 本法の   | · 1 本格  |
| *                      | 神神   | を を 1  | 2 本礎の   |
| 疆                      | ・1 本越え・<br>類代編み                              | ・1 本越え・四ツ目編み   | ・2本越え・:<br>網代編み   |
| 閮                      |  | i  | 尼<br>雅認の貯蔵  |
| 嵙                      |  |  | -2区)<br>!5~未<br>もの)   |
| ₹ 丑                    |  | <b>貯</b> 藏穴底面  | 不明<br>北側調査圧 (A-2区) 泥<br>炭配中より(恐らく未確認の貯蔵<br>穴より検出したもの)               |
| 残存法 <b>员</b> 。<br>残存部位 | 不明<br>(阿or底部?)<br>8×17㎝                      | <b>木明</b><br>(題~底部?)<br>48×55cm                      | 問~底部<br>22×26㎝  |
| 全体の形状                  | 本明   | 不明   | 3 (24) Fr.?   |
| 字図卷<br>(中)             | (22)   | 3 (23)   | (24)  |
| か 図 毎                  | 6  | l  |   |
| 図図簿 番 飲り               |  | (12)   | (II)  |
|                        |  | 123  | 123   |
| 市<br>京<br>NP           | 19   | 29   | <u> </u>  |
| £                      | 61   | ଞ  | 21  |

# 第 ₹章 総 括

周知のように、宇土半島基部、雁回山北麓端一帯は縄文時代貝塚の一大形成地で、宇土市轟貝塚、下益城郡城南町阿高・黒橋貝塚、御領貝塚、同郡松橋町大野貝塚、宮島貝塚など著名な貝塚が連座している。曽畑貝塚はその一角を成すもので雁回山南西麓端に、そして低湿地遺跡は後背湿地に位置しているのである。この曽畑貝塚は明治時代から今日に至るまで長い貝塚調査の歴史があり、ここより出土する曽畑式土器は九州縄文前期の標式土器として存在するとともに、一方では朝鮮半島櫛目文土器との関連が問われることなどあまりに著名である。

今回の調査は熊本県下における、縄文時代の低湿地での本格的な初めての発掘調査であったこともいえる。発掘調査を進めると驚くことに貝塚本体から100 mもはなれた水田下に、尚更の遺構と包含層を有していたのである。それは、水田下に検出された遺構や遺物は縄文前期~晩期に亘るもので、特に前期の曽畑式土器と轟式土器は良好な状態で検出でき、前者は貯蔵穴群を有し、後者は懸案であった編年作成へ層位的に裏付けできる好資料を提示するなど、恵まれた調査の結果を生むことができている。そして、これらの調査結果は各地に所在する貝塚に、本体の貝層面にだけでなく、周囲に恵まれた遺構や包含層が隠れている可能性をあらためて思慮させ、今後の貝塚の調査に大いに参考とされるに違いない。

さて、第16~12層が轟式土器の包含層であったが、この中に数点の押型文土器片がふくまれ、下層の第17層からは台形石器の出土もあったことから遺跡自体の開始は古く旧石器時代に遡り、縄文早期にも営みが行われているのは事実である。しかし、出土する遺物の量は圧倒的に轟式土器や曽畑式土器が多く、この時期を持ってこの遺跡は本格的に営まれ始めたものと理解ができよう。轟式土器の包含層は自然作用による二次堆積土で以上のように、幾らかの前期より古い時期の遺物を含んでいるが、その時間的移行は下層から上層へと正しく堆積しているものと判断している。同じく『アカホヤ』火山灰ガラスの包含されるピークは第16層であり、この火山灰自体の上下への動きも少なく面的にも安定した状況にあり、正位の堆積状態であることが判断される。従い、轟式土器は『アカホヤ』後の土器群であるとの判断に到っている。

このようにして見られる轟式土器は下位の第15層~12層へと特徴的な出土状況が知られた。前章に述べたところであるが今一度、仮に下位から第 I ~ IV 期として表現して整理すれば次の通りである。

第 I 期 : 隆帯文土器. (断面カマボコ形+刻み目), (断面カマボコ形+刻み目, 沈線渦

(第15層) 巻き文)

条痕文土器。(口唇部に刻み目を施したものがある)

第Ⅱ期 : 隆帯文土器. (断面三角形, 著しい, 波状口縁で縦走するもの)

(第14層) 条痕文土器. (M編年で言うC式も含まれる可能性がある)

押引文土器. (出土量は少なく出現期と判断される)

#### 第 V 章 総 括

第Ⅲ期 : 隆帯文土器. (断面三角形、縦走・斜走するものがある、多種に亘る)

(第13層) 押引文土器. (著しく多種となる. 降帯文+押引文がある)

沈線文土器. (細く浅い、この層だけに限られる)

第Ⅳ期 : 降帯文土器.(量的に少なくなり、非常に細くなる)

(第12層) 条痕文土器、(波状になるものがある)

押引文土器. (区画をなし斜行で充塡する)

『アカホヤ』降下後に以上のような特色ある出土状況を捉えることができたが、多くの問題点を提示することにもなる。M編年で出土しているA式土器はなかなか明確にできないのが実情であり、「らしきものの」底部は尖底を示している。「A式」土器に最も近い土器と判断される条痕を施した厚手の土器が第15層に比較的多くあるが、器壁の厚いもので構成されるもっと古い時期の土器群(例えば押型文土器、手向山式土器、円筒土器、塞ノ神式土器など)との関わりを検討させるものであろう。なお、今回は平底の底部は全く出土していない。

一方、「B式」は拡大資料が著しい。第 I 期に、ここでは出自を最も古くして特色的な沈線での渦巻き文土器があるし、隆帯の断面形状は「カマボコ形」を呈する特徴がある。第  $II \sim III$  期にかけての「B $-1\sim2$ 式」へとの時間的移行は自然的であり、並行して縦・斜走する隆帯文の横行がある。また、押引文も第 II 期の段階から姿を見せるが、概して小型の器形で丸底を呈しよう。この押引文土器は第IV 期で大きく変容している。それは、2本を単位とした数条の横位の区画をなし斜行する押引文を連続させるものである。横位の区画をなし、総体的に幾何学文様と見れる状態は、自ずと曽畑式土器へとの繋がりを考えさせるものである。これに加えて第III 期の沈線文も横位の区画への変化する可能性を見れば、曽畑式土器を生み出す要因が大きく揃えられることになる。

なお、刺突文を横走させる一群は第10層から数点出土しており、轟式土器のなかでも最も新しいものであることが認識される。

轟式土器に伴う遺物として人骨と鹿角器や獣骨類の出土がある。人骨は轟貝塚での出土に続くものであるが、全くの二次堆積土の中に含まれていたもので、埋葬状態など全く明らかにしない。手厚く葬られない状況を示すものであろうか。鹿角器の出土はこの時期、骨角器を製作することが日常的であったことを証するもので、今一つ製品が何であったのかを明らかにするまでに到れないのが残念である。獣骨類でイノシシ、シカ、小型動物と通常的であるが、猿の頭蓋骨の出土がある。ペットとして飼わたのか、食用とされた可能性もあろう。

曽畑式土器を伴う貯蔵穴群の検出は圧巻であった。現在残されている貝塚本体から約100mの 距離を持ち、比高差も約4mあり、海辺の海抜約3.5m上に営まれていたものである。58基を数 える貯蔵穴の内容物は一基にクヌギが見られるだけで、イチイガシが殆どであった。地下水が通 るような場所を選んで構成されたものと判断でき、虫よけと硬化を防ぐための施設と考えておく ことができよう。日常的な生活場とは幾分離れたところであったことを、生活用具の出土が少な いことからも認めることができる。この施設からは編み物製品の出土数が多い。殆どに備わっていたものであろうとみることができるし、底部に敷き詰めたもの、浅い駕籠、深い駕籠、編み駕籠などを想定でき、日常的な編み物製品の転用、破棄されたものも含まれているものと思われる。 材質の追求ができ、木本類のイヌビワ、イチイガシ、ケヤキ、アケビ(ツル)であることが明らかになり、想像以上に発達した縄文時代の生活技術の一つを窺い知ることができた。そして、水に耐えうる材質の選択が行われていたことも述べることができよう。

包含層からの多種の木の実類、獣骨類も食生活や自然環境を詳しく知らしめてくれる。特に瓢箪の出土は縄文前期の事例を増やしたことになるし、遠く伝播されて来たことへの追求が今後に残される一方、この時期広く活用されていたことを認識させそうである。そして、瓢箪は常識的な容器の材料として捉えるほかに、若いうちに食用とされたとすればこの時期に小規模の植物裁培の云々の論議へ発展しそうである。

さて、報告したように曽畑式土器の出土も多く、この地域の今後の大きな基礎資料と成りえよう。曽畑式土器のこの遺跡での大まかな時期的変遷を求めて、第11層の出土土器の高度分布状況 把握を試みたところである。その結果は I ~Ⅲグループとして捉えることができ、それが時期的 移行も表わし第 I ~Ⅲ期とすることが許されれば次のように纏められよう。

第 I 期 : 刺突文(4条)+区画沈線文(5条)+複合鋸歯文+短沈線文という最も典型 (海抜2.50m 的施文を有する土器がある。

以下) 刺突文+短沈線文土器や、胴部に網代文を施す土器がある。

小型の土器でありながら、激しく刺突文を施した土器がある。

滑石混入土器の割合が高い。

口縁部が著しく外反するものや、内面の施文が少ない。

第Ⅱ期 : 第Ⅲ群土器 (プロト曽畑) も出土する。

(海抜2.50 種々の曽畑式土器が出土しているが、刺突文+区画文+複合鋸歯文の典型的土

~2.80m) 器が少なくなっていく。

区画を施さず刺突文+短沈線文の土器は更に断続されていく傾向がある。滑石 混入土器が殆どなくなってしまう。

口縁部が外反する傾向が量的そして角度も強くなり、内面の施文が多くなって いる。

第Ⅲ期 : 刺突文+区画沈線文+複合鋸歯文+短沈線文の典型的土器は見られない。

(海抜2.80 刺突文+短沈線文の土器は出土しているが、短沈線だけのもの、縦区画を施す

~3.00m) 土器などバラエティに富む。

文様自体が明確でないものや「くずれ」る傾向が強まっている。

滑石を混入した土器は殆ど認められない。

更に口縁部の外反傾向は、胴部位から大きく外反が始まるものもある。

口縁部内面の施文の率が非常に高くなっている。

従来の曽畑貝塚の出土土器は、ここでの第Ⅲ期の特色に最も近いと見ることができる。刺突文を施すものや、刺突文+区画文+複合鋸歯文+短沈線文の典型的文様パターンを有する土器が認識されていない傾向がある。とすれば、今回の出土土器によって、そのイメージ化された土器群よりも古く位置づけできる第Ⅰ・Ⅱ期で示される土器群が存在することを認識することができよう。そしてそれは、曽畑貝塚が営まれ始める時期を遡らせることができることの理解となる。なお、「プロト曽畑式土器」とされる第Ⅲ群土器が集中して出土している。全く層位的な実証例となりえないが、この時期までの残存状況を示すものと捉えている。

このほか、貯蔵穴内や第10層から出土した曽畑式土器を多く報告でき、注目される土器も多い。前者は概して規則的な文様パターンを持ち古い時期に位置づけることが可能とされよう。ほぼ完全な土器に復原ができる第94図(03)はややウェーブする3条の刺突文+横位の区画文+幾何学文+短沈線となり、特徴的な第3文様帯は「×」「+」の割りつけを繰り返し、「六弥太格子文」を充填させている。後者は刺突文の有無をもとにA~F類に分類を進めているが、沈線文+山形文の横行や、刺突文がなく縦区画+菱形状文、同じく刺突文がなく斜格子・沈線羽状文などバラエティに富んでいる。そして、胴部から外開きになる傾向や口縁の外反傾向が指摘される。

次に、今回の発掘調査が低湿地であったことによって、多くの自然遺物の検出が可能であった。 各種の理化学分析ができ、縄文前期の自然環境の復元に大きな資料を提出できた意義は極めて大 きい。それぞれの分析・考察が今後に充分活用されることを期待したい。

地質分析では「アカホヤ」火山灰の検出と位置の確認ができ、花粉の分析では 1)落葉広葉樹優 占時代(第19~17層)、2)落葉広葉・常緑広葉樹混交時代(第17層上部~16層下部)、3)照葉 樹林安定時代(第16層上部~第11層)、II 次林拡大(傾向)時代(第 7 層)となる植生が明確に 把握できている。加えて、大型・小型の種子の同定による上記植生の裏付けや、多くの注目され る種子の報告が行われた。食用にされたイチイガシ、クヌギ、チャンチンモドキ、クルミ、海草 のアマモの検出もあった。

どうしても避けられない縄文海進現象の解明に珪藻の分析ができ、貯蔵穴群の立地する場所が、「海の影響の見られる汽水の環境下にある」近くであることのほか、縄文前期以降にも海進が生じていることが示唆され、海抜3m近くに及ぶであろうことが今後に求めていかれよう。そして、海進現象の詳細な把握と有明海を巡る地形隆起や沈下現象を捉える作業が更に重要性を増してきている。

付け加えることになるが、貯蔵穴群から検出した編み物製品は取り上げに成功している。是非、 保存処理の成功をはかりたい。

最後に、貯蔵穴群が存在することで曽畑貝塚が遺跡として極めて広い範囲に及ぶことが判明しているが、今回の道路建設を始めとして、この遺跡に対する開発がひどく進んでいく危険がある。 遺跡の範囲をさらに明確にして、早急に指定史跡として永久な保存をはかることが必要とされる。

#### 付記 貯蔵穴・編み物製品の取り上げ作業に関して

検出した貯蔵穴や編み物製品の取り上げ作業について、実施した方法を記録しておきたい。今 後の検出時の参考になれば幸いである。ともに御教示・御協力載いた多くの方々に深く感謝した い。

#### 『貯蔵穴』遺構の取り上げ作業

平面プランを確認した中で比較的残存状態が良好である、第7号貯蔵穴をその対象にした。将 来の調査が可能な状態で残すことを目的として、格安の経費で行うため、隣接地で工事を行って いる建設会社の技術者と検討・協議を行いながら作業を進めた。

貯蔵穴の周囲に安全のため幾分余裕を取りながら、その大きさは、縦150cm×横150cm×深さ100 cmであり、枠設備を含めた総重量は約3 t以上と計算された。これに耐えうる最善の方法は、鉄枠をつくり、枠材は松材を使用、底板には網材を使用して行うことになった。また、生じる隙間には、山砂を入れ樹脂を注入して崩れの防止を計っている。

実際的作業は建設業者の作業員4~5名で重機や簡単な建設道具を用いて、数時間のうちに終了して熊本県文化財収蔵庫の倉庫に手際良く運搬されている。

#### 『編み物製品類』の取り上げ作業

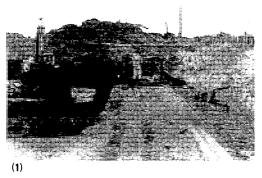
こちらは全く建設業者の手を煩わせることなく、調査員と発掘作業員の手により実施している。 一部、細かい製品はこともなく取り上げることができ、大型のタッパーやコンテナに納めている。 そして、化繊綿や適当な材木を用いて隙間を埋め固定を加えている。また、製品を洗い、実験的 に毛質筆を用いてバインダーでの強化を試みている。これには、再度の土落とし・清掃作業が困 難になる嫌いがあり、以後取り止めている。

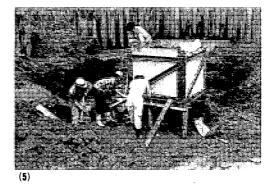
実施した方法は、安価な経費で、手作りの木箱に納めて取り上げる簡単な方法である。周囲に 余裕を残し、土柱として状態で寸法をはかり、木材店から購入した材木で底のない木箱を作り嵌 め込むのである。隙間に水調合のできるウレタン樹脂を注入すると、数時間で強固に固定が可能 であった。固定作業が終了したのち、底を少しずつ削りながら底板を打ち、更に小角材で補強を 加えている。底板を打つ作業には道板や角材、それに、車に装備されているジャッキなどを用いると容易であった。運搬は人力や一部、一輪車を用いることで終えることができている。

文化財収蔵庫に運んだ編み物製品は、化繊紙で被い適宜の散水が必要である。5%程度のホウ酸水を散水することにより、カビ・腐敗を防止し一年間の保管が可能であった。

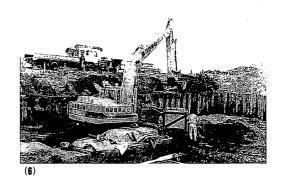
以上の作業状況につき、次頁に写真説明を用意している。なお、編み物製品は国庫補助事業を受け、全て専門業者に委託して保存処理を行うことに決定している。無事に保存処理されることを祈り、一堂に展示公開される日を待ちたい。

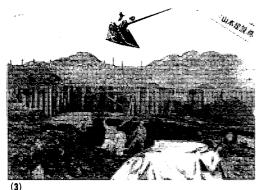
### 写真1 「貯蔵穴」遺構の取り上げ作業状況





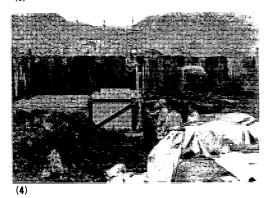






## 『貯蔵穴』遺構の取り上げ作業

- ①業者により準備・運ばれた鉄枠を現場で 組み立てる作業。
- ②貯蔵穴遺構は周囲に幾分余裕を取って、 土柱状に削る作業。適宜、重機を使用。
- ③重機を用いて、鉄枠を嵌め込む作業。
- ④鉄枠と貯蔵穴遺構の間に、松板材を嵌め込む作業。
- ⑤底面に横から鋼材を打ち込む作業(少し づつ削りながら)。隙間には山砂やウレタ ン樹脂を注入して固定化をはかる。
- ⑥固定作業が終了した後、重機を用いて運 搬作業を行う。



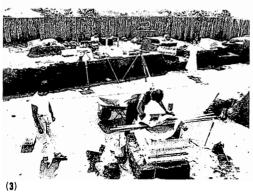
# 写真2 「編み物製品類」の取り上げ作業状況





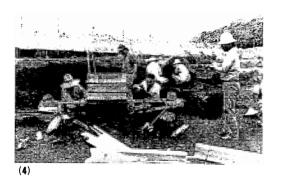






## 『編み物製品類』の取り上げ作業

- ①調査用器財を用いて編み物製品類を土柱状に残す作業。周囲は幾分余裕をとり崩れを防ぐ。一方、建材店で板材を購入し、対象物に合わせた底のない木箱を製作する。
- ②底のない木箱を嵌め込む作業。
- ③隙間に水調合を行ったウレタン樹脂を 注入し、固定する作業。
- ④道板・角材・車のジャツキなどを用いて下面を支え安定させ、少しづつ底を削りながら底板を打ちつける作業。
- ⑤底板の打ちつけを終えた後、更に小角 材を打ち補強を行う。
- ⑥底面の支材をはずして終了。人力・一 輪車で運搬を行う。



# 写 真 図 版



調査地遠景(雁回山から)



曾畑貝塚宇土市指定標柱



発掘調査前状況と曽畑貝塚(後方)



曽畑貝塚遠景(東から)



調査状況



調査状況

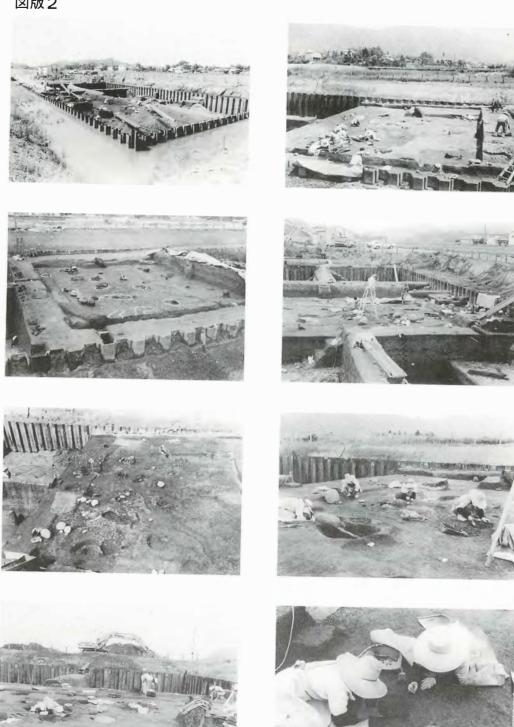


鋼矢板工事の開始



周 査 状 況

発掘調查地状況•発掘調査状況



発掘調査状況



発掘調査指導



発掘調査状況



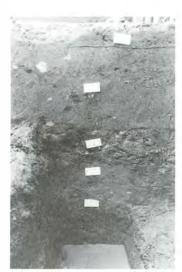
発掘調査状況



土層剝ぎ取り作業



層位 (第1~11層)



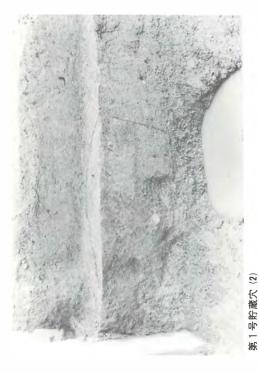
層位 (第15~19層)

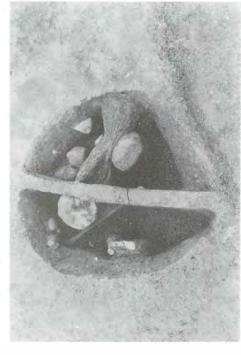
↓ 第52号貯蔵穴(晩期)



層位 (第9~16層)・貯蔵穴切り合い

発掘調査状況・土層・貯蔵穴切り合い状況











第2号貯蔵穴(1)

第1・2号貯蔵穴遺構









第3-33号貯蔵穴(3)

第3•4•32•33号貯蔵穴遺構





57号貯蔵





第5-6-31号貯蔵穴(3)

第5~7・31号貯蔵穴遺構





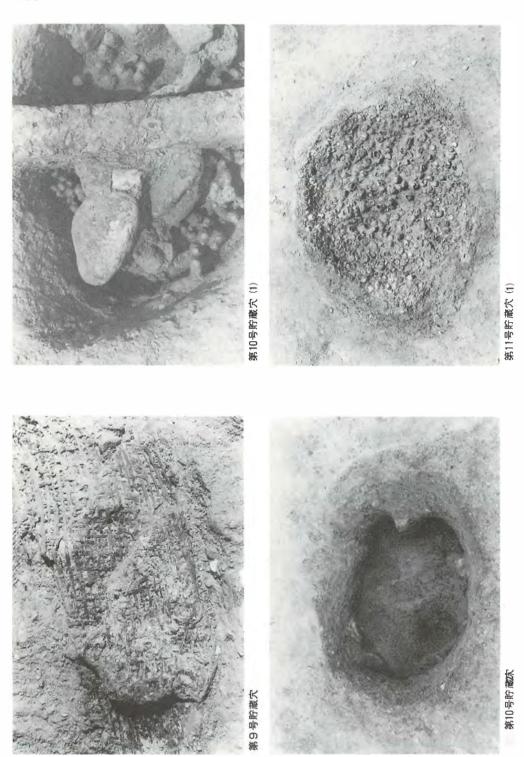
第9号貯蔵穴





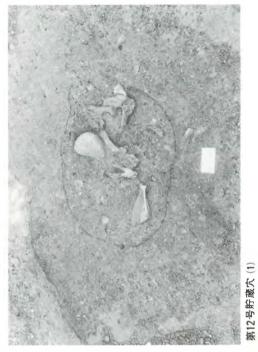
第9号貯蔵穴

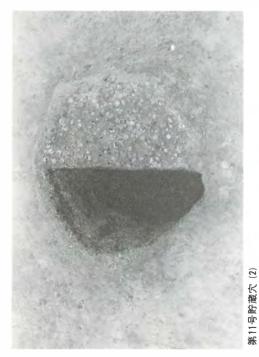
第8・9・37号貯蔵穴遺構



第9~11号貯蔵穴遺構









第11号貯蔵穴(4)

第11・12号貯蔵穴遺構





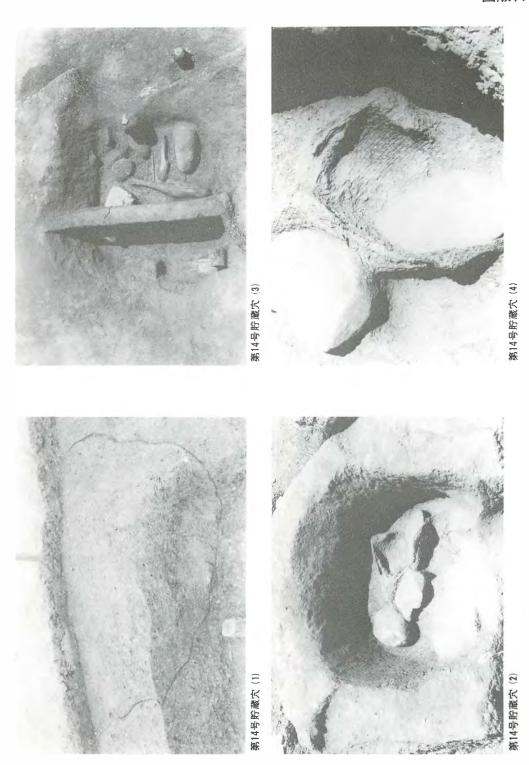






第13号貯蔵穴 (1)

第12・13号貯蔵穴遺構



第14号貯蔵穴遺構





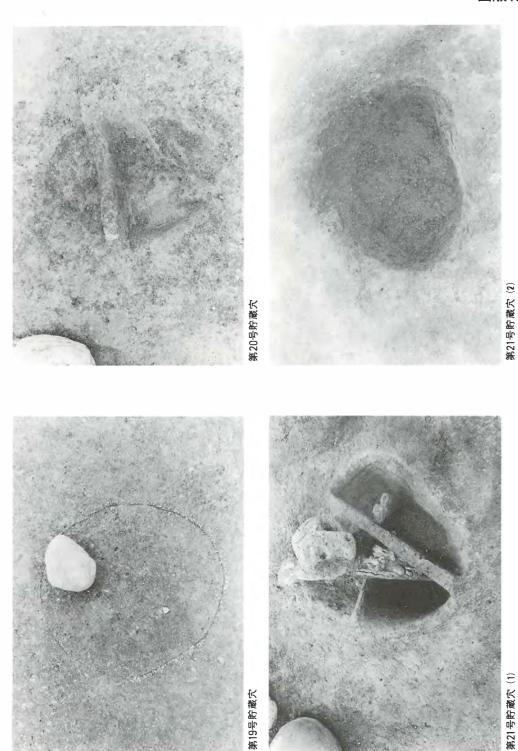




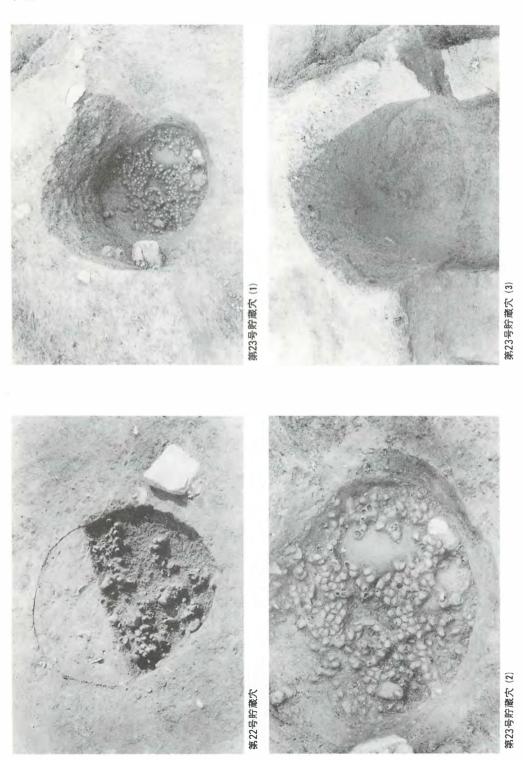


第17号貯蔵穴

第15~18号貯蔵穴遺構



第19~21号貯蔵穴遺構



第22・23号貯蔵穴遺構





45时限人





第26号貯蔵穴 (1)

第24・26号貯蔵穴遺構





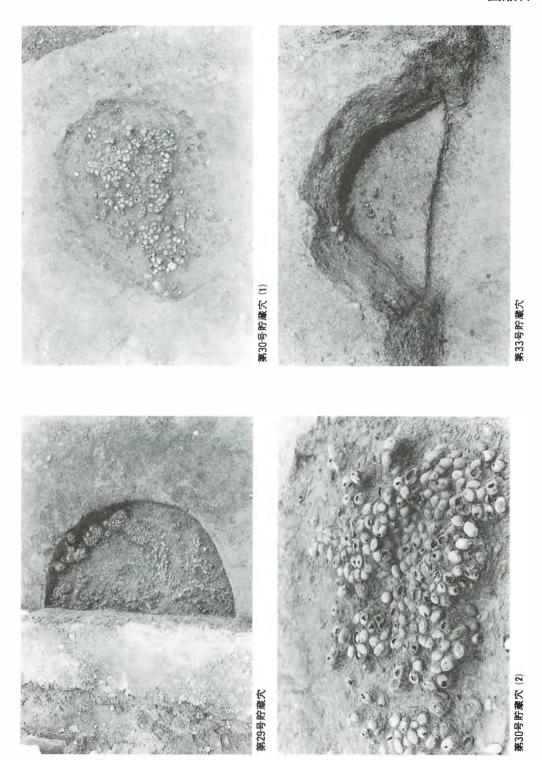




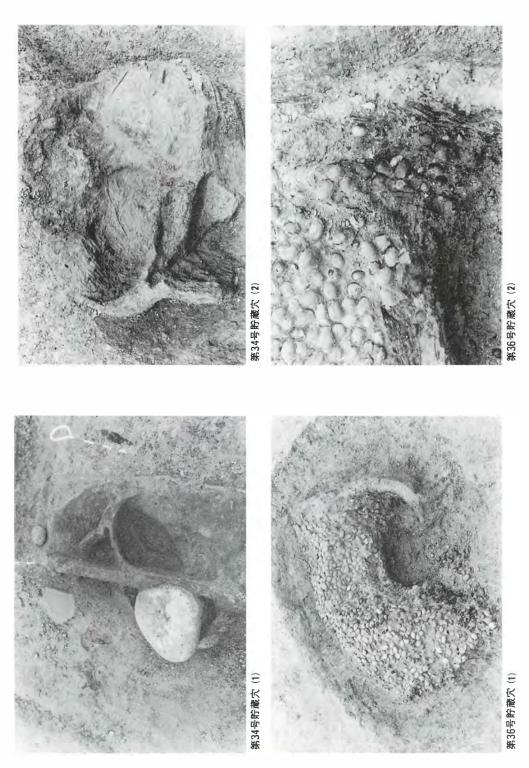


第28号貯蔵穴

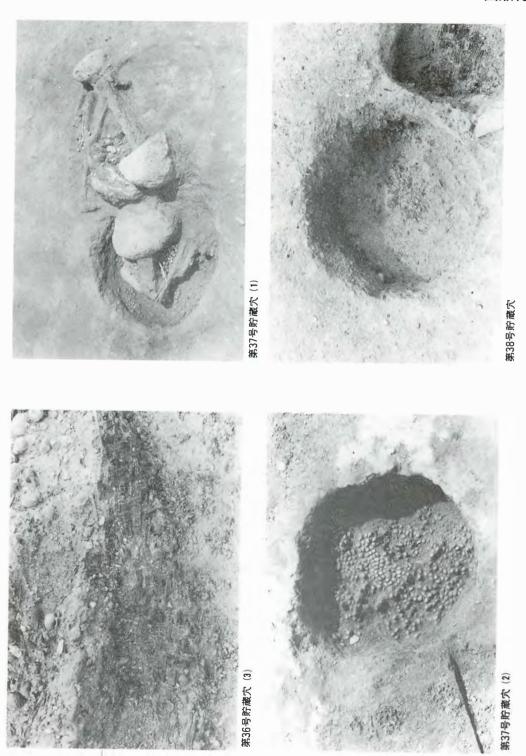
第26~29号貯蔵穴遺構



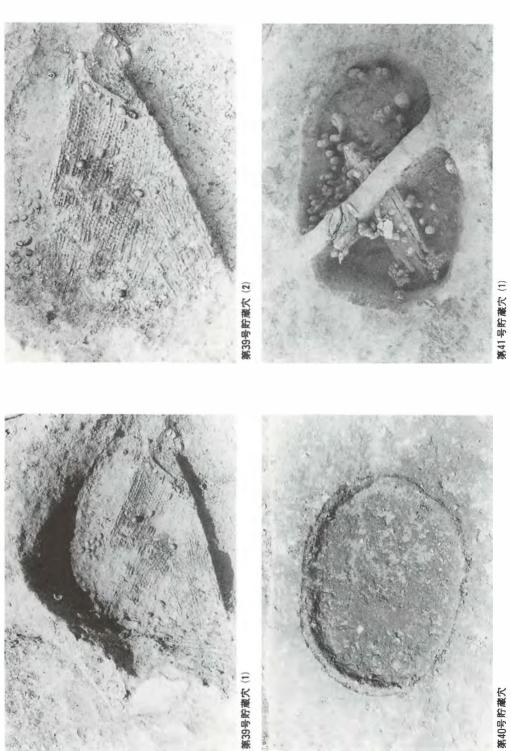
第29•30•33号貯蔵穴遺構



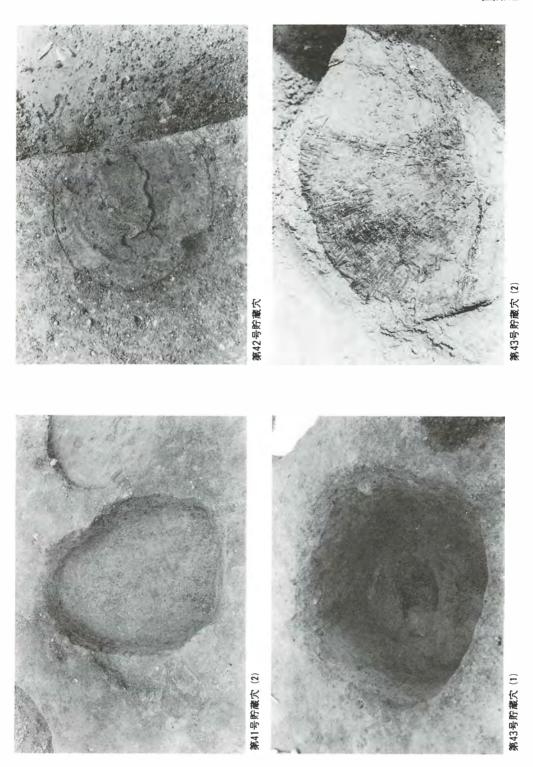
第34・36号貯蔵穴遺構



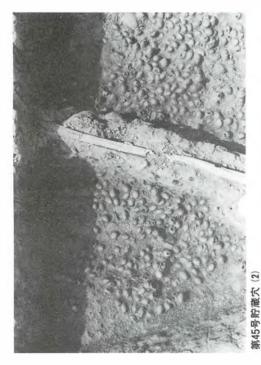
第36~38号貯蔵穴遺構



第39~41号貯蔵穴遺構



第41~43号貯蔵穴遺構











第43-46号貯蔵穴

第43 • 45 • 46 • 48号貯蔵穴遺構



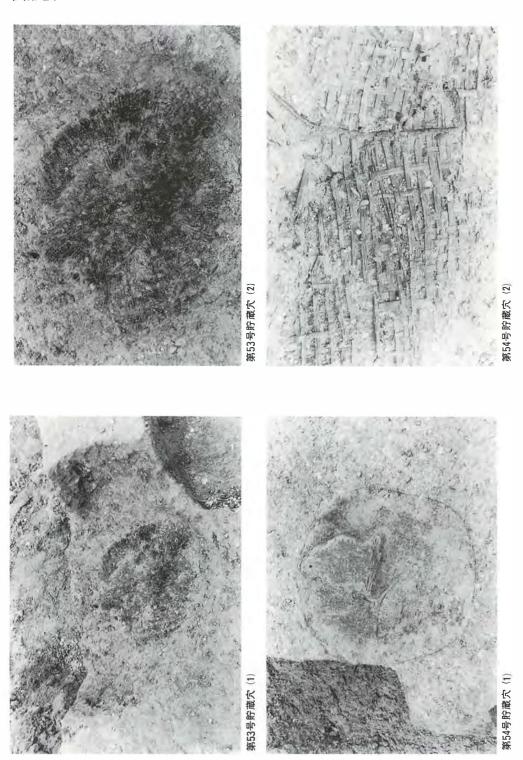








第50~53号貯蔵穴遺構



第53·54号貯蔵穴遺構





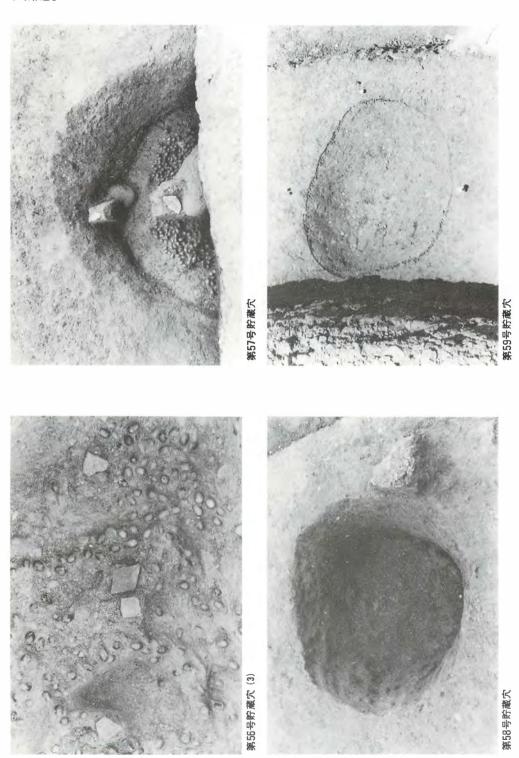




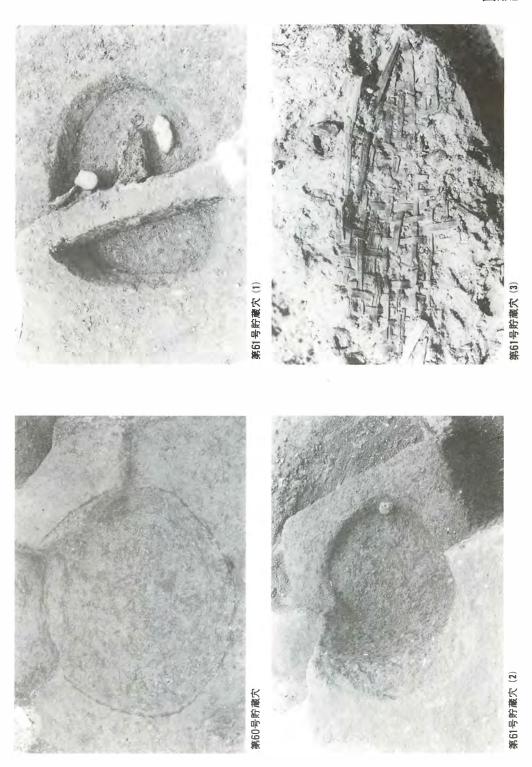


第56号貯蔵穴(1)

第55•56号貯蔵穴遺構



第56~59号貯蔵穴遺構



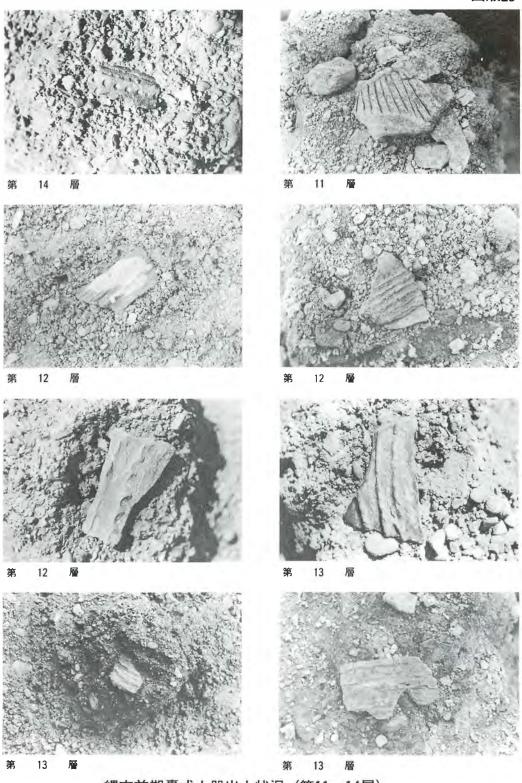
第60・61号貯蔵穴遺構



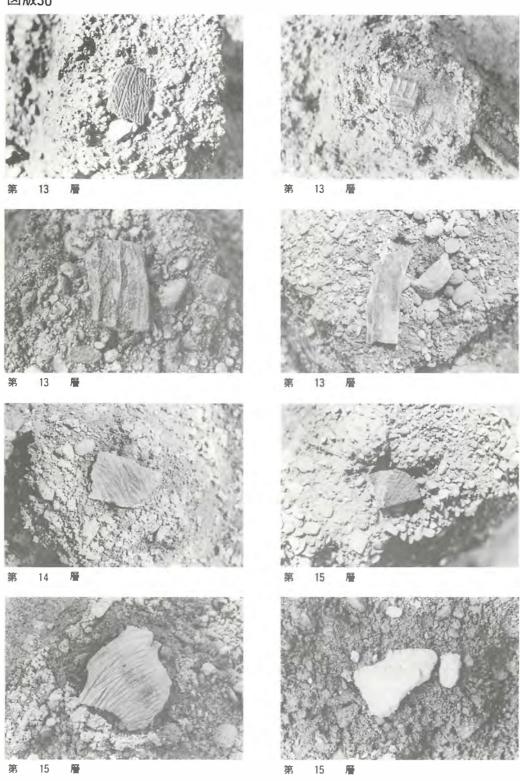


第62号貯蔵穴 (1)

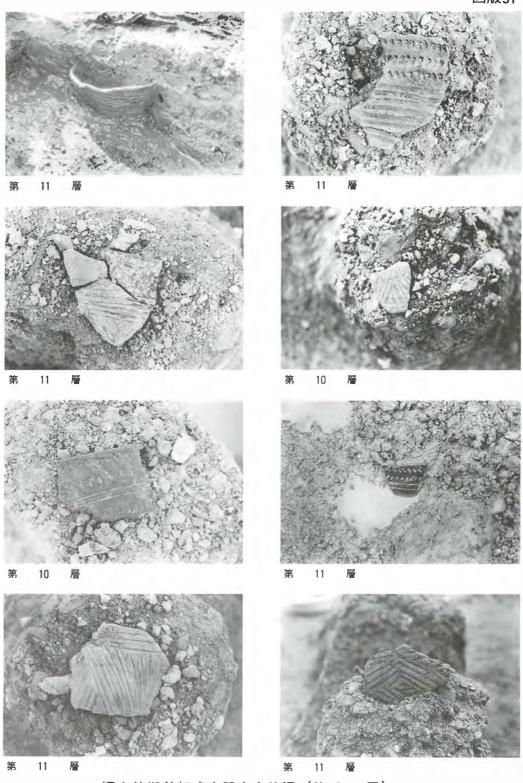
第62号貯蔵穴遺構



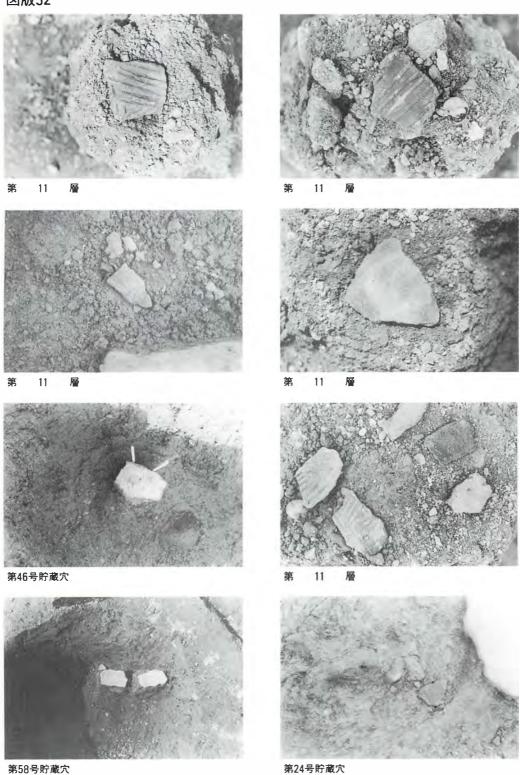
縄文前期轟式土器出土状況(第11~14層)



縄文前期轟式土器出土状況(第13~15層)



縄文前期曽畑式土器出土状況(第10・11層)



縄文前期曽畑式土器出土状況(第11層・貯蔵穴)





瓢簞・瓢簞出土状況









獣骨(シカ) 第14層



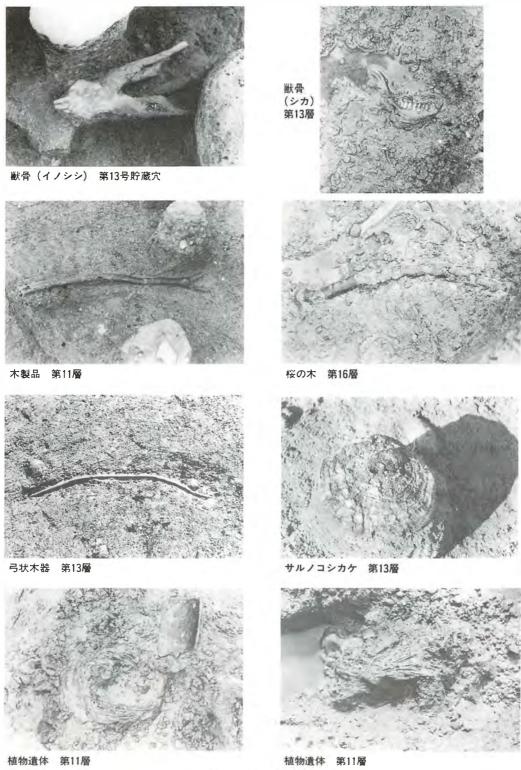






獣骨(シカ) 第15層

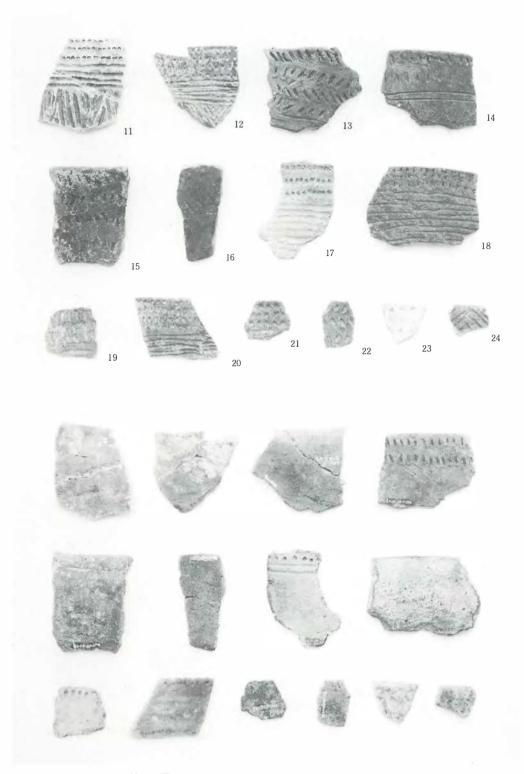
遺物出土状況(人骨・獣骨)



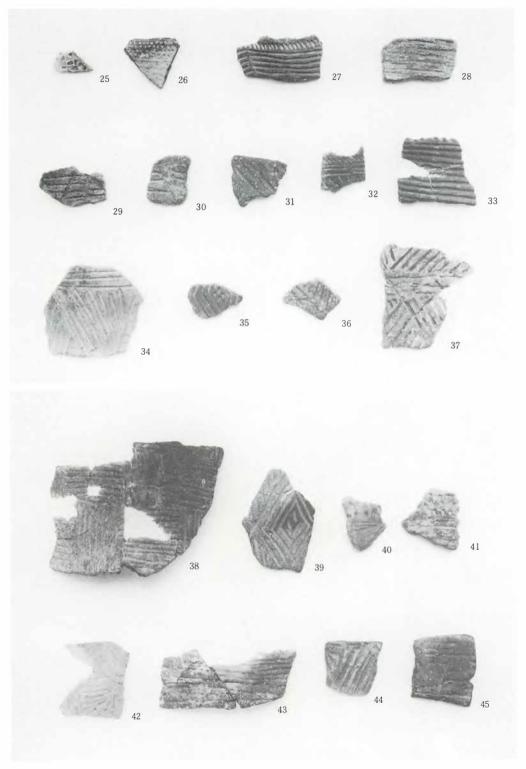
遺物出土状況 (獣骨・木製品・植物遺体)



第11層出土土器 No.1~7(上) No.8~10(下)



第**11層出土土器** No.11~24 表(上)·裏(下)

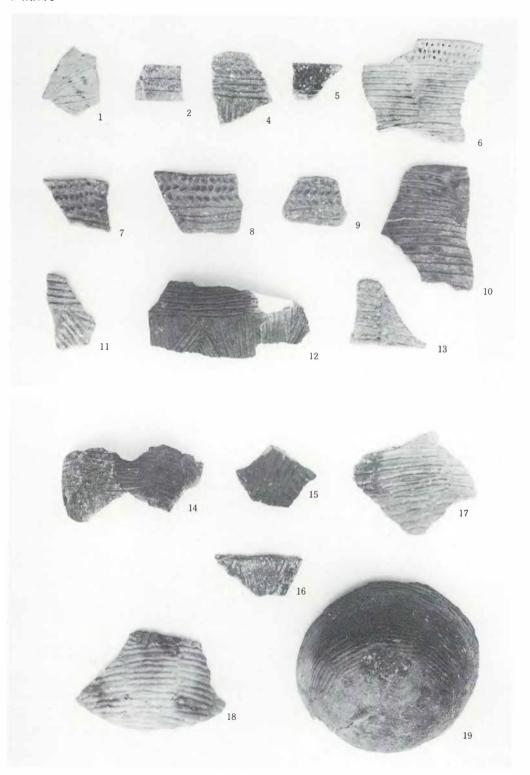


第11層出土土器 No.25~37(上) No.38~45(下)





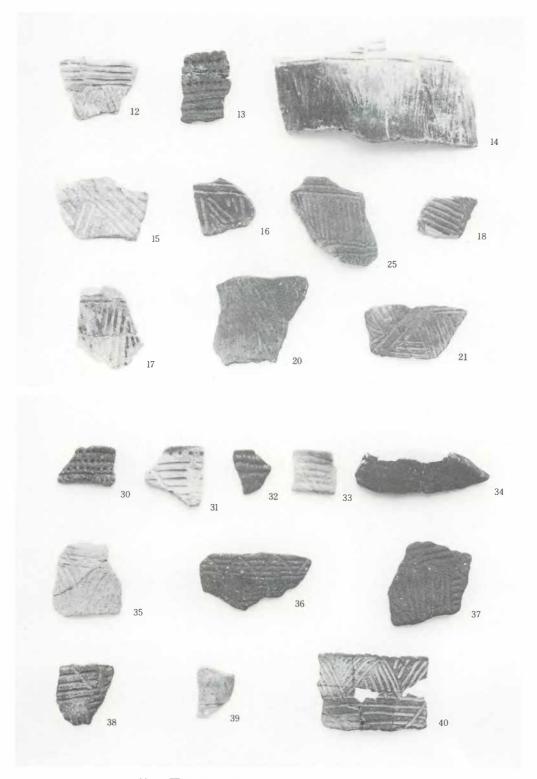
第11層出土土器 No.46~51(上) 貯蔵穴内出土土器 No.3(下)



貯蔵穴内出土土器 No.1·2·4~13(上) No.14~19(下)



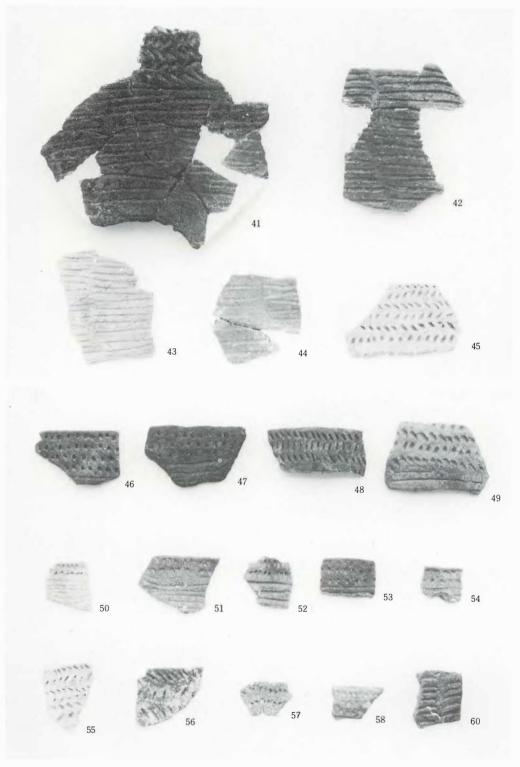
貯蔵穴内出土土器 №20~22(上) 第10層出土土器 №1~11(下)



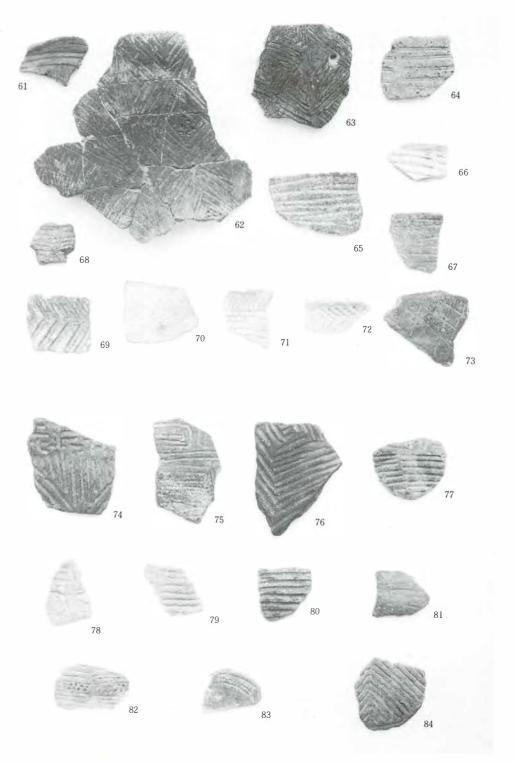
第10層出土土器 No.12~18·20·21·25(上) No.30~40(下)



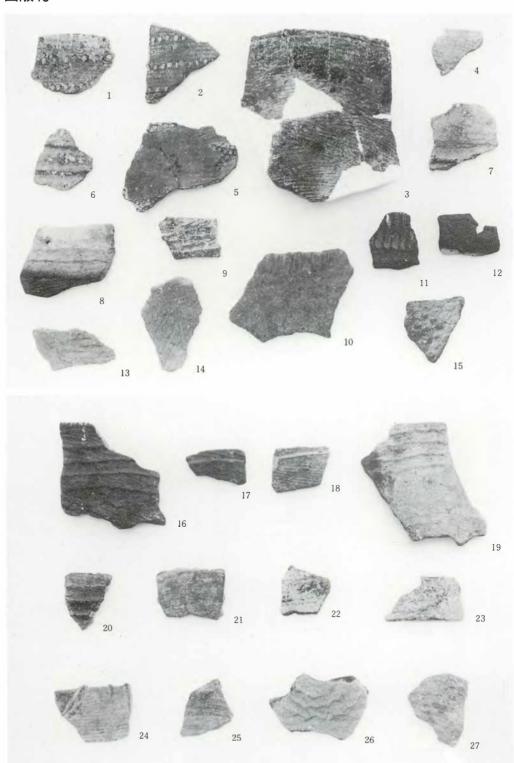
第10層出土土器 No.22~24·26~29 表(上)·裏(下)



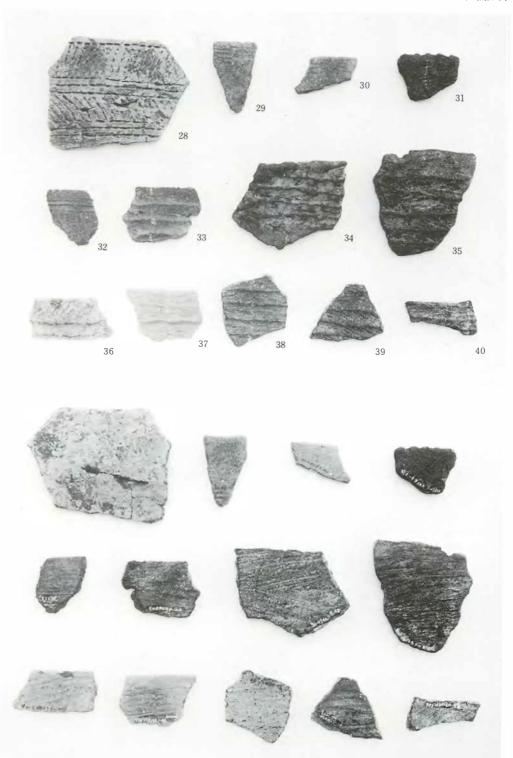
第10層出土土器 No.41~45(上) No.46~58·60(下)



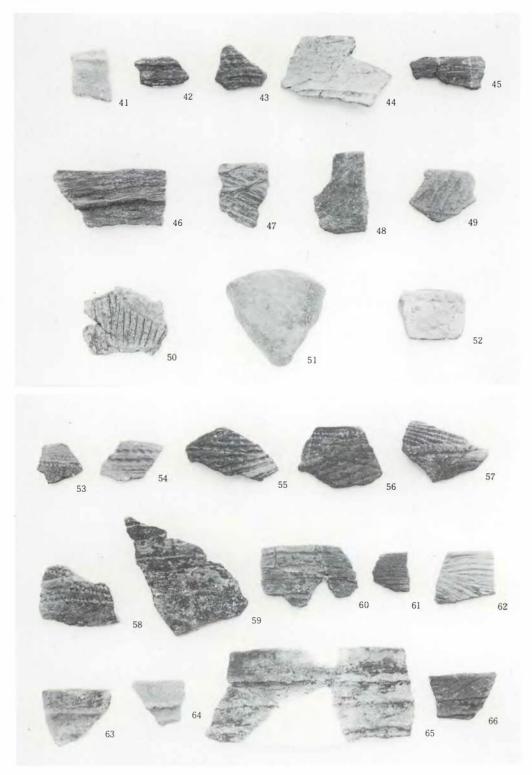
第10層出土土器 No.61~73(上) No.74~84(下)



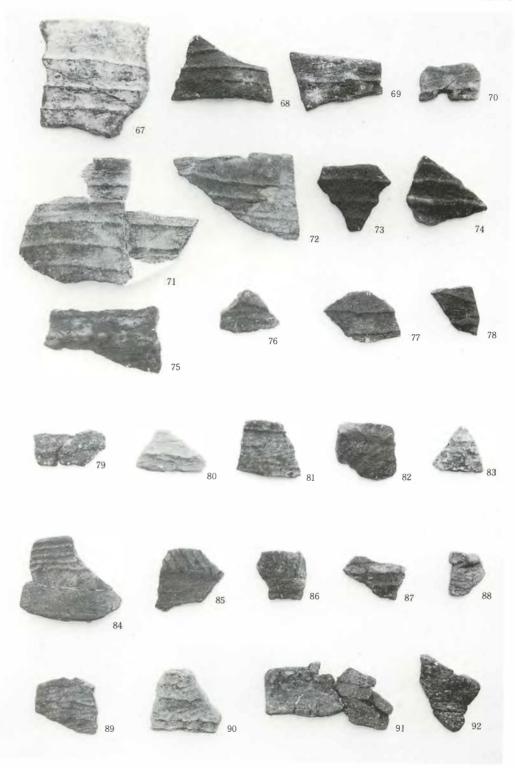
第10層出土土器 No.1~15(上) 第11層出土土器 No.16~27(下)



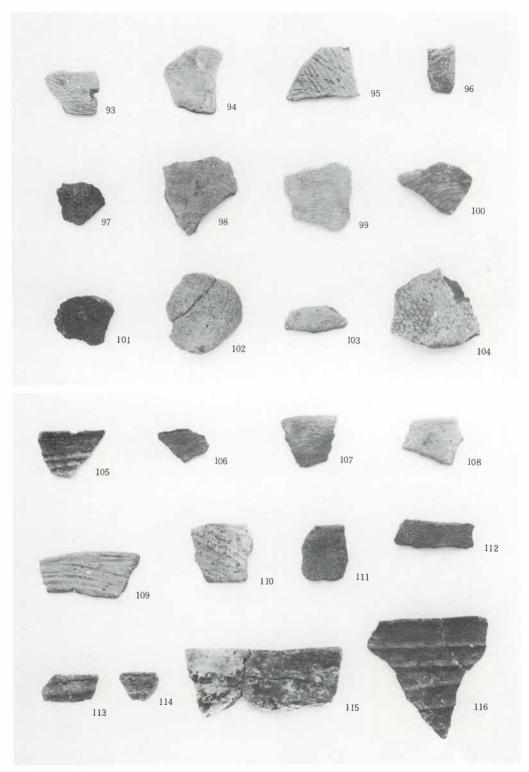
第12層出土土器 №28~40 表(上)・裏(下)



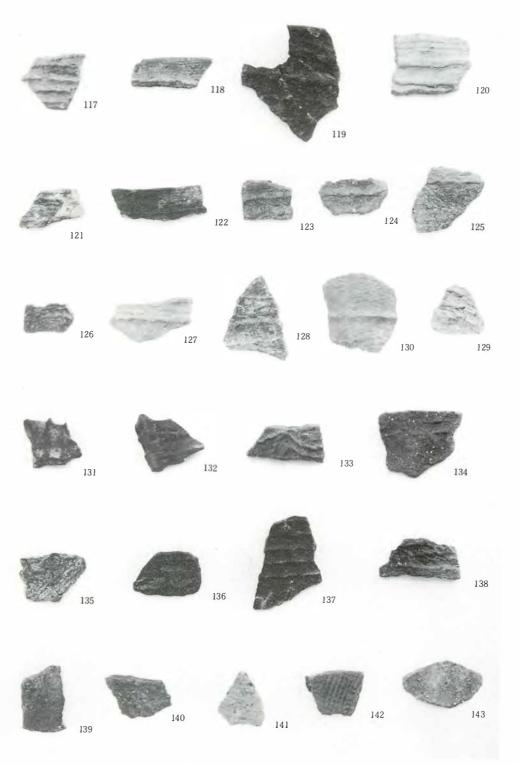
第12層出土土器 No.41~52(上) 第13層出土土器 No.53~66(下)



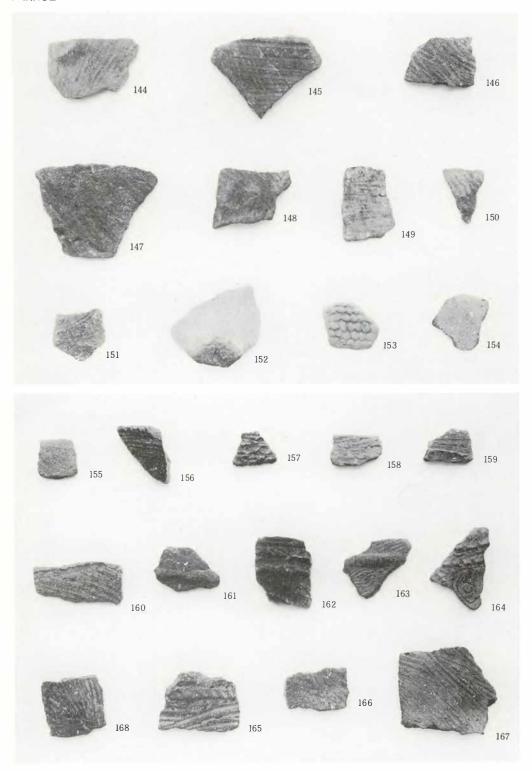
第13層出土土器 No.67~78(上) No.79~92(下)



第13層出土土器 №93~104(上) 第14層出土土器 №105~116(下)



第14層出土土器 No.117~130(上) No.131~143(下)



**第14層出土土器** №144~154(上) **第15層出土土器** №155~168(下)

熊本県文化財調査報告第100集

曽

熊本県宇土市花園町 曽畑貝塚・低湿地の調査

畑

発行年月日 昭和63年3月31日
 発 行 熊 本 県 教 育 委 員 会 〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号
 印 刷 株式会社 大 和 印 刷 所 〒862 熊本市 新 南 部 町190-8

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第100集を底本として作成しました。 閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用 してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用 方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名: 曽畑

発行:熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話: 096-383-1111

URL: http://www.pref.kumamoto.jp/

電子書籍制作日:2016年3月31日